研究紀要 No.37

平成18年6月8日・6月9日
教育研究会要録

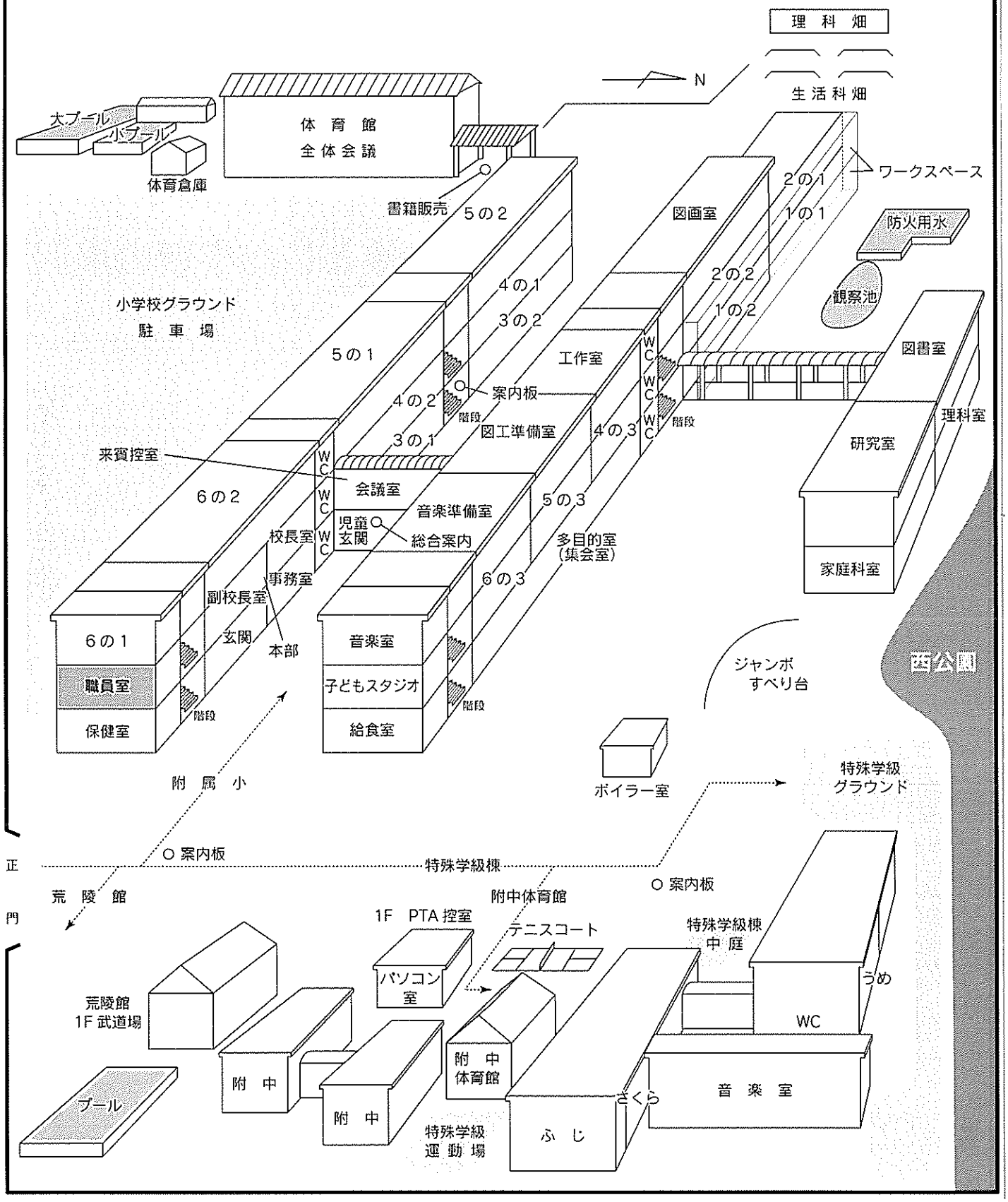
豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造

協働を中核とした学習の展開

福岡教育大学附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。



ご あ い さ つ

福岡教育大学　学　長　　大　後　忠　志

福岡教育大学附属福岡小学校の平成１８年度研究発表会の開催にあたりまして，ひとことごあいさつを申し上げます。

本学は，国立大学法人福岡教育大学となり３年目を迎えました。九州地区で唯一の教員養成単科大学として，教員にふさわしい人材の育成を中軸に据え，地域とともに歩む大学をめざしています。

その中で，各附属学校においては，先行研究実験校としての任務を確実に果たしていくことが大きな使命の一つであると認識しています。特に，附属学校が大学と連携して研究開発を行うことは，今後ますます重要となります。そのようにして得られた成果は，この研究発表会を通して，それぞれの公立学校に還元されることが，最も大切なことであり，我々の望んでいるところであります。

本年度の研究発表会は，主題を「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造－協働を中核とした学習の展開－」と設定して，その研究成果を世に問うものであります。公開授業はもちろん，教科等の発表，学習指導協議会，教育フォーラム，指導力アップ講座，全体講演と，２日間にわたる，多彩な内容となっています。昨年度までの研究を基盤に，発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず，我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば，これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが，ご多用の中，ご講演をお引き受け下さいました上智大学教授奈須正裕先生に深く感謝申し上げます。また，司会者・指導助言者としてご協力下さいました諸先生にも心より御礼申し上げます。

今後とも，附属学校を中心に，大学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えております。

ご参会下さった皆様を始め，本研究会のためにご協力下さいました関係者の皆様の，より一層のご支援をお願い申し上げまして，ごあいさつと致します。

はじめに

現在，学習指導要領の全面的な見直しが叫ばれています。教育界のみならず，社会的に関心の高まっていることを強く実感しているところです。大きく変わろうとしている教育改革の波のなかで，学校はそれぞれ特色あるカリキュラムマネジメントを構想，実施していく必要があるのです。

本校では，教育課程の編成，実施，評価について，これまでかなりの年数をかけ，研究実践を積み重ねてきました。現在もこれまでの研究成果をさらに発展させ，研究を進めているところです。

そのなかで，本校の教育目標から各教科等ではぐくむべき資質・能力を明確にし，その関連付けを意図的・計画的に行うカリキュラムづくりを進めてきました。本年度は，確かな学力を育成し，子ども自らが社会で活用することができるように，他者と共に学ぶことを方法論とする『協働』をキーワードに，各教科等の授業づくりからカリキュラムづくりへとつなげたいと考えています。

本校では，今日的な教育課題を解決するために人間が生きる側面に着眼し，研究主題を「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造」としました。そして，これまでの研究で子どもたちの学びの姿を「生活」，「文化」，「人間」と類型化し，子どもの学ぶ意義を強める「自己開発」と統合することで研究の成果を発表することができ，多くの賛同をいただくことができました。

そこで，本年度は，他者と共に行う学びのなかで確実に学力を身に付け，活用することができる子ども主体の学習の展開をめざし，研究を進めてまいりました。それが，副主題『協働を中核とした学習の展開』です。

これらの研究成果につきましては，この研究発表会が多くの方々のご指導・ご支援のもとに開催できていることを深く感謝申し上げますとともに，今後とも各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成１８年６月

校　長　　永　江　誠　司

目　次

ごあいさつ …… 1

はじめに …… 2
目　次 …… 3
日程と内容（第１日目）…… 4
日程と内容（第２日目）…… 6
本校研究の歩み …… 8

公開授業及び全体会の部（第１日目）

学習指導案（午前）…… 9
全　体　会 …… 30
学習指導案（午後）…… 31
学習指導協議会 …… 50
教育フォーラム …… 50

公開授業及び全体会の部（第２日目）

学習指導案（午前）…… 51
全　体　会 …… 70
学習指導案（午後）…… 71
指導力アップ講座 …… 90
全体講演 …… 90

研究紀要の部

研究紀要の部目次 …… 91
研究全体構想 …… 92
各教科等部要項 …… 114
障害児教育部要項 …… 172
帰国子女教育部要項 …… 186

おわりに …… 193
平成18年度研究同人 …… 194

第1日目　6月8日（木）の日程

Ⅰ　学習指導の部（午前）

▼　学　習　指　導（9：15～10：00）

学年　組	教科領域等	学び	単　元　・　題　材　・　主　題　名	授　業　者	会　場
1年1組	算　数　科	文化	みんなでやってみよう！いくつといくつゲーム	永　尾　　健	1年1組教室
2年1組	図画工作科	文化	ナイトサファリへようこそ	北　田　尚　雄	図画・工作室
3年2組	国　語　科	文化	上手に身をかくすってどうするの？～自然のかくし絵～	光　延　正次郎	3年2組教室
5年1組	学級活動	生活	つくろう！5の1フェスタ～係の活動で気球を動かし虹のゴールへ～	黒　澤　真　二	5年2組教室
5年2・3組	理　　科	文化	探ろう！動きをあやつる不思議！～カチコロチャレンジコンテスト！～	清　水　隆一郎	理　科　室
6年1・3組	家　庭　科	生活	梅雨の時期のオリジナルレシピをつくろう	脇　本　孝　枝	家庭科室
6年2組	人間総合	人間	いのち見つめて	高　野　誠　一	6年1組教室

▼　障害児学級と通常学級の交流学習指導（9：15～10：00）

1年2組 1・2年ふじ組	体　育　科	みんなでいこう！おたからぼうけん	久　保　勝　美 下　川　勝　彦	附属中体育館

▼　障害児教育学習指導（9：15～10：00）

5・6年梅組	算　数　科	くらべてつくろう！おたすけばし	園　田　洋　一	特殊学級練音楽室

Ⅱ　全体会の部（午前）

▼　あ　い　さ　つ（10：20～10：35）

福岡教育大学学長　　大　後　忠　志

校　長　　永　江　誠　司

▼　主　題　発　表（10：35～11：05）

・豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造

―協働を中核とした学習の展開―　　研究主任　　岩　城　一　磨

▼　教　科　等　発　表（11：05～11：25）

・言語を駆使して考えをつくる国語科学習

―異質な読みが響き合う対話活動の展開―　　国語科部　　光　延　正次郎

▼　障害児教育発表（11：25～11：45）

・状況に応じた動きを生み出す体育科学習

―場を段階的に変化させる攻守型ゲームの展開―　　障害児教育部　　下　川　勝　彦

▼　児　童　発　表（11：45～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー　　指　導　者　　有　川　陽　子

Ⅲ　学習指導の部（午後）

▼　学　習　指　導（13：00～13：45）

学年　組	教科領域等	学び	単　元　・　題　材　・　主　題　名	授　業　者	会　場
2年2組	生　活　科	生活	ひらこう！みんなを守る安全教室	塚　本　正　典	2年端教室ワークスペース
3年1・3組	理　　科	文化	ふしぎはっ見！じ石のはたらき	今　泉　伸一郎	理　科　室
4年1組	社　会　科	生活	ぼくらが守る！福岡市の水	髙　良　祐　治	4年1組教室
4年2・3組	音　楽　科	文化	「きらきら星変奏曲」をつくろう！	有　川　陽　子	音　楽　室
5年1組	算　数　科	文化	角度当てクイズをつくろう	田　中　健　悟	3年2組教室
5年2組	道　　徳	人間	危機的な生命？仕事としての責任？	木　下　美　紀	5年2組教室
6年1組	体　育　科	文化	つくろう！みんなのフットサル	岩　城　一　磨	附属中体育館
6年2組	国　語　科	文化	わたしはこう考える～食卓の向こう側～	平　川　洋　一	6年1組教室

▼　障害児教育学習指導（13：00～13：45）

3・4年さくら組	生活単元学習	いしでそだつの？！おいしいトマト	原　田　敏　男	特殊学級棟中庭

▼　授業づくりの基礎・基本を明確にした学習指導協議会（14：00～15：00）

会　場	教科領域等	司　会　者	指　導　助　言　者	
6年1組	国　語　科	古賀市立舞の里小学校 教諭　松　本　剛	志摩町立桜野小学校 校長　古　川　千　年	福岡教育大学 教授　前　田　眞　證
4年1組	社　会　科	宗像市立自由ヶ丘小学校 教諭　川　口　克　典	古賀市立花見小学校 校長　西　　邦　彰	福岡教育大学 教授　豊　嶌　啓　司
3年2組	算　数　科	前原市立怡土小学校 教諭　弘　松　英　樹	志免町立志免西小学校 校長　山　下　英　俊	福岡教育大学 教授　飯　田　慎　司
理科室	理　　科	福岡市立塩原小学校 教諭　園　田　一　浩	筑紫野市立山家小学校 校長　安　永　純　二	福岡教育大学 助教授　森　藤　義　孝
2年2組	生　活　科	黒木町立黒木小学校 教諭　北　島　孝　徳	瀬高町立下庄小学校 校長　堤　　直　樹	福岡教育大学 助教授　寺　岡　聖　豪
音楽室	音　楽　科	福岡市立舞鶴小学校 教諭　関　屋　成　久	須恵町立須恵第一小学校 校長　髙　橋　秀　喜	福岡教育大学 教授　木　村　次　宏
工作室	図画工作科	福岡市立壱岐小学校 教諭　藤　野　健　一	福岡市立有田小学校 校長　田　中　和　隆	福岡教育大学 助教授　草　尾　和　之
附属中学校 体育館	体　育　科	筑後市立西牟田小学校 教諭　田　中　庸　二	久山町立久原小学校 校長　佐々木　壮一朗	福岡教育大学 教授　相　部　保　美
家庭科室	家　庭　科	福岡市立八田小学校 教諭　篠　原　裕　子	福岡市立東住吉小学校 校長　小　嶋　悦　子	福岡教育大学 教授　沖　田　卓　雄
5年1組	特別活動	大川市立田口小学校 教諭　宮　崎　昌　人	久留米市立北野小学校 教頭　中　原　浩	福岡教育大学 教授　小　泉　令　三
5年2組	道　　徳	福岡市立千早小学校 教諭　大　近　正　博	久留米市立合川小学校 校長　萩　尾　耕　一	福岡教育大学 教授　堺　　正　之
特殊学級棟 梅　組	障害児教育	黒木町立黒木小学校 教諭　大　淵　広　顕	前原市立東風小学校 校長　谷　口　慎　二	福岡教育大学 教授　納　富　恵　子

Ⅳ　全体会の部（午後）

▼　教育フォーラム（15：20～16：30）

「これからの教育に求められる教師力」

○コメンテーター　教育報道出版社　代表取締役社長　梶　浦　　真　氏
九州国立博物館　学　芸　部　長　小　松　大　秀　氏

○コーディネーター　本　校　研　究　副　主　任　北　田　尚　雄

▼　あ　い　さ　つ

副校長　三　原　英　喜

第2日目　6月9日（金）の日程

Ⅰ　学習指導の部（午前）

▼　学　習　指　導（9：15～10：00）

学年　組	教科領域等	学び	単　元　・　題　材　・　主　題　名	授　業　者	会　場
1年2組	国　語　科	文化	はなのよさをみつけよう～どうぶつのはな～	光　延　正次郎	1年2組教室
2年1組	算　数　科	文化	チャレンジ！形ゲーム	永　尾　　健	2年1組教室
2年2組	道　　徳	人間	きまりはだれのもの？	木　下　美　紀	2年2組教室
3年1組	算　数　科	文化	あなあきクイズをつくろう	田　中　健　悟	3年2組教室
4年1組	理　　科	文化	ふしぎ発見！体積変化のなぞ！～ぴったり止めようくねくねトンネル～	清　水　隆一郎	理　科　室
5年1組	体　育　科	文化	チームでつくろう！ロープジャンプ	久　保　勝　美	附属中体育館
5年2組	文化総合	文化	つくろう！みんなの夢広場～祝！創立130周年記念プロジェクト～	髙　良　祐　治	子どもスタジオ

▼　帰国子女学級と通常学級の交流学習指導（9：15～10：00）

4年2組 3組合同	英　語　活　動	Have a nice trip!	北　田　尚　雄 セバウンかおり	附属中荒陵館

▼　障害児教育学習指導（9：15～10：00）

ふじ組 さくら組 梅　組	合同生活単元学習	つくろう！はなのハーモニーガーデン	園田　洋一，下川　勝彦 原田　敏男，諏訪原佳子	特殊学級棟中庭

Ⅱ　全体会の部（午前）

▼　あ　い　さ　つ（10：20～10：35）

初等教育研究部委員長
校　長　　永　江　誠　司

▼　主　題　発　表（10：35～11：05）

・豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造
　―協働を中核とした学習の展開―　　研究副主任　北　田　尚　雄

▼　教　科　等　発　表（11：05～11：45）

・自ら科学的に追究する理科学習
　―考えの客観性を高める相互検討活動による学習の展開―　　理　科　部　清　水　隆一郎

・家族とかかわりながら生活を見直す家庭科学習
　―食生活を科学的に追究する活動の展開―　　家庭科部　脇　本　孝　枝

▼　児　童　発　表（11：45～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー　　指　導　者　有　川　陽　子

Ⅲ　学習指導の部（午後）

▼　学習指導（13：00～13：45）

学年　組	教科領域等	学び	単元・題材・主題名	授業者	会場
1年1組	生活科	生活	おおきくそだてよう！こころをこめたはなのおくりもの	塚本正典	1年1組教室ワークスペース
3年2組	社会科	文化	発見！スーパーマーケットのひみつ	高瀬雄大	3年2組教室
4年2組	国語科	文化	発信しよう～すてきな附属福岡小学校～	平川洋一	4年1組教室
6年1組	国語科	文化	わたしがとらえた筆者の考え！！～あなたはどう考える？～	平島健二	6年1組教室
6年2組	理科	文化	追究しよう！ものの燃焼と空気の変化	今泉伸一郎	理科室

▼　帰国子女教育学習指導（13：00～13：45）

3～6年 3組合同	国際交流タイム （総合）	世界の主食調査隊	脇本孝枝 清水隆一郎 永尾健	子どもスタジオ

▼　障害児教育学習指導（13：00～13：45）

3・4年さくら組	国語科	つたえよう！おでかけごっこ	諏訪原佳子	特殊学級棟 音楽室・さくら組教室
5・6年梅組	体育科	つなごう！グリッドバスシュートゲーム	下川勝彦	附属中体育館

▼　保健養護部学習指導（13：00～13：45）

4年1組	体育科(保健)	生活	オヤ，オヤッ？おやつ ～健康によいおやつ発見～	久保勝美 甲斐七七子	4年2組教室

▼　保健養護部実践提案部会（14：00～15：00）

会場	提案者	司会者	指導助言者	
4年2組 教室	本校養護教諭 甲斐七七子	福岡市立西高宮小学校 養護教諭　畠山佳子	聖マリア学院大学 月常勤講師　筑紫咲子	福岡教育大学保健管理センター 講師・カウンセラー　岩橋知子

▼「明日から使える!指導力アップ講座」（14：00～15：00）

会場	講座内容	提案者
6年1組 教室	『数学的思考力をつけるための教材・教具づくり（算数科を中心に）』 楽しい算数クイズやゲームのつくりかたを紹介	田中健悟・永尾健 有川陽子
4年1組 教室	『作文指導のコツ（国語科を中心に）』 作文指導の悩みを解決する相談室を開設！	光延正次郎・平川洋一 塚本正典
3年2組 教室	『教師の指導力アップに不可欠な発問・板書のテクニック』 実践的「発問・板書」の基礎・基本を身に付けよう！	平島健二・北田尚雄 脇本孝枝
理科室	『子どもたちの好奇心を高めるための教材研究（理科を中心に）』 実験の導入のつくり方や子どもが喜ぶ生き物の飼い方を紹介します。	清水隆一郎・今泉伸一郎 高良祐治
5年2組 教室	『心のノートを使おう！』 心のノートの使い方や明日から使える資料を紹介します！	木下美紀・高野誠一 高瀬雄大
子ども スタジオ	『跳び箱や縄跳びの技など運動を得意にする秘訣は何か即，解決！』 跳び箱運動，縄跳びなどの技ができる！教具や指導法を紹介します。	久保勝美・岩城一磨 黒澤真二
特殊学級棟 梅組	『明日から使える教材づくり入門』 子どもの個別的な課題に対応した教材・教具づくりを紹介します。	諏訪原佳子・下川勝彦 園田洋一・原田敏男

Ⅳ　全体会の部（午後）

▼　全体講演（15：15～16：35）

「他者と共に学ぶということ」

全体講師　上智大学　総合人間科学部　教育学科　教授　**奈須正裕**　先生

▼　あいさつ

副校長　三原英喜

本校研究のあゆみ

年度	
23	○学習効果判定の理論と実際
24	○カリキュラムの構成と実際
25	（発表会なし）
26	○学習深化の指導
27	○学習深化の指導
28	○学習深化をめざす指導
29	○学習指導における諸問題の再検討
30	○学習指導における新課題の再検討
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明
32	○組織化をめざす学習指導法の究明
33	○組織化をめざす学習指導法の究明
34	○学習指導の系統化
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題
36	○考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察
38	○考える力をのばす学習指導法の考察
39	○考える力をのばす学習指導法の考察
40	○考える力をのばす学習指導法の考察
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」（明治図書から出版）
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」 （明治図書から出版）
43	○（発表会なし）
44	○現代化をめざす指導法の究明 ― 教材の現代的価値と児童の実態と反応に基づく指導内容の検討 ―
45	○現代化をめざす指導法の究明 ― 基本的内容にせまらせる学習の開発 ―
46	○現代化をめざす指導法の究明 ― ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ ―
47	○現代化をめざす指導法の究明 ― 学習の連帯化をはかる指導のしくみ ―
48	○現代化をめざす指導法の究明 ― 連帯性を育てる学習指導のしくみ ―
49	○現代化をめざす指導法の究明 ― 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ ― 「学習を連帯化する指導法」 （明治図書から出版）
50	○現代化をめざす指導法の究明 ― 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ ―
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 ― 操作を通した学習の構造化 ―
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 ― 操作を通した学習指導の展開 ― 「できるまで育てる」　（秀巧社から出版）
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 ― 交流でよりよい操作を身につける学習指導 ― 「自由活動の時間」　（秀巧社から出版）
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 ― 教材の価値にせまらせる操作学習の評価 ―
55	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 見直し活動を生かした操作学習の深化 ―
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 自己を見直し，考えを深める指導のしくみ ―
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 自ら見直し活動に取り組み，自己を深める指導のしくみ ― 「学ぶ喜びを生み出す授業」 （北大路書房から出版）
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 個が生きる課題づくり ―
59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討 ― 学習実態の多様性に即応する学習指導 ―
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 ― 子どもの個性が生きる指導 ―
61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 （明治図書から出版）
62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 ― 学習の個性化をめざす学習過程 ―
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 ― 「学習の個性化」をめざす授業の改造 ― 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 （明治図書から出版）
平成元年	○個が生きる授業の創造 ― 自己理解の学習過程 ―
2年	○個が生きる授業の創造 ― 考えを確かにする活動構成 ―
3	○個が生きる授業の創造 ― 考えを深める自己吟味活動を通して ― 「個が生きる授業づくり」 （北大路書房から出版）
4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 ― 思い・願いをもって問いつづける活動づくり ―
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 ― 思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開 ―
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 ― 自分のよさを実感する表現活動の展開 ―
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ― 新しい教育課程における教科領域の学習の具体化 ―
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ― 「新時代の授業を創る」（明治図書から出版）
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ―
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ― 活動や体験を基盤にした学習の総合化― 「学習創造」（算数・人間・障害児教育）出版
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ― 子供と創る教科・総合的学習の展開 ― 「学習創造」（理科・図画工作・音楽）出版
12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ― 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開 ― 「学習創造」（国語・体育）出版
13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ― 調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化 ― 「新世紀の学力づくり」（明治図書）出版
14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ― 教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開 ―
15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ― 「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開 ― 「評価で変えるカリキュラムづくり」（明治図書）出版
16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 ― 「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想 ―
17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 ―自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉展開―
18	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 ― 協働を中核とした学習の展開 ―

公開授業及び全体会の部

第１日目　午前の部
学習指導案

▼ 学 習 指 導（９：１５～１０：００）

学年　組	教科領域等	学び	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年１組	算数科	文化	みんなでやってみよう！いくつといくつゲーム	永尾　健	１年１組教室
２年１組	図画工作科	文化	ナイトサファリへようこそ	北田尚雄	図画・工作室
３年２組	国語科	文化	上手に身をかくすってどうするの？～自然のかくし絵～	光延正次郎	３年２組教室
５年１組	学級活動	生活	つくろう！５の１フェスタ～係の活動で気球を動かし虹のゴールへ～	黒澤真二	５年１組教室
5年2･3組	理科	文化	探ろう！動きをあやつる不思議！～カチコロチャレンジコンテスト！～	清水隆一郎	理科室
6年1･3組	家庭科	生活	梅雨の時期のオリジナルレシピをつくろう	脇本孝枝	家庭科室
６年２組	人間総合	人間	いのち見つめて	高野誠一	６年１組教室

▼ 障害児学級と通常学級の交流学習指導（９：１５～１０：００）

１年２組 1･2年ふじ組	体育科	みんなでいこう！おたからぼうけん	久保勝美 下川勝彦	附属中体育館

▼ 障害児教育学習指導（９：１５～１０：００）

5･6年梅組	算数科	くらべてつくろう！おたすけばし	園田洋一	特殊学級楽音楽室

いくつといくつゲームを通して数の合成・分解の見方を共有する算数科学習

第1学年1組　算数科学習指導案

指導者　永尾　健

単元　みんなでやってみよう!　いくつといくつゲーム

指導観

○　本単元は，10までの数の合成・分解を行いながら数の構成を理解するとともに数を多様に見ることができるようにすることねらいとしている。具体的には，①10までの数の合成と分解をすることができること，②加法的な意味をつかむことができること，③関数的な見方で順序よく考えることをねらっている。そのためにいくつといくつゲームを教材化する。いくつといくつゲームとは，２つのタイルを合成・分解しながら５から10までの数の構成について考えるゲームである。例えば，10の数を構成するゲームでは，１から９までのタイルが入ったかごからタイルを１つ抜き出し，そのタイルが表す数と組み合わせて10になるもう一方のタイルを交代で探し当てるものである。このゲームは，ゲームを繰り返し行う中で効率よく数の構成を考えることができるようになり，ゲームを通して多様な見方ができる点で意義深いと考える。

○　本学級の子どもたちは，これまでに，具体物を数えたり半具体物に置き換えたり，数を比べたりする活動のなかで，数と具体物を結びつけてとらえることができるようになってきている。しかし，10までの数について，１つの数を２つの数の組み合わせでとらえるまでに至っていない。そこで，本単元では，10までの数の範囲内で，１つの数を２つの数の組み合わせでとらえることができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，いくつといくつゲームを学習課題として設定し，タイルを組み合わせながら５から10までの数の構成を考えるゲームを行う。そこで，さまざまな数で合成・分解の場面をもとに数の関係的な見方を生み出していく文化の学びを展開する。そのために，まず，第１次では，数に見立てた２つのタイルを組み合わせる活動をもとに５の数の合成・分解をするゲーム１，２を行う。次に，第２次では，６から９までの数をもとにしたタイルを分解したり，合成したりしながら，数の構成の規則性に着目したいくつといくつゲーム１を行う。また，友達の考えのよさから自分の考えを補完し，考えを生かしながらゲーム２を行う。最後に，第３次では，10の数についてのいくつといくつゲーム１，２を行い，これまでに学習した数の多様な見方を発揮しながら，合成と分解を合理的に行うことができるようにするとともに，数の関数的な見方をして数概念を十分に理解し，数感覚を確かにさせたい。

目　標

1　いくつといくつゲームを通して２つのタイルを組み合わせたり，分けたりしながら合成・分解をし，10までの数の構成について多様な考えをゲームの場面でいかしながら楽しんでゲームを行うことができる。

2　10までの数の構成をするゲームを通して，タイルが表す数ともう一方のタイルを組み合わせながら10までの数の構成に着目しながら，多様な見方ができるようになるとともに，10までの数の構成を理解することができる。

計　画（約６時間）

段	第１次（１時間）	第２次（４時間）	第３次（１時間）
活動と内容	1　５までのかずの合成分解について考えるためにタイルを操作し，いくつといくつゲームを行う。① ○　５までの数の合成・分解ができること	2　９までの合成・分解について考えるためにタイルを操作していくつといくつゲームを行う。 (1)　６，７の合成･分解のゲームをする。本時1/2 ② ○　６，７の合成・分解をすることができること (2)　８，９の合成･分解をするゲームをする。② ○　合理的に考えながら合成・分解ができること	3　10の数のいくつといくつゲームをする。① ○　多様な数の見方を生かして10までの数の合成・分解をし数の構成がわかること
10までの数の加法的な意味を理解して数の構成を身につける文化の学び			
支援	※　５までの数を操作しながら合成・分解ができるタイルの提示	※　１から６，７，８，９，までのタイルがつながったものを提示したり，２つの数のタイルを組み合わせて変形させたタイルの提示	※　順番の考えや関数の考えをいかすことができるゲームの提示
評価規準	●　合成・分解の意味を理解し，繰り返しタイルを操作しながら５までの合成分解を行っている。	●　数の構成について探すときに，順序よく考え，１つの数ともう１つの数の依存関係に着目して，９までの数の合成・分解をしている。 ●　数の構成の規則性に着目している。	●　交換の考えや関数の考えなど多様な数の見方をいかして10の合成分解をしている。

本時の協働のポイント

２人１組で交互にかごの中からタイルを１つとそのタイルの数に応じて７を構成するもう一方のタイルを袋から取り出し，組み合わせの違ったタイルを多く積み上げるゲーム１を行えば，相手よりも違った組み合わせをたくさん見つけるために７の構成を多様な見方を生かして考えることができるのである。

本時の目標

1　７までの数の合成分解を行いながら，順序よく考えながらいくつといくつゲームをしようとしている。

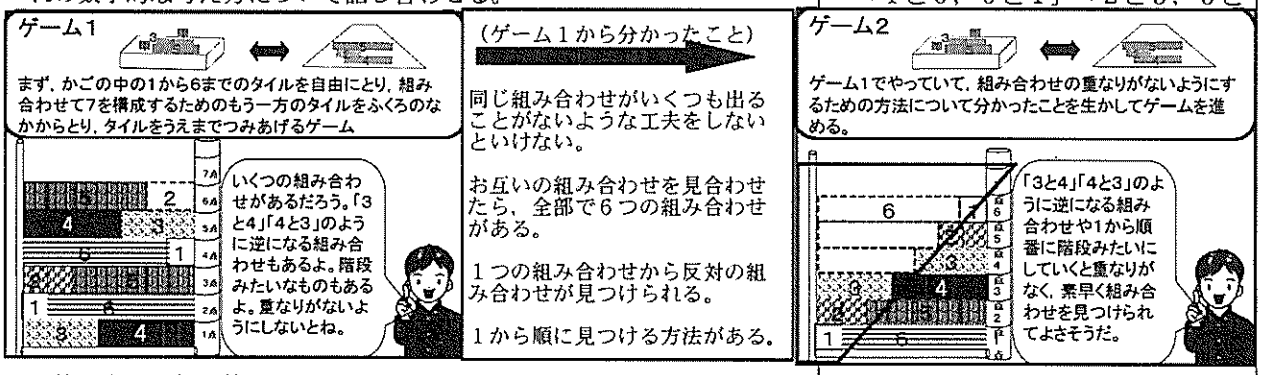
2　いくつといくつゲームを行い，友達とのゲームの勝敗を通して効果的な７の数の組み合わせ方を見つけるために，多様なことができる。

準　　備

タイル，タイルをはめるボード，学習カード，学習の流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　タイルを並べたり，重ねたりしながら７の数の合成分解をしながら進めるゲームであることをつかみ，学習の見通しをもつ。 ○　７までの数の合成，分解について考えるゲームであることを見通すことができること （めあて）いくつといくつゲームをして，７のわくにあうタイルのくみあわせかたについてかんがえよう。 ※　いくつといくつゲームから，数に見立てたタイルを重ねたり，並べたりして効率のよい７までの数の構成についての見通しをもたせる。	○　枠の中に２枚のタイルを並べながら，かべをつくるゲームのようだ。 ○　２つのタイルは決まった分だけしかはまらないようだから組み合わせを考えないといけないね。 ○　小さいタイルを７つ分，わくに並べないといけないけど，２つのタイルを組み合わせると１と６のタイルだと７の枠に収まるよ。
2　かごの中になるランダムに揃ったタイルと袋の中から選んだタイルを並べたり組み合わせたりして数の合成分解を行い，７の枠に組み合わせたタイルを敷き詰め，数の構成の見つける方法について考えながらいくつといくつゲーム１，２を行う。 (1)　７の数の数の合成分解を考えるために１から６までのタイルを選択し，それを補う数のタイルを袋の中から取り出すゲームをする。 ○　ゲームをもとにより効率的な数の合成の仕方について分かること ※　タイルの並べ方，組み合わせ方をもとに数の合成分解を行いながら多様な数の見方・考え方ができることを考えさせる。 (2)　かごの中にたくさん入ったタイルを数の構成について考えながらクラス全体でいくつといくつゲームを行う。 ○　クラス全体でゲームを行い，タイルを並べる順序を考えたり，数の構成の規則性に着目したりして，多様な見方をすることで７の数の構成を効率的に見つける見つけ方がわかること ※　ゲームの勝因となる数の構成の規則性や変化に着目するなど，それぞれの数学的な考え方について話し合わせる。	○　バラバラとってもわかりにくい。 ○　他には，３と４のタイルを並べれば７になって，枠に収まるよ。 ○　他には，４と３があるね。そうすると，３と４の組み合わせの逆だ。 ○　ぼくは，１から順番に揃えていっているよ。分かりやすいよ。 ○　順番に並べると１つ増えるともう一方の数は１つずつ減っていくよ。 ○　ゲーム２は，自分の考えを使っていいみたいだね。 ○　ぼくは，１から順番にかべを組み立てて階段みたいにしていくよ。 ○　数の逆さま同士を組み合わせれば，いくつも同じ数をつくれるね。「１と６，６と１」「２と５，５と２」「３と４，４と３」 ○　順番に考えていっても，逆さまで考えていっても分かりやすいね。
3　数の合成分解を簡潔に行うことができる方法についてまとめる。 ○　関数的に見たり，交換的に見たりして７の構成がわかること ※　７の構成に着目させて数の構成について話し合わせる。	



材料や友達と対話しながら，夜の森やそこに住む生き物を共創していく図画工作科学習

第2学年1組　図画工作科学習指導案

指導者　北　田　尚　雄

題　材　ナイトサファリへようこそ

指　導　観

○　本題材は，夜の森や草原などの空間に不思議な生き物を飾りナイトサファリをつくる目的をもって，紙粘土を中心とした材料で形づくったり，飾りを付加したりする形や色，配置などの構成力を培うことをねらいとする。具体的には①紙粘土の可塑性や蓄光材による暗闇での発光のおもしろさや美しさから，つくる方法やつくりたいものを発想し，自分がすきな形や色を選んだり，材料や方法を選択したりすること，②自分が表したいことに合わせて，手を十分に働かせて粘土を形づくったり，木の棒や板材，ひも類を用いながら形を付加したり，あるいは付加材料を使いながら，形や色を工夫しておもしろい形や美しい色に表すこと，③自分たちの生き物の形や色のおもしろさや美しさ，夜になると光るおもしろさに気付くとともに，友達といっしょにナイトサファリをつくっていく意欲をもつことである。

○　本学級の子どもたちは，これまで「カラフルローラーからうまれたせかい」の題材において，材料の質感や，用具の特性を生かして形をつくっていくおもしろさや意外性，自分の好きな色で彩色していく楽しさを味わっている。ここでは，描画材として，パスや共用絵の具を使うことができた。自分の好きな色で，好きな形を描いたり，描画材をつかって作品をつくっていくことに意欲的である。しかし，自分の作品には興味はあるものの，友達のよさにはまだ関心がうすい。

○　本題材の指導にあたっては，自分が表したいことに合わせて，使いたい材料や用具を選ぶとともに，友達の作品のよさにも関心をもつために，みんなでナイトサファリをつくっていく目的をもって活動を展開させていきたい。そこでつかむ段階では，紙粘土の質感を感じ取りながら，思い思いの形をつくらせるようにする。そのために，木の棒などの用具を使って，思い思いに形づくる試しの活動を設定する。次に生き物や場をつくる段階では，サファリランドの場をもっと楽しくしていく。そのために，湖や草原などの各ブースの展示場所の設定や，蓄光材の光る材料の提供から自分が表したいことをさらに思いつきながら表現させていくようにする。最後に作品を鑑賞する段階では，ナイトサファリ探検でお互いの表現のよさや作品のおもしろさについて話し合わせ，活動の達成感をもたせる。

目　　標

1　ナイトサファリをつくるという目的をもち，自分のつくりたい生き物を，好きな形や色などを考えながら，材料や用具を意欲的に使い表現することができる。

2　自分が表したいことに合わせて，紙コップや紙粘土を板材などの用具を効果的に使って手を十分に働かせながら形づくるとともに，暗闇で光るおもしろさを生かして生き物の形や配置を工夫することができる。

計　　画（約８時間）

段階	生き物をつくる段階（3時間）	サファリランドをつくる段階（3時間）	たんけんにいく段階(2時間)
活動と内容	1　ナイトサファリにいる生き物をつくる。 (1) 夜の森や丘の様子から，そこにいる生き物について話し合う。① ○　夜の森の感じから生き物を発想すること (2) 自分が思いついた生き物を形づくる。② ○　紙粘土の特徴を生かして生き物の形をつくること	2　ナイトサファリランドをつくるために，さらに生き物や各ブースをつくる。 (1) 自分たちがつくった生き物を，サファリランドに展示する。① ○　自分のつくったものに合わせて展示場所や方法を考えること (2) サファリランドをもっと楽しくするために，さらに生き物や場をつくっていく。 ○　光る生き物などから，さらにつくってみたいことを発想し，これまでの活動をいかして表現すること　本時１／２②	3　２の１ナイトサファリを完成させ探検に出かける。 (1) これまでつくった作品をグループでサファリランドに展示する。① ○　自分の作品にあわせて展示すること (2) 探検に出かけ，お互いの表現について話し合う。① ○　自他の表現のよさに関心をもって鑑賞すること
材料や場，友達と対話しながら，ともに２の１ナイトサファリをつくっていく文化の学び			
支援	※　夜の草村や湖のビデオ視聴 ※　紙粘土で様々な形をつくる板材や棒材の提供	※　ナイトサファリランドの各ブースに，友達と話し合いながら展示していく場の提供 ※　作品を光らせる蓄光材の提供	※　場の雰囲気を出す，音楽や付加材料の提供 ※　鑑賞のための探検活動
評価規準	●　夜の自然界から不思議な生き物を想像している。 ●　板材などを効果的に使って紙粘土で生き物の形をつくる。	●　自分の作品に合わせて，サファリランドのブースを選んで作品展示している。 ●　光る生き物から，さらにつくりたい物や改良したいことを考えている。	●　友達と話し合ってサファリランドをつくっている。 ●　友達の作品のよいところを見つけて発表している。

本時の協働のポイント

ナイトサファリの湖や草原などの各ブースに展示したお互いの作品や場について話し合い，各ブースの場を改良したり，さらに新たな生き物をつくったりしてグループでサファリの場を共創していく。ここでは，同じ展示場所を提供し，ともにその場所をつくっていくことで，お互いの作品について，話し合う必然性をもたせるとともに，それぞれの表現や考えのよいところを参考にさせていくことがポイントになる。

本時の目標

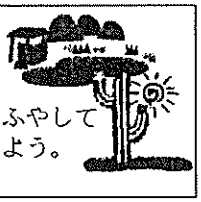
1　ナイトサファリをつくっていく共通の目的のもと，各ブースに展示した暗闇で光る自分や友達の作品から，それぞれの表現のよいところを話し合い，さらにつくっていきたいものを発想しながら楽しくつくることができる。

2　光る生き物や展示した場から，改良したいことや新たにつくりたいものを発想し，板材や棒材，色画用紙などを効果的に使いながら，紙コップや紙粘土，付加材料で自分の生き物を形づくったり場を飾ったりすることができる。

準　　備

ナイトサファリの場の設定(湖，草原，丘，穴ぐら，森)，紙粘土，棒材や板材，模様をつけていく材料，蓄光材

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　これまでに展示したナイトサファリの各ブースに出かけ，それぞれの作品のおもしろいところや表現のよいところを話し合う。 ○　ナイトサファリの雰囲気を感じ取りながら，お互いの作品や表現のよさに関心をもって鑑賞すること。 （めあて）　2の1ナイトサファリランドが，もっと楽しくなるように生き物をかいりょうしたり，ばをかざったりしよう。 ※　前時までの作品に，蓄光材を塗って，暗闇で輝くようにし，その作品の変化から，新たな表現内容や方法を発想させていくようにする。	○　これまでに，紙粘土で湖のほとりに住む，不思議なミニミニ恐竜ができたぞ。 ○　穴蔵のなかには，不思議な生き物のカラフルたまごもあって，サファリランドの様子が表せたぞ。 ○　暗闇にすると，自分たちがつくった生き物が光っていて，明るいときとはまた違って，とっても不思議な生き物になったぞ。
2　新たに思いついた作品の題名や表現方法から，ナイトサファリランドがもっと楽しくなるように作品をつくっていく。 (1) 暗闇で光る生き物から，作品やサファリランド自体の問題点や，新たな表現方法について話し合う。 ○　作品を展示した感じや，暗闇に変化した感じから，新たな表現内容や方法を発想し，これからの表現の見通しをもつこと ※　まず，各ブースごと表現の場が同じグループで，どのようにしたらもっと楽しいブースになるか話し合わせ，そのあと全体で交流させる。 (2) 新たに思いついた表現方法にあわせて，材料や方法を選択し，もっと楽しいナイトサファリになるように作品や場をつくりかえていく。 ○　棒材や板材，色和紙や画用紙，蓄光材などの表現材料を効果的に使いながら表現すること ※　紙粘土を効果的に形づくる補助材料としての板材や棒材の提供や，場を飾っていく和紙や色画用紙，毛糸などの提供	○　ぼくたちのブースでは，みんなの作品を集めてみると，少し生き物が少なくてさびしいような気がするので，さらに不思議な生き物をつくって増やしていこう。 ○　不思議な生き物が，暗闇でもっと光るように，生き物の背びれやしっぽを大きくして，そこに光る絵の具をつけていこう。 ○　草原のブースでは，草むらに隠れている生き物にしていくために，周りに色画用紙や，わらをつかって草むらの場所を飾っていこう。
 ・生き物を改良してもっとすごい生き物にしよう。 ・友達と生き物をつないでいこう。 ○　各グループでナイトサファリランドの各ブースを，もっと楽しいところ，おもしろいところにしていきたいな。 ・丘や草原の感じになるように ・もっと生き物をふやして楽しいランドにしよう。 	
3　これまでにできた作品や場の飾りを設置して，再度暗闇の中を探検しお互いの表現のよいところについて話し合う。 ○　これまでの自他の表現や，作品のよさに関心をもってみるとともにこれからの表現の課題をもつこと ※　実際にナイトサファリの場で，生き物や場の雰囲気について観点をもってお互いの作品や場の飾りを鑑賞させる。	○　○○くんの作品は，生き物の形がおもしろいので暗闇で光ったときにとってもおもしろいぞ。 ○　今度は，自分たちのブースを他の材料で飾っていこう。

違う読みをしている友達との対話活動で自分の読みをつくる国語科学習

第3学年2組　国語科学習指導案

指導者　光延正次郎

単元　上手に身をかくすってどうするの？～自然のかくし絵～

指導観

○　本単元は，各意味段落の要点をとらえることを直接の目的にするのではなく，自分の内から生まれた課題意識を大切にしながら読んでいく過程で，各段落の要点をとらえることをねらう単元として設定している。具体的には，①文章を大きく３つの意味段落に分けること，②段落を比べて各段落に書かれている要点をとらえることが主な学習内容である。そのために，①題名に興味を引かれ，いったい何が隠されているのだろうという思いから，すぐに本文に入り込む，②文章全体は，結論・具体的実例・まとめという形式で述べられており，文章に即した写真も多く取り上げられているので，内容をとらえやすい「自然のかくし絵」を教材化する。

○　本学級の子どもたちは読書を好み，科学的な読み物にも興味を示している。また，読み方に関しては，順序よく書かれている事柄を読むことはできるようになりつつある。しかし，文章をまとまりごとに分けたり，まとまりの要点をとらえて読むまでには至っていない。そこで，意味段落について知り，文章を意味段落に分けることや，各段落を比べて書かれている要点をとらえることを本単元のねらいの重点とする。このことは，説明的な文章にも読書の範囲を広げ，幅広く読書しようとする態度を育てる上からも意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，文章を意味段落に分け，各段落を比べて要点をとらえる読み方を身に付けて，昆虫たちの身の隠し方に対する自分の読みをつくることをねらいとしている。そのために，つかむ段階では，冒頭の「このほかにも，ほご色によって上手に身をかくしているこん虫はたくさんいます」の「上手」という叙述に着目させ，「ほご色によって上手に身をかくすとはどうすることか」という課題をつくらせる。ふかめる段階では，保護色によって上手に身を隠すとはどうすることなのか，考えの違う友達とグループを組んで対話活動をしながら読み取らせていく。そのとき，ペーブサートを操作させたり，昆虫の写真を提示したりする情報の付加を教師の支援として行う。まとめる段階では，保護色によって上手に身を隠す昆虫に対する自分の考えを書きまとめさせる。

目　標

1　「ほご色によって上手に身をかくすとはどうすることか」知りたいというという課題をもって，意欲的に「自然のかくし絵」を読み，自分の考えを進んで話し合うことができる。

2　保護色によって上手に身を隠している昆虫について書かれた教材文である「自然のかくし絵」を，結論・具体的事例・まとめと大きく３つの意味段落に整理し，各段落に書かれている要点を読むことができる。

計　画（約10時間）

段階	つかむ（２時間）	つくる（６時間）	まとめる（２時間）
活動と内容	1　「このほかにも，ほご色によって上手に身をかくしているこん虫はたくさんいる」の「上手」という叙述に着目し気付いたことを話し合う。 ○　「ほご色によって上手に身を隠すとはどうすることか」という課題意識をもつこと	2　上手に身を隠すとはどうすることか読む。 (1)　自分の体の色が保護色になるような場所を選んで住んでいるトノサマバッタ　② ○　トノサマバッタの身の隠し方を読むこと (2)　まわりの色が変化するにつれて体の色を変えるコマダラチョウの幼虫　本時２／２② ○　コマダラチョウの幼虫の身の隠し方を読むこと (3)　保護色が働くようじっとしている昆虫　② ○　保護色がどんなときに働くかを読むこと	3　保護色によって身を隠している昆虫に対する自分の感想を書く。 ○　保護色によって上手に身を隠す昆虫に対する自分の考えを書きまとめること
段落を比べて要点をとらえる読み方を身に付け，昆虫の身の隠し方に対する自分の読みをつくる文化の学び			
支援	※　「自然のかくし絵」を結論・具体的事例・まとめと３つの意味段落に整理させる。	※　読みの違う友達同士をグルーピングする。 ※　ペーブサートを操作させたり，昆虫の写真を提示したりする情報の付加を行う。	※　流れ図や学習プリントによる学習過程の振り返り
評価規準	●　「ほご色によって上手に身をかくすとはどうすることなのだろう」という疑問を書いたり話したりしている。	●　違う読みをしている友達と組んだグループで，拡大教材文に根拠となる叙述にシールを貼り，シールを貼った叙述に基づき課題に対する自分の読みを説明している。	●　保護色によって身を隠す昆虫への驚きを文章として書いている。

本時の協働のポイント

「保護色によって上手に身を隠すとはどうすることか」という課題に対して，「トノサマバッタの方が敵の目をだませる」という子どもと「ゴマダラチョウの幼虫の方が敵の目をだませる」という違う読みをしている子どもとが組んだグループで読みを共有していく対話活動をすることにより，トノサマバッタもゴマダラチョウの幼虫も敵の目をだますために違う方法で身を隠しているという読みに変容させていく。

本時の目標

1　「ほご色によって上手に身をかくすとはどうすることか」知りたいという課題をもって，コマダラチョウの幼虫の例について書かれた段落での自分の考えを進んで話し合うことができる。

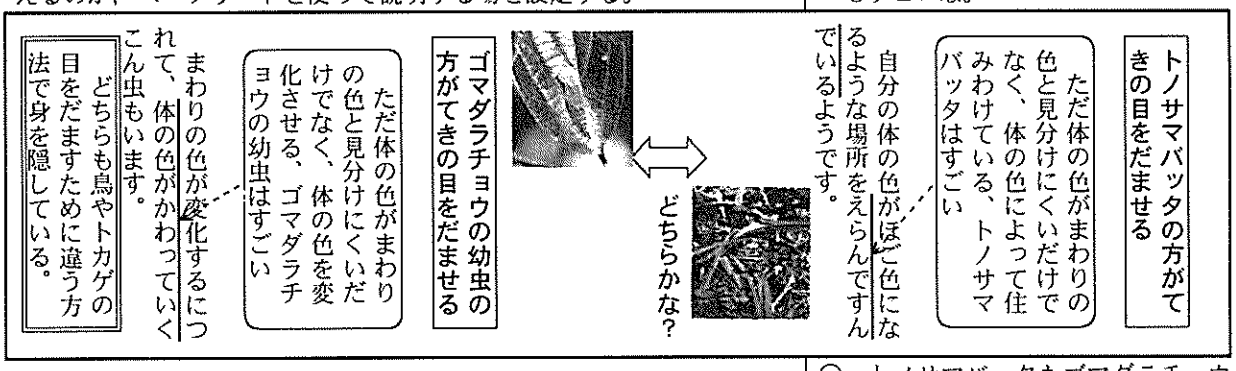
2　違う読みをしている友達と対話活動をしながら，まわりの色が変化するにつれて体の色を変えるという方法で身を隠すコマダラチョウの幼虫の例の要点を読み取ることができる。

準　　備

拡大教材文，学習プリント，学習の流れ図，文カード，トノサマバッタとゴマダラチョウの幼虫の写真

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　自分と友達の課題に対する考えを比較し，違いについて話し合う。 ○　今日は課題に対する考えの違う人とグループを組んでいるので，話し合って確かめたいという思いをもつこと （めあて）　トノサマバッタとゴマダラチョウのよう虫のどちらがてきの目をだますことができるか話し合ってたしかめよう。 ※　「トノサマバッタがてきの目をだましている」と思うか，「ゴマダラチョウの幼虫がてきの目をだましている」と思うか，黒板にネームプレートを貼らせておき，考えが違うことを確認する。	○　トノサマバッタの方が敵の目をだますことができるという友達もいるし，ゴマダラチョウのよう虫の方が敵の目をだますことができるという友達もいるな。どちらだろう。 ○　トノサマバッタとゴマダラチョウのよう虫のどちらが敵の目をだますことができるといえるのか，考えの違う人と話し合って確かめよう。
2　それぞれの昆虫の身の隠し方の違いを読み取る。 (1) 自分の読みをもとに，どちらの昆虫が敵の目をだますことができるか，違う読みをしている友達と組んだグループで対話する。 ○　自分の読みが相手に分かるよう筋道立てて話すこと ※　違う読みをしている異質メンバーでグループを構成する。そして，まず，どの叙述から思ったのか拡大教材文にシールを貼らせる。次に，異質グループで司会を立て叙述をもとにフリートーキングで対話させる。 (2) ペープサートを操作した後，再度，違う読みをしている友達と組んだグループで対話する。 ○　ゴマダラチョウの幼虫の例の段落の要点をとらえること ※　なぜ，トノサマバッタは自分の体の色が保護色になるような場所を選んで住み，ゴマダラチョウはまわりの色が変化するにつれて体の色を変えるのか，ペープサートを使って説明する場を設定する。	○　まず，どの叙述からそう思ったのか，グループに１枚置かれている拡大教材文にシールを貼るぞ。 ○　次に，グループで一人司会を立てフリートーキングで対話しよう。 ○　なるほど。ただ体の色がまわりの色と見分けにくいだけでなく，体の色によって住みわけている，トノサマバッタはすごいな。 ○　でも，ただ体の色がまわりの色と見分けにくいだけでなく，体の色を変化させる，ゴマダラチョウの幼虫もすごいな。



3　今日の学習を終えて読みがどう変わったのか書きまとめる。 ○　違う読みをしている友達との対話活動で発見した新たな読みを振り返ること ※　板書を参考にしてよいことを助言する。	○　トノサマバッタもゴマダラチョウの幼虫も，敵の目をだますために違う方法で身を隠しているんだ。 ○　トノサマバッタもゴマダラチョウの幼虫も両方すごいな。

全体討議と分割討議で5の1係フェスタの運営の仕方を決定する学級活動

第5学年1組　学級活動指導案

指導者　黒　澤　真　二

題　材　つくろう!5の1フェスタ～係の活動で気球を動かし虹のゴールへ～

指　導　観

○　本学級の子どもたちは，理想の学級像を出し合い，学級目標「レインボーバルーン～チャレンジ，友達信頼，目標達成～」を決めている。子どもたちは，５の１フェスタ（５年１組で集い，よさを発信していく活動）を成功させることで学級目標に近付きたいと考えている。そこで，本題材をとおして友達や下級生とのかかわりを広げたり，深めたりすることで学級の一員としての所属感を味わえることができるようにしたい。そして，係の活動を行う過程でも，学級の友達に積極的にはたらきかけることができるようにしたい。

○　本題材は，年間をとおして取り組む５の１フェスタ（係の活動，集会の活動，下級生へのお手本となる活動）の中で，特に第１学期は，係の活動を見直すことで，学級全体のかかわりを広げるものである。具体的には，①かかわりを広げる係の活動を行い，よりよい学級にしたいという願いを共有化すること，②係の活動における内容を見直すことで，友達とのかかわりを意識できること，③係の活動を実践することで，役割分担を行い，学級の一員としての所属感を味わうことである。係の活動は身近で，子どもたちも常時活動として実践しやすい。これらのことからも本題材は，他者とのかかわりを強め，よりよい学級生活を求めていく上からも意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，子ども同士が積極的にかかわり合いながら５の１係フェスタの運営について集団決定することができるようにしたい。そのためには，つくる段階では，現状の係の活動における問題点や理想の係像を話し合わせることで，今より活性化する係の活動にしていきたいという子どもの願いを取り上げる。決める段階では，今後の係の取り組みを係ごとに考えることができるようにする。そして，５の１係フェスタの運営について全体討議で大枠を話し合い，分割討議で細部をつめる話合いを行うことができるようにする。そして，出された意見を吟味することで，自分や友達の意見のよさを生かした運営の仕方を決めることができるようにする。行う段階では，一人一人が役割を分担し，５の１係フェスタを実践していく。そして，先生や友達から頑張りを賞賛してもらうことで，学級の一員としてかかわりを広げられたという所属感を味わうことができるようにしたい。

目　　標

1　今の係の活動をよりよくしたいという願いを大切にしながら，「友達とのかかわりを広げられる」という観点で見直し，主体的に実践していくよさを実感することができる。

2　学級目標を具現化する「５の１フェスタ」（係の活動活性化）を成功させるために，話合いの進め方や係の活動時における友達とのかかわり方を理解することができる。

計　　画（約３時間＋課外）

段階	つくる（１時間）	決める（課外＋１時間）	行う（１時間）
活動と内容	1　活動のめあてや見通しについて話し合う。 ○　自分たちで今の係の活動の問題点をとらえ，理想とする係像をイメージしながら，今後の話合いや実践を計画すること	2　各係の新たな取り組みや５の１係フェスタの運営について話し合う。 (1) 係ごとに今後の活動を説明する。課外 ○　朝の活動時などを使い，６つの係の新しい取り組みを１つずつ発表すること (2) 意見交流を行い，よりよい係の活動を決める。　本時①	3　５の１フェスタ（係の活動）を行う。 ○　かかわりを広げながらそれぞれの係の活動を行うとともに，満足感や有用感を味わい，今後の活動に生かすこと
集団の一員としての所属感をもち，友達とかかわりながらよりよい学級生活を築いていく生活の学び			
支援	※　めざす係像の集約 ※　係の活動内容見直すための他の学年，学級への情報収集	※　話合いの活動をスムーズに進めるための計画委員会への助言 ※　全体討議と分割討議の設定	※　活動のよさを実感できる写真，ＶＴＲ，感想文の提示
評価規準	●　５の１フェスタに対する期待をノートに書いている。 ●　係ごとに今までの活動を振り返り，情報収集している。	●　同じ係の友達と新たな取り組みについて協力して考えている。 ●　今後の係の取り組みを，めあてに即して友達の考えと比べ，意欲的に述べている。	●　一人一人が役割分担し，かかわりを広げながら係の活動を実践し，成果や課題をノートに書いている。

本時の協働のポイント

５の１係フェスタの内容を決めるために，フェスタの運営について，学級全体で討議する場，グループごとに分割して討議する場を仕組み，友達の考えと自分の考えをめあての観点に沿って比較吟味する共創の話合いの場を設定することで，お互いの考えのよさを取り入れ，よりよい５の１係フェスタの内容を決めることができる。

本時の目標

1　友達とのかかわりを広げたいという思いのもと，全体討議→分割討議→全体確認という話合いの進め方に沿って，自分の考えを意欲的に述べることができる。

2　意見交流をもとに，友達とのかかわりを広げるための５の１係フェスタの運営について決めることができる。

準　　備

原案，学級活動ノート，情報収集ノート

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　今日の話合いの活動を行うための確認をする。 ○　先生の話の中で，前時に行った各係の原案説明に対する情報収集をもとに，自分の考えを述べられるように本時の意欲付けを行うこと 議題　５の１係フェスタの内容を決めよう 提案理由 ５の１係フェスタを成功させることで，係の活動も活性化され，学級生活もより豊かになるとともに，友達とのかかわりも増え，学級目標に近付くと思ったから。 めあての観点 ・友達とのかかわりを広げることができるか 話合いの進め方 ①　全体での話合い　②　グループでの話合い ③　全体での確認　④　話合いの反省 ※　事前に教師と計画委員会で打ち合わせを行い，話合いの進め方や集団決定について助言をしておく。	○　学級独自の活動を一年間とおして行うことで，みんなで決めた学級目標を達成することにつながるのだったな。そのために，みんなで考えた「係の活動，集会の活動，下級生のお手本となる活動」を各学期でしっかり取り組むぞ。 ○　第１学期は，みんながもっと親しくならないといけないな。そのためには，できるだけ多くの人とかかわることが大切になってくるな。そういった観点で話合いのめあてを決めたのだったな。 ○　最初に全体での話合い，次にグループでの話合い，そして，再度全体での確認という話合いの進め方だったな。
2　５の１係フェスタの運営について全体討議を行い，話し合うことを分担して分割討議を行う。 (1)　５の１係フェスタの進め方について全体討議を行う。 ○　フェスタの中身をどのようにとらえるかを考えること 〈予想される進め方例〉 順々に発表するか⇔ワークショップ形式で行うか ※　係から出された，新たな取り組みに応じて，どのような５の１係フェスタなのかのイメージをつかむことができるようにする。 (2)　話し合うことを分担して，各係で分割討議を行う。 ○　友達の意見のよさや自分の考えを比べながら聞いたり，自分の考えを述べたりして，５の１係フェスタの内容をめあての観点から吟味すること 〈予想される分割討議例〉 ・　発表の場所や表現物の使い方，表彰の仕方等をどうするか	○　５の１係フェスタを一つずつ順番に発表してもいいし，全体をワークショップのような形で行うのも楽しいかもしれないね。 ○　友達とのかかわりを広げるために，係ごとに新しい取り組みをワークショップ形式で提案しよう。 ○　この他にも５の１係フェスタに関して内容を決めないといけないね。そこで，発表の場所や呼ぶ人数，表彰の仕方などを係ごとに自分たちが分割して話合いをしていこう。 ○　発表の場所は，子どもスタジオがいい。
3　分割討議で話し合ったことを全体で発表し，本時の話合いの活動を振り返る。 ○　吟味した内容を全体で発表し，本時の話合いを決めた喜びを味わうこと ※　教師の話では，話合いの場面で具体的な発言内容で賞賛するとともに実践に対する期待について話す。	○　活動内容が決まってよかったな。係を行うための準備や本番も，友達のことをよく理解して係の活動を成功させるぞ。 ○　早く５の１係フェスタをやってみたいな。

高得点をとるための考えを互いに検討し，科学的に要因を操作する理科学習

第5学年2・3組　理科学習指導案

指導者　清水隆一郎

単元　探ろう!動きをあやつる不思議!～カチコロチャレンジコンテスト～

指導観

○　本単元は，おもりの重さや動く速さなどを変え，ものの動く様子を調べ，ものの動きの規則性についての考えをもつようにすることがねらいである。ここでは，ふりこの周期と衝突を調べる活動を選択し，学習していく。それぞれの活動での主な内容は，①糸につるしたおもりが１往復する時間は，おもりの重さなどによっては変わらないが，糸の長さによって変わること②おもりが他の物を動かすはたらきは，おもりの重さや動く速さによって変わることである。ここでは，ふりこや衝突の性質を利用したカチコロチャレンジコンテストを取り上げ，コンテストで高得点をとるために，ふりこのきまりや衝突のきまりを追究していくゲームをチームの中で選択し，操作のコツを追究し，動きのきまりをとらえることができるようにしていきたい。

○　本学級の子どもたちは，日常生活の中で，おもりの動きにかかわる経験をしている。休み時間のボール運動や相撲大会では，重さや速さと衝撃を関係付けた経験をしている。また，ブランコ遊びの中では，ふれはばや勢いと関係付けた経験をしている。このようにものの動きは，子どもが身近に感じているものであるといえる。しかし，ふりこや衝突といった動きには，規則性があり，それらがどのような場合でもあてはまるという意識はほとんどない。また，動きの規則性については経験による知識が強いことで，振り子の周期と速さ，衝突における重さと速さを混同し，ものの動きについて間違った考えをもっている子どもも多くいる。

○　本単元の指導にあたっては，ふりこの動きと衝突の動きを利用したカチカチボールやコロコロボールを使って，リズムを作ったり，おもりをはじいて飛ばしたりする予告ゲームの活動の中から条件の変化にともなう動きの変化に疑問や問題をもち，ふりこや衝突のきまりや規則性を追究し，それらを使っていくことができるようにしたい。そのために，単元の「追究する」段階と「いかす」段階を中心に，考えを見直し，見通しをもつ相互検討活動を設定する。「追究する」段階では，条件統制と数値化をうながす共通グループでの追究活動，分析の結果をもとに考えを共有する課題別グループでの交流活動を設定する。「いかす」段階では，見通しをもって新たな対象を追究する活動，結果を共有する全体での交流を設定していく。

目　標

1　自分の挑戦するコンテストの課題を跳ね返る強さやリズムに着目して選び，選んだ動きの変化にかかわる要因を抽出し，条件を制御しながら実験を行い，自分の作りたい動きを自分の力で創り出すことができる。

2　おもりの動きの規則性を定量的に調べ，①おもりが１往復する時間は重さによっては変わらないが，糸の長さによって変わること，②おもりが他の物を動かすはたらきは，重さや動く速さによって変わることをとらえる。

計　画（約10時間）

段階	出合う（３時間）	追究する（４時間）	いかす（３時間）
活動と内容	1　おもりの動きを使ったカチカチボールやコロコロボールゲームを行い，距離や時間を調整する要因を予想する。 ○　カチカチボールやコロコロボールの動きを決める要因に着目すること	2　コンテスト課題別のグループに分かれ，おもりの動きを変化させる要因を調べ，変化の要因の調整方法を決定する。 (1)　変化の要因を共通Ｇで調べる。　③ ○　条件を統制した実験で結果を出すこと (2)　結果を課題別Ｇで分析する。　本時① ○　動きに関わる要因を決定すること	3　自分の見出した変化の規則性を使って，カチコロチャレンジコンテストでの要因の操作陵を見通し，コンテストを行う。 ○　数値化と比較の方法を使い要因操作すること
コンテストで高得点をとるために，おもりの動きを操作するきまりを見出す文化の学び			
支援	※　距離や時間を宣言通りに調節する２つのゲームを予告ゲームとして提示する。	※　要因を変化させる条件ごとに実験できる要因ごとの実験カードと結果を共通の視点で表すデータカードを用意する。	※　より長い時間やより長い距離を設定し，挑戦回数による点数化を行う。
評価規準	●　衝突に関わる「速さ重さ」ふりこに関わる「速さ重さ長さ」という要因を抽出し，調べる課題を決定している。	●　共通グループの実験で，条件制御をおこなったり，正確な数値化を行い，課題別グループとの比較で数値の傾向性や誤差に着目した客観的な分析をしている。	●　今まで調べてきた数値化やその比較の方法を使い，新たな課題に対する予想をしている。

本時の協働のポイント

子どもたちは，「出合う」段階で選択した動きの要因を決定するために，自分の予想した要因の実験結果を課題別グループで比較・分析していく。この相互検討活動で考えを共有することで，コンテストで操作する要因の量を数値の傾向性や誤差から検討し，客観性をもって，おもりの動きをコントロールする要因を決定する。

本時の目標

1　実験データをもとに，カチコロボールの動きをより多く変化させる要因を予想し，課題別グループで動きを変化させる要因を数値化して比較し，操作する要因や実験データの有効性を話し合うことができる。

2　おもりの動きを制御する要因（ふりこ…長さ，衝突…重さ・速さ）を決定し，変化量に対するきまり（ふりこ…長さが２倍になると周期は２倍以上，衝突…重さや速さの増え方と距離の増え方は同じ）を予想することができる。

準　　備

カチカチボール，コロコロボール，実験データカード，得点表，学習の流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　前時までの学習を想起し，自分の調べたデータから動きに関わる要因を予想し，本時学習のめあてを設定する。 ○　コンテストで自分が操作する要因とその変化（どのくらい変化させればどんな動きになるのか）に着目すること （めあて）　自分の出した実験データをもとに，おもりの動きを変化させる要因について話し合い，カチコロチャレンジコンテストで操作する要因を決定しよう。 ※　前時調べた要因を流れ図で提示し，コンテストルール（１回で成功しないと高得点にならないこと）を確認させる。	○　カチカチボールの動きを変えるためには，糸の長さを変えるといい。 ○　コロコロボールの動きを変えるには，重さを重くした方がいいよ。 ○　ぴったりの距離や時間に調整するには，どれがいいのかな。 ○　他の要因は，関係あるのかな。 ○　データから量の変化も予想できそうだよ。
2　自分の調べた実験データをもとに，コンテスト課題（時間や距離）を達成するために操作する要因の量を決定し，コンテストで確かめる。 (1) 自分の調べた実験データをもとに，コンテスト課題を達成するために操作する要因とその量を決定し，グループで予想を比較する。 ○　実験データにある数値を量の変化という視点から見直し，誤差や傾向性に着目すること ※　実験データカードによる課題別グループでの比較の場や再実験の場（各グループごとの実験器具の準備）を設定する。 (2) 操作していく要因の量を決定し，コンテストの課題に挑戦する。 ○　量の変化という視点から見直したきまりを適用すること	○　コンテストの課題は，どれを操作するのが一番いいのかな。 ○　今までのデータを見直そう。 ○　１回で決めないといけないから，正確な量を数値化しないとだめだ。 ○　遠くに飛ばすにはもっとおもりを重くすればいいよ。 ○　どのくらいにすればいいかが問題になってくると思うよ。 ○　要因を操作していけば，１回で成功できるよ。

【カチコロチャレンジコンテスト】

カチカチボールの10往復の秒数やコロコロボールの止める位置を要因を操作して調整し，何回で指定された動きがつくり出せるか競っていく。１回で成功すれば３点，２回目だと２点，３回目だと１点が入れられ，グループで協力して２つのゲームを行い，点数の１番多いグループがコンテスト優勝になる。

【カチカチボールチャレンジゲーム】

※　今までより長い長さの糸が選べるふりこを用意し，10往復が，ちょうど10秒になるように要因の量を調整する。

【コロコロボールチャレンジゲーム】

※　今までの倍の長さのレールを用意し，今までの設定より，さらに外側の的もねらえるようにする。

3　コンテストの結果を発表し，それぞれのチームで話し合った要因操作の方法やコツを比較する。 ○　動きに関わる要因のきまりを連続的な数量としてとらえること ※　グループごとの比較に使用した実験データカードを拡大提示し，数量の変化と傾向性を視覚的にとらえることができるようにする。	○　１回目の結果をデータにして２回目は成功したよ。 ○　数字の変化は，比例になっているんじゃないかな。 ○　ふりこの場合は，２倍３倍にはならなかったよ。

仮説をもとに自分の考えを出し合い，ともにレシピを作り家庭実践につなぐ家庭科学習

第6学年1・3組　家庭科学習指導案

指導者　　脇　本　孝　枝

題　材　つくろう！　梅雨の時期のオリジナルレシピ！

指　導　観

○　本題材のねらいは，１食分の食事の計画を考え，家族の喜ぶおかずを工夫して調理できるようになることである。健康を保ち成長していくためには，栄養的にバランスのとれた食事を安全に楽しくとることが必要であることに気付き，日常生活の中でよりよい食生活を目指して意欲的に取り組む態度を育てることである。

梅雨の時期のオリジナルレシピをつくることにより，夏の旬の野菜のよさや食事の準備をするときの衛生と環境を考えることができる。つくる楽しさや食べる喜び，生活に役立つ喜びを味わうことで，自分の家族のためにさらに工夫した調理をしようとする実践的な態度を育てる上からも意義深いと考える。

○　本学級の子どもたちは，これまでに「野菜で健康大作戦！」，「旬の野菜でヘルシーライフ！」，「ごはんとみそ汁を作ろう」の学習を通して，いためたりゆでたりして食品を組み合わせてとりバランスを整えることや，誰のために作るのかを考え工夫をして調理ができるようになってきている。また，野菜をとる必要性や手順を考えた調理計画，材料の洗い方，切り方，味のつけ方，後片付けの仕方，盛りつけや配膳の仕方についての基礎的技能を身に付けてきている。

○　本題材の指導にあたっては，自分の食生活を見つめるところから学習をスタートさせ，自分の願いをもって家庭生活を意識した課題解決を通して日常生活で活用できるようにしたい。

つかむ段階では，ＧＴとの出会い，食の体験活動を通じて自分の食生活をふり返り，家族の食事に関して健康で安全という視点から個人の課題を設定する。

つくる段階では，個人の課題の追究方法について話し合わせ，ともに追究することに意義がある共通課題を設定する。「梅雨の時期のオリジナルレシピ」をつくるという共通の目的をもたせ，それぞれの家庭の工夫や情報収集したことを出し合い，健康と安全の視点から自分たちで梅雨の時期のレシピを作り出す。

生かす段階では，共通課題で追究したことをもとに個人の課題追究の方法を見直し，各家庭の実態に合わせて応用・発展させ家庭実践へとつなげる。家族からの評価を得ることにより有用感を味わえるようにする。

目　　標

1　食品の栄養的な特徴を知り，食品の組み合わせや衛生面，環境面から梅雨の時期の健康レシピを考え，自分たちの生活を工夫しようとする実践意欲を高めることができる。

2　栄養のバランスを考えて一食分の食事の計画を立て，調理法や安全性を考えて梅雨の時期のおかずを調理することができる。

計　　画（約９時間）

段	第１次（３時間）	第２次（４時間）	第３次（２時間）
活動と内容	1　視点をもった食事調べから個人の課題をつくる。 (1)　ＧＴの方と出会いや体験活動より，旬の野菜・衛生面・環境面から生活を見つめる視点をもつ。② ○　食生活の課題をもつこと (2)　我が家の食事を分析する。　① ○　課題解決の仮説をもつこと	2　個人の仮説をもとに共通課題を設定し情報収集・吟味をする。 (1)　実験実習等で問題を追究する。　② ○　課題に合わせて情報収集すること (2)　情報収集の結果を追究グループで吟味しオリジナルレシピを作る。本時2/2② ○　共通の仮説を分析評価して，家庭実践の見通しをもつこと	3　個人の解決法を見直し，家族の実態に応じた家庭実践の計画を立てる。　② ○　共通の問題の解決方法を応用・発展し自分の解決方法を見いだすこと ○　家庭実践の計画を立てること
健康と安全の視点からともに科学的に追究し，レシピ作成の活動を通して，自分の生活を変える生活の学び			
支援	※　３つの視点からＧＴや活動の場を選定し体験活動の設定	※　共通の問題の解決の方法をともに分析・評価する場の設定	※　家庭実践カードの活用 ※　実践継続報告の場の設定
評価規準	●　体験活動より健康の視点を複数もち生活を見直している。 ●　梅雨の時期の家族の健康と食事の工夫に気づき自分の課題をもち課題解決の見通しをもっている。	●　「梅雨の時期の健康と安全」に視点をあて自分の課題の解決方法を話し合い，共通の課題を解決する実験実習の結果をもとに家庭実践への見通しをもっている。	●　複数の視点より自分の家族の健康を考えた１食分の食事の計画を立て，家族のために実践し自己評価をしている。

本時の協働のポイント

家族の健康と食生活を調査し課題をもった子どもたちがその追究方法を話し合う中から生まれた共通課題を，①旬の野菜を使った健康，②食中毒を防ぐ安全，③むだをなくすエコクッキングの３つに分類し，①栄養のバランス，②食材の選択，③調理法，④盛りつけの４つの観点から追究する活動を行う。そして，「梅雨の時期のオリジナルレシピ」を共創しながら生活事象に一般化し，個人の家庭の実態に応用発展させ家庭実践へとつなぐ。

本時の目標

1　梅雨の時期の健康と安全を考えた１食分の献立について追究したことをグループで分析・評価し，「梅雨の時期のオリジナルレシピ」を工夫することができる。

2　梅雨の時期の健康と安全を考えた調理の方法やそのよさが理解できる。

準　　備

グループで追究した結果の表，レシピカード，学習カード

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　前時の共通課題追究をもとに情報収集したことから，共通課題解決の方法について話し合う。 ○　梅雨の時期を健康に生活できるための追究をふり返り再追究の課題について確認すること （めあて）　共通課題解決のための追究結果を話し合い，梅雨の時期のオリジナルレシピを作り上げよう。 ※　家庭での工夫点，個人の考えをもってレシピ作りができるように情報収集をさせておく。 2　課題追究の方法を分析・評価し，梅雨の時期に健康に生活できるためのグループオリジナルのレシピを検討する。 (1)　食材，栄養，調理法からオリジナルレシピを分析評価する。	○　自分たちが作った夏が旬の野菜を使った料理を食べて，食材の選び方調理法，材料をむだにしない調理，盛りつけがどうだったか自己評価カードでふり返ります。 ○　家族の工夫を情報収集して，お母さんは本当に家族のことを考え料理をしてくれていることが分かりました。ほかの家の工夫や調べたことをもとに健康と安全ということを考えてグループで自慢のレシピを作っていきたいです。

梅雨の時期のオリジナルレシピを作ろう

【共通課題の解決例】

旬の野菜を使ったレシピ
- 栄養バランス　シートでチェック
- 食材　旬の野菜「かぼちゃ」をいれて
- 調理法　切り方・加熱方法（いためる・ゆでる）
- 盛りつけ　彩りよく

食中毒を防ぐレシピ
- 栄養バランス　シートでチェック
- 食材　旬の野菜
- 調理法　加熱方法　味付け（調味料の選択）
- 盛りつけ　家族の食事の時間を考えた調理計画・保存性

むだをなくすエコクッキングレシピ
- 栄養バランス　シートでチェック
- 食材　適切な買い物の仕方　選び方
- 調理法　加熱方法・味付け
- 保存方法　食材に応じた保存法
- 盛りつけ　彩りよく

○　梅雨の時期の健康と安全を考えた調理の方法が分かること ※　情報コーナーを設置し課題に応じてアドバイスが受けられるように，保健所や栄養士の先生などの助言が受けられるようにしておく。 (2)　課題別グループでよりよい健康レシピを作る。 ○　自分たちのレシピを見直すこと ※　情報ボードを利用し，交流の活発化を図る。 3　健康レシピを交流し，自分たちのグループに取り入れたい情報を吟味し付加修正してオリジナルレシピを作り上げる。 ○　梅雨の時期の健康な食事について課題を解決すること ※　①旬の野菜を使った健康，②食中毒を防ぐ安全，③むだをなくすエコクッキングレシピの視点を自分の課題追究に取り入れることができるように板書で整理する。	○　自分たちが考えた方法よりもっといい方法があるかな。ＧＴの先生に相談してみよう。 ○　梅雨の時期はお母さんは危ないからといって何にでも火を通すけど大事なことなんだ。梅雨の時期は食中毒が怖いんだな。 調理方法にももっと気をつけなくてはいけないね。 ○　みんなで考えたら本当に健康を考えた自慢のレシピができたね。これを自分の家族流にアレンジして家で実践しよう。家族が喜んでくれたらうれしいな。

「普通への挑戦」を続ける方との出会いからいのちの喜びを共有する人間総合学習

第6学年2組　人間総合学習指導案

指導者　髙　野　誠　一

単　元　いのち見つめて

指　導　観

○　本学級の子どもたちは，これまでに，福岡市のアジアマンスでの体験をきっかけにしてアジアの国々の遊びを中心に追究する文化総合学習や学校周辺のまちを花いっぱいのまちにしようと企画・実行した生活総合学習を経験してきている。また，理科学習や体育科(保健)学習，道徳の時間などを通して，生命を愛護する態度や健康を保持増進する生活，生命がかけがえのないものであることを知り大切にしようとするといった学習を積み重ねてきている。こうした子どもたちの実態をふまえて，人間の生命を中心とした人間総合学習をおこなうことは，自他の生命を大切にしようとする態度を育てるとともに，人間に対する多面的・総合的な見方を培う上でも価値がある。

○　本単元は，生命の危機にさらされながら，精一杯生命を輝かせようとしている人との出会いから，自分のいのちを見直していく人間総合学習である。本単元で対象としている人物は次のような方である。大学を卒業し就職しようとしたある日，慢性腎疾患であることが分かる。２日に一度の人工透析を繰り返しながらも病状は悪化し，悩んだ末に母親からの腎臓移植を受ける。この人物を追究することでの主な学習内容は，①生命のかけがえのなさや今，生きていることの幸せを感じ自他の生命を大切にしようとすること，②自分の生命にかかわる過去の経験を振り返ったりこれからの生命を見つめたりすること，③いのちを大切にすることについて，夢や希望，つながりなどの視点から考えることなどである。

○　本単元の指導にあたって，課題設定の段階では，腎臓移植を受けた中島さんと出会わせ，中島さんがいのちの危機に直面したときの葛藤を推し量ったり，家族やまわりの人々の愛情について考えたりする。そして，中島さんの投げかけをきっかけとして，いのちをめぐる自分自身や気がかりを中心とした課題をつかませる。次に，人間追究の段階では，自分の誕生や生命の誕生の仕組み，病気，事件や事故などのいのちをめぐる課題ごとに追究し，いのちに対する自分の見方をつくる。さらに，生き方更新の段階では，中島さんやそのまわりで「いのちのキャンペーン」を進める人々といのちについて語り合い，いのちを輝かせるために必要な夢や人とのつながりについて考えさせる。

目　　標

1　生命を輝かせている人物への出会いを通して，いのちをめぐる課題を設定し，自分史や誕生の仕組み，病気や社会情勢といった視点から調べ，いのちについて多面的・総合的に追究することができる。

2　いのちのかけがえのなさや生きていることへの喜びについて実感し，夢や希望をもって生きることの大切さや他の人とのつながりをつくることのすばらしさに気付くことができる。

計　　画（約17時間）

段階	課題設定（４時間）	人間追究（10時間）	生き方更新（３時間）
活動と内容	1　中島さんと出会いいのちについて自分の課題をつくる。 (1) 中島さんと出会う。　③ ○　いのちへの気がかりをもつこと (2) 課題をつくる。　① ○　いのちに関する課題設定	2　自分史やいのちをめぐる社会的な課題について調べる。 (1) 自分史を調べる。　④ ○　奇跡的・連続的ないのちへの気付き (2) いのちの課題について調べる。　⑥ ○　誕生の仕組みや病気，事件・事故からいのちの大切さについて考えること	3　中島さんやいのちのキャンペーンの方々といのちについて語り合う。**本時2/3** ○　いのちの大切さについて語り，いのちを輝かせる生き方を考えること
自分のいのちを見つめ，輝かせる生き方を考える人間の学び			
支援	※　中島さんの病状の比較や中島さんの投げかけから，いのちを見つめる視点をつくる。	※　家族や身近な方への聞き取りや課題に応じた小集団の編成，及び資料などの情報収集の支援をおこなう。	※　中島さんや一緒に活動している方々を招聘し，生き方モデルとする。
評価規準	●　中島さんの葛藤や喜びを感じ取り言葉で表現している。 ●　自分の誕生などいのちに関しての関心をもっている。	●　自分の誕生を調べ，奇跡的に祝福を受けて誕生したことに気付いている。 ●　いのちの誕生の不思議さや危機的な状況からいのちの大切さを感じ取っている。	●　生きることについて，夢や希望をもつこと，他の人とのつながりなどの視点から考えている。

本時の協働のポイント

自分史(誕生の様子)や誕生の仕組み，病気，事件・事故などの視点から調べてきた代表児童の発表をもとに，一人一人が考えたいのちに対する見方や考え方を出し合うことで，いのちの喜びや不安を共有し，中島さんや青山さん，浅野さんたちと一緒にいのちを大切にする生き方について語り合う。

本時の目標

1　いのちの大切さについて考えたことを自分が調べてきたこと(誕生の仕組みや病気，事件・事故など)や自分自身の体験とつないで話したり，中島さんや「いのちのキャンペーン」をすすめる浅野さん(ゴダイゴ)・青山さん(ＲＫＢ毎日放送)の考えに共感したりすることができる。

2　いのちに対するプラスとマイナスの情報を比べていのちの大切さについて考え，いのちを輝かせて生きる生き方について自分自身の振り返りやゲストの方の話をもとに，夢や希望をもつことの大切さ(自分自身の生きる主体性)と人とのつながり(支え支えられて生きる関係性)の面から自分の考えをもつことができる。

準　　備

学習ファイル，話し合いに必要な視聴覚資料，子どもの写真，保護者からの手紙

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　これまで追究してきた過程を説明する。 ○　前時までの学習経過の振り返りと友達やゲストの方々と語り合うテーマについて確認すること (めあて)　いのちは本当に大切なものだと言えるのか，友達や中島さん，浅野さん，青山さんと語り合おう。 ※　中島さんとの出会いによって生まれた課題やその後調べてきた概要について資料等を使ってゲストの方々に説明させる。	○　中島さんは，自分のいのちのピンチを乗り越えてきたんだ。中島さんとの出会いをきっかけにして，いのちについて考えてきたよ。 ○　いのちが大切だと言われながらもいろいろな事件が起こって本当にいのちが大切だと言えるのかみんなと語り合いたいな。
2　各自が調べてきた「いのち」をめぐる状況をもとに，いのちの大切さについて話し合う。 (1)　代表児童の考えをもとに，いのちの大切さについて話し合う。 ○　「いのち」をめぐる状況のプラス情報とマイナス情報を比べ，いのちが大切だと言える状況にあるのか考えること ※　プラスとマイナスのそれぞれの状況から考えた子どもを代表児童として選び，対比的な板書で比較的に考えることができるようにする。	○　調べてみて，確かにいのちが軽くなっているような気がしたけれど，そのなかで生きるのは難しそう。 ○　中島さんのように病気と闘っている人の姿を見ると，いのちを大切にしよう，生きようとする願いとその強さが伝わってくるようだ。

《マイナス情報の面から》
・年間３万人を超える自殺者
・事件や事故の絶えない状況

【全体テーマ】
いのちは本当に大切だと言えるのか。

《プラス情報の面から》
・生命の誕生の不思議さ
・病気に負けず生きる姿

(2)　いのちを大切にする生き方について，友達やゲストの方々と一緒に話し合う。 ○　夢や希望・目標といったいのちの主体性や支え支えられるといったいのちの関係性の視点から，いのちを大切にする生き方を考えること ※　中島さんのいのちに対する考え方についての話を聞いたり，保護者から渡された自分自身の写真を見たりして，自分がいのちを大切に生きることについて考えさせ，保護者からの手紙を読ませる。	○　自分は大切にしているかというと何が大切にした生き方かは分からない。でも，一生懸命に野球をしていると楽しいし，目標もある。 ○　私には家族がいる。誕生のことを調べたけれどみんなに支えられて大切にされていると思う。
3　ゲストの方からの話を聞き，ゲストの方と一緒にいのちの大切さを語りかける歌「for」を歌う。 ○　「for」を歌い，いのちの喜びを友達やゲストの方々と分かち合いいのちのキャンペーンへの参加の目的をもつこと ※　浅野さんの演奏をもとにゲストの方と一緒に歌ったり，青山さんからの提案(キャンペーンの参加)を聞いたりする場を設定する。	○　私がいることで，家族が明るくなったり助かったりしているんだ。 ○　語り合ったみんなと歌って，いのちの大切さをもっと感じたい。 ○　いのちについて考えたことを伝えられる機会があるんだ。ぜひ，私たちの気持ちを伝えたいな。

多様な動きが求められるコースでふじ組の友だちとなかよく力を合わせて鬼遊びを楽しむ体育科学習（1・2年ふじ組との交流学習）

第１学年２組，第１・２学年ふじ組　体育科学習指導案

指導者　久保勝美（Ｔ１）　下川勝彦（Ｔ２）

単元　みんなでいこう！おたからぼうけん（ゲーム）

指導観

○　本単元は，多様な障害物を克服しつつコースを進み楽しむすり抜け鬼遊びである。活動の場にある障害物に当たらずに鬼をかわし進むと宝を得ることができる。本単元では，宝を得る・守ることを課題として追究し，状況に応じた動きをつくり，広げていくことをねらっている。主な学習内容は，①活動の手順やきまりを理解して，友だちとかかわり合いながら動きをつくり広げて鬼遊びを楽しむこと，②相手やコースに対応して鬼をかわしたり，障害物を克服したり，冒険者をつかまえたりする動きをつくり広げること，③だれとでもなかよく活動することなどである。このことは，基本的な動きをつくるとともに，友達と運動できる自分を感じて運動が好きな子どもを育てる上で意義がある。

○　本学級の子どもたちは，就学前の鬼遊びを通して，走ったり，かわしたりつかまえたりする動きを経験してきている。そのなかで，規則を理解して友だちと勝敗を競い合う楽しさを味わってきている。しかし，異なる運動経験により，１人１人の動きや協力といった鬼遊びを楽しむための実態は様々である。このことから，易しい内容から学習を展開することが必要である。また，ふじ組の子どもたちとかかわることは日常生活や行事のなかでできつつある。そこで，動きやかかわりをよりよくすることで楽しさが増す本単元を通して，動きやかかわりを広げ，深めさせたい。

○　本単元の指導にあたっては，これまでに身に付けた動きをもとにふじ組の友だちと鬼遊びを楽しむための課題を追究し，用具や相手に対応させて姿勢や速さ，方向を変化させる動きや友だちとのかかわりをつくり，広げていく文化の学びを重点とする。そのために，まず，簡単な原ゲームを楽しみ，動きとかかわりから課題を設定する。次に，回る，跳ぶ，くぐる，かわす，つかまえる動きが求められるコースでの鬼遊びを通して基本となる動きをつくる。そして，ふじ組の友だちとともに障害物の幅や高さ，位置が変化した場で楽しむなかで，用具や相手に対応させてかわし進む，つかまえる動きを広げていく。最後に，つくり・広げた動きを生かしてまとめの大会を開き，動きや友だちとのかかわりのよさを味わわせるとともに，動きとしての文化をつくり出すことができた自分や一緒に活動して楽しかった友だちの存在への気付きを明確にする。

目　標

1　活動の手順やきまりを理解して，お互いのがんばりや動きのよさを認め合い，励ましや動きへの助言を中心に友だちとかかわり合いながら動きをつくり広げて鬼遊び「おたからぼうけん」を楽しむことができる。

2　鬼や冒険者の位置やコースにある障害物の変化によって発展する活動の場の特徴をとらえ，走る速さや方向，姿勢を素早く変化させて相手をかわしたり，よけたり，つかまえたりする動きをつくり広げることができる。

計　画（約６時間）

段	であう段階（２時間）	うみだす段階（３時間）	あじわう段階（１時間）
活動と内容	1　簡単なおたからぼうけんを楽しみ，きまりや規則，楽しみ方などゲームについて話し合うことを繰り返す。 ○　興味・関心を高めるとともに，課題を設定すること	2　おたからぼうけんを楽しむ。 (1)　障害物が加わった場で楽しむ。　① ○　かわす方向と動きをつくること (2)　障害物が変化した場で楽しむ。本時１／２ ○　走る姿勢や速さなどを変化させ，かわす動きをつくり，広げること	3　まとめのおたからぼうけん大会を楽しむ。 ○　かわす動きやつかまえる動きなど鬼遊びに必要な動きへの気付きの明確化と動きの定着
「みんなでいこう！おたからぼうけん」を友だちと楽しみ，かわす・つかまえる動きをつくり，広げる文化の学び			
支援	※　現在の動きで楽しめる易しい走る，かわす動きやゲームを試す場の設定 ※　動きとかかわりの課題整理	※　鬼や障害物の位置から，友だちとともに鬼をかわすコースを選んで動く活動の設定 ※　友だちとかかわりながら冒険コースを進む動きをつくり広げる活動の設定	※　動きとかかわりを数多く経験できる場の設定 ※　学びのよさを明らかにする評価の場の設定
評価規準	●　おたからぼうけんに興味・関心をもっている。 ●　楽しむための動きとかかわりの課題を設定している。	●　きまりを守り，友だちと協力しながらおたからぼうけんに参加している。 ●　冒険コースを進むために走る姿勢や速さ，方向を状況に応じて変化させている。	●　繰り返しまとめの冒険大会を楽しんでいる。 ●　よりよくなった自他のことに気付いている。

本時の協働のポイント

跳ぶ草やくぐる岩などといった障害物が難しくなった冒険コースを友だちと一緒に進み，チームで勝敗を競い合う鬼遊び「おたからぼうけん」を行うなかで，かわす・つかまえる動きについて助言し合ったり，励まし合ったり，友だちと動きを組み合わせたりするなど動きについての考えを共有して２組やふじ組の友だちとなかよく楽しむ。

本時の目標

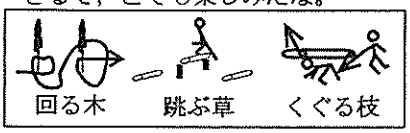
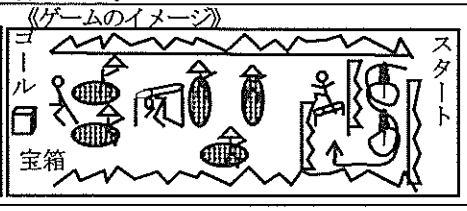
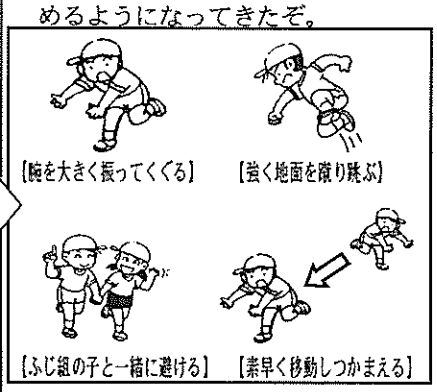
1　活動の手順やきまりを理解して，お互いのがんばりや動きのよさを認め合い，励ましや動きへの助言，障害物を克服する動きの補助を中心に友だちとかかわり合いながら動きをつくり広げて鬼遊びを楽しむことができる。

2　回る木や跳ぶ草，くぐる枝のコース幅や高さ，位置といった障害物の変化によって活動の場を発展させ，走る速さや方向，姿勢を素早く変化させて相手をかわしたり，よけたり，つかまえたりする動きをつくり広げることができる。

準　　備

学習の流れ図，おたからぼうけんの場，草や枝などの障害物に見立てる用具，学習ノート，タグ

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　障害物があるすり抜け鬼ごっこ「おたからぼうけん」を楽しみ，障害物が変化したコースや友達とのかかわりについて話し合う。 ○　障害物が難しくなった新たなコースの特徴とうまく進むための方法について話し合わせ，本時学習のめあてを把握すること （めあて）　おにの　いじわるに　まけないように　たかくとんだり　すばやく　うごいたりして　「おたからぼうけん」をたのしもう。 ※　障害物に見立てる用具を提示し，回る，跳ぶ，くぐるなどで「おたからぼうけん」のコースを進む動きを試すことで，本時で必要な動きの変化を明確にさせる。	○　今日も「おたからぼうけん」ができるぞ，とても楽しみだな。  回る木　跳ぶ草　くぐる枝 【本時で難しくする障害物の場】 ○　回る木と跳ぶ草，くぐる枝が難しくなったのか。楽しそう。 ○　みんながお宝を得たり，冒険者をつかまえたりできると勝てるぞ。
2　障害物の高さや位置が変化した「おたからぼうけん」を楽しむ。 (1)　障害物が変化したコースでおたからぼうけんを楽しむ。 ○　木の周りを回って進んだり，歩幅を大きくして障害物を跳び越したり，身をかがめながら前に進んだりする巧みな動きをつくること ※　回る木や跳ぶ草，くぐる枝といった障害物の場を設定することで，回る，跳ぶ，くぐる動きを発揮させる。 《規則》 ○時間による攻守交代 ○ゴールしたら得点 ○タグを取られたら失敗 ○障害物に当たると失敗 ○失敗後はスタートから ○何度でも繰り返してよい ○動きを補助し合ってよい  ※　動きを紹介し合う活動の場を設定することで，後半の「おたからぼうけん」での動きと友だちとのかかわりについての見通しを確かにする。 (2)　より難しくなった「おたからぼうけん」を楽しむ。 ○　幅や高さ，距離が変化した活動の場に応じる這う，くぐる，跳ぶ，走る，かわす動きや友だちとのかかわりを広げること 《回る木の変化》　コース幅50cm→40cm 《跳ぶ草の変化》　距離80cm→１m，方向 《くぐる枝の変化》　高さ１m→80cm ※　障害物に応じた動きや走る方向を選びながら，友だちと一緒に楽しむ活動の場を設定することで，動きと友だちとのかかわりを広げる。	○　回る木と跳ぶ草，くぐる枝が難しくなったのか。楽しそう。 ○　みんながお宝を得たり，冒険者をつかまえたりできると勝てるぞ。 ○　ふじ組の友だちがゴールできるように手をつないで進もう。 ○　繰り返しているうちに，うまく進めるようになってきたぞ。  【腕を大きく振ってくぐる】　【強く地面を蹴り跳ぶ】 【ふじ組の子と一緒に避ける】　【素早く移動しつかまえる】 ○　難しくなったので友だちをいっぱい応援しよう。自分も頑張るぞ。 ○　交替でおとりになって友だちを進めるようにすると勝てるよ。 ○　手を大きく振ると素早く姿勢を変えて左右に動いて進めるぞ。 ○　進むコースを教えるために手をつないで一緒に進もう。
3　動きや工夫について話し合い，気付いた自分のよさをまとめる。 ○　つくり，広げた回る，跳ぶ，くぐる，走る，かわす動きや友だちと助け合ってコースを進むかかわりについての気付きを確かにすること ※　できるようになった動きや友だちとのかかわりについてよかったことを絵図を用いて整理することで，本時学習のよさを味わわせる。	○　今日も楽しかったな。おとり作戦のおかげで勝つことができた。 ○　ふじ組の友だちと手をつないで協力して一緒に逃げたよ。 ○　次の時間も楽しみだな。

友達とかかわりながらコースを進み相手をかわす動きをつくる体育科学習（1年2組との交流学習）

第1・2学年ふじ組　体育科学習指導案

指導者　下川勝彦（T2）　久保勝美（T1）

題材　みんなでいこう！おたからぼうけん（ゲーム）

指導観

○　本学級の子どもたちは，1年生2名，2年生4名の計6名で構成されている。子どもたちは，これまでの鬼遊びについて，相手を意識して逃げたり追いかけたりすることはできるが，相手の動きに合わせて自分の動く方向を瞬時に判断したり相手の位置を見ながらかわして進んだりすることは不十分である。友達とのかかわりについては，自分からかかわろうとする子どもから友達のはたらきかけに応じることが苦手な子どもまで幅広い。そこで，場の状況によって自分で動く判断をして動きをよりよくしたい。このことは，動きを生み出し，自分で生活ができる力を育てる上でも意義深く，豊かな生活を営む力を育てることへとつながる。

○　本題材の「みんなでいこう！おたからぼうけん」は，コースにある障害物を克服したり相手をかわしたりしながら宝を得て勝敗を決める鬼遊びである。本題材は，コースを走ったり跳んだり，姿勢を変化させて進んでいく動きと相手を見てかわして進んでいく動きをつくることをねらいとしている。主な学習内容は，①コースを進んでいって，宝を捕るというきまりを理解すること，②友達と協力しながら回って走ったり跳んだり身を屈めてくぐりながら進む動きと，鬼をかわす動きをつくることである。このことは，基本の運動で培った動きをゲームのなかで自分で判断して表すという状況に応じた動きを生み出しながらゲームを楽しむという上で意義がある。

○　本題材の指導にあたっては，コースの中にある障害物や相手の位置や動きに対応させて進む方向や姿勢を変化させる動きをつくることができるようにする。であう段階では，ゲームに出合わせ，活動の手順やきまりについて理解させ，回って走る，跳ぶ，くぐって進む，相手をかわす動きを体験させる。うみだす段階では，鬼の位置や動ける範囲などを変化させた場で相手の状況をとらえて動きを引き出していく。また，状況を判断するための声かけや動作補助を行い，多様に動きを体験しながら身に付けていくことができるようにする。いかす段階では，これまでに身に付けた動きを発揮し，まとめの大会を行い，宝をたくさん獲得できたことで満足感を十分に味わえるようにする。

目　　標

1　活動のきまりや手順を理解して，1年2組の友達と一緒に宝をめざしてコースを進んでいきながら「おたからぼうけん」に，意欲的に取り組むことができる。

2　鬼の場所やコースの中での障害物の位置や長さ，高さなどが変化することによって生じる状況によって，自分で判断しながら回って走る，跳ぶ，くぐって進む，相手をかわす動きをつくることができる。

計　　画（約6時間）

段階	であう段階（2時間）	うみだす段階（3時間）		いかす段階（1時間）
活動と内容	1　新しいゲームに出合い，鬼をかわして進む「おたからぼうけん」をして楽しむ。 ○　「おたからぼうけん」のきまりを理解し，走ったり相手をかわしたりする動きをつかむこと	2　友達と「おたからぼうけん」を楽しむ。 (1) 障害物のある場で楽しむ。　① ○　相手をかわす方向をつかむこと	(2) 障害物が変化していく場で友達と「おたからぼうけん」を楽しむ。　本時1/2② ○　走ったり跳んだりくぐったりする動きや相手をかわす動きを発揮すること	3　「おたからぼうけん」のまとめの会を開き，つくった動きのよさを味わう。 ○　「おたからぼうけん」のまとめの会を行い，これまでにつくった動きを生み出すこと
障害物の位置や進む方向を判断し，走ったり跳んだり相手をかわしたりする動きをつくっていく生活ができる学び				
支援	※　易しいよける，かわす動きの体験やおたからぼうけんを試すための場の設定 ※　動きの動作補助	※　基本的な動きをいかす障害物がある場で動きをつくる活動の設定 ※　友達とかかわり，相手をよけたりかわしたりする動きを身に付ける活動の設定		※　動きとかかわりを数多く経験できるまとめの大会 ※　身に付いた動きを振り返る賞賛の場の設定
評価規準	●　おたからぼうけんに興味関心をもっている。 ●　友達と自分からかかわろうとしている。	●　友達に声をかけたり友達の声かけに応じたりして進んで参加している。 ●　走ったり跳んだりくぐったりする動きや相手をかわす動きを発揮している。		●　まとめのゲーム大会を楽しんでいる。 ●　動きを振り返りゲームを楽しんでいる。

本時のかかわりのポイント

「おたからぼうけん」において，鬼がいる位置や障害物の高さや位置が変化した場を設定し，一緒に活動する１年２組の友達に促されたり自分で進んでかかわったりしながら，進んでいく方向やタイミングを判断したりするようなモデル演示や声かけによって，回って走る，跳ぶ，くぐる動きや鬼をかわす動きを発揮する。

本時の目標

1　１年２組の友達に声をかけたり促しを受けたりしてなかよく「おたからぼうけん」を楽しむことができる。

2　跳び移る物や身を屈める物などの障害物の高さや幅などが変わったコースで，鬼の位置を見ながら走る方向を判断して回って走ったり跳んだりくぐったりしながら進み，鬼をかわす動きをつくることができる。

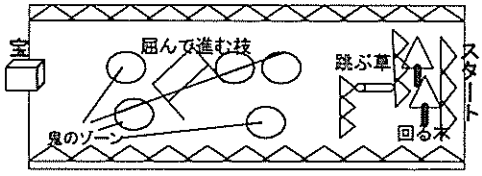
Ａグループ：　友達の声かけに応じたり一緒にコースを走ったりしながら，鬼のいない方向へ走り相手をかわす動きや手をつないで進む方向に向かって走ったり跳んだりくぐったりする動きを発揮することができる。

Ｂグループ：　友達と一緒に声をかけ合ってコースを進みながら，体を反らしたり横に動いたりして相手をかわす動きや自分で走り出したり跳んだりくぐって進んだりする動きを発揮することができる。

準　　備

学習の流れ図，おたからぼうけんの場，障害物に見立てる道具，タグ

展　　開

活動と内容	個の活動を促す支援
1　鬼をかわしながら進む「おたからぼうけん」を楽しみ，障害物が変化したコースや友達とのかかわりについて話し合う。 ○　障害物を克服し，鬼をかわす動きによってコースを進み，宝を捕ることができることをとらえ，本時学習のめあてを把握すること （めあて）　おにの　いじわるに　まけないように　たかくとんだり　すばやくうごいたりして　「おたからぼうけん」を　たのしもう。	1　めあてをつかみ，意欲的にゲームを行おうとするための支援 ※　前時の活動を振り返らせるための動きのモデルや写真の提示 ※　障害物のあるコートをとらえさせるための新たな場での試しの活動
2　障害物の高さや位置が変化した「おたからぼうけん」を楽しむ。 (1)　障害物が変化したコースで「おたからぼうけん」をする。 ○　走る，跳ぶ，自分の体を少し屈めながらくぐるといった動きで障害物を進んだり相手をかわしたりする動きをつくること	2　「おたからぼうけん」で障害物を進んだり鬼の位置に応じてかわしたりする動きを発揮するための支援 ※　障害物を設置して，鬼のゾーンをかいくぐって進んでいく活動の場を設定すること ※　友達から声をかけられたり友達と一緒にコースを進んだりするための２人組で進んでいくこと ※　動きを易から難に高めるための障害物が高くなったり長くなったりした場の変化 ※　障害物を回ったり跳んだりくぐったりする動きや鬼をかわす動きをつくるための教師の動作補助や声かけ
Ａグループ：友達の声かけや補助に応じながら，障害物を進んだり，鬼のいない方に速く走ってかわす動きをつくること Ｂグループ：友達の動きを見ながら障害物を進んだり鬼の位置をとらえて，素早く鬼をかわす動きをつくること	Ａグループ：友達と一緒にコースを走る，跳ぶ，くぐる動きの動作補助とモデル演示 Ｂグループ：障害物を巧みに進んだり素早く横に動いたりして鬼をかわす動きのモデル演示と声かけ
○時間による攻守交代 ○ゴールしたら得点 ○タグをとられたら失敗 ○障害物に当たると失敗 ○失敗後はスタートから ○何度でも繰り返しあり ○動きを補助しあってもよい  	
(2)　より難しくなった「おたからぼうけん」を楽しむ。 ○　障害物の高さや距離が変化した場で，回って走ったり跳んだりくぐったりして進み，素早く鬼をかわす動きを発揮すること	
Ａグループ：友達と一緒に障害物を回って走ったり跳んだりくぐったりしてコースを進みながら，鬼のいない方向へ走り出す動きや鬼をかわす動きを発揮すること Ｂグループ：友達と一緒に声をかけ合って，回って走ったり跳んだりくぐったりしながら進み，相手を見ながらかわす動きを発揮すること	
3　「おたからぼうけん」を振り返り，障害物のあるコースを走ったり跳んだりくぐったりして進みながら鬼をかわす動きのよさをまとめる。 ○　「おたからぼうけん」を振り返り，できるようになった動きをとらえて達成感を味わうこと	3　学習したことへの達成感を味わわせるための支援 ※　動きが変わったことをとらえさるためのモデル演示

子どもの長さの見方をいかし，長さの比べ方・測り方を身につける障害児教育算数科学習

第5・6学年梅組　障害児教育算数科学習指導案

指導者　園田洋一

単元　くらべてつくろう！　おたすけばし

指導観

○　本学級の子ども達は，精神年齢３歳から７歳程度の５年生男子１名女子２名，６年生男子３名女子１名の計７名で構成されている。これまでの学習から，物の長さに気づくこと，対象を比べたり媒介物で測ったりすることをとらえてきている。「長さ」の実態は，（AG）複数の対象の直接比較ができる子ども，（BG）複数の対象の間接比較ができる子ども，（CG）複数の対象を任意単位のいくつ分で測ることができる子どもと，その段階には幅がある。そこで，長さの見方に応じて内容を設定した学習を行うことは，長さの意味やその測り方をとらえる上でも価値がある。

○　本単元は，お助け橋を作る遊びをする中で，長さの見方を確かにし比べ方・測り方を身につけることをねらっている。お助け橋を作る遊びとは，鬼にさらわれて鬼ヶ島にとらわれた友だちや先生達を助けるために，橋の材料の長さを比べたり測ったりしながら材料を選び，島と島の間に橋作って友だちや先生達を助ける遊びである。具体的な学習内容は，①長短を比べたり測ったりしながらお助け橋を作り，友だちや先生達を助ける遊びに意欲的に取り組むこと。②お助け橋作りを通して，（AG）は間接比較で材料の長さの違いをとらえる，（BG）は任意単位のいくつ分で材料の長さの違いをとらえる，（CG）は普遍単位（１cm）の意味が分かり材料の長さの違いをとらえる，こと。③長さにかかわる見方を確かにし別の事象にいかすこと，などである。このような学習は，長さとのかかわりを確かにし，生活にいかしていく上からも意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，長さの見方を培い，その比べ方・測り方を身につける生活がわかる学びとして展開する。そのために，きづく段階では，自分が友だちを鬼から助けるお話と試しの遊びをもとに，目的と見通しをもたせる。こころみる段階では，長さをもとに必要な材料を見つける橋作りの活動を設定する。このとき，子どもの実態に応じて，比べ棒による間接比較，消しゴムの任意単位による測定，１cm²ブロック等の簡易ものさしによる測定を位置づける。こうすることで，長さの見方を確かにし，比べ方・測り方を身につけさせる。いかす段階では，身につけてきた見方や比べ方・測り方をいかした鬼退治の発射台作りの活動を行うことで，長さへの自信をもたせる。

目　標

1　材料の長さについて，間接比較，任意単位やものさしによる測定をしながらお助け橋を作り，友だちや先生達を助けながら楽しく遊ぶことができる。

2　お助け橋を作って遊ぶことを通して，（AG）間接比較による材料の長さの違い，（BG）任意単位のいくつ分によるで材料の長さの違い，（CG）普遍単位（１cm）による材料の長さの違いを，とらえることができる。

計　画（約６時間）

段階	きづく（２時間）	こころみる（３時間）			いかす（１時間）
活動と内容	1　鬼ヶ島にいる友だちを梅組のみんなが助けるお話を聞き橋を作って遊ぶ。 ○　お助け橋を作る遊びをしたいという目的をもつこと ○　材料の長さをもとに橋作りをする見通しをもつこと	2　お助け橋を作り友だち等を助けて遊ぶ。 (1)　ふじ組を助ける。　① A:2本を間接比較 B:消しゴムの間接比較 C:1cm²ブロックの任意単位	(2)　さくら組を助ける。　本時① A:3本を間接比較 B:消しゴムの任意単位 C:1cm²のブロックの簡易ものさし	(3)　先生を助ける。　① A:4本の間接比較 B:ブロックの任意単位 C:1cmの目盛りのものさし	3　鬼を退治する玉の発射台を作って遊ぶ。 ○　身につけてきた長さの見方や比べ方・測り方をいかすこと ○　長さについてのやる気や自信をもつこと
	お助け橋を作る遊びを通して，長さの見方を確かにし比べ方・測り方を身につける生活がわかる学び				
支援	※　友だちを鬼から助けるお話 ※　身につけている長さの比べ方等による試しの遊びの設定	※　長さをもとに必要な材料を見つける橋作りの活動の設定 ※　長さの見方を確かにする操作活動の設定			※　身につけた長さの内容を別の対象にいかす，発射台作りの活動の設定
評価規準	●　お話を聞いて，助けたい，橋を作りたいと言っている。 ●　橋の材料を比べたり，島と島の間を測ったりしている。	●　（AG）材料の長さを比べ棒に写し取っている。（BG）島と島の間の長さを，消しゴムのいくつ分で数えている。（CG）島と島の間の長さを１cm²ブロックで数えている。			●　比べ棒や，消しゴム，簡易ものさし（１cm目盛り）で，　必要な長さを写し取り，発射台を作っている。

本時でのかかわりのポイント

さくら組の友だちを助ける場面において，（AG）間接比較する材料を２から３本へ，（BG）任意単位として用いる消しゴムを繋ぐ補助具有りから無しへ，（CG）任意単位として用いる１㎤ブロックを１個ずつから繋いでものさし状へ，と変化する場面で材料を決めれば，新たな長さの見方を根拠に材料を選んでいく。

本時の目標

1　材料の長さを比べたり測ったりして，意欲的に，さくら組の子ども達を助けるための橋を作って遊ぶことができる。

2　さくら組の友だちを助けるお助け橋作りを通して，（AG）は比べ棒を用いて間接的に比べ，３本の材料の中から示された長さの材料を選ぶこと，（BG）は消しゴムのいくつ分で島と島の間の長さをとらえ，材料の中からちょうど同じ長さの材料を選ぶこと，（CG）は１㎤ブロックを繋いだ簡易ものさしで島と島の間の長さをとらえ，材料の中からちょうど同じ長さの材料を選ぶこと，ができる。

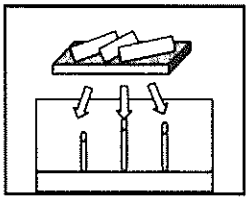
準　　備

手順表，島々の台，橋の材料群，さくら組の友だちの写真，自分の人形，個に応じた補助具

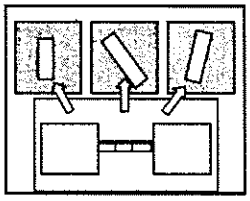
展　　開

活　動　と　内　容	個の活動をうながす支援
1　さくら組の子どもを助ける場面のお話をもとに感想を出し合う。 ○　さくら組の友だちが鬼ヶ島にとらえられていること ○　選ぶ材料群の数や材料の状態の違いをとらえること （めあて）　ざいりょうの　ながさをくらべて，さくらぐみさんをたすけよう。	1　活動の意欲を喚起し，目的や見通しをもたせる支援 ※　鬼ヶ島にとらわれたさくら組の友だちを助けるお話の提示 ※　本時の材料群の提示と前時との違いに着目させる問いかけ
2　橋の作り方について発表したり，材料の長さを比べて橋を作りさくら組の友だちを助けて遊んだりする。 (1) 橋の作り方を示す手順表を見て，発表する。 ○　一人一人の作り方・遊び方についてとらえること （AG） ①比べ棒に長さを写し取ること ②比べ棒どうしを比べること ③示された順の材料を選ぶこと ④橋を作って友だちを助けること （BG）（CG） ①島と島の間の長さを測ること ②測った長さと材料を比べること ③同じ長さの材料を選ぶこと ④橋を作って友だちを助けること (2) 材料を選び，橋を作ってさくら組の友だちを助けて遊ぶ。 ○　比べ棒や消しゴム，１㎤ブロックの簡易ものさしを用いた長さの写し取り方についてとらえること ○　比べ棒どうしを比べたり，消しゴムやブロックのいくつ分で数えたりすること	2　長さに確かにかかわらせるための支援 ※　グループ毎の手順表の提示 ※　長さにかかわる新たな見方が必要となる材料の準備 ※　材料の長さに着目し比べたり測ったりしながら，ちょうどよい長さの材料を決める場面のあるお助け橋作りの活動の設定

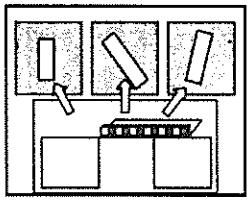
AG	BG	CG
○　３本の材料の長さを比べ棒に写し取ること ○　比べ棒どうしを比べ板に階段状に並べて比べ，３本の材料の中から示された長さの材料を選ぶことができること	○　島と島の間の長さを，消しゴムを並べて写し取り，いくつか数えること ○　数えた分の消しゴムを並べたものと材料を比べ，同じ長さの材料を選ぶことができること	○　島と島の間の長さを１㎤ブロックを繋いだ簡易ものさしで写し取りいくつか数えること ○　簡易ものさしを材料にあててブロックを数え，数えた分のブロックと同じ長さの材料を選ぶことができること



（AG）
・材料の長さを写し取る比べ棒と比べ板の準備



（BG）
・任意単位としての消しゴムと繋ぐ補助具の準備



（CG）
・簡易ものさしとしてのブッロクを繋いだものさしの準備

3　助けたさくら組の友だちを紹介し，助けるために作った橋の作り方について発表する。 ○　できた達成感・満足感を味わうこと ○　新たな比べ方ができるようになった自信をもつこと	3　達成感を味わい，自信ややる気をもたせるための支援 ※　助けた友だちと，助けるための橋の作り方について発表する場の設定

全 体 会 （1日目）

▼ あ い さ つ（10：20～10：35）

福岡教育大学学長　大 後 忠 志

校 長　永 江 誠 司

▼ 教 科 等 発 表（11：05～11：25）

・言語を駆使して考えをつくる国語科学習

－異質な読みが響き合う対話活動の展開－

国語科部　光 延 正次郎

▼ 主 題 発 表（10：35～11：05）

・豊かに生きる子どもをはぐくむ

教育課程の創造

－協働を中核とした学習の展開－

研究主任　岩 城 一 磨

▼ 障害児教育発表（11：25～11：45）

・状況に応じた動きを生み出す体育科学習

－場を段階的に変化させる攻守型ゲームの展開－

障害児教育部　下 川 勝 彦

▼ 児 童 発 表（11：45～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者　有 川 陽 子

第１日目　午後の部
学習指導案

▼ 学　習　指　導（１３：００～１３：４５）

学年　組	教科領域等	学び	単　元　・　題　材　・　主　題　名	授　業　者	会　場
２年２組	生　活　科	生活	ひらこう！みんなを守る安全教室	塚　本　正　典	2年2組教室ワークスペース
3年1・3組	理　　科	文化	ふしぎはっ見！じ石のはたらき	今　泉　伸一郎	理　科　室
４年１組	社　会　科	生活	ぼくらが守る！福岡市の水	髙　良　祐　治	４年１組教室
4年2・3組	音　楽　科	文化	「きらきら星変奏曲」をつくろう！	有　川　陽　子	音　楽　室
５年１組	算　数　科	文化	角度当てクイズをつくろう	田　中　健　悟	３年２組教室
５年２組	道　　徳	人間	危機的な生命？仕事としての責任？	木　下　美　紀	５年２組教室
６年１組	体　育　科	文化	つくろう！みんなのフットサル	岩　城　一　磨	附属中体育館
６年２組	国　語　科	文化	わたしはこう考える～食卓の向こう側～	平　川　洋　一	６年１組教室

▼ 障害児教育学習指導（１３：００～１３：４５）

3・4年さくら組	生活単元学習	いしでそだつの？！おいしいトマト	原　田　敏　男	特殊学級棟中庭

安全教室をグループごとにつくる中で，安全な施設と人の願いを結び付ける生活科学習

第2学年2組　生活科学習指導案

指導者　　塚　本　正　典

単元　ひらこう！　みんなを守る安全教室

指　導　観

○　本学級の子どもたちは，これまでに地域の探検を通して，自分たちの生活が地域の様々な場所や人々とかかわっていることに気付いており，地域とふれあうよさを感じている。また，通学路において自動車や不審者に気を付けて登下校することに気付いている。そこで，危険を予測しながら場の状況をとらえ行動できるこの期に本単元を設定する。そして，１年生に安全教室を開く学習を進めることは，交通マナーを守って安全に登下校する態度を育てるとともに，安全を守ってくれる施設や人々とのかかわり方や使い方を実感的にとらえる知的な気付きに高める上で価値がある。

○　本単元は，１年生の登下校に対する思いから，自分の通学路を見直し安全な登下校ができるようにすることをねらいとしている。そこで，本単元では，様々な地域の人や自然，社会の様子と出合い，場の状況に応じて安全に行動する必要性や緊張感がある通学路をとりあげる。ここでの主な学習内容は，①通学路の様々な人，自然，社会の様子に関心をもって安全を守ってくれる施設や人々に気付くこと，②通学路で出合う人や施設とのかかわり方や使い方をその場に応じて考え判断すること，③安全な登下校ができるようにすることである。このように安全教室を開くことは，場の状況に応じて自らの行動を考え判断し安全に登下校ができる意義がある。

○　本単元の指導にあたっては，ガードレール等の施設の様子や110番の家等の人々の取り組みに気付き，安全な登下校ができる生活の学びで展開する。そのためにまず，であう段階では，１年生の登下校の不安な思いから，１年生の安全な登下校のため安全教室を開いていきたいという気がかりをもつことができるよう，安全教室の計画を立てる場を仕組む。次に，ふかめる段階では，通学路の危険箇所や安全施設の様子に気付くことができるよう，通学路の探検を進める。そして，交通の安全面や防犯の安全面から施設や人々の取り組みの共通性をとらえる関連的な気付きをもとに安全教室の資料やコーナーを見直すことができるよう，交通指導員や荒戸交番の方に取材を進める探検活動を仕組む。最後に，いかす段階では，安全な施設や人々のよさをとらえる実感的な気付きをもとに１年生に安全指導を進めていく「安全教室」を開く活動を仕組む。

目　　標

1　安全な通学路にしたいという思いや願いをもとに，意欲的に通学路の様子を見学したり地域の交通指導員の方や110番の家の方にインタビューしたりしながら安全に登下校することができる。

2　１年生に安全教室を開き通学路の様子を説明していく活動を通して，通学路には，自分たちの安全を守ってくれる様々な施設や人々がいて，危険箇所における安全な行動の仕方に気付くことができる。

計　　画（約12時間）

段	であう段階（３時間）	ふかめる段階（７時間）	いかす段階（２時間）
活動と内容	1　１年生の登下校に対する思いから，安全教室の計画を立てる。 ○　１年生の登下校における不安な思いに気付き，安全な登下校について伝えていく気がかりをもつこと	2　安全教室の資料やコーナーをつくり，新たな課題をもとに調べる活動を進める。 (1) 安全施設や人を調べる探検をする。② ○　安全教室の新たな課題に気付くこと (2) 安全教室の資料やコーナーをつくり，新たな課題をもとに見直す。　本時3/5⑤ ○　施設と人々の願いの関係に気付くこと	3　１年生みんなの安全を守る教室を開く。 ○　みんなの安全を守る施設や人々の働き，人へのかかわり方を考えて安全な登下校をする大切さに気付くこと
自分の生活と様々な施設や地域の人とのかかわりに気付き，安全な登下校ができる生活の学び			
支援	※　危険箇所や１年生の思いを伝えるビデオの提示 ※　安全教室の計画を立てる場	※　地域の交通指導員や荒戸交番の方へに取材する探検活動 ※　GTと安全教室の計画について見直す活動	※　安全教室を開き，１年生に安全な施設や人について説明する場の設定
評価規準	●　１年生の登下校における思いに気付き，安全教室を開く計画について意欲的に話し合っている。	●　安全な施設についてメモしたり地域の方に意欲的に取材したりしている。 ●　安全教室の資料やコーナーをつくり，人々の取り組みから，計画を見直している。	●　安全教室を通して，１年生に通学路の様子を進んで説明しこれからの自分の登下校を見直している。

本時の協働のポイント

安全教室を見直すふかめる段階において，１年生が安心して登下校ができるようにしたいという思いから，通学路での人々の取り組みを交通や防犯の安全面からグループごとに地域の方にインタビューし，施設の設置の様子と地域の方の計画的・協力的な取り組みを関連的に気付くことができる。

本時の目標

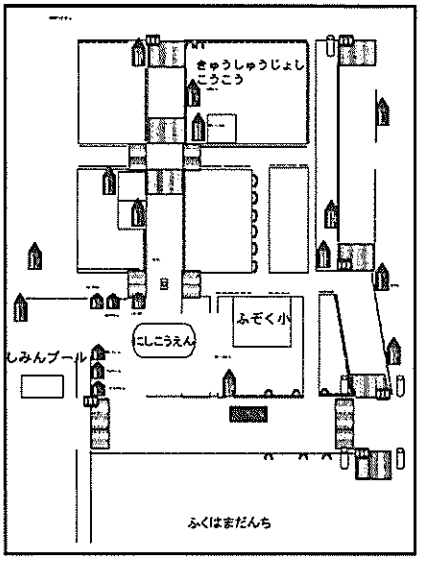
1　通学路の様子を地図や写真をもとに説明したり，交通や防犯の安全面への人々の取り組みや願いについてインタビューしたりすることができる。

2　通学路の様子をもとに地域の人の取り組みについて取材する活動を通して，交通の安全面と防犯の安全面から人々の願いによって新たに設置された施設や計画的・協力的な取り組みを関連的に気付くことができる。

準　　備

学習の流れ図，学習ノート，通学路の地図，写真，資料，GT

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　自分たちが調べた通学路の様子について見直していく視点について，話し合う。 ○　交通や防犯の安全面から，１年生に分かりやすい安全教室を開いていく思いを高めること （めあて）１年生があんぜんなとうげこうができる，わかりやすいきょうしつにしよう。 ※　地域の人々の取り組みの様子が視覚的にとらえられるよう，通学路の地図を提示し，色づけをする場を設定する。	○　安全のためにつくられた施設が通学路にたくさんあったね。 ○　交通の安全や防犯の安全を守る施設もしっかりまとめたよ。危険な場所が多かった所も付け加えたから，１年生にぜひ聞いてほしいな。 ○　地域の人は，どんな気持ちで取り組んでいるのかな。安全な施設は，どうやってつくられるのかな。
2　グループごとに地域の方にインタビューをし，地域の人たちの取り組みや考えについて話し合う。 (1)　地域の方に，交通の安全面や防犯の安全面からインタビューする。 ○　安全な登下校を願い，交通や防犯の安全面から計画的に取り組んだり，地域の人たちが協力し合ったりしていることに気付くこと 交通指導員の方 交通の安全面から：安全な登下校を願い，ガードレールや信号機の設置を続ける取り組み 荒戸交番のお巡りさん ２つの安全面から：ラッシュ時のパトロールや緊急時に駆けつける取り組み 110番の家の方 防犯の安全面から：不審者に対応する110番の家の設置と地域へお願いする取り組み ※　交通の安全面や防犯の安全面からどんな思いや願いをもって，どのような取り組みを進めているか取材ができるよう，地域の方へのインタビューの場を設定する。 (2)　地域の方への取材をもとに，交通の安全面や防犯の安全面から110番の家や施設の様子と，人々の考えの関係について話し合う。 ○　交通指導員さんや110番の家の人が子どもたちの安全を願って施設を増やし，より安全な取り組みを計画的，協力的に進めていることに気付くこと ※　取材の視点をもとに，それぞれのグループからの意見を出し合う話し合いの場を設定し，交通や防犯の面から施設設置と地域の人々の取り組みの関係が明らかになる構造的な板書で整理していく。	 ○　私たちの唐人町方面の通学路には細い道があるけど，ここには白線があるので，白線の中を通ることが大切です。地図にシールをはってみると，車から安全に守ってくれるものと不審者から守ってくれる施設は，同じ所にあるね。地域の人たちは，交通事故に遭わないことや不審者のことから，安全に登校できるように取り組んでいるそうです。
3　自分たちが調べた通学路の様子を見直し，これから新たに調べていく活動について話し合う。 ○　交通や防犯の安全の面から，さらに調べていく意欲を高めること ※　交通指導員の方や110番の家の方に，安全教室のよさについて話していただく場を設定する。	○　交通指導員さんに聞いたことを，自分たちの発表につけくわえよう。

個の実験結果の考察を共有して磁石のはたらきを追究していく理科学習

第3学年1・3組　理科学習指導案

指導者　今泉伸一郎

単元　ふしぎはっ見!　じ石のはたらき

指導観

○　本単元は，磁石には，引き付けられる物と引き付けられない物とがあり，磁石に引き付けられる物は磁石をつけることで磁石になること，磁石を自由にしておくと南北を指すことから２つの極があること，そして，磁石どうしを近づけると極どうしが引き合ったり退け合ったりすることを調べるようにする。これらの活動を通して磁石の４つのはたらきについての見方や考え方をもつようにするとともに，それらを知的好奇心を高めて追究していく態度を育てることがねらいである。そこで，目に見えない磁力を視覚化した磁石模様を提示することで磁石の力についてのイメージをもち，見通しをもって追究していくことができるようにする。

○　本学級の子どもたちは，これまでの生活の中で磁石に触れたり，遊んだりした機会は多く，磁石について興味・関心をもっている。このことで，磁石に対する自分なりの既有な考えをもっている。しかし，それらの現象については知っているが，多くは，断片的なものである。磁石につくものについては，材質という観点でとらえてない場合がある。また，磁石の極について，電気の単元で学習した乾電池の＋極－極と同じようにとらえている子どももいる。

○　本単元の指導にあたっては，課題をもつ段階では知的好奇心を高めることをねらう。そこで，磁石の力を視覚化した磁石模様の観察と磁石につくものを調べる活動を設定する。その際，磁石模様の共通点や差異点に着目させる。追究段階１では，磁石のはたらきを調べることをねらう。そこで，磁石の磁力性，磁極性，磁化性，指北性について調べる活動を設定する。その際，磁石と鉄，磁石と磁石を近づけたときにはたらく力をイメージ化し考えや実験する方法が異なる者で構成したグループで追究させる。追究段階２では，磁力のはたらく距離の追究をねらう。そこで，磁石と鉄との間を離したり，いろんなものをはさんではさむ物の厚さを変えたりした時にはたらく磁力の距離を調べる活動を設定する。その際，モデル図を使っての交流，異質グループ間での実験結果について相互に考察し個の考えの共有して磁石の力のはたらく距離についてのきまりをつくることができるようにする。

目　標

1　磁石のもつ性質や磁石が物に与える効果について事象を比べて観察したり，見えない磁力をイメージした個の考えを他者と比べたりしながら見方や考え方をもつことができる。

2　磁石は，鉄を引きつけ，磁石についた鉄は磁石になること，磁石どうしが引き合ったり，退け合ったりすること，磁石を自由に動くようにすると南北の向きに止まることがわかる。

計　画（約８時間）

段階	課題をもつ段階（2時間）	追究段階１（４時間）	追究段階２（２時間）
活動と内容	1　磁石模様を観察する。 (1) 観察した磁石模様について話し合う。　① ○　磁石模様に規則性があること (2) 磁石につく物，つかない物を調べる。　① ○　磁石は鉄でできた物を引きつけること	2　磁石のはたらきについて調べる。 (1) 磁化性について調べる。　① ○　磁石につく物は磁石になること (2) 磁石どうしにはたらく力を調べる。　② ○　磁石にはN極S極があり，同じ極どうしでは反発し，違う極どうしでは引き合うこと (3) 磁石を自由に動くようにしたときの指北性について調べる。　① ○　自由に動く磁石のN極は，北を指すこと	3　磁石と鉄との間を離したりいろんなものをはさんではさむものの厚さを変えたりした時にはたらく磁力の距離を調べる。　本時２／２ ○　磁石と鉄との間を離したり，間に物をはさんだりしても磁石の力がはたらく距離は変わらないこと
磁力性，磁極性，磁化性，指北性に着目し，磁石のはたらきについてきまりをつくる文化の学び			
支援	※　モールによって磁石にはたらく力を視覚化 ※　形の規則性に着目	※　モデル図による個の考えの表出 ※　モデル図を使っての交流や実験結果から個の考えの共有して考察する実験グループの構成	※　モデル図を使っての交流 異質グループ間での実験結果の考察による個の考えの共有
評価規準	●　磁石模様の共通点や磁石につく物の共通点に気付いている。	●　モデル図をもとに個の考えを検討している。 ●　実験結果から，個の考えを検討し，モデル図をかきかえている。	●　異質グループ間での実験結果から磁石のはたらきについて考察している。

本時の協働のポイント

磁石と鉄との間を離したり，間にはさむ物の材質を変えたりすると，磁石が鉄を引き付ける力がどこまではたらくかについて，既有の体験やイメージ，磁石模様を観察したことを根拠に個の考えを明らかにし，実験によって確かめた結果をもとに個の考えをつくり変える。その後，異なる実験を行った者で構成したグループでお互いに個の考えを共有し，磁石の力が届くはたらきについてきまりをつくり出す。

本時の目標

1　磁石と鉄との間を離したり，間にはさむ物の材質を変えたりすると，磁石の力はどこまで届くのかを根拠をもって予想し，実験によって定量的に調べることができる。

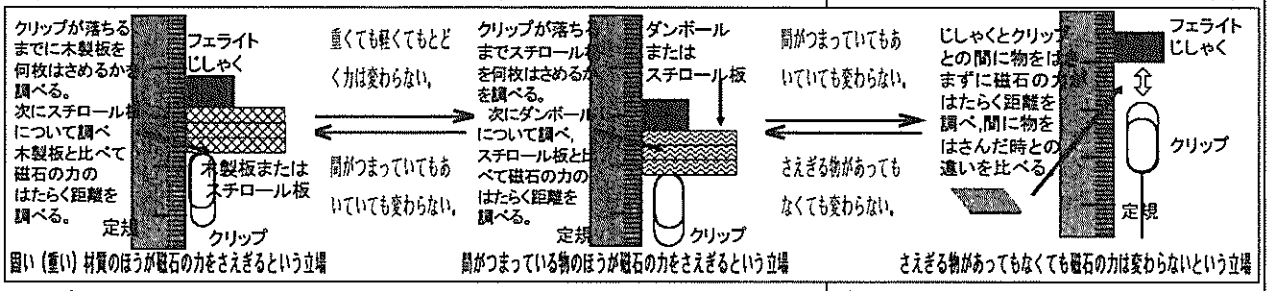
2　磁石と鉄との間を離したり，間に挟む物の材質を変えても磁石が鉄を引き付ける力は変わらないことがわかる。

準　　備

フェライト磁石，糸付きクリップ，定規，木製板，スチロール板，ダンボール紙数枚，鉄製スタンド

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　磁石と鉄との間を遠ざけたり，はさむ物の厚さや材質を変えたりすると鉄を引き付ける力はどこまではたらくか相互に考えを交流する。 ○　他者の考えとの対立に気付き，実験によって明らかにしようとする活動の目的をもつこと (めあて)　磁石と鉄との間を離したり，間にいろんな物をはさんだりする時，物を引き付ける力はどこまではたらくか調べよう。 ※　考えのモデル図を類型化して提示し，磁石と鉄との間にはさむ物の重さや固さによるはたらく磁石の力の距離との関係付けを話し合わせる。	○　間に何もはさまないと目に見えない力は確かにはたらく。間に固い物をはさむとその力をさえぎる。 ○　重い物をはさむと力をさえぎる。 ○　中味が詰まっている物はスカスカな物より力をさえぎると思う。 ○　間に物をはさまなくてもはさんでも磁石の力ははたらくと思う。
2　磁石と鉄との間にはさむ物の厚さや質を変えたり，間を離したりすると鉄を引き付ける力はどこまで（距離）はたらくかを調べる。 (1)　磁石と鉄との間にはさむ物の厚さや質を変えたり，間を離したりすると鉄を引き付ける力はどこまではたらくか自分の考えを検証する。 ○　磁石の力の届く範囲について調べた実験結果から確証・反証を得たことについてモデル図にかきあらわすこと ※　実験計画をもとに確かめたい実験器具やはさむものの材質を選択できるようにする。 (2)　結果から磁石の力の届く距離について考察したことを交流する。 ○　多様な実験結果から磁石の力のはたらく距離のきまりをつくること ※　異なる考えをもった者が，同じ実験台で調べる場の設定を行うことで多様な実験結果から考察したことを相互に交流できるようにする。	○　間にはさむ物が重いほうが磁石の力をさえぎると思うから，重い木の板と軽いスチロール板とで力のとどく距離を比べてみようね。 ○　間に物をはさむ物がスカスカなものより中味が詰まっている物のほうが磁石の力をさえぎると思う。だからスチロール板とダンボールとで比べて，力のとどく距離を調べよう。 ○　間に物をはさんでもはさまなくても磁石の力は同じようにはたらくと思う。だから，何もはさまないでどこまで力がはたらくかくらべよう。



3　実験結果から考察したことをもとに，磁石と磁石に引き付けられる物との間に隔たりがあるときの力のはたらく距離について話し合う。 ○　磁石と鉄との間に隔たりのあるなしや，間に挟まる物の形状には関係なく一定の厚さまでは磁石の力がはたらくこと ※　全体での結果の報告と共通することについて，磁石と鉄との間の隔たりのあるなしや，はさむ物の材質を視点に交流の内容を板書で整理する。また，一般化した磁石の力のはたらく距離を生活にいかすことができるように様々な材質の掲示物を冷蔵庫にはさむ事象提示を行う。	○　磁石との間に物をはさまない時は２cmまで磁石の力ははたらいた。 ○　間にはさむものが固くても固くなくても同じ結果が出ました。 ○　磁石とクリップとの間にはさむものがあってもなくても，間にはさむ物の材質が違っても磁石の力は２cm位はたらくことがわかりました。

福岡市の水確保についての討論活動を通して自分と水との関係を見つめる社会科学習

第4学年1組　社会科学習指導案

指導者　　髙　良　祐　治

小単元　ぼくらが守る!福岡市の水

指　導　観

○　本小単元は，福岡市の水の安定供給を目指す諸機関の取り組みをとらえることで，自らの水の使い方を変えようとすることをねらいとしている。市は，水の安定供給のために数々の取り組みを行っており，市民の節水意識も高い。しかしその一方で，２度の大渇水や昨年は史上３番目の少雨を記録するなど，不安はぬぐいきれない。そこで，市の水確保の取り組みの追究による主な学習内容は，①市が水の安定供給のために他地域と協力し合いながら計画的に取り組んでいること，②市や市民の水確保の工夫や努力をとらえ，自分も生活を見直し，協力しようとすることなどである。このことは，自分の生活を振り返り，よりよい社会を形成しようとする態度をはぐくむ上で意義深いと考える。

○　本学級の子どもたちは，ごみの学習で，自分とごみとのかかわりを追究し，実際にリサイクル活動を経験することで，ごみ減量の必要性や意義を実感している。また，前小単元の福岡県の概要をとらえる学習で，福岡県には様々な地形や地域があることをとらえている。そこで，環境保全や他地域への関心が高まっているこの期に本小単元を設定し，厳しい水事情の福岡市でどのように生活していくべきか考えさせることは，水資源を安定して確保しようと取り組む社会全体のようすをとらえたり，水を大切に使おうとする態度をつくったりする上でも価値があると考える。

○　本小単元の指導では，市の水確保対策や安心して飲める水づくりの取り組みを追究することで節水の必要性に気付き，節水生活を実現する生活の学びで展開する。まずつかむ段階では，市の水の厳しい現状から市がどのように水確保の取り組みを行っているのか追究する学習問題を設定し，水不足を打開するためにもっと水源確保を進めるべきか考える追究論題を設定する。次にさぐる段階では，市の取り組みを追究する中で，２回の討論活動を通して市の水確保の取り組みをとらえ，節水意欲を高める。具体的には，１回目の討論で追究する観点を整理し，２回目の討論で市の水確保の取り組みへの価値判断を行う。そして，節水に協力していくため，どのような取り組みが学級として可能か検討，実施し，生活更新につなげていく。

目　　標

1　福岡市の水確保や水質保全の取り組みについて，その現状や将来的な計画，そこにかかわる人々の取り組みなどから追究し，自分自身も水を大切に使う活動に参加していくことで，生活更新することができる。

2　福岡市が，他地域と協力しながら水を確保する開発を計画的に行っていることをとらえ，我々市民も節水など協力していくことが必要であることをとらえることができる。

計　　画（約12時間）

段階	つかむ（４時間）	さぐる（６時間）	つくる（２時間）
活動と内容	1　福岡市の水事情と水使用のようすを比べ学習問題をつくる。 (1) 市民や自分の水使用調べ① ○　多量の水使用に気付くこと (2) 福岡市の水の実態調べ　② ○　不足がちな状況をとらえること (3) 学習問題を設定する。　① ○　追究の方向性を決定すること	2　市の水確保の取り組みを調べ，討論活動を行い市民としての水に対してのあるべき姿を考える。 (1) 市の水道を調べ，話し合う(討論Ⅰ)。　③ ○　市の水確保の追究の観点を整理すること (2) 市の水確保について調べ，話し合う（討論Ⅱ）。　本時３／３③ ○　市の取り組みをとらえ，節水への協力の必要性をとらえること	3　市が進める節水対策に協力し，節水意識を高める。 (1) 市の節水対策で取り組めそうなことを検討する。① ○　節水対策への協力の可能性の検討 (2) 節水活動の実施・評価　① ○　「市民ダム」への参加
福岡市の水確保のための取り組みを討論活動を通してとらえ，自分たちも協力していこうとする生活の学び			
支援	※　水使用量調べ ※　福岡大渇水の資料提示 ※　生活実態と市の水の実態との対比	※　水道施設見学や水道局の方との出会い ※　市の水確保の取り組みを調べる必然性を生む論題設定及び２回の討論活動	※　市の広報の方の招聘 ※　学級で決めた活動に向けた場やものの提供
評価規準	●　水の必要性に気付いたノート記述。 ●　福岡市の水事情についての疑問などをノートに書いている。	●　他地域との協力や計画的な水資源開発が行われていることや水道供給の仕組みなどをとらえている。 ●　節水の必要性をノートに書いている。	●　実現の可能性の程度や理由について記述している。 ●　節水の実感を自己評価し，ノートに書いている。

本時の協働のポイント

「福岡市は，水不足に備えてもっと集める水をふやすべきか」という追究論題について，討論活動Ⅰで整理した「現在の計画でこれからもたりるか」「まだ集める水はふやせるのか」「市民が使う量をへらせるのか」という観点で価値判断を行っていく討論活動Ⅱを行い，市は将来を見据えて計画的に水確保に取り組む努力や工夫をしていることや，われわれ市民の協力も不可欠であるという考えを共創させる。

本時の目標

1　福岡市の水資源確保推進のあり方について討論活動を行うことで，福岡市の水資源確保のための数々の取り組みについての認識を深め，自分自身も水資源確保へ協力していこうとする意欲を高めることができる。

2　福岡市が，人口増加や少雨の場合を見通して計画的に，他地域と協力しながら水源確保に取り組んでいることを多面的にとらえ，水道の安定供給には，自分たちの協力も必要であることに気付くことができる。

準　　備

福岡市の年間・月別降水量のグラフ　　1人あたりの水使用量の他市との比較表　　子どもたちの水の使い方のVTR

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　福岡市の水道の現状について話し合い，追究論題を確認する。 水不足を経験してきた福岡市 福岡市では，ダム建設や淡水化施設など水を集める取り組みをしているね。 だから… もっと集める水をふやすべきだ ⟷ 今の計画でいいと思う ○　福岡市の水確保対策について価値判断を行うことのねらいの把握 （めあて）　福岡市の水が大丈夫かどうか，立場と理由をはっきりさせて２回目の討論活動をしよう。 ※　肯定側と否定側それぞれから観点が同じで主張が異なる２名に発言させ，本時話し合う論点をはっきりとさせる。	○　これまで何度も水不足を経験してきた福岡市の水は，いろいろな取り組みをしているね。 ○　もう水不足にならないために，もっと集める水を増やした方がいい。 ○　いろいろ取り組んでいるんだからもう十分じゃないの？ ○　見学してきたことやこれまで調べてきたことを使いながら，自分の主張が伝わるように友だちと話し合っていこう。
2　討論活動を行うことで，福岡市のこれからの水確保のあり方について価値判断を行う。 (1) 福岡市の水確保の取り組みについて討論活動を行う。 ○　市の水確保の取り組みやそこにかかわる人々の事情や努力や思いをふまえ水確保のあり方について論拠をはっきりとさせた考えをつくること もっと集める水をふやす ⟷ これ以上ふやさなくてよい 市の人口予想１５０万人 → たりるか ← 五ヶ山・大山ダム開発中 淡水化施設，福北導水 → ふやせるか ← 他地域からの協力の現状 福岡市292㎥/日…もう限界 → へらせるか ← 雑用水道，雨水利用 ※　討論活動Ⅰで見出した観点別に子どもたちの主張を板書で整理する。 (2) 福岡市水道局の方の話を聞き，市の取り組みについて話し合う。 ・　何年も先のことを考えた計画 ⟷ 計画通りにいかない難しさ ・　たくさんの地域との協力体制 → 市民の協力が不可欠 ○　市が水不足に備えて様々な対策を包括的に行っていることをとらえその実現のためには我々市民の協力が不可欠であることに気付くこと ※　福岡市水道局の方に討論をふまえて，福岡市が将来的な展望をもって計画を立て，実施していることや課題について話していただく。	○　福岡市の人口は，まだ増え続けている。だから，もっとダムを造るなどして，水をもっと集める努力をすべきだと思う。（たりるか） ○　福岡市民のために，他の町の人びとが立ち退いたりしている。もう迷惑はかけられないし，断水も起こっていない。（ふやせるか） ○　ぼくたちの考えについて，福岡市水道局の人は，どう思うのか聞いてみたいな。 ○　水道局の人たちは，ずっと先のことまで見越して福岡市の水不足問題をどのように解決していくか考えてくれているんだ。 ○　協力するために何かいい方法があるかな。ぼくたちが何かした方がいいことははっきりしてきたぞ。
3　追究してきた福岡市の取り組みと自分の水の使い方を対比する。 ・福岡市…計画的な水確保，他地域との協力，人びとの工夫や努力 ・自分たち…たくさんの水を消費，水を大切にする意識の低さ ○　水が限られた資源であり，多くの人びとの努力のおかげで手に入るものであることをとらえ，自分たちも水資源を守る必要があることを意識すること ※　子どもたちの日頃の水の使い方と水資源確保の取り組みとの比較	○　福岡市や他地域の人びとは水確保のためにいろいろな取り組みをしたり協力してくれて頑張っているのにぼくたちはどんどん使っている。何かぼくたちにも協力できることはないのかな。

グループどうしで対比する共育を通してオリジナルの変奏曲をつくる音楽科学習

第4学年2・3組　音楽科学習指導案

指導者　有川陽子

題材　「キラキラ星変奏曲」をつくろう!

指導観

○　本題材は，星に関する４場面の話を提示し，それぞれの場面に合うような旋律をグループごとにつくり，それらをつなぎ合わせて「キラキラ星変奏曲」をつくりあげることをねらいとしている。旋律のもととなる「キラキラ星」は，音型もリズムも単純であることから４年生で変奏をつくる楽曲として適している。主な学習内容は，①「キラキラ星変奏曲」をつくるためにグループの表現主題をもとに四分音符や二分音符，八分音符を中心に旋律をつくること②友だちの旋律とのつなぎの部分の強弱を考えたり，旋律楽器や打楽器を選んだり，その正しい奏法を身につけたりすること③それぞれのグループでつくった旋律を聴き合い，表現のよさを確かめ合うことである。

○　本学級の子どもたちは，表現豊かに歌ったり，演奏したりすることができる。しかし，自ら旋律をつくったり，リズムをつくったりする経験はまだ少ない。
そこで，本題材では，４年生として旋律をつくったり，リズムをつくったりするなどの音楽的工夫によって様々な表現があることに気づかせ，音楽をつくる楽しさを味わわせたいと考える。

○　本題材の指導にあたっては，三つの段階を設定する。まず「であう段階」では，「キラキラ星変奏曲」と星に関する４場面の話を提示し，１場面の話に合うようにつくった「キラキラ星」を鑑賞する。そして，表現要素による曲の変化や場面に合う旋律について話し合っていくなかで，変奏していく意欲をもたせる。次に「つくる段階」では，同じ場面を選んだ友だちと「キラキラ星」をもとにした旋律をつくり，場面ごとにつなぎ合わせていく。この際，試していきながら強弱や音色，速さなどについて話し合い，話の感じがよりよく表現できるようにする。最後に「味わう段階」では，場面ごとにそれぞれにつくり上げた旋律をつなぎ合わせて，４つの場面を通した「キラキラ星変奏曲」の演奏をする。このとき，ビデオに撮って全員で鑑賞することで，音楽をつくって表現する楽しさとともに満足感を味わわせたい。

目　標

1　友だちとともに，つくった旋律を比べたり，つなげたりして「キラキラ星変奏曲」をつくって表現する楽しさを味わうことができる。
2　「キラキラ星変奏曲」をつくることで，表現主題をもとに，四分音符，二分音符，八分音符を中心に旋律をつくったり，速さや強弱，音色を変えたりして，表現主題に近づけることができる。

計　画（約７時間）

段階	であう段階（１時間）	つくる段階（５時間）	味わう段階（１時間）
活動と内容	1　「キラキラ星変奏曲」と教師がアレンジした「キラキラ星変奏曲」を鑑賞する。 (1) 感じたことを話し合う。 ○　要素の変化をつかむこと (2) 星の物語の1場面に合った曲を聴く。 ○　表現要素を変え旋律をつくるという課題をもつこと	2　表現主題に合う旋律をつくる。 (1) グループで表現主題に合った旋律をつくる。 ○　「キラキラ星」をもとにリズムを変えて旋律をつくること　② (2) 強弱，音色を工夫して，表現主題に合う表現方法を話し合い演奏する。 本時３／３③ ○　流れにあった強弱を工夫すること	3　つくった「キラキラ星変奏曲」の発表会を開く。 (1) 録画し鑑賞する。 ○　つくって表現することの楽しさを振り返ること (2) つくり上げた曲の演奏のよさを出し合う。 ○　観点をもって評価すること
友だちとともに曲をつくるなかで，友だちの表現のよさを取り入れて変奏曲をつくる文化の学び			
支援	※　教師が話に合わせてアレンジした「キラキラ星変奏曲」の提示	※　表現主題による意図的なグルーピング ※　リズムパターンや奏法のモデル提示 ※　聴き合う活動の設定	※　お互いの工夫を見いだす評価カードの活用 ※　評価を価値づける賞賛
評価規準	●　表現要素の変化による曲の感じの違いを把握している。 ●　曲をつくりたいという意欲をもっている。	●　リズムを変えて旋律をつくっている。 ●　表現主題に合う楽器の選択と正しい奏法をしている。 ●　音を試しながら聴き合っている。	●　演奏の工夫を音楽的観点から評価している。 ●　演奏のよさを根拠をもって発表している。

本時の協働のポイント

似た表現主題のグループどうしで，つくった旋律を聴き合い対比する共育を通して，強弱，音色などを工夫して，自分の表現主題に合う「キラキラ星変奏曲」をつくる。

本時の目標

1　表現主題に合うように話し合い，音を試しながら強弱，音色などを工夫する活動に意欲的に取り組むことができる。

2　強弱，音色をなどを工夫し表現主題に合ったった演奏をすることができる。

準　　備

つくった旋律の拡大楽譜，場面ごとのお話カード，教師がアレンジした楽譜，楽器，学習プリント

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　1つのグループのモデル演奏を聴き，その演奏について工夫している点や，自分たちの演奏の問題点について話し合う。 ○　前時までに工夫した表現方法を参考にして，表現主題が曲に表れるように強弱や音色などを表現をしていこうとする意欲をもつこと （めあて）自分の表したいキラキラ星になっているか 強弱・音色についてきき比べてみよう。 ※　強弱や音色を生かしたり演奏楽器の特徴を生かしたりしているグループのモデル演奏を聴かせ，自分たちのこれまでの演奏について，振り返らせる。 2　グループどうしで聴き比べをしながら，自分たちの表現主題が表されるように変奏曲をつくりかえていく。 (1) グループでペアをつくって，お互いの演奏を聴き比べながら，自分たちの演奏に生かせることを話し合う。 ○　表現主題に合った強弱や音色のよさについて，お互いの楽器の選択や演奏の仕方を参考にすること ※　ペアグループで，強弱や音色に観点をもって聴き合い，今後の自分たちの演奏についての方向性を明らかにさせる。 (2) 再度，自分たちの表現主題に合うように，演奏楽器や強弱のつけ方について話し合いながら，グループでキラキラ星を演奏する。 ○　自分たちの表現主題に合わせて，楽器の音色などの特徴や，演奏の方法について吟味しながら演奏すること ※　演奏楽器として，トライアングルや，タンバリン，カスタネット，小太鼓，スタンドシンバルなどの楽器を提供する。 【予想される子どもの反応】 （Aグループ）「ぼくたちのキラキラ星は，楽しく踊っている星なので，もっとにぎやかな感じの演奏がしたい。」 ⇩ ・楽器の数をもっと増やしていこう。 （Bグループ）「私たちは，静かに宇宙空間を流れる星なので，もっと音が響き合うような演奏がしたいな。」 ⇩ ・音の余韻が残る楽器に変えよう。 3　工夫してつくりかえた変奏曲を紹介し合う。 ○　楽しさ，静かさを表すにも強弱や音色の観点を生かせることに気づくこと ※　表現主題を工夫した観点や見直した観点を説明させて演奏させる。	○　強弱をつけることで話の雰囲気が変わったね。 ○　今日は，赤ちゃん星が仲間に会えるかもしれない場面を考えよう。 ○　うれしい感じは，クレッシェンドを使ったり，フォルテを使ったりするといいだろうね。 ○　3場面の遠くにキラキラ輝いているのに気がついたところは，仲間かもしれないと思っただろうから，うれしさが増えてきた感じを少しずつ強くしていくことで表現したらいいと思うよ。 ○　最後の1フレーズを少しずつ強くしていくといいね。 ○　急いでかけよっている感じを表現するために，だんだん大きくしていくと急いでいる感じがより出ると思うな。 ○　試しの演奏をしてみよう。 ○　急に大きくなっているので，少しずつ大きくしていった方がわくわくしてくる感じが出ていいと思うよ。 ○　4場面は，やっと仲間に会えたのでうれしくてたまらない気持ちを表現したらいいね。 ○　うれしさを大きな音で表すといいと思うな。最後を特に大きくするといいんじゃないかな。 ○　たくさんの仲間と会えたから，楽器を増やしたらどうかな？ ○　1度通して演奏してみるの？どきどきするね。 ○　赤ちゃん星の気持ちが強弱で表現できているね。 ○　曲をつなぐとどんな感じになるか楽しみだな。早くみんなで演奏したいな。

角度当てクイズの解き合いを通して多角形の内角の見つけ出し方を共有する算数科学習

第5学年1組　算数科学習指導案

指導者　田　中　健　悟

単　元　図形の角のひみつを使って角度当てクイズをつくろう

指　導　観

○　本単元は，基本的な図形の簡単な性質を見いだし，その性質を用いて図形を調べたり構成したりすることをねらいとしている。具体的には，三角形の内角の和が180°であることの一般化を図り，そこから四角形などの内角の和を計算を用いて導き出すことである。文化の学びで展開する本単元では，内角の和を求める場面において「角度当てクイズづくり」を教材化する。角度当てクイズづくりとは，図形の中の部分的な角度を他の角度との関わりから導き出す問題づくりのことである。つくったクイズを友達と解き合いながら内角の和の関係や角度の依存関係に着目できるようにする。

○　本学級の子どもたちは，第４学年で，三角形について二等辺三角形と正三角形の定義及びその性質や作図方法について学習してきている。また，角については辺の長さに関係なく，２本の直線の開き具合によって角の形が決まるということを学習してきている。そして，量としての角も取り扱い，分度器を使って角の大きさを測る活動や，角度を計算によって求める活動を行ってきている。しかしながら，三角形や四角形など，その図形の中の一つの角は別の部分の角と一定の関係にあることを理解するまでには至っていない。そこで，図形の中の部分の角度がその他の部分の角度と相補的な関係にあることをとらえさせる本単元は，図形の見方を高める上で大変意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，平面図形の最小単位である三角形の内角の和が180°であることを帰納的に見つけ出し，それ利用して演繹的に多角形の内角の和を求めることができるようにすることをねらいとしている。そのために，まず見いだす段階では，複数の三角形や四角形について内角の和を調べていく。次に試みる段階では，多角形の内角の和についても同じように一定になる決まりがあるのかを調べるとともに，多角形の内角の和を計算で求める一般式を導き出していく。最後に広げる段階では，星形の図形の角度当てクイズを行い，角度の相補的な関係に着目して問題解決する。このように角度の問題づくりを位置づけることで，子どもが主体的に問題事象に関わり，友達との相互作用が旺盛にはたらく学習が展開できるものと考える。

目　　標

1　三角形の内角の和や多角形の内角の和を計算で求め，それを確かめるために実測して調べていく活動に，意欲的に取り組むことができる。

2　複数の三角形の内角を実測して三角形の内角の和が180°であることを帰納的に結論づけたり，多角形の内角の和を三角形に分割して考え演繹的に結論づけたりすることができる。

計　　画（約８時間）

段階	見いだす（２時間）	試みる（２時間）	広げる（４時間）
活動と内容	1　三角形や四角形の内角の和について調べる。 (1) 三角形の３つの角度の和の関係を調べる。　① ○　三角形の内角の和が一定 (2) 四角形の角を調べる。① ○　四角形の内角の和が一定	2　多角形の内角の和について三角形や四角形と同様の関係があるか調べる。 (1) 五角形や六角形の内角の和について調べる。　① ○　五角形や六角形の内角の和が一定 (2) 多角形の内角の和を式に表す。　① ○　多角形の内角の和の一般化	3　角度クイズづくりを行う。 (1) 三角形や四角形の角度当てクイズをつくる。　① ○　内角の和の利用 (2) 星形の角度当てクイズをつくる。　本時２/３③ ○　内角の和の同時利用
	つくった角度クイズを解きい，平面図形の内角の規則性や角度の依存関係に気づいていく文化の学び		
支援	※　追究する複数の図形の提示 ※　複数の三角形や四角形を調べ，一般化を図る場の設定	※　追究する複数の図形の提示を行う。 ※　多角形を様々な三角形に分解して，計算によって内角の和を求める場の設定	※　角度クイズのモデル提　示 ※　モデルの星形の角度クイズの解き方を交流する場の設定
評価規準	●　どんな三角形の場合もその内角の和は180°で，一定していることを，複数の三角形の角について測定した結果から導き出している。	●　どんな多角形の場合もその内角の和が180°の倍数で一定することを，複数の多角形の角の測定から導き出している。 ●　多角形を三角形に分割し，計算で角度が一定であることを導き出している。	●　星形の図形の角度のクイズで，多様な方法で角度を導き出している。 ●　内角の和のきまりを用いて問題をつくっている。

本時の協働のポイント

星形の図形には，これまでに学習した三角形や四角形や五角形が含まれている。それらの内角の和が一定であることを利用して角度当てクイズをつくっていく際，解き合う活動の中で対頂角や補角などを利用した様々な角度の導き出し方があることを共有し，それらの数理を組み合わせた星形の角度の問題づくりをさせたいと考える。

本時の目標

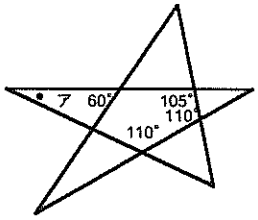
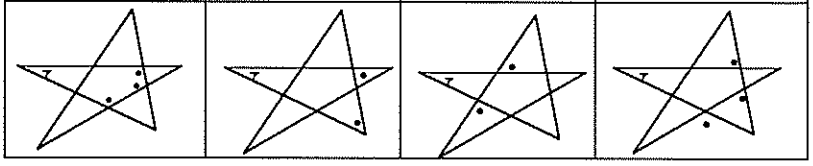
1　これまでに学習してきた三角形や四角形や五角形が含まれている星形の図形の角度当てクイズづくりの活動に意欲的に取り組むことができる。

2　星形の図形の角度当てクイズに示された角度を求める際に，様々な角度の導き出し方があることに気づき，三角形の内角の和や四角形の内角の和に，対頂角や補角を利用し複数の図形の組み合わせによって解を求める角度当てクイズの問題をつくったり，解説書をつくったりすることができる。

準　　備

星形の角度当てクイズの問題の中に角度を書き入れることができるカード，分度器

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　星形の図形の角度当てクイズのモデルの問題を解き，クイズをレベルアップさせることについて話し合う。 ○　自分の作成したクイズと異なるタイプのクイズをつくった友達からクイズ作成のためのヒントを解き合いを通して学ぶ見通しをもつこと （めあて）　星形の図形の角度当てクイズを友達と解き合い，レベルアップさせた角度当てクイズをつくろう。 ※　これまでに学習してきた三角形の内角の和を用いて角度当てクイズの解答を見つけ出すことができる簡単な問題をモデルの問題として提示し解かせることで，難しい問題につくり替えたいという見通しをもたせる。  	○　今日は星形の図形の角度クイズをつくるんだな。おもしろそうだな。 ○　星形の図の中にあるア～オのうちのどれかの角度を求めるんだな。 ○　星形の図形の中に三角形や四角形の形が見えるな。三角形の内側の角の和は180°だったから，残り２つの角度がわかったら求めることができそうだな。 ○　三角形の内角の和を見つけるだけだと問題が簡単すぎるな。ヒントにする角の位置を変えてもっとクイズを難しくできないかな。 ○　ぼくは，ヒントにする角の位置を変えて，すぐに答えが見つからないようにするぞ。 ○　わたしは，四角形の内角の和を使って，それから反対側の角度も使わないとできない問題をつくるぞ。 ○　三角形や四角形の内側の角度で，残りの角度が全部わからなくても，ヒントになっている角度をうまく考えたら面白い問題ができるんだな。 ○　いろいろな導き出し方があるんだな。こっちがわかったら，次にあっちの角度もわかるようになっているんだな。 ○　星形の角度当てクイズは難しそうだけど，難しくて面白い問題ができたな。もっとつくってみたいな。 ○　内側の角度の和がすぐにわからないようにしてつくると，難しいクイズができるな。 ○　反対側の角度や隣の角度を考えて組み合わせると難しくなるな。
2　星形の図形を使った角度当てクイズのモデル問題をヒントに問題をつくり替え，クイズを解き合う。 (1)　星形の図形のモデル問題の求める角度が異なる類似問題をつくる。 ○　星形の図形の角度当てクイズにおいて，内角の和に，対頂角や補角を利用して解の角度を順を追って導き出す問題を作成すること ※　問題をつくらせるのと同時に解と解説（導き出し方）もつくらせる。 内角の和を考えて解く問題 / 補角を考えて解く問題 / 対頂角を考えて解く問題 / 対頂角と補角を考えて解く問題  (2)　モデルの問題の中で，ヒントの数を変化させてつくった類似問題を着目した三角形や四角形が同じ友達や異なる友達と解き合う。 ○　ヒントの角度を手がかりに解答を導き出すとともに，その導き出し方として対頂角や補角を取り入れた多様な解決方法に出合うこと ※　つくったクイズを，星形の中で着眼した図形の相違で交流させる。	
3　友達とクイズの解き合いで交流したことをもとに，星形の角度当てクイズのヒントの数や位置を変化させて，新たなクイズをつくる。 ○　三角形や四角形の内角の和に，対頂角や補角を組み合わせた角度当てクイズを作成し，角度当てクイズを難しくすること ※　角度が変化した星形の図形を提示し，問題をつくる場を設定する。	

異なる意見の友だちと小集団から大集団という形態で対話して，よりよい価値を追求し判断する道徳学習

第5学年2組　道徳学習指導案

指導者　木　下　美　紀

主題名　**危機的な生命？ 仕事としての責任？**

指導観

○　本主題は，生命のかけがえのなさを自覚し，自他の生命を大切にしようとする態度を育てることをねらいとしている。本主題は，高学年３－(2)の内容である。生命は唯一無二の個別性を有している。また，時間的な視点からいえば，祖先から連綿として受け継がれ，後世へと引き継ぐ生命である。さらに，空間的な視点からいえば，家族やその他の人により支えられ生かされる生命である。生命の誕生や死などを考えさせ，生命の尊さを実感させることが大切である。主な内容として，①かけがえのない生命の尊さに気付くこと，②仕事の責任をかけてまで一人の少年を救った主人公の生き方から生命の大切さを理解すること，③自他の生命の視点から力強く生きていく大切さに気付くことである。

○　本学級の子どもたちは，生命は尊いもので大切にしないといけないということは知っている。また，理科の学習では，植物の生命の神秘などについて興味をもって調べている。しかし，自分の生命において考えてみると，自転車に乗ってスピードをあげたり，友だちと危ない場所で遊んだりしている。これらは，生命は大切だと分かっていても，実感を伴った理解にまでは至っていないからだと考える。よって，生命の危機に瀕して懸命に生きる人やそれを助ける主人公の生き方に接して，生命はかけがえのないもの（個別性）で，自他の生命を大切にしようとする心情を実感を伴って自覚させる必要があると考える。

○　本主題の指導にあたっては，主人公や友だちとの共通点や差異点から自分の生命観を吟味し，より高い価値に向けて実践しようとする意欲を高めることをねらっている。そのために，対話活動を小集団から大集団へと位置付け，他者とともに道徳的価値を追求させたい。選択した立場と根拠を対話させることで多様な価値観を拡充させ，共に道徳的価値をとらえ，さらに，自分の中の価値観を再構築させるという共育としての方法論を展開する。具体的な活動としては，第１次で①生命についての気がかりをもたせるため，１枚絵から自分の生命観の傾向性を見る活動②道徳的場面の立場と根拠を表出し，仲間分けする活動，第２次で③小集団から大集団へと交流する活動④道徳的価値を把握するための主人公のよさを追求する活動⑤なりたい自己像を描くために今までの生命観を吟味する活動を設定する。

目　　標

1　主人公の行為や気持ちについて友達との共通点や差異点から，自分の生命に対する行為や心情について振り返り，自分の生命のとらえについて見直していこうとする態度を育てる。

2　資料『手のひらのかぎ』を通して，たった一つのかけがえのない生命の大事さをもとに，自他の生命を守ることの大切さをつかむことができる。

計　　画（約２時間）

段階	第１次（１時間）	第２次（１時間）	第３次(事後)
活動と内容	1　１枚の絵により，自分の生命について見直す。 ○　生命尊重の価値から自分の心を見つめること 2　資料『手のひらのかぎ』の道徳的場面と出合う。 ○　自分の傾向性に気付くこと	2　資料『手のひらのかぎ』を通して，道徳的価値の大切さを感得する。　本時 (1) 立場を決めてその是非について対話活動を通して話し合う。（小→大集団へ） ○　生命の大切さ（個別性）を理解すること (2) 生命尊重の価値から自己を見直す。 ○　自分への自信から未来の自己像を描くこと	3　生命尊重の価値を自分で確かめる。 ○　かけがえのない生命に対して，自他の生命を大切にしようとしているか心のノートで振り返ること
危機に瀕した生命を自ら救うか，任務の遂行かで友達とともによりよい価値（生命尊重）を追求する人間の学び			
支援	※　生命の危機に瀕している絵を提示し，心のものさしで自己評価させる。	※　相対する立場，経験の違い，立場ごとの気持ちの強さを考慮したペアリングによる小集団から大集団の対話活動を設定する。	※　自己の行為を内省するために心のノートを活用させる。
評価規準	●　１枚の絵から，心のものさしを操作し，自分が生命を大事にしているか知りたいという気がかりをもっている。	●　自分の立場からその根拠について，生命尊重という視点，役割責任という視点から根拠について話し合っている。 ●　大切にしたい価値について話し合っている。	●　生命尊重の実践している自分の今の実践状況を心のノートをもとに振り返っている。

本時の協働のポイント

主人公の行為や考えについての異なる立場のペアリングによる小集団での対話活動（共育）で，生命の危機に瀕した少年を自ら助けるか，他者に依頼するか（仕事の遂行）という立場と根拠を出し合い，それぞれの価値について認めたり，考えを付加修正したりする。さらに大集団での対話活動（共育）で，小集団で解決しなかった問題や深めたい問題を交流することでその両方に価値があり，生命尊重という共通性について見いださせる。

本時の目標

1　主人公の行為や気持ちについて自分や友だちの共通点や差異点をもとにした対話活動を通して，自分の生命に対する行為や心情について振り返り，自分の生命と他者の生命のとらえについて見直していこうとする態度を育てる。

2　資料『手のひらのかぎ』を通して，生命はかけがえのないたった一つのものであり，任務の遂行（役割責任）を越えてまで一人の生命を助けることを優先した主人公のよさから，自他の生命を大切にすることについてつかむことができる。

準　　備

場面絵，１枚絵，道徳ノート，対話ノート，対話の進め方カード，付箋紙，心のものさし

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　１枚絵をもとに自分の生命観を振り返り，本時のめあてを確かめる。 ○　自分や人の生命を大切にできているか生命の気がかりをもつこと （めあて）　生命の危機に接したときの主人公の行為や考えについて友だちと話し合って，自分や人の生命について考えよう。 ※　１枚絵（交通事故）をもとに，自分の気持ちや行動を見直させる。	○　私は，自分の生命や人の生命を大切にできているかな。できているときとできていないときがあるな。 ○　生命の大切さを感じる心をもっとふくらませたいな。 ○　生命が危険な少年を救うべきだ。 ○　乗客を待たせるのは無責任では？
2　資料『手のひらのかぎ』をもとに，生命の大切さについて話し合う。 (1) 仕事の責任をかけてまで少年を助けようとした主人公の行為や心情について自分の立場を明らかにし，その根拠について話し合う。 ○　生命を守る立場と，任務を遂行する立場を明らかにし，生命に対する見方・考え方を広げること ※　職業，時代背景，場の状況等を写真やＶＴＲから把握させる。 ※　ペアリング（価値への傾向性や気持ちの強さの違い）の小集団の対話活動を通して，道徳的見方・考え方を広げさせる。 (2) 大集団での交流をもとに生命に対する考え方（自ら救助か，他者に依頼か）について話し合う。 ○　自分の価値への傾向性から友達との共通性についてとらえること ※　ノートの付箋紙の色分けをもとに，全体の対話をして，それぞれの立場の根拠の共通性から道徳的価値のよさに気付かせるようにする。 (3) 資料後半を読み，主人公の生き方から生命の大切さについて話し合う。 ○　価値への傾向性から主人公との共通性をとらえること ※　山本運転手のＶＴＲを視聴させ，自ら少年を救うか，任務の遂行かで迷った心情から，どちらの価値も認め，それを乗り越えた心情について実感を伴って価値を把握させる。（両方の価値の認め＋価値への方向性） (4) 友だちの話をもとに，自分も主人公みたいに自他の生命を大切にした経験について話し合う。 ○　自分の中にも，道徳的価値を見付けること ※　生命尊重に関する作文を紹介し，心のものさしで自分の生命観について自己評価させる。他者の生命ということを視野に入れさせる。	少年の生命 ／ 仕事の責任 ・たった一つの生命が危ない（生命） ／ ・勤務中。バスや乗客を放っては行けない（生命）（責任） ・このままだと取り返しのつかないことになる（自分） ／ ・運転を許されているのは自分だけ（責任） ・会社もお客さんもきっと分かってくれる（責任） ／ ・時間を勝手に遅らせるわけにはいかない（会社が許さない）（責任）（時間） ・時間にも間に合う（時間） ／ ・助手のたまきさんにも迷惑がかかる。（関係性） ・私しかいない（自律） ／ 誰か他の人がやってくれる（他律） ○　生命は大切。だから，助けたいという気持ちはある。誰か他の人に頼んだら仕事としての責任も果たせるのでは？ ○　自分しかいないと思った。このまま放っておけないと思った。 ○　なぜ，自ら少年を助けたのだろうか。うまく時間が間に合わなければ首になっていたかもしれないのに。 ○　たった一つの生命を守りたいという気持ちだった。 ○　山本運転手のようになりたい。 ○　友だちが大けがしたのを助けたことがある。すぐに救急車に運んだ。 ○　これから，自分の生命だけじゃなくて，人の生命のことも考えて生活していきたい。
3　教師の説話をもとに，生命の大切さについて話し合う。 ○　価値の実現に向けて生きていこうという実践意欲を高めていること ※　生命を大切にした教師の話を紹介し，実践意欲を高める。	

ドリブル・パスを駆使して攻めるチームの戦術的な動きをつくりだす体育科学習

第6学年1組　体育科学習指導案

指導者　岩　城　一　磨

単元　つくろう！みんなのフットサル

指導観

○　本単元は，ボールを足で操作しドリブルやパスで運び，ゴールにシュートすることで得点を競い合うボールゲームである。本単元のねらいは，動きや作戦の課題を，作戦ゲームをつくり解決する活動を通して，より高い動きや作戦をつくり出すことができるようにすることである。具体的には，①ルールを単純化したミニ・ゲームを行い，チームの動きの課題をルールや場の工夫から分析的にもつこと，②戦術ゲームをつくり，ゲームに必要な空間的な動きの解決を繰り返し行うこと，③動きや作戦をチームで相互評価し合い，高め合うことが主な内容である。このことは，友達とかかわるなかで自分の動きを振り返り，練習を工夫し，動きを高める子どもを育てる上で意義深い。

○　本学級の子どもたちは，ボールゲームにおいては，チーム内で役割を分担し，協力してゲームを進めたり，ルールや作戦，ゲームの技能について交流したりする姿が見られる。また，ボールをパスでつなぎ，シュートに結びつけることができる子どもも複数見られる。基本的なルールについては，他のボール運動の経験から十分に理解している。しかし，パスを受けるために適当な位置取りをしたり，シュートにつないだりという戦術的な動きは十分ではない。また，子どもたちは，自分のチームの特徴に気付き，攻撃や守備を考え，ゲームを組み立てることができつつある。そこで，文化としてのゲームの戦術づくりとともにゲームの状況に対応する基本的技能も併せて高めていきたい。

○　本単元の指導にあたっては，新たな運動をつくる文化の学びに重点をおき，チームの作戦を支える集団の動きを高める。であう段階では，ミニ・ゲームを行わせ，チームで協力する動きが得点に結びつくことをＶＴＲでつかみ，課題を作戦づくりで具体的に設定できるようにする。次に，ともにつくる段階では，戦術ゲームをつくらせ，ルールや場を工夫しながら，チームの作戦を支える動きを身に付け広げていく。そのために，プレー分析カードに記録し，動きを空間的に広げ，作戦をつくり出す力を身に付ける。最後にあじわう段階では，自己・相互評価させ，チームの動きや作戦の高まりを味わわせる。そのために「６－１フットサル大会」を開き，チームの動きを発揮させ，身に付けた作戦の有効性を実感させる。

目　　標

1　チーム内での役割を分担しプレーしたり，友達と協力して作戦をつくり出したりすることで，他のチームと得点を争い合うフットサルのゲームを楽しむことができる。
2　新たなゲームの体験から，コートや人数を制限したミニ・ゲームで作戦ゲームをつくり，繰り返し練習を工夫することで，戦術的な集団の動きを身に付けゲームに生かすことができる。

計　　画（約９時間）

段階	であう（２時間）	ともにつくる（６時間）	あじわう（１時間）
活動と内容	1　フットサルに出合い，動きや作戦の課題を把握する。 (1) 試しのゲームをする。① ○　フットサルの基本的な動きの分析的なとらえ (2) ミニ・ゲームをする。① ○　作戦をつくり課題の把握	2　繰り返し戦術ゲームをつくり，作戦を支える集団の動きを高める。 (1) 戦術ゲームを用い空間的視点を明確にし，動きを高める。　本時２／３ ○　チームの空間的な動きのとらえ (2) ゲームをしながら動きを広げる。　③ ○　チームでパスを駆使する動きの広がり	3　作戦や課題とした動きの高まりを実感する６－１フットサル大会を行う。 ○　作戦の高まりとそれを支える動きの高まりの評価と学び方を含めた評価による総合的評価
パスを中心としたチームの戦術的な動きやゲームづくりで運動をつくり出す文化の学び			
支援	※　場や人数を限定したり，ＶＴＲの集団の動きを比較したりして課題を把握させる。	※　動きや場をを限定し，戦術ゲームを行い空間的な動きを解決させる。対抗戦を行いチームの作戦をゲームでためす。	※　フットサル大会で総合的に評価させ、作戦・動きの高まりの実感をさせる。
評価規準	●　ミニ・ゲームでチームの動きをとらえたり，ＶＴＲのチームの動きを比較したりしてチーム課題を把握している。	●　戦術ゲームをチームの動きや作戦の課題に応じて友達と協力してつくり，空間的な動きや作戦をつくり出し，実際のゲームで繰り返し試し，いかしている。	●　チームの動きを評価し合って，動きや作戦の高まりや作戦のなかの自分の役割のよさを実感している。

本時の協働のポイント

ゲームの攻撃の作戦をつくるために各自の動きを組み合わせ，チームで共創による戦術ゲームをつくり，繰り返し練習を工夫することで，集団的・空間的な動きを身に付けゲームにいかす。

本時の目標

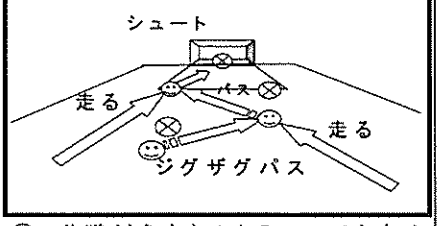
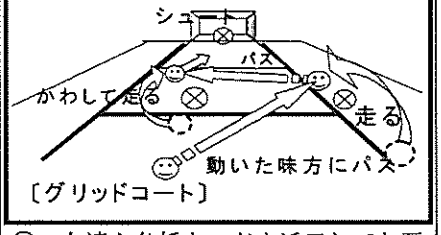
1　友達と協力し，チームの作戦に応じたパスを中心とする攻め，役割分担の守りの動きの課題を場を工夫して練習し，チームの特徴やチームの作戦をいかしてフットサルのゲームを楽しむことができる。

2　作戦の練習をするために戦術ゲームをつくり，ゲームでの相手意識やシュートまでの流れから，作戦を支える動きを空間的な視点でとらえ追究していくことで，空間的なチームの動きを身に付けることができる。

準　備

ボール，ゴールケージ，ビブス，得点板，ストップウォッチ，プレー分析カード，作戦ボード

展　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　チームの動きをもとに今日解決するゲームの課題について話し合う。 (1) チームの動きをとらえ，チームの作戦づくりのポイントを考える。 ○　前時に設定したチームの作戦とシュートまでの動きの想起 ・ＶＴＲ、プレー分析カード，作戦ボードなどによる課題の確認 ※　前時学習の流れ図を提示し，本時の学習での追究内容を確かめる。 (2) ためしのゲーム１を行い，今日のチームのめあてをつかむ。 ○　本時追究するフットサルの学習のめあての把握 （めあて）　チームの作戦をもとに戦術ゲームをつくり，練習を工夫してゲームでたくさん得点しよう。 **【６－１フットサルのルール】** ・シュートが決まった時，センターサークルからキックオフ ・得点は，１ゴール１点　・ゲーム時間は，５分間 ※　ＶＴＲの動きやプレー分析カードから，役割分担しチームで協力する動きやフロアを上手に使った空間的な動きの必要性をつかませる。	○　今日は、目標の達成に向けてチームの課題をもとに練習を工夫し，作戦が成功できるようにしよう。 ○　どんな作戦なら得点できてゲームで勝つことができるのかな。 ○　チームの作戦を成功させるためにはどんな協力をすれば，得点できるようになるのかな。 〔作戦の例〕 
2　作戦をもとに工夫したフロアで練習したり，ゲームでチームプレーを発揮したりする戦術ゲームをつくり，チームの作戦をつくる。 (1) 作戦を成功させるためのチームの動きを調べ，作戦をつくる。 ○　相手を加えた戦術ゲームによる空間的で連続した動きのとらえと新たな作戦，動きの課題の把握 ※　プレー分析カードで動きを振り返らせ，空間的な動きを分析することで相手を加えた場合の戦術ゲームがつくれるようにする。 (2) 交流タイムでチームの動きや作戦の内容・方法を評価する。 ○　作戦を支える空間的で連続した動きの課題の把握 ・相手ありの戦術ゲームでの攻撃プレーの空間的な気付き ・相手の得点を阻む防御プレーの空間的な気付き ・パスをつなぎ、フロアを活用した流れのある作戦やプレー ※　課題の追究・吟味をすすめるために，戦術ゲームのアイデアやチームのプレー分析カード，作戦ボードでの交流タイムを設定する。 (3) フットサルを行い作戦をためし，今日のチームの動きを評価する。 ○　ゲームによる作戦を支えるチームの動きの課題の明確化 ※　交流で気づいた新たな動きを生かして，対抗戦でハーフコートのフットサルのゲーム２を行わせる。	○　作戦が成功するようフロアを広く使った戦術ゲームをつくり繰り返しチームで動きを高めよう。 〔戦術ゲームの例〕  ○　友達と分析カードを活用してお互いに評価しながら課題を決めよう。 ○　△△チームは，フロアを広く使ってパスをつなぐ作戦を考えたのか。 ○　フットサルのプレーの秘密は，パスのつなぎ方やチームで協力して動く作戦にあるのだな。
3　チームの動きや作戦をもとにできるようになった動きを発表する。 ○　作戦やプレーの動きの高まる追究方法や方向性の把握 ※　児童の演示などで交流をもち，チームの課題解決の意欲をもたせる。	○　戦術ゲームを工夫して，空間的な動きのチームプレーを高め，もっと得点できるようになりたいな。

自らの主張につながる材料を吟味し合って，意見文の書き表し方をねりあげていく国語科学習

第6学年2組　国語科学習指導案

指導者　平　川　洋　一

単元　わたしはこう考える～食卓の向こう側～

指導観

○　本単元は，西日本新聞の連載「食卓の向こう側」に掲載されている記事をきっかけに，「食」の在り方についての自らの考えをつくりあげ，意見文を書いて新聞社へ発信しようという目的に具体化し，異なる主題で追究した友だちと内容を吟味し合うことによって，自らの意見文の書き表し方をつくりだしていくことができるようにすることをねらいとしている。具体的には，①「食卓の向こう側」に掲載されている事実や様々な立場の人の考えをもとに，取り組んでいきたい題材を見つけ，自らの考えを支える事実をさぐる取材グループを編成すること，②取材グループで集めた材料をもとに主題を決め，異なる題材で同じ主題のグループで構想をねりあうこと，③構想をもとに意見文に書きまとめ，新聞社に発信していくこと等が主な学習活動である。これらの学習は，「食」という身近で欠かせないものを見つめ，自らの食生活を見直していこうという意識を高めるという点からも意義深いと考える。

○　本学級の子どもたちは，説明的文章を読むことの学習で，筆者が読者に伝えたい内容（要旨）を述べるために，顕著な事例を挙げ，読み手への効果を考えながらその構成を工夫していることを学んできている。そのことをふまえて，書くことの学習においては，必要な材料を集め，事実と意見を区別して書くことの既習経験をもっている。取り上げる話題は身近なものから社会的なものへと，伝えていく相手も広がってきており価値あるものを追究していくことの意義や様々な立場の人と考えを伝え合うことの意義を感じ始めている。

○　本単元の指導にあたっては，まず，つかむ段階で，西日本新聞の連載記事「食卓の向こう側」を読み，その中にある事実や考えをもとに，はじめの意見をつくる。そして自分の意見を支える事実や実態をさらに詳しく調査していくグループを編成し，取材活動を行う。次に，ねりあげる段階では，取材の中で自らの主題を方向付け，同じ題材を扱いながらも主題が異なる者同士で，材料を吟味し合う中で，異なる立場の事実を取り入れ，考えに厚みをもたせる必要感を生み出すようにする。さらに，構成を吟味し合う操作活動を位置付け，自らの考えを支える事実と相反する事実を並べ，起承転結の構成をねりあげていく。そして出来上がった構想をもとに，個による記述とグループによる相互推敲によって，共通理解を図りながら表現を高めていくようにする。最後に，あじわう段階においては，書きまとめた意見文を主題ごとに綴じ合わせて新聞社へと投稿し，具体的な反応をいただくことで，一人一人がそれぞれの役割のなかで表現物をつくり上げた満足感や成就感を味わわせることができるようにする。

目　標

1　生活の中の「食」に関して調査・情報収集する中で明確化した自己の表現主題をもとに，それを支える材料の選択と構成について個とグループで吟味し合う活動を往復させる中で高めていこうとすることができる。

2　選択した材料の構成の在り方を友達と吟味し合うことを通して，相手意識や目的意識に基づいた内容と書き表し方を構想し，意見と意見のつながりがはっきりとした意見文に書きまとめることができる。

計　画（約11時間）

段階	つかむ（2時間）	ねりあげる（7時間）	あじわう（2時間）
活動と内容	1　「食卓の向こう側」の中の事実や考えから，「食」の重要性について話し合う。 ○　「食」に関して追究したい内容を選択すること	2　「食」に関する自らの考えを明確にし，それにつながる材料を取材，選材，構成し，記述，推敲を行う。 ○　情報を収集した材料と構成とを，個とグループで吟味し合うこと　本時5/7	3　新聞社へ，書きまとめた意見文を発信する。 ○　ねりあげた意見への反応から目的達成できた自分へ自信をもつこと
自らの食生活と記事にある事実・意見を見つめ，自らの意見とその書き表し方をつくりあげていく文化の学び			
支援	※　「食卓の向こう側」の提示 ※　取り組んでいく事象例の提示とアンケート結果の提示	※　付箋紙に材料の要点を書き出させ，表現主題に適合しているか，材料とその構成を吟味し合う場を位置付ける。	※　新聞社へ具体的な反応（掲載または，コメントの返信）を依頼する。
評価規準	●　自らの食生活を見つめ，深く追究していく方向を適切に見出している。	●　取り組む事象に関する情報を収集し，表現主題を決め，根拠をもって材料を選択したり効果を考えて構成したりしている。	●　発信した考えと学習前の考えを比べ，高まりや深まりを実感している。

本時の協働のポイント

「食」に関する事実や様々な立場の人の意見をもとにつくりだした自らの意見について，主張していく方向（主題）が異なる友達と材料の妥当性を吟味し合う（共育）ことで，起承転結の「転」の部分に取り入れる材料とそれに再反論する材料を構想し，自らの意見を深まりのあるものへとねりあげていく。

本時の目標

1　「食」に関する事実や様々な人たちの考えにふれる中でつくりだした自らの意見について，表現主題とその材料の構成を友達と吟味し合う活動と個で考える活動とを往復させる中で高めていこうとすることができる。

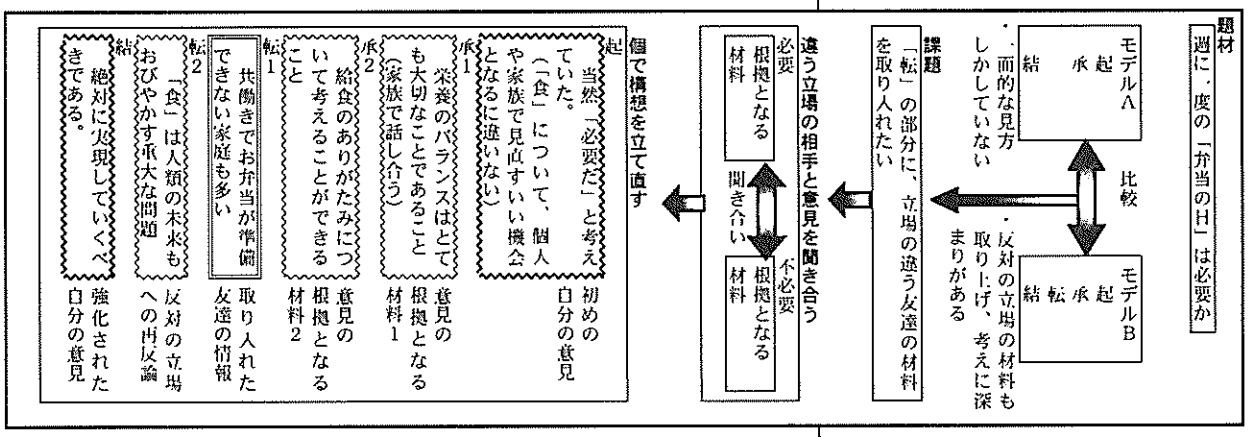
2　同じ題材を扱いながらも違う考えをもつ友達と，表現主題につながる材料を聞き合うことを通して，起承結の構成から起承転結へと高め，読み手への効果を考えた意見文の構想をまとめることができる。

準　　備

付箋紙，学習の流れ図，学習プリント

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　これまでに行ってきた選材・構成をふり返り，「起→承→結モデル」「起→承→転→結モデル」を比べ，どちらのモデルがどうしていいのか話し合い，本時学習のめあてについて考える。 ○　主張する立場（表現主題）の根拠となる材料の全体を見通し，違う立場の友達と材料を選択していく必要感を高めること （めあて）　論題に対する立場が違う友達の根拠とする材料を聞き合い，「転」の部分の構成をつくりかえよう。 ※　前時までに子どもたちが個でつくりあげた構成表の傾向から問題点を事前に把握しておき，違う論題で「転」を取り入れる必要感を高めるモデルを提示し，つくりかえていく観点をつかませる。	○　ぼくは論題について「週一日のお弁当の日」は「必要だ」という考えで構成してきました。 ○　モデルの題材は，「インスタント食品は必要である」か。体に害があるらしいのでぼくは「不必要」だと思います。 ○　そうか，インスタント食品は時代とともに，ずいぶん改善されてきたんだな。 ○　でもやっぱり手作りがいいな。
2　「転」の部分にどんな材料を取り上げるか吟味する。 (1)　違う立場の友達とグループを組んで，根拠とする材料を聞き合う。 ○　友達の最も説得力のある材料を選択して「転」の部分に取り上げ，表現主題をどう深まりのあるものへ変えていくか見直すこと ※　材料を選択していく手順例を，矢印を使った模式図で示す。 (2)　グループでの聞き合いをもとに，個で再反論する材料を考える。 ○　表現主題が読み手に伝わる材料になっているか付箋紙に書き出して考えたり，再取材が必要な材料がないか付箋紙を付加したりすること ※　板書に位置付ける材料カードを色や形を用いたイメージ図として示すことで，読み手へ訴えかけていく効果に気付かせる。	○　反対の立場の意見を聞くと，はじめの考えに深まりが増していいな。 ○　自分の論の中の「転」の部分には共働きでお弁当を準備できない家庭があることを取り入れよう。 ○　それを再反論するためには，最近の「食」の問題が人類の未来にかかわる重要な問題であることを取り入れていこう。 ○　意見がずいぶんと深まったな。



3　本時学習で高まった構想をふり返り，学習プリントに書きまとめる。 ○　前時からの変容とそのわけをまとめること ※　高まった構成と再取材の方向を確認させ，次時学習を展望させる。	○　今日の聞き合いで，反対の立場の友達の材料とその反論までつくることができたぞ。次回はいい意見文が書けそうだ。

トマトを育てる強い目的をもって礫耕栽培に取り組み，互いにかかわり合う生活単元学習

第3・4学年さくら組　生活単元学習指導案

指導者　原　田　敏　男

単元　いしで　そだつの?!　おいしいトマト

指導観

○　さくら組は男子３名，女子３名の計６名から構成されている。これまでの学習において，目的を達成するために友達に意志を伝えたり，要請に応じたりする経験をしてきている。その中で，簡単な言葉や指さしなどで行動を促したり誘ったりするとともに，その働きかけに応じて手伝ったりといった他者とのかかわりが見られつつある。また，集団で活動する際に必要な目的意識を共有し，協力して活動し目的を達成する喜びも味わってきている。

○　本単元は，おいしいトマトを育てたいという願いのもと，ＧＴとかかわりながら礫耕栽培に必要な設備を協力活動で制作して栽培し，収穫して，おいしさを味わうことや願いが達成できた喜びを感じることをねらいとしている。礫耕栽培とは，礫に植え，液肥を与えることで，低農薬でおいしく育てることができるものである。具体的には，①礫耕栽培を見学してトマトを食べ，自分たちもおいしく育てたいという目的のもと，主体的に課題達成に取り組むこと，②礫耕栽培に必要な設備を制作し，トマトを栽培する知識や技能を身に付けること，③友達に栽培に必要な意志を伝えたり，要請に応じたりして栽培活動することなどが主な学習内容である。これらを身に付けることは，課題を達成する力や社会性，栽培に関する知識・技能といった生活をひろげる力をはぐくむ上で意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，ＧＴや友達とやりとりしながらトマトを栽培して収穫し，味わうことをねらいとしている。そのために目的意識を大切にして様々な課題を達成していく活動構成，かかわりを旺盛にするペアの組み方，個に応じた支援の工夫を行う。具体的には，①トマト農家を見学し，試食することで，自分たちもおいしいトマトを育てたいという欲求と意志をもつ“見通す活動”，ペアの友達を中心として，ＧＴとかかわりながら礫耕栽培に必要な設備を制作して，液肥を施し複数種を栽培することで，繰り返しを位置付けた“つくる活動”，トマトを収穫してパーティーを開き，目的達成を喜ぶ“なしとげる活動”という活動構成，②目的を意識して他者とかかわるかどうかの視点によるペアの組み方の工夫，③友達とのやりとりを活発に行わせるためのかかわり方を示したヒントパネルの提示や声かけなどの支援を行う。

目　標

1　礫耕トマトの畑の見学と試食から，自分たちもおいしいトマトを育てたいという目的をもち，ＧＴや友達に意志を伝えたり要請に応じたりして，継続して栽培を行い，目的を達成する喜びを味わうことができる。

2　礫耕トマトの栽培で石を敷き詰めて苗を植えたり，毎日液肥を与えたり，７～８ｍ伸びる苗が折れないように支えを施したり，脇芽欠きをしたりという栽培に関する知識や技能，協力の仕方を身に付けることができる。

計　画（約11時間＋課外）

段階	第１次（４時間）	第２次（５時間＋課外）	第３次（２時間）
活動と内容	1　礫耕栽培を見学し，トマトを試食する。 ○　甘いトマトを育て食べたい欲求をもつこと ○　礫を敷き詰め，液肥を与えるという礫耕栽培の見通しをもつこと	2　ＧＴとのかかわりを通して，トマト苗を植え，液肥を与えて礫耕栽培をする。 (1) 礫を敷き苗を植え覆いをかける。　本時2/2② ○　礫敷きや苗植え，覆いを協力して行うこと (2) 液肥を与え脇芽欠きをし，継続栽培する。③ ○　ＧＴのアドバイスを受け，脇芽欠きや苗支え施肥を友達と協力して行うこと	3　トマトを収穫しパーティーを開く。 ○　人を招き，役割を果たすこと ○　パーティーを開いて，目的達成の喜びを味わうこと
おいしいトマトを育てて食べる目的意識を大切にし，友達と協力して栽培し目的達成して生活をつくる学び			
支援	※　礫耕栽培の見学の設定 ※　育てて食べたいという思いをもたせる試食体験	※　ペアを中心とした複数の制作活動の設定 ※　かかわり具合いに応じたペアの組み方 ※　個に応じたヒント提示や声かけ	※　達成感を味わい，かかわる場の設定 ※　ペアによる加工
評価規準	●　トマトの試食をし，そのおいしさを味わい，自分たちも育てて食べたいと感想を述べている。	●　ペアの友達と協力のもと，互いに意志を伝えたり応じたりしながら，礫を敷き詰めたり苗を植えたり，覆いをしたり，苗支えをしたりして，継続的に栽培をしている。	●　パーティーの役割を果たし，トマトを味わい，目的達成を友達とともに喜んでいる。

本時でのかかわりのポイント

トマトの礫耕栽培に取り組む際に，礫の敷き詰めや，その中への苗植え，礫が乾かないようにするための覆いかぶせなど，協力せざるを得ない課題を設定し，他者へのかかわり方を考慮したペアを組ませて活動させることで，相手に意志を伝えたり，他者からの要請に応じたりしながら，苗植えができると考える。

本時の目標

1　礫耕栽培をするために礫を敷き詰め，苗を植えて，覆いをするといったトマトの苗植えに関する課題のもと，かかわり具合を考慮したペアの友達と協力して，苗植えができる喜びを味わうことができる。

ＡＧ…　友達からの要請に応じて手伝ったり，教師の促しに応じてヒントパネルを見て，友達に手伝ってもらうように意志を伝えたりすること

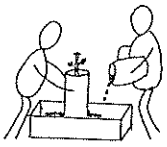
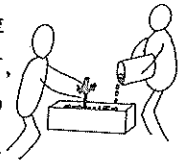
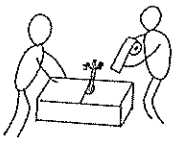
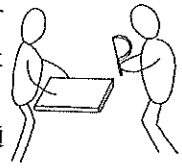
ＢＧ…　友達の苗植えの様子や覆いをかぶせる様子を見て自分から手伝ったり，ヒントパネルを参考にして手伝って欲しいという意志を自分の考えた言葉で友達へ伝えたりすること

2　トマトの礫耕栽培において，ＧＴへの質問や説明をもとに，プランターに礫を敷き詰めたり，その中へ苗を植えたり，礫が乾かないように覆いをかぶせたりなどの仕方がわかる。

準　　備

トマト苗，プランター，礫，覆い，手順パネル，ヒントパネル　など

展　　開

活　動　と　内　容		個の活動を促す支援
1　ＧＴに出会い，トマト苗を植えるための材料を見て，礫耕トマトを育てたいという思いを出し合う。 ○　おいしいトマトを自分たちも育てるというめあてを確認し，本時はトマトの苗をプランターに植える活動であることをとらえること （めあて）　はまちさんと　いしいしトマトを　うえよう。		1　めあてをつかませるための支援 ※　本時に植える苗の提示とトマト栽培の写真の提示 ※　苗植えの必要性についてのＧＴによるアドバイスの設定
2　グループに分かれて，ペアの友達と協力して苗植えをする。		2　友達とかかわりながら活動させるための支援 ※　一人で取り組むには難しく，他者の力添えや手伝いが必要になる活動の設定 ※　友達とのやりとりを生み出すためのペアの組み方 ・他者の気持ちを受け入れて活動するタイプか，自分の主張が強いタイプ・活動の見通しがもちにくいタイプかどうかの視点でのペアの組み方 ※　子どもが自分からＧＴに質問するためのＧＴの巡回的な動き方 ※　友達へのかかわりを促すためのヒントパネルの提示や声かけ BG　困っている状況に応じて，かかわり方を示したヒントパネルを見るよう促す声かけ AG　困っている状況をとらえて，どんなことを伝えればいいのかを明らかにする声かけ
パイプ班（ａ，ｃ児）	ハンド班（ｂ，ｄ，ｅ，ｆ児）	
(1) 苗の入った塩ビ管の回りに礫を敷き詰める。 ○　塩ビ管をまっすぐ支えるように伝えたり，それに応じて塩ビ管をしっかり持ったりすること ○　苗が入った塩ビ管の回りに礫を敷き詰め，塩ビ管を抜き苗が植えられた状態にすること 	(1) 苗が倒れないように，回りに礫を敷き詰める。 ○　苗がまっすぐ立つように，苗の土の部分を支えるように伝え，応じてまっすぐ支えること ○　苗の回りに丁寧に礫を敷き詰めて，苗がまっすぐ立つように植えること 	
(2) 雨水よけのカバーをプランターに取り付ける。 ○　カバーが動かないように押さえておくように伝えたり，それに応じてしっかり押さえたりすること ○　カバーの縁をビニールテープで留めていくこと 	(2) 雨水よけのカバーに穴を開け，プランターに取り付ける。 ○　カバーが動かないように押さえるように伝えたり，テープを貼りやすいよう端を持ったりすること ○　カバーに苗が通る様に穴を開けテープで留めること 	
3　トマト苗を植えた成果を発表し，液肥を与える。 ○　自分たちで苗を植えた達成感を感じ，ＧＴの技術面での賞賛から充実感を味わうこと		3　ペアごとの課題を達成した喜びを味わわせるための支援 ※　ＧＴによる賞賛

学習指導協議会

教育フォーラム

テーマ

これからの教育に求められる教師力

○コメンテーター

教育報道出版社　代表取締役社長　梶浦　真　氏

九州国立博物館　学芸部長　小松大秀　氏

○コーディネーター

本校研究副主任　北田尚雄

第２日目　午前の部
学習指導案

▼ 学 習 指 導（９：１５～１０：００）

学年　組	教科領域等	学び	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年２組	国語科	文化	はなのよさをみつけよう～どうぶつのはな～	光延　正次郎	１年２組教室
２年１組	算数科	文化	チャレンジ！形ゲーム	永尾　健	２年１組教室
２年２組	道徳	人間	きまりはだれのもの？	木下　美紀	２年２組教室
３年１組	算数科	文化	あなあきクイズをつくろう	田中　健悟	３年２組教室
４年１組	理科	文化	ふしぎ発見！体積変化のなぞ！～ぴったり止めようくねくねトンネル～	清水　隆一郎	理科室
５年１組	体育科	文化	チームでつくろう！ロープジャンプ	久保　勝美	附属中体育館
５年２組	文化総合	文化	つくろう！みんなの夢広場～祝！創立130周年記念プロジェクト～	髙良　祐治	子どもスタジオ

▼ 帰国子女学級と通常学級の交流学習指導（９：１５～１０：００）

４年２組 ３組合同	英語活動	Ｈａｖｅ　ａ　ｎｉｃｅ　ｔｒｉｐ！	北田尚雄 セバウンかおり	附属中荒陵館

▼ 障害児教育学習指導（９：１５～１０：００）

ふじ組 さくら組 梅　組	合同生活単元学習	つくろう！はなのハーモニーガーデン	園田　洋一，下川　勝彦 原田　敏男，諏訪原佳子	特殊学級棟中庭

違う読みをしている友達との対話活動で意味を正しく読む国語科学習

第1学年2組　国語科学習指導案

指導者　光延正次郎

単元　はなのよさをみつけよう～どうぶつのはな～

指導観

○　本単元は，かば，はりもぐら，ぞうそれぞれの鼻の特徴とそのよさについて，写真を手がかりにしながら意味を正しく読むことをねらいとしている。具体的には，①動物の鼻の特徴とそのよさを読んで見つけたいという課題をもって，一つ一つの事柄を読むこと，②写真を手がかりにしながら，動物の鼻の特徴とそのよさについて正しく読むことが主な学習内容である。

「どうぶつの鼻」は，話題提示文があり，ページを改めてその説明という展開で繰り返されている。また，文章と写真が照応するようにも構成されている。よって，写真を手がかりにしながら情報を補う読みを展開することができる。こうした学習は，自分の力で意味を正しく読めた自分に自信をもち，楽しんで読書しようとする態度を育てる上からも意義がある学習である。

○　本学級の子どもたちは，好んで読書をすることができる。また，読書の様子を観察すると，絵本や図鑑などに興味を示すことが多くなってきている。そして，その読み方をよく観察してみると，さし絵や写真を追っていったり，説明されている文章を声に出して読んだりしている。しかし，さし絵や写真とことばの読みがバラバラで，ことばとさし絵や写真を結び付けて書かれていることを正しく読むには至っていない。そこで，説明的文章への初めての出合いでもあるので，写真を手がかりにした友達との対話活動で，意味を正しく読むことを重点とする。

○　本単元の指導にあたっては，写真で教材文をふくらませながら正しく読む読み方を身に付け，動物の鼻の特徴とそのよさを実感させたい。そのために，つかむ段階では，動物はみんな同じ鼻だという自分の経験や知識と教材文に位置付けられた３種類の動物の鼻の写真を比較させ，課題「動物の鼻はどうして違うのだろう」を設定する。ふかめる段階では，かば，はりもぐら，ぞうの動物の鼻の特徴とそのよさが，どの文に書かれているか色シールを貼ることにより明確にさせた後，写真を手がかりにしながら，動物の生態にあった鼻の特徴になっていることを正しく読み取らせる。まとめる段階では，他の動物でも同じことが言えるのか課題を発展させ，らくだ(教師自作)の鼻の特徴とそのよさについて書かれた文章に出合わせ，動物の鼻はみんな生態にあった鼻になっていることを実感させたい。

目　標

1　動物の鼻の特徴はどうして違うのだろうという課題をもって，意欲的に「どうぶつのはな」を読み，動物の鼻の特徴とそのよさについて自分が想像したことを進んで話し合うことができる。

2　写真を手がかりにしながら，動物の鼻の特徴とそのよさについて読み取ることができる。

計　画（約９時間）

段階	つかむ（２時間）	つくる（５時間）	見出す（２時間）
活動と内容	1　動物について知っていることや，かば，はりもぐら，ぞうの鼻の写真を比べて気付いたことについて話し合う。 ○　動物の鼻の特徴の違い(よさ)に向かう課題意識をもつこと	2　動物の鼻の特徴とよさを読む。 (1)　かばの鼻を読む。① ○　かばの鼻の特徴とよさを正しく読むこと (2)　かばと比べながらはりもぐらの鼻を読む。② ○　はりもぐらの鼻の特徴とよさを正しく読むこと (3)　かばやはりもぐらと比べながら，ぞうの鼻を読む。　本時２／２② ○　ぞうの鼻の特徴とよさを正しく読むこと	3　らくだの鼻(教材文の説明の順序を生かして教師が自作)の特徴とそのよさについて読む。 ○　他の動物も教材文の３種類の動物と同じだと読むことができた自分に自信をもつこと
写真で教材文をふくらませながら正しく読む読み方を身に付け動物の鼻の特徴とそのよさを実感する文化の学び			
支援	※　子どもたちのもつ動物の情報を分析し，食い違う動物の鼻の情報を提示	※　動物のペープサートを操作させたり，動物が鼻を使い生活している様子の写真を提示したりする情報の付加を行う。	※　教材文の説明の順序を生かして教師が自作したらくだの説明文の活用
評価規準	●　動物の鼻の写真を見てどうして鼻の特徴が違うのかなという疑問を発表している。	●　動物の鼻の特徴とそのよさについて書かれている文に違う色のシールを貼っている。 ●　動物の鼻の特徴とそのよさを，写真とことばを結び付けながら正しく説明している。	●　らくだの動物の鼻の特徴とそのよさを写真とことばを結び付けながら正しく説明している。

本時の協働のポイント

「動物の鼻のよさを見つけよう」という課題意識のもと，「はりもぐらの鼻が優れている」という子どもと「象の鼻が優れている」という違う読みをしている子どもとで読みを共有していく対話活動をすることにより，どちらも自分の生態にあった鼻になっているという読みに変容させていく。

本時の目標

1　動物の鼻のよさをみつけようという課題をもって意欲的に「象の鼻」の段落を読み，象の鼻の特徴とそのよさについて自分が想像したことを進んで話し合うことができる。

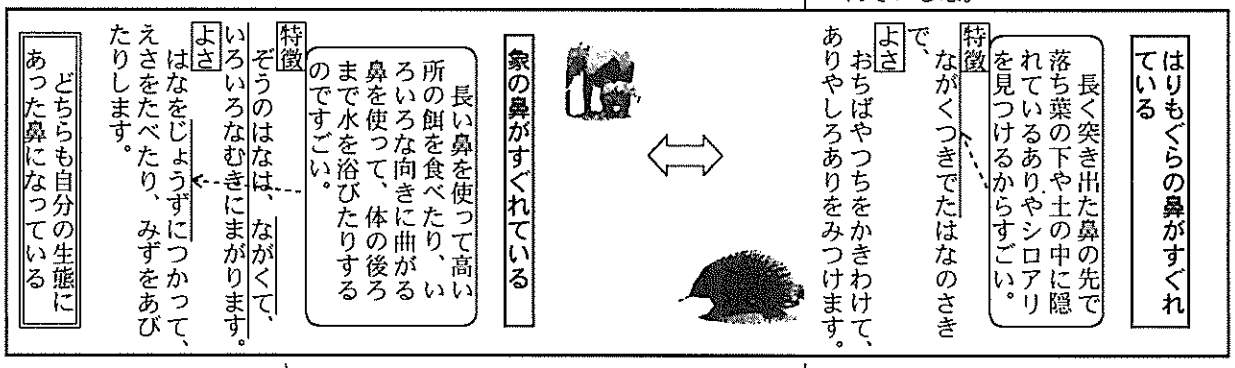
2　写真を手がかりにしながら，象の鼻は象の生態にあった長くていろいろな向きに曲がる鼻になっているということを読み取ることができる。

準　　備

拡大教材文，学習プリント，かば，はりもぐら，象の鼻の写真，象のペープサート，文カード，学習の流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　はりもぐらと象の鼻の写真を比較し，それぞれの鼻の特徴について話し合う。 ○　自分の読みと友達の読みがちがうので，今日は話し合って確かめたいという思いをもつこと （めあて）　はりもぐらの　はなと　ぞうの　はなの　どちらが　すぐれて　いるのか，はなしあって　たしかめよう。 ※　「はりもぐらの鼻が優れている」と思うか「象の鼻がすぐれている」と思うか，黒板にネームプレートを貼らせておき，考えが違うことを確認する。	○　はりもぐらの鼻の方が優れているという友達もいるし，象の鼻の方が優れているという友達もいるな。どちらだろう。 ○　今日は，はりもぐらの鼻と象の鼻のどちらが優れているのか，考えの違う人と話し合って確かめよう。 ○　まず，どの叙述から思ったのか教材文にシールを貼るぞ。
2　はりもぐらと象の鼻の特徴とそのよさの違いを読み取る。 (1)　自分の読みをもとに，どちらの動物の鼻が優れているのか，違う読みをしている友達と対話する。 ○　自分の読みが分かるように順序を考えながら話すこと ※　まず，どの叙述や挿入写真から優れていると思ったのかシールを貼らせる。次に，教師が司会をしながら叙述と挿入写真をもとにフリートーキングで対話させる。 (2)　ペープサートを操作した後，再度，違う読みをしている友達と対話する。 ○　象の鼻の特徴とそのよさを正しく読むこと ※　なぜ，はりもぐらの鼻は長く突き出ていて象の鼻は長くていろいろな向きに曲がるのか，写真を使って生態とを結び付けながら説明させる。	○　次に，先生の司会のもとフリートーキングで対話しよう。 ○　なるほど。はりもぐらは，長く突き出た鼻の先で落ち葉の下や土の中に隠れているありやシロアリを見つけるからすごいな。 ○　でも，長い鼻を使って高い所の餌を食べたり，いろいろな向きに曲がる鼻を使って，体の後ろまで水を浴びたりする象もすごいな。 ○　はりもぐらも象も自分の生態にあった鼻になっているんだ。 ○　はりもぐらの鼻も象の鼻も両方優れているな。



3　象の鼻の特徴とそのよさを表す大事なことばを視写する。 ○　象の鼻の特徴とそのよさを表す一番大事なことばを視写すること ※　「ながくて」「いろいろなむきに」「じょうずに」という言葉を視写させる。	○　象の鼻の特徴は，長くていろいろな向きに曲がることで，それを上手に使って餌を食べたり，水を浴びたりしているんだな。

三角形や四角形をもとにした形ゲームを通してを構成の考えを共有する算数科学習

第2学年1組　算数科学習指導案

指導者　永尾　健

単元　チャレンジ！　形ゲーム

指導観

○　本単元では，ものの形について観察や構成などの活動を通して，図形についての理解の基礎となる経験をいっそう豊かにすることをねらいとしている。具体的には，①いろいろな形をつくったり，分割したりすること，②三角形，四角形などの性質について知り，それらをかいたりつくったりすることがあげられる。そこで，「形ゲーム」を教材化してドットを直線で繋いだり，三角形や四角形を分割したりして，三角形や四角形の構成要素をもとに三角形や四角形を作図する活動を中心に単元を構成する。具体的には，①三角形や四角形に対角線や分割する直線を引いて，三角形や四角形をつくる活動，②たくさんの図形が混在する中から三角形，四角形探しをする活動，③自分で三角形，四角形をつくる活動である。

○　本学級の子どもたちは，箱や粘土でつくった立体図形を用いてものの色，大きさ，位置や材質に関係なく，形の特徴についてとらえる経験をしてきている。しかし，日常生活の中で「さんかく」や「ながしかく」などの言葉を用いているが，位置や向きが変わると，根拠がなく感覚的である。そこで，本単元では，観察や構成などの活動を通して構成の考えやきまりや性質に関する考えをもとに三角形，四角形の意味を理解させ，三角形や四角形の定義を身に付けていくことができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，「形ゲーム」をもとに，三角形や四角形の構成要素に着目して，直線で作図をしたり，分割したりしながら三角形や四角形の定義を定着させたい。

まず，第１次では，ダイヤモンドの形を弁別することによって三角形や四角形の定義を明確にする。次に，第２次では，形ゲームを通して三角形や四角形に線を引いて分割して，三角形や四角形の構成要素について考えさせる。また，三角形や四角形の向きや大きさにとらわれずに，不規則に並んだ三角形や四角形を構成要素に着目して分類する活動を行う。最後に，第３次では，三角形や四角形の構成要素に着目しながら多様な三角形や四角形を作図することができるとともに，形ゲームを行い三角形や四角形の定義について定着を図る。また，三角形や四角形を作図するときに，直線や分割線を効果的に活用して作図する方法について，他者との考えの比較し，よりよい解決の方法を見つけ，論理的に考えることができるようにする。

目　　標

1　三角形と四角形の性質をいかして，三角形や四角形に分割する線を入れながら三角形や四角形を分類するゲームを行い，意欲的に三角形や四角形をつくったりすることができる。

2　形ゲームを通して，三角形や四角形の定義に着目した仲間分けや作図，三角形や四角形の特徴をいかした分割の方法を三角形と四角形の構成要素をもとにして考え，理解することができる。

計　　画（約５時間）

段階	第１次（１時間）	第２次（３時間）	第３次（１時間）
活動と内容	1　三角形と四角形を形づくりながら進める形ゲームを行う中で，三角形と四角形の定義について考える。① ○　三角形や四角形の構成要素の着目して，定義付けを行い理解すること	2　三角形や四角形に線を引いたり，分割したりしながら三角形や四角形の増やし方を考える。 (1) 構成要素をもとに考えてゲームをする。　① ○　構成要素に着目して三，四角形をつくること (2) 三角形や四角形に直線を引いて，分割したりして三角形や四角形をつくる。　本時2／２② ○　構成要素に着目して作図できること	3　構成要素や分割をいかして形づくりゲームを行う。　① ○　ゲームを通して三角形や四角形の構成要素についての習熟を図ること
三角形や四角形の性質をもとに作図や分解を行い，論理的な思考をはぐくむことができる文化の学び			
支援	※　三角形や四角形でできた美しい図形の提示	※　三角形や四角形の定義をいかした三角形や四角形を分解するゲーム場面の設定	※　定義の習熟を図るゲームの設定
評価規準	●　三角形とそうでないものとの差異点に着目し，一つ一つ論理的に定義付けを行い，弁別している。	●　三角形･四角形の定義をいかして作図している。 ●　三角形や四角形の定義に着目して，直線を入れたり，分割したりして多様な見方を行い，類型化して考えをまとめている。	●　多様な図形が混在する中から定義をもとに三角形や四角形の分別をしている。

本時の協働のポイント

図形を分割する直線をかき入れたり，直線の付いた透明シートを重ねて調べたりして三角形や四角形をつくり出すゲームをすれば，お互いが出し合うポイントカードが三角形や四角形の定義にあてはまっているかどうかを見極めるとともに，頂点や辺に着目した直線の引き方のきまりを見い出せるのである。

本時の目標

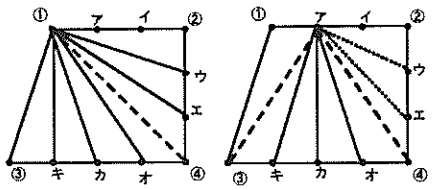
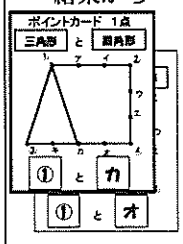
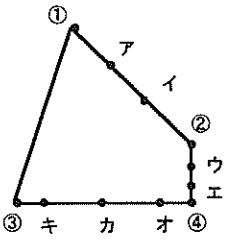
1　四角形に直線を入れて三角形や四角形をつくるために，三角形や四角形の定義を使い三角形や四角形を分割し，楽しんで形ゲームをすることができる。

2　四角形に直線を入れて三角形や四角形をつくるために，四角形の角や頂点の部分に着目した直線のかき入れ方によって，四角形の分割の仕方にきまりがあることを見つけることができる。

準　　備

四角形のついた直線をかき入れるポイントカード，学習カード，学習の流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　前時までの三角形や四角形の定義を活用して，四角形に直線をかき入れ，三角形や四角形に分ける直線のかき入れ方を多様に見つける形づくりゲームについての見通しを話し合う。 ○　形づくりゲームのルールから三角形や四角形のどの部分からどこに向かって直線を引けばいいのか見通しをもつことができること （めあて）形づくりゲームで，線を引いて三角形や四角形を見つけるコツをみつけよう。 ※　三角形や四角形の頂点や辺に着目させ，分割できるポイントを示して学習の見通しをもたせる。	○　今日のゲームは，線を入れて三角形や四角形を増やせばいいようだ。 ○　かどに番号，へりには記号が書いてあるから番号と記号を上手く使い分けて考えよう。 ○　わたしは，一つ一つ確かめながら得点をとっていこう。 ○　三角形や四角形に直線を書き入れるだけで，たくさんの三角形や四角形を増やすことができるよ。
2　四角形への直線のかき入れ方によって三角形や四角形をつくる方法が多様にあることを見い出しながら，四角形に直線をかき入れて分割し，三角形や四角形をつくる形づくりゲームを行う。 (1)　四角形に直線をかき入れて三角形や四角形に分割することができたら，分割した分だけポイントとしてカードを得るゲーム１を行う。 ○　三角形や四角形の定義を考えながら直線を引くとともに，直線を引く始点部分と終点部分に着目しながら直線の引き方がわかること ※　四角形の分割の仕方を確かめながら調べていくことができるように，直線をかき込んだ透明シートを用意し，配布する。 (2)　三角形や四角形を分割の仕方のきまりをもとに，ゲーム２を行う。 ○　直線を引く部分（かど，へり）に着目し三角形や四角形を直線で引き，三角形や四角形の定義を満たした分割ができているかわかること ※　ゲームを通して，相手の出す分割線の引き方やできた形を三角形や四角形の定義をもとに弁別してきまりを見つけさせる。	○　どこから線を引いたら三角形や四角形の分解ができるかなあ。 ○　数の部分と数の部分（かどの部分とかどの部分）を直線で結んだら，三角形が２つできるよ。 ○　こっちは，記号と記号（へりとへり）を直線で結んだら２つの四角形に分けることができるよ。 ○　でも，ただの記号同士を直線で結んでも，三角形と四角形にならずに得点がとれない場合があるよ。 ○　隣のへりの記号へ直線を引いても三角形や四角形はできないから向かい合った記号に直線を引けばいいよ。
【ゲーム１】  直線を引く位置を考えて，三角形や四角形を多様に見つけるゲームをする。 結果から  （番号から記号）三角形と四角形 （番号から番号）三角形が２つ （記号から記号）向かい合う記号に直線を引かないといけない。 【ゲーム２】  違った形の四角形で三角形や四角形を見つける形づくりゲームをする。	
3　三角形や四角形の定義を確かめ，四角形の分割の仕方をまとめる。 ○　三角形や四角形の構成要素がわかり，分割をしてもできること ※　形の違う四角形を使った２回のゲームから，共通性を見出させる。	○　形が違っても三角形や四角形のつくり方は同じことが言えるね。 ○　かどからかど，へりからへりなどいろいろな見方で線が引けるね。

友だちとともにきまりを大切にすることへの弱さや快さをみつめる道徳学習

第2学年2組　道徳学習指導案

指導者　木　下　美　紀

主題名　きまりはだれのもの？

指導観

○　本主題は，約束やきまりの大切さに気付き，進んで守ろうとする態度を育てるものである。本主題は，低学年４－(1)の内容である。公徳とは，社会の一員として考え行動しようとする道徳，また，周りの人々に迷惑をかけず，公共の利益を図ろうとする道徳である。そのため，自分の思いのままに破ることは許されない。社会や集団の一員として，みんなのことを考えようとする意識が，約束やきまりを守ろうとする態度を支える。この主題の主な内容としては①「早くしたい」などという弱さから自分に不都合なきまりを無視してしまう弱さに共感しながらきまりの大切さについて考えること②きまりを守らないと嫌な思いをする人がいることに気付くこと③きまりはみんなのためにあることを考えることである。この主題は，道徳的価値の実現をめざす人間の学びを展開することを可能にするものである。

○　本学級の子どもたちは，学校のきまりは守らなければならないことを知っている。また，休み時間も集団での遊びをする中で簡単なきまりを作って楽しんでいる。しかし，遊びの面白さに夢中になっている時などは，自分に不都合なきまりは無視しがちである。また，自分がきまりを守らないと相手が嫌な気持ちになって楽しく遊べないということまで考えきれていない。これは，遊びに夢中になり，勝敗にこだわったり，「自分さえよければ」という自己中心的な考えが働いていたり，自分と集団とのかかわりにまで見方が広がっていなかったりするためだと考える。

○　本主題の指導にあたっては，主人公や友だちとの共通点や差異点からきまりを守ることに対する弱さや快さからきまりを守ることを大切にしようとする心情を育てることをねらいとしている。そのために，導入段階で，きまりに関する気がかりを生み出すために，１枚絵から遊びのきまりを想起させる。展開前段では，資料『よこはいり』をもとに役割演技や表情図を操作する活動を行い，よこはいりをしてみんなが嫌な顔をしたのを見て，はっとしたぼくの気持ちに共感させる。その後の行為について考えさせ，きまりの大切さを感じることから，規則尊重の価値の大切さを感得させる。その際，友達と多様な考え方を出し合う場を設定する。展開後段では，きまりを守って気持ちよく生活できた子どもを紹介し，自分にも主人公のような規則を守ることを大切にする心があることを自覚させる。終末段階では，教師の説話をもとに実践意欲を高める。このようにきまりを守ることへの弱さや快さを通して，自分の生き方を高める人間の学びとして展開する。

目　　標

1　役割演技を通して，主人公や友だちと比べて共通点や差異点から，「自分だけならいい」「つい気付かずに」などという自己中心的な考えを乗り越え，きまりを守ることを大切にしようとする心情を育てる。

2　資料『よこはいり』を通して，みんなが気持ちよく生活するためにあるきまりを守ることが大切だということをつかむことができる。

計　　画（約１時間）

段階	第１次（事前）	第２次（１時間）	第３次(事後)
活動と内容	1　きまりを守って遊んでいる経験と守らないで遊んだ経験を想起する。 ○　規則尊重の価値から自己の心を見つめること	2　資料『よこはいり』を通して，道徳的価値の大切さを感得する。　本時 ○　きまりを守るとみんなが気持ちよく楽しく遊べることから道徳的価値の大切さを感得すること	3　規則尊重の価値の振り返りをする。 ○　自分がきまりを守っているか心のノートで振り返ること
きまりを守る大切さから友だちとともによりよい価値（規則尊重）を追求する人間の学び			
支援	※　１枚絵（きまりを守っていない絵）を提示し，心のものさしで自己評価させる。	※　主人公の心情に共感できるように動作化を通して話し合わせる。 ※　資料の続きを役割演技で表現させる。	※　自己の行為を内省するために心のノートを活用させる。
評価規準	●　１枚の絵から，心のものさしを操作し，自分がきまりを守っているか気がかりをもって話し合っている。	●　「つい」「自分くらいいい」という気持ちからきまりを無意識に乱している主人公の心情に共感している。 ●　大切にしたい価値について話し合っている。	●　きまりを守って実践している自分の今の実践状況を心のノートをもとに振り返っている。

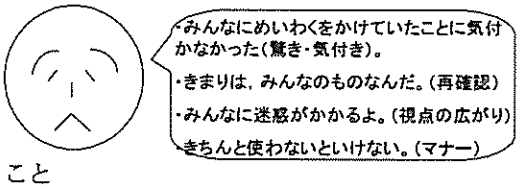
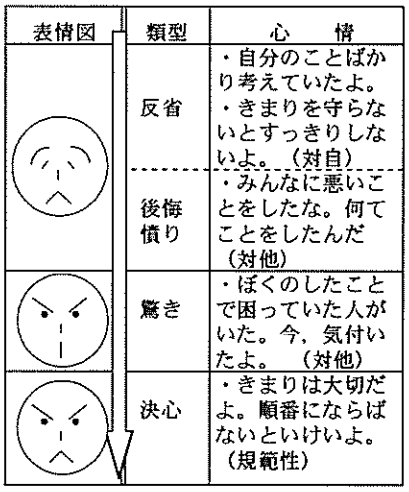
本時の協働のポイント

友だちとの考えの違いを交流することで（共育），きまりの大切さをとらえ，自分を見つめていく次のような2つの役割演技を仕組む。①主人公が自分のした行為について気付く役割演技の場を設定し，その心情について友だちとの共通点や差異点から自分の考えを付加修正していく。②主人公が自分の行為や考えを反省し順番に並ぶきまりの意義を見いだし，守ろうとした役割演技から自分を見直し，よりよい価値を実現しようとする意欲を高める。

準　　備

場面絵，道徳ノート，表情図，心のものさし

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　1枚絵をもとに自分の公共物を使うときの行為や気持ちについて考え本時のめあてについて話し合う。 ○　規則尊重の価値について気がかりをもつこと （めあて）みんなのものを使うとき，大せつな心について考えよう。 ※　1枚絵（公共物）をもとに，自分の気持ちや行動を見直させる。	○　みんなの使う物を私はきちんと使えているかなあ。 ○　遊具にときどききちんと並ばない人がいて，いやな思いをしたことがあるよ。思い出したよ。 ○　みんなできちんと使えるようになりたいな。
2　資料『よこはいり』を読み，規則尊重の大切さについて話し合う。 (1) ならんでいる友達を見付けて入れてもらうぼくの気持ちについて話し合う。 ○　「少しくらいならいい」「自分くらいいい」というぼくの心の弱さに共感すること ※　長い列の中に仲の良い友達を見付けて入れてもらうぼくの役割演技を通して話し合うように助言する。	○　わあ，こんなに並んでいる。大変だなあ。ちょうど，友達のけんじくんがいたよ。入れてもらおう。 ○　みんなさっきから並んで待っていたけれど，知り合いがいるからいいよね。そのまま入ろう。
(2) みんなが嫌な顔をしているのを見て，はっとしたぼくの気持ちについて話し合う。 ○　きまりは，自分だけではなく，他の人も気持ちよくあるためにあることに気付くこと  ※　はっとしたぼくの心情について，表情図（喜怒哀楽がつくれるもの）を操作させ，お面につけて，心内表現させて，共感させる。この表情図の違い（①自分の行為への反省，自分の行為への後悔，憤り，②自分の行為で人が困っていたことに気付いた驚き，③並びなおそうと決心）の3つの類型から，差異点に着目させ，表情図の入れ換えと，役割演技の役割交替できまりを大切にする気持ちについて気付かせる。	 表情図 / 類型 / 心　情 反省：・自分のことばかり考えていたよ。・きまりを守らないとすっきりしないよ。（対自） 後悔 憤り：・みんなに悪いことをしたな。何てことをしたんだ（対他） 驚き：・ぼくのしたことで困っていた人がいた。今，気付いたよ。（対他） 決心：・きまりは大切だよ。順番にならばないといけいよ。（規範性） ○　こんなによこはいりされたらいやだ。この気持ちがとても強いよ。 ○　やっぱり，みんなもきちんと並んでいるのだから，ぼくもきちんと並ばなくちゃ。
(3) その場にいたたまれずに，友達に謝り最後にならびなおそうとしたぼくの気持ちについて話し合う。 ○　きまりを大切にしようとするぼくの気持ちに共感すること ※　その場にいたたまれない心情から，その後の行為や心情についての発問をおこない，その心情（きまりの意義への気付き，迷惑をかけたことへの責任）を考えさせ，役割演技をする中でその心情を追求させる。	○　遊ぶのが遅くなるけれど，きちんと並ぼう。 ○　きまりを守ると，自分も人も気持ちよくなるね。 ○　みんなのためにきまりはある。
(4) 級友や自分自身に，きまりを大切にする心を発見する。 ○　自分や友だちに公共物を大切にする心を見付けること ※　実践できたことを紹介して自己評価させ，自分の心の中にきまりを大切にする心を発見することができるようにする。	○　きまりを守ることは，自分も相手も気持ちがよくなることなんだ。 ○　これからもきまりを守って，気持ちよく生活しよう。
3　教師の説話をもとに規則尊重について話し合う。 ○　教師の説話をもとに感得した価値の実現をめざしていこうとする実践意欲を高めていること ※　実践意欲を高めるために，子どもの様子を紹介する。	

筆算の虫食いクイズの解き合いを通して繰り下がりのしくみを共有する算数科学習

第3学年1組　算数科学習指導案

指導者　田　中　健　悟

単　元　たし算・ひき算の筆算のあなあきクイズをつくろう

指　導　観

○　本単元は，加法及び減法の計算が確実にできるようにし，それらを適切に用いることができるようにすることをねらいとしている。具体的には，①２位数の筆算の仕方と同じように十進位取り記数法の原理を用いて，３位数の加法及び減法の計算の仕方をつくり出すこと，②加法及び減法に関して成り立つ性質を調べ，それを計算の仕方を考えたり計算の確かめをしたりすることに生かすこと，などである。文化の学びで展開する本単元では，加法及び減法の筆算の仕方の理解を深めるために，「たし算・ひき算の筆算虫食いクイズづくり」を教材化する。筆算虫食いクイズづくりとは，筆算の中の所々が穴あきになっており，その穴あきの部分の数値を当てる問題づくりのことである。つくったクイズを友達と解き合う中で，より難しいクイズを作成していき，加数や被加数，答えの数値との関係により着目できるようにする。

○　本学級の子どもたちは，第２学年において２位数までの加法や減法を筆算形式で計算する方法を学習してきている。ここでは，十の位と一の位の数に分け，十進位取り記数法の原理を用いることによって，基本的な計算に立ち戻って考え処理することが可能になることを学習してきている。しかしながら，３位数以上の加法・減法についても十進位取り記数法の原理を用いて，同じように計算処理できることが理解できるようになるまでには至っていない。そこで，３位数の計算方法を取り上げる本単元は，十進位取り記数法のよさを実感し，数値が大きくなっても位の数に着目し基本的な計算方法に帰着させて考えるといった数学的な見方・考え方を育てる上からも意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，十進位取り記数法の原理を大切にしながら問題解決できる力を育てたい。そのために，まず最初に見いだす段階では，３位数の加法を筆算形式で計算処理することを追究する。次に試みる段階では，３位数の減法を筆算形式で計算処理することを追究する。最後に広げる段階では，それまでの３位数の加法や減法の筆算形式の学習を用いて，筆算の虫食いクイズをつくり，逆思考をはたらかせながら問題を解決させる場を設定する。

目　　標

1　２位数の筆算の仕方をもとにして，３位数の加法・減法の計算の仕方とその筆算の仕方をつくり出すことに意欲的に取り組むことができる。

2　位取り記数法の原理を用いる３位数の加法・減法の筆算において，被加数・加数・答えや被減数・減数・答えの３つの数の関係を考え，繰り上がりや繰り下がりの計算を適切に行うことができる。

計　　画（約12時間）

段階	見いだす（４時間）	試みる（４時間）	広げる（４時間）
活動と内容	1　３位数の加法の筆算の仕方をつくり出す。 (1)　３位数の加法で繰り上がりがない時の筆算をつくる。① ○　位毎の数値で計算すること (2)　３位数の加法で繰り上がる場合の筆算をつくる。③ ○　位が上がる場合の処理方法	2　３位数の減法の筆算の仕方をつくり出す。 (1)　３位数の減法で繰り下がりがない時の筆算をつくる。① ○　位毎の数値で計算すること (2)　３位数の減法で繰り下がる場合の筆算をつくる。③ ○　位が下がる場合の処理方法	3　３位数の加法・減法の筆算の虫食いクイズづくりをする。 (1)　３位数の加法の虫食いクイズをつくり解き合う。② ○　複数の数値の関係の把握 (2)　３位数の減法の虫食いクイズをつくり解き合う。**本時２/２②** ○　複数の数値の関係の把握
つくった虫食いクイズを解き合い，繰り上がりや繰り下がりに着目して問題解決する文化の学び			
支援	※　位取り表を用いて，式とドットの図と筆算の３つの異なる数学的な表現様式を対応させる。	※　位取り表を用いて，式とドットの図と筆算の３つの異なる数学的な表現様式を対応させる。	※　モデルの虫食いクイズの提示 ※　作成したクイズの分類表の作成 ※　解き合う人の組み合わせの工夫
評価規準	●　３位数の加法の計算を，位毎の数値に着目し，暗算できる基本的な計算に帰着させて計算処理している。	●　３位数の減法の計算を，位毎の数値に着目し，暗算できる基本的な計算に帰着させて研鑽処理している。	●　被加数・加数・答えの関係や，被減数・減数・答えの関係を捉えて，答えが特定できる条件の問題をつくり出している。

本時の協働のポイント

３位数の減法の虫食いクイズづくりにおいて，より難しい虫食いクイズをつくることができるようにする。そのために，虫食い箇所の個数や位置が異なる児童とのクイズの解き合いを通して交流し，繰り下がりなどに関する友達の考えを共有しながら，新たに繰り下がりが連続するような虫食いづくりをさせたいと考える。

本時の目標

1　これまでに学習してきた３位数の減法についての虫食いクイズづくりを行い，答えが適切に出てくる虫食いクイズになるようにしたり，より難しい虫食いクイズになるようにしたりすることに意欲的に取り組むことができる。

2　３位数のひき算の筆算において，穴あき部分の問題をつくりながら，穴あき部分に当たる数字を特定することができる。

準　　備

つくった筆算の問題の答えを確かめるための電卓，穴あきクイズの問題作成カード

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　モデルの問題をヒントにしながら，３桁のひき算の筆算の虫食いクイズについて話し合う。 ○　３桁のたし算の筆算の場合の虫食いクイズを想起すること （めあて）　□にする部分を決めて，３けたのひき算のひっ算の虫食いクイズをつくろう。 ※　前時のたし算の虫食いクイズを想起させるために，モデルの問題を提示し，問題をつくらせる。	○　前の時間には，３桁のたし算の筆算の虫食いクイズをつくったな。今度は，ひき算の筆算の虫食いクイズをつくるんだな。 ○　虫食いの□は，どこにいくつ置いたらいいんだろう。
2　３桁のひき算の筆算において，モデルの問題をもとに虫食いクイズを考え，そのクイズの問題と解答をつくり解き合う。 (1)　穴あきにする部分を複数考え，３桁のひき算の虫食いクイズの問題と解答をつくる。 ○　「被減数」と「減数」と「答えの数」の３つの数の関係を考えて，３桁の穴あきクイズの問題をつくること ※　穴あきクイズの問題をつくることに加えて，その解説書をつくる場を設定することで，３つの数の関係に着目して穴あき部分の数を特定していることに気づかせる。 (2)　つくった穴あきクイズの問題を友だちと解き合う。 ○　問題を解き合う中で，３つの穴あき部分がどれも各位に一つずつ置いていることを把握すること 穴あきの部分が２つある問題：４９□ − □２８ ＝ ３６７　／　５２６ − ２□４ ＝ ２７□ 穴あきの部分が３つある問題：５３□ − □□８ ＝ １７８　／　７２□ − ３□４ ＝ □３９ ※　つくった問題を複数取り上げる中で，穴あきの部分が最大３つまでの問題ができ，穴あきの位置は様々だけど，各位に１つずつになっている共通点に気づかせる。	○　たし算の筆算の虫食いクイズをつくったときは，あまりたくさん虫食いの部分をつくったら答えを見つけることができなかったな。 ○　僕は，虫食いの部分を２つにした問題をつくったよ。でもあまり難しい問題にはならなかったな。 ○　私は，虫食いの部分を３つにした問題をつくったよ。□の部分が３つまでだったら，答えが見つかる問題がつくれそうだよ。 ○　同じ位のところに□を２つつくると答えの数字がはっきり決めることができないな。答えがたくさんでてきてしまうよ。 ○　それぞれの位に１つずつは□をつくってもよさそうだな。 ○　□は３つまで使えそうだな。 ○　各位に１つだけ□をつくるということを守れば，その場所はどこに決めても，答えが見つかる問題がつくれそうだな。
3　問題を難しくするための方法について，問題を解き合う活動を通して気づいたことを出し合う。 ○　繰り下がりのある問題をつくるためには，被減数や減数にあげている位の数字よりも答えの数字の方を大きくすること ※　穴あきの数が３つで，穴あきの位置も同じ問題を２種類提示し，難しさを比較させる中で，□の穴あきの位置に関係なく，繰り下がりが２回ある問題をつくることによって問題が難しくなることに気づかせる。	○　穴あきの数は３つまでつくっていいことがわかったけれど，繰り下がりがない問題よりも繰り下がりがある問題をつくった方が，さらに難しくなりそうだな。繰り下がりが２回出てくるひき算の筆算を使って，穴あきの部分が３つある問題をつくったら難しい問題になるんだな。

要因の量を操作した結果を他者と検討し，体積変化のきまりをとらえる理科学習

第4学年1組　理科学習指導案

指導者　清水隆一郎

単元　ふしぎ発見!体積変化のなぞ!～ぴったり止めようくねくねトンネル～

指導観

○　本単元は，金属，水及び空気を温めたり冷やしたりして，それらの変化の様子を調べ，金属，水及び空気は温めたり冷やしたりするとそのかさが変わることをとらえることがねらいである。ここでの主な内容は，①金属，水及び空気は，温めると膨張し，冷やすと収縮すること。②かさの変化は，金属，水及び空気で違いがあり，金属は水や空気に比べて変化が小さいことである。ここでは，温度の変化によって動くゼリーに不思議さを感じ，思い通りにゼリーを動かすことで，要因の操作量と変化の関係に着目できる「くねくねトンネル」を提示する。また，自分の考えた，温度操作量による変化を確かめる実験を計画し，追究した結果を他の考えのグループと検討し，温度と体積変化の関係を客観的にとらえることができるようにしたい。

○　本学級の子どもたちは，金属，水及び空気の性質について，学習経験や生活経験をもとに様々な考えをもっている。空気と水の性質については，前単元「とじこめた空気と水」の学習において，閉じこめた空気や水に力を加えると空気は縮み，水は縮まないことをとらえている。一方，日常生活の中では，空気や水は身近にありすぎて，その差異点に着目していることは少なく，「空気と水は生きていく上で必要なものだ。」「２つとも透明で，形がない」など，共通点で性質をとらえていることが多い。金属の性質については，前学年の学習で，金属は電気を通し，鉄は磁石に引きつけられることをとらえている。日常生活の中では，「金属は堅くて丈夫である」という見方をしている。

○　本単元の指導にあたっては，温度の違いによる体積変化の違いを利用した，くねくねトンネルの動くゼリーや色水の観察から温度変化にともなうかさの変化量に疑問や問題をもち，温度とかさの関係を追究し，それらを使っていくことができるようにしたい。そのために，単元の「追究する」段階と「いかす」段階を中心に，相互検討活動を設定する。「追究する」段階では，共通の視点をもち，実験の正確性を高める共通グループでの計画と個人追究，分析の結果をもとに考えを共有する課題別グループでの比較の活動を設定する。「いかす」段階では，見通しをもち新たな対象を追究する共通グループでの活動，結果を共有する課題別グループでの交流を設定していく。

目　標

1　ゼリーや色水の動く量と温度変化に疑問をもち，ゼリーや色水の動く量を予想し，予想を確かめる実験を計画し，温度変化によるかさの変化量のきまりを見出し，金属に対して方法やきまりを適用することができる。

2　金属，水及び空気は，温めたり冷やしたりすると，そのかさが変わり，金属，水及び空気によってその変化に違いがあるという考えをもつことができる。

計　画（約11時間）

段階	出合う（２時間）	追究する（６時間）	いかす（３時間）
活動と内容	1　温度によってゼリーや色水が飛び出すくねくねトンネルを観察し，温度の違いと動き方の量を予想する。 ○　温度とゼリーの動きを関係づけ，温度によるかさの変化に着目すること	2　温度による空気や水のかさの変化を量に着目して調べ，空気と水のかさの変化量の違いをとらえ，きまりを話し合う。 (1)　実験計画を話し合い，実験を行う。④ ○　かさを変化させる方法を考えること (2)　調べた変化を比べる。　2/2本時② ○　空気と水は温度により膨張収縮すること	3　見出した温度によるかさの変化のきまりを使って，金属の変化を実験で確かめ３つを比べる。 ○　空気と水の調べ方やきまりを使って金属を調べきまりを実感すること
空気と水の温度によるかさの変化量，金属の変化量の違いを調べ，体積変化のきまりを見出す文化の学び			
支援	※　勢いよく色水やゼリーが飛び出すくねくねトンネルを提示し操作する場を設定する。	※　予想を数値化できる実験カードを用いた共通Ｇの活動と結果を比較できるデータカードを用いた課題別Ｇの活動を設定する。	※　径の同じガラス管と色水を使った実験器具や金属膨張試験器を準備する。
評価規準	●　動きに関わる要因として，温度を抽出し，温める，もっと温める，冷やす，もっと冷やすについて予想している。	●　共通Ｇの実験計画で，条件に注意して実験したり，結果を数値化したりし，課題別Ｇとの比較で数値化した結果を比較したりして，客観的な分析をしている。	●　今まで調べてきたかさの違いや数値による比較を使い，水や金属に対するきまりをとらえている。

本時の協働のポイント

子どもたちは，空気や水は温めるとかさが増えることを前時の実験でとらえている。本時は冷やしたり，より温めたりした場合の量の変化を共通グループで立てた計画をもとに実験を行い，その結果を課題別グループで比較検討していく。この相互検討活動で互いの考えを共有することで，変化のきまりを客観的にとらえていく。

本時の目標

1　温度を温めたときや冷やしたときの体積の変化に対する予想別の実験を行い，空気や水の体積変化を異なる方法をためしたグループの結果と比較し，変化のきまりを話し合うことができる。

2　自分の予想した温度と変化量の関係を自分の方法で調べ，空気や水は温めるとかさが増え，冷やすとかさが減るというきまりを定性的にとらえ，その変化の度合いは空気と水で違うことをとらえることができる。

準　　備

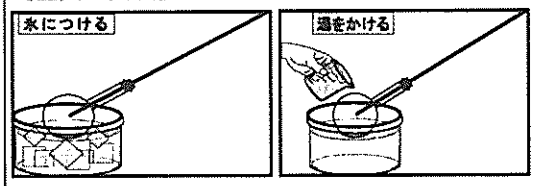
実験計画カード，長さの長いくねくねトンネル，実験データカード，学習の流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　前時までの学習から，温度によって空気や水のかさがどのように変わるのか予想を発表し，本時学習のめあてを設定する。 ○　自分の予想と他者の予想の違いを確かめること （めあて）　自分の予想を確かめる実験を行い，違う方法を試したグループと結果を見直し，温度と体積の変化をまとめよう。 ※　前時に立てた予想グループごとの実験カードを提示する。	○　ゼリーが動くのは，空気のかさが増えているからだ。 ○　たくさん動かすには，温度をもっと高くすればいいよ。 ○　温度を下げると，逆に動くと思うけど，どっちがたくさん動くかな。 ○　自分の考えを証明するために，全員が納得する実験をしたいな。
2　自分の予想をもとに実験を行い，結果を方法の違う課題別グループで比較し，ゼリーや色水の動き方と体積変化について話し合う。 (1) 自分の予想をもとに実験を行い，結果を実験データカードに数値化してまとめる。 ○　変化の数値化に気を付けて実験を行い，結果をまとめること ※　数値化できる実験カードを提示し，温度を調整した水を用意する。	○　やっぱり温度が上がるとたくさんゼリーが動いたよ。 ○　冷やすと逆になったよ。 ○　温度によって変わったけど，色水はどうなったのかな。

空気は温めたり冷やしたりするとたくさん動く　　水の方が温度を変えるとたくさん動く

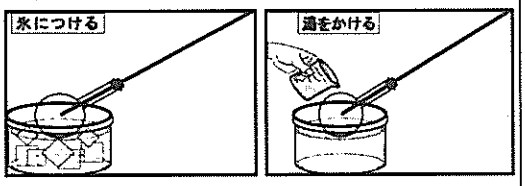
【空気の実験】



○　空気は温度を上げると□cm分ふえて，温度を下げると△cm分減る。

相互検討活動
共通グループで立てた計画をもとにした実験
⇔
課題別グループでの比較

【水の実験】



○　空気は温度を上げると□cm分ふえて，温度を下げると△cm分減る。

(2) 実験データカードに表した結果をもとに，課題別グループでゼリーや色水の動き方のきまりを話し合う。 ○　予想ごとの実験データをもとに，変化の大きさ（温度変化で移動する距離）や違い（移動方向と変化量）をまとめること ※　温度変化を段階的に視覚化し，膨張と収縮，変化量が比較できる実験データカードを提示する。	○　２つを比べると，どちらもゼリーが動いているよ。 ○　温度の変化で見ていくと，動いた距離はだんだん大きくなった。 ○　動き方が逆の場合も動き方のきまりがあてはまるのかな。
3　より大きい温度変化をさせた場合に，かさが変化する事象を観察し，それぞれの事象を要因の変化に着目して説明する。 ○　量が変わった場合でも，きまりがあてはまること ※　より長いガラス管を用意し，熱湯にフラスコを入れ，上からさらに熱湯をかけていき，勢いよくゼリーがガラス管の中を移動する様子を観察させる。	○　温度をさらに上げるともっともっとたくさん動くようになると思う。 ○　温度を上げると，思ったよりもたくさん動いたよ。 ○　増えるだけじゃなくて，温度を下げれば減り方も増えるよ。 ○　温度によって量が変化するんだ。

個人の動きをもとに用具と友だちに対応した集団の動きをチームで生み出す体育科学習

第5学年1組　体育科学習指導案

指導者　久保勝美

単元　チームでつくろう!ロープジャンプ(体つくり運動)

指導観

○　本単元は，小集団でなわなどの用具操作や用具の動きに合わせて跳躍するといった個人の動きをもとに，友だちと動きを合わせて集団の動きを生み出すことをねらっている。主な学習内容は，①なわなどの用具操作，用具や友だちの動きに合わせてタイミングよい身体操作を楽しむこと，②用具や技の種類を選んで組み合わせたり，動きの軌跡やリズムを用具や友だちの動きに応じた変化させてたりして体を動かす発展的で巧みな動きを生み出すことなどである。このことは，基礎的・基本的な動きや他に応じる巧みさ，全身持久力を充実させ，健やかな子どもを育てる上で意義がある。

○　本学級の子どもたちは，なわを使った運動が好きで，技のポイントに着目しながら，２重跳びやハヤブサなどの動きをつくる経験を重ねてきている。特に，なわを使った運動遊びのなかでいろいろな動きを補助したり，矯正したりする用具を変化させながら楽しむ動きの経験を積んできている。しかしながら，安定したリズムで繰り返す用具操作と用具に対応した個人の動きばかりで，友だちの動きに対応して動きのリズムを変えたり，動きを組み合わせたりなどといった集団の動きをつくった経験はほとんどない。

○　本単元の指導にあたっては，これまでに身につけた個人の動きをもとに，４人前後の友だちとともに技の種類やタイミングなど得点化された観点からめざすロープジャンプづくりを楽しませる。そのなかで個人と集団の動き，場づくりの課題を追究し，確かで発展的な用具操作や用具に対応した身体動作とともに課題に合った活動の場をつくり出すことで価値ある動きを生み出していく文化の学びに重点化する。そのために，まず，ロープジャンプを試し，動きと場づくりの課題を設定する。次に，チームの課題に応じて基本となる確かな個人の動きをつくる。そして，なわを中心に輪などの用具操作と用具や友だちに対応する動きを発生・習熟させながらロープジャンプの集団の動きを生み出していく。最後に，生み出したロープジャンプの動きや活動の場，工夫した内容を友だちと交流し、よさを味わわせるとともに，友だちとかかわり合いながら生み出した過程のよさについての認識を確かにさせる。

目　標

1　集団でなわを中心にリボンなどの用具を使い，友だちと動きを合わせるロープジャンプづくりを追究する学習において，友だちとかかわり合いながら場や動きを生み出す活動に意欲をもって取り組むことができる。

2　用具に応じる動きを素早く複雑にし，リズムを変えて友だちに合わせるなどロープジャンプを楽しむ動きをめざして，場や動きを発生・習熟させながら確実で巧みな動きを友だちとともに生み出すことができる。

計　画（約６時間）

段階	であう段階（１時間）	うみだす段階（４時間）	あじわう段階（１時間）
活動と内容	1　現在できる動きでロープジャンプを試し，チームで求めるロープジャンプ像や課題について話し合う。 ○　集団で行うロープジャンプへの興味・関心を高め，課題を設定すること	2　ロープジャンプの個人の役割に応じて場づくりを行いながら個人の動きをつくったり，用具や友だちの動きに対応する集団の動きを生み出したりしながらめざすロープジャンプを追究する。　本時３／４ ○　役割に応じた個人の動きをつくり，友だちの動きと関係づけること	3　ロープジャンプ発表会を開き，生み出した互いのロープダンスの動きや追究過程のよさを味わう。 ○　ロープジャンプづくりにおける過程と結果のよさを味わうこと
友だちとともに１つの作品（ロープジャンプ）を構成する個人や集団の動きを生み出す文化の学び			
支援	※　ロープジャンプを試す活動 ※　動きを評価し，めざすロープジャンプの全体像や役割について話し合う活動の設定	※　基本的な運動課題を追究する活動の設定 ※　めざすロープジャンプ像や活動の場を再構成するなど友だちとかかわり合いながら発展的な運動課題を追究する活動の設定	※　生み出した動きのよさを味わう発表会の設定 ※　学びのよさを明らかにする自己相互評価の場の設定
評価規準	●　ロープジャンプに興味・関心をもっている。 ●　ロープジャンプへの課題を設定している。	●　課題に応じて活動を再構成している。 ●　個人の動きをもとに友だちや用具の複雑で素早い動きに対応して発生・習熟させた集団の動きを生み出している。	●　生み出したロープジャンプの動きを楽しんでいる。 ●　友だちとともに追究したよさを味わっている。

本時の協働のポイント

技の種類やタイミングなど得点化された集団の動きを手がかりにめざすロープジャンプ像をチームで設定し，手の位置が安定した素早いなわ操作や安定した跳躍などの個人の動きをもとに，場づくりや技のポイントを共に創りながら，友だちや用具に対応したロープジャンプの集団の動きをチームで生み出していく。

本時の目標

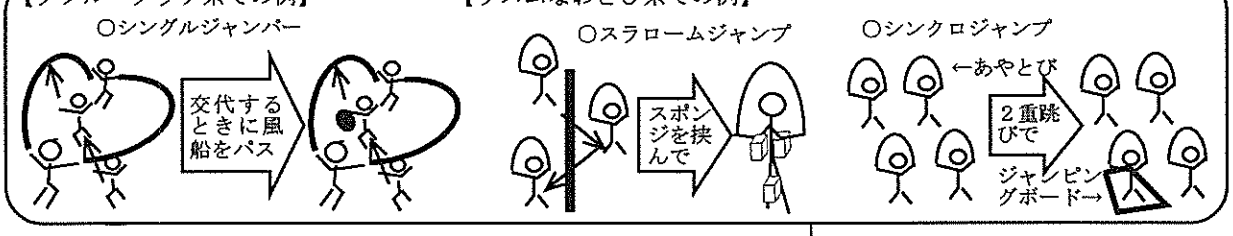
1　めざすロープジャンプを実現するため，なわを中心にボールや輪，スポンジなどの用具や友だちに動きを対応させる発展的な運動課題（集団の動き）を友だちとかかわり合いながら追究する学習に意欲的に取り組むことができる。

2　友だちとかかわり合いながら場や動きを再構成しつつ，なわ操作など安定した個人の動きを高め，友だちや用具の動きに応じて動きを発生・習熟させためざすロープジャンプを楽しむための集団の動きを生み出すことができる。

準　　備

ジャンピングボード，長なわ，輪，スポンジ，リボン，各種とびなわ，鏡，計画書，得点表

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　これまでにつくったロープジャンプのビデオを見て，めざすロープジャンプの姿や追究方法について話し合う。 ○　めざすロープジャンプの姿と自分たちの実態のずれを明らかにするとともに，場づくりや協力の仕方を把握すること （めあて）　タイミングや技の種類の視点から集団の動きをよりよくし，高得点のロープジャンプができるようになろう。 ※　前時までのロープジャンプのモデルビデオをタイミングや組み合わせる技の種類の視点から評価させ，よさとともに課題意識を高める。	○　前の時間よりももっと難しいダブル・ダッチ系のロープジャンプに挑戦してクリアしたいな。みんなで力を合わせてがんばろうね。 ○　□□さんチームは，動きのタイミングがぴったり合っている。シンクロ・ダブル・ダッチだ。 ○　１人１人の技を難しくしてリズムを合わせてできるようになりたい。
2　めざすロープジャンプの動きを生み出すため，タイミングや技の種類から再構成した発展的な課題を場・用具を工夫しながら追究する。 (1)　評価表を手がかりにタイミングや技の種類の視点から自分たちのロープジャンプを再構成し，ロープジャンプの個人の動きをつくる。 ○　ロープジャンプを再構成し，安定した個人の動きをつくること ※　まず，個人がやってみたい個人技を出し合わせる。次に，計画書と得点表，ジャンピングボードやスポンジなどの目標設定と評価機能をもつ用具提示をもとに，自分たちのロープジャンプをタイミング，技の種類の視点から話し合ったり，試したりして再構成する活動を設定する。 (2)　場づくりをしながら再構成したロープジャンプの動きを生み出す。 ○　友だちや用具の動きに応じて集団の動きを発生・習熟させること ※　ジャンピングボードや風船，スポンジなど部分の動きを強調する用具を提示し，動きを対応させる対象の数や技の種類，タイミングなどから場と動きを評価し，再構成を行うことを繰り返しさせながらめざすロープジャンプに必要な集団の動きを生み出す活動を設定する。	【ロープジャンプの規定】 ・１チーム３～６人 ・２分程度の作品 ・より難しい高得点の作品づくり 【ロープジャンプの種類】 《ダブル・ダッチ系》 向かい合った２人が２本の長なわを同時に回し，そのなかで跳躍する。 《リズムなわとび系》 個人技を組み合わせ，他に応じてリズムを変化させて集団で表現する。 ○　動きの発展と評価の観点 ・素早く複雑な軌跡の用具操作 ・繰り返しから組み合わせへ ・より正確な動きの同調 ・空間の広がりと変化 ※　技の難しさと動きの同調時間・人数から得点化し，評価する。
【ダブル・ダッチ系での例】　【リズムなわとび系での例】  	
3　ミニ発表会を開き，生み出したロープジャンプについて話し合う。 ○　友だちとかかわり合いながらジャンプロープを再構成し，生み出した学びと動きのよさを味わうとともに，次時の課題をもつこと ※　ミニ発表会において動きのタイミングや技の種類，場づくり，友だちとのかかわり合いのよさといった評価観点の提示と話し合う活動の設定	○　□□さんチームは，跳ぶ人がジグザグに動いている。次の人の動き出しもそろっているからすごい。 ○　□□さんの動きの変化に合わせて回し方を変えたからできたね。

在校生・卒業生の学校への思いを探り，専門家とかかわり合いながら夢広場を共創する文化総合学習

第5学年2組　文化総合学習指導案

指導者　髙　良　祐　治

単　元　つくろう!みんなの夢広場～祝!創立130周年記念プロジェクト～

指　導　観

○　本単元は，創立130周年の本年に，学校の空きスペースを利用して，自分たちを含めた在校生や卒業生の願いを実現した広場を子どもたちがつくる文化総合学習である。本単元では，在校生の「ゆっくり語り合ったり，給食を食べたりするスペースがほしい」卒業生の「こんな場所が小学生の時にあったらよかった」という思いをリサーチし，環境工学や木工や園芸の専門家とかかわりながら学校環境に適した広場を設計し，施工も主体的に行っていく。この学習の主な学習内容は，①在校生や卒業生の学校への愛着や誇りに共感すること，②自分たちのプランを空間的・人的環境面から妥当性を検証し，夢広場建設を専門家とかかわりながら実現することなどである。このように，他とかかわりながら追究し，思いを実現することは，自信や学校への誇りを高める上でも意義がある。

○　本学級の子どもたちは，福祉の学習で施設の見学や体験を通して，調べる力や調べたことを表現・発信していく力を身に付けてきている。また，子どもたちは，廊下に掲示されている創立100周年の記念写真などを日頃目にしており，本校に長い歴史があることは知っている。自分たちも高学年になり，「学校の役に立ちたい。」という意欲を高めているこの時期に，形として残り，みんなの役に立つものを，学校環境を意識しながらつくる活動を位置付けることは学校文化を尊重する態度をはぐくむ上でも価値があると考える。

○　本単元の指導にあたっては，様々な人々とかかわりながら夢広場建設を実現していく文化の学びで展開する。まず，課題設定の段階では，本校の歴史や学校に残されているものを調べ，多くの卒業生が学校を大切にしてきたことをとらえ，自分たちも130周年という記念すべき年に何か残したいという意欲を高め，空き地と出合い，話し合わせることで課題をつくる。次にリサーチ・プランニングの段階では，在校生，卒業生にリサーチ活動を行い，全体設計を環境工学の専門家とかかわりながらつくり，全校児童や卒業生などに提案し，改善していく。クリエイトの段階では，製作部門，造園部門に分かれ，互いの進行状況を確認し合いながら，それぞれの専門家と一緒に安全な範囲で製作活動に関わっていき，構想から施工まで自分たちがつくったという自信をもたせたい。

目　　標

1　創立130周年の本年に記念の何かを残したいという思いをもとに，在校生や卒業生へのリサーチをふまえた広場設計を行ったり，ＧＴとの交流から広場づくりを実現したりしていくことで，創造的に追究することができる。

2　在校生や卒業生へのリサーチ活動や専門家とかかわりながらのプランニングやクリエイトの活動を通して，人的環境や空間的環境などを考慮しながら学校環境に調和した空間づくりを実現することができる。

計　　画（約25時間）

段階	課題設定（６時間）	リサーチ・プランニング（12時間）	クリエイト（７時間）
活動と内容	1　学校を歴史や環境の視点から調べ空き地との出合いから課題を設定する。 (1)　学校の歴史や環境を調べる。　③ ○　歴史や環境を実感すること (2)　空き地と出合い課題を設定する。　③ ○　広場づくりの願いをもつ	2　夢広場の設計を行う。 (1)　自分たちの理想の広場を設計する。⑥ ○　自分たちの思いを表現すること (2)　プランの検討をする。　本時３／３③ ○　再追究の必要性に気付くこと (3)　再リサーチし，広場を再設計する　③ ○　みんなが納得する設計を行うこと	3　夢広場をつくる。 (1)　専門家と一緒に広場制作を行う。　⑥ ○　学校づくりへの参画意識の向上 (2)　完成祝賀会を開く。① ○　学習をふり返り，自信を深めること
学校の伝統文化をとらえ，新たな文化をつくるために追究，実践していく文化の学び			
支援	※　卒業生へアンケート調査や卒業生から話を聞く場の設定 ※　学校環境調査の実施	※　環境工学の大学の先生との交流 ※　在校生，卒業生や造園の専門家に提案を行い，意見をもらう場の設定	※　安全な範囲で製作活動に積極的に関わっていく場の設定
評価規準	●　歴史の深さや環境の豊かさを実感している発言，ノート ●　歴史に残る広場をつくりたいという課題を設定している。	●　自分の思い，在校生や卒業生の思い，専門的な知識を総合的に取り入れた設計図 ●　人的，空間的環境を考慮し，こだわりをもった広場づくりを提案している。	●　学校の空間づくりに参画する意義をノートに書いている。 ●　学習を通してもった自信をノートに表現している。

本時の協働のポイント

これまで自分たちの理想と卒業生や在校生へのリサーチ活動などをもとにつくってきた夢広場プランについて，「みんなの求めに応じているか」「広場の機能としてどうか」「実現性があるのか」などの観点から再検討する場を，環境工学の大学の先生や他グループとの交流を取り入れながら，グループ単位や全体で設定することで，自他共に納得できる夢広場プランを共創する。

本時の目標

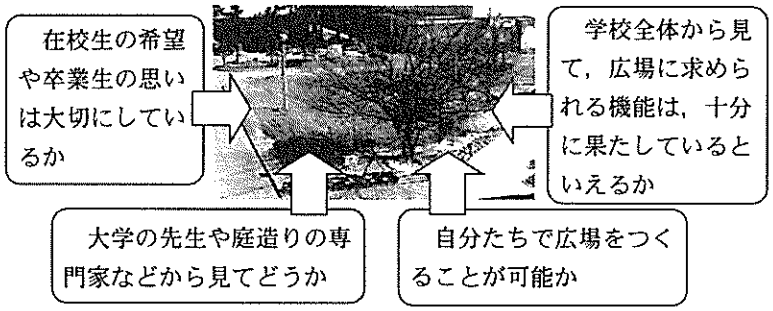
1　130周年記念の広場を，自他共に納得する広場にしたいという思いから，専門家の意見も聞いてみたいという求めをもち，交流することで新たな課題を発見し，再追究への意欲を高めることができる。

2　広場プランを，在校生や卒業生の求め，広場としての機能，専門家から見ての内容，実現性などの観点をもとに，同グループや全体で交流することで見直すことができる。

準　　備

夢広場の設計図　　立体模型　　白地図　　前時までの在校生や卒業生からの意見

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　全校児童や卒業生に提案したときの意見をふり返ったり，各グループの広場の設計図を比較したりする。 ○　自分たちがつくった広場プランを，卒業生や在校生の思いや願い，学校全体の状況から広場に求められる機能，専門的な知見から見て実現可能なものかどうか，などの観点から見直す必要があることに気付き，本時学習の見通しをもつこと （めあて）　よりよい広場にするために，自分たちの広場づくりプランを見直そう。 ※　在校生や卒業生からの要望の提示及び福岡大学環境工学科柴田久助教授の招聘	○　全校のみんなからは，憩いの場として楽しく過ごせるようにするいろいろなアイデアをもらえたね。 ○　前の時間に各グループのプランの発表を聞いたけど，取り入れたいアイデアがいっぱいあったよ。 ○　今まで考えていなかった観点もあったので，自分たちのプランのどこが不十分なのか，どのように変えればいいのか，もう一度話し合って，見直す必要があるね。
2　広場づくりの設計の内容について話し合う。 (1)　他のグループのアイデアを参考に，各グループで話し合う。  ○　複数の観点から広場づくりプランを見直すことで，設計を改善すべき点を見出すこと ※　グループごとに設計内容を見直す場の設定，および，柴田先生と対話できる場の設定 (2)　各グループでの話し合いの成果を全体で交流し，全体で理想の広場プランをつくる。 ○　各グループから出されたプランのよさをどのように取り入れるか検討し，よりよい理想の広場プランをつくること ※　各グループの提案を書きこんでいける，広場の大白地図の提示	○　「ゆっくりと木陰で語り合えるような場所をつくってほしい。」という意見があるのだから，桜の木の下にベンチを置いた方がいいね。 ○　児童玄関からまっすぐ広場に入る場合と運動場から入る場合があるだろうから，入り口は２カ所あった方が喜ばれると思う。 ○　１年間を通じて花がある広場にするためには，年間を見通した栽培計画も必要だね。 ○　他のグループが計画しているように，芝生の広場もつくって，みんなが集まれるようなスペースを取り入れるといいと思う。 ○　全体の組み立ては，△グループのアイデアがいいけど，本当に，卒業生の学校への思いに応えるものになっているのかな。もう一度このアイデアをもって話を聞きたいな。
3　これからの再追究の方向性について話し合う。 ○　これからの再追究の視点を明らかにし，再追究の意欲を高めること ※　解決できていない問題点を発表し合い，今後リサーチしなければならないどのような課題があるのか板書でまとめる。	○　もう一度みんなのアイデアを取り入れて全体の模型をつくってみて，全校のみんなにぼくたちの考えを提案してみる必要があるね。

友達とかかわりながら状況や場面を考えてコミュニケーションを図る英語活動

第4学年2組・3組合同　英語活動指導案

指導者　北　田　尚　雄・セバウンかおり

題　材　**Have a nice trip!**

指　導　観

○　本題材は，擬似的な外国旅行をなかで，英語を媒介として他者とコミュニケーションをとるとともに，外国の文化に対する興味・関心をもつことをねらいとしている。主な内容としては，①友達やALTと自分から進んで英語を使って，意思の疎通を図ろうとすること，②英語における語彙を増やすとともに，発音について気をつけながら聞いたり，話したりすること，③活動の対象となる外国の観光地や食べ物に関心をもって楽しく活動することである。

○　本学級の子どもたちは，これまで「Let's play together!」の題材において，英語を使って歌やリズム遊び，ダンス，福笑いなどのゲームなどをしながら英語に親しんできている。ここでは，帰国子女である３組の子どもたちとともに遊ぶことを通して，英語を用いた会話を行いながら活動することができた。また３組の子どもたちは，第３学年から第６学年までの異学年で構成された帰国子女の子どもたちである。滞在国はアメリカやスペイン，ドイツ，中国など様々であるが，共通して滞在国の言語については，日常会話程度でコミュニケーションをとることができる。またそれぞれの国において何らかの文化的な影響を受け，日本に帰国し今に至っている現状である。そのような子どもたち同士が，英語を媒介として外国文化についてコミュニケーションを図っていくことは，これからの国際人を育てる上で価値があると考える。

○　本題材の指導にあたっては，英語を使って楽しみながら友達とコミュニケーションを図れるようにしていきたい。そこで導入段階では，英語に慣れ親しむとともに本題材で用いる観光地の場所や食べ物などの英単語を習得させる。そのために，それらの言葉を用いたゲームを設定する。次に展開段階では，外国旅行に行く際の基本的な英会話を使って，トラベルゲームをする。そのために，「出国手続」での会話や，外国のお店での買い物や依頼などの言葉を３組の子どもたちを相手に使えるようにする。最後に終末段階では，これまでに使ったvocabularyを効果的に用いながら，会話し，それぞれ自分が行ってみたい観光地の場所や，食べてみたい食べ物のカードを集める外国旅行カードゲームを行い，英語を使って友達と会話できるようにさせていきたい。

目　　標

1　英語を使いながら，HLT,ALTの先生や友達とコミュニケーションを積極的に図り，自分の思いに合ったカードを選んでそのやりとりをすることができる。

2　場面に応じて，「What would you like to go?」「I'd like to go to～.」などの構文を用いたり，行く先やカードをやりとりするときの会話などの英単語を理解して，進んで用いることができる。

計　　画（約６時間）

段階	第１次（２時間）	第２次（２時間）	第３次（２時間）
活動と内容	1　「Where would you like to go?」「I'd like to go to～.」構文を用いて，国名ビンゴやカルタ遊びをする。　② ○　英語を使って活動していく関心や意欲をもつとともに，英語で会話することを楽しむこと	2　「What would you like to eat?」や「Can I have～please.」などの構文を用いながらゲームをして遊ぶ。　② ○　カード集めの言語材料を積極的に使い，ALTや友達とコミュニケーションをとりながら活動すること ・外国のsightseeingやfoodのカードを集めたりカルタ遊びをしたりする。	3　これまで学んだ英語を使って，外国旅行カード集めゲームをする。　本時２/２② ○　これまでに身に付けた言語材料を積極的に使いながら，ALTや友達とコミュニケーションをとりながら活動すること
英語を媒介として，グループの友達と会話しながら外国文化のカードを集めていく文化の学び			
支援	※　歌やチャンツなどで英語に親しめるようにする。 ※　新たな英単語は，繰り返し聞く話すができるようにする。	※　カード集めゲームは「Go fish!」でグループ対抗戦をさせる。 ※　３組の子どもたちの滞在国の観光地や食べ物をカード化して配布する。	※　出国ゲートや各国のブースなどを設置した場の準備 ※　旅行者側と各国滞在者のグループ役割分担
評価規準	●　自分から英語の歌を歌ったりやダンスを踊ったりする。 ●　国名の名前を英語で発語している。	●　英語を使って，自分から進んで友達にかかわりカードを集めている。 ●　観光地や食べ物のカードを集めて，自分の好きなものを選択している。	●　グループの友達と出国手続きをしたり，各国のブースを楽しく回ったりして，英語を使ってカードを集めている。

本時の協働のポイント

本時は，これまで身に付けた英語を媒介として，友達とコミュニケーションを図っていく活動が中心となる。そこで，帰国子女である３組の子どもたちの発音やジェスチャーなどから共育しながら，グルーピングや役割分担をし，活動を進めていくようにさせていくことがポイントとなる。

本時の目標

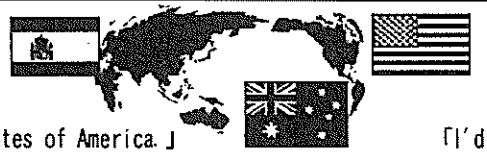
1　これまでに身に付けた，英単語や構文を用いて，自ら積極的にALTやHRT，友達と英語でコミュニケーションをとりながら，歌を歌ったりゲームをしたりすることができる。

2　外国の観光地や食べ物のカード集めの外国旅行ゲームを通して，「What would you like to ～?」「I'd like to ～.」などの構文や各国の観光地のカードや，directionの言語材料を場面に応じて使うことができる。

準　　備

各国の観光地や食べ物のカード，出入国手続きや各国のブース，パスポート

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　これまでに身に付けた「Where would you like to go?」や「What would you like to see?」「I'd like to go to ～.」「I'd like to see ～.」などの構文を使って話したり，ナンバーズや歌を歌ったりして本時活動のウォーミングアップをする。 ○　これまでの英語活動をふり返り，身に付けた言語材料を確認するとともに，本時の英語活動の意欲をもつこと (Today's Topic)　Let's　see　the　world ! ※　英語活動を始める雰囲気をつくるため，ALTがリードしながら本時用いる英単語などの発音練習やあいさつの活動を設定	○　前の時間は，「Where would you like to go?」や「What would you like to see?」などの構文を使って会話したりカードを集めたりしたな。 ○　今日は，グループの友達といっしょにいろいろな国に行ってみて，英語を使いながら，３組の常駐員の友達や先生と会話して，観光地や食べ物のカードを集めて回ろう。
2　出国手続きをして，各国のブースに旅行し，それぞれの国の観光地や食べ物のカードを集めて遊ぶ。 (1) 各グループに分かれて，お互いに挨拶や自己紹介をしながら，出国手続きをする。 ○　出国手続きの基本構文を用いていくとともに，HelloやThank youなどのコミュニケーションをとっていくためのボキャブラリイを用いて遊ぶこと ※　３組の子どもたちに出国管理官や各国のブースの常駐員の役を，２組の子どもたちに旅行者に役割分担して旅行開始させる。 (2) 各国のブースに行って，それぞれの国の観光地や食べ物のカードの中から，自分が行きたいところや，食べてみたいもののカードを選んで集める。 ○　グループの成員とともに，英語でお互いに声を掛け合いながらそれぞれ好きなカードを集めて遊ぶこと ※　一つの国において，食べ物や観光地のカードをパスポートに貼ったら日本に帰国し，再度出国して，別の国のブースへ旅行させる。	○　出国手続きでは，「I'd like to go to ～.」の他に，「Hello」や「Thank you.」「How are you?」などのあいさつもやっていこう。 ○　グループで話し合って，自分たちが旅行してみたい国を選んで，観光地や食べ物のカードをたくさん集めてこよう。 ○　ぼくは，アメリカの自由の女神を見に行ってみたいな。 ○　わたしは，スペインのパエリアという料理を食べてみたい。これを英語で伝えるにはどのように言えばいいか，３組の友達に聞いてみよう。 ○　３組の友達の発音がいいから，よく聞いて自分も言ってみよう。
○出国手続きから各国へ 「Where would you like to go?」 ⇩ 「I'd like to go to United States of America.」  ・USA編 「What would you like to see?」 ⇩ 「I'd like to see Statue of Liberty.」	
3　それぞれグループで集めたカードの中で，どの観光地や食べ物が人気があったかを発表する。 ○　観光地や食べ物のvocabularyを繰り返し確かめること ※　人気のあった観光地や食べ物は，３組の子どもたちに発表させ，発音やイントネーションのヒントにさせる。	○　アメリカ合衆国では，人気があった食べ物は，ハンバーガーでした。 ○　ALTの先生の指示に合わせて，今日ならった英単語や構文をしっかり発音していこう。

花壇をつくる目的をもち，ペアでかかわりながら花壇をつくる合同生活単元学習

ふじ・さくら・梅組　合同生活単元学習指導案

指導者　園田洋一　下川勝彦
原田敏男　諏訪原佳子

単元　つくろう！　はなのハーモニーガーデン

指導観

○　ふじ・さくら・梅組の子どもたちは19名で構成されている。これまでの合同学習において，異学年の友達に意志を伝えたり，要請に応じたりする経験をしてきている。その中で，上級生が下級生に短い言葉や態度で行動を促したり誘ったりするとともに，下級生は働きかけに応じて返事をしたり行動したりといった異学年間での他者とのかかわりが見られつつある。また，集団で活動する際に必要な目的意識を共有したり，力を合わせて活動したり，分担した役割を果たしたりすることも身に付けつつある。

○　本単元は，友達とやりとりしながら五線の形のラティスや音符型のプランターを作り飾ること，役割を分担して，そのお披露目会をすることをねらいとしている。具体的には，①手作りの花壇の見学から，学校を花できれいにしたいという目的のもと，主体的に課題解決に取り組むこと，②ガーデンづくりにかかわる栽培や制作，お披露目会での演奏などに関する知識や技能を身に付けること，③意志を伝えたり（ＢＧ），要請に応じたり（ＡＧ）しながら活動することなどが主な学習内容である。これらを身に付けることは，課題達成の力や社会性，生活にいきる知識・技能といった生活をひろげる力をはぐくむ上で意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，友達とやりとりしながらハーモニーガーデンをつくり，お披露目会をすることをねらいとしている。そのために，目的意識を大切にして様々な課題を達成していく活動構成，かかわりを旺盛にするペアの組み方，個に応じた支援の工夫を行う。具体的には，①手作り花壇の見学とＧＴの話を聞く“見通す活動”，アドバイスを受け五線ラティスや音符プランターをつくり，お披露目会の準備や役割分担をする“つくる活動”，関係者を招いてガーデンのお披露目会をし目的達成を喜ぶ“なしとげる活動”という活動構成，②目的を意識して他者とかかわるかどうかの視点による異学年ペアの組み方の工夫，③友達とのやりとりを活発に行わせるためのかかわり方を示したヒントパネルの提示や声かけなどの支援を行う。

目　標

1　手作り花壇の見学を通して学校にハーモニーガーデンをつくって祝うという目的をもち，友達に意志を伝えたり友達からの要請に応じたりして目的を達成する喜びを味わうことができる。

2　ハーモニーガーデンづくりを通して，音符の形をしたプランターをつくり花を植えること，竹を使って五線紙状のラティスをつくり音楽を構成するようにプランターを配置すること，お披露目会を役割分担して行うことなどの植物栽培や制作に関する知識や技能，協力の仕方を身に付けることができる。

計　画（約11時間）

段	第１次（５時間）	第２次（５時間）	第３次（１時間）
活動と内容	1　見学に行き，花で飾る見通しと目的をもつ。 ○　手作り花壇の見学とＧＴの話から意欲をもつこと ○　場を共有している中学校の教師・生徒にガーデンをつくる許可を得ること	2　ガーデンをつくり，披露の準備をする。 (1) ハーモニーガーデンの部品をつくり組み合わせて完成する。　本時2/4④ ○　竹や金具を組み合わせるために要請したり，応じたりすること (2) お披露目会の準備をする。　① ○　司会や演奏の役割分担を行うこと	3　ガーデンを完成させ，お披露目会を開く。 ○　中学の教師や生徒を招待し賞賛を受けること ○　音符のメロディーを演奏して，目的達成を味わうこと
ハーモニーガーデンをつくる目的意識を大切にし，友達と協力して制作し生活をつくる学び			
支援	※　感動を伴う花壇の見学 ※　花づくりをしているＧＴの話を聞く場の設定	※　ペアを中心とした制作活動の設定 ※　かかわり具合いに応じたペアの組み方 ※　個に応じたヒントや声かけの支援	※　達成感を味わわせるためのお披露目会の設定 ※　中学生からの賞賛
評価規準	●　手作り花壇のきれいさを見学から感じ，ＧＴの話を真剣に聞き，ガーデンを作りたいと発言している。	●　自分のグループの課題に基づいて，ペアの友達と協力しながら，材料を集めたり，材料をもとに鉢植えをつくったりし，お披露目会の分担を引き受けている。	●　飾ったメロディーを演奏し中学校の教師・生徒からの賞賛を受け，目的達成を友達とともに喜んでいる。

本時でのかかわりのポイント

五線紙状に飾るために竹を横に渡して固定したり楽譜記号になるように蔓を形作って飾ったり，音符型のプランターをつくったりするときに，目的を意識して他者へ働きかけるかどうかを考慮した高・低学年や中学年同士によるペアの組み方や，ヒントパネルや，声かけにより，意志を伝え合いながらガーデンを制作できると考える。

本時の目標

1　ハーモニーガーデンをつくろうという課題のもと，音符型プランターづくり，楽譜記号づくり，五線紙づくりの３つのグループに分かれ，ペアの友達と力を合わせて，それぞれの課題を達成する喜びを味わうことができる。

ＡＧ…ペアの友達から支えたり強く押さえたりして欲しいとの要請に応えて活動しやすいように手伝うこと

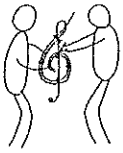
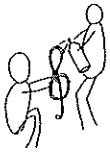
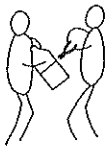
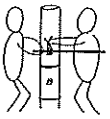
ＢＧ…固定したり切ったりする活動において，動かないように支えたり強く押さえたりしてもらうように，ペアの友達に要請すること

2　楽譜に見立てるための蔓による楽譜記号づくり，ペットボトルによる音符プランターづくり，支柱となる孟宗竹に金具を取り付け真竹を渡す五線づくりにおいて，ペットボトルを切ったりペンチで針金を巻き付けたり，竹に金具を取り付けたりしてハーモニーガーデンの作り方を身に付けることができる。

準　　備

ペットボトル，はさみ，蔓，針金，ペンチ，ペイントスプレー，真竹，孟宗竹，計画表，手順パネル，ヒントパネル

展　　開

活　動　と　内　容			個の活動を促す支援
1　計画表や材料を見て，ガーデンの部品をつくることを発表する。 ○　グループの課題を理解し，五線紙状のラティスや音符プランター，楽譜記号をつくる意識をもつこと （めあて）　がくふの　ハーモニーガーデンを　つくろう。			1　めあてをつかませるための支援 ※　中庭の写真に五線や記号を貼り楽譜を作るイメージをもたせること ※　ＧＴによる制作上のアドバイス
2　グループに分かれて，ペアの友達と協力して制作課題に取り組む。			2　友達とかかわりながら活動させるための支援 ※　他者の力添えや手伝いが必要になる活動の設定 ※　子どもの制作技能を考慮した制作課題の設定 ※　友達とのやりとりを生み出すためのペアの組み方 ・目的を意識して他者とかかわれるかどうかの視点による高低学年，中学年同士のペアの組み方 ※　やりとりを詳しくさせるために，押さえる場所や切る場所を示した材料へのマーキング ※　友達へのかかわりを促すためのヒントパネルの提示や声かけ BG　困っている状況に応じて，かかわり方を示したヒントパネルを見るように促す声かけ AG　要請された状況をとらえて，どんなことをすればいいのかを示範すること
記号グループ	音符グループ	五線グループ	
(1) 蔓を楽譜記号の形に針金で固定する。 BG　蔓の交点を押さえるよう要請すること AG　要請に応じて交点を押さえること ○　蔓を記号状に形作り針金で留めること  (2) 形作った記号に色を塗る。 ○　着色しやすいように蔓を動かすことを要請したり応じたりすること ○　蔓にスプレーで色を塗ること 	(1) ペットボトルをはさみで切り分ける。 BG　まっすぐ持つように要請すること AG　要請に応じ，切りやすいよう持つこと ○　はさみでペットボトルを切ること  (2) 縦棒を取り付け，穴を開ける。 ○　ペットボトルを支えるように要請したり応じたりすること ○　かけられるように穴を２カ所開けること 	(1) 孟宗竹に真竹を通す金具を付ける。 BG　竹が動かないように要請すること AG　要請に応じ，竹が動かないように支えること ○　竹に等間隔で金具を付けること (2) ５本の真竹を孟宗竹の金具に渡す。 ○　孟宗竹を支えるように要請したり応じたりすること ○　孟宗竹に５本の真竹をくくること 	
3　それぞれのグループの活動の成果を組み合わせて，ハーモニーガーデンを一部完成させる。 ○　自分たちの手でハーモニーガーデンの一部を完成させた達成感を味わうこと			3　グループの課題を達成した喜びを味わわせるための支援 ※　それぞれのグループの代表児童による成果の組み合わせの活動の設定

全 体 会 (2日目)

▼ あ い さ つ(10：20～10：35)

初等教育研究部委員長

校 長　永 江 誠 司

▼ 教科等発表(11：05～11：25)

・自ら科学的に追究する理科学習

－考えの客観性を高める

相互検討活動による学習の展開－

理科部　清 水 隆一郎

▼ 主 題 発 表(10：35～11：05)

・豊かに生きる子どもをはぐくむ

教育課程の創造

－協働を中核とした学習の展開－

研究副主任　北 田 尚 雄

▼ 教科等発表(11：25～11：45)

・家族とかかわりながら生活を見直す

家庭科学習

－食生活を科学的に追究する活動の展開－

家庭科部　脇 本 孝 枝

▼ 児 童 発 表(11：45～12：00)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者　有 川 陽 子

第２日目　午後の部
学習指導案

▼　学習指導（１３：００～１３：４５）

学年　組	教科領域等	学び	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年１組	生活科	生活	おおきくそだてよう！こころをこめたはなのおくりもの	塚本正典	1年1組教室ワークスペース
３年２組	社会科	文化	発見！スーパーマーケットのひみつ	髙瀬雄大	３年２組教室
４年２組	国語科	文化	発信しよう～すてきな附属福岡小学校～	平川洋一	４年１組教室
６年１組	国語科	文化	わたしがとらえた筆者の考え！！～あなたはどう考える？～	平島健二	６年１組教室
６年２組	理科	文化	追究しよう！ものの燃焼と空気の変化	今泉伸一郎	理科室

▼　帰国子女教育学習指導（１３：００～１３：４５）

３～６年 ３組合同	国際交流タイム （総合）	世界の主食調査隊	脇本孝枝 清水隆一郎 永尾健	子どもスタジオ

▼　障害児教育学習指導（１３：００～１３：４５）

3・4年さくら組	国語科	つたえよう！おでかけごっこ	諏訪原佳子	特殊学級棟 音楽室・さくら組教室
5・6年梅組	体育科	つなごう！グリッドパスシュートゲーム	下川勝彦	附属中体育館

▼　保健養護部学習指導（１３：００～１３：４５）

４年１組	体育科(保健)	生活	オヤ，オヤッ？おやつ ～健康によいおやつ発見～	久保勝美 甲斐七七子	４年２組教室

琉球あさがおのアーチづくりを通して，植物の生命や成長に気付く生活科学習

第1学年1組　生活科学習指導案

指導者　塚本正典

単元　おおきくそだてよう！　こころをこめた　はなのおくりもの

指導観

○　本学級の子どもたちは，動植物に対する興味・関心は高く，図鑑やテレビ等で得た生態に関する様々な知識をもっている。また，これまでに植物の種をまいたり水をやったりしながら，生活経験の中で栽培にかかわる活動をしてきている。そこで，生き物への親しみをもちかかわりが一層深まるこの期に本単元を設定し，生命を慈しみ大切にするあさがおの栽培を進めることは，植物も自分と同じように生命をもっていることや成長していることに気付き，生命の不思議さや大切さをとらえる知的な気付きに高める上でも価値がある。

○　本単元は，植物の栽培を通して，あさがおも自分たちと同じように生命をもち成長していることに気付き，植物の生命を慈しみ大切にしていこうとすることをねらいとしている。そこで，本単元では，終日花を咲かせながら朝夕で色が変化しお世話により顕著な成長が見られる琉球あさがおを教材化する。具体的な学習内容は，①琉球あさがおの変化や成長の様子に関心をもつこと，②自分たちと同じように生命をもち，成長していることに気付くこと，③お世話により，植物への親しみをもち大切にすることである。このように琉球あさがおを育てることは，植物の成長や変化に気付き，生命の不思議さや大切さを心から感じる意義がある。

○　本単元の指導にあたっては，琉球あさがおの栽培を通して，生き物の生命をもち蔓や葉の成長の変化に気付くとともに，あさがおにかかわりながら生き物に親しみをもって大切にする生活の学びで展開する。そのために，まず，であう段階では，あさがおのアーチの様子に出会い，大切に育てて教生先生に見てもらうアーチづくりについて話し合う場を設定する。次に，ふかめる段階では，あさがおの成長の様子に気付くことができるよう，日常のお世話の活動や観察の活動を仕組み，観察アルバムをもとに成長の違いから肥料のあげ方や支柱立ての世話の工夫を進める活動を仕組む。最後に，いかす段階では，達成感や自分自身の成長に気付くよう，教生先生にプレゼントとして贈る琉球あさがおのアーチづくりを進める活動を仕組む。

目　標

1　琉球あさがおの成長の様子に関心をもって，意欲的に水やりや支柱立てのお世話をしたり，花のお世話についてGTの方にインタビューをしたりして生き物へ親しみをもって，大切に育てることができる。

2　琉球あさがおのアーチづくりを通して，花が生命をもって成長していることや継続的なお世話を通して花の成長の変化に気付くことができる。

計　画（約14時間）

段階	であう段階（4時間）	ふかめる段階（7時間）	いかす段階（3時間）
活動と内容	1　教生先生へのプレゼントについて話し合い，あさがおを育てる計画を立てる。 ○　きれいなあさがおの花を大切に育てプレゼンをしたいという思いをもち育て方の求めをもつこと	2　琉球あさがおの観察やお世話をする。 (1)　あさがおのお世話や観察をする。　② ○　水やりや肥料やりに気付くこと (2)　成長に応じお世話をする。本時 2/2② ○　花の生命や成長に気付くこと (3)　大きな花になるようお世話をする。③ ○　お世話の工夫に気付くこと	3　琉球あさがおのアーチをプレゼントする，ありがとうの会を開く。 ○　教生先生を招待しアーチができた達成感と，継続的な自分のかかわりに気付くこと
あさがおのアーチづくりを通して，生命や成長の変化に気付き，花の贈り物として植物を大切にする生活の学び			
支援	※　花が大好きな教生先生と出会い，プレゼントについて話し合う場の設定 ※　あさがおのアーチの様子のビデオの提示やGTの説明の場	※　一人一人のアーチを横に並べ，高さによって巻き付くひもの色を変えたり，葉の大きさを比べたりできる，支柱の準備 ※　花のお世話の工夫について，GTよりアドバイスをしていただく場	※　継続的にお世話をして多くの花を咲かせた琉球あさがおのアーチに教生先生を招待し，達成感を味わうありがとうの会の場の設定
評価規準	●　きれいな花を咲かせたいという思いをもち，教生先生に贈るあさがおのアーチづくりを意欲的に話し合っている。	●　花の成長の様子に気付き，継続的に花のお世話をしている。 ●　花の成長の違いに気付き，水や肥料やり支柱立ての世話の仕方を工夫している。	●　花の成長を自分のお世話とのかかわりからとらえ，継続的に取り組んだ自分のかかわりに気付いている。

本時の協働のポイント

琉球あさがおの成長の違いからお世話の工夫についてふかめる段階において，大きく育てる課題を質問して明らかにしたり，肥料や水のあげ方や日が当たるような支柱のたて方について協力する場を設定したりすれば，あさがおがつるを長くのばし，葉を数多く増やしながら成長していくことに気付くことができる。

本時の目標

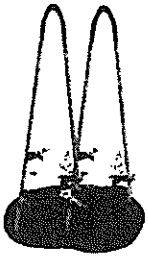
1　あさがおの成長の違いからお世話の工夫ついて考え，GTへお世話について意欲的にインタビューしたり，工夫した水やりや肥料やりのお世話をしたりすることができる。

2　あさがおのお世話の工夫の話し合いや肥料あげ，日当たりの工夫の活動を通して，あさがおの蔓が長くなり，葉の数が増え大きく成長していることに気付くことができる。

準　　備

学習の流れ図，観察アルバム，学習ノート，あさがおの鉢，支柱，はりがね，肥料，GT

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　あさがおの成長に応じたお世話について話し合う。 ○　あさがおを元気に育て，肥料のあげ方や日当たりの工夫のお世話の必要性に気づくこと （めあて）　つるがのびてきた　あさがおを　おおきくそだてよう。 ※　観察アルバムをもとに，あさがおの成長の様子から今までのお世話について話し合い，問題点を見出す場を設定する。 2　あさがおの成長の違いから，大きく育つようなお世話の工夫を取材し肥料のあげ方や日当たりの工夫についてお世話をする。 (1) 成長の課題をもとに肥料や日当たりのお世話について質問する。 ○　花の成長にとって必要な肥料のあげ方や間隔をおくことで，日当たりをよくする工夫の大切さに気付くこと 「あさがおの成長の様子の違い」 ・少ない葉と多い葉　・小さい葉と大きい葉　・短い蔓と長い蔓  「今までの世話」 ・毎日の水やり ・肥料やり ・支柱をたてた ・大きくなってねと水やりをする時にいつも声かけをした 「これからの世話」 ・表面がかわいたら水をあげる水のあげ方 ・花がよく咲くように窒素分の少ない肥料 ・間隔を置き，よく日当たるような巻き付かせ方の工夫 ※　あさがおが大きく育ち葉や花がたくさん増えるお世話の工夫についてGTに質問する場を設定する。 (2) GTの説明をもとに，大きく育つためのお世話の工夫を進める。 ○　花が大きく育つためには，あさがおに適した肥料や日がよくあたるように蔓を這わせる支柱の準備をしてあげるよさに気付くこと ※　GTのアドバイスをもとに，水や肥料をあげたり支柱を立てたりする場を設定する。 3　お世話の工夫をした自分のかかわりについて話し合う。 ○　あさがおが大きく成長する願いをもち，これから継続的にお世話をする意欲を高めること ※　アーチに蔓をはわせ，大きく成長したあさがおの模型を提示し，自分が意欲的に取り組んだことについて話し合う場を設定する。	○　ぼくのあさがおは，小さな葉のまん中から，葉っぱが出てきたよ ○　わたしのは，葉っぱのまん中からつるが出てきてのびてきたよ。 ○　どうして，ぼくのは友達と比べて小さいのかな。 ○　わたしのは，友達のよりも大きく育っているけど，花がたくさん咲くためにはどうすればいいのかな。 ○　どうしたら，もっと大きくなるのか聞いてみたいな。 ○　もっと葉がたくさんついて，蔓が伸びるためには，どんなお世話をするといいですか。 ○　水やりや肥料やりはしたよ。でもあまり大きくならないのはなぜ。どんなお世話をするといいのですか。 ○　水やりは，朝１回していたけど，土がかわいたら，たくさん水をあげるといいんだね。これから，暑くなってかわくことが多くなるから，水やりをたくさんしたほうがいいね。 ○　肥料は，白いたまの肥料をあげたけど，よく花がつくためには，水のような肥料をあげるといいんだね。肥料もあさがおにあった肥料をあげるといいんだね。 ○　支柱を立てて蔓をはわせる時は，よく日があたるようにして巻き付かせるといいんだね。すると，たくさん日があたって葉っぱが大きくなるんだね。 ○　蔓がうまく巻き付いてもっと大きくなるように，これからも水やりをたくさんして花がたくさんつくようにしたいです。

お客さんをたくさん集めるひみつを伝える新聞の構成を共創する社会科学習

第3学年2組　社会科学習指導案

指導者　　髙　瀬　雄　大

小単元　発見！　スーパーマーケットのひみつ

指　導　観

○　本小単元は，買い物調査やスーパーマーケット（以下スーパー）の見学を通して，地域の販売活動が自分たちの生活を支えていることや，商品や働きに来る人を通して他地域の人々とかかわっていることについて考えることをねらいとしている。具体的には，①商品の品質管理や陳列，宣伝の工夫など，仕事の特色をとらえることで工夫や努力に気付くこと，②商品の仕入れなどの面から他地域とのかかわりについてとらえること，③店員さんの工夫や努力が，お客さんの要望に応えることにつながっていることに気付くこと，などである。このことは，スーパーの見学などを通して，地域の販売活動の様子をとらえ，自分と地域とのかかわりを考えていく上で価値があると考える。

○　本学級の子どもたちは，昨年度生活科の学習で唐人町商店街を探検し，たくさんのお店があることや，それぞれのお店の商品や店内の様子について調べており，商店街を地域にある身近な場所としてとらえている。しかし，お店の人が商品をきれいに並べてお客さんが選びやすいように気を付けたり，商品を他地域から取り寄せたりしているなど，様々な工夫や努力をしていることにまでは気付いていない。

○　本小単元の指導にあたっては，人々の生活を豊かにしてきた商業の仕組みをとらえ，スーパーの販売の工夫を新聞で表す文化の学びで展開する。まずつかむ段階では，家の買い物調べの結果から，たくさんのお客さんを集めるスーパーのひみつを調べたいという思いを高めさせる。次に調べる段階では，スーパーを見学し，わかったことを新聞にまとめる。そのときに，記事の構成を考えることを通して，多様で豊富な品揃えや割引商品，鮮度を保つ商品棚などの売り場の工夫や，商品の補充や鮮度管理，加工，包装といったスーパーで働く人の仕事の様子から，お客さんの様々な要望に最大限応えようとする店員さんの工夫や努力について考えさせる。最後にまとめる段階では，検討した記事の構成をもとに新聞を完成させ，見学したスーパーに掲示してもらうことで学習の充実感を味わわせる。

目　　標

1　スーパーで働いている人々の活動の様子から，商品の品質管理や売り場での並べ方など，販売に携わっている人々の工夫や努力とお客さんの多様なニーズとの関係について調べる活動に，意欲的に取り組むことができる。

2　スーパーを見学し，新聞にまとめる活動を通して，働いている人が様々な工夫や努力を行っていることや，商品の入手先や働きに来る人の姿から他地域とのかかわりについてとらえることができる。

計　　画（約11時間）

段階	つかむ（2時間）	調べる（6時間）	まとめる（3時間）
活動と内容	1　スーパーがたくさんお客さんを集める理由について追究する学習問題を設定する。 (1) 家の買い物調べを行う。　① ○　食料品はほとんどスーパーで買っていることに気付くこと (2) スーパーの販売活動について調べる学習問題を設定する。　① ○　見学で追究する方向性を決定すること	2　スーパーを見学し，そこで働いている人の様子について調べる。 (1) スーパーにお客さんがたくさん来る理由を調べる。　③ ○　どのような販売活動を行っているかをとらえること (2) 新聞の記事をどのように構成するか考える。　本時2／3③ ○　安さ，新鮮さ，品揃えなどの販売活動の工夫をとらえること	3　お客さんを集める理由をもとに，スーパーのいいところを紹介する新聞をつくる。　③ ○　安さ，新鮮さ，品揃えなどお客さんの様々な要望に応えるために商品の品質管理や彩りがよく選びやすい陳列割引商品の設定を行っている店員さんの工夫や努力が見える新聞にまとめること
	お客さんの様々な要望に応えようと働く店員さんの姿について考えたことを新聞で表す文化の学び		
支援	※　家の買い物調べを行わせ，学級全体の結果を集計，提示する。	※　商品の種類，価格，産地や店員さんの仕事を見学の視点とする。	※　調べて分かったひみつの意味についてまとめる。
評価規準	●　スーパーに来るお客さんが多い理由について予想を立て，選びやすさ，買いやすさなどの見学する視点をつくることができている。	●　食料品の新鮮さ，豊富さ，安い値段，安心感などの理由からお客さんをたくさん集めていることをとらえている。	●　欲しい商品がいつでも買える安心感をスーパーで働く人が大切にしていることを，新聞で伝えることができている。

本時の協働のポイント

スーパーを見学して気付いた「値段」「新鮮さ」「品揃え」「営業時間」などのお客さんを集める工夫を紹介する新聞をつくる場面において，大きさの違う新聞の枠のどこに，何を載せるか話し合う活動を通して，お客さんの要望に応えようとしている店員さんの工夫や努力に気付き，スーパーのお客さんを集めるひみつを紹介する新聞の内容を決定する。

本時の目標

1　スーパーがお客さんをたくさん集めるひみつを，商品の品質管理，陳列の工夫，割引商品の販売などの面から考え，お客さんの要望に応えるために働くお店の人の努力について考えることができる。

2　安さ，新鮮さ，種類の多さなどの観点から，スーパーがお客さんを集めるひみつをどのような記事の構成を行った新聞で紹介するかを話し合う活動を通して，働く人の仕事の特色についてとらえることができる。

準　　備

スーパー店内の見取り図と写真，新聞の枠，付箋

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　スーパーで見つけたお客さんをたくさん集めるひみつを伝える新聞の大きさの違う枠について話し合う。 ○　調べたことをもとにして，スーパーがお客さんを集めるひみつをどのように紹介するのか決める本時学習のめあてを設定すること （めあて）　どのひみつをしょうかいしたいか話し合い，お客さんを集める理由を伝える新聞のわくぎめをしよう。 ※　大きさの違う３つの枠で構成された新聞の原稿を提示する。 2　スーパーがお客さんを集めるひみつをどのような記事の構成で表した新聞にするかについて話し合う。 (1)　グループに分かれてどのような記事の構成にするか話し合う。 ○　値段，新鮮，品揃え，営業時間のどれにするかを３つ選ぶこと 値段：・特売日の設定　・日替わり商品　・値札の色 新鮮さ：・温度管理　・定期的な鮮度チェック 品揃え：・コンピューターを使った発注　・品切れのない管理 営業時間：・早朝から営業　・団地の人のことを考えた営業時間 意図的に大きさを変えた新聞の枠 → 根拠を明らかにした記事の構成 ① 品揃えの工夫 ② 新鮮さ　③ 値段 くだもの売り場で見つけたひみつなんだけど，家族の人数に合うように，野菜をカットして売っていました。そのまま売るのではなくて，買う人のことを考えて手間をかけて売っているところがすごい工夫だと思うので，「品揃えの工夫」を大きく書きたいと思いました。（例） ※　選んだ観点が違うもの同士で構成されたグループで，どのようなレイアウトで記事の構成を考えたらよいかを決めさせる。 (2)　各グループで話し合ったことを全体に提案する。 ○　選んだ理由の意味づけを付加，修正，強化すること ※　各グループで話し合った結果を，レイアウトを提示しながら交流する場を設定する。 3　お店の人が様々な販売活動の工夫を行っていることについて話し合う。 ○　店員さんの工夫や努力が，お客さんの買い物の際の要望と結びついていることをとらえること ※　スーパーに来たお客さんの要望を語るＶＴＲを視聴させる。	○　店長さんが書いてほしいといってくれた新聞の枠は，３つに分かれていて大きさが違うので，どこに何を載せるか迷ってしまうな。 ○　ぼくは，一番大きい枠には新鮮さのことについて紹介したいな。 ○　ぼくはやっぱり値段が一番だと思うな。 ○　どうして友だちはぼくとちがう考えなのかな。このままでは，新聞がつくれない。話し合って決めなくてはいけないな。 ○　下ごしらえをして，すぐに食べられる商品が多かったから，忙しい人のために考えているんだと思う。 ○　たくさんの商品が並んでいたけどわかりやすいように種類や大きさを考えて棚に並べてあった。 ○　売り切れないように，同じ商品が３つくらい置いてあったな。 ○　お肉や野菜，お魚がとてもきれいで新鮮そうだったな。古くなったものを置かないように気を付けているんだって店長さんが言ってたぞ。 ○　なかなか意見が違ってまとまらないな。他のグループはどうなっているのかな。聞いてみたいな。 ○　お店の人がしていることは，どれも大切な工夫なんだな。 ○　スーパーがお客さんを集めているのは，お客さんのいろいろな願いに一つ一つ応えているからなんだな。 ○　お客さんの願いがたくさんあるから，ひみつもたくさんあるんだな。 ○　今度は，同じレイアウトを考えている人と一緒に新聞を作ろう。

よりよい報告文集をともにつくりあげていこうと，小集団で表現主題と材料を吟味し合う国語科学習

第4学年2組　国語科学習指導案

指導者　平　川　洋　一

単　元　発信しよう～すてきな附属福岡小学校～

指　導　観

○　本単元は，附属福岡小学校のすてきなところを表す事実について調査し，その取材，選材，組立ての在り方を追究することを通して，自らの報告文の書き表し方をつくり出すことをねらいとしている。具体的には，①附属小倉・久留米小学校の４年生との交流への意欲を高め，福岡小学校のどんなよさを報告するか，題材ごとのグループを編成し取材活動に取り組むこと，②主題につながる具体的な事実をメモにまとめ，蓄積した材料の選材・組立ての在り方を個と同主題グループで吟味し，報告文として書きまとめること，③主題グループごとに綴じた「４の２版！すてきな附属福岡小学校」を小倉・久留米小へ発信し，感想を交流し合うこと，などが主な学習内容である。自らの学校のよさを見つめ，同じ大学の附属小学校の同級生という具体的な相手に伝えていくこの学習は，この春，上学年としての仲間入りを果たした子どもたちにとって，学校への所属感や書くことによって他者とつながっていくよさを実感させるうえでも意義深いと考える。

○　本学級の子どもたちは，各種の作文コンクールに主体的に取り組み入賞者を出すなど，書くことへの意欲を高めている。前学年においては，漢字を題材として，その成り立ちを絵入りの説明書にまとめることを通して，文字だけではなく多様な表現方法でまとめることや伝えたいことをもとに選材したり組立てたりするよさを実感している。一方で，このような学習の中で，書くことへの抵抗感をもつ子どもも見られ始め，文字で表現する意欲と技能に個人差も広がってきている。

○　本単元の指導にあたっては，まず，「つかむ」段階で，同じ大学の附属小学校という点で小倉・久留米小の存在に着目し，交流への意欲を高め，福岡小のよさを具体的に報告していくようにする。そして，報告していく対象を，福岡小にある「もの，人，行事」に方向付け，取材活動に取り組むようにする。「ねりあげる」段階では，取材の中で明確になった主題をもとに選材，組立てを個で行い，その妥当性をグループの中で吟味し合っていくようにする。その際には，付箋紙に書きまとめて操作する活動を位置付ける。その後の記述，推敲においては，「個による記述」→「グループによる相互推敲」によって，共通理解を図りながら表現を高めていくようにする。最後に，「あじわう」段階においては，書きまとめた報告文を主題ごとに「４の２版！すてきな附属福岡小学校」に綴じていく。さらに，完成した文集を小倉・久留米小へと発信して具体的な反応をいただくことで，それぞれの役割の中で表現物をつくりあげた満足感や成就感をクラス全員に味わわせることができると考える。

目　　標

1　附属福岡小学校のすてきなところをクラスで綴じ合わせて，小倉・久留米小学校の同級生に報告したいという思いを支えに，個とグループで吟味し合う活動を往復させる中で表現を高めていこうとすることができる。

2　取材した材料の選び方や組立て方を個とグループで操作する活動を通して，相手意識に基づいた内容と書き表し方を構想し，伝えたい附属福岡小学校のすてきなところがはっきりと表れた報告文を書きまとめることができる。

計　　画（約11時間）

段階	つかむ（２時間）	ねりあげる（７時間）	あじわう（２時間）
活動と内容	1　小倉・久留米小へ発信していく内容について話し合う。 ○　福岡小のすてきさを表す「もの，人，行事」を観点に取材活動に取り組むこと	2　附属小学校のすてきさ（主題）を明らかにし，それにつながる材料を取材，選材，構成し，記述，推敲を行う。 ○　収集した材料と組立てを，個とグループで吟味し合うこと　本時3/7	3　書きまとめた文章を読み合い両小学校へ発信する。 ○　両小学校からの反応から，目的達成できた自分に自信をもつこと
附属福岡小学校のすてきさを表す報告文の書き表し方を個と小集団で吟味し合って高めていく文化の学び			
支援	※　小倉・久留米小との関係を図示し，福岡小のよさについて話し合う場を位置付ける。	※　付箋紙に材料の要点をまとめさせ，主題に適合しているか，再取材の必要はないか吟味し合う操作活動を位置付ける。	※　表現と内容についてのコメントを，小倉・久留米小の４年生に依頼する。
評価規準	●　福岡小のすてきさを表す具体的な内容を想起し，追究していく方向を見出している。	●　伝えたい福岡小のよさをもとに情報を収集し，根拠をもって材料を選択したり，組立てたりしながら構想をまとめている。	●　書き表し方の高まりや福岡小のすてきさへの理解を実感している。

本時の協働のポイント

附属福岡小学校のよさや自慢できる点を小倉・久留米の両小学校の同級生に具体的に伝えようと，追究した題材ごとに編成したグループの中で，それぞれが伝えたい中心とそれに合った材料を取捨選択し，妥当性を吟味し合う（共育）ことで，より確かな報告文の書き表し方をねりあげていく。

本時の目標

1　小倉・久留米の両小学校の同級生に自分が伝えたい福岡小のよさが分かるように，表現主題に合った材料の妥当性をグループと個で吟味し合う中で表現を高めていこうとすることができる。

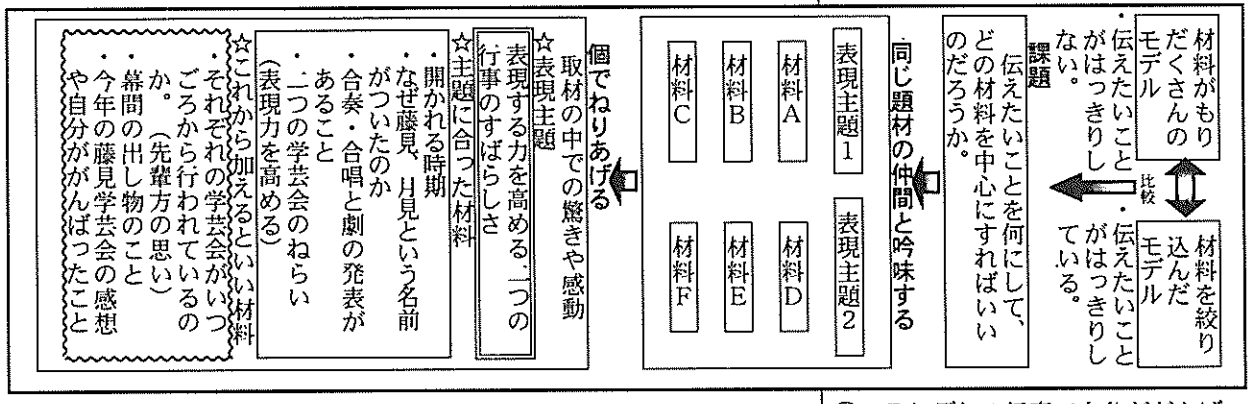
2　同じ題材を取り上げる友達と，表現主題とそれにつながる材料の妥当性を吟味し合い，付箋紙を操作して材料を取捨選択することで，根拠を明確にした報告文の構想をまとめることができる。

準　　備

付箋紙，学習の流れ図，学習プリント

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　「材料を数多く取り上げたモデル」と「材料を絞り込んで伝えたい点を明確にさせたモデル」を比べ，どちらのモデルがどうしていいのか話し合い，本時学習のめあてについて考える。 ○　中心をはっきりさせ，材料を絞り込んでいく必要感を高めること	○　前の時間までに福岡小の自慢になる材料をたくさん集めたぞ。 ○　たくさん紹介したいけど，伝えたい内容を絞り込まないといけないな。
（めあて）　取材してきた材料の中から，どの材料を中心にしたらいいのか，同じ題材の仲間と話し合おう。	
※　前時までの取材活動でできあがった子どもたちの構想の問題点を事前に把握しておき，だれも取り上げていない題材で，なおかつ材料を絞り込む必要感をもたせるモデルを提示する。	○　集めた材料の中から，中心を決めて絞り込んでいくことが大切だね。 ○　ぼくたちの取り上げる「行事」で伝えたい内容は何だろう。
2　伝えたい内容（表現主題）を明確にし，それにつながる材料を吟味する。 (1)　どの材料を選ぶか，同じ題材で追究している仲間と話し合う。 ○　中心にしたい内容とそれに合う材料の選び方についてモデルのよさや不十分な点をもとにグループで吟味すること ※　グループで集めた材料をあらかじめ付箋紙に書きまとめさせておき，主題とそれに合う材料を取捨選択する操作活動を位置付ける。 (2)　グループで共通理解した表現主題と材料の選び方をもとに，個で表現主題とそれに基づく材料を吟味する。 ○　自らの表現主題をどうするか，それに合う材料はどれか，不足している材料はないかという３つの観点から個で構想をねりあげること ※　取材活動の中での感動や驚きを想起させ，自分らしい表現主題とその材料を選択させる。	○　そうだ，取材活動の中で，体力や礼儀を重視する行事が多いことが心に残っている。そのことを主題にしてみてはどうだろうか。 ○　表現力を高める行事もいいね。 ○　みんなで楽しむ行事もあるよ。 ○　よし，主題が「心と体を鍛える福岡小の行事」に決めたぞ。では，そのためにどの材料を選ぼうかな。 ○　「相撲大会」「あらつ大運動会」「持久走大会」「遠行会」がぴったり合うようだな。



3　本時学習で高まった構想をふり返り，学習プリントに書きまとめる。 ○　前時から何がどう高まったか，なぜ高まったか，書きまとめること ※　選んだ材料が表現主題とつながっているか，再取材の方向は見つかったか投げかけ，次時の学習への意欲を高めさせる。	○　それぞれの行事で自分ががんばったことを材料に書いていこう。 ○　主題と新しい取材の方向も決まったぞ。次の時間は藤見学芸会がいつごろから行われてきたか調べよう。

情報を交換・補完しながら考えを広げ深める国語科学習

第6学年1組　国語科学習指導案

指導者　平　島　健　二

単元　わたしがとらえた筆者の考え!!～あなたはどう考える?～

指導観

○　本単元は，自分の課題から情報を選択し付加しながら，筆者の考えを確かにとらえ，自分の考えを広げ深めることをねらっている。具体的には，①筆者の考えの根拠を追究する課題をもつこと，②文章構成や表現の工夫などから筆者の考えを読み取り，補助教材から情報を付加しながら考えを確かにすること，③自分の立場をはっきりさせながら感想を深め，発表することが主な学習内容である。中心教材である「生き物はつながりの中に」は，大きく４つのまとまりで構成され，人が生き物として生きることの素晴らしさを論説している。根拠となる事例に関する情報を付加しながら筆者の考えを確かにして解釈していくのに適した文章である。また，機械文化に囲まれ生命に触れる機会が減りつつある子どもたちにとって価値ある内容である。

○　本学級の子どもたちは，段落相互の関係を考えて，文章の中心的事柄を読み取り，要旨をとらえることができるようになってきている。また，筆者の考えの根拠を問うような課題で教材文を深めていく読み方，自分の既知の情報を付加する読み方を学んできている。しかし，自分の関心点を中心に筆者の見方・考え方を豊かにとらえ直し，自分の立場から解釈していくような読み方はまだできていない。そこで，課題解決に必要な情報を付加したり他者がもつ情報を交換したりしながら筆者の見方・考え方を解釈する読み方を身につけさせたい。そして，情報を効果的に活用しながら感想を深めていくことができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，段落相互の関係を考えながら「生き物はつながりの中で」を読み取り，自分に必要な情報を選択・付加・比較しながら筆者の考えを確かにし，自分の考えを広げ深めることができるようにしたい。つかむ段階では，中心教材に出合わせ，筆者の考えの根拠に関わる課題を捉えさせる。深める段階では，中心教材を読み，筆者の論理を読み取らせる。読み取った筆者の考えに対して，根拠となる事例が妥当なのか，筆者の意見は受け入れられるか自分の立場を明らかにさせる。そして，必要な情報を補完したり情報を交換したりしながら筆者の考えを解釈して，それを活用しながら「人が生き物として生きること」に対する考えを創造していく。生かす段階では，考えを整理して読みを評価し，充実感を味わわせる。

目　標

1　人が生き物として生きることに関心を高めたり，筆者の考えを解釈しようとしたりして，中心教材を読んだり自分の立場をはっきりさせて情報を選択したり交換したりしながら，自分の読み方をつくることができる。

2　「生き物はつながりの中に」で筆者の考えを文章構成や表現の工夫などから追究し，自分の立場から情報を補完・比較して筆者の考えを解釈しそれを活用しながら自分の感想を深めることができる。

計　画（約９時間）

段階	第１次（３時間）	第２次（４時間）	第３次（２時間）
活動と内容	1「生き物はつながりの中に」との出合いから筆者の意見と述べ方についての学習課題をとらえる。③ ○　題名から関心を高めて通読し，筆者の述べ方について課題をもつこと	2　学習課題をもとに「生き物はつながりの中に」を読み，情報を付加したり情報交換したりしながら解釈し活用する。 (1) 筆者の意図を読み取る。本時３／３③ ○　筆者の意図と述べ方を読み取ること (2) 文章構成を手がかりに見直す。① ○　文章全体から筆者の考えを見直すこと	3　解釈した情報を活用し，筆者の考えに対して自分の考えを書きまとめる。 ○　情報を比べ，判断し，考えを広げ深めること (1) 読みを話し合う。① (2) 考えをまとめる。①
	情報を補完したり交換したりすることで筆者の考えを解釈し，情報を活用する文化の学び		
支援	※　題名と筆者に着目させる。 ※　筆者の考えがわかるまとまりなど具体的に考えさせる。	※　中心教材の読後の感想から筆者の考えへの関心の傾向性を見取り，グループ化や補助教材の提示の工夫をする。	※　筆者の考えに対して違いがないか考えさせ，自分の価値に気付かせる。
評価規準	●「人が生き物として生きることがなぜ素敵なのか」など筆者の主張や根拠に関わる課題を書いている。	●　事実と考えを読み分け，文章の構成から筆者の意図や見方・考え方を話している。 ●　必要な情報を選んで，情報を補完・比較しながら自分の考えを話している。	●　人が生き物として生きることについて，読んだ情報をつないで，感想を書きまとめている。

本時の協働のポイント

筆者の論理を納得したいという思いをもっている子どもたちに，筆者が「生き物として生きることがとてもすてきなこと」といっている根拠が長い生命の歴史にあるという論理を二つの方向性から追究し，考えを交換する話し合いを位置付け，それぞれの考えを共有しながら筆者の論理を解明していかせる。

本時の目標

1　筆者の論理を納得したいという思いをもとに，筆者の意見と事例との妥当性を検討したり，情報を付加・交換したりしながら筆者の考えを解釈しようと意欲をもち，自分の考えが深まったことに自信をもつことができる。

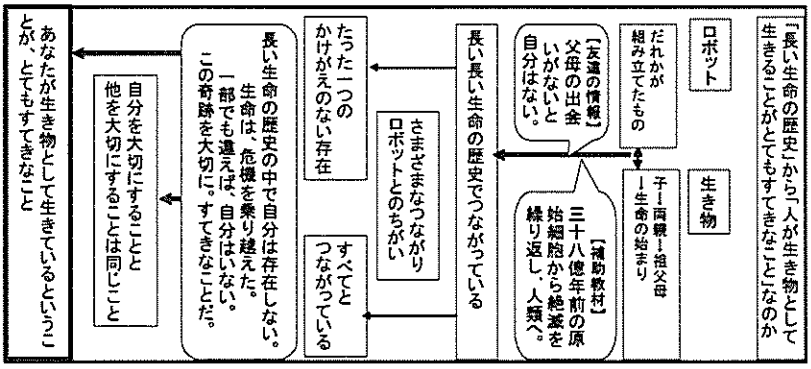
2　筆者の意見と事例との妥当性を文章構成から追究し，課題に応じた情報を補完したり友達の考えと比較したりしながら，筆者の意図を解釈し，情報を活用して自分の意見を創ることができる。

準　　備

板書用カード，学習ノート，流れ図，拡大本文，副教材文

展　　開

活　動　と　内　容（※は，評価を生かした支援）	子どもの思考の流れ
1　前時学習を想起し，本時学習のめあてを話し合う。 ○　文章構成や筆者の意見を明らかにして，本時場面を確かめ，本時学習のめあてを把握すること （めあて）　筆者は，生き物として生きていることがすてきなこととというために，なぜ「生命の歴史とのつながり」の事例を取り上げているのか読み取ろう。 ※　流れ図や文章構造図を提示し，自分が解決したいことが何なのかを明確にもたせ，どんな意義があるのか意識化させる。	○　前の時間までに自分たちが他の生き物のおかげで生かされていることがわかった。そして，自分が成長していることもわかった。だけど，それが筆者がいうほど，とてもすてきなこととまでいえるのかな。 ○　もう一つの事例「生命の歴史」から筆者の意見を考えてみたい。
2　筆者の意見と事例との妥当性を検討し，情報を交換・比較したり，補完したりしながら，筆者の意図について読み深め，話し合う。 (1)　筆者の意見と事例との関係をつないだり意味づけたりする。 ○　事例３における筆者の論理を読み取ること ※　筆者の意見とまとめ，事例３との構成が確認できる学習ノートを準備し，論理を追究する手がかりにさせる。 (2)　自分の立場を明らかにし考えが違う友達との情報交換をしたり，副教材から情報を補完したりしながら自分の考えを確かにする。 ○　情報を比較したり補完したりしながら筆者の意図を読み取ること ※　情報の視点を明確にし情報活用がしやすいようにする。	○　ロボットは，だれかが組み立ててつくるからいつでも同じものがいくらでもつくれる。 ○　生き物は，子は親から，親はその親から生まれ，命を受け継いでいる。いつでも作れるわけがないし，同じものは現在過去未来で存在しない。 ○　命を受け継ぐことは，わかったけどそれだけでとてもすてきなこととまでいえるとは，思えないけど。友達はどう考えているのかな。 ○　父母が出会わなかったら自分がいなかったと友達の考えでわかった。 ○「生命の歴史のうえに」を読むと人類が存在することが，自分が存在することが奇跡に思えるぞ。 ○　人だけではなく，すべての生き物の祖先は同じもので，進化を繰り返しながら生き延びて，今の人類がいるんだ。もし，その進化の過程が違っていたら人類つまりぼくは存在しなかったんだな。すごい奇跡だ。
3　筆者の意見に対する考えを話し合ったり，これまでの情報を活用して自分の意見を書きまとめたりする。 ○　自分や友達と読みの学習を創り，読み深めたことの意義を感じ，情報を比較したり補完したりする読み方への自信をもつこと ※　解決したいことを追究したことで筆者の意見への考えが変わったか，自分にとってよかったことは何か，友達や他の文章と重ねたり比べたりする読み方はできたかの観点を与え，書きまとめやすいようにする。	○　今まで３つの事例をくわしく読んで，筆者がぼくたちに伝えたかったのは，①外②時間③生命の歴史で奇跡的につながっているすべての命に感謝して，全ての命を大切にしてほしいということだ。本当にそうだ。



ものの燃焼について空気の変化や気体の性質に着目し考えを共有して追究する理科学習

第6学年2組　理科学習指導案

指導者　今泉伸一郎

単元　追究しよう！ものの燃え方と空気の変化

指導観

○　本単元は，木や紙などの植物体を燃やし，ものを燃やす前と後の周りの空気の変化を調べものの燃焼と空気の質的な変化との関係付けを知的好奇心を高めながら追究することがねらいである。主な内容は，①ものが燃えるときには，酸素が必要であり，植物体が燃えた後には二酸化炭素ができること，②物が燃える前と後の空気の質的変化を石灰水や気体検知管を用いて調べることができることなどである。そこで環境問題として取りだたされている地球温暖化をとり上げ，その原因であるものが燃えることで発生する二酸化炭素の増加について問題を見出し燃えることによって起こる空気の質的変化を多面的に追究するようにする。

○　本学級の子どもたちは多かれ少なかれこれまで物を燃やしたことがあり燃える前と後での物の質的変化や空気の変化を体験し，燃焼についての既有の考えをもっている。また，ものを燃やすためには空気が必要なこと空気の構成要素である酸素や二酸化炭素の存在やそれらの質的変化とものの燃焼とが何らかの関係があることを知っている子どももいる。さらに，地球温暖化の原因について，大気中の二酸化炭素の増加に原因があることを知っている子どももいる。

○　本単元の指導にあたって，課題をもつ段階ではものの燃焼について知的好奇心を高めることをねらう。そこで地球温暖化の原因である空気中の二酸化炭素の割合の増加を視点に空気中の酸素と二酸化炭素の組成を調べ，ものの燃焼と関係付けて話し合う活動を設定する。その際，気体検知管を用いて空気の成分調べができることを知らせる。追究段階１ではものの燃焼と周りの空気の質的変化との関係付けを調べることをねらう。そこで，燃焼について空気の質的変化を考えをモデル図で表し類型化された仮説を検討したり実験で確かめたりする。その際，酸素の減少を要因としてとらえた者と二酸化炭素の増加を要因としてとらえた者とで構成した異質グループで仮説の検討を行うようにする。追究段階２では，獲得した燃焼についての見方や考え方をさらに深めることをねらう。そこで，燃焼と空気の質的変化について広く調べたり，酸素や二酸化炭素のはたらきについて自分の考えを確かめる個別追究の活動を設定する。その際，個別の追究が相互に生かせるように異なる仮説グループで追究するようにする。

目　標

1　燃焼とものの質的変化との関係について知的好奇心を高め，既習内容やこれまでの体験から考えを具体化し，仮説の検討や実験による検証をもとにものの燃え方について一般化することができる。
2　植物体が燃える時には空気中の一部の酸素が使われ，かわりに二酸化炭素ができることをとらえる。

計　画（約７時間）

段階	課題をもつ段階（2時間）	追究段階１（３時間）	追究段階２（２時間）
活動と内容	1　地球温暖化の原因について話し合う。 (1)　二酸化炭素の増加の原因を話し合う。　① ○　燃焼と関係付けること (2)　空気組成を調べる。① ○　気体検知管で調べられること	2　ものが燃える続ける現象と空気の量的変化と質的変化に着目し，仮説を検証する。 (1)　ものを閉じた空間の中で燃やすと，やがて消えていく現象について話し合う。　① ○　燃焼と空気の質的変化に気付くこと (2)　空気の質的変化を定性的に調べる。　② ○　ものが燃える時，空気中の酸素の一部が使われ，二酸化炭素が出てくること	3　燃焼と空気の質的変化，酸素と二酸化炭素のはたらきについて個別追究する。　本時２／２ ○　燃やすものによって周りの空気の変化に違いがあり，酸素は二酸化炭素に変わること ○　酸素は燃焼を活性化し，二酸化炭素は抑制すること
ものの燃え方と空気の質的変化との関係付けを共有しながら燃焼についての見方や考え方をつくる文化の学び			
支援	※　二酸化炭素と燃焼とを関係付ける資料を提示する。 ※　気体検知管の使い方を正しく伝える。	※　閉じた空間で物を燃やし，炎がしばらくすると消えていく現象を観察させる。 ※　物の燃焼と空気の質的変化との関係をモデル図で表すようにする。	※　獲得した方法知と内容知をもとに実験計画を立てさせる。 ※　異質な追究で構成したグループで実験させ，交流させる。
評価規準	●　燃焼と周りの空気の変化に気付いている。 ●　気体検知管が使える。	●　物が燃えたり消えたりする現象と空気の変化との関係をモデル図で具体化している。 ●　気体検知管で定性的に調べている。	●　他者の追究から考察できることを自分の追究の考察に補完して説明している。

本時の協働のポイント

燃焼と空気の変化との関係について酸素の量を増やすと二酸化炭素の量がどう変わるか，ろうそく以外の植物体や金属を燃やすと周りの空気の変化はろうそくの燃焼と比べてどう変わるか，酸素と二酸化炭素のはたらきについて調べた実験結果から考察した個の考えを共有することでものの燃焼について見方や考え方を確かめることができ，新たに見いだしたものの燃焼のきまりをつくることができる。

本時の目標

1　ものの燃焼と周りの空気の変化との関係を酸素の量や燃やすものの質を変えて適用したり，燃焼における酸素と二酸化炭素のはたらきを確かめたりすることができる。

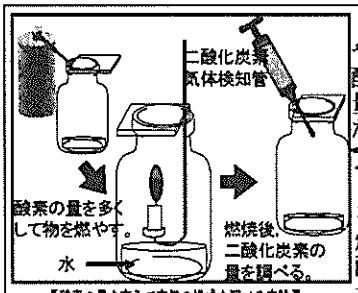
2　植物体を燃やすことで酸素は二酸化炭素に変わるが金属を燃やしても周りの空気はあまり変化しないこと，酸素は燃焼を活性化させて二酸化炭素は燃焼を抑えるはたらきがあることがわかる。

準　　備

酸素ボンベ，二酸化炭素ボンベ，気体検知管，集気びん，割り箸，炭，スチールウール，燃焼さじ

展　　開

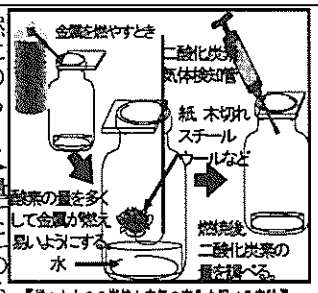
活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　ものの燃焼と周りの空気の変化との関係について，さらに調べてみたいことについて，モデル図をもとに話し合う。 ○　考えの共通点や差異点から，自分の考えを確かめる観察の視点を明らかにすること (めあて)　ものが燃えることと周りの空気の変化との関係や酸素と二酸化炭素のはたらきについて確かめたいことを調べよう。 ※　酸素の量を変えた時の二酸化炭素の割合，いろいろなものを燃やしたときの周り空気の変化，酸素と二酸化炭素が燃焼に与える影響について仮説をモデル図で表したものを類型化して提示する。	○　燃焼によって酸素は二酸化炭素に変わると思う。だから，酸素の量を増やしてものを燃やすとその分だけ二酸化炭素が増えているはずだ。 ○　ろうそく以外のもの，例えば割り箸などを燃やしてみよう。でも，ものが燃えるときには酸素が使われ二酸化炭素が出るはずだから結果は二酸化炭素の量が増えるに違いない。
2　自分の仮説を実験によって確かめ，他者の実験結果からものの燃焼と酸素，二酸化炭素との関係を調べる。 (1)　実験計画をもとに自分の考えを確かめるために適した実験器具を選択し，確かめる手順を確認する。 ○　ものの燃焼と酸素，二酸化炭素との関係を調べる見通しをもつこと ※　個の仮説を調べるのに必要な実験器具や素材を用意し，選択できるようにする。金属を燃やすときには，酸素の供給について支援する。 (2)　実験を行い，個の追究と他者の実験結果を補完して考察する。 ○　結果からわかることからモデル図のかき変えや付け加えをすること ※　3つの仮説検証を，同じ実験台で調べるように場の設定を行い，相互に実験結果を補完したり検討したりすることができるようにする。	○　酸素が多い時に燃え，二酸化炭素が多い時に火が消えるので酸素にはものを燃やすはたらき，二酸化炭素には火を消すはたらきがある。 ○　酸素の量を多くして物を燃やすと二酸化炭素の量も多くなった。燃焼で酸素が二酸化炭素に変わるんだ。 ○　金属を燃やしても周りの空気の二酸化炭素の量は変化しない。 ○　酸素の量を多くすると，小さな炎が大きくなった。二酸化炭素の量を大きくすると炎が消えた。



【酸素の量を変えて空気の組成を調べる実験】

金属を燃やしても二酸化炭素の量は変わらないね。

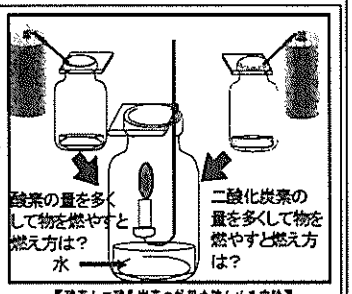
酸素の量を増やして燃やすと二酸化炭素の量も増える



【様々なものの燃焼と空気の変化を調べる実験】

酸素を入れると金属を燃やすことができるんだね。

酸素は燃やすことを助けるはたらきがあるんだね。



【酸素と二酸化炭素の効果を確かめる実験】

3　考察をもとにものの燃焼と周りの空気との関係について話し合う。 ○　燃焼によって酸素は二酸化炭素になること，いろんなものを燃やしても酸素が使われ二酸化炭素が出るが，金属を燃やしても周りの空気はあまり変化しないこと，酸素は燃焼を活性化させ，二酸化炭素は抑えるはたらきがあること ※　ものの燃焼と空気の変化を視点に交流の内容を板書で整理する。	○　酸素が多いと，燃焼がはげしくなる。逆に二酸化炭素は，炎を消すはたらきがある。 ○　酸素は，燃焼によって二酸化炭素に変わる。でも，金属を燃やすときにはあまり変わらない。

世界の主食を比較し，ともに調べながら，世界の食文化にふれる総合的な学習の時間

第3・4・5・6学年3組　国際交流タイム学習指導案

指導者　　脇本孝枝　清水隆一郎　永尾健

単　元　世界の主食調査隊

指　導　観

○　本単元は，子どもたちが滞在した国の主食と日本の主食を調べることを通して，文化の独自性や共通性をとらえるとともに滞在していた国に対する愛着と誇りをもたせることをねらいとしている。具体的には，①日本の主食を調べたことをもとに，滞在した国の主食について調べる課題設定をすること，②自分が滞在していた国の主食について，その味や作り方，歴史的なもの，食事の作法などを知り住んでいた国への一層の愛着と誇りをもつことである。

○　本学級の子どもたちは，ｱﾒﾘｶ，中国，ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ，ｵｰｽﾄﾗﾘｱ，ｽﾍﾟｲﾝ，ﾄﾞｲﾂ，ﾏﾚｰｼｱなど滞在国，滞在期間，帰国してからの期間が様々な複数の学年が集まった帰国子女の学級集団である。日本や友だちが住んでいた国の文化に対する関心は高い。

これまでの学習で本学級の子どもたちは，お金や遊びなどから世界の文化を調べてきている。食べ物に関する関心は高く，世界によって食材等がちがうことに興味をもっている。そこで，滞在していた国の主食を追究し文化の特徴や違いに気づいていくことは，他国文化に関心をもち，調べたいという学ぶ意義を感じ日本や滞在国のよさを自分なりに見出すことができるという価値があると考える。

○　本単元の指導にあたっては，個の実態に応じて滞在国の主食を調べる学習過程を通して，自分の願いをもってその国の文化を理解し，世界の主食調査報告書を作る文化の学びで展開する。 つかむ段階では，食事に対する気がかりをもたせ，調べ活動を通して課題を把握させる。追究する段階において，子ども達が滞在していた国の主食を，つかむ段階で学んだ追究方法を生かして調べる。世界の主食を２つの視点（味や作り方，歴史・風土との関係）に分け，実態に応じたグループで追究活動を行っていく。実態に応じた調べ方として滞在国の知人へのメール，日本在住の滞在国の方をゲストティーチャーに招きいっしょに料理を作る等，本学級らしい方法も活用し，主食から見た文化の特徴をとらえさせる。つくる段階では，調べ考えたことを再構成し「世界の主食調査報告書」として発信することで，有用感を味わわせたい。

目　　標

1　日本の主食の味と，自分が滞在した国の主食の味について気がかりをもとに自分の課題を設定して追究し，友だちと交流することで，自他国の文化を尊重する態度をもつことができる。

2　自分たちの調べる国に合わせて，資料を収集分析したり，その国の人との交流をしたりしながら主食の味を通してその国の文化を追究していくことができる。

計　　画（約18時間）

段	課題をつかむ（６時間）	追究する（８時間）	表現する（４時間）
活動と内容	1　世界の主食に出合い，主食について追究する課題と計画をつくる。 (1)　日本でよく食べている食事を調査して比較する。　④ ○　日本の食事の主食に着目すること (2)　滞在国の主食試食会を開き，発見したことや疑問をもとに，自分が滞在していた国の主食を追究する計画を立てる。　② ○　追究課題を設定すること	2　日本と滞在国の主食を比較しながら特徴について追究する。 (1)　滞在国の主食を調べ自分の考えをまとめる。　⑥ ○　滞在国の特色をとらえること (2)　追究結果をｸﾞﾙｰﾌﾟで交流し，内容や方法をふり返る。 **本時2/2②** ○　各国の文化の独自性や共通性に気付くこと	3　主食調査隊の調査報告書を作成する。 (1)　自分の応えをまとめる。　③ ○　追究結果を表現すること (2)　発表会をする① ○　各国の主食文化を尊重すること
日本の主食と滞在国の主食を視点をもって比較追究し，自他国の文化に対する誇りを創る文化の学び			
支援	※　体験活動による情報収集 ※　滞在国からのＧＴの紹介	※　実態に応じた追究グループ編成 ※　各国の主食を作る体験活動	※　ＧＴによる肯定的評価の場の設定
評価規準	●　日本の主食の追究課題を設定し追究の見通しをもって計画を立てている。 ●　日本の主食の追究を参考に，課題に応じた追究方法を選択しながら計画を立てている。	●　海外生活の経験を生かした追究活動をしている。 ●　自他国の文化に自分なりの考えをもち表現している。	●　各国の主食を尊重し追究結果がよく伝わる表し方を選択している。

本時の協働のポイント

滞在国の主食を①味や作り方，②歴史や風土との関係の２つの視点から調べたことを交流することで，各国の主食の特徴や共通性を認識し，自分たちの「世界の主食調査報告書」を創っていく見通しをもつ。実態に応じて，個別のカリキュラムをもとに身につけるべき力を明らかにしたグループ編成をし，個に応じた表現方法で交流する。

本時の目標

1　自分が調べた滞在国の主食について分かりやすく発表したり，友だちの発表を滞在国との共通点，相違点に気をつけながら聞いたりして，世界の主食について話し合うことができる。

2　他国の食の文化を理解したり，自分が滞在していた国の食の文化を再認識することができる。

準　　備

グループで追究した結果の表，学習カード

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　滞在国の主食についてそれぞれの課題に合わせて追究してきたことから，「世界の主食調査報告書」について話し合う。 ○　どんな「世界の主食調査報告書」を作成するのか確認し，本時のめあてを確かめること （めあて）　各自の課題追究をもとに，世界の主食の同じところや違うところを見つけ，「世界の主食調査報告書」にまとめることを決めよう。 ※　課題追究の２つの視点（味や作り方，歴史や風土との関係）と，それをもとに本時話し合い考える全体課題について確かめさせる。	○　マレーシアでは，ロティーチャナイが有名です。薄いパイのような生地のパンでもっちりしたかみごたえです。食事にはカレーなどをつけて食べます。お米も主食です。ナシレマッが代表的なご飯です。ココナッツでお米を炊きます。マレーシアは他民族のための料理もいろいろだ。
2　各自が調べたことをもとに，「世界の主食調査報告書」に必要な情報について話し合い，自分の課題追究について見直す。 (1)　それぞれが調べたことをもとに，各国の主食について共通点や差違点等気付いたことを話し合う。 ○　各国の主食は，歴史や人々の料理に関する考え方などさまざまな特徴があることに気付くこと ※　各自が調べた内容については事前に閲覧させておく。	○　お料理にも，その国の歴史や考え方が込められていたよ。他のグループはどんなことを調べてきているのかな。知りたいな。 ○　みんなが調べたことをまとめて，「世界の主食調査報告書」を作りたいね。もっとみんなに世界の味のことを分かってもらうために，どんなことを調べたらいいかな。

	【味や作り方について調べよう】	Bコース【歴史・風土との関係について調べよう】
Aコース	○　アメリカでは，パンをよく食べていたよ。世界にはマレーシアのパンのようにおかしみたいなパンもあるんだな。主食がめんの国も多いな。からい味やあまい味があるよ。	○　どこの国でも，パンを食べることは共通しているよ。ドイツには，白いパンと黒いパンがあり，500種類ものパンがあるよ。食べ方は国によって違うんだね。
Bコース	○　日本とマレーシアの主食はご飯が多いことは共通しているね。マレーシアのご飯は特産物のココナッツで炊いているので甘いよ。マレーシアは他民族のため料理が多種多様だよ。アメリカに似ているよ。	○　スペインでも日本と同じようにお米を食べるよ。パエリアが代表だ。スペインはヨーロッパでは米の生産量が多いよ。食文化や米作の歴史の違いで，アジアのお米とは粒形・風味も違うよ。

(2)　足りない情報を収集するための方法を見直し，「世界の主食調査報告書」のまとめかたについて話し合う。 ○　２つの視点で調べ考えたことを関係付け，世界各国の主食についての見方・考え方を深めること ※　ゲストの話から食に対する思いを出してもらい考え方を深める。	○　自分たちが考えた方法よりもっといい方法があるかな。早くＧＴの方のアドバイスが聞きたいな。 ○　どこの国の料理にも，その国の自然や歴史が関わっていてその国らしい料理ができあがっている。
3　本時の学習を振り返りながら，これからの学習について話し合う。 ○　「世界の主食調査報告書」を滞在した国の特徴を生かしながらつくることを確かめること ※　ゲストの方から追究過程や結果について肯定的な評価と今後の活動への示唆・助言をしてもらう。	○　「世界の主食調査報告書」にまとめていろいろな人に見てもらいたいね。世界にはいろいろな味があるよ。僕たちがいた国のことも知ってほしいな。

まわりの人とやりとりをするおでかけごっこを通してことばをとらえる国語科学習

第3・4学年さくら組　国語科学習指導案

指導者　諏訪原佳子

単元　つたえよう！　おでかけごっこ

指導観

○　本学級の子どもたちは，３年生２名，４年生４名の計６名で構成されている。ことばの実態として，発声と身振りで伝える子どもから，２～３語文で伝える子ども，多語文を使って話す子どもがいる。どの子どもも人とのかかわりを好み，して欲しいことを自分から身近な人に伝えようとする。しかし，語彙が少なくうまく言い表せなかったり，話が一方的だったりしてうまく伝わらないことも多い。また，決まった状況ならば言えるが，場面が変わると言えないというように応用していくことが難しい。教師や友だちと一緒に遊ぶことを好む子どもたちなので，一緒に電車に乗って出かけ運転士さんやお店屋さんとやりとりをすることに興味をもち意欲的に取り組むことができると考える。

○　本単元は，電車に乗って出かけ，買い物をしながら，場面に適したことばを使うことをねらいとしている。実際にやりとりをしながらことばを使うことで，状況とことばをあわせてとらえることができる。そのことで，意味が分かるだけでなく，使えるようにしていくことができる。さらに，子どもの興味をひく物を商品として置いたり，配置を工夫したりすることでどの子どもからも意図したことばを引き出すことができる。具体的な内容としては①運転士さんやお店屋さんとやりとりをすること②ことばと場面を合わせてことばの意味をとらえ，使うことができることである。

○　本単元の指導にあたっては，やりとりをしながら場に応じたことばを使ったり伝えたいことをより詳しくすることばを使ったりできるようにする。そのために①場の設定②個に応じたヒントカードの提示③個に応じたことばを引き出す声かけなどを行う。であう段階では，お母さんから頼まれた物を買いに行こうというお話を読んで活動への興味と見通しをもたせる。つかう段階では，複数のお店で買い物をしてことばをいろいろな場面で使えるようにしていく。そのために，個に応じたヒントカードの提示や声かけを行う。ひろげる段階では更に違う場面で使えるようにしていくために前時までの複数のお店を設定し，身に付けたことばを使い，他の場面でも使えるという自信や身に付けたことばを使おうというやる気をもたせるようにする。

目　標

1　おでかけごっこの活動に興味や見通しをもち，進んでことばを使いながらおでかけごっこをしようとすることができる。

2　場に応じたあいさつや，（ＡＧ）名詞を中心とした２語文，（ＢＧ）形容詞を中心とした３語文，（ＣＧ）副詞を中心とした多語文などをとらえ，やりとりの中で使うことができる。

計　画（約５時間）

段	であう段階（１時間）	つかう段階（３時間）			ひろげる段階（１時間）
活動と内容	1　乗り物で出かけ買い物をするお話を読み，試しのごっこ遊びをする。 ○　乗り物と買い物への興味をもつこと ○　おでかけごっこの活動への見通しをもつこと	2　電車に乗って買い物に行く。 (1) 果物屋に行く。　① ○　果物の名称や多少 A:りんご　B:多少　C:ちょっと	(2) 文房具屋に行く。本時① ○　文房具の名称や長短 A:鉛筆　B:長短 C:もっと	(3) おもちゃ屋に行く。　① ○　おもちゃの名称や重軽 A:ボール　B:重軽　C:とても	3　電車に乗って，果物屋，文房具屋，おもちゃ屋など複数の店へ買い物に行く。 ○　前時までに身に付けたことばをいかして，複数のお店場面でやりとりをすること
やりとりを通して場に応じたことばを身に付ける，生活がわかる学び					
支援	※　目的をもたせるため乗り物でおでかけする話の提示 ※　見通しをもたせるため試しのおでかけごっこの設定	※　ことばを引き出すためのお店の設定や商品の並べ方などの活動の場の設定 ※　ことばの発達段階に応じたヒントカードの提示や個に応じた声かけ			※　今まで身に付けたことばを使う新たなお店屋さんの設定 ※　一人一人への賞賛
評価規準	●　紙芝居や教師に注目して話を聞き，話の中の台詞を真似したり関係することをつぶやいたりしている。	●　場に応じたあいさつができている。 ●　果物や文房具の名称を言ったり，欲しい物を伝えるために大小や量，長短などを詳しく伝えようとしたりしている。			●　新たな場で，自分からあいさつをしたり，身に付けたことばを使ったりしてやりとりしようとしている。

本時のかかわりのポイント

お母さんから頼まれて文房具を買いに行くおでかけごっこで，導入の段階で買い物への意欲をもたせ，文房具屋さんでも色や量など様々な種類の商品を用意することで，自分が欲しい商品を買うためにはことばを使わなければならないと子どもたちが意識し，文房具屋さんとのやりとりの中で自分からあうことばを考えて使おうとしていく。

本時の目標

1　文房具屋さんにあいさつをしたり話しかけたりして，頼まれた文房具を買うことができる。

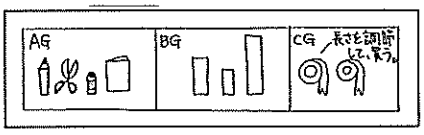
2　（AG）「えんぴつ」等の名詞や（BG）「長い」「短い」などの形容詞や「ください」などの動詞（CG）「もっと長い」などの副詞や形容詞をとらえ，使うことができる。

準　　備

駅，文房具屋さん，文房具，ヒントカード，音声カード，ランゲージマスター，模型，流れ図

展　　開

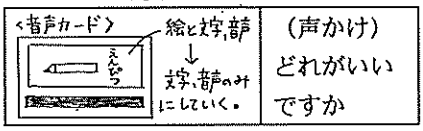
活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1　前時にお母さんに頼まれてお買い物に行ったことを振り返り，お母さんに何か買ってきて欲しい物はないのか聞く。 ○　文房具を買うために，お店屋さんとやりとりをするということがわかり，意欲的に取り組むこと （めあて）　ぶんぼうぐやさんに　ほしいものを　つたえて　かいものを　しよう。	1　活動への興味関心をもたせるための支援 ※　活動場面の図と流れの提示 ※　流れ図の提示 ※　買ってくる物の提示 AG：鉛筆，BG：折り紙，CG：リボン
2　電車に乗って買い物に行く。 (1)　本時の活動の流れと買ってくる物をお母さんから聞く。 ○　電車に乗って文房具屋さんに買い物に行くという活動の流れがわかること (2)　電車に乗って出かけ，文房具屋さんで買い物をする。	2　ことばで伝えて，買い物ができるための支援 ※　ことばでやりとりをするための場と役割の設定 ※　個に応じた商品を調節できるようなお店屋さんでの商品の配置



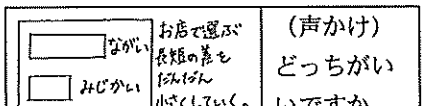
AG	BG	CG
○　お店屋さんからのあいさつに答えたり相手に呼びかけたりして，かかわろうとすること ○　欲しい物を伝える場面で「えんぴつ」などの名詞と要求のことばや動作を合わせてとらえること	○　自分からあいさつをしたり，話しかけたり，聞かれたことに答えたりしてかかわろうとすること ○　選択する場面で，「長い」「短い」などの形容詞や「ください」などの動詞をとらえること	○　相手がよく分かるように詳しく話したり，分かるまで伝えようとしたりしてかかわろうとすること ○　選択する場面で，「長い」「短い」などの形容詞と，副詞「もっと」をあわせてとらえること

※　ことばを使えるためのヒントカードの提示と個に応じた声かけ

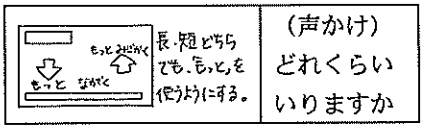
AG：絵とことばが書かれた音声カードの提示

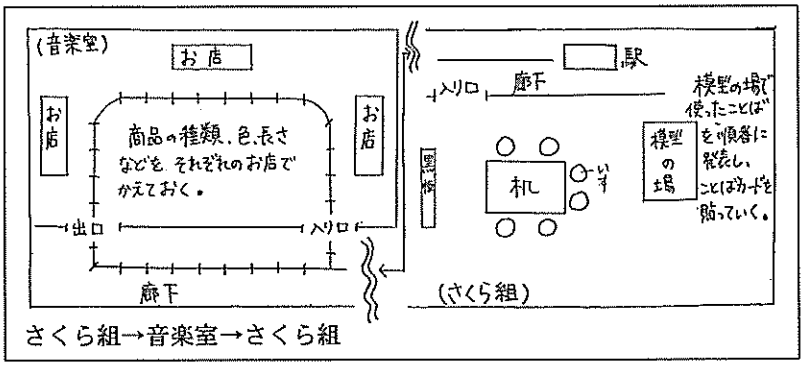


BG：長・短など反対の意味のことばと絵が描かれたカードの提示



CG：「もっと」を表す絵とことばが書かれたカードの提示





3　お母さんに買ってきた物を渡す。

○　使ったことばを確認し，ことばを使ったやりとりができたことに対して自信をもつこと

3　自信をもつための支援

※　ことばを確認していくための模擬の場と，一人一人への賞賛

相手の位置や的に応じてボールをパスしたりシュートしたりする動きを生み出す体育科学習

第5・6学年梅組　体育科学習指導案

指導者　　下　川　勝　彦

題材　つなごう!　グリッドパスシュートゲーム

指導観

○　本学級の子どもたちは，５年生３名，６年生４名の計７名で構成されている。子どもたちは日頃から友達と一緒に固定施設で遊んだり追いかけっこをしたりすることが多く，運動遊びへの関心意欲が高い。また，子どもたちは，これまでに攻守分離型のゲームを中心に経験してきている。そこで，攻守分離型から攻守混合型へつながるボールを使ったゲームを行い，そのなかで，ゲームを楽しみながら状況に応じた動きを生み出すことができるようにしたい。このことは，運動の基礎的技能を高めることと身体活動に喜びを感じたり自信がついたりすることができるようになり，豊かな生活を営む力を育てる上でも意義深い。

○　本題材の「グリッドパスシュートゲーム」は，プレイする位置を固定した攻守混合型ゲームである。具体的には，コートの中にそれぞれグリッドによってプレイゾーンを決めて，コートの中には的があり，外の壁と中の的をうまく使って味方にパスできることや相手のいる位置をよく見て，ゴールの空いているところに向かってシュートするというものである。本題材は，場の変化や人の位置，動きによって自分で判断しながらボールを味方にパスしたりシュートしたりする動きを生み出すことをねらいとしている。主な学習内容は，①ゲームの進め方やきまりを理解すること，②味方や相手の位置，的やゴールの位置などの状況に応じて味方にパスしたりシュートしたりする動きを生み出すこと，③チームで得点する楽しさを味わい，ゲームへの意欲を高めることである。

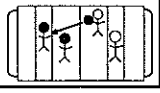
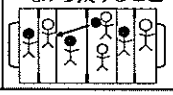
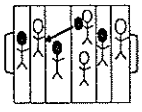
○　本題材の指導にあたっては，プレイする場所をグリッドで決めることでゲームでの場と人による状況をとらえ，味方につながるようにボールをパスしたりシュートしたりする動きを生み出すことができるようにする。そのために，であう段階では，「グリッドパスシュートゲーム」に出合わせ，試しのゲームにより活動の手順やきまりを理解させ，動きを体験させる。うみだす段階では，的のあるゲームの場を変化させ，味方の位置をとらえてパスやシュートの動きを引き出していく。また，状況をとらえるための声かけや動作補助を行い，多様に動きを体験しながら身に付けることができるようにする。いかす段階では，身に付けた動きを発揮させ，満足感を十分に味わえるようにする。

目　　標

1　グリッドパスシュートゲームのきまりを理解し，グリッドに区切られた場所で，チームの仲間にパスをしたり相手をかわしてシュートしたりして楽しくゲームを行うことができる。

2　グリッドのある場で，ゲームをしながらボールを相手の動きに応じて味方や的を意識してパスをする動きや相手がいる位置に応じて空いている場所をねらってシュートする動きを生み出すことができる。

計　　画（約５時間）

段階	であう段階（１時間）	うみだす段階（３時間）			いかす段階（１時間）
活動と内容	1　試しのゲームをしながら，ゲームの手順や方法，勝ち負けのきまりや役割を知る。 ○　ゲームのきまりや手順を理解し，試しのゲームのなかで友達にパスやシュートの動きを体験すること	2　変化する場でゲームを楽しむ。 (1) 攻守分かれた場で楽しむ。① ○ ゴールの方向に投げること 	(2) 的のある場で楽しむ。本時① ○ 相手のいない方へ投げること 	(3) 的が小さくなった場で楽しむ。① ○ 相手の位置を見ながら投げること 	3　これまでに行ったゲームでの動きを出し合い，的のない場でゲーム大会をする。 ○　これまでに身に付いた動きを，ゲーム大会で出し合うこと 
	ゲームの場や友達とかかわりながら自分で判断してパスやシュートの動きを生み出していく生活がわかる学び				
支援	※　きまりをとらえさせるための試しのゲームとモデル演示	※　ゴールの数，広さや的などの場の変化と一人一人の実態に応じたチャレンジゲーム			※　動きのモデル演示と動きが身に付いたことへの賞賛
評価規準	●　試しのゲームをしながらゲームの手順やきまりをとらえてパスしたりシュートしたりする動きをつかんでいる。	●　場の変化から状況に応じて味方へパスが通るように投げる動きを生み出している。 ●　味方の位置や動きに応じてボールを投げる方向や強さを変えている。			●　これまでのゲームを振り返り，身に付けたパスやシュートの動きをゲームのなかで発揮している。

本時のかかわりのポイント

「グリッドパスシュートゲーム」において，場と友達とかかわるなかでパスやシュートの動きを生み出すことができるようにするために，まず，相手や味方の位置によってパスやシュートをする方向やタイミングをゲームを途中で止めながら教師の動作補助や友達のモデル演示によりつかませるストップゲームをする。次に，教師を相手や味方にしてゴールや的，味方を目印として投げる動きを繰り返し身に付けさせるチャレンジゲームをする。そして，投げる方向やタイミングを考えてパスしたりシュートしたりする動きを自分から生み出すフリーゲームをする。

本時の目標

1　チームでパスをつないだりシュートしたりすることで得点を増やすことがわかり，意欲的にゲームを楽しむことができる。

2　的や味方にボールを投げてパスをする，相手がいない方向にシュートする動きを自分から生み出すことができる。

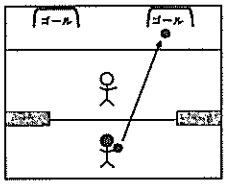
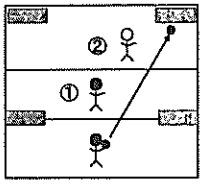
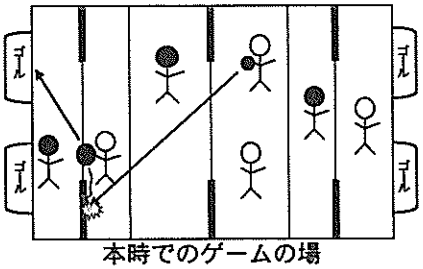
Aグループ：ゴールや的を目標として意識しながら，相手のいない方の的やゴールにパスやシュートをすることができる。

Bグループ：味方の位置を見て，ボールを投げる方向やタイミングを判断しながらパスやシュートをすることができる。

準　　備

得点板，ボール，ボード，ストップウォッチ，ゲームの手順表，ポジションの表

展　　開

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1　前時で行った「グリッドパスシュートゲーム」でのボールをパスやシュートする動きを振り返り，本時の場での学習のめあてをつかむ。 ○　試しの活動を行いながら，的があってゴールが２つあるコートを把握して，本時のゲームでの動きの課題をつかむこと （めあて）　ゴールが2つで　まとがある　コートで　パスや　シュートを　して　グリッドパスシュートゲームを　たのしもう。	1　めあてをつかみ，意欲的にゲームを行おうとするための支援 ※　前時の活動を振りかえさせるための動きのモデルや写真の提示 ※　２つのゴールや的のあるコートをとらえさせるための試しの活動
2　チームに分かれて「グリッドパスシュートゲーム」をする。 (1)　４人対３人の対戦で新たな場でストップゲームをする。 ○　２つのゴールや的のあるコートをとらえて，味方へボールをパスしたりシュートしたりする動きをつかむこと (2)　パスやシュートの動きを身に付けるチャレンジゲームをする。 ○　相手を見ながら空いている方のゴールにシュートしたり的や味方にに向かってボールを投げてパスしたりする動きを身に付けること	2　ゲームで場や人の位置などの状況に応じてパスしたりシュートしたりする動きを生み出すための支援 ※　パスが味方につながる補助の的と相手の位置によって空いている方をとらえやすい２つのゴールの設定 ※　４人対３人の対戦のチーム編成とプレーの位置のローテーション設定 ※　一旦プレーを止めて動きをつかませるストップゲームでの成功例と失敗例を比較した教師のモデル演示や動作補助 ※　繰り返しパスやシュートの動きを身に付けるためのシュートとパスの２つのチャレンジゲーム
 **チャレンジゲーム１** １対１で教師が対戦相手となり空いている方をねらうゲーム  **チャレンジゲーム２** AGは①に，BGは②に教師が入りパスをつなぐゲーム	
AG　○　空いているゴールや的を目標として，対戦する相手のいない方のゴールや的に向かってパスやシュートをする動きを身に付けること BG　○　味方のいる位置を見て，ボールを投げる方向やタイミングを判断しながらパスやシュートをする動きを身に付けること	
(3)　チャレンジゲームで身に付けたパスやシュートの動きをフリーゲームで生み出す。 ○　相手の動きをよく見て，方向を決めて素早くパスしたりシュートしたりすること  **本時でのゲームの場**	Aグループ：目標となる的やゴールを意識させるために教師が演示をする。 Bグループ：味方や相手の位置によって投げるタイミングや方向の声かけをする。 ※　フリーゲームでの相手や味方の位置，タイミングを知らせる声かけ
3　得点の成果とゲームのなかで動きを生み出したことを話し合う。 ○　ゲームを振り返り，得点板で自分たちのチームの得点を数えて，たくさん得点できたことと，パスする動きやシュートする動きが変わったことをとらえて達成感を味わうこと	3　学習したことへの達成感を味わわせるための支援 ※　パスやシュートの動きが変わったことをとらえさるためのモデル演示

生活情報の調査と友だちとの交流で，自分の健康おやつメニューを見つけ出す保健学習

第4学年1組　体育科（保健）学習指導案

指導者　久保勝美（T1）　甲斐七七子（T2）

単元　オヤ，オヤッ？ おやつ！　～健康によい　おやつ発見～

指導観

○　本単元は，健康な生活と体の発育・発達のために必要な栄養，運動，休養・睡眠のうち，他の習慣と比較し頻度が1日3回と多い栄養に焦点を当て，そのなかでも子どもが自分で選択しやすいおやつについて取り上げる。日頃何気なく口にしているおやつが成長に大切な栄養の一部であることを認識するとともに，健康によいおやつについて知り，実際に選んで食べられるようになることをねらっている。生活の学びで展開する本単元では，おやつに含まれる糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎが健康に悪影響を及ぼすことを知り，これまでのおやつの摂り方を振り返り疑問をもつことからスタートする。そして，健康によいおやつメニューを考え実践し，知識を生活に結びつける。これは，健康生活を更新する自信をもつことにつながり，意義深い。

○　本学級の子どもたちは，3年生時の「保健」で，健康な生活のために栄養，運動，休養・睡眠のバランスが大切であることについて学習している。休み時間には，運動場で元気に遊ぶ姿が見られ，体調不良で保健室を訪れる子どもも少ない。しかし，給食では野菜類の残さいが多く，事前アンケートからは，おやつを食べて食事が食べられなかったことがある子どもが半数弱いるなど，学習が実践に結びついていない面もみられる。そこで，自分で選ぶことができる身近なおやつを取り上げ，健康なおやつメニューを考えさせることから健康と成長に必要な栄養を意識させる。特に摂り過ぎが問題視されている糖分，脂肪分，塩分について学ぶことは，将来の健康づくりの上でも価値がある。

○　本単元の指導にあたっては，知識が実践に結びつきやすいように，まずおやつの中身について実感を伴うダンスやおやつに含まれる砂糖，油，塩の実物の提示と，1日の必要量との比較を行い，これまでのおやつの摂り方を振り返る。次に，栄養士をゲストティーチャーとして迎え，おやつ選びのポイントを聴きグループで考えを出し合いながら，健康によいおやつメニューを考える。実際に家庭で実践したものを「おやつ日記」に記録し，それをもとに再度，ゲストティーチャーの評価や友だちのアドバイスを受けてよりよい「健康によいおやつメニュー」へと繰り返し更新していく。

目　標

1　ダンスやアンケート結果から自分のこれまでのおやつの摂り方に疑問をもち，ゲストティーチャーなどからの情報をつかって，意欲的に自分のおやつメニューを見つけ，「おやつブック」をつくりあげることができる。

2　おやつの大切さと，カロリー，糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎが及ぼす体への影響について知り，それらのバランスに留意しておやつを摂らなければならないことがわかり，選んで食べることができる。

計　画（約3時間＋課外）

段階	気付く段階（1時間）	深める段階（1時間＋課外）	生かす段階（1時間）
活動と内容	1　よく食べているおやつについて振り返り，摂り方に疑問をもつ。　本時 (1)　ダンスでエネルギーを実感する。 ○　成長に必要なエネルギー量の把握 (2)　糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎの害を知りおやつの摂り方を話し合う。 ○　調和のとれたおやつの摂り方についての課題を設定すること	2　健康によいおやつの摂り方について，栄養士から話を聴き，健康によいおやつの摂り方をグループでアイデアを出し合って考える。 ○　成長に必要な，調和のとれたおやつの摂り方を理解すること	3　栄養士のおやつを試食し，各自の実践を発表し合い，様々な工夫について知り，よりよいおやつメニューを考える。 ○　成長に必要な，栄養バランスのとれたおやつの摂り方を，今後も実践しようとする意欲をもつこと
自分にあった健康によいおやつメニューを追究し，自らの健康生活を変えるといった生活の学び			
支援	※　アンケート結果とおやつの写真カードの提示，ダンス活動の設定 ※　菓子等の糖，脂肪，塩の実物提示	※　グループでメニューを考える場の設定とゲストティーチャーによるメニューの評価	※　自分のおやつメニュー実践に対する評価とアドバイスを受ける場の設定
評価規準	●　カロリー，糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎの害について理解している。 ●　これまでのおやつの摂り方に疑問をもち，よいおやつへの求めをもつ。	●　疑問をもとに，グループで意見を出し合い，健康によいおやつメニューを考えようとしている。	●　よりよいおやつメニューをみつけ，生かそうとしている。 ●　今後の生活での実践意欲を高めている。

本時の協働のポイント

日頃食べているおやつは，みんなが健康に成長できるための摂り方なのかと疑問をもち，フリフリダンスによるおやつに含まれるカロリーの実感や，実際に含まれる糖分，脂肪分，塩分の実物提示をもとに，自分や友だちのおやつの摂り方を振り返り，交流によっておやつに対する見方，考え方を共有しながら，共通課題をつくり出す。

本時の目標

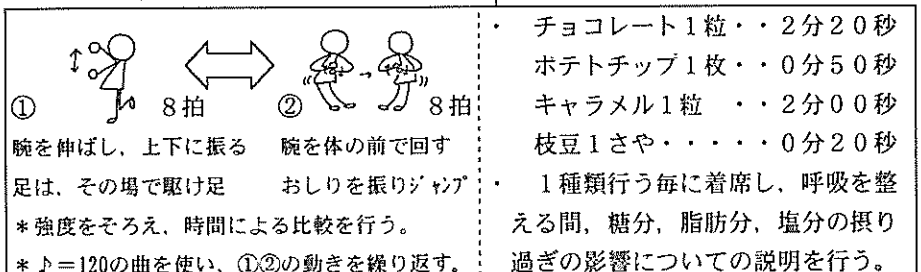
1　自分たちの日頃のおやつの食べ方について気付き，健康に成長するためには今のままのおやつの摂り方でよいのか，これまでの生活を振り返り，みんな健康になるためのおやつの摂り方について課題をもつことができる。

2　おやつに含まれる，カロリー，糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎによる体への影響を理解することができる。

準　　備

板書用カード，おやつの写真カード，事前アンケートのグラフ，ＣＤデッキ，ストップウォッチ，おやつに含まれる砂糖，油，塩の提示物，保健学習ノート（「オヤ，オヤッ？おやつ！ブック」）

展　　開

活　動　と　内　容	子どもの思考の流れ
1　提示物から自分がよく食べているおやつを選んで，それに含まれているエネルギーや成分について考え，おやつの摂り方について話し合う。 ○　普段食べているおやつについて，これまでの摂り方に気付き，健康に成長するためのおやつについて知りたいという意欲をもつこと （めあて）　おやつに入っているものを調べ，みんなのおやつのとり方が今のままでよいのか考えよう。 ※　事前にとったアンケート結果の提示と，普段食べているおやつの写真カードを提示し，含まれるカロリーを学習ノートに記入する。	○　おやつカードがいっぱいあるな。昨日もあのおやつ食べたよ。大好きなおやつがたくさんだ。 ○　これから，どんな学習をしていくのかな。楽しみだな。 ○　選んだおやつには，この位のカロリーがあるのか。今までカロリーなんて考えたことはなかったな。
2　よく食べているおやつのカロリーについて，フリフリダンスを行い，糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎが体に与える影響について養護教諭から話を聞き，今までの自分のおやつの摂り方を振り返る。 (1) おやつに含まれているエネルギーを運動で使うと，どのくらい動くことが必要か，フリフリダンスで試し実感する。 ○　成長に必要なおやつのエネルギー量と，おやつの種類によってのエネルギー量について把握すること ※　ＣＤデッキを準備する。　［フリフリダンス］ ※　おやつ別のエネルギー消費の運動量を整理する。 (2) 糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎによる体への影響（害）について，養護教諭から話を聞き，成分表示を調べてみる。  ①　8拍　②　8拍 腕を伸ばし，上下に振る　腕を体の前で回す 足は，その場で駆け足　おしりを振りジャンプ ＊強度をそろえ，時間による比較を行う。 ＊♪＝120の曲を使い，①②の動きを繰り返す。 ・　チョコレート１粒・・２分２０秒 ポテトチップ１枚・・０分５０秒 キャラメル１粒　・・２分００秒 枝豆１さや・・・・・０分２０秒 ・　１種類行う毎に着席し，呼吸を整える間，糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎの影響についての説明を行う。	○　これからどんなおやつを，どのくらい食べたらいいのだろう。とても知りたいな。 ○　栄養士の先生に，体によいおやつのことをいろいろ詳しく教えてもらえないかな。そして自分のおやつブックにいかしたいな。
○　糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎによる健康への害を知り，調和のとれたおやつについて課題把握すること ※　おやつのうち，スナック菓子と清涼飲料水に含まれる糖分，脂肪分，塩分の実際量とイラストを提示する。 ［実物の提示］ 	○　こんなにたくさんの砂糖や油を食べていたら，絶対体に悪そうだな。 ○　これまで，何も考えずにおやつを食べていたな。このままだと，健康に悪い影響が出るかもしれない。
3　健康に必要なおやつの摂り方と，３年生で学習した一日の生活のリズムを思い出し，健康や成長によいおやつの摂り方について話し合う。 ○　健康な体をつくるための栄養，運動，休養・睡眠の３つのバランスの理解と，みんなが健康になる栄養としてのおやつについて調べていきたいという共通課題を明確にすること ※　事前アンケート結果から，「おやつを食べて，食事が入らなかったことがある」割合を示したグラフを提示する。	○　これから，どんな学習をしていくのかな。楽しみだな。 ○　選んだおやつには，この位のカロリーがあるのか。今までカロリーなんて考えたことはなかったな。 ○　このおやつのエネルギーを使うには，どのくらいの運動量が必要なのかな。調べてみたいな。 ○　フリフリダンスか，おもしろそうだな。これでエネルギーの量がわかるのか。やってみたいな。 ○　おやつの種類によって，きつさが全然違うよ。エネルギーの量が種類によって違うんだ。

指導力アップ講座

全体講演

演　題

「他者と共に
学ぶということ」

講　師

上智大学 総合人間科学部 教育学科
教　授
奈　須　正　裕 先生

研究紀要の部

研究紀要目次

研究主題構想 …… 92
豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造
－協働を中核とした学習の展開－
算数科学習の<ふくおかプラン> …… 114
－自ら筋道立てて考える算数科学習－
国語科学習の<ふくおかプラン> …… 121
－言語を駆使して考えをつくる国語科学習－
音楽科学習の<ふくおかプラン> …… 128
－自ら創造的に音楽にかかわる音楽科学習－
図画工作科学習の<ふくおかプラン> …… 130
－創造的な技能を駆使しながら新たな表現を創り出す図画工作科学習－
体育科学習の<ふくおかプラン> …… 132
－価値ある動きを生み出す体育科学習－
－自ら健康生活をつくり出す保健学習－
社会科学習の<ふくおかプラン> …… 140
－社会を形成する一員としての判断力を身に付ける社会科学習－
家庭科学習の<ふくおかプラン> …… 144
－家族とかかわりながら生活を見直す家庭科学習－
生活科学習の<ふくおかプラン> …… 148
－知的な気付きに高める生活科学習－
道徳学習の<ふくおかプラン> …… 152
－道徳的判断力を高める道徳学習－
理科学習の<ふくおかプラン> …… 156
－自ら科学的に追究する理科学習－
総合的な学習の時間の<ふくおかプラン> …… 163
－自己の生き方を創る総合的な学習－

<ふくおかプラン>の全体枠組み

課程	低学年	中学年	高学年
文化の学び	算数		
	音楽		
	図画工作		
	国語		
	体育		
生活の学び	生活科	保健	
		理科	
		文化総合	
		社会	
			家庭
	特別活動		
		生活総合	
人間の学び	道徳の時間		
			人間総合

障害児教育部主題構想 …… 172
豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造
国語科学習の<ふくおかプラン> …… 174
－ことばを広げる国語科学習－
体育科学習の<ふくおかプラン> …… 178
－状況に応じた動きを生み出す体育科学習－
生活単元学習の<ふくおかプラン> …… 182
－自分たちで生活をひろげる生活単元学習－

障害児教育<ふくおかプラン>の枠組み

課程	低(ふじ組)	中(さくら組)	高(梅組)
生活	算数		
	国語		
	音楽・図画工作・体育		
	生活単元学習		
	合同生活単元学習（異年齢・縦割り）		
			特別活動（クラブ・委員会）
	日常生活指導		

帰国子女教育部主題構想 …… 186
自信と誇りをはぐくむ帰国子女教育
社会科学習の<ふくおかプラン> …… 188
－社会的事象についての知識を獲得していく社会科学習－

帰国子女教育<ふくおかプラン>の枠組み

課程	4年	5年	6年
文化	国語・算数（個別のカリキュラムをもとに）		
	社会（帰国子女教育独自のカリキュラムで）		
	理科・音楽・図画工作・家庭科・体育（通常学級との交流学習で）		
生活	国際交流タイム（総合的な学習の時間）		
	特別活動（学級活動帰国子女学級合同で）		
人間	道徳学習（体験に応じて柔軟に扱う）		

平成１８年度　研究全体構想

豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造

－協働を中核とした学習の展開－

Ⅰ　豊かに生きる子どもとは

1　現在，教育に求められていること

現在，中央教育審議会を受けて，学習指導要領の見直しが行われており，国民もその内容に関心を強めている。この背景には，学力調査の結果が公表され，全国的・社会的に「学力低下」に対する興味・関心が高まったことが原因である。しかし，調査の内容は，知識・技能のみではなく，知識・技能を場や状況に応じて使ったり，積極的に自分の考えをつくったり表現したりすることを評価しようとするものであった。このことは，生涯学習社会を見据え，子どもにはぐくむべき学力が時代とともに変化しているということである。ただ，単に練習したり，覚えたりするだけでは身に付かない，実の場に応じて活用することができる能力の育成が，これからの教育に求められているのである。

現代社会は，誰の目から見ても唯一の正解で収まらない，多様な「応え」が存在する。将来を担う子どもたちには，自信と自覚をしっかりともたせ，自分も他者も納得できる「応え」を見出す力を付けていく必要がある。

さらに，他者と共に学ぶことを通して，身に付けた学力をより高い見識へと高めることができる。このことが，直接，将来の社会で他者と豊かに生きる人間をはぐくむことにつながることはいうまでもない。

2　豊かに生きる子どもとは

豊かに生きるとは，学校で学んだことを単に身に付けるだけではなく，自分が生きることに活用できるということである。

子どもが自ら活動する目的をしっかりともつことや，自分の求める活動をつくり出し，つくり変える主体であるということ，そして活動を自分自身の力で実現できるための諸能力を身に付けることが，自分の力で現代社会を生き抜くために必要である。また，同時に，子どもが集団のなかで仲間と活動しながら，社会性を身に付けていくことも大切なことである。子どもに帰属する集団の慣習や考え方の特性を身に付けるだけではなく，自ら集団を形成して生活したり，学習したりしようとする人間の根本的な資質・能力に伸ばす必要がある。

豊かに生きる子どもとは，自分の身の回りの生活や文化，人間と深くかかわることを通して，生きていくうえで必要な知識・技能を身に付け，自分の生き方を主体的に形成することができる子どもである。

3　豊かに生きる子どもに必要な力は

▼　学ぶ意義＝学ぶ意味と価値を感じる力

学ぶことが子どもたちの現在，及び将来にわたって，どんな意味や価値があるのかを自覚するということである。そのためには，子ども自身が学ぶことに対する目的意識を明確にもつことと，学んだことが生活にいかされるという実感をもつことが大切である。

▼　他者と共に学ぶ力＝思いや願いの実現に活用できる力

学ぶ力を２つの学力で整理する。各教科等の学力については，その目標・内容から割り出さなければならない。そして，個人内で身に付けた力が生きていくうえで使えるものにするためには，他者とのかかわりを通して高める必要がある。

－子どもに身に付けるべき２つの力－

A能力	B能力
実体的学力 知識・理解 技能	機能的学力 意欲，思考力，表現力， 判断力，課題発見力， 問題解決力，自己分析力， コミュニケーション力等

▼　生きる自分のよさへの自信・自覚

社会で他者とかかわり，自分自身が生きる価値のある存在，成長し続ける存在，何かを成し遂げることができる存在であるということに気付くことである。そして，自分の導き出した「応え」が他者に認められる学習体験・経験を積むことが必要である。

そこで，豊かに生きる子どもの姿を次の３つと考える。

■豊かに生きる子どもの姿

○ 自分の学びへの強い求めをもち，学んだことを生かすことによって，学ぶ意義を実感している子ども（意義）

○ 他者とかかわり，生きるために必要な能力を身に付け，生活を見直したり，文化を獲得・創造したりして自分を人間として高める子ども（能力）

○ 自分が他に役立つ存在であると感じたり（有用感），成長し，何かをやり遂げる力があることに気付いたりして（自己効力）将来を生きる自分に自信をもっている子ども（自信）

Ⅱ　本校教育課程編成のために

－「生活・文化・人間の学び」，「自己開発」，「協働」－

1　学びを意義化する

自分の学びが生きていくうえで意義あるものとしてわかるためには，学んだことが「使えた」，「役立った」ということや学ぶことそのものの楽しさを感じたりすることが大切である。そこで，学ぶことが役立つと実感できるように，次の３つの生き方から考える。

▼　「生活者として」生きる

子どもが，自分の身辺の生活をはじめとする所属する集団，地域や国家などで，生活のための適切な判断や行為を行っていくことである。

子どもたちは，自分自身の生活習慣や家族，あるいは学級集団，学校，地域といったいろいろな範囲での生活を送っている。それぞれの場面での子どもの役割は異なり，集団とのかかわり方も違う。自分自身の生活では，自分の生活実態を把握し，更新すべき目標を設定し，そこへ向かう過程が重視されるが，集団の生活では，そこにいる人とのかかわりや自分の集団での立場も考えなければならない。生活者として生きるということは，このように，常に現在の生活をよりよくしようとする意欲や他者とのかかわりが大切であり，何より具体的な子どもの生活自体を変えていく体験・経験が必要なのである。

▼　「文化の担い手」として生きる

子どもが，言語や論理，数量，運動，芸術，人間的価値といった文化を継承し，創造していくことである。

カール・ポッパーは，文化の世界をつくる人間の様相を３つの世界としてとらえている。１つめは，目に見える，ふれることができる生物や人工物等の具体的な世界である。２つめは，１つめの事象にかかわるなかで生起する知識や知覚，思考，想像や創造といった各個人の内面意識をさしている。そして，３つめは，内的な活動の結果，客観的に存在する知識や概念，科学や芸術，学問等の理論体系が形成されるとしている。

このことから，文化の担い手として生きるためには，具体的な事象と深くかかわることを通して，思考や想像をはたらかせ，子どもなりの科学や芸術といった文化をつくる体験・経験が必要なのである。

▼　「人間として」生きる

子どもが，人間としての生き方，すなわち人間性を身に付ける学びであるとともに，自分自身を客観的に見つめ，自らの目標を設定し，生き続け自己形成ができることである。子どもは人間として生きていることに対して無自覚である。あらためて「自分は人間である」と考えることはほとんどない。また，自分自身を客観的に見つめ，そのときどきの自分の判断や考えを振り返ることも大変難しい。そこで，必要なことは，人間というものの特質や在り方について考える場を設けたり，自分自身を内省する機会を準備したりすることが必要なのである。

このように，人間が生きていくことを「生活」，「文化」，「人間」という３つの側面からとらえることができる。このことは，前述の様々な現代の人間をめぐる問題事象の解決へと向かう人格形成の方法になると考える。これら３つの生きる側面が獲得された状態を示し，子ども自身が生活を変える，文化をつくる，自分自身の生き方を高めるといった３つの側面から豊かに生きる姿を考えるのである。

2　豊かに生きる子どもをはぐくむ全体像

本校ではまず，人間が生きる「生活」，「文化」，「人間」という３つの側面からの学びを子どもたちに保障するように教育課程を考える。そして，「生活者」として，「文化の担い手」として，「人間として」生きる側面を獲得させていくためには，「生活・文化・人間の学び」それぞれの学びの体験・経験が必要であり，この豊かに生きる３つの方向で教育課程を編成する。

また，３つの学びに自分を振り返り，自己の力を伸ばす「自己開発」，さらに共に学ぶことで社会が求める社会性や学んだことを生活に生かす力をつける「協働」を方法論として位置づける。その内容や方法について，本校では，３年間をかけて実践的に研究を進めてきたところである。

以上のような内容が本校独自の特色ある教育課程の全体像であり，めざすべき教育課程全体の目標像を表しているのである。

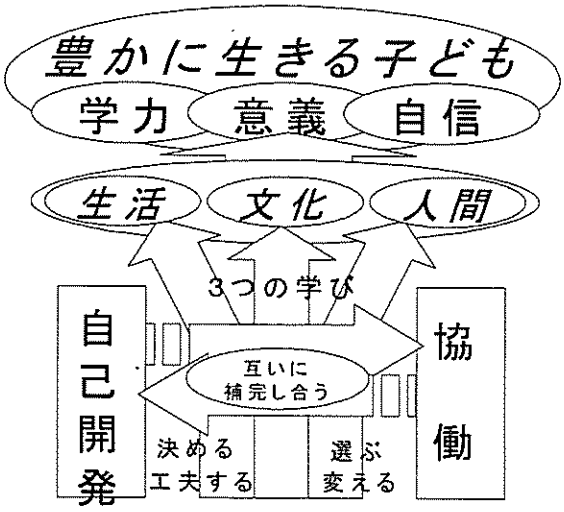


図　豊かに生きる子どもをはぐくむ構想図

Ⅲ－1「生活・文化・人間の学び」で単元・題材をつくる

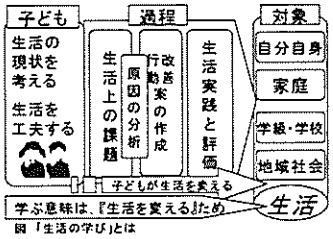
1 「生活の学び」とは

▼ 学習対象は，子どもの本物の「生活」

生活の学びでかかわる対象は，「生活」自体である。そして，大切なことは，生活のなかにある問題を解決し，子ども自身が生活をよりよく変えることである。

▼ 「生活の学び」の過程＝生活を変える(生活更新)

「生活の学び」の過程は，子ども自身が学級，学校，地域社会等での生活をよりよく変える過程である。



図「生活の学び」とは

① 生活の問題の発見と目標設定

子どもが自分の生活を見つめ直し問題を明らかにしたり，望ましい生活と出合ったりすることを通して，理想の生活をつくり出すことを目標として設定する。

・ 問題解決型の活動構成

生活の諸問題を解決する過程として構成する学び

・ 課題達成型の活動構成

生活更新の課題を達成する過程として構成する学び

② 原因の分析

問題を引き起こしている原因を分析したり，よりよい生活への諸要因を取り出したりする。

③ 行動案の立案

よりよい生活を実現するための行動を模索し，自分自身や集団の行動案を決定する。

④ 生活実践と評価

具体的な生活の在り方を求め，実践し評価して繰り返しつくり変えることを大切にする。

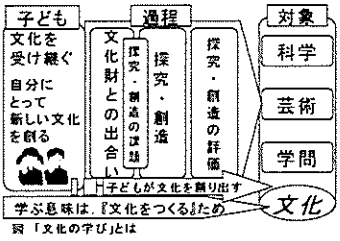
2 「文化の学び」とは

▼ 学習対象は，すぐれた「文化財」

文化財・文化遺産は，人間が英知と経験をもとにつくったものである。それは，人類の真理探究の成果としての諸科学，学問，芸術である。文化を「わかり」，「つかい」，自ら「創り出す」経験が必要である。

▼ 「文化の学び」の過程＝文化をつくる(文化創造)

「文化」の学びの過程は，子ども自身が文化を受け継ぎ，子ども自らが自分の文化をつくり出す過程である。



図「文化の学び」とは

① 文化財との出合い

すぐれた文化財と出合い，そのよさを自分でも実現したいという思いや疑問，気がかりをもつ。

② 探究・創造の課題設定

「文化の学び」の課題設定と活動構成には，次の２つが考えられる。

・ 探究型

疑問や気がかりを探究する過程として構成する学び

・ 創造型

創造的な課題を実現する過程として構成する学び

③ 探究・創造

課題について調べたり考えたり，自分が文化を創造したりしていくなかで，知識・技能を獲得する過程。

④ 探究・創造の評価

最終的には，自分にとって新しい文化をつくり出す。

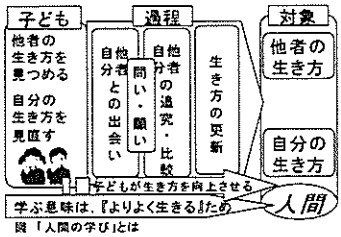
3 「人間の学び」とは

▼ 学習対象は，人間そのもの

「人間」の学びで対象とするのは，具体的な人間，他者の生き方と自分自身である。人生の意味を問い続け，生き方を見つめる人，生きていこうとする自分自身を対象とし，具体的な人間を通して学ぶことが必要である。

▼ 「人間の学び」の過程＝よりよい自分に高める(自己向上)

「人間の学び」の過程は，他者の生き方を見つめたり，自分の生き方を見直したりして，よりよい生き方に高める学びである。



図「人間の学び」とは

① 自分・他者との出会い

自分の生き方を見直したり，他者の生き方と出会ったりすることから学びが始まる。

② 自分・他者への問い・願い

自分の生き方に対する問いや，他者がなぜ，そのようなことをできたのかといった問いをもつ。

③ 自分・他者の追究・比較

自分の考え方を問い直し，他者の生き方を観察・分析し，その考え方を理解・共感しながら，多面的に追究する。また，他者と自分の生き方とを比較して，よさを取り入れ，自分の生き方を明らかにする。

④ 生き方の更新

自分の生き方を見直し，よりよい生き方への心構えや考え方を応えとして見い出していく。そして，自分自身への見方・考え方が高まり，自分の人間としての成長へとつながる。

Ⅲ－2　自己開発と3つの学びを統合する

1　自己開発とは

子ども一人一人が自らの課題を解決し，決着・納得するために自らの学びを自分自身との対話を旺盛にしながら構成していくことである。

自己開発の学習条件として，次の３つを考えている。

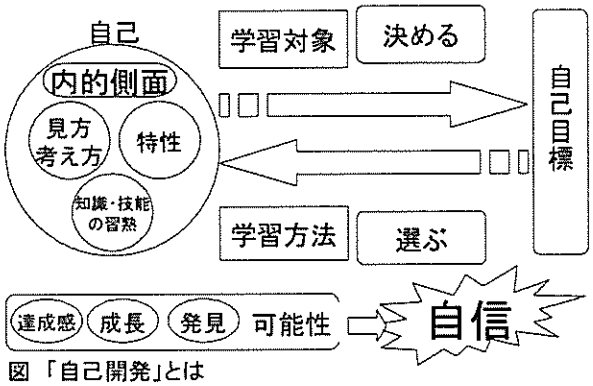
① 学習の目的や手段に対する他者からの独立性
② 学習目標から学習の見通し，実施，学習成果の評価までへの学習過程全体への自己主導性
③ 学習の意味や学習を通して実現する価値にかかわる理解や自覚の中心にある自律性

具体的には，学習目標の設定や，その達成のための学習の見通し，すなわち，学習する対象や方法，順序を考える等の一連の学びのなかのいずれかの場面を，子ども自身に任せることである。このことで，子どもが自分で計画を立てたり，選んだりすることができるようなっていく。

そして，自分の見方・考え方や特性等の実態を省察しなければならない状態を引き起こすことができる。さらに，その学びの過程や結果から，自分でできたという実感をもったり，自分の変容や成長を自覚したり，今まで気付かなかった新しい自分を発見したりして，自分の可能性を理解し，強い自信へと高めていくことができるのである。

このような学習の過程は，ピーター・ドラッカー氏も，その著書のなかで，「これからの知識社会を生き抜くためには，強い自己規律，継続的イノベーション，継続的学習，質的生産性への理解が必要であり，教科内容そのものよりも学習継続の能力や学習意欲の方が大切である」とし提唱している。

「生活・文化・人間の学び」に共通の学習原理として



図「自己開発」とは

2　自己開発と３つの学びを統合する

外的側面と内的側面の両面を大切にしてきた「３つの学び」に，「自己開発」という内的側面からの学習方法を取り入れることによって，子どもがさらに自分の内面を探ったり，見つめ直したりできるようにはたらきかけ，自分の外的な育ちと内的な育ちを両立させることである。

自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する具体的な単元・題材づくりの着眼点として次の４つを考えている。

① 見通しをもとに，自分で学習活動をつくる。
② 自分で追究対象や方法を選択する。
③ 自分の特性を自覚し，学習を工夫する。
④ 他と自分を比較し，自我関与を旺盛にする。

１つ目は，「問いや願い，見通しをもとに自分で学習活動をつくる」という着眼点である。

具体的には，子ども自身が「明らかにしたい」という問いや「こうしたい」という願いを，自分のものとしてもち，自分の追究計画を立てることを大切にする。

２つ目は，「子どもが追究する対象や方法を選択させる」という着眼点である。

これは，単元全体としての学習の見通しが，子ども自身だけでは，できにくい教科等や内容に有効な方法である。学習内容の補充・発展等で，教師が意図的・計画的に選択場面を準備し，子どもに意味をもって選択させる方法である。

３つ目は，「子どもが自分の特性を自覚し，学習を工夫する」という着眼点である。

子どもは，追究するときの方法を考える力や速さ，既有の諸能力等，それぞれの特性をもっている。これらを自分で生かし，高めることができるように，自分の特性を自覚する活動を取り入れる方法である。このときに教師は，学習の場等を工夫できるように意図的・計画的に活動の準備・設定を行う。

４つ目は，「学習対象や他者への自我関与を旺盛にさせる」という着眼点である。

これは，学習対象や他者のような豊かな生き方にかかわるモデルと自分とを比較させる活動を取り入れることで，他と自分との違いを見出し，自分自身を深く振り返り，自分自身を明らかにする方法である。

以上のように，各教科等で単元・題材をつくるときに４つの着眼点を具体化し，方法論として取り入れ，支援を考えることで，自分への自信を深めることができる。

Ⅲ－3　協働を中核とした学習の展開（本年度 副主題）

1　協働とは

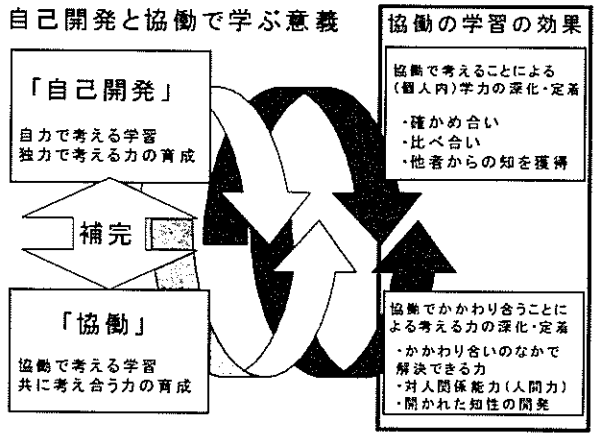
自らの課題や他者と共有化した課題を，他者とのかかわりを通して各々の力を発揮しながら，解決を行うことである。

協働の目的は，他者と自己や集団の「知」の共有をすることによって豊かに生きる子どもをはぐくむことである。ここでの「知」は，子ども一人一人が自己開発によって身に付けた自分の生活者として生きる力，文化の担い手として生きる力，人間として生きる力のことである。また，この「知」は，知識・技能としての「実体的学力」と知的能力としての「機能的学力」に分類される。

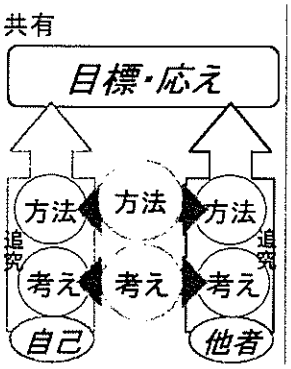
協働は，文化創造・生活更新・生き方向上に至る学びの過程を共有しながら，自己追究で導き出した「応え」を他者とのかかわりによって互いに補い，より高い価値の「応え」につくりかえていく営みなのである。この営みは集団としての「応え」を同時に高めるということから，成員互いの特性をいかし合い，教科等によっては，課題解決という共通の目的を達成するために，協力・協調する関係づくりも行われる。自己追究の活動の更新・創造・向上の「応え」を仲間と共有化することにより，他者の方法・考えを取り入れ，さらなる自己追究を行い，発展的に学びを強めていくことができるのである。このことは，認識と人間関係づくりの両立という面から価値のあることであり，調和のとれた人間を育成していくことにつながる。

2　協働を中核とした学習を展開する

自己開発と協働の位置付け方は，互いが補完し合う関係である。補完し合うとは，めざす力を身に付けるために方法として補う関係のことであり，自己開発で高まった自己が，共に学び合うことで互恵的に集団のなかでより高められることとなる。また，同時に集団としても高まっていくのである。



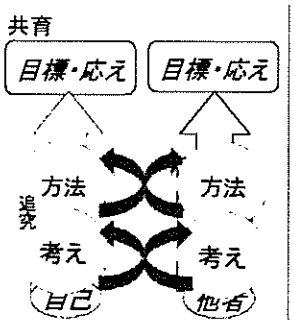
○<共有>



「共有」とは，共通の目標に対して「自己の追究過程で獲得した方法や考えを他者と共有することで，よりよい追究にする」ことである。

例えば，理科の実験の結果，導き出した科学的な見方・考え方を他者と交流することで，自己内で閉じていた価値ある方法や考えを他者と共有化することができる。そして，さらに他者の方法や考えを自分のなかに取り込むことで，自分の方法・考えを広げ，価値ある追究に結びつけていくことができるのである。このときには，他者の方法・考えも同様に高まっていく。

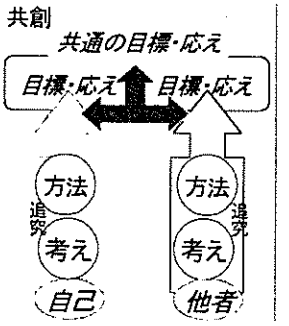
○<共育>



「共育」とは，個別の目標に向かう「自己の方法や考えを他者と比較することで，互いに刺激し合い，互いの追究が高まる」ことである。

道徳の時間のように一人一人の価値判断が認められる場合は自分と他者のめざす目標・応えが一致しない。このような活動において，お互いの方法・考えを交流することで，自分にはない他者の方法・考えに影響を受けて，新たな見方・考えが育つ。これは，他者と自分とがめざす目標・応えは，違っていても，お互いが高まり合う関係なのである。

○<共創>



「共創」とは「自己や他者の追究の方法，考えを出し合うことで，一緒に目標や応えを創り出す」ことである。

例えば，社会科学習の討論の活動で，各自の方法・考えの根拠を明らかにしながら，交流し合うことで，互いの違った方法・考えのよいところだけが補完し合い，新たな方法・考えが創造されるのである。結果として導き出された方法・考えは，他者にも自己にも共通のものとなりうる共創の関係である。また，みんなで目標を一つにし，何かを創り上げることも共創である。

Ⅳ　教育課程編成の基本的な考え方

○　教育課程編成で大切にすること

本校の教育課程は「生活の学び」,「文化の学び」,「人間の学び」の３つの学びを位置付けて編成される。このことを実現するために，次の２つのことを大切にする。

①３つの学びのそれぞれの過程を大切にすること

３つの学びのゴールは，文化の継承者・創造者，生活者，人間自身というように異なり，学びの過程も特徴あるものとなる。文化を継承し，創造するためには，文化の崇高さや巧みさに感動したり，その仕組みを明らかにしたりする知的な追究を中心とする。社会の生活者となるためには，現実生活に近い形で学びを進め，他者と協働し自分の生活を工夫していく。よりよい人間となるためには，具体的な人や自分自身を対象とし，その人の思いや願いにふれる学びが展開される。このように３つの学びによってその過程もゴールも異なる。そこで，各教科等は，３つの学びのどの学びで展開できるか吟味することが必要である。

②３つの学びの関係を明らかにすること

・教育課程全体としての調和を考える

６年間という縦軸の時間の流れと学年の３学期間という横の広がりで，３つの学びが保障されることが大切である。

・各教科等内で，縦・横の流れを考える

各教科等内でも領域や内容によって異なる学びで展開した方が有効な場合がある（各教科等内での横の流れ)。また，学年の系統性からの学びの妥当性の検討（各教科等内での縦の流れ)。

・各教科等での関連を考える

他の各教科等の学びと意図的に関連を図る。一つの教科等で３つの学びすべてを網羅することはできない。しかし，他の教科等の学びとの関連を考えることで３つの学びの意味を深めることができる。

【<ふくおかプラン>編成の手順】

ステップ１
↓
○各教科等で大切にする「学力」（本校の基礎・基本) を明確にする。

ステップ２
↓
○各教科等で重点化する学びを設定する。
○他の学びとの関連も考えて，各教科等の内容の編成，系統化を図る。

ステップ３
↓
○３つの学びに自己開発と協働を位置付けた単元・題材を構想する。

ステップ４
○豊かに生きる子どもの評価と支援を考える。
○教育課程全体を評価し，次年度につなぐ。

ステップ1
各教科等で大切にする「学力」を明確にする

○　各教科等で大切にする「学力」とは

学習指導要領が大綱化・弾力化され，各学校で基礎・基本を設定することが求められている。本校では，各教科等の本質から，大切にする内容や能力を明確にし，基礎・基本を割り出している。

「学力」は，実体的学力と機能的学力に大別される。実体的学力は学びの結果として獲得される「知識・技能」であり，各教科等によって異なる。また，機能的学力としての「知的能力」は，学ぶ過程ではたらく力であり，学んだことを生かす力である。この２つの「学力」を各教科等においてそれぞれ「内容」と「資質・能力」として明確にする。

「学力」本校の各教科等の基礎・基本
○実体的学力(知識・技能)→各教科等の内容へ
○機能的学力(知的能力)→各教科等の資質・能力へ

ステップ2
各教科等で重点化する学びを設定する

1　各教科･領域では

各教科等の本質から設定した「学力」を，「生活・文化・人間の学び」のどの学びで展開すれば獲得・活用できるかを吟味しなければならない。そのときに各教科等を背景にしている親学問の体系や設立の趣旨，新学習指導要領の改訂の基準や歴史的変遷等からも考え，重点化することが大切である。もちろん，それは各教科等の内容領域や学年の発達によっても異なる。

たとえば，国語科や算数科は，「文化」を理解し，創造する能力の育成を重視した教科であり，数学や言語といった世界のすばらしさを感じ取ることが大切である。

理科では，自然のきまりという法則性を見付けていくという「科学文化」を中心に学びを考える。しかし，内容領域によっては，生活環境を科学的な視点でつくり変える学びを考えることができる。

社会科や家庭科は，もともと社会生活，家庭生活をつくることを目的としてつくられた総合的な教科特性をもつ。しかし，家庭生活そのものを科学的に見たり，社会生活が営まれている特色や意味を考え，社会科学的な見方を育てる意味からも「文化」も重視する必要がある。

音楽科は，文化としての音楽美を感じ取り，自分の思いを表現できるようにすることを考える。

図画工作科は，文化としての芸術の楽しみ方や自分でつくり出す能力の育成を大切にしている。また，環境とのかかわりという視点で生活更新をめざす学びとして，位置付けることも考えられる。

体育科は，運動領域の内容は，運動文化の子どもに獲得させる動きや運動自体を構想する力が求められる。保健領域では，科学的な認識とともに生活を変えていくことが期待される。

道徳の時間は，「人間の学び」を中心に重点化する。指導内容の道徳的価値は人間として身に付けるべき内容であり，道徳的判断を求められる場面おいて，人間がもつ弱さや気高さ等にふれて，人間の特質を多面的に見つめさせることができる。

特別活動は，学級活動，児童会活動，クラブ活動，学校行事等様々な学びの場が展開される。それらは直接，学級や学校の生活向上をめざす特質から生活の学びで展開することができる。個性の伸長を図る観点からは人間の学びとしても展開できる。さらには，儀式的行事や学芸的行事等では，平素の学習での文化性を拡充したり，儀式という文化のなかに身を置いたりすることになる。

生活科は，生活に必要な知を獲得していく学びである。身近に自然や社会，そして自分自身にかかわっていくことから，生活の学びを重点としながら，自分自身についてかかわる内容においては人間の学びを重点化できる。

2　総合的な学習の時間では

本校の総合的な学習の時間の目標は次の通りである。

> 生活や文化，人間に出合うことで見いだした自分の課題を追究するなかで，各教科等で獲得した認識や技能を総合化したり生活化したりして，自分の見識を高めるとともに自分への自信や将来への夢や希望をもとにして，自己の生き方を創ることができるようにする。

総合的な学習の時間は，「生活・文化・人間の学び」の３つの学びのいずれでも展開できる。

子どもたちは，各教科等の学習を通して，文化財が意図的，系統的，計画的に教材化された学習対象や学習活動によって文化を継承することの大切さや自ら文化創造することまでを学んできている。

また，生活科や特別活動等で，子どもたちの身近な生活事象を取り上げて学習してきたことで，自分たちの手で生活を変えることの大切さを実感し，生活実態を分析して生活の目標を設定したり，生活行動を模索し，実践したりする力も身に付けている。

さらに，道徳の時間や各教科等の学習において，様々な人々の生き方や生命について考えたり，自分自身の生き方について考えたりできるようになっている。

そこで，本校では，以上の３つの学びから，「生活総合」，「文化総合」，「人間総合」で総合的な学習の時間を編成している。カテゴリーを３つに分けているが，教科等同様，例えば，文化総合が文化の学びだけを総合するというわけではない。生活総合や人間総合についても同様である。総合的な学習の時間を３つに分けることによって，学習対象の選定や学習過程の在り方，目標や内容を明確にすることができる。３つの総合で，各教科等で獲得された知識・技能を総合化させることを意図的・計画的にできるとともに，学習方法・過程を明らかにすることができる。このことで，教師は自分の指導性や専門性をより以上に発揮することができるのである。

ステップ3

３つの学びに自己開発と協働を位置付けた単元・題材を構想する

1　自己開発の単元・題材づくり

３つの学びに自己開発を位置付ける単元・題材づくりの着眼点として次の４つを大切にする。

> ①　見通しをもとに，自分で学習活動をつくる。
> ②　自分で追究対象や方法を選択する。
> ③　自分の特性を自覚し，学習を工夫する。
> ④　他と自分を比較し，自我関与を旺盛にする。

１つ目は，「問いや願い，見通しをもとに自分で学習活動をつくる」という着眼点である。子ども自身が「明らかにしたい」という問いや「こうしたい」という願いをもち，自分の追究計画を立てることを大切にする。

２つ目は，「子どもが追究する対象や方法を選択させる」という着眼点である。単元全体の学習の見通しが，子どもだけではできにくい教科等や内容に有効である。子どもの学習状況に応じて，教師が意図的・計画的に選択場面を準備し，子どもに意味をもって選択させる。

３つ目は，「子どもが自分の特性を自覚し，学習を工夫する」という着眼点である。子どもの追究には個々の特性がある。それを自分で生かし，高めることができるよう，自分の特性を自覚する活動を取り入れる。子どもが学習を工夫できるように活動の準備・設定を行う。

４つ目は，「学習対象や他者への自我関与を旺盛にさせる」という着眼点である。学習対象や他者のような生き方にかかわるモデルと自分とを比較させる活動を取り入れることで，他と自分との違いを見出し，自分自身を深く振り返り，自分自身を明らかにする方法である。

４つの着眼点を具体化し，方法論として取り入れ，支援を考えることで，自分への自信を深めると考える。

2　協働の単元・題材づくり

３つの学びで自己開発する学習に他者と共に学びを強める協働を補完的に位置付け単元・題材づくりをする。各教科等の単元水準で協働の方法を吟味し，３つの「共有・共育・共創」で考える。

①＜共有＞　共通の目標に対して自己の追究過程で獲得した方法や考えを他者と共有することで，よりよい追究にする。
②＜共育＞　個別の目標に向かう，自己の方法や考えを他者と比較することで，互いに刺激し合い，互いの追究が高まる。
③＜共創＞　自己や他者の追究の方法，考えを出し合うことで，一緒に目標や応えを創り出す。

各教科等の単元レベルでは，次の３つを考え，吟味したうえで単元づくりをしなければならない。

▼　何を「協働」すればいいのか？

その単元・題材で何を協働するのか。考えを協働するのか。方法を協働するのか。活動自体が協働なのかということである。各教科等でその特質を吟味し，設定する必要がある。例えば，理科学習では，各自が科学的な視点で実験・観察する自己追究する活動が大切である。仮説設定の段階や，途中の交流，科学的な見方・考えの一般化の段階で，自分の考えや方法を交流（共有）することが考えられる。学級活動では，題材のなかで学級で何か一つのプロジェクト的な活動を立ち上げた場合，その活動自体を協働で創り上げる活動（共創）に個人の考え・方法の交流が位置づく。各教科の特質や単元・題材のめざす方向・ゴールから何を協働すべきか吟味して活動を設定しなければならない。

▼　どんな人と「協働」すればいいのか？

活動を設定するときに，必然的に協働すべき相手は，誰なのかを考えることである。ペアで活動する場合においても，あるいは，グループで活動する場合においても，学習内容や考え・方法等がより高まるためには，等質の相手・集団なのか，異質の相手・集団なのかを考える。そのことで，活動がぐんと深まる。また，同時に仕組む活動が自分と他者の双方の考え・方法が高まる，「共有」なのか，「共育」なのか，「共創」なのかということを吟味しなければならない。

「共有」の活動の場合，考え・方法を共有するためには，考え・方法の結果内容が近い相手や個人と交流すべきであろう。また，「共育」の活動の場合，個人と他者の目標・応えの方向が違っても，考え・方法を比較し合い，お互いに刺激し合って取り入れることができる支持的風土のうえに立って，相手や集団が設定できる。「共創」の場合は，目標・応えの方向性は，見通しとしてもっており，そのうえで，自分の考え・方法を出し合い，相手の考え・方法を取り入れ，さらにみんなで新たな考え・方法を創造できる関係が大切である。

▼「協働」は具体的にどのようにかかわらせるのか？

協働の方法は，まず「共有」，「共育」，「共創」のいずれで他者とかかわらせるのかということである。そして，その具体的な活動は何かということである。「共有」ならば，学習活動は，情報の共有化を行う交流やテーマ別グループで行う調べ学習，同じ課題のグループで行う学習体験等で考えられる。「共育」ならば，学習活動は，思考の違いを認めるような比較交流や情動の響感が起きるような交流での育ち合いが考えられる。「共創」ならば，学習活動は，参加する者で新知の創造ができるような共同制作や，応えを導き出すための討論活動等，みんなで一つの目標・応えの方向に向かう活動が考えられる。このように具体的な他者とのかかわらせ方を吟味するのである。

ステップ4

豊かに生きる子どもの評価と支援を考える

1　「豊かに生きる子ども」の評価

「豊かに生きる子ども」の評価は，単元末の総括的評価にまかせる部分と形成的に行う評価に分けられる。

○学ぶ意義・自信→単元の総括的な評価として行う。
○学力（実体的・機能的学力）→形成的評価を行い，学びに応じて個に応じる支援を想定し行う。

学力のうち，実体的学力については，知識・技能なので，評価は容易にできる。むしろ大切にするのは，機能的学力であり評価規準を具体的につくる必要がある。

2　３つの学びへの評価

学びを重点化したことで，各教科等で基礎・基本となる学力の中身を明確にできた。このことは，評価規準を作成するときに，その学力の高まりで評価すればよいということになる。このことで，規準作成もしやすくなり，そのための評価方法の開発へとつながっていく。

▼　目標の達成状況をとらえる「視点」として評価規準を作成する。

評価規準は，子どもの学習状況から，目標の達成度を子どもの姿で確かに見取っていくための視点であり，目標を細分化したものではない。

＜ふくおかプラン＞では，「生活・文化・人間の学び」から重点化した学びをもとに，各教科等で知識・技能と知的能力の両面で具体化した評価規準を作成する。

▼ 具体的な評価規準の作成

以上のような基本的な考え方から，本校の評価規準の作成のポイントは，次の３点である。

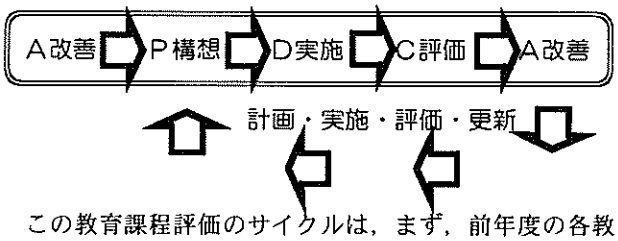
＜評価規準作成のポイント＞

○ 評価規準は，「生活」，「文化」，「人間」の３つの学びから各教科等，単元・題材レベルで重点化した知識・技能，知的能力を観点にして設定する。
○ 評価規準は，目標以上に結果像ではなく，過程像（学習状況の姿）を評価するよりどころとして作成する。
○ 知識・技能等の量的に評価しやすい力よりも，思考力や判断力等の知的能力につながる社会で生きていくうえで活用できる力を重点化・具体化して設定する。
○ 評価規準は，おおむね達成のレベル（B 基準）をもとに設定する。

3 ＜ふくおかプラン＞の評価サイクル

＜ふくおかプラン＞の評価を下図のようなＰＤＣＡのサイクル（plan-do-check-act cycle）で考える。

―教育課程評価のＰＤＣＡサイクル―



この教育課程評価のサイクルは，まず，前年度の各教科等の実践レベルで実施単元・題材を生活更新・文化創造・生き方向上の視点で子どもの力の育ちを評価する。来年度に向けて実施できる単元・題材で各教科等のカリキュラムを編成し，＜ふくおかプラン＞の改善案をつくる。それをもとに再構想し，実施が繰り返されるサイクルで教育課程全体を評価することである。

実際に教育課程評価する手順は，まず，各学年の総合的な時間の学習の単元の評価をする。実施単元の総合した知を「豊かに生きる子ども像」から評価し，次年度の構想案に加えるかどうかを判断するのである。その学年の各教科等の知を最大限に発揮できる単元が望ましいのはいうまでもない。新たな単元を立ち上げて位置付ける場合には，総合できる知の想定を行い，前の単元よりも必ず優れた単元であることが大切である。

その後，各教科等の単元の配列を縦と横の系列から吟味しながら，総合的な学習の時間の内容とすりあわせ，調和的に子どもに知をはぐくむことができるように編成する。調和的にするためには，総合的な学習と教科の内容の関連を考え，配列することや，特別活動や道徳の時間との関連を考えることも大切である。時期やもちろん各教科等の学習内容・特性・系統にも配慮し，配列を行う。その後，再度，総合的な学習の時間の側から見渡すと同時に，配時等も検討するのである。

そして，できあがったふくおかプランは，来年度の構想案となり，また実施→評価→改善というようにＰＤＣＡサイクルが繰り返されていくこととなる。

本校の＜ふくおかプラン＞を編成するうえで中心となるのは，各教科等の単元・題材である。単元・題材水準の評価においても，上の図のようなサイクルで考え，形成的に「豊かに生きる子ども像」の評価後，改善案（計画案）を立て，改善再実施に結び付ける。このことでより価値高い再更新・再創造・再向上へと結びつけていく。このことで，らせん状に活動の質を向上し，主体的・継続的な追究活動を推進するフィードバックループを繰り返すことができるようになる。このときに一番大切なのは，『評価して，改善案を立てる部分』であり，他者と共に協働しながら，生活更新・文化創造・生き方向上したのちに，必ず自分を振り返って評価しなければならない。このことで，他者と自分の関係を振り返り，自分の改善方法を考え，さらに繰り返し他者と協働しながら追究の活動を行い，自分の力の伸びを確信しながら，集団のなかで自らの決着を自分の力で付けることができようになるのである。この小サイクルを自分のなかで繰り返しながら，子ども自身が活動し，自己追究を深めていく姿は，子ども自身が学びを強めている状態として，評価することができるのである。この過程を通して，一人一人が追究して行った，「生活更新・文化創造・生き方向上」をよりグレードアップし発展化する，再更新・再創造・再向上を行っていくことができるようになるのである。

このようにして実施された単元・題材を評価し，＜ふくおかプラン＞を更新していくのである。再度，来年度の教育課程に位置付けるのか，新たな単元・題材を構想し位置付けるのか吟味し，更新していくことになる。

実際に教育課程を評価する手順は，まず，各学年の総合的な時間の学習の単元の評価をする。実施単元の総合した知を「豊かに生きる子ども像」から評価し，次年度の構想案に加えるかどうかを吟味するのである。その学年の各教科等の知を最大限に発揮できる単元が望ましいのはいうまでもない。新たな単元を立ち上げて位置付ける場合には，総合できる知の想定を行い，前の単元よりも必ず優れていることが大切である。

その後，各教科等の単元の配列を縦と横の系列から吟味しながら，総合的な学習の時間の内容とすりあわせ，調和的に子どもに知をはぐくむことができるように編成する。調和的にするためには，総合的な学習と教科の内容の関連を考え，配列することや，特別活動や道徳の時間との関連を考えることも大切である。時期やもちろん各教科等の学習内容・特性・系統にも配慮し，配列を行う。その後，再度，総合的な学習の時間の側から見渡すと同時に，配時等も検討するのである。

そして，できあがったふくおかプランは，来年度の構想案となり，また実施→評価→改善というようにＰＤＣＡサイクルが繰り返されていくこととなる。

Ⅴ　障害児教育研究・帰国子女教育研究について

1　障害児教育部の取り組み

障害児教育部においては，「豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造」～生活をつくる学びに決定場面を位置付けた特別支援プラン～を研究主題に研究を進めてきた。本年度は，特に一人一人の子どもの将来の自立的な生活を見通し，将来の豊かな生活を子ども自らつくることができるように次の視点からとらえて研究を進めている。

○　子どもの他者とのやりとり場面を位置付ける
　①　生活ができる学びをはぐくむこと
　②　生活がわかる学びをはぐくむこと

具体的には，

①　各教科及び領域・教科を合わせた指導における「豊かな生活を営む子ども」を育てるための指導内容の重点化と関連化
　（個別の指導計画の作成・実施・評価）
②　領域・教科を合わせた指導と各教科別の指導における指導原理の確立（教材開発・学習過程）
③　障害の状況や個の特性に応じた指導内容や指導形態，学習形態，学習空間，教材・教具の工夫

を取り上げて研究を進めている。また，障害児学級と通常学級との交流学習も推進しているところである。

<table>
<tr><td>態</td><td>低（ふじ組）</td><td>中（さくら組）</td><td>高（梅組）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">教科別</td><td colspan="3">国語・算数</td></tr>
<tr><td colspan="3">音楽・図画工作・体育</td></tr>
<tr><td rowspan="3">領域・教科合併</td><td colspan="3">生活単元学習</td></tr>
<tr><td colspan="2">合同生活単元学習（異年齢・縦割り）</td><td>特別活動
（クラブ・委員会活動のみ）</td></tr>
<tr><td colspan="3">日常生活指導</td></tr>
</table>

図　障害児教育＜ふくおかプラン＞の枠組み

2　帰国子女教育部の取り組み

帰国子女教育部においては，主題「自信と誇りを育む帰国子女教育」～学習適応と特性伸張をめざす教育課程の創造～のもと，国語科，算数科，社会科での知識・技能を整理し，学力を確実に身に付ける方向で，教育課程の編成の研究を進めている。また，海外での生活経験をもつという特性を肯定的にとらえ，伸ばすことも行っている。

教育課程編成については，次の視点から，教育内容・方法の設定・改善を進めている。

①　学習適応を主眼とする
　・国語科，算数科，社会科のカリキュラム
②　生活適応や特性伸長を主眼に置く
　・国際交流タイム，学級活動のカリキュラム

特に本年度は，学習適応を主眼とする教科を中心に研究を進めてきている。帰国子女は，入級時期も海外での履修内容も様々である。そのために，当該学年での学習にスムーズに編入することは難しい。そこで，特に国語科，算数科，社会科において個別のカリキュラムを作成している。その個別カリキュラム作成の手続きとその留意点について本年度，明らかにした。主な手順は次のようなものである。

【個別カリキュラムの作成手順】

①　各教科等の指導内容表を作成する。
②　指導内容表から，一人一人の未習内容と既習内容を明らかにする。
③　その教科等の柱となる領域の内容について系統性に配慮して配列する。
④　柱となる領域の他の領域との関連を考慮して，関連付けられる内容について検討する。
⑤　関連付けられる内容については柱の領域の内容と合わせて指導する。（内容のパッケージ化）
⑥　卒業までの残日数から配当時間を決める。
⑦　学習内容が，通常学級に追いついた場合は，通常学級との交流を図る。

（研究主任　岩　城　一　磨）

参考文献

(1) 中野和光・飯田慎司・大坪靖直・堺　正之／福岡教育大学附属福岡小学校「評価で変える　カリキュラムづくりー未来を拓く教科・総合の学びー」　明治図書　２００３年
(2) 奈須正裕　学校を変える教師の発想と実践　金子書房　２００２年
(3) 奈須正裕　学ぶ意欲を育てる　子どもが生きる学校づくり　金子書房　１９９６年
(4) ジェリー,H,ギル著　「学びへの学習」～新しい教育哲学の試み～　青木書店　２００３年
(5) 梶浦　真　協働学力～知の創造とこれからの学び～　教育報道出版社　２００５年
(6) 植田一博・岡田　猛　編著　協同の知を探る　共立出版　２０００年
(7) 安彦忠彦　著　「カリキュラム開発で進める学校改革」　明治図書　２００３年
(8) 倉戸ツギオ　編　発達と学習の心理学　ナカニシヤ出版　１９９４年

第１学年の＜ふくおかプラン＞（平成18年度　構想プラン）

〰〰 生活の学び　―― 文化の学び　═══ 人間の学び

【文化の学び】

算数科，音楽科，図画工作科，国語科，体育科の５教科については，「文化の学び」を重点として位置付ける。第１学年の子どもたちにとって「環境による教育」を教育原理とする幼稚園教育から徐々に分化させ，各教科等の資質能力と内容，学び方の面においての基盤となるようにしていく。幼稚園との連絡を考えて，それぞれの教科学習でも「遊び」や「ゲーム」を取り入れながら，自然と運動文化や言語文化，造形文化，音楽文化に出合えるように単元づくりを工夫していく必要がある。

【生活の学び】

生活科と学級活動を生活の学びに重点化して進めていく。第１学年の段階は，学校生活での自立の基礎を養っていくことを中心に考え，主たる学習対象を学校生活として位置付ける。具体的な学校での生活の仕方や学級の友達との協力関係，学校生活を中心とした対象とのかかわりを位置付けるようにする。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。自己中心性が強く，他律期である子どもたちにとって，望ましいモデルとなる人物との出会いが大切である。その人物のよさを取り入れていくような授業づくりをしていく必要がある。このときに，次の二つのことを大切にする。人物の弱さをしっかりとみつめさせ，自分にも同じような気持ちがあることを自覚させることと，道徳的価値の実現が図られたときの心地よさを感じ取らせることである。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
文化の学び	算数	114	なかよしのはなしをつくろう (5) １０までのかずをかぞえよう (10)	みんなでやってみよう！いくつといくつゲーム (6)	たしざんえほんをつくろう (7)	ひきざんえほんをつくろう (10)
	音楽	68	うたとともだちになろう (8)	わくわくりずむでたのしくあそぼう (6)	どれみとともだちになろう (10)	
	図画工作	68	すきなものがつまったポケット (2) しぜんとなかよし (2)	ここは，ぼくのわたしのいきものランド (6)	キラキラゆらゆらかぜのおまつり (6)	わたしのすてきなとうめいパック (6)
	国語	272	えをみてはなそう (16)	おはなしきかせて (16) うたにあわせてよもう (10)	はなのようすをみつけよう「どうぶつのはな」(14) せんせい　あのね (20)	みんなにおしえよう (14) ほんよみはっぴょうかい (14)
	体育	90	うんどうのてすと (4)	てつぼうであそぼう (6)	みんなでいこう！おたからぼうけん (8)	ウォーターランドであそぼう (11)
生活の学び	生活科	102	おおきくそだてよう！　こころをこめたはなのおくりもの (14) みんなだいすき　ふぞくしょうがっこう ～ふぞくしょうのおきにいりを見つけよう～ (12)			にしこうえんのむしとふれあおう (12)
	学級活動	34	○学校のいきかえり (1) ○学校のきまり (1)	◎係を決めよう (1) ○給食のようい (1) ○よいあいさつ (1)	○虫歯きんをやっつけろ (1) ○雨の日のすごし方 (1) ◎教生先生さよなら集会Ⅰ (2)	◎学級の歌をつくろう (2) ○水はこわいぞ (1) ○はじめての夏休み (1)
人間の学び	道徳の時間	34	・学校ってどんなところ？ (1) ・時間のきまり (1) ・元気な声で「おはよう」 (1)	・学校ってすてきなところだね (1) ・ともだちパワーをあつめよう (1) ・さいごまでがんばろう (1)	・わき出る力を感じよう (1) ・きまりはだれのもの (1)	・やさしい心ってあたたかいね (2) ・自分の成長を見つめよう (1)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
２０までのかずをかぞえよう (13)	たしざんをしよう (12)	かたちげえむをしよう (10)	ひきざんをしよう (13)	わかざりをつくろう（ながさ）(9)	かずづくりゲームをしよう(11)文(100までのかず)	かずづくりゲームをしよう(8)文（100までのたしざん・ひきざん）
どんなようすかおもいうかべてえんそうしよう (10)	すてきなおとをみつけよう (6)	あそびうたをえらんであそぼう (8)		にっぽんのうたみんなのうたランド (6)	おんがくでおはなししよう (8)	みんなであわせて (6)
ペーパーポットでおもちゃづくり (8)	ぺたぺたどろどろへんしんねんど (6)	すてきなたいようさん (6)	つづきえどんどん (8)	すてきなかたちがあつまると (4)	たまごパックがたくさんあつまると (8)	かみのつつがうたっておどって (6)
げきをしよう大きなかぶ (22) がっこうでみつけたものをいえの人に知らせよう（１８）	くらべてみよう (16) おんどくはっぴょうかい (16)	あつめたふゆのことばでカルタをつくろう（１８）	ふじだなぶんしゅうをつくろう (10) 本はともだち「ともだちのどうぶつさん」(10)	おみせやさんごっこをしよう (20)	どうぶつの赤ちゃんのちがいをかんがえてよもう (20)	かみしばいをつくろう（読書活動）(20)
忍者リレーを愉しもう (4) リズム変身あらつランド (6) とびっこランドであそぼう (7)		おしだしあそび (8) マットとびばこランドであそぼう (8) うまくとってね！森のキャッチボールゲーム (8)		なわとびあそびかけっこあそび(10)	ゲーム大かいをしよう (10) ※けりっこあそびをふくめて	
わくわくおもちゃらんどであそぼう (11)	大すきかぞく (9)	にしこうえんのあきとあそぼう (10)	学校のお正月をつくろう (11)	花いっぱいで そつぎょうをおいわいしよう (12)	みんな大すきにしこうえん (6)	せいちょうにっきをしょうかいしよう (5)
○きょうから２学期 (1) ◎２学期の係をきめよう (1) ○はじめての運動会 (1)	○みんな友達 (1) ◎教生先生さよなら集会Ⅱ (1) ○正しいしせい (1) ○きれいな片付け (1)	○本の借り方返し方 (1) ◎好きな本のしょうかいをしよう (2)	◎クリスマス集会をしよう (2) ○冬休みのくらし (1)	◎３学期の係を決めよう (1) ○ありがとう給食 (1)	○もし火事になったら (1) ◎ありがとう６年生 (2) ○もうすぐ２年生 (1)	◎新１年生へのプレゼントをつくろう (2)
・危険から身を守る (1) ・わがままをしないで (1) ・黙っていかないで (1)	・いつも正直に (1) ・進んで手伝う (1) ・ありがとうの気持ちを伝えよう (1)	・美しい心を見つけよう (1) ・ぼくの町ってすてきだよ (1) ・命の温かさ (1)	・みんなにあるね温かい心 (1) ・自分の成長を見つめよう (2) ・大切に使う (1)	・何度もねばり強く (1) ・礼儀正しい生活 (1) ・お世話になっている人 (1)	・正直で素直な心 (1) ・正しい行い (1) ・きまりを守って使う (1)	・家族の人の願い (1) ・星への願い (1) ・自分の成長 (1)

第２学年の＜ふくおかプラン＞（平成18年度　構想プラン）　〰〰 生活の学び　── 文化の学び　═══ 人間の学び

【文化の学び】
第１学年と同様，国語科，算数科，音楽科，体育科の５教科については，主に「文化の学び」を重点として位置付ける。しかし文化の学びとはいえ，抽象的な思考は十分ではないことや興味関心や実感などの情緒的な特性に左右されることから，ものづくりや遊び作りなどの活動をふんだんに取り入れていくことが大切である。

【生活の学び】
生活科では，第１学年において，人や物に対しての認識が発達していく。そのうえに立って環境への認識もできるようになってくる時期である。そこで自然や社会といった環境を一体的にとらえながら取り上げる対象を学校内の対象から徐々に地域へと空間を拡げていくようにする。ただし，自分に関する内容を扱う場合には，人間の学びで展開する。

【人間の学び】
道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。自己中心性から次第に他者の心情を推し量る能力が発達してくる時期である。他者の気持ちについて，他者の言動や表情などをもとに考えさせることで，改めて自分自身を振り返ることができるようになってくる。自分と他者との関係について深く考えさせるような主題を重点として設定し，思いやる心をはぐくむようにする。

【文化・生活の学び】
図画工作科では，芸術そのものの楽しみ方や自分で創り出す能力の育成を大事に文化の学びで展開する。しかし，自分の生活から出発し，よりよい環境に変えていく生活の学びで展開する単元も必要に応じて開発していく。

【生活・文化・人間の学び】
特別活動は，全ての学びから題材を開発していく。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
文化の学び	算数	155	とけいを見ながら生活しよう (7) つかみ取りゲームをしよう (7)	たし算をしよう (8) ひき算をしよう (10)	チャレンジ１形ゲーム (5)	ものさしを作ってくらべよう (12)
	音楽	70	歌と友だちになろう (8)	わくわくリズムやドレミであそぼう (12)		夏をかんじて歌おう (6)
	図画工作	70	ローラーから生まれたカラフルせかい (8)	ナイトサファリへようこそ (8)		ぼくのわたしのすてきなぼうし (8)
	国語	280	よんで楽しもう「ふきのとう」 (20)	読書をつなごう～たんぽぽのちえを比べて～ (20) とっておきニュース (20)	作り方を教えます私のすてきなアクセサリー (20)	仲間とふれあう生き物のお話を読もう「スイミー」ほか（選択読書） (20)
	体育	90	うんどうのテスト (4) てつぼうチャンピオン (8)	たからじまをぼうけんしよう (8)		ウォーターランドであそぼう (10)
生活の学び	生活科	105	あらつの町をたんけんしよう (10)	大きくそだて，みんなの夏野さい (継続12) ひらこう！みんなを守る安全教室 (12)	おもちゃランドを作って１年生とあそぼう (10)	
	学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1) ○学習中のやくそく (1)	○さそいにのらない (1) ◎学級のシンボルマークをつくろう (2) ◎教生先生のかんげいかい (1)	◎教生先生とのお別れ会 (2) ○友達のよさを見つけよう (1) ○雨の日の遊び方 (1)	◎七夕集会をしよう (2) ○もうすぐ夏休み (1)
人間の学び	道徳の時間	35	・心を結ぶあいさつってどんなもの (1) ・自分できちんと (1) ・自分の成長 (1)	・楽しい家族 (1) ・気持ちのよいあいさつ (1) ・小鳥たち元気でね (1) ・進んできれいに (1)	・きまりはだれのもの？ (1) ・みんな一生懸命生きてるね (1) ・たった一つの命 (1) ・心強いね (1)	・やりぬく心 (1) ・やさしい心 (1) ・相手を思いやって (1) ・自分の成長 (1)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
たし算とひき算をしよう (16)	かけ算をしようⅠ (23)	かけ算をしようⅡ (26)		かけ算九九表のクイズをつくろう (14)	長いものさしを作ってくらべよう (10)	大きい数をかぞえよう (10) へんしん形づくりゲームをしよう (7)
音を合わせて　えんそうしよう (10)	すてきな音を見つけよう (6)	あそび歌めぐりをしよう (8)		にっぽんの歌 みんなの歌ランド (5)	つくろう森の音楽会 (8)	ようすを思いうかべて歌おう (7)
にじ色のせかいへようこそ (8)	あきをあつめてたのしくあそぼう (8)	おしゃれなすてきな紙テープ (8)	きらきらシャボンから何が見えた (4)	ねん土であそぼう (2)	すてきなペンケース～おりぞめ和紙～ (10)	ありがとうの気もちをこめて (6)
はっぴょう名人になろう (21)	海の生き物シリーズを読もう「サンゴの海の生き物たち」(22) お話大好きはっぴょうかいをひらこう (35)	「がまくんとかえるくん」シリーズを読もう (20)	ふじだな文集を書こう (10)	ことばのおもしろさ発表会をしよう (25)	2年生の思い出を書きまとめよう (25)	お話を楽しもう「スーホの白い馬ほか」(22)（選択読書）
まねっこパークであそぼう (9)	ジャングルリレーを楽しもう (9)	おしあいひきあいあそび (5)	ころころドッカン！ターゲットゲーム (9)	マット・とびばこランドであそぼう (8)	なわとびあそびかけっこあそび (7)	チャレンジランドであそぼう (6) ボールけりゲームを楽しもう (7)
大きくそだて，みんなの秋野さい (継続13) はっけん！すてきなあらつのあきのまち (13) あらつフェスタをもりあげよう (5)			ぼくの・わたしのちゃんこ まつりをつくろう (11)	あらつ博物館をつくろう (13)		ぐんぐんのびる，ぼく・わたし (6)
○2学期のめあてを立てよう (1) ◎楽しい係を決めよう (1) ○運動会に向けて (1)	◎教生先生とのお別れ会 (2) ○学習への心がまえ (1) ○目の健康 (1)	○言葉のひみつ (1) ○友達と仲良くしよう (1) ○本のあつかい方 (1) ◎係のがんばりを伝えよう (1)	◎2の○ランドに1年生を招待しよう (2) ○冬休みの過ごし方 (1)	◎3学期の係を決めよう (1) ○楽しくなる食事 (1)	○心の鬼をおいだそう (1) ◎さようなら6年生 (1)	◎学級文集をつくろう (2) ○もうすぐ3年生 (1)
・町のひみつをしょうかいしよう (1) ・動植物にもやさしい心で (1) ・友達への親切 (1)	・うそと正直 (1) ・自分の健康を見つめよう (1)	・感謝の気持ち (1) ・助け合う友達 (1) ・勇気をもって (1)	・清らかな心 (1) ・自分の成長 (1) ・学級の仕事 (1)	・上手に使う (1) ・ねばり強くがんばる (1) ・みんなのものを大切に (1)	・生き物の気持ちを考えて (1) ・美しさに感動する心 (1) ・見つめよう自分の生命！	・支えられる生命命 (1) ・やさしく親切に (1) ・自分の成長を見つめよう (1)

第３学年の＜ふくおかプラン＞（平成１８年度構想プラン）

〰〰 生活の学び　―― 文化の学び　═══ 人間の学び

【文化の学び】

算数科，音楽科，図画工作科，国語科，体育科，社会科，理科の７教科は「文化の学び」を重点として位置付ける。第３学年から始まる理科は，自然事象を対象とした具体的な活動を展開するなかで，科学的な追究力の基礎を養っていく必要がある。社会科においては，教科目標から考えても生活の色彩が強いが第３学年では，生活事象をそのまま追究していくのではなく，自分が生活している地域の社会的事象に対する理解を重視するとともに，観察や調査などの具体的な学び方の獲得を大切にし，徐々に生活の学びへと近付けるようにする。また，文化総合を立ち上げて，総合的な学習の時間の学び方を意図的に指導していくことを大切にする。

【生活の学び】

学級活動と生活総合を「生活の学び」として位置付ける。学級活動では，学年での取り組みを増やし，より多くの友達と協力し合う体験ができるようにする。生活総合では，イベントを子どもたちがつくることを通して，生活を楽しくすることを学んでいくことができるようにする。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。モデルとなる人物の生き方を取り上げる際に，特に人間の自然性としての弱さを見つめさせたり，葛藤に打ち克とうとする強さについて考えさせたりすることができるようにする。そのことで，規範として大切にすべきであるという考え方から徐々に相対的で自律的な価値観を形成させる。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
文化の学び	算数	150	全部でいくつ（かけ算九九）(8)	あなあきクイズをつくろう(15)	ぱたぱた絵をつくろう (12)	わり算をかたちで考えよう (6) 生活の時間や時こくを調べよう (8)
	音楽	60	楽き大好き！うたうの大好き！みんなで合唱そう (7)		ふしとリズムを楽しもう (8)	リコーダーと友だちになろう (4)
	図画工作	60	くねくね，ぐにょぐにょ絵の具のダンス (4)	絵の具とテープのファンタジー (4)	つくろう！教室のなかのふしぎな世界 (8)	水の世界を描こうカッパアーティスト (4)
	国語	235	３学年の読書計画をつくろう (13) 西公園のひみつを伝え合おう（２０） 上手に身をかくすってどうするの？「自然のかくし絵」（８）		日本の話・世界の話（選択読書）（２５）	昔話から読書を広げよう
	体育	90	スポーツテスト(4) チャレンジてつぼう (4)	あらつ障害物リレー(6)	キックハンドベースボールを楽しもう！ (7)	めざせ！カッパ大賞 (9)
	理科	70	草花を育てよう（種から発芽へ） (2) 昆虫のひみつをさぐろう (8)		磁石のはたらきを調べよう (10)	草花を育てよう（花の咲くころの様子）(3)
	社会	70	あらつの町たんけん！附属小のまわりの特色を見つけよう (6)	発見！スーパーマーケットのひみつ (11)		福岡の町たんけん！福岡市・県の特色ある場所を見つけよう (9)
	文化総合	60	あらつカッパ伝説～昔話から探検　あらつの町～(18) 英語　Shall we dance ? (10)			夏休み自由研究
生活の学び	学級活動	35	○ぼくは○○です (1) ○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1)	◎学級のシンボルマークをつくろう (2) ○健康な歯とは (1) ◎教生先生のかんげい会をしよう (1)	◎教生先生とのさよならパーティー (2) ○雨の日のすごし方 (1) ○けじめのある学習 (1)	◎１学期の係活動をふり返ろう (1) ◎１学期の集会 (1) ○夏休みの生活 (1)
	生活総合	45				
人間の学び	道徳学習	35	・新しい気持ちで (1) ・きまりのある生活 (1) ・真心をこめてあいさつを	・すばらしいお母さん(2) ・正直のよさ (1)	・わたしたちのふるさと (2) ・生き物を大切に (1)	・身の回りをきれいに (1) ・自分の成長を見つめよう (1) ・本当の友達 (1)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
表とグラフに表そう　3年調査隊 (13) 長いものさし作りをしよう (11) オリジナルかさグラスをつくろう (9)		かけ算九九をひろげよう (11) 大きな数を調べよう (9)	宝箱をつくろう (10)	同じ数ずつわけよう (10) なんでも重さダービー (10)		かけ算をひっ算でしよう (11) そろばんで計算しよう (7)
曲の感じをとらえよう・リコーダーと友だちになろうⅡ (7)	場面を音楽で表そう ふしの流れやリズムにのってうたおう (6)	日本と世界のあそび歌集をつくろう (8)		リコーダーと友だちになろうⅢ (6)	ふしや音をえらんで表そう (5)	6年生への思いをこめて歌おう (7)
とう明カップから生まれたものは (6)	光とかげのハーモニー (6)	とびらを開くと見える世界 (6)	ダンボールアーティスト (8)	集まれ！すてきなカラフルなかま (8)		にじ色花畑をつくろう ※卒業式をかざろう (6)
めざせプレゼンターⅠ (10) どの特長が大事なのかな？「盲導犬の訓練」 (25)	あらつフェスタのパンフレットをつくろう (20)	物語から命の大切さを考えよう (20)	ふじだな文集をつくろう (10) 詩を読もう (10)	「福岡のうまかもん」を説明書に書きまとめよう (20)	想ぞうをふくらませて書こう (20)	自分の力で読もう（選択読書活動） (27)
楽しく表現・ダンスをしよう (6)	つくって楽しもう！探検マット (9)	あらつずもう (6) バウンドゲームを楽しもう (10)	チャレンジとび箱 (8)	つくろう！わたしの元気もりもりブック (4) ちょうせん！なわとび遊びかけっこ遊び (10)		つくろうラグハンドボール (7)
草花を育てよう（種取り） (3)	昆虫や植物の成長図鑑をつくろう (6)	つくろう豆電球おもちゃ博覧会 (11) 太陽の動きを調べよう (11)		さぐろう！日光のはたらき (12)		自分たちが育て虫や草花は… (4)
（年間を通じて帯単元的に展開）						
福岡新ブランド「えびすかき」をアピールしよう。 (14)		福岡市の仕事をまとめよう (5)	あらつの今と昔 ～あらつ昔図かんをつくろう～ (15)			考えよう！福岡市紙ごみげんりょう作戦 (15)
(7)	英語　Halloween party (15)			英語　Let's play together (10)		
○2学期のめあてを決めよう (1) ◎2学期の係を決めよう (1) ○運動会に向けて (1) ◎教生先生のかんげい会Ⅱ (1)	○正しい言葉づかい (1) ◎教生先生とのさよならパーティー (2) ○忘れ物をなくそう (1)	○ぼくわたしのいいところ (1) ◎係新聞コンクールをしよう (2)	○男女なかよく (1) ◎2学期の集会 (1) ○夏休みの生活 (1)	◎3学期の係を決めよう (1) ○　給食への感謝 (1)	◎係発表会をしよう (2)	○6年生へのプレゼントの内容を決めよう (1) ◎3学期の集会 (1) ○4年生に向けて (1)
もっと知りたい福岡のうまかもん (15)		あらつフェスタ (10)		あらつ何でも会社 (20)		
・めあてに向かって (1) ・お年寄りに感謝して (1) ・生命を大切に (1)	・みんなの使うもの (1) ・真心からの行い (1) ・励まし合う友達 (1)	・困っているだれかのために (2) ・みんなが使う場所 (1) ・美しくやさしい心 (1)	・正しい心，強い心 (2) ・自分の成長を見つめよう (1)	・友達のよさ (1) ・命を大切に (1) ・不思議なものに感謝する心 (1)	・みんなクラスの仲間 (3) ・わたしたちのふるさと (1)	・くじけない心 (2) ・自分の成長を見つめよう (1)

第４学年の＜ふくおかプラン＞（平成18年度　構想プラン）〰〰 生活の学び　── 文化の学び　═══ 人間の学び

【文化の学び】

算数科，音楽科，図画工作科，国語科，体育科，理科の６教科及び文化総合については，「文化の学び」を重点として位置付ける。思考の抽象性が増し，学ぶことに対する意欲や自分にとっての意味づけをすることが可能になってくる時期である。そこで，文化に内在する価値や美徳といったものにふれることができる題材を設定することが大切である。また，自分の学びについての自己評価力も高まってくることから，自分で学習するコースを選択するなどの複線的な学習を構想することもできる。

【生活の学び】

社会科と学級活動，及び生活総合を生活の学びに重点化して進めていく。社会科は，第３学年では「文化の学び」を重点として展開するが，第４学年では地域社会の成員としての自覚を深める意味からも，社会生活に参画する立場からの単元づくりを図る必要がある。

【人間の学び】

道徳の時間を人間の学びに重点化して展開する。結果論的な見方から動機論的な見方へと高まってくる。このことから，行為の裏側にある人物の考え方を推し量ったり，そのよさについて評価したりする学習が可能になる。

また，ある程度，自分自身に対する見方が客観的になる時期である。このことを生かして，肯定的に自分自身を評価できるように，子どもたちの道徳的体験のなかからよさを見出し，自分に自信がもてるように配慮していくことが大切である。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
文化の学び	算数	150	大きな数を表そう (9) コマをつくろう(14)	長に表して調べよう (5)	変わり方クイズブックをつくろう (7)	整数のわり算をしよう (15)
	音楽	60	みんなのアンサンブルをつくりだそう！ ※さくらさくら (7)	「キラキラ星変奏曲」をつくろう！ (7)	曲の感じをとらえて歌おう (7)	
	図画工作	60	形や色から生まれたものは (6)	唐人町ランタンフェスティバル (10)	色のサンドイッチ (4)	
	国語	235	４学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読もう (10)	自分に必要なまとまりをつないで「かなことの力」(15) 発信しよう～すてきな附属福岡小学校～ (20)	松井さんの人柄を読み広げよう (25) 読書リレーをしよう（選択読書）(20)
	体育	90	スポーツテスト (4)	おやおやおやつ (4) 挑戦！鉄棒名人 (5) かわそう！つなごう！オリジナルタグラグビー (8)		いろいろな泳ぎに挑戦しよう (9)
	理科	90	春の生き物を調べよう (6)	空気や水の性質 (9) 体積変化のなぞ (11)	夏の生き物を調べよう (6)	金属や水のあたたまり方⑩ 熱気球⑤ (15)
	文化総合	75			英語　Have a nice trip! (6)	夏休み自由研究
生活の学び	社会	85	わたしたちの住んでいる福岡県 (3)	ぼくらが守る！福岡市の水 (12)	つくろう！わたしの防災マニュアル (10)	
	学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1) ○はじめてのクラブ活動 (1)	○学習のかまえ (1) ◎学級のシンボルマークをつくろう (2) ◎教生先生のかんげいパーティーⅠ (1)	◎教生先生さよならパーティーⅠ (2) ◎第１学期◎◎集会の計画を立てよう (1)	◎第１学期◎◎集会 (2) ○たばこと健康 (1) ○チャレンジ夏休み (1)
	生活総合	30	みんなにやさしい町づくりプロジェクト (20)			
人間の学び	道徳の時間	35	・４年生になって (1) ・生きた礼儀 (1) ・目標をもって ・まっすぐな心 (1)	・友達の大切さ (1) ・身近な動植物を大切に (1) ・あたたかい思いやり (1)	・みんなのために (1) 生きるⅠ (1) ・命を守る仕事 (1)	・ふるさとを思う (1) ・自然や動植物へのやさしさ (1)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
およその数表そう(8) 考え方と式に表そう(8) はしたの数の表し方を調べよう(8)	変化をグラフに表そう(11)	三角形のステンドグラスをつくろう(14)	いろんな数で同じずつ分けよう(18)	角度当てクイズをつくろう(10)	はしたの数の表し方を調べようⅡ(分数)(8)	面積を調べよう(16)
みんなのアンサンブルをつくりだそうⅡ(10)	お祭りの音楽めぐりをしよう(9)		にっぽんの歌 みんなの歌ランド(4)	音楽で北風こぞうを表現しよう(6)	オーケストラの音楽を楽しもう(5)	気持ちをこめて歌おう(5)
ストローと針金でおもちゃをつくろう(6)	ステンドグラスをつくろう(8)	心の四季を版に込めて(10)		オリジナルタングラムをつくろう(10)		かんしゃの気持ちを色と形に込めて(6)
めざせプレゼンターⅡ(10)	バリアフリーについて考えを発表しよう(26)	目的に合わせた伝え方について読み深めよう(30)	ふじだな文集(10) 学校づくりに参画しよう「1枚の写真から」(10)	話し合ってよりよい意見にまとめよう(23)	言葉遊びを作って遊ぼう(25)	自分の力で読もう(選択読書)(21)
リズムダンスレボリューション(6)	2種競技に挑戦しよう(6)	チャレンジマット(7)	あらつ相撲(5)	セストボールを楽しもう(10)	つくろう！ハンドジャンプ(8)	わたしたちの成長ブックをつくろう(4) 挑戦しよう(6) マスター(7) なわとび・持久走に挑戦しよう(8)	スリーゴールサッカー楽しもう(9)
夏の星の神秘にふれよう(6)	月の不思議を調べよう(6)	秋の生き物を調べよう(4)	つくろうためそう電気エネルギーのひみつ(8)	冬の星の神秘にふれよう(4)	冬の生き物を調べよう(6)	自然の中の水の行方を探ろう(12)
(7)	アジアのひみつを探ろう(18)	英語 X'mas card (14)		附属小樹木調査隊(15)	英語 Let's play card game (12)	
星野村みカ探検隊(11)	大島不思議隊探検隊(11)		どうする？これからの八女ちょうちん(15)	広めよう！ひきつがれる博多の行事(7)	黒田節を伝えた二川相近を紹介しよう(7)	福岡県みカ紹介ツアーをつくろう(9)
○2学期のめあて(1) ◎2学期の係を決めよう(1) ◎教生先生のかんげいパーティーⅠ(1)	○目を大切に(1) ◎学級文庫をつくろう(2) ◎教生先生さよならパーティーⅡ(2)	○友達のよいところ(1) ◎係活動発表会をしよう(2) ○献立と栄養(1)	○男女仲良く(1) ○冬休みの計画(1)	◎3学期の係を決めよう(1) ◎ボランティア作戦をしよう(2)	○食物の秘密(1) ◎学級文集をつくろう(1)	○さようなら6年生(1) ○もうすぐ高学年(1)
		あらつフェスタ(10)				
・自分のことは自分で(1) ・古いものを大切にする心(2) ・目標に向かって(1)	・日本のすばらしさ(1) ・思いやりの心をもって(1) ・学校のよさ(1) ・家族みんなで(1)	・進んで活動する(1) ・きまりを守る心(2)	・勇気ある行動(1) ・目標をもって生きるⅡ(1)	・何が大切かを考えて(1) ・みんなのために働く(2)	・おとしよりを大切にする心(1) ・本当の友達(2)	・真心の美しさ(1) ・自然を大切に(1) ・目標をもって生きるⅢ(1)

第５学年の＜ふくおかプラン＞（平成18年度構想プラン）　〰〰 生活の学び　── 文化の学び　═══ 人間の学び

【文化の学び】

算数科，音楽科，図画工作科，国語科，体育科，理科の６教科と文化総合については，「文化の学び」を重点として位置付ける。これらの教科はより文化を追究する教科としての役割を担うことになる。特に教材となるものやことの文化を味わうことの楽しさと同時に，自分も文化をつくる存在であるとして，単に調べたり考えたりして文化を継承するだけではなく，創造する自分づくりを含めた学習を考える必要がある。

【生活の学び】

社会科，家庭科，学級活動及び生活総合を生活の学びに重点化して進めていく。社会科では，国土や産業などの幅広い社会生活のなかでの国民としての義務や責任，協力といった面まで考えていく必要がある。また，新しく第５学年から立ち上がる家庭科では科学的な追究を大切にしながらも，体験的に自分の家庭を見つめ直し，その課題に対して実践的な解決を図ることを通して生活をよりよくする学習へとつなげていきたい。生活総合では，他との協働だけではなく，自分自身の生活を見つめつくりかえていく学習をも意図する。

【人間の学び】

道徳の時間及び人間総合を人間の学びに重点化して展開する。第５学年から人間総合を立ち上げる。人間を多面的に，総合的に取り上げて学習していくなかで，生命や人間としての特質などについてふれるとともに，自分自身の生き方と比較して，よりよい人間になるために大切な見方や考え方を獲得させる。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
文化の学び	算数	150	整数と小数の関係を調べよう (14)	四角形を調べよう (20)	角度当てクイズをつくろう (９)	つくろう！分数カードゲームの攻略書 (14)
	音楽	50	豊かな表現をつくり出そうⅠ (5)	楽器で表そう！私たちの世界 (6)	歌い継ごう！博多の歌・博多の心 (5)	
	図画工作	50	ギザギザペッタンから生まれたものは (6)	スチロールのカーニバル (6)	附小のわたしの自慢 (6)	
	国語	180	５学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読み味わおう (13)	生物のつながりを読み深めよう「ワクラソウとトラマルハナバチ」(13) 言葉の研究レポートⅠ (15)	千年前の不思議を読み深めよう (16)
	体育	90	スポーツテスト (4) スリーコースリレーを楽しもう (7)	心の健康 (3) つくろう！ロープジャンプ (6)	あらつ水泳距離に挑戦 (10)	
	理科	95	植物の成長の秘密をさぐろう 発芽と養分 (3)	植物の成長の秘密を探ろう 肥料と日光 (9)	おもりの動きを調節するひみつ (11)	メダカの成長やひとの誕生 (11)
	文化総合	77	つくろう！みんなの夢広場 (25) 英語 Let's guide our school (12)			夏休み自由研究
生活の学び	社会	90	国土に生きる人々Ⅰ ・発見！日本の地形 (3)	国土を生かし，食料生産に励む人 (17) ・開催！福岡いちご生産会議⑩ ・福岡とらふぐアピール大作戦⑦		われら食料安全調査隊 (8)
	家庭	60	見つめよう！家庭生活 (14)		つくろう！さわやか生活 (9)	
	学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎学級の組織をつくろう (1) ◎学級の合い言葉をつくろう (1) ○つくろう！５の○フェスタ (1)	◎５の○集会フェスタの計画を立てよう (1) ◎学級のシンボルマークをつくろう (1) ◎５の○係フェスタの内容を見直そう (1)	◎５の○係フェスタの内容を見直そう (2) ◎教生先生とのお別れ会をしようⅠ (2)	◎５の○集会フェスタⅠ (1) ◎５の○お手本フェスタⅠ (1) ○夏休みの計画 (1)
	生活総合	23				
人間の学び	道徳学習	35	・５年生としての自覚 (2) ・あいさつの大切さ (1) ・ふるさとを大切に (1)	・男女の理解 (1) ・日本人のすばらしさ (1) ・約束や規則の尊重 (1)	・危機的な生命？仕事の責任？(2) ・生きがいを見つけて (2)	・広場はだれのものを (1) ・自分の成長を見つめるⅠ (1) ・友達のために (1)
	人間総合	10				

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
小数のかけ算やわり算をしよう（13）	計算ゲームで小数のかけ算を考えよう（15）	小数のわり算をしよう（15）	面積 ハンドブックをつくろう（15）	割合をグラフで表そう（21）	みえるかな円のひみつ（8）	形をつくって面積取りをしよう（6）
豊かな表現をつくり出そうⅡ（6）	音楽の形や仕組みを生かそう（7）	「子守歌」の旅をつくり出そう（6）		ふしとリズムを組み合わせて（6）	音楽でえがこう（4）	6年生への思いをこめて歌おう（5）
夏の思い出を絵手紙で届けよう（2）	切り抜き！切り立て！ フィッシュレリーフ（8）	みんなでつくろう！ ライトテラピーの世界（10）		ペットボトルとスチレンボールから（10）		美しい色，楽しい形（2）
めざせ！プレゼンターⅢ（10）	筆者の意図を読み取ろう ～インスタント食品と私たち～（25）	人とものとのつきあい方（23）	藤だな文集を作ろう（10） 人物の生き方を読もう わらぐつの中の神様（15）	言葉の研究レポートⅡ（8）	自分の考えを広げまとめよう 「コマーシャルと私たち」（10） 本の世界を旅しよう（選択読書）（12）	
ダンスを楽しもう（5）	ソフトバレーボールを楽しもう（7）	ハイジャンプの仕方をさぐろう（7）	あらつ場所（5）	安全マップをつくろう（3） つくろう！オリジナルバスハンドボール（7）	つくろう器械運動（6）	なわとび・クロスカントリーに挑戦しよう（10）	サッカーを楽しもう（10）
生命のつながりを探ろう植物（10）	天気の変化と自然災害（6）	流れる水のはたらき（8）	てこを使ったリフトゲーム（14）	つくろうミネラル結晶（14）		ジャガイモを植えよう（4）
（7）		あらつフェスタ（10）				
英語 Let's make a ghost pumpkin（12）				英語 Let's cooking（11）		
国土を生かし工業生産に励む人々（24） ・発見！くらしの中の工業製品⑨ ・徹底追究！わが国の自動車生産⑮			国土を結ぶ人々（20） ・発見！情報を活用する私達⑧ ・探ろう！これからの情報産業⑫		つくろう！日本列島探検旅行プラン（10）	未来への財産へ福岡の山と海（8）
野菜で健康大作戦！ ～ゆでたりいためたりしよう～（15）		スッキリ大作戦（10）		家族がそろう場所をコーディネートしよう！（10）		できるようになったことを生かして（2）
◎2学期の学級組織をつくろう（1） ○運動会に向けて（1） ◎5の○係フェスタⅡ（1）	○男女の協力（1） ◎教生先生とのお別れ会をしようⅡ（2） ◎5の○お手本フェスタⅡの計画を立てよう（1）	○あらつフェスタに向けて（1） ◎5の○集会フェスタⅡ（3）	○これが5の○遠行会（1） ◎5の○お手本フェスタⅡ（1）	◎3学期の学級組織をつくろう（1） ◎5の○お手本フェスタⅢの内容を見直そう（1）	◎5の○係フェスタⅢ（1） ◎5の○お手本フェスタⅢ（2）	◎5の○集会フェスタⅢ（1） ○大成功5の○フェスタ（2）
見直そうお菓子とのかかわり方（23）						
・工夫して新しいことを（1） ・困難を乗り越えて（2）	・力強く生き抜く（2） ・健康と安全（1） ・自分に誠実に（1）	・私の学校じまん（2） ・本当の親切とは？（1）	・高い目標をもって（1） ・温かい家族（2） ・自分の成長を見つめるⅡ（1）	・公平な心で（1） ・大切に思う心の美しさ（1）	・希望をもって（1） ・広い心（1） ・自然を愛する心（2）	・本当の思いやり（1） ・自分の成長を見つめるⅢ（1）
				えがこうぼくわたしのキャリアデザイン（10）		

第６学年の＜ふくおかプラン＞（平成１８年度　構想プラン）〰〰 生活の学び ── 文化の学び ═══ 人間の学び

【文化の学び】
算数科，音楽科，図画工作科及び文化総合については，主に「文化の学び」を重点として位置付ける。小学校での学習の集大成として，子どもが自分の文化づくりにつながるような単元を開発していく必要がある。

【生活の学び】
家庭科及び生活総合を生活の学びに重点化する。家庭科は，家庭生活を変えていく目的をもたせることで単元を立ち上げていく。また生活総合では，卒業をテーマとしてプロジェクトを立ち上げる。

【人間の学び】
道徳の時間及び人間総合を人間の学びに重点化して展開する。人間総合では，これまでの成長や自分自身に対する理解が深まるような学習を考えることで，自分への自信や将来に向けた夢や希望をもつことができるようにする。

【文化・生活の学び】
社会科・理科・体育科は，自分で文化を見出し，創り上げていく文化の学びが中心であるが，環境とかかわり生活を更新していく理科，自分の生活を絡めて展開する社会科政治学習，科学的な認識のもとに生活を変えていく体育科保健領域については，領域・単元によって生活の学びで展開する。

【文化・人間の学び】
国語科では，言語文化を理解し創造する能力の育成を重視した文化の学びを重点にするが，人間の生命や生き方など見つめ見直す契機となるような活動で展開する人間の学びの単元も位置づけていく。

【生活・文化・人間の学び】
特別活動では，学級活動，児童会活動，クラブ活動，学校行事などそれぞれの特質から全ての学びで題材を創る。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
文化の学び	算数	150	整数のなかまづくり (12)	見積もって調べよう (5) ブロックパズルのピースをつくろう (9)	分数のたし算・ひき算クイズをつくろう (15)	立体の大きさを調べよう (17)
	音楽	50	豊かな表現をつくり出そうⅠ (12)		世界の音楽めぐりをしよう (6)	
	図画工作	50	ぼくの私のすてきなフェイス (4)	ベニヤ板のカーニバル (6)	思い出の一枚をかざろう (8)	
	国語	175	6学年の読書計画を立てよう (5) 短歌と俳句を読み味わおう (8)	わたしがとらえた筆者の考え!!～あなたはどう考える？～（１２） わたしはこう考える～食卓の向こう側～（１５）		広げよう！読書ネットワーク，本の楽しさお届け隊 (18)
	体育	90	スポーツテスト (4) ワープリレーを楽しもう (7)	つくろう！みんなのフットサル (9)		あらつ水泳記録に挑戦 (10)
	理科	95	私たちの周りの環境を見つめよう (1) 養分のつくられ方について考えよう (4)	ものを燃やす仕組み (14)	生きるために必要養分のつくられ方ついて考えよう (10)（植物）	生きるために必要な養分のつくられ方について考えよう (6)（動物）
	文化総合	100		英語　Let's enjoy brekfast! (10)		夏休み自由研究
生活の学び	社会	100	Ⅰ　日本のあゆみ (67) 時代を創った人々Ⅰ 福岡市博物館 (4) 板付遺跡 (4) 時代を創った人々Ⅱ 聖武天皇 (4) 藤原道長	時代を創った人々Ⅲ 武士の条件 (10) 北条時宗 (4) 文化を創った人々Ⅰ 日本文化の源流をさぐろうⅠ (8)	時代を創った人々Ⅳ 天下統一 (4)	時代を創った人々Ⅴ 徳川家光 (4)
	家庭	55	私にできることを見直そう (2)	おいしいごはんとみそしるを作ろう！ (12)	梅雨の時期のオリジナルレシピを作ろう！ (9)	
	学級活動	35	○最高学年としての役割 (1) ○学級目標を決めよう (1) ◎１学期のテーマを決めよう (1) ◎学級組織をつくろう (1)	◎１年生のお世話をしよう (1) ◎わたしたちの委員会活動をつくろう (2) ◎教生先生の歓迎会Ⅰ (1)	◎学級の歌をつくろう (2) ◎さようなら教生先生Ⅰ (2)	○アドベンチャースクールに向けて (1) ○夏休みの計画 (1)
	生活総合					
人間の学び	道徳学習	35	・最上級生として出発 (2) ・役割と責任の自覚 (1)	・かがやけ生命 (2) ・何のために生きるⅠ (1)	・本当の友達とは？ (2) ・深い思いやり (1)	・素直な反省 (1) ・感謝する心 (1) ・男女の友情と協力 (1)
	人間総合	10		いのち見つめて (10)		

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ならして調べよう (11)	単位量あたりの大きさで比べよう (16)	分数のかけ算・わり算の仕方を調べよう (29)	比を使って比べよう (4)	比例するものを調べよう (9)	算数のまとめ (23)	
豊かな表現をつくり出そうⅡ (8)	音楽の発展につくした音楽家たち (6)	日本の歌　みんなの歌ランド (4)		室内楽の音楽を楽しもう (4)	音楽でえがこう【海の音楽】(5)	気持ちをこめて歌おう (5)
すてきなオブジェ展を開こう (4)	広重・歌麿に挑戦 木版画アーティスト (8)	形と色のファンタジー (6)		伝えよう！私たちのポスターメッセージ (6)	お世話になった方に絵手紙をおくろう (6)	
めざせプレゼンターⅣ (10)	ともに生きるために筆者の考えをもとに伝え合おう (15)	ふじだな文集をつくろう (10) 表現を味わおう「やまなし」(15)	文化について考えを発信しよう (18)	情報を使って考えよう～人類よ，宇宙人になれ～ (24)	「ことば」について考えよう (10)	卒業するあなたたちに (選択読書活動)「海の命」，「生きる」ほか (10)
テーマ表現21 (5)	スピード・ジャンプの秘密を探ろう (6)	ソフトボールを楽しもう (7)	あらつ場所 (5)	縄跳び・持久走に挑戦しよう (10)	サッカーを楽しもう (10)	
		リラックス運動をつくろうⅡ (5) 健康な生活をしよう (病気の予防) (4)	器械運動発表会を開こう (8)			
電磁石パワーアップ作戦 (13)	正体ズバリ解明！～水溶液ガイドブックを使って～ (11)		私たちの体の不思議を探ろう (13)	土地のつくりと変化 (12)	私たちの周りの環境を見つめよう (8)	
つくろう！あらつ座 (28)				あらつコーポレーション (20)		
(7)	あらつフェスタ (10)					
英語 Let's enjoy communication! (15)				英語 Let's play foreign music! (10)		
文化を創った人々Ⅱ 日本文化の源流を探ろうⅡ 町人文化 (5)	時代を創った人々Ⅵ 伊藤博文 (5)	文化を創った人々Ⅲ 日本文化の源流を探ろうⅢ 文明開化 (5)	時代を創った人々Ⅶ 陸奥宗光 (5) Ⅱ 生活と政治 (15) ふくふくプラザができるまで (7)	15年戦争 (5) 日本国憲法 (8)	Ⅲ 世界の中の日本 (18) 世界の国を訪ねよう (8) スポーツ交流会 (4)	世界は一つ 国際連合の働き (6)
我が家のオリジナルバッグをつくろう (15)			快適な住まい方を工夫しよう (9)	家族の一員としての自分 (2)	伝えよう！ありがとうの気持ち (6)	
○２学期のめあてを立てよう (1) ◎２学期の学級組織 (1) ◎最後の運動会・月見学芸会 (1) ◎教生先生の歓迎会Ⅱ (1)	○学習環境をつくろう (1) ◎さようなら教生先生Ⅱ (2) ○思い出をつくる修学旅行 (1)	◎進めようボランティア活動 (2) ◎修学旅行を自分たちで (1) ◎第２学期の○○集会の計画を立てよう (1)	○心も体もリラックス (1) ◎第２学期の○○集会 (1)	◎３学期の学級組織をつくろう (1) ◎アルバムクラス用ページの内容を決めよう (1)	◎第３学期の○○集会の計画を立てよう (1) ◎後輩へ思いを伝えよう (2)	◎第３学期の○○集会 (1) ○中学校へ向けて (1)
・生きる輝きをもって (1) ・公徳を守る心 (1) ・自分らしさって？ (2)	・深い思いやり (1) ・世界の中の私 (1) ・すぐれた文化財 (1)	・奉仕する心 (2) ・環境と資源を大切に (2) ・集団の中での役割 (1)	・生きることの素晴らしさ (1) ・過ちを許す (1)	・家族の一員として (2) ・何のために生きるⅡ (1)	・地球を救えるか？ (2) ・人間の力を超えたもの (1)	・礼儀は心の表れ (1) ・何のために生きるⅢ (2)

算数科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自ら筋道立てて考える算数科学習

1　算数科での学ぶことと生きること

算数科の究極的なねらいは，既習の数理を発展させ新たな数理を創り出す「創造性」や，数・量・形に対しての柔軟な見方・考え方で問題を解決する「柔軟性」の育成にある。算数・数学では，日常の問題事象を記号や数値のみに焦点化し，抽象化された世界で思考するため，形式的，論理的な思考を積み重ねによって新たな原理や原則の創造や，明快な問題解決が可能である。したがって，算数を生活に生かす実用的な側面と，創り出す喜び，探究する楽しさ，解決する知的な喜び，よさの実感などの情意的側面の育成にも大きくつながっている。

算数科の教科特性から考えて，算数科が担う役割は，論理的な思考力を発揮し，新たな数理文化を創り出す創造性や問題解決力を培っていくことである。また，一方では今，特に基礎・基本の重要性が指摘されている。この両者を相反するものととらえるのではなく，創造的・問題解決的な学習を通すことで，さらに基礎・基本に立ち返る場が設定され，その充実が図られると考える。

2　算数科部主題についての説明

自らとは，問題事象に対し，「これはどうなっているのだろう」といった問題意識をもって追究していく中で，「こうしたらどうなるのだろう」という興味意識をもち，問題事象に進んではたらきかけていくことである。そして，自ら筋道立てて考えるとは，問題意識や興味意識をもち，根拠となる既習の数理を見通しとして問題事象に繰り返しはたらきかける中で新たな数理を創造したり，獲得した数理を用いて思考範囲を拡大したりすることである。そこでは，自分なりに導き出した解決方法を，友達の解決方法と「簡潔，明瞭，的確」といった観点で比較したり，見方・考え方を交流したりすることで，よりよい数理を自分の数理として身につけ，活用していくことになる。

自ら筋道立てて考える算数科学習とは，子どもが既習の数理の考察範囲を進んで発展させ新たな数理を導き出したり，導き出された数理を積極的に活用しながらより高次な問題解決を行ったりする姿が見られる学習のことである。算数科の学習では，問題が解決されればそれで目標が達成されるというわけではなく，その問題解決の一般化や発展，活用を通して，数学的な原理・法則が見いだされたり基礎・基本が定着したりするものである。そのために，子どもが複数の問題事象を追究する必然性があったり，進んで数理を繰り返し活用したりしていく活動の場の設定が必要となってくる。

- ○　既習内容とつないで理解し，数理の適用範囲を広げながら数理を活用していく子ども　（学ぶ意義）
- ○　数理を追究する中で，友達との交流を行い数理を見直して一般化や発展を図る子ども　（能力）
- ○　問題解決を繰り返す中で，自信もち，自分の考えのよさに気付き，満足感をもつ子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための算数の基礎基本】

意義	新たに出合った問題事象に対し，推論をはたらかせ，既習の学習内容に帰着させて問題解決を図ったり，獲得した数理を組み合わせ演繹的に用いて解を導き出したりすることで，基礎となる数学的な概念や原理，法則，数学的な見方・考え方をもとに数理が発展していくことに対する美しさやおもしろさを感じ取ることができる。				
能力		観点	低学年	中学年	高学年
	A能力 実体的学力	知識理解	簡単な整数の計算，簡単な外延量についての測定，図形の仲間分けが正しくできる。	整数の計算，簡単な小数・分数の計算，外延量の測定，簡単な図形の作図，簡単な統計処理が正しくできる。	整数・小数・分数の四則計算，内包量の測定，複雑な図形の作図・構成，複雑な統計処理ができる。
		表現処理			
	B能力 機能的学力	興味・関心	出合った問題事象に対して，「どうなってるのだろう」といった問題意識や，「やってみたい」といった興味意識をもって追究する。		
		問題の分析力	問題事象に出合ったとき，これまでに学習してきた中で明らかになっている既習の数理に帰着させて問題事象をよみかえたり，複数の数理を組み合わせることによって問題が解決できる状態に問題事象をよみかえたりする。		
		推理的思考力	既習と同じ見方・考え方を当てはめる類比的な推論を多くはたらかせ，解決方法の見通しを立てることができる。	類比的な推論や，明らかなことを用いる演繹的な推論をはたらかせ，解決方法の見通しを立てることができる。	
		数学的追究力	具体物や絵図や式を用いて思考し，複数の問題事象に対して繰り返しはたらきかけながら一般化を図ろうとする。	具体物や絵図や式を用いて思考し，多様な解決方法で追究したり，問題事象に繰り返しはたらきかけたりしようとする。	
		数理活用力	多様な数学的な見方・考え方や解決方法を友達から取り入れて使おうとする。 複数の解決方法から問題事象に応じて選択して使おうとする。 発見した数理を友達の数理と組み合わせて独自のアイデアで使おうとする。		
自信	問題解決を繰り返す中で，解決できた満足感や，解決の過程で友達との交流から自分の考えのよさを実感し有用感をもったり，自分の可能性への自信をもったりすることができる。				

Ⅱ　問題づくりの活動を位置付けた活動構成の工夫

算数科部　　田　中　健　悟

1　副主題の意味

問題づくりの活動とは，問題事象に主体的に関わっていくために，子どもがモデルの問題の属性を変化させて問題をつくり替え，それらの問題を解き合っていく活動のことである。

問題づくりの活動を位置づけるとは，問題づくりの活動のねらいを，数理の「習熟」「一般化」「活用」の３つに分類し，そのねらいに応じて設定することである。

問題づくりの活動を位置づけた活動構成の工夫とは，モデルの問題の属性を変化させて問題をつくりかえる活動が，そのねらいに応じて位置付けられ展開する学習のことである。子どもがモデルの問題の一部をつくりかえた問題を学習の中に取り上げることは，単に問題解決の見通しに有効にはたらくだけではなく，複数の問題事象を追究していく一連の活動の中で，数理の一般化を図ったり，数理を確実に身につけ活用したりといった自ら筋道立てて考える子どもの姿へとつながっていく。

2　学習プランの具体的構想

●　問題づくりの活動の教材化の条件

問題づくりの活動の役割は，理解したことの習熟だけでなく，追究する対象を発展させながら一般化を図ることや，数理を柔軟に活用できるようにすることである。そのために，最初は，狭い範囲内で問題づくりの活動を行い，数値などの属性を変化させていく中で考察範囲が拡大していくように配列する。そして，問題づくりの活動が，その学習時間にねらう数理内容に合致するように，次の４つのことに留意して教材化を図る。

ア）　最初に提示するモデルの問題で変化させる属性（数値，形，位置，個数，範囲等）の焦点化を行う。

イ）　最初に提示するモデルの問題でのねらいを「習熟」「生成」「発展」のいずれかに定める。

【習熟】…理解したことを使えるようにするねらい
【生成】…問題点を整理し数理を導き出すねらい
【発展】…数理の適用範囲を広げることがねらい

ウ）数理内容が可逆的に活用されるような方法での問題づくりの活動になるように提示する。

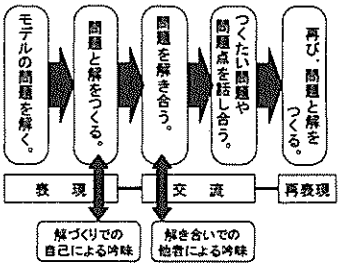
エ）つくった問題を解き合う中で，考えの交流が自然に起こるように，問題の提示を条件過多や条件不足で行い，次のようにな状況が生まれるようにする。

・解（答え）が複数考えられる状況
・解（答え）の導き出し方（解説）が異なる状況

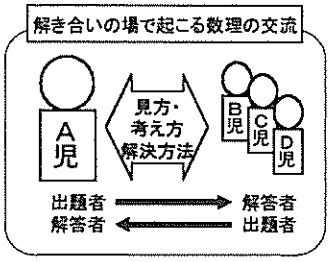
●　問題づくりの活動を位置付けた活動構成

(1)　１単位時間における活動構成

この問題づくりの活動では，問題解決活動において自己と他者の両者から反省的な思考がはたらくようにする。そのために，自己による反省的思考の場として「解をつくる場」の設定，また，他者による反省的思考の場として「作成した問題の解き合いの場」の設定を行う。従来の指導では，数理の理解を，代表児童が出した考えを発表で聞くことによって理解するといったことが多くなされていた。しかし，これでは受け身的な理解で終わっていると感じる。そこで，他者との交流を，表現物（ここでは作成した問題）を媒体を通して繰り返し行っていくことで，主体的で活動的な理解がなされていくと考える。そこで，図１に示すような活動構成をとっていく。そして，問題を解き合う場では，子どもたちの見方・考え方，解決方法が双方向でやりとりされ，自分と異なる数理に出合ったり，自分の数理がより強化されたりする機能がはたらくことになる。



【図１　活動構成】



【図２　解き合いでの機能】

(2)　１単元における活動構成

１単元内における数理内容の位置づけの違いから表１のような２つの活動構成に類型化される。問題づくりの活動を，Ａのタイプは発展的な問題事象として，Ｂのタイプは類似的な問題事象を中心に位置付ける。

【表１　問題づくりの活動を位置付けた単元の活動構成】

Ａ:基礎的な数理内容がその単元で初めて登場する場合

導入段階	展開段階	発展段階
数　理　の　生　成		数理の活用
モデル問題の追究	モデル問題の追究	問題づくりの活動

※　発展段階に位置付ける問題づくりの活動は，導入段階や展開段階で生成してきた数理を駆使して解決させるような発展的な問題事象を設定する。

Ｂ:基礎的な数理内容が前単元に登場している場合

導入段階		展開段階		発展段階	
数理生成	活用	数理生成	活用	数理生成	活用
モデル問題の追究	問題づくり	モデル問題の追究	問題づくり	モデル問題の追究	問題づくり

※　各段階に位置付ける問題づくりの活動は，各段階に位置付けたモデル問題の追究をさらに深めたり広げたりする類似的な問題事象を設定する。

3　指導の実際

第2学年　単元

九九表のひみつ発見!
～かけ算九九表のクイズをつくろう～

(1) 単元の目標

1　関数的な見方を用いて，次々に九九表の中に出てくるヒントの数から，段を特定したり，隠された数を見つけ出すことができるといったかけ算の規則性の美しさ（よさ）に気づく。
2　数の乗法的な見方や「乗数が１増えると積は被乗数分だけ増える」といったかけ算のきまりを用いながら，問題を解決させることができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，乗法に関して成り立つ性質やきまりをとらえることをねらっている。そこで，「かけ算九九表のクイズづくり」を教材化する。「かけ算九九表のクイズづくり」とは，かけ算九九表を切り取った形の問題づくりのことである。ここでは，いくつかの場所の数がわかっているときに，その示された数をヒントにして，何の段かを特定する「段当てクイズ」と，？の部分の場所に位置している数を特定する「数当てクイズ」の２つのクイズ遊びである。さらに本単元では，副主題としている問題づくりの活動の中に問題を解き合う活動と問題をつくる活動を位置づけている。それは，問題を解き合う中で，友達の新たな見方・考え方と出合うことができ，その出合いの中で得た友達の見方・考え方を自分が新たにつくるクイズの問題の中に取り入れていくと考えるからである。ここで共有する見方・考え方は，段や数を当てていく際の筋道立て方や根拠とする知識，あるいはかけ算九九表に登場する数の乗法的な見方である。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１～３/６時
「かけ算九九表」と「段当てクイズ①と②」に出合い，九九表を使った学習への見通しをもつ。

(1) 既習のかけ算を，かけ算九九を表にまとめる。
(2) 段当てクイズ①と②に出合い，クイズをつくる。

Ａ１：表現　→　Ａ２：交流

【問題を試しにつくる】

9				

こたえ（９）のだん
９×１＝９で見つけます。

【友達と問題を解き合う】

		54		

↑ 友達のつくった問題
こたえ（９と６）のだん

正解だけど，もう一つ答えがあるよ。
これは，６の段にも答えがあるよ。

Ａ３：再表現　【問題を再度つくる活動】

4				

こんな問題をつくりました。
このクイズのおもしろさは，４の段の四一が四か，一かける四か，二二が四かわかんなくて，難しいのでおもしろいと思いました。

資料１　「段当てクイズ②」の活動におけるA児の反応

第２次：４／６時
「かけ算九九表の段当てクイズ③」に出合い，段当てクイズの問題をつくったり解いたりする。

(1) かけ算九九表の段当てクイズのモデルに出合う。

第１次では，かけ算九九について，構成の際に使ってきたきまりを見直しながら，かけ算九九の答えに当たる数を乗法的な構成でとらえることをねらいとしている。そのために，かけ算九九表を使った「段当てクイズの活動①と②」を位置づけた。段当てクイズの活動とは，資料１にあるようなかけ算九九表の一部を抜き取った横５マスのカードが，何の段なのかを当てる遊びのことである。まず，第１時では，既習のかけ算を九九表にまとめる活動を行った。次に第２時では，段当てクイズのモデルの問題と出合わせた。ここでは，モデルの問題を真似て，ヒントの数がマスの中に５つ入った段当てクイズを自由につくり，何の段なのかを当てるクイズの解き合いを行った。第３時では，ヒントの数が１個の条件で，①クイズをつくり答えをカードの裏に説明する，②クイズを友達と解き合う，③再度クイズをつくるといった流れで活動を行った。「ヒントの数が１つ」の条件にしたのは，何の段なのかを数の差で判断していた子どもたちに，数の乗法的な見方を用いた判断へと視点を変換させるためである。

考察１

第３時の段当てクイズ②におけるＡ児の反応が資料１である。最初の活動（Ａ１）のＡ児がつくったクイズでは，まだ，数の交換性や数の乗法的な構成を意識していなかったが，友題と問題を解き合う活動（Ａ２）の中で，「54」がヒントの数で答えが６と９の２つの段にしている友達との交流を通して，数の交換性や乗法的な見方を意識し，最後の問題を再度つくる活動（Ａ３）の中では，それらを根拠に友達が難しいと感じるクイズをつくっていった。

第２次では，クイズの中に，「数の乗法的な見方」や「かけ算の交換性」を活用することをねらいとしている。そのために「段当てクイズ③」の活動を位置づけた。段当てクイズ③は，段当てクイズ①の発展させたもので，カードのマスに入れる数を２つに制限したクイズである。第４時は，ヒント

(2) 段当てクイズ③の問題を試しにつくり，それを解き合う中で考えを交流し，再度問題をつくる。

B１：表現
【問題を試しにつくる】

		63	72	

↑試しにつくった問題
こたえ（９）のだん
72 － 63 ＝ 9 でわかる。
※　差に着目して解を導き出す問題。

B２：交流
【友達と問題を解き合う】

	45			72

↑友達がつくった問題
こたえ（９）のだん
45 は，9×5か5×9。
※　数の見方に着目して解を導き出す問題。

B３：再表現　【問題を再度つくる活動】

24				48

←B児が再度つくった問題
こたえ（６）のだん
24 は6×4か4×6だから。
このクイズは，48 から 24 を引いたって，いくつ増えているのかがわからないから，何の段なのかがすぐにわからなくておもしろいと思います。

資料2　「段当てクイズ③」の活動におけるB児の反応

の数が２個のクイズづくりを，第３時と同様の流れで行った。

C１：表現
【問題を試しにつくる】

15				27

こたえ（３）のだん
15 は3か5のだんで，
27 は3のだんにある。

C２：交流
【友達と問題を解き合う】

		24		36

こたえ（６）のだん
24 と 36 の両方があるのは4か6のだん。

C３：再表現　【問題を再度つくる活動】

	6			12

←C児が再度つくった問題
こたえ（２）のだん
このクイズのどこを難しくしたかというと，6と 12 が入っている段は3つある（2の段，3の段，6の段）ところです。6と 12 の間を見れば3や6の段じゃないことがわかります。

資料3　「段当てクイズ③」の活動におけるC児の反応

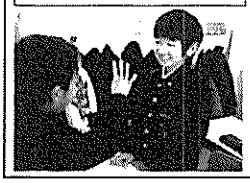
考察２

資料２にあるように，B児は，試しの問題ではまだ「乗数が１増えると積は被乗数分だけ増える」というきまりを根拠にしていたが，友達と問題を解き合う活動（B２）の中で，ヒントの数が離れた位置にある友達の問題と出合い，問題を再度つくる活動（B３）の中では，数の交換性を根拠にした問題を作成した。また資料３にあるように，C児は，友達との問題の解き合い（C２）の中で，ヒントにした２つの数の両方が入っている段が複数あることに気づき，問題を再度つくる活動（C３）の中で，ヒントにする２つの数が３つの段に入っている問題を作成した。これらの反応には，クイズの答えがすぐに見つからないように，ヒントに取り上げる数値を数理を活用しながら意図的に選定した姿，つまり主題に掲げている自ら筋道立てて考える姿が伺える。しかし，友達との問題の解き合いで，数の見方の変容が起こらない児童も見られた。これは，問題を解き合う活動の中で，解決方法や見方・考え方の異なる児童と必ず問題を解き合う仕組みが設定されていなかったことや，数の見方が十分でない児童への細かな支援が足りなかったことなどが原因だと考える。

第３次：５～６／６時
「数当てクイズ」の問題を解いたりつくったりする。

D１【数当てクイズ】

		?		
14				42



まず，１４は２の段と７の段にあるけど，４２っていう数は２の段にはなくて７の段にしかないから，まずここが７の段だとわかって，７の段の上が６の段だから，ここが七二だからここは六二になって，１２，１８，２４ってやっていけば２４ってわかると思う。

資料４　複雑な数当てクイズにおけるD児の反応

第３次では，数の乗法的な見方をさらに複雑な問題解決の中に生かしていくことをねらいとしている。そのために，「数当てクイズ」の活動を位置づけた。「数当てクイズ」とは，「段当てクイズ」のカードと同じものを用い，その中に入れた「？」の部分の数を探し当てる遊びのことである。第５時では，５マスのカードで，「？」に当たる数を見つけていく活動を，第６時では，10 マスのクイズの数当てクイズの問題をつくり，友達数名とクイズを解き合う活動を行った。

考察３

資料４のD児の反応からは，友達が作成した 10 マスの複雑な数当てクイズについて，その答えの導き出し方を説明する中で，数の乗法的な見方を組み合わせて活用できていることがわかる。これは，段当てクイズから数当てクイズへといった段階的な活動構成が有効にはたらいたからだと考える。

【全体考察】

考察１と考察２からわかるように，「段当てクイズ」の２つのクイズづくりの活動において，かけ算の交換性や，数の乗法的な見方を活用してクイズづくりを行っていくところに，自ら筋道立てて考える姿が発揮されたと考える。これは，段当てクイズの条件整備や，「クイズをつくる→解き合う→再度クイズをつくる」といった活動構成が有効にはたらいたからだと考える。また，考察３からは，複雑な「数当てクイズ」において，かけ算の交換性，数の乗法的な見方を組み合わせ解を導き出したところにも，自ら筋道立てて考える姿が発揮されたと考える。これは，クイズの難易度を段階的に変化させたことや，クイズを「段当てクイズ」から「数当てクイズ」へと変化させたことが有効にはたらいたからだと考える。一方，課題としては，問題を解き合う場面において，解決方法や見方・考え方の共有が必ず起こる仕組みを位置づける必要があった。そして，数の乗法的な見方に気づきながらも，それを活用できなかった児童に対しては，かけ算九九表を答えの側からつくり直した表を支援カードとして用いるなどの細かな支援が必要であった。

Ⅱ　比較をうながすゲームを位置づけた展開

算数科部　　永　尾　　健

1　副主題の意味

比較をうながすとは，既習内容をもとにして見通した自分の数学的な考え方と相反する他者の数学的な考え方を比べるような場の設定を行い相互の考えの差異点から新たな考えを導き出すことを容易にすることである。

比較をうながすゲームとは，数学的な考え方の違うもの同士が，その考え方をもとにした解決方法をもとに考え方の違いを交流（勝負）する場のことである。そこでは，数学的な考え方同士を比べさせ，相違点に着目し，他者の違った数学的な考えを取り入れながらよりよい考えをつくるのである。比較をうながすゲームを位置づけたとは，まず，ゲーム１において自分の数学的な考え方と他者の考えをもとにゲームを行いお互いの考え方の相違点について着目させる。次に，話し合い１では，他者との数学的な考え方の相違点について簡潔・明瞭・的確の観点で話し合い，新たな見方・考え方として自分の数学的な考え方を新たにつくる。さらに，ゲーム２において自分の数学的な考え方や他者の数学的な考え方相互の有効性について話し合う。比較をうながすゲームを位置づけた展開とは，試みる段階では，算数の内容を含んだゲーム場面を設定し，単元の課題をつかむ。つくる段階では，具体的操作活動を繰り返し行いながら数理をつくりだしていく。広げる段階では，その獲得した高まった数理を活用して一般化を図っていく。

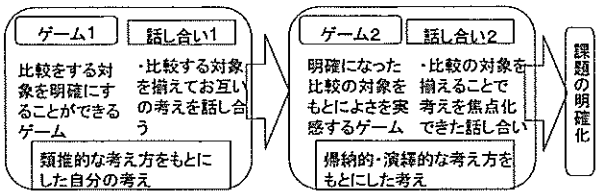
2　学習プランの具体的構想

●比較をうながすゲームの教材化の条件

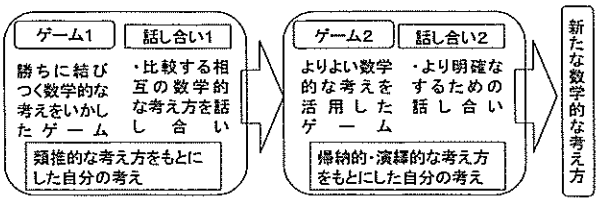
子どもたちが主体的にゲームを行うように，①数値を変えたり，事象を変えたりしながら多様な数学的な考え方（数学的な内容）を発揮できるゲームであること，②比較の観点を一定にし，ゲームの形態を変化させ，難易度を上げることによって，繰り返しゲームを行い，既習の数理の内容に付加されたより高まった数理を活用できるゲームであること

●比較をうながすゲームの活動構成の工夫

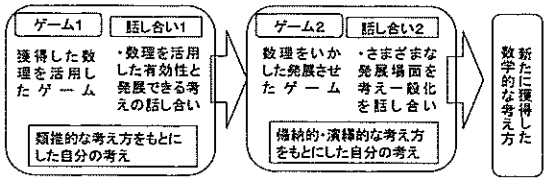
「試みる段階」では，課題となる問題事象の焦点化をはかることをねらいとしている。ゲームのタイプとして条件を単純化して比較の対象を１つに絞り，単元の課題を明確化する。



「つくる段階」では，お互いの方法・内容の考えの相違点に着目した考えの交流を行い，単元の目標に迫ることをねらいとしている。ゲームのタイプとしては，ゲーム１，２を通して，段階的に比較の対象が増え内容をより高めていくようなゲームを行う。。



「広げる段階」では，一般化を図ることをねらいとしている。そこで，獲得した数理を活用しながら適用範囲を広げる，多様な場面設定を行ったゲームを行う。



●比較をうながすゲームを促進する支援

①グループ化の工夫を行う。「ゲーム１，２」で，ペアさらには，対戦相手を全体とし解決方法を比較させる。
②必勝法を書き留めるための学習カード（ポイントカード）自分の数学的な考え方の見通しを書いた学習の足跡

	試みる	つくる	広げる
ねらい	○　算数的内容を内在する算数的課題を把握することができる。	○　目的意識，課題意識をもって繰り返し問題事象にあたることができ，自分の考えを高めることができる。	○　獲得した数理を活用して，さまざまな問題場面に活用しようとすることができる。
内容と学習活動	1　算数の内容を含んだゲーム場面を設定し，単元の課題をつかむ。 ○　自分の考えに付加修正を加えながら算数的な課題をつかむこと ○　数や量に着目した比較の対象の焦点化をはかり，単元の見通しを明確にすること	2　ゲーム１，２といった具体的操作活動を繰り返し行いながら数理をつくりだしていく。 ○　既習内容を活用して数理をつくりだすこと ○　他者の意見との比較・見当による方法や考え方をつくること	3　つくりだした数理を活用する。 ○　新たな数理への更新と一般化を図ること ○　適用範囲を広げるために，既習の数理を活用しながらより高まった数理を比較しながら確立していくことができること
支援	※　繰り返し操作活動を行える数理をつくりだすための教具の提示 ※　内在する数理の追究が課題となる勝利を目的としたゲームの提示	※　既習の数理がつながってゲーム提示の順序 ※　内在する数里を引き出させるためのゲームの条件の設定	※　既習の数理を活用していくゲームの設定 ※　獲得した数理を活用したより明確な解決方法の定着

【図１　比較をうながすゲームを位置づけた算数科学習プラン基本的な活動構成】

3　指導の実際

第4学年　単元

じんとりゲームをしよう
～面積～

(1) 単元の目標

1　面積の比較の方法について見通しをもちながらゲーム活動によってより合理的な考えをつかむことができる。
2　じんとりゲームを通して，面積の意味がわかり普遍単位の必要性を実感し，面積の単位を知るとともに，複合図形を長方形や正方形の求積方法に帰着して面積を求めることができる。

(2) 単元の考え方

本単元では，面積とそれを測定することの意味や正方形や長方形の面積の求め方を考え，それらをもちいることをねらいとしている。具体的には，①面積の単位（cm^2）と測定の意味を理解させること，②正方形や長方形の面積を長さで測定するという間接測定によって求めることができること，③面積の公式を使うことや普遍単位で測定すること，④簡単な場合について面積を求めることができることなどがある。

そのために，子どもたちが広さを比べることによって広さの違いを明らかにするための学習として「じんとりゲーム」を行い，広さを比べる必然性をもたせる。また，１対１のじんとりゲームの対戦，２人組とクラス全体での対戦など２回の広さを比較する場面を設定し，高まった数理を共有する場面を設定するのである。

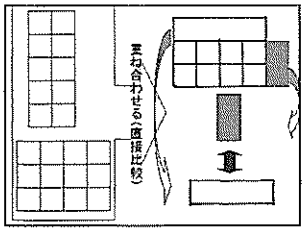
このように，ゲームを学習内容に応じたゲームを設定し広さを比較する活動を行うことによって，面積の公式を使うことや普遍単位で測定することのよさをとらえることができ，主体的に学習を進める上で意義深い。

(3) 学習の流れと考察

第１次：1／9時
広さという意味についてつかみ，じんとりゲームが広さを比較しながらゲームの進め方がわかるとともに直接比較，間接比較をして広さを効果的に比較する。

ゲーム１：14本の棒で陣地をつくり広さを競うゲーム

写真1　直接比べるとはみ出す部分がわかりにくいよ。



資料1　直接比較の非合理的な考えを交流

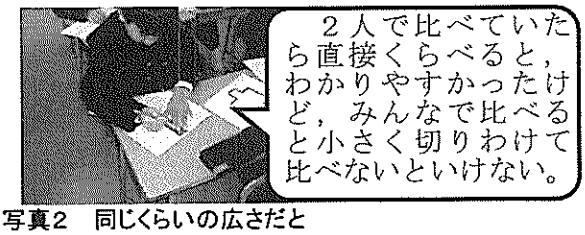


写真2　同じくらいの広さだと比べにくいなあ。

第２次：2～6／8時
話し合い活動を通して任意単位や普遍単位をもとにしながら競争相手と有効な比較方法を見つけ，より有効な（明確な）比較方法を見つけていく。

(1) ゲーム３：ピースを組み合わせて陣地を競うゲーム

第１次は，じんとりゲーム１をおこない，１４本の棒をもとにいろいろな図形の形づくりをし，広さを比較しながら勝敗を決めるゲームを設定することによって，広さの正確な比較方法について考えることをねらいとしている。

まずは，１４本の棒を使っていろいろな図形を形づくらせ，棒でかこまれた部分を自分の陣地として増やしていくゲームを行いながら，隣の席の対戦相手と広さを比較して，じんとりゲームを行った。

考察１

１４本の棒を並べてじんとりを行い，広さを比較するための明確な判断基準の必要性をつかむことができた。これは，広さを比較する必然性をもたせるためにじんとりゲームを行うことが有効に働いたからである。また，写真２から直接比較できないところは小さく切り分けて比べるといった，後の普遍単位へとつながる考えをすることができたのは，話し合い活動１，２の２つの活動を位置づけることによって勝敗を決め広さを比べる必然性をもったためであると考える。

第２次は，じんとりゲーム３を通して，３つのピース（４cm^2）を組み合わせてつくった陣をもとに広さ比べを行い，半端な形（１cm^{2}をもとにした形）に着目し，普遍単位のよさについて分かることをねらいとしている。

まず，３種類の色板を敷き詰めて，広さ比べをするじんとりゲーム３を行った。変則的にできた４cm^{2}の複合図形をいくつも敷き詰めて陣地を広げていくことによって複雑な図形になり，話し合い１において対戦相手との比較が難しいことから，正方形や長方形のような整った形にして比較しようと工夫するとともに，正方形や長方形にならなかった形の扱い方を話し合う中で，前時に使った１６cm^{2}の正方形を任意単位として設けて比較しようとした。そこで，半端な形に着目することによってはみ出した１cm^{2}をもとに比較することの

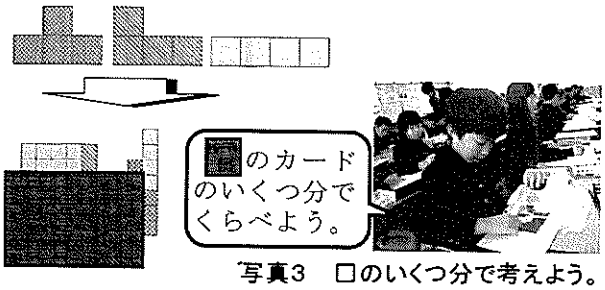


写真3　□のいくつ分で考えよう。

【話し合い２】

（F くん）　大きい四角形（４㎝×４㎝の色板）のいくつ分と数えて，余った部分を小さい四角形（１㎝×１㎝の色板）で数えるといいです。

（I くん）　（うなずきながら聞く。）

（U さん）　大きい赤いピースを小さい赤いピースのいくつ分で数えたら１６個分になりました。

（N さん）　Ｃ１みんなの話を聞いてわたしも，小さい正方形のいくつ分で数える考えがいいと思いました。その方が早いし，正確に比べられそうだからです。

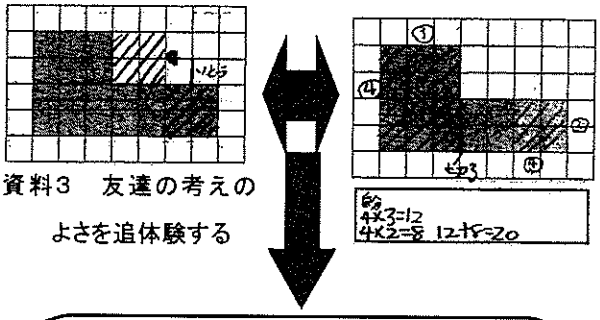
（I くん）　Ｋくんの考えた，大きい赤い正方形の色板と小さい１㎝^{2}の正方形を使い分けるのが一番いいと思った。Ｃ２ぼくみたいな大きい（広い）人は小さいやつで数えていたら時間がかかる。だから小さい（狭い）人もいるので，小さいのを使えばいいと思った。

※この後に小さい正方形の色板（１㎝×１㎝の色板）を１㎝^{2}として普遍単位について知らせる。

資料2　広さ比べの方法の話し合い2

第３次：　7～8／8時

複合図形の面積について求積の公式の多様な活用方法について考える。



資料3　友達の考えのよさを追体験する

Ｙさんの考えは，本当はないところの面積をあるようにしてへこんだ部分を埋めて正方形や長方形にして面積を求め，後から埋めた部分をひいたことがよかった。

資料4　友達との考えの有効性を実感した感想

よさを話し合い１によって見いだすことができた。

考察２

子どもたちは，比較方法の有効性についてより明確な比較方法について話し合うことができたと考える。それは，クラス全体によるじんとりゲームをすることによって必然的に起こる勝敗を決するための話し合い２が上手く働いていたからである。これは，資料２からも分かるように，じんとりゲーム３でつくった陣地が，比較することができない不十分さから新たな課題を共有することになった。これまでの任意単位では，対応できない端の部分に見合った任意単位が必要であることを話し合いを通して気付くことができ，１㎝×１㎝の色板で広さを比較することによって誰とでも共通の単位で比較できるといった考えをＣ１のように明確に述べることもできた。これは，話し合い２による全体の場でより明確に自分の考えを述べる場を位置づけたからであるし，他者の考えとの比較を生み，より正確な勝敗を判断するための判断基準を設けたのであると考える。

第３次は，７／８時でじんとりゲーム４では，簡単に組み合わせることができる図形を組み合わせ普遍単位をもとにして等積変形や倍積変形などの考えを用いた多様な考えができるようにするためにゲームを行いながら，理解を深めていかせることをねらいとしている。

まず，複合図形について多様な面積の求め方をした方が得点できるゲームを行い，ペアによって勝敗の見分け方について話し合い１を行う。さらに，話し合い２によってより多様な求積方法について考え，友だちの考えのよさから複合図形はすべて長方形に等積変形してから求積するというように統合化を図って学習をまとめた。また，話し合い２によって，友達の考えを取り入れたり，分割の考え，補完の考え，移動の考えなどの求積方法を類型化したりしていた。

考察３

７／８時の学習場面では，話し合い１，２を位置づけることによって，資料３に示すように互いの意見交換の中から求積方法の有効性を検討する姿が見られた。話し合い１によって分割した複合図形を既習内容の求積の公理をもとに求積できることに気付くことができた。さらに，その過程で，資料４のように友達の考えのよさを自分の考えに付加修正をして考えを確かにする姿も見られた。これは，ゲーム２，話し合い２を設定することによって，適用範囲を広げたいと思いをもったからであると考える。また，話し合い１において対戦する相手に求積方法を説明して理解され，なおかつ，求積方法の妥当性を認められたからであると考える。

【全体考察】

考察１と考察２からわかるように各段階で話し合い活動をもとに面積を比較することや多様な求積方法を比較する中で，友だちの考えのよさに触れ，自分の考えに生かしていこうとすることができた。また，このことと考察３から，既習の数理を活かして求積方法を多様に見つけることができ，より有効な求積方法を自分の考えを取り入れて考えようとしたことから，数理を獲得している姿をとらえることができる。これは，ペアから全体へと２回の話し合いを設定し，考えを検討をするといった過程が数理を獲得する上で有効であったと考える。勝敗を決めるという立場により筋道立った考えをもって論理的に説明する必然性をもち，一人ひとりが論理的に説明することができるようになったと考える。このことから，この話し合いがペアから全体を経て発展させていくことにより，他者の閑雅のよさをもとに付加修正を行い自分への自信を深め，認め合うことへつながり考えを共有することにつながっていったと考える。

課題としては，まだ，受動的な立場で友だちの考えを聞くだけの児童も多いために，ペア編成の在り方を考えることにより，同じ立場の子ども同士で自分たちの考えをより一層高めていこうとする場を設定していく必要があると考える。

国語科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　言語を駆使して考えをつくる国語科学習

1　国語科での学ぶことと生きること

国語科が究極のねらいとしているのは，言語能力を育成するとともに，国語を尊重する態度を育てていくことである。つまり，日常の言語生活を豊かに充実させ，それを通して人間を高めていく子どもの育成である。国語科を学ぶということには二つの側面がある。一つは思考の側面である。思考とは，言語を通して何かを感じたり考えたり物事をつかみ取ったりする働きである。もう一つは伝達の側面である。伝達とは，言語を通じて自己の自分の思想・感情を表し互いに意志を通じ合う働きである。この二つ側面を高めていくことは豊かに生きることにつながる。ここに，国語科を学ぶ意義がある。

しかし，近年の国語科学習では，伝え合う力を重視するという名の下，国語科を学ぶ側面のうち，伝達の側面に重点が置かれ，思考が軽視されるきらいがあった。そして，国際学力調査等で，読解力，記述式問題に課題があることが分かり，中央教育審議会答申では，学習指導要領の見直しに当たって，国語力はすべての教科の基本となるものであり，基礎・基本を確実に定着させることを重視する必要があるとされた。そこで，本校では，国語科はすべての教科等の基盤となる教科であり，豊かに生きる子どもの育成をめざす<ふくおかプラン>の土台としての役割・立場を担っているという，国語科固有の目的を全うする。つまり，言語で思考することを大切にし，思考と伝達という二つの側面をバランスよく高め，子どもたちに身に付けさせるべき基礎・基本を確実に定着させていく。

2　国語科部主題についての説明

言語を駆使するとは，言葉の使い方を増やすことと，その言葉の使い方を確実に身につけていくことである。言語を駆使して考えをつくるとは，今もっている言葉の使い方で課題に対する自分の考えを書きまとめ，それを話したり聞いたりすることによって新たな言葉の使い方を知り，それを繰り返すことで自分の考えを意見にまで高めることである。この力は，実体的学力としての言語活動を営む力である「話す力」「聞く力」「書く力」「読む力」と，機能的学力としての言語を手がかりとしながら論理的に思考する力である「思考力」で構成される。

言語を駆使して考えをつくる国語科学習とは，読んだり書いたりしながら自分の考えをまとめ，話したり聞いたりしながら考えを交換し合うことで，言葉の使い方と自分の考えを高め合う学習である。このような学習は一人ではできない。学習者が，①強い課題意識をもっていることと，②その課題に対する自分と他者の考えが違うことを知り，考えの違う他者とともに新たな考えを創造していく必然性を感じていることが不可欠となる。

- ○　ここが知りたいという課題意識のもと，それをとらえて自分の意見をもつ子ども　（学ぶ意義）
- ○　読んだり書いたりして自分の考えを形成し話したり聞いたりしながら考えの違う他者と考えを交換し合い，ことばの使い方と自分の考えを高め合う子ども（能力）
- ○　相手が伝えたい事柄をとらえて自分の考えをもつことができる存在であることを自覚している子ども（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための国語科の基礎基本】

意義				相手や目的に応じ適切に言語活動を進めるにはどうしたらよいかという課題意識をもつこと		
観点				低　学　年	中　学　年	高　学　年
能力	A能力 実体的学力	言語活動力	話す力	相手に応じ，経験したことなどを順序立てて話す力	相手や目的に応じ調べたことなどを筋道立てて話す力	目的や意図に応じ，考えたことなどを的確に話す力
			聞く力	大事なことを落とさないように聞く力	話の中心に気をつけながら聞き取る力	相手の意図をつかみながら聞き取る力
			書く力	経験・想像したことなどを順序がわかるように書く力	調べたことなどを段落相互の関係を工夫して書く力	考えたことなどを筋道立てて効果的に書く力
			読む力	事柄の順序や場面の様子に気づき内容の大体を読み，読み取ったことを表現したり説明したりする力	段落相互の関係を考え，内容の中心をとらえて読み，読み取った内容についての自分の考えをもつ力	主題や要旨，文章の構造を考えながら読み，読み取った内容についての自分の考えを明確にしながら読む力
		言語活動に関する技能		話し方・聞き方・話し合い方，書き方，読み方に関するスキル		
		言語に関する知識		発音・発声，文字，表記，語句，文及び文章の構成，言葉遣いに関する知識・理解		
	B能力 機能的学力	言語感覚		言語の違いや働きに気付く力	言語の違いに意味や思いの違いを感じ取る力	言語のもつ固有の意味と働きをとらえる力
		想像力		言語を手がかりに場面の様子を思い描く力	言語を手がかりに情景を描き出す力	言語を手がかりに人物像や世界像を描き出す力
		思考力		言語を比べながらくわしく考える力（具体化）	言語を関係付けながら考えをまとめる力（具体化・抽象化）	言語を構造化しながら考えを広げ深める力（概念化・一般化）
自信				言語活動を営む力が質・量ともに拡充した自分に自信をもつこと		

Ⅱ　異質な読みが響き合う対話活動の展開

国語科部　　光　延　正　次　郎

1　副主題の意味

異質な読みが響き合う対話活動には，①教材に説明されている内容との対話であるテキストとの対話活動，②教材の内容に関する友達の異質なとらえ方との対話である他者との対話活動の二つがある。異質な読みが響き合う対話活動とは，強い課題意識のもと，「テキスト」「他者」との対話活動を通して，自分の内なる複数との自己内対話が生成され，課題に対する自分の読みが変革していくことである。異質な読みが響き合う対話活動を位置付けたとは，対話活動を「テキストとの対話活動」→「他者との対話活動」という順に位置付けることである。まず，「テキストとの対話活動」である。子どもたちは，文章の文脈に自分の脈絡を重ねながら読みを形成していく。しかし，知識や経験が不足しており，自分の脈絡を重ねられず十分に読めない部分も出てくる。そこに，ほかの情報への求めが生じる。その求めに応じて情報を与えれば，それらを結び付けながら読みを形成できる。つまり，「テキストとの対話活動」をすることにより，子どもたちとテキストとの間に働きかけ合う関係が形成され，一人一人が読みをつくることができるのである。次に，「他者との対話活動」である。自分と友達の読みが違うことを知れば，自分の中に「誰もしていない読みがつくれたぞ。みんなに広めたい。」とか「自分の読みは正しいのかな。不安だなあ。」という友達と話し合わねばならない状況が形成される。しかし，全体では，発言する人数や回数が限られ，自分の読みの検討が迫られるような状況がおきにくい。そこで，対話活動の形態を，違う読みをしている友達同士で構成された少人数のグループとする。このように，異質な読みが響き合う対話活動を位置付けた説明文の学習プランは，二つの対話活動により，子どもたちが友達と読みを交流し高め合いながら自分の読みをつくっていく説明文学習の構想である。

2　学習プランの具体的構想

●　教材選定の工夫

異質な読みが響き合う対話活動を位置付けることにより，自分の読みをつくることができる教材を選定する。

○　課題性…自分の知識や経験と書かれている内容とにズレが起きるもの
○　多様性…課題に対する価値ある読みが数種類形成されるもの

●　学習課題の設定の工夫

対話活動が旺盛に展開されるためには，子どもたちの強い課題意識が不可欠である。教師は教材を分析して，自分の知識や経験と書かれている内容がズレるところを比較提示し，「ＡとＢのどちらが正しいんだろう」という知りたいと思えるような学習課題を設定させる。

●　テキストとの対話活動を旺盛にする情報の付加

自分の知識や経験だけではだけでは自分の読みを形成できない部分も出てくる。そこで，教師は，子どもたちの知識や経験を分析して，発達段階に応じ，低学年には視覚情報を，高学年になれば文字情報を付加する。

低　学　年	中　学　年	高　学　年
具体物・写真など視覚情報		資料・文献など文字情報

●　他者との対話活動の進め方

グループで司会者を立て，司会の進行のもと，まず，第一発言者が自分の読みを提案する。そして，第二発言者からは，それぞれその提案に付加・修正を行っていくフリートーキング方式で行う。

臨	つかむ（課題設定）	ふかめる（課題追究）	まとめる（課題解決）
学習活動	1　教材文に説明されている内容と教材文に説明されている内容に関する自分の知識や経験とを比較し，気づいたことについて話し合う。	2　課題について読み深める。 (1) テキストとの対話活動により，自分の読みを形成する。 (2) 他者との対話活動により，違う読みをしている友達と交流する。	3　学習の流れ図や学習プリントをもとに，読みの変容を振り返り，課題に対する自分の読みを書きまとめる。
	自分の知識や経験 ⇕ 比較 教材に説明されている内容 → 課題	テキストとの対話 → 読みA・読みB → 他者との対話 → 自己との対話	課題に対する自分の読みの書きまとめ → 課題解決
支援	※　子どもたちが既にもっている知識や経験と教材に説明されている内容の比較提示	※　子どもの読みを分析し，子どもがもたない情報を教師が付加 ※　読みの違う友達とのグルーピング	※　学習の流れ図や学習プリントによる，学習過程の振り返り

【図1　異質な読みが響き合う対話活動を位置付けた説明文学習の活動構成】

3　指導の実際

第3学年　単元

どの特長が大事なのかな?
～もうどう犬の訓練～

(1) 単元の目標

1　盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬のどの特長を生かしたり，おさえたりすることなのか知りたいという課題をもって意欲的に読み，自分の考えを進んで話し合うことができる。
2　課題に対する読みが違う友達と班を組んで交流しながら，盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬のどの特長を生かしたり，おさえたりすることなのか具体化して要点を読み取ることができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬のどの特長を生かしたり，おさえたりすることなのか知りたいという課題をもとに，教材を結論の提示・具体的事例・まとめと大きく３つの意味段落に整理し，段落相互の関係を考えながら段落の要点をとらえることをねらいとしている。つまり，子どもたちが各段落の要点をとらえることを目的にするのではなく，盲導犬の訓練で一番大事な犬の特長は何なのか読み深めたいという課題意識を大切にしながら読んでいく過程で，各段落の要点をとらえることをねらう単元として設定している。そこで，課題に対する違う読みをしている友達と班を組んで交流し，自分の読みをつくる対話活動を位置付ける。具体的には，まず，警察犬と盲導犬を比較することにより，課題「盲導犬はどの特長が一番大事なんだろう」を設定する。次に，①文章に自分の知識や経験を重ねながら自分の読みを形成するテキストとの対話活動，②課題に対する読みが違う友達同士がグループを組んで自分の読みを交流する他者との対話活動を順に位置付ける。さらに，課題に対する自分の読みを書きまとめさせる。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１～２/８時
全文を読んで，盲導犬の訓練で一番大事だと思う犬の特長について話し合う。

もうどう犬は，「かしこい」が一番大事だと思いました。わけは，かしこくなくっちゃ，むずかしい指示などもわからないからです。でも，Ｓくんの「人間となかよくなれないと，かしこくても命令をきかない」という意見を聞いて，どれが一番大事か分からなくなりました。みんなと考えてみたいです。

資料1　予想交流後のN児の反応

第２次：３～６／８時
課題に対する読みを形成し，読みが違う友達と班を組んで交流する。

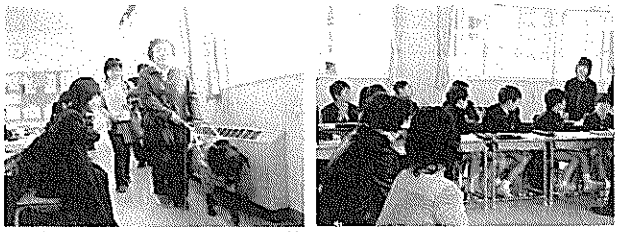


写真1　盲導犬は，本当に英語の命令通りに動くんだ

Ｎ児：「かしこい」という特長が大事だと思います。「犬は，命令の言葉とおりにできるようになっていきます」と書いてあるとおり，じっさいにＲさんが「ストレートゴー」と言うと，ドリームは，しじにしたがいまっすぐ進んだからです。

資料2　一番大事なのは犬のどの特長だと思うか

第１次では，盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬のどの特長を生かしたり，おさえたりすることなのか知りたいという課題をつかむことをねらいとしている。そのために，全文を読んだ後，はたらく犬の例として挙げられている警察犬と盲導犬を比較し，盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬の「かしこい」「活発」「人間となかよくなれる」どの特長を生かしたりおさえたりすることだと思うか予想させ交流させた。そのときのＮ児の反応が，資料１である。

考察１

全文通読後，予想を交流させた結果，資料１の下線部のように，盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬のどの特長なのか知りたいという課題意識をもたせることができた。

第２次では，盲導犬の訓練で一番大事なのは，犬のどの特長を生かしたり，おさえたりすることなのか要点を読み取ることをねらいとしている。そのために，まず，自分の読みを形成するテキストとの対話活動を位置付けた。しかし，盲導犬に対する自分の知識や経験が不足しており，十分に読めない部分も出てきた。そして，子どもたちに文章外の情報への求めが生まれた。そこで，九州盲導犬協会のＡさんと盲導犬ユーザーであるＲさん，そして盲導犬ドリームに来校していただき，ユーザーの命令通りに盲導犬が動く様子を演じてもらったり，子どもたちが盲導犬協会の方やユーザーに質問したりした。それが写真１である。その後，「人間の言うことにしたがう訓練」の意味段落で一番大事なのは犬のどの特長だと思うか，自分の読みを形成させたところ，Ｎ児は資料２のような読みを形成し，「かしこい」… 16 名，「活発」…６名，「人間となかよくなれる」… 18 名となり，子どもたちに読みの違う友達と交流したいという求めが生まれた。そこで，読みが違う友達がグループを組んで交流する，他者との対話

活動を位置づけた。そのときの様子が資料３である。

Ｎ児たち「かしこい」が大事だという子ども	Ｓ児たち「人間となかよくなれる」が大事だという子ども
Ｎ１でも，人間となかよくなれても命令を覚えられなかったら何にもならないし，（叙述を指しながら）ここに「がまん強く」ってありますよね。駅で電車を待つときに人間となかよくできるだけの盲導犬だったら，いろんな所をふらふらしてユーザーが事故に遭う。	Ｓ１人間となかよくなれないと人間を深く信用できないし，深くしないと英語の命令は聞かないと思うから，人間となかよくなれるようにした方がいい Ｓ２かしこいは最初にはないでしょ。（叙述を指しながら）「がまん強くじっと待つ」ということは，人間を深く信用しているからじっと待てる。
Ｎ２（叙述を指しながら）「がまん強くじっと待つ」というのはしつけをしておけば活発さは押さえられるから，最初にかしこさを伸ばすんだと思う。	Ｓ３しつけを受け人間を深く信用していればこそ（叙述を指しながら）「きびしい訓練」を乗り越えていける。
自己との対話活動後のＮ児の記述 Ｓ児の「人間を信用していなかったらきびしい訓練ものりこえられない」の意見を聞いて「人間となかよくなれる」方が大事かなと思ったけど，やっぱりかしこいが大事。わけは，訓練すればなかよくなれるし，かしこいと自分のいしで待つことができるから。（読みの強化）	自己との対話活動でのＳ児の記述 「かしこい」に意見が変わった。わけは，Ｎ児が「人間となかよくなれても命令を覚えられなかったら何にもならない」と言って，その通りだと思ったので，わたしは意見が変わった。（読みの変容）

資料3　他者との対話活動での様子

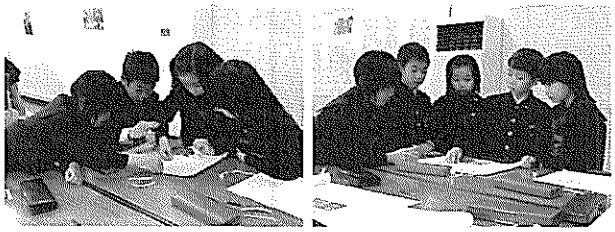


写真2　根拠となる叙述にシールを貼って，話し合いだ

第３次：７～８／８時
盲導犬に対する自分の考えを書きまとめる。

考察２

課題に対する読みが違う友達がグループを組んで自分の読みを交流する他者との対話活動を位置付けることによって，資料３の下線部より下のＮ児の記述に示すように自分の読みを強化する姿が見られた。また，その過程でＳ児も自分の読みを変容させる姿も見られた。このことにより，他者との対話活動を位置付け，自分の読みを課題に対する読みが違う友達と読みを共有することにより，互いに自分の読みを強固にしたり変容させたりできたと考える。

第３次は，自分の読みの変容を振り返らせることをねらいとしている。そのために，盲導犬に対する自分の考えを書きまとめさせた。そのときのＮ児の反応が資料４である。

犬の三つの特長「かしこい」「人間となかよくなれる」「活
はみで特長が大事なのか予想しの中
れはみどのわたしは、盲導犬て
そだ見たことがなけどわたしは、はっきりこ
んとたこと。いので、
なはえあっませんが、国語の授業
いまたのが、ユ
中あ
州盲導犬協会のAさん、盲導犬ドリームが、
Rさんが、
来てくださいました。
「テストレート、ドリーム、ゴー。」
と言うと、ドリームは、しじにしたがいまっすぐ進みました。わたしは、
はじめて盲導犬を見たので、「本当に
かしこいな。」と思いました。
そのところが人事だと思っていたけど、
みんな考えがちがうので、話し合お
ということになりました。
考えのちがう人と話し合ってみて、
「それぞれいいところがあるけれど、
でもやっぱりかしこいところが人
事だと思う。」
と発表したけど、話し合いを進めて
行くにつれ、「やっぱり、三つとも
人事なんじゃないか。」と思いました。そして、話し合いの結果、「やっぱり三つとも人事。」という考えになりました。
今までの学習で、盲導犬は、やく
三十しゅるいの命令をおぼえたり、
自分でしょうがい物をよけたりして、とてもすごいと思いました。
わたしは、とてもかしこく、あば
れずかる盲導犬の方が、わたしたち
人間となかよくなれるし、人の命を
あずかる盲導犬の方が、わたしたち
よりもすぐれていると今思っています。

資料4　N児の盲導犬に対する考え

考察３

資料４から，Ｎ児は，右線部のようにユーザーの命令通りに盲導犬が動く様子を見たり，読みの違う友達との対話活動をしたりすることにより自分の読みをつくり，波線部のように盲導犬のすごさを実感していることが分かる。このような姿が見られたのは，「テキスト」「他者」との対話活動を位置付けたことが有効に働いたからであると判断できる。

【全体考察】

以上のような実践を通して，「テキストとの対話活動」→「他者との対話活動」という順に対話活動を位置付けたことにより，自分の内なる複数との自己内対話が生成され，自分の読みが変革していくことが明らかになった。

具体的には，「テキストとの対話活動」で，今の子どもたちは知識や経験が不足しており，自分の脈絡を重ねられず十分に読めない部分も出てくる。そこで，ほかの情報への求めが生じた子どもたちに，その求めに応じて具体物や写真などの情報を与えれば，それらを結び付けながら読みを形成できることが分かった。

また，「他者との対話活動」で，全体では，発言する人数や回数が限られ，自分の読みの検討が迫られるような状況がおきにくい。そこで対話活動の形態を，違う読みをしている友達同士で構成された少人数のグループとすれば，違う読みをしている友達との対話活動で，友達と読みを共有しながら自分の読みをつくっていくことが分かった。

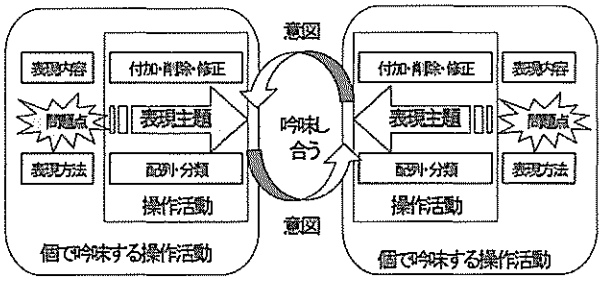
今後は，高学年における対話活動の位置付け方とその支援を明確にしたい。

Ⅱ　表現主題をもとに吟味し合う操作活動を位置付けた書くことの学習展開

国語科部　　平　川　洋　一

1　副主題の意味

表現主題とは，ある題材について文章に書き表していく際の中核となる考え・思想を指す。表現主題をもとに吟味し合うとは，「自らの見方・考え方・感じ方を知らせたい，伝えたい」という求めをもった個と，同様の追究課題をもつ個が，表現内容や方法の妥当性を検討し合うことである。操作活動とは，話す，聞く，読む，書く活動の中で働く内的な思考を具体的なものや行動に置き換えることによって，言葉の意味を正確に理解したり適切に表現したりすることを促す活動である。表現主題をもとに吟味し合う操作活動とは，表現の在り方についての課題をもつ個と個が，表したい内容の中心を明らかにしたりそのための材料を収集・選択・構成したりするために，カードやメモに要約して整理し，分類・付加・削除・配列することの妥当性を検討し合うことによって，考えを確かにしたりその筋道を立てたり新たな考えを生み出したりすることである。



【図１　表現主題をもとに吟味し合う操作活動とは】

表現主題をもとに吟味し合う操作活動を位置付けるとは，子どもが表現目的の達成に向けて追究していく過程の中に，自己の表現に関する問題点を把握し，「何を」という表現の内容と「どのように」という表現の方法について，改善の方途を検討する場を位置付けることである。表現主題をもとに吟味し合う操作活動を位置付けた書くことの学習展開とは，教師が子どもの表現上の問題点を内容・方法の面からいくつかに分類し，端的な例を示すことで自己の表現との比較分析を促し，子どもが自らの力で問題点に気付き，同様の表現目的をもつ友達と検討し合いながら解決方法を選択して修正し，自らの表現を高めていく書くことの学習過程である。

2　学習プランの具体的構想

●　教材選定の視点

子どもが「伝えたい，知らせたい」という求めをもって，書くことの学習に取り組むことができるように，題材，文種，相手を以下のように設定していく。

【表１　教材選定の視点】

	題材	文種	相手
低学年	体験したことを思い出したり確かめたりしながら，楽しさやおもしろさを伝える。	観察記録文を中心に	学級の友達，家族など
中学年	身の回りの事象や社会事象などについて体験したり調べたりして分かったことを伝える。	手紙，記録，報告，依頼，新聞等を中心に	情報を知らない人，学校の異学年，自分自身など
高学年	学校生活や日常生活の中から調べて考えたことや意見を伝える。	意見文や報告文（研究）を中心に	意見を伝えたい人，行動を促したい人など

●　表現主題をもとに吟味し合う操作活動を位置付けた活動構成

書くことに関する自らの経験や技能を分析し，表現目的を共にする仲間と書き表し方をつくりあげていく過程を，図２のように「つかむ」，「ねりあげる」，「あじわう」の３段階で設定する。

●　操作活動の位置付けと吟味し合う相手

書くことの基本的な学習過程（取材→選材→構成→記述→推敲）のそれぞれのねらいに即して，以下の表のような操作活動を位置付けていくようにする。

【表２　操作活動の位置付けと吟味し合う相手・観点】

過程	取材	選材	構成	記述・推敲
操作活動	イメージマップづくり	事柄の分類整理，付加削除	事柄の配列・置換に伴う効果の吟味	
吟味し合う相手	同じ題材を取り上げる仲間	同じ主題・題材を取り上げる仲間 ・材料と主題の整合性 ・材料の組立て方と主題の妥当性 ※　個の提案と小集団内の検討		
人数	２～５名の小集団			

段階	つかむ（課題設定）	ねりあげる（課題追究）	あじわう（課題解決）
学習活動	○　単元・題材との出合い ○　対象についての既有の知識・経験の交流 ○　追究の方向性（課題・内容・相手）に応じた小集団の編成	○　対象についての取材，選材，構成 ○　個の吟味と操作活動及び，その提案 ○　追究集団の中での吟味と操作活動 ○　必要に応じて再取材 ○　構想にもとづいた記述と推敲	○　表現物の鑑賞 ○　目的とする相手への発信 ○　自己評価 ○　小集団内評価 ○　発信した相手からの評価
ねらい	・目的・相手・話題意識の明確化，計画の見通し	・個と小集団での吟味による表現内容と方法の高まりの実感	・表現の喜び，課題解決の達成感の自覚
支援	・対象についての顕著な事例・情報の提示	・情報収集方法の提示，モデル提示による吟味の手順，観点の明確化	・目的達成の具体的な場・機会の設定

【図２　表現主題をもとに吟味し合う操作活動を位置付けた活動構成の詳細】

3　指導の実際

第4学年　単元

学校づくりに参画しよう
～1枚の写真から～

(1) 単元の目標

1　学校生活をとらえた１枚の写真から見つけた附属福岡小学校のいいところや問題点をもとに，調べたり考えたりしたことを全校に発信してよりよい学校にしたいという目的意識をもち，伝えたい内容の中心とその材料・組立てを構想することについて，個で考える活動と友だちと吟味し合う活動を往復させる中で高めていこうとする意欲をもつことができる。

2　同じ主題で発信していく仲間と材料や組立てを吟味し合うことを通して，相手意識や目的意識に基づいた内容の選択と組立てを構想し，「初め－中－終わり」からなる報告文に書きまとめることができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，附属福岡小学校の来年度の代表委員会の議題を模索している運営委員会の求めに，学校づくりへ本格的に参画していく４年生として応えていこうという目的意識のもとに，学校生活の中のよさや問題点を詳しく調査した内容を分かりやすく伝え，調べたことや考えたことが確かに伝わる報告文を書き表すことができるようにすることをねらいとしている。具体的には，①学校生活の場面をとらえた数枚の写真から，気がかりな１枚を選択し，同じ題材で追究していくグループを編成すること，②同題材グループの仲間と取材活動に取り組み，異なる題材で同じ表現主題をもつ仲間とのグループで材料と組立てを操作活動を通して吟味し合ってねりあげること，③異題材同主題グループでねりあげた構想をもとに，報告文として書きまとめていくこと，が主な学習活動である。本単元においては，同じ写真を選んだ同題材グループで取材活動を行い，その中で生まれた表現主題の違いをもとに編成した異題材同主題グループで運営委員会へ提出する報告文をともにつくりあげていくよう意識させる。そのことで，同じ主題を訴えるために，よりよい材料と組立ての在り方をグループの中で吟味し合う必要感をもたせることができると考える。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１～３／11時

運営委員会からの求めに応えて，よりよい学校づくりをしていくために学校生活のどんなことを見つめていけばいいのか決定して単元のめあてをもち，同じ題材で取材していく仲間と取材の方向と見通しをもつことができる。

T　　学校生活の中の８枚の写真から気がついたことや調べたいことはありませんか。

S児　図書室で本を読んでいる人の写真について調べてみたいです。本を読む人は読むけど，読まない人は読まないんじゃないかと思います。調べて運営委員会に伝えるといいと思います。

A児　わたしは，校門であいさつをしている人の写真を選びました。朝そうじのとき，よく遅れてくる人がいて，どのくらいの人が遅刻をしているのか調べて減っていくように呼びかけるといいと思います。

資料１　写真を見ての子どもたちの反応

第２次：４～８／11時

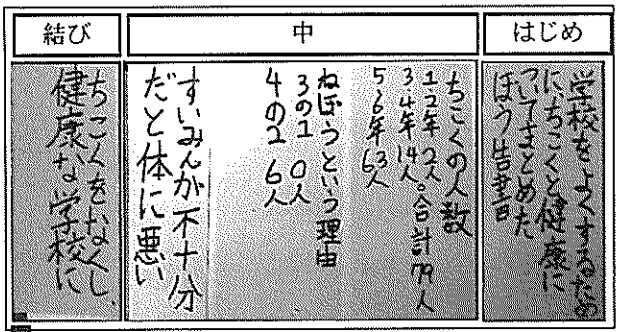
同じ題材を取り上げる仲間と取材活動に取り組み，明確になってきた主題意識をもとに運営委員へ伝えていく内容を明確にし，主題に即した材料とその構成を構想し，報告文として書きまとめることができる。

第１次（つかむ段階）では，代表委員会の議題説明会で運営委員から「１年間をふり返って，来年度の課題を見つけるために，附属小学校のいいところやちょっとどうかなと思うことを出し合ってください」という依頼を受けたことに応えていく単元のめあてをつくることをねらいとしている。そのために，学校生活の中の一部分を写した８枚の写真を提示し，そのよさや問題点を話し合う場を位置付けた。その時の子どもの反応が資料１である。そして，同じ写真を選択した仲間で小集団を編成し，取材していく方向と計画を立てるようにし，単元のめあて「運営委員会からの提案に応えて，学校づくりに参画しよう」を設定した。

考察１

資料１の発言の様子から，子どもたちは日頃から気がかりに思っている学校生活のよさや問題点をもとに写真を選択し，くわしく調べていく方向をつかむことができたことがわかる。また，これを同題材グループで持ち寄って分担することによって，取材内容の幅を広げることができた。このことから，運営委員会からの求めに対して，８枚の写真を提示したことが有効であったと考える。

第２次（ねりあげる段階）は，選んだ写真（題材）ごとのグループで取材活動に取り組み，調べたことをもとに明らかにした主題ごとにグループを再編成し，同じ主題を伝えるために取り上げる材料とその構成を吟味していくことをねらいとしている。そのために，まず，同題材グループで分担して集めた材料をもとに，伝えていきたい内容（主題）を明確にさせ，取り上げる材料を付箋紙に書きまとめ，画用紙に位置



資料2　個で選択した材料

A児
わたしは、附属小学校をより「健康的に」しようということを、遅刻する人に目をつけて調べてみました。
まず、調べたのは、遅刻した人の数です。
次に、遅刻したときの理由のことを調べました。「ねぼう」という理由が多いことが分かりました。

T児
ぼくは、遅刻した人数をもっとくわしく調べて、学年ごとに分けて比較したら、もっとよくなるんじゃないかと思います。

M児
わたしは、ねぼうの原因について、夕食とか飲み物とか、よく眠れるメニューのことを調べて報告したらいいと思います。例えばカフェインの入った飲み物はよくないとか、
・・・(後略)

資料3　グループ内吟味の中でのやりとりの様子

伝えたいことの中心
附属小学校をより健康的な学校にしよう

初め
先生の話から
最近、遅刻している人が多くなっていること

材料一
遅刻した人の数とその理由
学年ごとにグラフで表すようにする
(新たに加える材料)

材料二
遅刻の原因である「ねぼう」をへらすために、
食事や飲み物
(新たな取材の方向)

結び
遅刻をなくし、みんなで附属小をより健康的な学校にしよう。

資料4　吟味し合って付加された新たな取材の方向

第3次：9～11／11時
グループで練り上げた構想をもとに個にもどって報告文を書き上げ，1つの表現をともにつくりあげていくことのよさを実感し，運営委員へ伝えることができた成就感をあじわうことができる。

付けさせるようにした。そのときA児が位置付けた付箋紙の内容が資料2である。次に，個で選択した材料の妥当性について，違う題材を取り上げながらも同様の主題（学校生活をより健康的にしよう）のグループで吟味し合う活動を位置付けた。表現主題をもとに材料を吟味し合う際には，材料を選択する観点と吟味の進め方を全体で共通理解するために，希望代表グループによる吟味の様子をクラス全体で視聴する活動を設定した。子どもたちは代表グループの吟味の中の発言から，「どんな材料が必要か」という選材の観点と「補うべき材料はないか」という観点を見出していった。吟味の進め方についても，個で考えた材料をそれぞれが提案し，全員で妥当性を検討していくという手順をつかんでいった。このような全体での共通理解の後に，各グループで吟味し合う操作活動を位置付けた。その際のグループの吟味し合うやりとりの内容と選材の様子が資料3で，操作活動によって選材・付加された報告文の構想が資料4である。

考察2

表現主題を同様にしながら，違う題材を取り上げているグループの中で，主題につながる材料の妥当性を吟味させることで，資料3に見られるように，よりよい材料の選択と新たな取材の方向性をもたせることにつながったと考える。それは，第1に運営委員会へ提出する報告書をともにつくりあげていく意識をもたせることが有効に作用したことが主な要因であったと考える。第2に材料の要点を付箋紙に書かせたことで，その材料の価値や要点を短く書きまとめる必要感を生み出し，貼りかえができることから，表現主題とつないで材料を吟味し合う操作活動が形として見られたと考える。第3に表現主題につながる材料を選材する場，選材した内容を組立てる場において，吟味の具体的な姿として代表グループの吟味を視聴したことによって，資料3，4に見られるように，吟味していく観点や手順をつかみ，グループの中で操作していく姿が見られたと考える。

第3次は，グループで練り上げてきた構想をもとに個で報告文を書きまとめていくことをねらいとしている。

考察3

同主題グループでの吟味をもとに再取材し，記述・推敲することで，資料5に見られるように，構想に基づいた報告文を書きまとめることができた。それは，グループで1つの表現物をつくりあげる意識が持続したためと考える。

附属小学校をより健康的に

わたしは、「最近ちこくする人が増えている」という先生の話から、附属小学校のみんながもっと健康的になるように、ちこくがもっとへるように、調べてみました。

まず、どのくらいの人がどんな理由でちこくしているのか調べました。調べ方は、インタビューで、今年になってちこくしたことがあるかどうか、ある人にはその理由をたずねました。全体で七十九人にたずねたところ、ちこくしたことがあったのは、一年生一人、二年生一人、三年生八人、四年生六人、五年生五人、六年生四人でした。高学年になるほど人数が多くなっていることが分かりました。理由は通院など、仕方ないものの他に、ねぼうという理由がいちばんを多いことが分かりました。どうしてねぼうするのかは、「なかなかふとんから出ることができない」という理由がほとんどでした。

そこで、ねぼうをへらすために、どんなことに気をつければいいか考えてみました。もちろん、目覚まし時計をかけるなどの方法はありますが、私が目をつけたのは食事です。晩ご飯をおそい時間に食べると、消化が悪く、お腹をこわしたり目覚めが悪いということが分かりました。また、眠が少ないと、エネルギーが不足して元気がなくなって起きることができないということでした。それから、お茶やコーヒーなど、カフェインの入った飲み物もすいみん不足の原因になります。

このように、ちこくをへらしてもっと健康的な附属小学校にするために、保健委員会などを通じて食事や飲み物のことについて知らせていけばいいと思います。

資料5　できあがったA児の報告文

【全体考察】

運営委員会からの求めに応えるという目的の設定は，もうすぐ高学年となる4年生にとって学校づくりへの意欲を高めるとともに，書いて伝えなければならないという必然性を生み出すことができたと考える。また，個とグループで材料とその組立てを吟味し合う際に付箋紙の活用したことで，事柄を端的に要約する必然性をもたせることができた。さらに，思考の過程が目で見て分かることによって，選材や配列の意図を伝え合う際にも有効に働いたと考える。

音楽科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自ら創造的に音楽にかかわる音楽科学習

1　音楽科での学ぶことと生きること

音楽科の究極の目標は，豊かな情操を養うことである。音楽科で養われる美的情操によって，人は美しいものを美しいと感じ，味わいたい，表したいという願いをもつ。そしてこの美的情操は，美しいものに出合えた喜びや，表すことができた達成感や自己肯定感を生みだすと共に，音楽がもつ美しさを通じて他者と一体となる共感の喜びを生みださせる。このような喜び，自分への自信，他者との一体感は，人が人として生きていく力となるものであり，自らの人生をより豊かなものへと高めていくものである。ここに音楽科と「生きる」こととのつながりがある。そこで，音楽科では，美しい音楽に出合う機会をより多くつくると共に，自ら音楽美を味わい，表現していく「自分」をつくっていくことが大切である。そのために音楽科は，音楽を求め味わう心と，音楽を表現する基礎的な力を育んでいくことが必要である。これらを身につけることによって，自ら音楽にかかわり，音楽文化を享受するだけでなく，自分の音楽文化を創造していく，音楽と創造的な関係をつくりだしていくのである。

2　音楽科部主題についての説明

自ら創造的に音楽にかかわるとは，単に音楽を表現するということではなく，自分の心の中の思いを，自分の音楽経験や身につけた音楽的諸能力を発揮しながら，音や音の組み合わせ，リズムなど，音楽を構成する要素を工夫し，自分にとって価値ある音楽を表現することである。それは，自分にとって新たな表現方法を身につけることであり，また自他にとって，音楽の新たな価値を創造し，その価値を実感することである。このことは実体的学力である表現の技能を，自分の思いを表現するという目的のもとに高めることであり，音楽を聴き取り，そのよさを感じとる機能的学力としてのイメージ力や表現解釈力を育む力である。自ら創造的に音楽にかかわる音楽科学習とは，与えられたものを表現するのではなく，出合った音楽の価値を自ら見出し，自分のものとして音楽をとらえ，再表現したり，一部を創作したりする学習のことである。このような学習活動は，音楽を通して自分を見つめ，自分の心の中の思いや願いを実際の音楽として表現することである。それは，自分の中にある創造性を自覚，発揮することであり，表現の技能をフルに活用し，新たな表現をつくりあげ，音楽を通して，表現することの喜びを味わうことである。

- ○　心の中の音楽を具現化したという思いをもとに表した音楽のよさや美しさを感じとる子ども　（学ぶ意義）
- ○　音楽を聴き取ったり，感じとったりしながら，自分が求める音楽像を追究し，新たな表現方法を獲得し，自分にとって価値ある音楽をつくりだす子ども　（能力）
- ○　自分の音楽的特性とその成長を自覚し，さらなる音楽との出合いや，音楽活動に求めをもち，もっと音楽とかかわりたいと願っている子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための音楽科の基礎基本】

意義	自分が表したい音楽像をもち，その音楽を見出し，表現するための技能を身につけ，実際の音楽として表したいという強い求めをもっている。 音のもつ働きを活かして表現したり，鑑賞したりすることを通して，他者と心を合わせ，一体となり，世代を超えて心を通わせることができる音楽の価値を感じとる。				
能力		観点	低学年	中学年	高学年
	A能力 実体的学力	歌唱表現の技能	はっきりした発音で，伴奏や自分や友達の声を聴きながら歌うことができる。	美しい響きをつくるために，呼吸や発声の仕方を工夫することができる。	楽曲の構成や形式を活かし，曲想にあう声の響きで歌うことができる。
		器楽表現の技能	自分や友達が演奏する音を聴きながら，正しい奏法で演奏することができる。	楽器の音色の違いに気をつけて，速度や強弱にあった演奏ができる。	楽器の音色の重なりや組み合わせに気をつけて演奏することができる。
		読譜の技能	色分けした階名や簡単なリズム譜を読んだり，操作したりすることができる。	五線譜を読み書きし，簡単な合奏譜を読みとることができる。	五線譜の臨時記号やアーティキュレーション記号がわかる。
	B能力 機能的学力	演奏解釈力	音の上がり下がり，音色の違い，強弱や速さの違い及び，拍の違いがわかる。	旋律の動きやまとまり，調，拍子の変化や違いを聴きとることができる。	音楽の構成や音の重なり方，及びそれらの変化や違いがわかる。
		イメージ力	身体表現を伴いながら，具体的な景色や様子，気分を感じとることができる。	気分や情景，及びそれらの変化を感じとることができる。	作曲者の意図や心理，情景，及びその変化を感じとることができる。
自信	自分の音楽活動の結果や過程を，活動の目的や他者の評価をもとに何がどのようにいいのかを確かめ合う。 自分の音楽的特性を自覚し，発揮できた喜びを味わい，音楽ともっとかかわりたいという思いをもつ。				

Ⅱ　相互表現活動を位置付けた展開

音楽科部　　秦　克　伸

1　副主題の意味

相互表現活動とは，表したい音楽をつくるために，自分がつくった表現を他者とお互いに提示し合い，重ね合わせたり，つなげたり，取り入れたりすることである。相互表現活動には，次の２つの型がある。

① 重ね合わせる相互表現活動
自他のそれぞれの表現を提示し合い，同時に演奏することで，表したい音楽をつくりだそうとする活動
② つなげる相互表現活動
自他がつくった表現を提示し合い，続けて表現することで表したい音楽をつくりだそうとする活動

具体的に①は合奏やアンサンブル，②はリレー奏や，音楽の要素を一つ取り出しての創作活動などである。相互表現活動を成立させるためには，相互に表現し合う子ども同士が，まず表したい音楽への思いを共通にもつことが必要である。そして，その表したい音楽の実現に向けて個人で表現を追究し，それぞれが提示し合う表現をもつことによって，相互表現活動が可能となる。

相互表現活動を位置付けた展開とは，このような相互表現活動が，題材構成の中に必然的に位置付くように題材構成を工夫し，自分が表したい音楽を具現化していく過程において，自分の表現をつくるとともに，自他の表現をかかわらせる必要性が必ず生ずるようにした学習構想である。自他の表現をかかわらせ，表現と表現を比較し，音楽的な思考・判断を行うことは，表現を自分のものとして確立していくことである。相互表現活動を行うことによって，①自他の表現上の課題を感じとり，自分の表現を自ら振り返り，修正・付加する内容を決定し，自分の表したい音楽を具現化していくことができる。②表現の多様性を感じとると共に，音楽の価値を共有し，さらなる音楽活動への求めを生みだすことができるというよさがあると考える。

2　学習プランの具体的構想

● 相互表現活動の教材化の視点

相互表現活動を位置づけた学習活動を行うためには，以下の条件から教材を選定し，教材化を図る。

目的性･･･　共に表したいという意欲を高め，表したい音楽を具体的にイメージすることができるもの
多様性･･･　多様な音楽の構造や表現の工夫が可能なもの
独自性･･･　実際に自分の音楽的諸能力を駆使し，発揮することによって，表したい音楽を獲得することができるもの

具体的には，低学年においては，遊びを中心としながら，リズムを取り上げて，中学年では，ストーリーや様子を表したり，場面の変化を表したりする旋律の表現を取り上げて，高学年では，心象風景など抽象的な概念を含むものを表す，音楽の構成やハーモニーを取り上げる。また，相互表現活動を活性化するために，つくった表現の記録の工夫や楽譜の提示，相互に表現を提示し合うための空間をつくることが必要である。

● 相互表現活動を位置付けた活動構成

相互表現活動を位置付けた活動構成は，次の３つの活動に分けられる。はじめに，音楽にであい，表したい音楽を明確にし，その音楽が，相互に表現し合うことによって獲得することができるであろうという見通しをもつ「であう」段階。次に，実際に個人の表現の追究を行った後，相互に個人の表現を提示しあいながら，表したい音楽を具現化し，共有化する「つくる」段階，最後につくりあげた自分たちの表現を発表し，よさや美しさを実感する「ひろげる」段階である。

	であう	つくる		ひろげる
活動内容	1　楽曲のよさや美しさを感じとる。 (1) 楽曲の鑑賞 ○　曲想をつかむ。 (2) モデル表現の鑑賞 ○　音楽の要素に着目する。	2　個人の表現を追究する。 (1) 個の追究活動 ○　表したい音楽になるよう表現を工夫する。 (2) 聴き比べ活動 ○　つくった表現を提示し合う。	3　友達とともに追究する。 (1) 相互表現活動 ○　個の表現をつないだり，あわせたりする。 (2) 聴き比べ活動 ○　他のグループの表現と聴き比べる。	4　つくった表現の発表会を開く。 ○　自分たちの表現をつくりあげ，友達の表現と聴き比べ比べ，それぞれのよさや美しさを感じとる。
ねらい	○　表したい音楽を，友達と協力しながらつくりあげるために音楽の何をどのようにするのかの見通しをもつこと	○　表したい音楽を表すために，自分がこだわった音楽の構成要素の構造や，表現要素の変化を判断し，決定すること	○　友達の表現と合わせたりつないだりすることによって，自分たちの音楽を，表したい音楽にへとつくりかえていくこと	○　それぞれの表現のよさを実感し，表現の多様性に気づくと共に，もっと音楽をつくって表現したいと願うこと
支援	※　楽曲やモデル表現を提示する。 ※　情景画や拡大楽譜など，曲想や音楽的な特徴に視覚的に気づかせる。	※　カード譜などを用いて，自分の表現を試行錯誤するとともに，表現を記録することができるようにする。 ※　個人の表現の追究が可能な場づくり	※　友達の表現と合わせたりつないだりしたモデル表現を提示する。 ※　友達の表現と自分の表現をあわせたり，つないだり表現の記譜の仕方の工夫	※　発表会の場づくり。 ※　自他の表現の工夫を聴きとり，よさを感じとるための，楽譜の掲示や音楽的特徴についての説明などの工夫

【図１　相互表現活動を位置付けた基本的な活動構成】

図画工作科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　創造的な技能を駆使し新たな表現を創り出す図画工作科学習

1　図画工作科で学ぶことと生きること

人は美しいものを創り出していきたいと根源的に求める。それは未来志向的な求めであり，それを創り出すプロセスにおいて，あるいは創り出した結果について，自らも他からも認められたとき，自分の人間としての価値(自己効力)を見いだしたり，人間として生きることの喜び(生きがい)を見いだしたりするのである。そこに，図画工作科と人間が「生きる」ということにつながりを見いだせるのである。そこで，これからの子どもたちにとって大切なものの一つになるのが，未来を創っていく創造性である。図画工作科はもともと，豊かな情操を養うことを究極の目標にしながらも，材料や造形対象と深くかかわり，造形的な自分の求めをもとに，新たな美を創造していくクリエイティブな学習である。図画工作科が担う役割は，美の文化の継承や創造を通して，創造的な思考力や創造的な技能をといった創造性を育成し，さらに新たな文化創造への感性を高めていくことである。

しかし，表現方法や表現技能の伝授により，それだけを知識として身に付けたとしても子どもたちの生きる力にはなりえない。その方法や技能を使っていく動機と目的とともに，それらを活用していく力が必要になってくる。そこで，これからの図画工作科では，他と積極的にかかわりながら自らの美を創り出していくことを通して，自分の表現に意味や価値を見いだし，造形的に自分

2　図画工作科部主題についての説明

「創造的な技能を駆使する」とは，造形的な自らの求めを実現していくために，材料や造形対象に働きかけ合いながら色や形の構成や方法を発想し，美の創造に対する実現の見通しをもって技能を使っていくことである。「新たな表現を創り出す」とは単に①作品を創る(作品創造)ことではなく，②自分のとって新たな表現の方法(方法創造)をあみだしていく，③新たな表現の意味(内容創造)を見いだしていく，④自分にとってあるいは他にとって造形的な価値を創り出す(美の創造)ことである。これまで自分がもっている創造的な思考力や技能を，自分の求めに応じて選択したり，総合的に生かしたりして，新たな表現方法や表現内容を発見し，表現のプロセスにおいてそれらを活用しながら，自らの創造性を高めていくことができる。

○　材料と造形対象とかかわり合うことを通して，自分や他者にとって，美しいものを自ら意欲的に創り出していこうとしている子ども　(学ぶ意義)
○　造形対象に対して多面的に特徴をつかみ，見通しをもって，形や色を構成したり，用具を効果的に活用して表現する子ども　(能力)
○　自分の表現過程や表現物をふり返り，自分の表現の意味や価値を見いだし，これからの表現の意欲や求めをもっている子ども　(自信)

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための図画工作科の基礎基本】

意義	○　材料と造形対象とかかわり合うことを通して，自分にとって，あるいは他者にとって，美しいもの，心地よいものを創り出していく目的と方法を明らかにし，造形活動することを通して，美しいものを求め自ら創り出す求めをもつことができる。				
能力		観　点	低学年	中学年	高学年
	A能力 実体的学力	構成力	色や形を組み合わせるなどして，自分の思いにあった形や色をつくることができる。	形や色などの材料の特徴を生かし美しさや用途などを考えて構成することができる。	自分の表したいこと伝えたいことから，色や形を効果的に構成することができる。
		活用力	材料や用具について，手や体全体の感覚を働かせながら，使うことができる。	材料や用具にあわせて，目的や用途にあった材料や用具を選択し，使うことができる。	材料や用具を自分の表現にあわせて，その特徴を生かし効果的に使うことができる。
	B能力 機能的学力	発想力	造形対象に体全体でふれ，つくりかた，表し方を思いつくことができる。	造形対象の特徴をとらえ，その特徴などから，つくりかたを思いつくことができる。	造形対象の特徴と，自分の思いを比較して，効果的な表現方法を思いつくことができる。
		活用力	自分がつくりたいものや，好きな材料や色，つくる方法などを考えることができる。	色や形の組み合わせのおもしろさや美しさを考えながら，つくりかたの見通しをもつ。	表現の目的や，表現意図，表現方法から，方法を選択し，つくりかたの見通しをもつ。
		鑑賞力	自分や友達の作品の美しさやおもしろさに関心をもち，それらを見つけることができる。活動のよさに気付き，自分の表現を明らかにすることができる。	表現の過程や作品の見方・表し方の違いや美しさに気付き，自分の表現と比べる。自分の表現をふり返り，作品のよさを明らかにし新たな表現を生み出す。	芸術作品の表現のよさを感じ取り，その違いを認め合いながら自分の表現に生かす。新たにできた表現のよさを明らかにし，これからの造形活動に生かすことができる。
自信	○　自分の表現の過程や，表現物をふり返り，表現の目的や他者の評価と合わせながら，自分の表現の意味や価値を見いだし，自らの造形活動に対する効力感や達成感を味わうことができるとともに，これからの自分の造形的な表現に生かしていく求めをもつことができる。				

Ⅱ　自他とかかわり合う対話的造形活動を位置付けた学習の展開

図画工作科部　　北　田　尚　雄

1　副主題の意味

「自他とかかわり合う」とは，造形活動において，自分や自分の身近な人や身の回りの環境(自然物，場所)や材料と，双方向に対話していくことである。よって，次のような状態を考える。

材料や造形対象とかかわり合い	材料や対象(作品)自体からも，形や色を変化させて自分に働きかけてくれる。
人とのかかわり合い	友達や先人など他の人に伝えたり他の人の考えを聞いたりしながら新たな表現を生み出していく。
環境とのかかわり合い	そのまわりの環境は形や色，雰囲気などの空間の変化から，また自分に働きかけてくれる。
自分とのかかわり合い	自分の表現のよさや可能性に気付き，これまでの知を選択しながら，これまでとは違った新たな表現を生み出し表現を練り上げていく。

「対話的造形活動」とは，自分の身の回りの人や環境を，自分の表現に取り入れながら，新たな表現内容や表現方法を生み出していくことで，自分にとって美しいもの，おもしろいもの，心地よいものを創り出していく協働の学びを大切にした造形表現活動のことである。対話的造形活動を位置付けた学習とは，造形表現活動において，個人の知を，組織全体に共有化させながら，自分や他の人や環境，材料，造形対象と双方向に働き合いながら，そこでつかんだ知をさらに個人の表現に活用していく学びを展開していくことが必要である。その対話活動において，表現内容や方法に自分なりのこだわりをもっておくことが大切となってくる。その上で，他との対話が，一人一人の造形活動に効果的に生かされてくるのであるそれが，対話的造形活動の学びである。

2　学習プランの具体的構想

●　自他とかかわり合う対話的造形活動の題材条件

子どもにとって魅力ある文化の学びを具現化していくために，授業づくりにおいては，子ども一人一人の内発的な学びの意欲を引き出すことが大切である。そこで「五感に基づく学び」が展開できるように題材を考える。

○　造形活動を行う上で，学習者全体に共通の目的(テーマ)や共通の造形空間があり，それぞれの学年にあった，創造的な思考力や技能が高まるような材料を用いていく題材　(必要感)

○　学ぶ見通しや手順が明確になり，「こうやってみたい」「こうすればどうかな」など子ども自らの学びと意欲を生み出す題材　(期待感)

○　身の回りの場所や環境とのかかわりから新たな表現内容や方法が生まれたり，学習者どうしや，造形活動にかかわる人と，お互いの表現について積極的な情報交流が期待できたりできる，他者との学び合いの活動を重視して学べる題材(受容感)

○　創り出す表現や作品が，生活のなかに生かされるとともに，その美しさや心地よさが造形的な感性を高めていくような題材　(満足感)

●　自他とかかわり合う対話的造形活動の活動構成

自他とかかわり合うためには，題材全体を通して，子どもの自己への働きかけを課題解決・作品創造のプロセスでの働きかけに加えてどのように行うかが，自己を育てる上で大切になってくる。そこで①自分自身の表現や思考をふり返って，自分なりに吟味してみる機会を提供する。②外的な評価や友達との話し合い活動を通して，これまでの自分の表現を見直すようにする。③自分の次のステップについて新たな決意，新たな意欲を生み出す。

	導入表現段階	表現追究段階	鑑賞段階
自己形成	◎　自分の表現のテーマに合わせて，材料や表現方法の構想を考える。 ○　表現内容や方法を発想し，表現の見通しをもつこと	◎　自分が決めた表現構想にしたがって，材料や表現方法を選択しながら表現する。 ○　材料や表現のテーマに合わせて，形や色の構成の美しさを考えながら，表現すること	◎　自分の表現テーマや作品をさらに生かすような展示表現をし，お互いに鑑賞し合う。 ○　作品や表現テーマに合った飾り付けや展示方法を考え，表すこと
協働活動	◎　身の回りの自然や環境にある美と出合い表現テーマを設定 ○　身近な生活のなかにある美しさに気付くこと ◎　表現テーマや方法について，友達と情報交流する。	◎　作品と身の回りの場所や環境との調和を考える。 ○　場所や環境を考えながら，新たな表現を発想すること ◎　表現方法について，お互いのよさを交流する。	◎　作品と場所や環境との調和やテーマ性を話し合い，新たな展示方法を考える。 ○　場所や環境との調和を考えた展示をしたり，自分たちの作品のよさを認め合ったりすること
自信	◎　美に対する思いや，自分たちの作品，表現活動の過程をとおして，おもしろいものや，美しいもの，心地よいものなど，作品や友達などの他と対話しながら自分たちの表現の価値について考える。		
支援	※　表現についての自他　(友達や先人)の考えの交流活動 ※　生活のなかの美について気付く，ヒント資料提示	※　表現テーマに合った方法を選択するための材料提供 ※　場所や環境との組み合わせを試しながら表現する活動設定	※　作品を引き立てていくための装飾材や展示環境の提供 ※　自他の作品や表現の表現の価値に気付く鑑賞会の設定

【図　自他とかかわり合う対話的造形活動の活動構成】

体育科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　価値ある動きを生み出す体育科学習

1　体育科での学ぶことと生きること

体育科が究極的なねらいとしているのは，生涯に渡っていつでも，誰とでも一緒に夢中になって運動を楽しめるようにすることである。このことで，体力を高め生命を維持し，あらゆる身体活動に伴う動作を思い通りに行うことができる。また，運動を通して他者とつながったり，自分の可能性や限界と向き合って人格の基礎を形成したり，運動の楽しさを味わい続けたりすることもできる。体育科は，運動や身体，体力を直接的に学習の対象としている唯一の教科である。生涯に渡って運動に親しむための資質・能力を培うことが生きることをより豊かにする。特に，健康・体力と豊かな人間性を養うことが求められている。低下が懸念されている子どもの体力や運動能力を高め「健やかな体」を，子ども自身が学びの主人公としてあるとともに他者とのかかわりのなかで育むことが，これまで以上に求められている。ここに，豊かに生きることについての体育科の役割がある。

2　体育科部主題についての説明

価値ある動きとは，思い通りに身体を操作して運動の楽しさをいつでも，何度でも味わうことができる身体動作のことである。単にできるとか偶然できるとかではなく，動きが「できる」ことと「わかる」ことの確かな積み上げによって，思い通りに身体を動かせることが必要である。また，自分の能力や目的に応じて課題を追究し，子ども自らが動きを生み出していくことが大切である。さらに，価値ある動きは，洗練されており無駄がなく，大きさやタイミングなどが望ましく，流れるようなまとまりをもっている。このことで，運動の目的を効率的に実現する。価値ある動きを生み出すとは，運動に対する求めや能力，発達段階に応じて，用具やルールなどといった活動の場にはたらきかける場づくりと動作を行う身体にはたらきかける動きづくりに子ども自ら取り組み，動きを発生・習熟させていくことを繰り返していくことである。価値ある動きを生み出す体育科学習とは，運動に対する求めや能力に応じて身体や運動にはたらきかけながら身体能力や運動投企力，運動構想力とともに運動への自信や意義を獲得する学びのことである。

- ○　友だちとかかわり合ったり自分の心身の状態や可能性，限界を見いだしたりして，自他のよさや運動の楽しさを味わい続けることができる子ども（学ぶ意義）
- ○　友だちとともに自分の特性に応じて場をつくり変えたり，運動の特性に応じて動きをつくり変えたりすることで，運動を楽しめる体力や能力を自ら獲得していくことができる子ども　（能力）
- ○　自分や友だちの特性に応じて運動の目的や活動を設定し，思い通りに動きや運動の構造，意味を充実・発展させることができる子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための体育科の基礎基本】

意義	運動を通して他者や物とのかかわりを確かにしたり，身体を中心に自分自身を経験することで人格の完成に役立てたり，様々な運動の特性を味わうことができる動きや学び方を獲得していくことで，自分のよさを確かにするとともに運動による楽しみをもって生きていくことができる。				
		観点	低学年	中学年	高学年
能力	A能力 実体的 学力	身体能力	歩く，走る，跳ぶなどの基本的な動きと逆さ感覚などといった運動に必要な基礎的な運動感覚を身に付け，運動の目的に合った身体動作を思い通りに，そして，動きのかたちや左右などを区別してできる。	基礎的な運動感覚を充実させるとともに，基本的な動きを組み合わせたり，かたちを変えたりして，運動の構造と能力に応じて動きを発生・習熟させ，設定した目標の実現に効果的な身体動作を意図的にできる。	自分や友だちの心身や動きの特徴を生かし，運動の特性に応じた動きをより複雑な空間認識や時間認識に基づいて，力加減やリズムを変化させながらやや複雑で組織的な身体動作を意図的・計画的にできる。
	B能力 機能的 学力	運動投企力	運動遊びや簡単な運動の行い方，自分と1つの他との空間的な関係から動きのかたちや方向，リズムを区別して体の動かし方を決めることができる。	やや組織だった運動の仕組み，自分と2つの他との空間的な関係から簡単な戦術や技のポイントをわかった上で体の動かし方を決めることができる。	組織だった運動の仕組みや複数の他との複雑な空間的・時間的な関係，特徴から戦術，技術がわかった上で体の動かし方を決めることができる。
		運動構想力	運動を行う順番や用具等を変化させることで運動の過程や結果が変化することを知った上で意図的に用具やともに運動する相手との組み合わせなどにはたらきかけることができる。	自分の能力や求めに合った運動へと活動の場を変化させたり，技のポイントから動きそのものを変化させたり，作戦を立ててゲーム状況を変化させたりすることができる。	動きの局面や自他の特徴，運動全体と部分との関係を筋道立てて分析し，自他の能力や特徴から活動の場やルールを確かな根拠をもって意図的・計画的に変化させることができる。
自信	自分やともに運動する他の状況に応じて運動の目的や活動を設定し，思い通りに自分や運動を生成・習熟させるとともに，運動の意味を充実・発展させることができる。				

Ⅱ　場の再構成活動を位置づけた展開

体育科部　　久　保　勝　美

1　副主題の意味

場とは，ねらいとする動きの系統に沿って段階的に構成・配置された用具やルールなどからなる運動の枠組みのことである。場の再構成活動とは，運動の目的を達成するために，欲求に沿った運動課題に応じて能力と目的から適切に活動の場を選び，場を構成する用具の高さや位置，組み合わせなどを子ども自身が変化させることである。場の再構成活動を位置づけた展開とは，動きの系統に沿って段階的に構成・配置された場において，自他の能力や楽しみ方に応じて場を選択・変容させつつ友だちとともに価値ある動きを生み出していく学びのことである。ここでは，教師がねらう動きと子どもが生成・変容させた場の機能が重なる２重構造となっている。そのために，運動課題を２つに類型化し，順に追究させる。

① 基本的な運動課題
運動をまとまりとして経験できる動きのことである。既習の運動経験が中心となり，再構成の起点となる。
② 発展的な運動課題
「もっと腰を高く。」などと動き全体の本質を保ちつつも部分の動きへはたらきかけ，正確さや力強さ，タイミングのよさなどを求めていく動きのことである。

2　学習プランの具体的構想

●　全体の場の構成

無駄がなく流れるようなまとまりや確実さをもつ動きへと発生・成熟していく時期と順序に沿って場全体を段階的に配置する。特に，発生・習熟していく部分の動きに着目し，運動全体との調和を図りながら構成し，それぞれの場で運動全体の動きを味わえるようにする。

基本的な動き → 発展的な動き
動きの発生・習熟
運動全体を試す易しい場 → 動きの部分を強調した難しい場

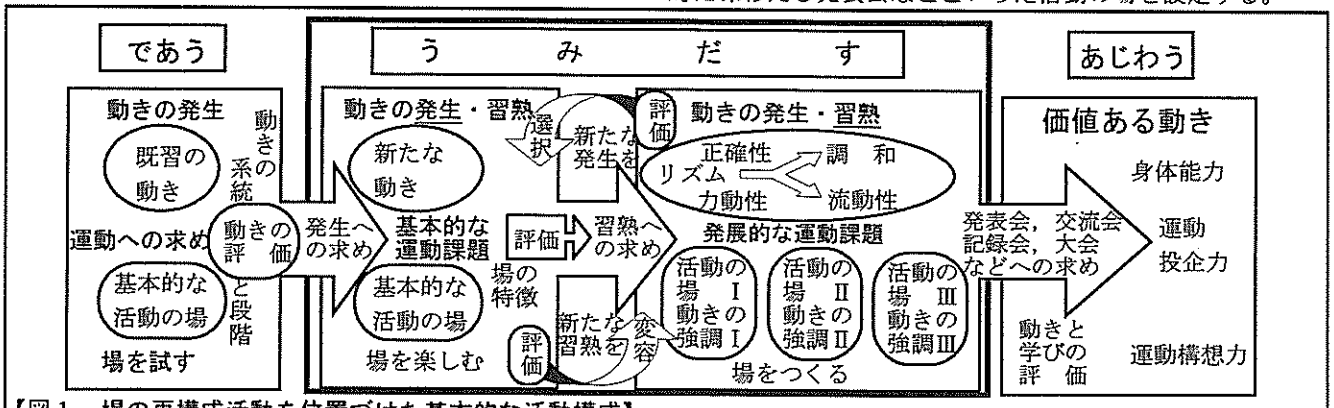
【動きの発生・習熟と場全体の構成】

●　それぞれの場の構成

① 「できるかな。」「できないかな。」と運動に対してもった目的を達成できるかどうかの狭間で揺れ動く程度の難しさのとき，場は子どもの模倣，競争などの欲求にはたらきかけ，子どもを運動へと駆り立てる。そのために，動きを評価し，能力や目的に応じて用具やルールを再構成できるようにする。このことは，運動を子ども自らがつくり出すことにつながっていく。
② 部分の動きを強調した特徴ある場を提示する。跳び箱運動で例えると，跳び箱の横に高さがある用具を置く。このことで，空中姿勢に着目させ，「もっと足を高く上げて跳び箱を越したい。」と，跳び箱の横にある用具を高くして跳び越す動きへの求めを誘発する。部分の動きを強調することは，ねらう動きへと子どもを誘発することにつながる。このことで，友だちと動きのポイントや場づくりの方向性を見いだし合ったり，考え合ったりすることにもつながっていく。
③ 跳び箱を跳び越すといった同じ運動に対しても友だちと競争を楽しんだり，目標を設定してその達成をめざしたりするなど多様な運動の楽しみ方を子どもは求めている。これに応じるよう場に長さや個数などの目標設定機能と，できた・できないが明確にわかる評価機能をもたせる。具体的には，当たると倒れる用具や動きがずれると落ちる用具，動きの大きさを数値で表す用具などである。このことで，運動に対する自分を見つめ，自信や可能性の見いだしにつながっていく。

●　活動構成の工夫

３段階で活動を構成する。まず，運動を試す易しい場を設定する。次に，動きの系統と段階から動きを発生させる易しい基本的な場を設定する。そして，発生した動きの評価をもとに友だちとかかわり合いながら動きの部分を強調した場で正確性など発展的な運動課題を追究させる。また，動きの評価と場の再構成によって発生と習熟を常に往還させる。最後に，部分の動きをまとめ総合的に味わえる発表会などといった活動の場を設定する。



【図１　場の再構成活動を位置づけた基本的な活動構成】

3　指導の実際

第4学年　単元

チャレンジ!ハンドジャンプ

(1) 単元の目標

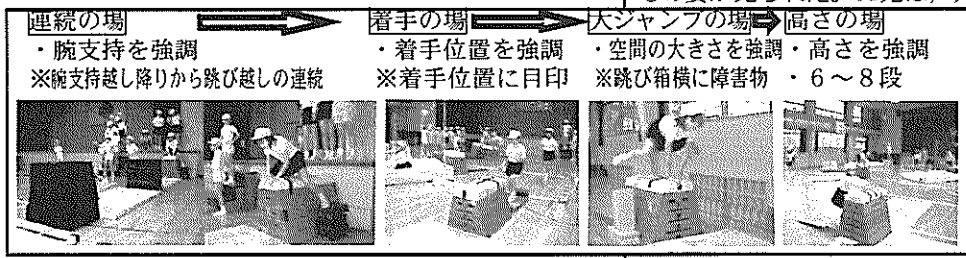
1　踏切や空中姿勢など部分の動きに着目し，能力と目的に応じた場の再構成や技のポイントの見いだしなどしながら支持跳び越しを楽しむことができる。
2　踏切や空中姿勢といった部分の動きを確かにし，足を高く上げて跳ぶなどの発展的な跳び方を求め，思い通りに跳び箱を跳び越す動きができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，開脚跳び越しやかかえ込み跳び越し，台上前転などといった価値ある支持跳び越しの動きができることをねらっている。そこで，動きの系統に沿って構成・配列した一連の場で支持で跳び箱を越す活動を設定する。それぞれの場は，踏み切りや空中姿勢など支持跳び越しの部分の動きを強調している。このことで，基本的な動きをつくるとともに，評価して明らかにした能力や目的に応じて場にはたらきかけながら発展的な課題を追究し，動きを生み出す文化の学びに重点化する。かかわり合いについては，部分の動きを強調し再構成できる場において似た課題をもつ友だちと動きや場について技のポイントや場づくりについて共有させる。その中で，目標設定と評価の２つの機能からスポンジやスチロールなどの用具の位置や数などにはたらきかけて場づくりを行いながら，価値ある支持跳び越しの動きを生み出させる。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１/７時
支持で跳び箱を越す運動を試し，基本的な動きを楽しむとともに，課題をもつことができる。



資料1　開脚跳び越しの場と動きを試す子どもの様子

跳び箱を跳び越す自信は，はじめあまりありませんでした。でも，いろいろな場でやっているうちに，だんだんとべるようになってきました。大ジャンプの場でも成功しました。Ｃ１今度は，もっと足と腰を高く上げて失敗しないでできるようになりたいです。

資料2　支持跳び越しの動きを試したA児の感想

第２次：２～６／７時
基本的及び発展的な場で支持跳び越しの基本的及び発展的な動きづくりを往還しつつ動きを生み出す。

(1) 提示された基本的な場で基本的な動きをつくる。

４段の大ジャンプの場で２つの障害物を越すことができるようになったのですが，Ｃ２もっと足と腰を高く上げて失敗しないようになりたい。

資料3　A児の感想

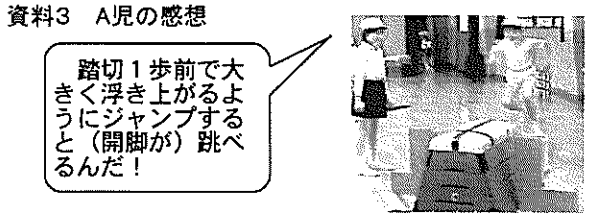


写真2　Eくんのジャンプはすごい！ポイント発見！

第１次は，支持で跳び箱を越す運動を試し，課題をもつことがねらいである。そのために，動きの系統に沿って構成・配列した一連の場で支持で跳び箱を越す運動を試す活動を設定した（資料 1)。このことで，基本的な動きを楽しむ子どもの姿が見られた。A児は，大ジャンプの場では跳べなかったり，着地でふらついたりしていた。様々な場で活動を繰り返すなかで，弱かった踏切や腕支持，手の突き放し，着地での膝曲げ（写真１）が確かになり，大ジャンプの場でも安定した着地で跳び越せるようになってきた。その結果，資料２の感想をもつことができた。

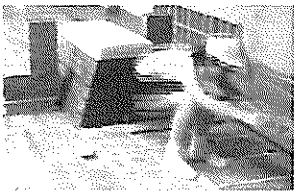


写真1　膝を曲げたよ！

考察１

支持で跳び箱を越す動きを楽しませる上で動きの系統に沿って段階的に構成・配列した一連の場で動きを試させたことは有効であった。また，課題（資料２Ｃ１）をもたせることができた。これは，活動の場の特徴が部分の動きに着目させることに有効にはたらいたからだと考える。

第２次は，動きを生み出すことがねらいである。そのために，まず，基本的な場で課題が似た友だちと動きづくりを中心にかかわり合わせながら課題を追究する活動を設定した。A児は，資料３Ｃ２の課題をもとに，E児と動きを見合い，つかんだポイント（写真２）をもとに動きを追究した。このことで，踏切１歩前のジャンプを遠くから勢いよく行い，高く勢いのある支持跳び越しを行うことができた（写真３）。

考察２－①

「もっと足と腰を高く上げてできるようになりたい。」という基本的な課題をもとに，友だちと動きを見合う共有のか

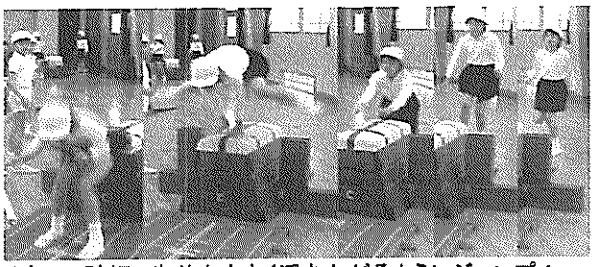


写真3　踏切1歩前を大きく浮き上がるようにジャンプ！

かわり合いによって見いだした動きのポイント（資料４，運動投企力）を生かし足と腰を高く上げて越す動きをつくることができた。これは，跳び箱上で腰や足を高くする動きを強調した大ジャンプの場の特徴が，Ａ児の動きのポイント発見につながった。つまり，部分の動きを強調した場の設定が，かかわり合う内容を焦点化することにつながったと考える。しかし，踏切１歩前を比較する用具があれば，もっと容易に動きのポイントを見いださせることにつながったと考える。

５段も跳べた！そうだ！５段の跳び箱の上にスポンジを３つ置いて跳んでみよう。できるかな？踏切でふわっと大きく浮き上がれば跳べそうだ。

資料4　A児の場づくりと動きづくりの発想

写真5　Aちゃん，5段とスポンジが跳べたね！

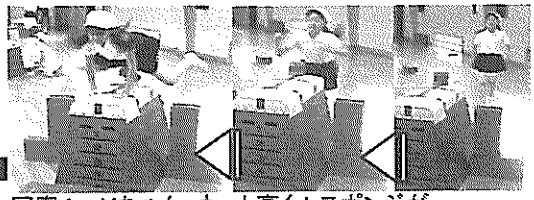
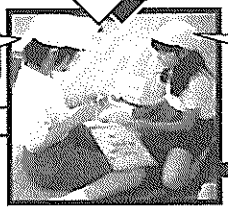


写真4　Mちゃん，もっと高く！スポンジが・・・。

Mちゃん，手前のスポンジに当たっていたよ。Eくんから見つけたポイントよ。踏切の前にスチロールを置いてみる？　踏切

写真6　踏切前にスチロールを置くよ。

踏み切りを思い切りするのよ。ボードを使って一緒に場を考えよう。



スチロールを踏み切り前に置くだけでなく６段にしてみたら思い切ってできるかも。

写真7　どんな場にする？

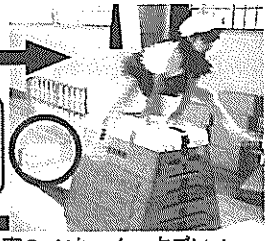


写真8　Mちゃん，すごい！

６段＋スチロール

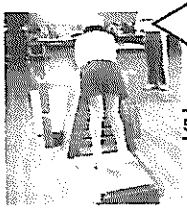


写真9　無理！

５段へ

写真10　えっ，スチロールなしでも・・。

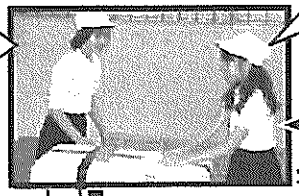


写真11　あのね，バーンと！

Ａちゃん，手を踏び箱の奥について思い切りバーンとするのよ。　着手

写真12　5段クリア！

６段へ

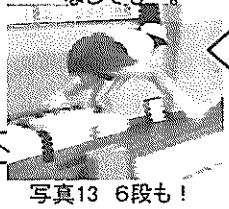


写真13　6段も！

踏切＋着手

６段＋スチロール縦２つ

写真14　めあて達成！

写真15　Mちゃん！

次に，部分の動きを強調しスポンジやスチロールなどの用具を操作し再構成できる発展的な場において，場・動きづくりを共有させ発展的な課題追究活動を設定したことで，資料４及び写真４～15に示すＡ児とＭ児の姿が生み出された。

考察２－②

発展的な場において，場と動きについて友だちとかかわり合わせる発展的な課題追究活動の設定は，発展的な動きを生み出すことに有効であった（身体能力）。Ａ児とＭ児が評価と支援でかかわり合ったのは，動きを強調した場の機能と個に応じて再構成できる場の機能が有効にはたらいたからである。しかし，２人だけの活動が長く，課題が異なる他の友だちとのかかわり合いが薄かったことが課題として残った。

第３次：７／７時
発表会を楽しみながら，動きと場のよさを味わう。

７段ができたのはＭさんのおかげです。みんなに拍手で認めてもらってとてもうれしかった。また，応援してもらって元気がすごく出ました。

資料5　A児の発表会後の感想

第３次は，学びのよさを味わわせるために発表会を設定した。このことで資料５に示す感想をＡ児はもつことができた。

考察３

発表会の設定によって，友だちとかかわり合いながら自分で学んだよさ（運動構想力）や友だちとかかわり合いながらの動きづくり，場づくりへの自信を確かにすることができた。

【全体考察】

考察１から動きの系統に沿って構成・配列した場は課題を生み出すことに有効であった。また，考察１・２・３から動きを強調した場や再構成できる場は友だちと動き・場づくりにおいて共有の学びを強め，子ども自身が動きを生み出すことに有効であった。全体を通して活動構成も有効であった。これは，重点化した動きを確かに身に付けることにつながったからである。しかしながら，課題が異なる子ども同士のかかわり合いを活発化する必要性も明らかになった。

体育科（保健）学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自ら健康生活をつくり出す体育科(保健)学習

1　体育科(保健)での学ぶことと生きること

体育科（保健）では，自分の生活行動や身近な生活環境における健康課題を発見し，自分にあった対処法によって課題を解決する過程を通して，健康や安全の大切さに気付き，現在や将来に向かって心も体も健康な生活を営むことのできる子どもの育成を担っている。しかし，生活習慣病の増加や人間関係の希薄化や精神的なストレスの増大といった心の問題等が，学校現場をはじめ地域や家庭での大きな課題となっている。このようななか，子どもが自ら健康な生活を送るうえにおいて，体育科(保健）学習は，とても重要な位置にあるといえる。自分の体や心に関心をもち健康生活課題に気付き，自分にあった生活の方法を追究し健康生活を実践していく力を育むことに重点を置かなければならない。そのことにより，さまざまな問題や困難に出合ったときでも立ち止まり，自分を振り返り，よりよい生活の方法をつくり出していくことができるようになる。これらの態度や能力は将来につながり，生きて働く力となる。

2　体育科(保健)部主題についての説明

自ら健康生活をつくり出すとは，これまでの自分の生活の仕方を振り返り，自分の健康課題に気付き，その課題解決に向けて自分にあった方法を考え出し，実践していくことである。自分は今，健康といえるかどうか自分の生活を見つめ気付くこと。どのように改善すればよりよい生活を送れるのかについて考えること。自分で情報を集め，自分にあった改善の方法をつくり出すこと。それを実際に試してみて自己評価し，さらによりよい方法へとつくりかえて実践しながら，より健康な生活を送ることができることである。

自ら健康生活をつくり出す体育科（保健）学習とは，これまで何となく過ごしていた日々の生活について，子どもが自ら考えたり，工夫したりしながら身近な生活における健康課題に気付き，どうすればその課題を解決することができるのかについて考えること。それを実際に試してみることで，さらに改善点を見い出し，実際の自分の生活において実現可能な解決方法をつくり出す課程を通して，健康・安全の大切さに気付くこと。そして，健康課題を解決することによって「自分でできた。」という喜びをもち，これから先の生活においても，「自分は課題と出合ったときに，解決する力をもっている。」という自信をもつことができる学習のことである。

- ○　自分でつくり出した方法によって，自分にあったよりよい生活をつくり出そうとする子ども　（学ぶ意義）
- ○　自分の生活の振り返りから健康課題を見つけ出し，解決に必要な知識を獲得し，それを活用し実践することのできる子ども　（能力）
- ○　自分でつくり出した方法を試行し，さらによい方法へとつくりかえて実践し，課題を解決することで，肯定的な自分像をもつ子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための体育科(保健)の基礎基本】

意義	自分の生活における健康課題に気付き，よりよい健康生活を送りたいという願いをもって必要な知識を獲得し，自分でつくり出した方法を実際に試して，自己評価してみることでよりよい生活をつくり出すことができる。			
能力		観　点	中　学　年	高　学　年
	A能力 実体的学力	健康生活についての知識・理解	健康生活に必要な食事，運動，休養・睡眠，環境と，その調和について分かる力 体の成長，発達に必要な食事，運動，休養・睡眠と，思春期の体の変化について分かる力	健康生活に必要な食事，運動，休養・睡眠，環境の関係とそれぞれの具体的内容について分かる力 けがや病気の要因や予防について分かる力 心や体の成長，発達について分かる力
	B能力 機能的学力	健康生活を振り返り，課題に気付く力	学習した知識をもとに，自分の生活を振り返り，健康な生活を送るために改善すべき点や，良い点を見つけ出す力	学習した知識を活用し，自分の生活を振り返り，健康な生活を送るために改善すべき点や，良い点を見つけ出す力
		健康生活を構想する力	よりよい健康生活に向けて，習得した知識をもとに自分にあった生活の仕方を考え出す力	よりよい健康生活に向けて，習得した知識をもとに自分にあった生活の仕方を構築していく力
		健康生活を実践する力	習得した知識をもとに実践し，健康生活をつくることができる力	習得した知識をもとに実践し，健康生活の課題を解決して，あたらな生活をつくることができる力
自信	自己の健康課題に気付きその改善方法を追究し，実生活で試行し解決することができたことを実感させることによって，自分の力で健康生活をつくり出せるという自信を育むことができる。			

Ⅱ　生活の振り返りとアイデア交流を位置付けた活動構成の工夫

体育科(保健)部　養護教諭　畠　山　佳　子

1　副主題の意味

子どもたちは，日々の生活の中で，何らかの支障がなければそれが当たり前のこととして過ごしている。ケガや病気をして体調が悪くなって初めて，健康について考える機会となることが多い。健康に過ごすために必要な栄養，運動，休養・睡眠についても，親や教師から言われて知識的には知っている。しかし，生活の中で意識して実践している子どもは少ない。子どもが健やかに毎日を送るためには，自分の日々の生活の現実を認識し，健康に過ごそうという意識と，そのための知識，そしてよりよい生活をつくり出す実践力が必要である。生活の振り返りとは，健やかに過ごすために，様々な機会を捉えて自分の生活状態を見直していくことで，見過ごしていた健康生活の課題を捉えたり，逆に良さについても発見し，それを生活に生かしていこうとすることである。生活の振り返りとアイデア交流とは，前述のような生活状態への気付きを実感し，よりよい健康生活を実践したいという求めをもたせるための活動である。具体物を用いて自分の生活状態をイメージしたり，活動体験で体を動かしたりすることのほか，同じ課題を解決するための対処法をグループで交流しあったり，専門家から情報を収集するなどして，自分にあった対処方法をつくり出すことである。生活の振り返りとアイデア交流を位置付けた活動構成の工夫とは，今現在の自分の生活状態を見つめる機会をつくり，健康な生活を送るために情報を収集する。その上でアイデアを交流し合って，お互いに評価を繰り返しながら，自分にあったライフスタイルをつくりあげて実践し生活を改善していくことである。

2　学習プランの具体的構想

●単元設定の視点

保健学習は，知識の習得や理解が実践化につながることを前提として行われているが，現実には知識が生活実践までに至らないことが多い。そこで，次のような視点で単元を設定した。①自分の生活状態について実感しやすいように，気付きを大切にしたダンスや実物提示の場を設定する。②気付きを生活改善に結びつけるために必要な情報収集とグループでのアイデア交流の場を設定すること。③学んだことを生かした毎日の生活での実践を記録する場を設定すること。④実践の継続意欲を高めるために再度グループでの評価の場を設定すること。このことにより，保健学習で積み重ねた知識や理解がよりよい健康生活をつくっていくことにつながると考えた。

●　活動構成について

図１のように，気付く，深める，生かすの３段階とした。各段階に次のような活動を位置付ける。気付く段階では，まず自分の生活の様子意識を向けさせるため，①アンケート結果の提示や写真カードによる調査活動を行い，その結果から自分の生活の実態を見つめ課題に気付く。②気付きをさらに実感へと結びつけるためにダンスによる活動体験や実物を確かめるなど，実感をする活動を行うことで，よりよい健康生活をつくろうとする意欲を高める。深める段階では，主に知識の習得を行い，何をどのように改善すればよいかを考える。そのために，①ゲストティーチャーからの情報収集の場と，それを基にグループの友だち同士でのアイデア交流を行う場を設定する。グループで考えたことについてゲストティーチャーに評価してもらい，その結果を自分の対処法のなかに取り入れる。②ワークシートに考えた対処方法を記録しながら，家庭での実践と評価を繰り返す。生かす段階では，実践した方法について再評価し，よりよい方法を継続して実践していく。そのために①実践した方法をグループで交流し，方法がよかったのか，実践をよりよい対処法にするにはどうすれば良いのかアイデアを出し合い評価し合う。②さらにゲストティーチャーからの評価とアドバイスを受ける場を設定し継続意欲を強化する。

	気付く段階	深める段階	生かす段階
活動と内容	1　自分の健康課題に気付く活動 ○　日常の自分の生活について振り返ること ○　改善すべき課題や，よいところに気付くこと	2　課題解決のために，情報を集め，対処方法を考え，試行する活動 ○　健康な生活を送るための知識・理解 ○　自分にあった望ましい生活を見つけるための対処方法を考え実践すること	3　実践を評価し合い，よりよい対処方法へと更新して継続実践していく活動 ○　実践を振り返り，自分の対処方法の見直しをすること ○　自他の評価から，よりよい方法を実践し続けようとすること
手だて	※　健康アンケートや調べ学習用の写真カードを提示する。 ※　ダンスなどの体験活動を取り入れ，気付きをより実感しやすいようにする。	※　ゲストティーチャーからの情報提供の場と，考えた方法に対する評価とアドバイスを受ける場を設定する。 ※　グループで考えた方法から，自分にあった方法を見つけ，日記や記録表に記入し，実践と評価の繰り返しができるようにする。	※　毎日の実践の日記や記録表から，振り返りができるようにしておく。 ※　自分が考えた対処方法の実践に対し，グループの友だちとアイデアを交流する場と，教師やゲストティーチャー，友だちからの評価及びアドバイスを受ける場を設定する。

【図１　振り返りと情報交流活動を位置づけた基本的な活動構成】

3　指導の実際

第4学年　単元

オヤ，オヤッ？　おやつ!!
～健康によい　おやつ発見～

(1) 単元の目標

1　これまでのおやつのとり方に疑問をもち，意欲的に自分にあったおやつメニューを見つけて，自分の「おやつブック」をつくりあげることができる。
2　自分が，今成長期にあることから，おやつの大切さと，カロリー，糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎの害について理解し，それらのバランスに留意しておやつを摂らなければならないことがわかる。

(2) 単元の考え方

生活の学びとして展開する本単元は，よりよく発育・発達するために必要な，調和の取れた食事，適切な運動，休養及び睡眠のうち，とくに栄養面から健康によいおやつの摂り方ができるようになることをねらっている。そこで，第二次性徴の学習後に，①アンケートをもとに日頃食べているおやつのエネルギーや糖分，脂肪分，塩分について，ダンスや実際に含まれる量の実物提示などで調べ，摂り過ぎによる体への影響を理解する活動，②栄養士の話をヒントに自分の日頃のおやつの摂り方に疑問をもち，健康によいおやつメニューを考える活動，③実践をおやつ日記に記録する活動，④実際に試した結果を，おやつ日記をもとに教師や友だちから評価してもらい，よりよいおやつメニューに更新していく活動を構成する。健康によいおやつを考える活動，実践を評価し合う活動においては，グループや全体で意見を交流する他，栄養士にゲストティーチャーとして評価してもらい，自分ひとりの考えではなく他の意見を取り入れることによって，よりよいメニューができることを実感させていく。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１/３時
普段口にしているおやつに，どのくらいのエネルギーが含まれているのか調べ，含まれている糖分，脂肪分，塩分の量から，摂り過ぎによる体への影響について知り，日頃のおやつの摂り方に課題意識をもつ。

(1) おやつに含まれるエネルギーをおやつカードを使って調べ，ダンスでエネルギーを消費してみる。
(2) 糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎによる体への影響から，日頃のおやつの摂り方に課題意識をもつ。

写真1　わー。こんなにカロリーがあるんだな

写真2　チョコレート1個で，2分20秒も踊るのか

たくさんの砂糖や油や塩分が体に悪いということがわかりました。これから，体によいおやつをとっていくためにはどんなことをすればいいか学習したいです。
資料1　S児のおやつのとり方についての課題意識

第２次：２／３時
疑問を解決するために栄養士から「健康によいおやつ」メニューについての話を聴き，グループで意見を出し合って健康によいおやつメニューを考え実践する。

(1) 栄養士から「健康によいおやつ」メニューについ

第１次は，おやつは成長にとって必要なものであるが，エネルギーや，糖分，脂肪分，塩分に気をつけてとらなければならないことがわかり，日頃の自分のおやつの摂り方に課題意識をもつことをねらいとしている。そのために，まず事前アンケートによる子どもがよく食べている「おやつの写真カード」を使っておやつのカロリーを調べた。次にダンスで，チョコレート，キャラメル，ポテトチップ，枝豆のエネルギー消費量を体験した。また，炭酸飲料とスナック菓子に含まれる糖分，脂肪分，塩分の量について，実物を見て１日の所要量との比較をした。そして摂りすぎによる体への影響について知り，自分のこれまでのおやつの摂り方を振り返ることで，健康によいおやつを知りたいという求めをもっていった。

考察１

子どもたちは，日頃よく口にしているおやつのカロリーがかなり高いことを実感している様子が見られた。これは，おやつカードでいろいろなおやつのカロリーを調べるだけでなく，数値だけではわかりにくいカロリーのエネルギー消費量を，ダンスで体験してみることによって実感することができたからだと考える。また，資料１のように，S児はおやつに含まれる糖分，脂肪分，塩分の摂り過ぎが体に悪い影響を与えることを理解し，体によいおやつを摂るためには，どうすればよいのかという課題をもったことがわかる。これは，清涼飲料水やスナックに含まれる量について実物を提示しながら，図で体への影響を示したことが有効に働いたと考える。

第２次では，課題を解決するために，まず健康によいおやつについて知り，実際の生活で摂るおやつメニューを考え，実践していこうとする態度を引き出すことをねらいとしている。そのために，栄養に詳しい学校栄養士の先生をゲストティーチャーとして招き，健康によいおやつの摂り方のヒントについて話を聴いた。次に，そのことをふまえて「おやつの

て，おやつを選ぶポイントについての話を聴く。

(2) おやつカードを活用しながら，グループで話し合い，「健康によいおやつ」メニューを考える。

(3) 学校栄養士の評価を受ける。

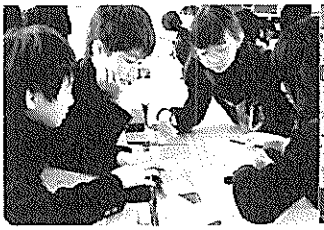


写真3　この組み合わせで　いいのかな

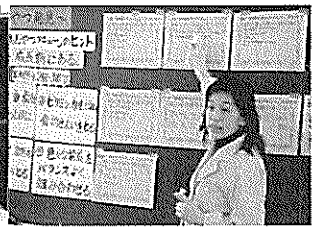


写真4　カルシウムがとれていて，バランスもよいです

おやつは，カルシウム，ビタミン，食物せんいをふくんだ自然の食べ物をバランスよく食べることが重要だとわかりました。これから，自分の健康おやつメニューをもとに，おやつを食べていきたい。

資料2　「健康によいおやつ」を実践しようとするＳ児の感想

第３次：３／３時　＋課外

栄養士の手作りおやつを試食し，実際に試してみたおやつメニューについてグループで評価し合い，よりよいおやつメニューに更新し，実践を継続する。

(1) 栄養士の手作りおやつに含まれる食品を見つけながら，おやつを試食する。

(2) 試食したおやつと，実践した自分のおやつメニューを比べたり，友だちと評価し合ったりして，よりよいおやつメニューを考える。

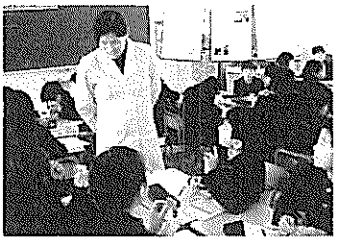


写真５　とてもたくさんのものが入っている

写真６　自分で作って食べたよ

前の学習で，「健康によいおやつ」メニューをきちんとしようと思ったけど，なかなかそれが守れなくて・・・班のみんなと話し合い，自分にあった「健康によいおやつ」メニューができて本当に良かったです。栄養士の先生の手作りおやつ・・・家でもたくさん作ってみたいです。

資料３　メニュー更新後のＳ児の感想

写真カード」を参考にしながらグループに分かれ，「健康によいおやつ」メニューを考えた。そして，できたメニューを全体に発表し，学校栄養士の先生に量や組み合わせ等についての評価を受けた。その後，考えたメニューを実際の生活で実践し，実践を「おやつ日記」に記録していった。

考察２

資料２のように，Ｓ児は「カルシウム，ビタミン，食物繊維を含んだもの」「自然の食べ物」をバランスよく取り入れることが健康によいことを理解することができた。これは，栄養の専門職である学校栄養士が，健康によいおやつの摂り方のポイントについて話をしたことが有効に働いたからである。さらにＳ児の感想には，「健康によいおやつ」メニューを実践していこうとする意識が現れている。これは，メニューを考える際に，グループの意見を交流し合いつくりあげたおやつのメニューを栄養士に評価してもらったことで，その摂り方のポイントがわかり，自分も毎日の生活で実践できそうだという見通しと自信がついたためである。

第３次は，実際に自分が実践してみたおやつメニューを振り返り，さらによい「健康によいおやつ」メニューへと更新し，実践を継続していこうという意欲をもつことをねらいとしている。そのために，栄養士の手作りおやつの試食することから，それに含まれている食品を見つけ，栄養バランスを自分のおやつメニューの実践と比較した。次にグループ内で自己評価，他者評価をし合い，よりよいメニューへと更新した。さらに，課外で，栄養士がつくってくれたおやつを，今度は実際に自分たちでつくって食べる体験を行った。

考察３

自分の実践を振り返り，グループで評価し合い，よりよいメニューをつくるために考えを出し合う活動を位置付けた。このことによって資料３に示すように，家庭での自分のおやつメニュー実践の不十分さを，グループの話し合いの中で更新し，よりよいメニューを考えることができたことを喜ぶ姿が見られた。また，各グループでの「健康によいおやつ」更新のための話し合いの過程で，栄養士へ次々に質問をする子どもの姿が見られた。このような姿が見られたのは，個人の「健康によいおやつ」メニューを，ひとり一人が自分だけで考えるのではなく，グループで考えを交流し合う活動を取り入れたことが有効に働いたからだと考える。交流し合うなかで，自分の考えが整理できたり，新たな視点での考えを取り入れたりすることができるようになったからであるといえる。栄養士が手作りおやつを用意してくれたことで，子どもたちとの親近感も強くなり，質問も出しやすい雰囲気をつくることができたと考えている。また，実際に手作りおやつを作って食べることも，今後の実践意欲の継続へと繋がった。

【全体考察】

考察１の資料１のように，実際の自分が口にしたおやつのカロリーの消費体験をダンスで行うこと，清涼飲料水やスナック菓子の糖分，脂肪分，塩分の含有量について実物を示したことは，今までの自分の生活のおやつの摂り方を振り返り，「おやつの摂り方は今のままでよいのか？」という課題意識をもつことに有効であった。また，考察２と考察３からは，自分のおやつメニューを考える際に，グループで考えを出し合うことによってメニューが生まれ，そのメニューをまた自分に合うようにして実践していこうとする姿がみられている。これは，生活の振り返りと同時に話し合い活動をあわせて行ったことが有効に働いているためであると考える。さらに，栄養について，専門である学校栄養士にゲストティーチャーとして学習に参加してもらったことは，メニューを考える際，グループでの話し合いの活発化に大変有効であった。課題は，今後の実践の継続である。時々チェック表等で振り返りを行うことが必要であると考える。

社会科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　社会を形成する一員としての判断力を身に付ける社会科学習

1　社会科での学ぶことと生きること

社会科が究極的なねらいとしているのは，公民的資質の基礎をはぐくむことである。しかし子どもたちが生きていく現代社会は，ますます高度化・複雑化している。子どもたちが将来的にこのような社会に出て，とまどわずに主体的に判断したり行動したりしながらよりよく生きるためには，身近な実社会に存在する社会問題からその解決策を主体的・多面的に考え，よりよい社会の実現に参画しようとする経験をしておくことが必要となってくる。そこで社会科には，①社会の状況を捉え，よりよい解決策を見出す社会的思考力や判断力をはぐくむこと②その際に必要となる社会生活の知識を身に付けることが求められている。そのために社会科では，①社会的事象の意味や社会的事象間の関係を明らかにする力②観察や資料などから事実をとらえる力③社会的事象と自分自身との関係を明らかにし，様々な立場で多面的に考える力を子どもたちに付けることが大切であると考える。

2　社会科部主題についての説明

社会を形成するとは，社会生活について社会的事象とかかわりながら理解を深め，市民・国民としての資質を身に付け，よりよい社会をつくっていくことである。社会を形成する一員としての判断力とは，所属している社会の社会的事象を関連的に理解し，その事象が置かれている状況を様々な立場で分析した上で，社会的問題を把握し，解決するために考えられる解決策について比較・検討することで，「何が一番大切か」「どちらがよりいいのか」などを決める力である。社会を形成する一員としての判断力を身に付けるとは，社会的問題に対して提案されている解決策を根拠をもとに評価できることであり，具体的には①判断をするための根拠を増やしている②様々な立場を比較している③より客観性をもった考えがつくられている④それぞれのメリット・デメリットを検討した上での優位性を導き出しているなどの姿である。この力をはぐくむためには解決策について分析的に検討する学習過程を構成し，解決策の価値を評価する基準を探究させる必要がある。以上のことから，社会を形成する一員としての判断力を身に付ける社会科学習とは，社会的事象についての知識を構造的にとらえ，その過程から明らかになった社会的問題を見出し，その解決策を吟味・検討することで，自分がよりよい社会のあり方をつくっていくという社会形成者としての自覚を高める学びである。そのためには，その解決策の価値を検討し合う場を意図的に設定することが必要となってくる。

- ○　自分がよりよい社会をつくり出す一人であるという自覚を高める子ども　（学ぶ意義）
- ○　社会的問題の仕組みをとらえ，根拠を明らかにした判断力を高めていく子ども　（能力）
- ○　社会活動に参画できた喜びや社会に守られていることを実感している子ども　（自信）

【表１　豊かに生きるこどもをはぐくむための社会科の基礎基本】

意義	社会的事象から課題を見出し，進んで追究することを通して，社会的事象の仕組みや働きをとらえ，自分が社会に支えられていることやよりよい社会をつくっていく一員である自覚を高めることができる。				
能力		観点	中学年	第５学年	第６学年
	A学力 実体的学力	知識理解	地域の位置やひろがり，諸活動の仕組みと働きをとらえている。	産業の営みを社会生活と国土活用保全の面からとらえている。	歴史上の人物の業績や願い，政治や国際社会の仕組みをとらえている。
		資料活用力	地域における観察・調査，具体的資料を活用し，図や紹介文にあらわしている。	事象の具体的な調査，各種基礎的資料を活用し，図や新聞などにあらわしている。	事象の具体的な調査，年表などの基礎的資料を活用し，事象の意味や背景を提案文や報告書にあらわしている。
	B学力 機能的学力	社会的思考力	関連…事実や観点，事象相互の関係的なつながりから特色を見出す。→ 比較…事実相互，複数事象を比べ，共通点や相違点から独自性を見出す。→ 条件…事象成立の自然的条件や社会的条件の違いからその特色を見出す。→ 因果…事象の原因と結果を結びつけ，事象間の関係性を見出す。→ 発展…見出した考えを他の場合にも広げて考える。→		
		社会的判断力	身近な社会問題をとらえ，よりよい社会のあり方を検討し，自分のこれからのかかわり方を決めている。	産業，歴史，政治，国際社会にかかわる事象の意味や問題点をより広い視野から見出し，多面的・客観的・総合的に検討することで，自分のこれからの社会の中での立場やあり方，かかわり方を決めている。	
自信	社会的事象に対するこれまでの自分の追究をふりかえり，自分の判断ができたことへの効力感を感じるとともに，積極的に生活の中でもいかしていこうとしたり，新たな課題に取り組んでいこうとしたりすることができる。				

Ⅱ　価値判断を迫る討論活動を位置付けた学習の展開

社会科部　　髙　良　祐　治

1　副主題の意味

価値判断とは，社会的事象についての問題点について，提案された，あるいは実際に行われている事象について，それの「どちらがよいか」など，価値について自分の考えを決めることである。価値判断を迫る討論活動とは，社会的事象において見出された社会的問題について，その解決策を生み出すために設定された論題を，自分の立場を明らかにしながら，その論拠や情報，さらには，その組み立てについて検討していく相互交流活動である。ここで行われる討論活動は，学習問題を解決するために何らかの判断を下さなければならない状況で行われるため，子どもたちにとっては，互いの考えを聞き合わなければならないという討論活動に対しての目的を持たせることができる。さらに，価値判断を行うためには，提案される解決策や価値について，十分に情報収集を行い，多面的・分析的に検討せざるを得ない切実さをもたせることができるため，深い社会認識を促すことができるよさがあると考える。

価値判断を迫る討論活動を位置付けた社会科学習プランとは，単元構成の中に学習問題を解決するために検討する必要がある論題を設定し，討論活動を位置づけることで，１人１人に価値判断を行わせ，よりよい社会のあり方や行動を判断する力をはぐくむ学習構想である。ここで行う価値判断を多面的で明確な根拠に支えられたものにするために，つまり事象の特色を見出したりその意味をとらえたりする深い社会認識へとつなげるために，表１のように，討論活動のねらいを区別して２回位置付ける。

【表１　討論活動の位置付け】

討論活動	主　な　ね　ら　い
討論活動Ⅰ	観点を明らかにし，考えの変更や付加修正の必要性に気付き，再追究の方向性を決める。
討論活動Ⅱ	再追究をもとに再構築された１人１人の追究論題に対する考えの妥当性を検討し合うことで，最終的な価値判断へとつなげる。

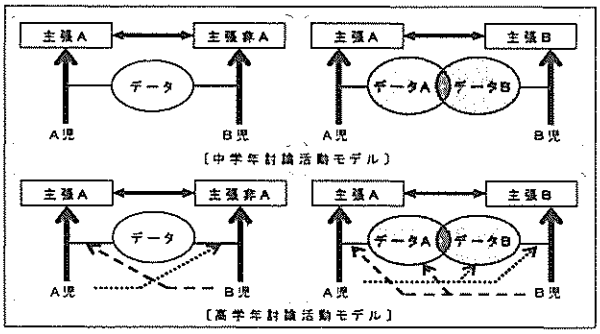
2　学習プランの具体的構想

●　価値判断を迫る討論活動を生む教材化

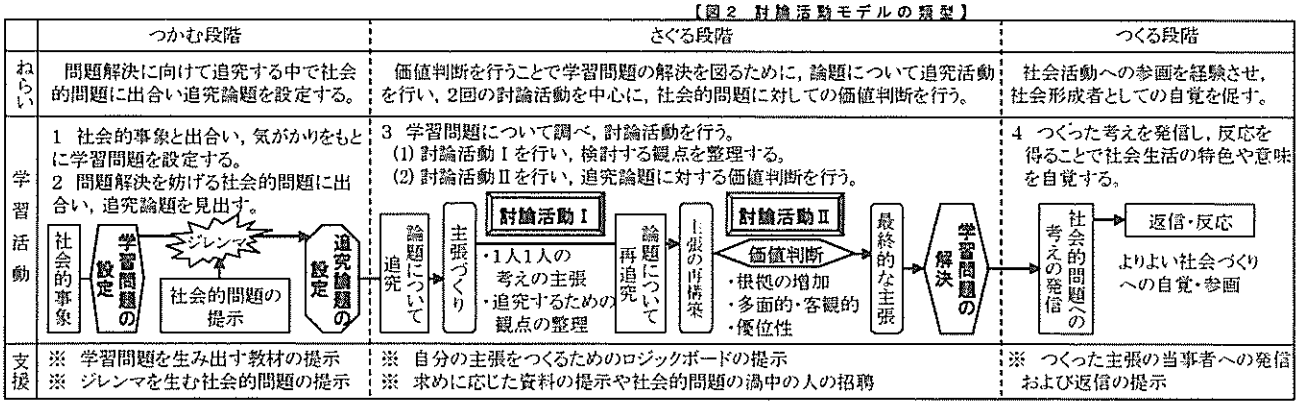
○課題性…　実際に現代社会の問題として課題性を有し，その解決が今日的命題となっており，子どもが解決案をつくることができること。
○具体性…　体験活動や見学，人とのかかわりなどを通して具体的な実感を伴って追究できること。
○多様性…　多様な観点をもったり，多様な調査方法を駆使して追究していくことができること。

●　２回の討論活動を位置づけた活動構成

問題解決に向けて立てた仮説と相反する社会的問題を提示し，ジレンマをもたせ，追究論題を設定する。子どもたちにとっては，この論題に対して何らかの判断を行わなければ学習問題の解決が見出せない。そこに討論活動を位置づけ，よりよい社会のあり方を共創する協働の学びで学習を展開する。その際，より多面的に分析された客観的な判断を実現するために，討論活動Ⅰでは，どのような観点で考えればいいのか各自の主張をもとに整理し，討論活動Ⅱでは，図２のように，中学年では，他者の論拠と自分の論拠を比較する討論活動を，高学年では，他者の論拠の組み立てやそこに用いた資料の価値まで検討し合う討論活動を位置付ける。以上のような活動構成により，子どもは目的的に調べ，分析，考えの構成，磨き合いの活動を繰り返していく。



【図２　討論活動モデルの類型】



【図３　２回の討論活動を位置付けた活動構成】

3　指導の実際

第4学年　単元

どうする?これからの八女提灯
～八女に伝わる190年の技～

(1) 単元の目標

1　八女提灯という伝統的工芸品の魅力にふれ，これからの八女提灯のあり方を，学級で討論することで，根拠を明らかにして判断することができる。
2　八女提灯づくりは地域の特性を活かして始まり，伝えられてきたことや，守り発展させるために八女の人びとが様々な努力をしていることをとらえることができる。

(2) 単元の考え方

本小単元のねらいは，伝統的な工業である八女提灯が，八女の環境から生まれ，地域に密着しながら伝承されてきているようすを追究していく活動を通して，この産業にかかわっている人々の守り伝承していこうとしている努力や今日まで八女に根付いている地域の特色をとらえることである。また，このような内容をとらえることで，福岡県に対する誇りや愛情をはぐくみ，自分の中に伝統文化観をつくることである。そのために，八女提灯の伝統がどのようにして守り継承されているのか追究する学習問題を設定する。その追究過程で，現在八女提灯業界で問題となっている八女提灯の一部が中国で生産されていることに対しての是非を検討していく場を討論活動として位置付ける。そして，価値判断を迫っていくことで，八女提灯を作り守り続ける人びとに共感したり，伝統を守っていくことの意味を実感したりすることを通して，福岡県の伝統工芸品を大切にしていこうとする思いを共創していく協働の学びで学習を構成していく。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１～６/12時
八女で作り続けられる八女提灯について調べる学習問題を設定し，調べる中で八女提灯がかかえる問題点をとらえ，討論題を設定する。

(1) 八女提灯の作り方や材料，地域特性を八女の見学を通して調べ，学習問題をつくる。
(2) 八女提灯が抱える課題から追究論題を設定する。

最近は，中国製の火袋が増えてきました。届けられた箱に「メイド・イン・チャイナ」と書かれてあるのを見るとがっかりしてしまいます。正直なところ，描きたくないのです。生活していくために描いてはいますが…。

写真1　えっ！全部八女でつくっているわけじゃないの？

「八女ちょうちん」というくらいだから，八女だけで作っていると思っていたのに，中国でも作っていると知ってびっくりしました。伝統的工芸品は，その場所で作るから伝統工芸品なのに，いいのかなと思いました。わたしは，これからも八女ちょうちんが続いていくために，このことをはっきりさせたいです。

資料１　樋口さんの悩みを聞いたA児の感想

第２次：７～10／12時
論題について話し合い，福岡の伝統工芸品である八女提灯についての価値判断を行う。

(1) 自分の主張をつくり，討論Ｉを行う。

第１次では，八女提灯の地域特性からの気がかりをもとに学習問題を設定し，八女提灯づくりのようすについて追究していくことで，現在の八女提灯が抱えるジレンマに気付き，追究論題を設定することをねらいとしている。そのために，製造工程や，八女の地場産業や自然環境とのかかわりを調べたり，八女を訪れ，絵付けや火袋づくりを見学したりすることで，「どのようにして八女提灯の伝統を守っているのだろうか。」という学習問題を設定した。その後，八女提灯が全国一の生産量を誇っていることと絵付け職人の伝統工芸士樋口さんのインタビューVTR（資料１）を提示することで，ジレンマをもたせ，「これからも八女提灯を中国でつくってよいか。」という追究論題を設定した。そのときのＡ児の感想が資料２である。

考察１

資料１から，伝統と海外生産の間でジレンマを感じ，追究論題をつかんでいることや追究の目的意識を高めていることがわかる。これは，八女提灯の地域特性を伝統工芸士との交流を通して調べてきた上で，その本人から語られる悩みを提示したことが，八女提灯を作る人の立場でジレンマを実感させることに有効に働いたからである。また，このことは，「八女提灯が続いてほしい。」という思いをもとに「これからの八女提灯のあり方をはっきりさせたい。」という討論の目的を持たせることができたと考える。

第２次では，八女提灯の一部が中国でつくられていることについて，様々な観点から検証していくことで，福岡の伝統的工芸品である八女提灯のこれからのあり方を判断することをねらいとしている。まずロジックボードを活用しながら，情報と論拠がはっきりとした主張をつくらせ，討論Ｉを行った。Ａ児は，八女製は品質がよいという見方で主張を行ったが，コストや中国製の品質について友だちの意見やGTから

(2) 明らかになった観点をもとに再追究を行う。
(3) 討論Ⅱを行い，価値判断を行う。

A　　児	他の子どもやゲストティーチャー
中国製の火袋は，工場の写真を見ると，若い人たちがつくっています。また大量につくっています。だけど，八女ではベテランの人たちが１つ１つ丁寧につくっています。ということは，八女の方がいいものができるといえます。だから時間をかけてでも八女でつくるべきです。（伝統）	T児　日本で作ると 800 円もします。中国は 700 円です。100 円も差があります。だから八女で作ると高くなってしまうので中国で作っていいと思います。（もうけ） GT　今の中国製の火袋は日本製とほとんど見分けがつかない。安く作れるのでもうかる。自分たちも食べていかないといけない。しかし，八女でつくられた火袋に絵をかいて育ててもらったので，八女の火袋を見捨てるわけにはいかない。

資料２　討論Ⅰでの話し合い

樋口さんたちは中国の火袋に絵をかくことには気が進みません。しかし中国で作ると売り上げは上がるし，給料も上がることになります。八女で作ると給料が下がって，生活に困ってしまいます。ということは，中国で作らない方がいいけど，現実的には，中国で作らないといけないということだと思います。（生活）	O児　伝統的工芸品がせっかく福岡にあるのだから八女で作った方がいいと思います。それに中国で作ると八女の自然や仏壇などの技術を使って始まり，今まで１９０年も続いているという歴史が，水の泡になってしまいます。（伝統） I児　グラフからもわかるように，八女で火袋を作っている人の仕事がへってきています。だから中国で作るべきではないと思います。（伝統）

資料３　討論Ⅱが始まったときのＡ児の考え

中国では本当はつくってはいけないと思います。八女提灯だから全部八女でつくらないといけないし，樋口さんたちもこれまで八女でつくってきたわけだから，八女で全部つくりたいと思っています。でもグラフは「作業代が安い」というのが一番多くなっていて，これでは八女で働いている人たちが生活にも困るし，樋口さんたちは絵をかくことでお金をもらっているわけで，生活面を考えると中国に手伝ってもらわなければいけないと思います。（伝統・生活）

資料４　討論活動Ⅱの最後のＡ児の考え

第３次：11～12／12時
自分の価値判断をもとに最終的な判断を行い，学習問題の応えを見出し，自己の学びを振り返る。

(1) 「これからの八女提灯新聞」をつくり，樋口さんたちに発信する。
(2) 樋口さんからの返信をもとに学びを振り返る。

福岡県の八女だからこそ始まった八女提灯だから，八女で作ることが私たちの願いです。しかし，そのままでは生活が危なくなってしまうし，八女提灯を作る人がいなくなってしまいます。そう考えると，八女提灯を守っていくためにはやっぱり中国で作ることも必要だと思います。そんな中樋口さんは，大きな「なやみ」を抱えているのに，八女提灯を何年も作り続けていて，「守り役」みたいです。これからも中国でつくる部分はあるだろうけど，きっとあきらめずに八女で八女提灯を作り続けていくと思います。

資料４　Ａ児のつくった新聞の社説

の情報を取り入れ，中国でつくることも必要という考えに変えている。しかし，討論２では伝統や歴史の観点から出された意見に影響は受けつつも，判断は変えていない。

考察２

Ａ児は，「生活できるか」「伝統を守れるか」「人びとの思いはどうか」「もうかるのか」という観点をもとに主張を相互交流することによって，はじめは八女製にこだわっていた主張を，つくる人の思いや伝統を認めながらも生活できることがまずは大切であるという多面的な判断をすることができている。これは，①中国でつくってよいか価値判断を行う際の観点を明確にする討論Ⅰ②生産者を GT として招聘したり情報を子どもの求めに応じて準備したりして行う再追究③再構築された個々の考えを交流し，八女提灯のあり方の再判断を行う討論Ⅱという一連の活動が有効に働いたからである。

第３次は，新聞づくりを通して，これからの八女提灯のあり方について，これまでの追究をもとに自分の考えをつくることで学習問題の応えを見出し，樋口さんたちに発信することで，自己の学びの価値を実感させることをねらいとしている。そのために，社説の部分を中心とした新聞をつくり，その新聞を樋口さんたちに届け，その返事を子どもたちに紹介することで，これまでの学習の振り返りをさせた。

考察３

社説として最終的な判断をさせることで，資料４に示すような姿が見られた。ここでは A 児が「伝統を守っていくためには，そこに関わる人々が安心して生活できること」が大切な条件であり，ここまで考えながら八女の人びとが八女提灯の伝統を守ろうとしている姿に共感した応えを見出した姿を読み取ることができる。これは，樋口さんに伝えたいという目的意識をもたせていたことが有効であったからである。

【全体考察】

八女提灯業界が実際に直面している社会問題を追究論題として設定し，2 回の討論活動を位置付けて子どもたちに追究させたことは，考察 1 と考察 2 からわかるように，「中国でつくる」ことを一面的な見方ではなく，複数の立場から分析的に追究した上で個々が自分の判断を行うために有効であったと考える。また，このことと考察 3 から県の伝統工芸品である八女提灯を多面的に見ながら判断し，明確な根拠に支えられた自分の応えをつくっていることがわかる。これらは，八女提灯がこれからも続いていくためにはどうすればという追究の目的をもたせた上で，実際に八女提灯を継承していけるかという社会問題から共通論題をつくり，個々が創った主張を交流させ，検討し合いながら個々の判断をより確かなものにしていき，学習問題の応えを見出していく（共創）一連の協働の過程が有効であったからだと考える。今後は，中高学年に応じた討論題設定の条件やそのための追究の方法の様相を実践を重ねながら明らかにしていきたい。

家庭科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　家族とかかわりながら生活を見直す家庭科学習

1　家庭科での学ぶことと生きること

科学技術の進歩や社会の変化は，家庭生活そのものにも大きな変化をもたらしている。物の豊かさと快適な生活を追求した結果，生活は豊かになったかというと必ずしもそうではない。家庭で体験すべき生活体験が乏しいために，生活への感性や他人の立場で考える感覚も希薄になってきており，生活技能そのものが身についていない子どもも増えてきている。家庭科学習では，家庭生活における人間関係を大事にし，実践的・体験的な活動を通して自らの思考力や判断力を発揮して知識や技能を身に付け，人が生活することそのものを教育内容としている。日常生活をするのに必要な基本的な生活技能を習得して，自立した生活を送ることは，将来変化の激しい社会に対応し，たくましく生きる人間を育成する上でも大切なことである。

2　家庭科部主題についての説明

家族とかかわりながらとは，①家族の考えや行動を意識すること，②家族の考えや行動を受けとめ，まねてみること，③家族の考えや行動を理解すること，④家族の考えや行動を自分にあてはめて自分でできるようになること，⑤家族の立場に立って考えたり行動したりすることである。家族とかかわりながら生活を見直すとは，自分が家族の一員として生活の状況を認識し，習得した基礎基本を駆使して家庭生活の場面で思考し判断して行動化し，生活がよくなったこと，家族の役に立つことに有用感を感じることである。つまり，家族の一員として自分はどうあるべきか自分にできることはないかを考え，学んだことを生活に生かすことである。家族とかかわりながら生活を見直す家庭科学習とは，①自分の家庭生活を見つめて事実の確認をし，生活の問題点や改善点をとらえることができること，②自分の生活の問題を見通しをもって解決する過程で知識や技能を獲得すること，③家族のために獲得した知識や技術を応用・発展することである。この活動の中で，家族の生活に関する思いや工夫を情報収集したり家族の評価をもらったりすることを通して，家族の一員として自分の生活を改善しようとする意欲を高め，生活がよりよくなることで自分に自信をもつことができる。日常生活に必要である合理的な面と情操的な面を総合的に考え合わせて行動できるには，家族とのかかわりの中で生活を見つめ直し，問題を考え追究し生活に生かす場の必要があるのである。

- ○　家族の一員として，家族や回りの人々と協力してよりよい生活をしようとする子ども　（学ぶ意義）
- ○　衣食住などに関する実習や観察・実験などを通して，自分の生活課題の解決に必要な基礎的・基本的な知識や技能を獲得し，それを活用できる子ども　（能力）
- ○　自ら獲得した知識や技能を実践することで，自分自身の生活向上のよさを実感し，家族に役立っている自分に満足感や充実感をもつ子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための家庭科の基礎基本】

意義	家庭科において豊かに生きるとは，家族の一員としての自覚をもち，家庭生活をよりよくしたいという願いをもつこと，そのための工夫について気づいたり，理解したりすること。自分と家庭生活を営む上でかかわるもの・人・こととのかかわりを見つめて，生活向上に必要な生活技能や知識を主体的に獲得し活用できること。			
能力		観点	5　年　生	6　年　生
	A能力 実体的学力	知識・理解 技能	家庭生活を構成している要素が分かる力	家庭生活を構成している要素の相互の関係が分かる力
	B能力 機能的学力	生活を観察する力	身に付いた知識や技能，自分が大事にする視点から自分の生活を分析し，課題を見出すことができる。	自分に身に付いた知識や技能，家族が大事する視点から自分や家族の生活を分析し，課題を見出すことができる。
		生活を構想する力	よりよい家庭生活を計画する力 よりよい家庭生活に向けて，必要な情報を多面的に収集・選択する力	よりよい家庭生活を計画する力 よりよい家庭生活に向けて，必要な情報を総合的に分析する力
		生活を判断する力	家族の一員であることから生活の工夫を判断できる。	近隣の人々との関係から生活の工夫を判断できる。
		生活を工夫する力	習得した知識・技能を再構成し，家庭生活の課題を解決し家庭生活に活用できる力	習得した知識・技能を再構成したり，総合したりして，家庭生活の課題を解決し家庭生活に活用できる力
		生活の工夫を自己評価する力	自分の生活の仕方や自分なりに考えた工夫を振り返る力	自分の改善した生活の仕方や場面に応じた生活の工夫のよさを振り返る力
自信	自分で生活を創ることに喜びを感じ，ものを創造する楽しさや成就感も得られ，家族とのかかわりを通して家族に役立ったことで有用感をもち自分の生活や家族の生活をよりよくしていこうと対応することができる。			

Ⅱ　食生活を科学的に追究する活動の展開

家庭科部　　脇　本　孝　枝

1　副主題の意味

食生活を科学的に追究するとは，①自分の食生活を意識的に見つめる。②資料や調査に基づく情報収集をする。③食生活を意識的に見つめ直し，客観性のある言葉や数値で表現する。④分類や比較をすることにより食生活を見直す視点をもつことである。

食生活を科学的に追究する活動とは，仮説を立て課題を解決する活動である。まず，自分の食生活を再現したり比較したり数値化したりして客観的に見つめ，友だちと課題を解決する活動を通して，自分の家族とは違う暮らし方に出合い，話し合ったり試したりして，新たな価値を作る。そして，一般化・生活化し自分の課題を解決して，よりよい食生活を実現していくことである。科学的に見直す視点をもつことにより原理を知り応用発展できるものとなる。

2　学習プランの具体的構想

●　食生活を科学的に追究することができる教材化の条件

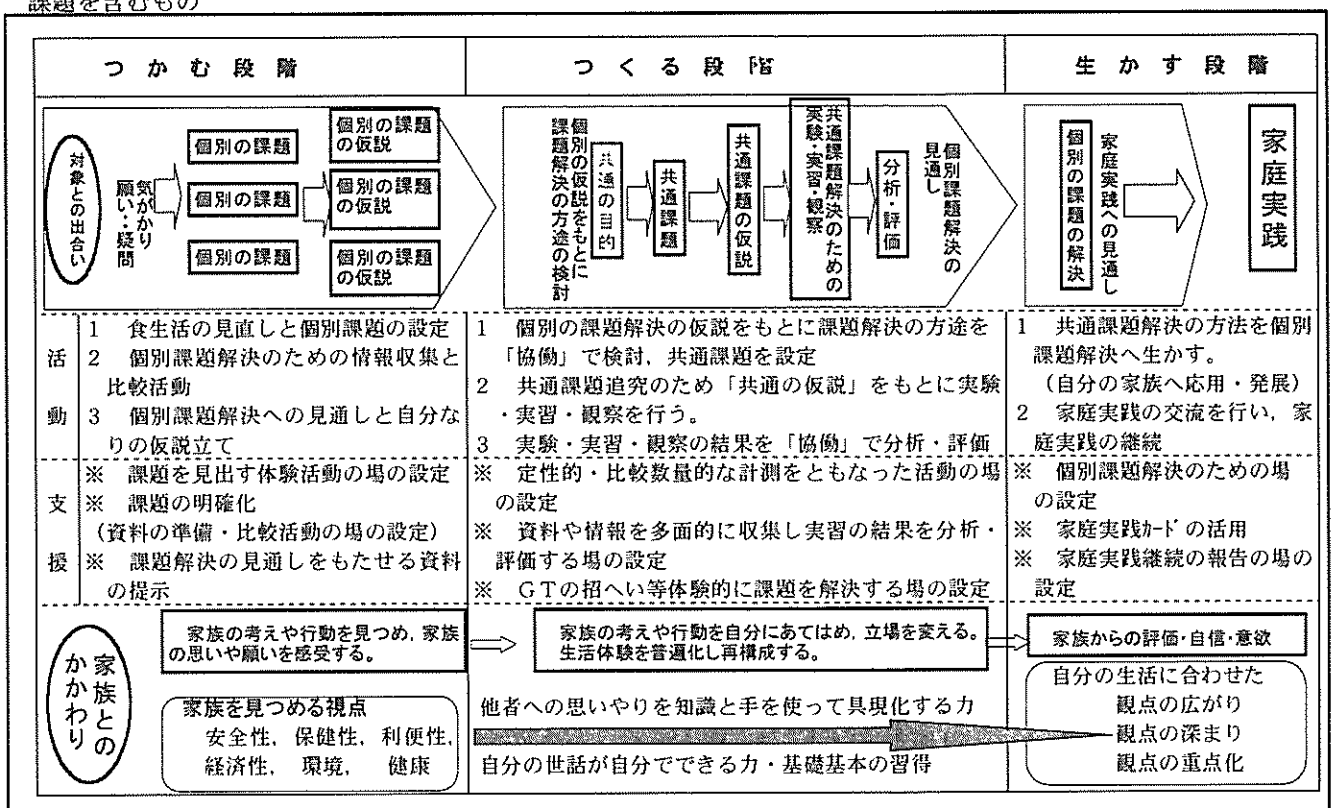
①　自分の食生活をよりよくしていく上で家庭生活の実態から，見直し解決しなければならない必然性のある課題を含むもの

②　生活の事象の必然性を理解し，習慣的に行っている生活事象を見直す視点（安全性，保健性，利便性，経済性，環境，健康）をもって解決の方法を考え，その実現に向かって取り組むことができるもの

③　日常の生活の仕方を見直し，科学的な裏付けのある資料や実験を通して日常の事象と関連させて理解し，改善をしていこうする意欲を育てることができるもの

●　食生活を科学的に追究する活動を位置付けた活動構成

科学的に追究するために，仮説検証の学習過程を仕組む。つかむ段階では，家庭生活を見つめることから生まれた個人の課題を解決するために，仮説を設定し課題解決の見通しをもたせる。つくる段階では，課題解決のための方途について話し合い（協働），共通の目的をもって共通課題を設定する。共通課題を解決するために，自分の考え・方法を出し合い共通の仮説を設定する。共通課題解決の方法を分析・評価し，みんなで新たな考え・方法を創る場（協働）を設定する。解決の方法を創り出すために，分析・評価の結果の客観性を高め，的確な判断ができる場を協働として設定する。生かす段階では，共通課題で解決したことをもとに，自分の家族に合った解決方法を追究させ，家庭実践への見通しをもたせる場を設定する。家庭実践の評価を家族から得て，自分に自信をもち有用感を味わうことができるのである。



【図1　家庭生活を科学的に追究する活動を位置付けた家庭科の基本的な活動構成】

3　指導の実際

第5学年　題材

旬の野菜でヘルシーライフ!

(1) 題材の目標

1　旬の野菜のよさ，冬が旬の野菜を調べることを通して，自分や家族の食生活を見直し，家庭の食生活をよりよくするために自ら考え実践しようとすることができる。
2　ゆでたりいためたりする調理のよさや手順を考え，調理操作の基礎的技能を身に付けることができる。

(2) 題材の考え方

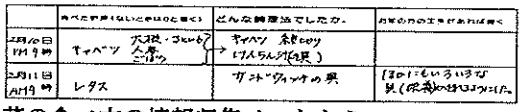
本題材は，日常の食事によく使われる食品である野菜を用いた簡単な調理を通して，調理操作などの基礎的技能を身に付け，日常生活で活用できるようにするとともに家庭生活をよりよくするために自ら考え実践することの楽しさを実感し，日常生活の中でよりよい食生活を目指して意欲的に取り組む態度を育てることである。

家族が冬を健康に乗り切るための食事はどうしたらいいのかについての話し合いを通して，「冬が旬の野菜で健康になる料理を作りたい」という目的をもった子どもが個別課題解決の方途を整理し共通課題を設定する。健康の視点から共通課題を設定し，①栄養，②食材，③調理法を解決する方向を創り出す。共通課題で追究したことをもとに個人課題を見直し，より自分の家庭にあった追究方法を探り，家庭実践の見通しをもって家族のために旬の野菜を使ったレシピを作成し実践へとつなげる。

(3) 学習の流れと考察

第１次：1／６時
毎日の食事についてふり返り，健康と食事の関係を考え，どのようにしたら健康な食事になるのかについて話し合い学習計画を立てる。

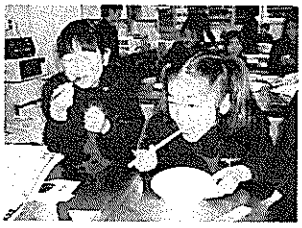
(1) 冬の食事調べ（野菜に視点を当てて）や家族の健康調べからわが家の食事について見直し，旬の野菜を使って冬を健康に過ごす調理計画を話し合う。



野菜の食べ方の情報収集ノートから
毎日野菜は食べている。野菜の種類，調理法など，そして家族がかぜをひかないようにお母さんはいろいろ気を使ってくれていることが分かった。

資料1　野菜の食べ方の情報収集ノート

旬の野菜との出合い



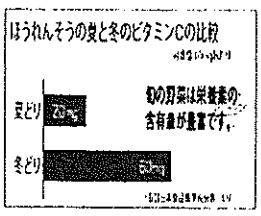


写真1　冬の大根はおいしいね。資料2　旬の野菜の栄養

共通の願い
冬が旬の野菜で家族が健康になる料理を作りたい。
・栄養価が高い　・おいしい　・安い
・根菜類は体を温めてくれる。・食物繊維も豊富
・ほうれん草は冬の方がビタミンCがたっぷり。

資料4　個別の課題から共通の願いへ

第１次では，自分の食事の課題を解決するための見通しをもつために，レシピ作成で調べたいことを明確にすることをねらいとしている。そのために，まず，食事と健康の関係についての資料を提示することにより，自分の毎日の食事への関心を高め食事の見直しを行った。その実態をもとにわが家の食事と健康の問題をとらえ，科学的効用を証明する資料をもとに旬の野菜のよさをつかんでいった。また家庭での食事作りの工夫を情報収集することにより，家族のためにどのようにしたら旬の野菜を使って健康を考えた食事になるのか課題をもった。そして，個別課題を話し合い，共通課題を設定した。

A児は，食事調べと旬の野菜の効用の資料より健康と旬の野菜の関係を調べ家族の健康に役立てたいと考えた。

A児の個別課題
自分たちが普段何も思わないで普通に食べていても，お家の人は工夫をしてくれている。・・・旬の野菜を普段の料理にも取り入れて家族が健康になったらうれしいです。今だからこそ効果が大きい野菜を調べて家族の健康に役立たせたい。

A児の個別の課題の仮説
寒がりでかぜ気味の家族に，旬の野菜大根を使い体を温めれば家族が元気になるだろう。そのために旬の野菜の味を生かした調理法を調べる。
①味がよくしみこむ切り方，煮方
②旬の野菜の味を生かした味付け

資料3　A児の個別の課題と課題解決の仮説

考察１
自分の家族の食事について問題を持たせる出合いをし，旬の野菜と出合わせることで，健康と食事を関連づけて課題をとらえることができた。野菜に視点を当てた食事調べにより，旬の野菜の食べ方を意識的に見つめ，情報を収集することができた。

2次：3～4／60時
共通課題を達成するために「冬が旬の野菜の健康レシピ」を作成し，個別課題追究の見通しをもつ。

課題を解決するために切り方，味の付け方を比較できるように実習しよう。どんな結果がでるのか楽しみだな。

写2　課題が解決できるように比較して実習しよう。

どちらが味がよくしみこんでいるかな。面取りをしたもの，落としぶたをしたもの，かくし包丁をしたものを比較しよう。

写真3　見た目と味を比べてみよう。

第3次：5～6／6時
自分のレシピをもとに試しの調理を行い，家庭実践の計画を立てる。

学校で作ったレシピをもとに家族のために大根でおでんを作ろう！実習を生かして・・・

写真4　わたしの食べてみてね。喜んでくれたらうれしいな。

・・・家で作って家族に食べてもらい「おいしい」といわれ，その言葉で家庭科が好きになり，しかも自分に自信をもって取り組んでいこうという気持ちになりました。作り手の気持ちも分かりました・・

資料6　家庭実践後のA児の感想

第2次は，共通課題を追究するための実習・観察を行うことで，よりよい追究の方法が分かり調理操作などの基礎的技能を身に付けていくことがねらいである。個別の課題の仮説をもとに課題解決の方途を検討することにより，「冬が旬の野菜で家族が健康になる料理を作りたい」という共通目的ができ，調理法についてともに解決したいという必然がおこった。そのため，料理別のグループで実習を設定し，「冬が旬の野菜の健康レシピを作ろう」という共通課題を設定した。共通課題解決のための実習では自分たちが考えた仮説に基づき，実習の結果を比較し調理技能の基礎基本を習得した。

考察2

共通課題を設定し，課題別のグループで実習を行ったことにより，材料の分量，切り方，火加減，加熱時間，手順などの調理操作の基礎的技能を身に付けることができた。同じグループで話し合いながら課題追究を行うことで，自己評価，相互評価をもとに改善点もはっきりとし，個別課題解決に意欲を高めることができた。共通課題をｸﾞﾙｰﾌﾟで追究したことで事象が客観的なものとなり，個別の課題解決に応用可能となり，自信をもち健康に視点をあてた食事作りの家庭実践に生かしていこうとする姿につながったものと考える。

第3次は，共通課題の追究をもとに自分の課題を追究し，健康な食事の家庭実践計画を立てることがねらいである。そのために個別課題解決の場を設定した。

A児は共通課題で解決したことをもとに自信を持って個別課題解決に取り組むことができた。（写真4）また，家庭実践後資料3からも分かるように「家族に喜んでもらってうれしかった」と家族に役立ち有用感を味わっている。食事が準備できるようになり家族に喜んでもらった自分に自信を持ったことが分かる。

考察3

共通課題追究後に個別課題達成のための一人実習を設定したことにより自分の調理に自信をもたせることができ，家庭実践への意欲を高めることにつながった。共通課題解決で基礎基本を習得し家庭実践に応用できたと考えられる。家庭実践後，家族からの評価をもらい自分の課題解決に達成感をもつことができた。

A児の家族からのコメント
味もしみてとてもおいしいおでんができました。米のとぎ汁で大根を煮たり，面取りをしたりといろいろな知恵を使い，なぜそうするのかも考えながら調理している姿に感心しました。包丁の使い方も上手で安心しました。
お父さんも，お姉ちゃんもとても喜んでくれてよかったですね。これで冬を元気に過ごせます。ありがとう！

資料5　家庭実践後の家族からの評価

【全体考察】

考察1と考察2から分かるように食生活を見直す視点をもち，自分の食生活を意識的に見つめることにより学ぶ意義を明確に持ち情報収集することができた。調理操作などの基礎的技能を身に付けるために個別課題から共通課題を設定した。旬の野菜のレシピを作るという共通の目的のもと共通課題を解決するために，分からないことを教え合ったり，家族の知恵を出し合ったりした。課題解決の方法を自分たちで考え，実習の結果を分析・評価したことにより課題解決に自信をもち，個別課題解決に取り組んだ。進んで家族にかかわり調査をしたり情報収集したりして自分の食生活を改善していくために有効であった。また，このことと考察3から，家庭生活の問題から自分の力で生活をよりよくしたいという家庭実践につなぐことができた。家庭とどのように連携し実践知を高めるかが課題として残されている。

生活科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　知的な気付きに高める生活科学習

1　生活科での学ぶことと生きること

生活科がめざす究極的なねらいは，自立への基礎を養うことである。この自立への基礎を養うためには，直接的な活動や体験をもつこと，身近な人や社会，自然を自分とのかかわりで学習すること，自分自身の成長への気付きや次の活動に生かされるよう，一層気付きの質を高めることを重視していくことが求められている。その実現をめざす生活科には，生活から見いだした身近な認識をもとに子どもが納得して分かる過程を通して，自分の生活の視野を広げたり人とのかかわりについて考え実現したりする役割があると考える。この役割を果たしていくために生活科では，生活の学びに重点をおく。それは，身近な人や社会及び自然を対象として直接かかわる活動や体験の中で，対象を直観的に，関連的に，そして実感的にとらえ，新たな問いをもとに対象に継続的に働きかけながら自分の生活につなげ，よりよい生活者となることをめざすことができると考える。

2　生活科部主題についての説明

知的な気付きとは，自らの思いや願いをもって取り組んだ活動や体験を通して，体感的に得られた認識の芽生えである。それは直観的な気付きから関連的な気付き，実感的な気付きへと高まり，さらに教科の科学的な思考や認識，合理的な判断，そして美的，道徳的な判断の基礎につながっていく認識の芽生えである。また，それらは直観的な特徴づけやアイデア，比較や関係づけを行って得られた考え方を自らの論理として進んで言い表した認識の芽生えである。知的な気付きに高めるとは，具体的な活動や体験を通して，対象の状態や情緒を感じる直観的な気付きから，対象の関係をとらえる関連的な気付き，そして対象のもつ意味や価値，自分自身の成長や高まりをとらえる実感的な気付きへと発展させていくことである。知的な気付きに高める生活科学習とは，自らの思いや願いを実現していく目的的な活動や体験を行う中で，対象の状態をとらえ，対象との試行錯誤的なかかわりの中で比較や関係づけの思考の形態を繰り返しながら，対象の特徴や関係をとらえていく学習である。そして，情報収集をもとに目的的，意図的な活動を通して，対象のもつ意味や価値をとらえ，さらに，これまでの学習を振り返りながら，自分自身のよさや高まりをとらえ，次の学習や生活に生かし自分の生活をよりよく変えていく学習のことである。

- ○　身近な人や社会，自然に関心をもち，諸感覚を通して，自らかかわるよさを体感している子ども（学ぶ意義）
- ○　身近な対象に繰り返し働きかけながら，課題解決のために追求したり表現したりして，対象の価値や自分自身の高まりをとらえる子ども　（能力）
- ○　自分の活動を振り返り，できるようになった自分を見つけながら達成感や成就感をもち，新たに挑戦してみたいことへの意欲をもつ子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための生活科の基礎基本】

意義	具体的な活動や体験を通して身近な人，社会，自然に対する切実な問題意識をもって対象へのかかわりに関心をもち，情緒的に働きかけを変えたり繰り返しかかわったりする中で，自分自身や自分の生活について新たに気付きながら学習上，生活上，精神的な自立への基礎をはぐくむことで，これから豊かに生きていく向上心をもつことができる。			
能力		観点	第１学年	第２学年
	A能力 実体的学力	習慣・技能	身近な対象（人，もの，こと）にかかわっていく上で，また問題を解決していく上で必要な習慣や技能を身に付けることができる。	
		気付き	自分とのかかわりで対象の様相や特徴をとらえたり関係づけたりして，自分にとっての意味や価値を見出すことができる。	実感的な気付き（対象の価値，意味）自分自身の高まり 関連的な気付き（対象の特徴，異同，関係） 直観的気付き（対象の状態や情緒）
	B能力 機能的学力	感じる力	身近な対象との出合いにおける驚きや感動，不思議さを素直に感じ取ることができる。	対象への興味・関心や切実感をもち，自分なりに追求する思いや達成の願いをもつことができる。
		追求力・振り返る力	自分を取り巻く身近な対象に対する問いなどから，自分の思いや願いをもって対象に繰り返し働きかけ，自分の活動を見直すことができる。	身の回りにある対象を再度見直し，自分の思いや願いをもって，対象を焦点化して自分なりの方法で働きかけたり改善したりすることができる。
		表現する力	活動の楽しさや気付いたことを言葉や動作，劇化などによって進んで表現することができる。	活動の楽しさや気付いたことを言葉や絵，動作，劇化などによって分かりやすく表現することができる。
自信	身近な人や社会，自然に積極的に働きかける過程の中で，自分自身についてのイメージを深め，できそうな自分（可能性），できるようになった自分（高まり），できた自分など，自分自身を見つめ，自分の存在やよさや可能性，心身の成長に気付き，これからの成長への願いをもって，さらに自分自身や自分の生活にチャレンジしていくことができる。			

Ⅱ　問いを生み出す実感的活動の展開

生活科部　　塚　本　正　典

1　副主題の意味

問いを生み出すとは，「なぜかな」「不思議だな」という思いを実現しようと，必然性をもった問題意識をもとに解決に向かう内発的な意識の高まりである。実感的活動とは，切実な思いや願いをもとに，五感を通した体験によって友達やＧＴとかかわりながら自分や生活とのつながりで気付きを生み出す活動であり，自分の感覚や体を通して身につける活動である。問いを生み出す実感的活動とは，その切実な思いや願いを実現させようと個人の問題から友達やＧＴと話し合ったり認め合ったりする中で新たな気付きや「もっと調べたい，こんなこともしてみたい」という共通の課題をもつ活動のことであり，対象とかかわる中で次の活動に生かす気付きが生まれる活動である。問いを生み出す実感的活動の展開とは，身近な対象の様相に気付き個人や共通の活動の見通しをもたせる「出合いの活動」と，対象の特徴をとらえたり新たな課題を見出したりする「試しの活動」，そして，対象の価値や自分自身の成長に気付いていく「本格的な活動」を連続的に位置づけた学習である。

学習プランの具体的構想

●　問いを生み出す教材化の視点

教材化については，知的な気付きに高め，問いを生み出す活動を繰り返し位置づけることを基本として次の３点から教材化を図る。

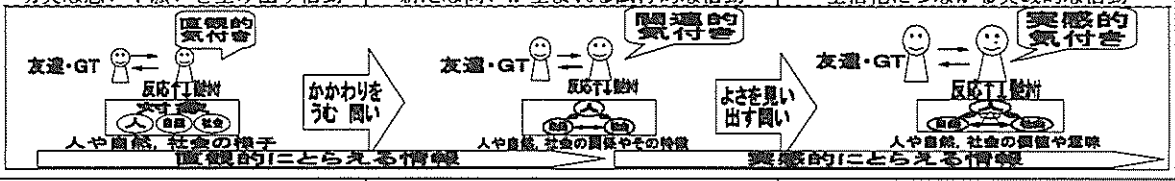
○価値性→　子どもが直接かかわることができる人を対象として，繰り返し働きかけることで思いや願いが膨らみ，対象や自分への知的な気付きが生まれること

○活動性→　身近な人とともに意欲的に活動すること によって課題を解決したり，自分なりの応えを見出すことができること

○相互性→　地域の人と活動したことを振り返ったり交流したりすることを繰り返すことによって，それぞれの過程で成果として，評価をすることができること

●　実感的活動を位置づけた活動構成

であう，ふかめる，いかすの学習過程を構成し，段階ごとに３つの実感的活動を位置づける。まず，「であう段階」では，実感的活動の「出合いの活動」を仕組む。ここでは，自らの思いや願いをもって対象の様子をとらえる直観的な気付きをもとに自分の考えをもつことができるようにする。そのために，身近な人や社会及び自然と五感を通してふれ合う活動や，追究の視点を示す学習ノートをもとにした活動を位置づける。また，体験した感想や調べたことをもとに，学習の目的やこれからの学習の方向性について話し合う交流活動を仕組む。次に，「ふかめる段階」では，実感的活動の「試しの活動」を仕組む。ここでは，対象を関係づけたり共通点や違いを明きらかにしたりして対象の特徴をとらえる関連的な気付きができるようする。そのために，追求の視点ごとにグループを編成しＧＴとともに，情報を収集したり，試行的に対象に働きかける活動を位置づける。そして，それぞれのグループで調べたことを，具体物や写真，資料を使って全体で話し合う交流活動を仕組んでいく。そして，「いかす段階」では，実感的活動の「本格的な活動」を仕組む。ここでは，対象のもつ意味や価値，自分自身の成長をとらえる実感的な気付きができるようにする。そのために，情報収集したことをもとに，明確な目的意識をもって新たに計画を立て，これまでの活動の意味や自分の成長を振り返り気付いていく，発表会や大会等の発信の場を仕組む。

	であう段階	ふかめる段階	いかす段階
ねらい	対象の様相に気付き，活動の見通しをもつ。 直感的な気付き	対象の関係や特徴に気づき，新たな問いを見出す。 関連的な気付き	対象の価値や自分自身の成長やよさに気付く。 実感的な気付き
実感的活動	**出合いの活動** 切実な思いや願いを生み出す活動	**試しの活動** 新たな問いが生まれる試行的な活動	**本格的活動** 生活化につながる実践的な活動
学習活動		
支援	※　対象との感動的な出合いを生み出すの体験の場 ※　活動の見通しをもつ場	※　ＧＴとのかかわりの場 ※　情報収集の場 ※　新たな問いを生み出す交流の場	※　ＧＴと繰り返しかかわる場 ※　発信の場（○○発表会，○○大会等）

【図１　問いを生み出す実感的活動を位置づけた基本的な活動構成】

3　指導の実際

第1学年　単元
わくわくにしこうえんたんけんたい！～にしこうえんはくぶつかんをつくろう～

(1) 単元の目標

1　西公園の自然の様子に関心をもち，意欲的に草花や生き物等の秋の様子を観察したりＧＴの方にインタビューしたりして，友達と協力しながら工夫して秋の様子や冬の変化を絵や文でまとめることができる。
2　西公園の「はくぶつかんづくり」を通して，草花や木の葉，木の実，生き物等の様子から季節の移り変わりや自然とかかわるよさ，友達と協力して観察する自分の高まりに気付くことができる。

(2) 単元の考え方

本単元のねらいは，西公園の秋の様子に興味・関心をもって意欲的に探検をしながら秋から冬への変化を体全体で感じ取り，季節の変化に応じて自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりすることができることである。ここでは，季節を自分の生活に取り入れて生活を変える生活の学びで展開する。そして，協働の姿としてより秋の様子がわかるように博物館をつくろうという目的をもとに，秋探しと調べたことをもとに博物館づくりを見直す活動を繰り返し，発信する活動を進め，友達のＧＴの考えや方法を取り入れ，新たな考えや方法を創造できる共創の活動を仕組む。そのため，まず西公園に出かけ，様々な秋の自然物を発見する「出合いの活動」や友達と協力して博物館づくりの見通しをもつ活動を構成する。次に西公園の秋の様子や冬の変化をとらえることができるようＧＴの方に質問しながら西公園の草花や生き物，木の葉や木の実さがしをする「試しの活動」を構成する。最後に友達と協力して西公園の秋の様子や冬の変化についてまとめる，西公園博物館づくりの「本格的な活動」を構成していく。このことは，体全体で秋から冬の自然に触れる体験を通して，季節の変化を自分たちの生活に生かす知的な気付きに高める上で大変意義深い。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１～３／10時
秋の西公園に出合い，これからの学習の計画を立てることができる。

(1) 秋さがしをする西公園の探検にいく。
(2) これからのたんけんについて話し合い，西公園博物館づくりの学習の見通しを立てる。

写真１　さがしたよ木の実

わたしは，ゲームをして，Ａ木のみは，どんぐりや赤いみ，きいろのみ，いろんな木のみをさがしてたのしかったです。にしこうえんには，いろんなあきがあるんだなとおもいました。

交流後→話し合いをした時，Ｔくんが，どんぐりを「しいのみ」といっていました。私がひろったみは，なんのみか，よくわかりません。Ｂだから，話し合いをしてなんのみか，同じ木のみをさがしている友だちと調べてみたいです。～中略～そして，みんなできゅうりょくして，あきのことがよくわかるように，はくぶつかんをつくっていきたいです。

資料1　　Ｉ児の学習ノート

第２次：４～７／10時
ＧＴとともに西公園の探検を進め，様々な秋の様子

第１次では，秋を探したいという思いをもとに西公園の探検をして，秋の様子に気付き，これからさらに調べたい思いをもとに探検の目的について見通しをもつことができることをねらいとしている。そこで，西公園で様々な秋の様子やＧＴとの感動的な出合いを生み出す実感的活動(出合いの活動)を仕組んだ。ここでは，生き物，草花，木の葉，木の実の視点ごとにまとめたカードをもとにネイチャーゲームを進めた。そして，探した時にカードに印をつけ，探したものを採取したり（写真１），見つからない時は，ＧＴに聞いたりした。さらに，名前や探したものの不十分さから，詳しく調べていきたい思いやもっと詳しくなって西公園の博物館作りを進めていきたいという見通しをもつことができた。その時のＩ児の反応が資料１の学習ノートである。

考察１

写真１や資料１のＡの記述からもわかるように，カードをもとに様々な木の実を意欲的に探し，赤や黄色に色付いた秋の様子に気付いている。これは，西公園の秋の様相（直観的な気付き）に気付いている姿であると考える。さらに資料１のＢの記述からもわかるように，くわしく調べていきたいという個人課題をもって意欲を高め，これからの探検について話し合うことで博物館づくりを進めていきたいという共通の課題をもっていることがわかる。これは，であう段階において出合いの活動を仕組み，秋探しの視点を示したカードの準備や個人の課題やこれからの活動や新たな課題を生み出す友達との交流が有効に働いたと考える。よって，であう段階において，秋探しの個人の課題を話し合いによって整理し共有化して新たな問いを生み出した出合いの活動を仕組んだことは，秋の様相をとらえる直観的な気付きができ，さらに探検を進めていきたいという意欲を高めながら博物館づくりをし

を観察し，秋や冬の様子や，秋から冬に季節が変わる様子をとらえることができる。

(1) ＧＴとともに秋探しの探検に行き，探検をもとに秋の特徴について話し合う。

写真2　木の実を食べた

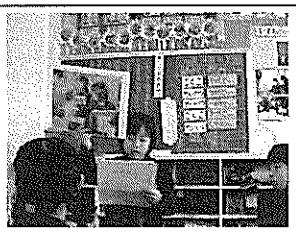


写真3　この赤い実は

探検の後(I児のはっけんノートより)

わたしがひろったみは，イヌマキでした。木のみグループの先生にきいたら，Ｃこのみは，秋になると赤くなって，たべられるみだそうです。私はたべられるなんてすごいと思いました。そして，そのみをとりがたべにくるそうです。

交流の様子

Ｃ１　大きなどんぐりは，くぬぎのみです。

Ｃ２　この赤い実は，イヌマキといって，食べれます。鳥も食べにくるそうです。（Ｉ児）

Ｃ３　いちょうにも，ぎんなんという実がなって食べれます。（木の葉のグループの意見）

Ｃ４　イヌマキや銀杏は，食べれる所がにてるね。

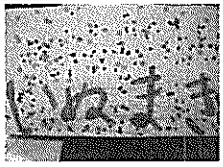
交流後(I児のはっけんノートより)

Ｄみんなが探した秋には同じところがあっておもしろいなと思いました。いろんなたのしいみがあることもよくわかったのかもっとさがしてみたくなりました。秋のことでくわしくしらべたことを，はくぶつかんづくりであらわしたいです

資料2　　交流の様子とI児のはっけんノート

第３次：８～10／10時

西公園のはくぶつかんづくりを通して，秋から冬への季節の変化を生かすよさに気付き，博物館をつくった達成感や成就感を味わい，自分の高まりに気付くことができる。



資料5　展示物

はくぶつかんづくりのべんきょうをして，木のみが食べられたり，虫がさむい中でも生きていたりしているので，秋っておもしろいなと思いました。はくぶつかんでやってみた，木のみをさがしたり，こまをつくったりして家でもたのしい秋にしたいです。

資料４　　I児の学習ノートより

ていきたいと見通しをもつ上で有効であったと考える。

第２次では，西公園の草花，木の実，木の葉，生き物等について調べたことを話し合い，秋の特徴や冬の変化に気付き，秋や冬の様子をさらに調べていく課題をつかむことをねらいとしている。そのため，秋探しの視点ごとに少人数のグループを編成し，ＧＴとともに秋探しの探検をしながら西公園の草花や木の実，木の葉，生き物の説明を聞いたり意欲的に質問したりする実感的活動（試しの活動）やグループで調べたことを交流する場を仕組んだ。

考察２

写真２，３や資料２のはっけんノート Ｃ の下線からもわかるように，Ｉ児は，赤い実がイヌマキの実で，食べられることに驚いたり秋になるとたくさんの実が赤く色付いて落ちる秋の様子をとらえたりすることができた。さらに，具体物や写真，資料を使って説明しながら他のグループと交流を仕組み，発表した秋の様子を板書に整理したことで，木の実のグループにいたＩ児の学習ノート，資料３からもわかるように，秋になると葉や実が色付いて落ちたり，種をつけたりしている秋の特徴を他のグループの秋の様子とつなげて気付く（関連的な気付き）ことができた。そして，博物館づくりをさらにより分かりやすいものしていくことができた。これは，他のグループの秋の様子をつなげて共通性を見いだしながら，秋の特徴に気付いている姿であり，目的意識をもとに少人数のグループを編成し，秋探しの視点ごとにＧＴとの探検を仕組んだことが有効に働いたからであると考える。よって，ＧＴとともに少人数のグループで探検を仕組んだ試しの活動と具体物をもとに交流を仕組んだことは，西公園の秋の特徴や秋から冬への季節の変化をとらえる関連的な気付きに高める上で有効であったと考える。

第３次は，西公園の秋と解説書を展示する博物館づくりを通して，西公園の秋の自然の様子や秋から冬に変わる様子をまとめた達成感や自己の高まりを味わうことをねらいとしている。そのために，はっけんカードをもとに，西公園の草花や木の実，木の葉，生き物についての説明を名前や採取した場所，秋から冬の様子の点から解説書にまとめる活動や実際に展示したものを見学し感想をもらう活動を仕組んだ。

考察３

資料４からもわかるように，Ｉ児の反応から，自分自身が博物館づくりを繰り返す中で，秋の様子に気付くことから，様々な実がなったり色付いたりする秋の特徴をとらえ，秋を生かして楽しむ自分に高まってきたことを実感し，さらに楽しい秋をつくりたい思いをもっている。これは，秋のよさに気付いて生活の中に生かしていこうとする姿である。よって，博物館づくりという本格的活動を仕組むことが有効に働いたと考える。

【全体考察】

考察１からもわかるように，ネイチャーゲームを通して秋探しの探検をする西公園の教材化を図ったことは，様々な草花や木の実，木の葉，生き物等の秋の様子を直観的にとらえ，これからの活動の見通しをもたせる上で有効であったと考える。また，考察２，考察３からもわかるように，ＧＴとともに探検をしながら秋の様子に気付き，様々な自然の様子を関連的につなげて秋から冬の季節の変化に気付くことができた。これは，視点ごとのグループ編成をもとに，秋の様子や秋から冬の季節の変化をとらえＧＴとの探検や自分の高まりを実感する博物館作りの活動を位置づけた活動構成が有効であったからだと考える。課題としては，知的な気付きや問いが生まれる学習過程の類型化を図ることである。

道徳学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　道徳的判断力を高める道徳学習

1　道徳教育での学ぶことと生きること

「生きる」ということから，道徳教育を考えるとき，人として「いかに生きるべきか」という方向性が含まれる。道徳教育は，人間が本来もっている願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し，その基盤となる道徳性を養う教育活動である。道徳性とは人間らしいよさであり，道徳的諸価値が一人ひとりに統合されたものである。道徳的価値とかかわって，他者の存在を意識し，状況に応じて様々な要因を分析，吟味し，自他にとって最善のことを判断していく力が不可欠である。

道徳の時間においては，自尊感情を持って自分自身を大切にし，他者とともに助け合ったり，自然の中で生き物を見つめ自他の生命の大切さを感じたり，社会規範を守る大切さをとらえたりすることが重視される必要がある。道徳の時間に「人間の学び」を位置づけ，対象となる他者と自分の生き方を比べて，課題を見付け，ともに練り合い，追究することで，自己を深く振り返り，なりたい自己像を描き自分の生き方を向上する学びを展開する。

2　道徳部主題についての説明

道徳的判断力とは，様々な場面で道徳的価値をもとに善悪を見極め，よりよい方を選択する能力である。問題に対処する正しい事実判断，実践の方向づけの価値判断，そして，行為想定による結果予測，さらに道徳実践に向かう意志決定などの形として現れる。道徳的判断をする際，心理的要因として道徳的心情が密接にかかわる。

道徳的判断力を高めるとは，道徳的場面で，様々な状況を分析，考慮する根拠が増えることである。その根拠が，他律的から自律的な視点へ，対自的から対他的な視点へと広がりと深まりが見られる。具体的には，次の３つの側面でとらえる。①問題場面において自分，他者などの視点を考慮して，心理的要因を表出，分析，検討する姿，②選択する根拠が拡充する姿，③学習した道徳的価値からなりたい自己像を描く姿である。内面を振り返る内省力，状況把握力，自己更新力などが必要である。

道徳的判断力を高める道徳学習とは，道徳的場面において自分や他者の行為やその根拠の共通点や差異点から，様々な要因を分析し，検討して道徳的価値のよさから，よりよい生き方を選択していこうとする道徳学習である。自分を見つめる自己照射性と多様な見方・考え方を求める多面性による価値追求で展開する学習である。

- ○　他者の生き方をもとに，自分の生き方について課題をもち，取り入れたい価値を見いだし，自己の生き方を高めていこうとすることができる子ども　（学ぶ意義）
- ○　人の弱さに共感し，それを乗り越えた強さ，気高さに気づき，道徳的価値の大切さを理解する子ども（能力）
- ○　自分の中にも他者と似た心情面の共通性があることに気づき，積極的に生かしていこうとする子ども（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための道徳学習の基礎基本】

意義	他者の生き方について学びたいという意欲をもち，そのすばらしい生き方から，自分の生き方に取り入れる価値を見いだし，自分の生き方を高めていこうとすることができる。				
		観点	低学年	中学年	高学年
能力	A能力 実体的学力	道徳的知見	道徳的知識		
			道徳的な問題場面において，主人公の行為や考えの善悪の区別から自分の生活経験とつないで考え，道徳的価値のよさを感じることができる。	道徳的な問題場面において主人公と自分の心情や行為を比べて考え，多面性，関係性といった道徳的価値の本質について自分とのかかわりで理解することができる。	道徳的価値を多面性，関係性などの視点で分析し，理解し，自分なりの解釈を加えて，「正直とは」などという答えを見出し，自分の生活に生かしていこうとする。
	B能力 機能的学力	道徳的判断力	状況把握力		
			動作化などをもとに自分を中心にしながら，表情などから他者の様子を観察し，他者の状況や心情を推し量ることができる。	役割演技などをもとに，自分と他者という関係性をもとに，対象を広げて現在の状況を的確に把握することができる。	自分と他者という関係性，規範性など多面的な視点で主人公が置かれている状況を把握する。 行為の結果予測をすることができる。
			内省力		
			道徳的な事象に対して，資料の主人公に共感する中で，自分の経験を振り返り，自分の中にも人間としてのすばらしさがあり，自分の傾向性について感じることができる。	道徳的な事象に対して，自分の経験と結んで考え，道徳的価値から見て，判断することができる。 学んだ生き方に対して取り入れたいところを吟味することができる。	
		コミュニケーション力	友達の考えを自分の考えとの共通点をもとに共感的に受け止め，共通点と差異点について簡単な理由をもとに意見を述べることができる。	友達と自分の考えの共通点と差異点を明らかにし，生活場面と結びつけた根拠から，差異点について質問し合い，自分の考えをまとめることができる。	友達の考えを受容し，自分の考えとの共通点と差異点を明らかにし，生活場面と結びつけた根拠から，道徳的な見方，考え方を広げ，新たな自分を発見することができる。
自信		意欲態度	自己更新力		
			モデルの行為や考えに感動したり，共感したりして，自分に取り入れて，まねしてみようとすることができる。 （模倣的取り入れ）	生き方モデルとのかかわりによりその心情や考えの中に自己との共通性を見付け，自己の生き方を方向づけることができる。 （生き方指針としての取り入れ）	生き方モデルとのかかわりにより共通性，差異性を見いだし，自分で選択，咀嚼して生き方に生かしていこうとすることができる。 （自己内変革としての取り入れ）

Ⅱ　相応的な対話活動の展開

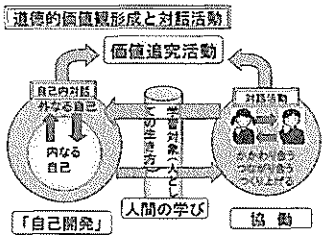
道徳部　　木　下　美　紀

1　副主題の意味

相応的とは，相手の必要としている求めに応じて，多様な価値観を与え与えられることである。経験の有無から他者の情報で追体験できたり，さまざまな見方を知り道徳的な見方，考え方が広がったりすることである。

対話活動とは，他者との共通点や差違点から自分を見つめ直す，自己内対話を促進する活動（自己照射性）であり，他者と様々な情報や考えを交流し（多面性），相互に練り合げる，価値を追究する活動である。話し合う相手は，友だちであり，話し合う内容は，資料中の主人公の行為や考えに含まれる道徳的価値である。

相応的な対話活動を位置づけた道徳学習プランとは，他者の考えを参考にしながら自分の生き方を見いだしていこうという課題のもとに，１つの道徳的な場面に含まれている道徳的価値を多面的に見つめる活動である。そこで見いだした情報を自己内で比較検討しながら判断していく活動を繰り返して，道徳的価値を自覚していく共育の視点に立った学習プランである。上図のように主人公の生き方を学習対象とし，自我関与を図りながら，友達と相互に交流する中で自己の道徳的価値の概念をそれぞれの子どもが構築し，「自分はこうありたい」という具体的な自己像を描くことができる。



2　学習プランの具体的構想

●相応的な対話活動を位置づけた教材化の工夫

①葛藤場面があり，内容に価値が多様に含まれていて，判断の根拠が多様に出るもの
②道徳的問題場面に緊迫感があり，異質な意見の友だちと対話して考えを聞きたいと思う用件を含んだもの
③子どもの考えを越える新たな視点が加わる主人公の生き方が描かれているもの

取り扱う資料は，上のような視点で選ぶ。他者の考えを参考にせざるをえないような強い求めの生まれる教材を選定する。適切な資料がない場合は，自作や改作を行う。

●　相応的な対話活動を位置づけた活動構成の工夫

（１）子どもの意識に応じた活動構成の工夫

中・高学年では，人間を多面的に取り上げるということで，複数時間で構成する。第１次で，主人公の行為や心情面での是非から課題をつくる。第２次で，多面的な対話活動により自他共によりよい方を判断し，自己内対話により自分なりの課題解決をするという問題解決的な活動を構成する（図１）。

（２）内容の重点化

道徳的判断力を高める道徳の時間の重点内容としては，１－(5)正直・誠実，２－(2)思いやり・親切，２－(3)信頼・友情，３－(2)生命尊重などがあげられる。

（３）相応的な対話活動が生まれる対話相手の工夫

（ペアリング→グルーピング）小集団→大集団

道徳的場面での主人公の行為や考えの是非を判断し，小集団から大集団へという形態をとる。道徳的場面の判断の根拠の子どものノート記述を分析し，広げたい道徳的見方・考え方のペアリングをする。ペアリングの視点は，立場の違い，経験の有無，気持ちの強さの違いなどを考慮し，異質相手を設定する。大集団へは，道徳ノートをもとに小集団で未解決の問題を解決したり，付箋紙を活用し，価値のとらえを確かにする。

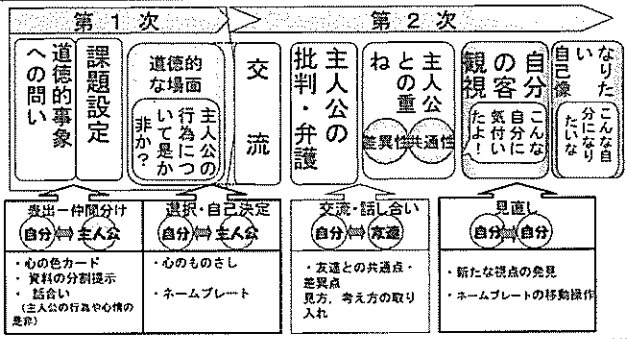
（４）相応的な対話活動が生まれるための課題設定の工夫

課題設定の工夫としては，以下の３点を考える。

①他者との考えの相違が起こるような問題場面を浮き立たせる教材との出合わせ方を工夫する。
②道徳的場面における主人公のとった行為の是非（賛成か反対か）について自分の考えをもたせた上で全体交流し，行為や考えのズレ，経験のズレ，根拠のズレなどが起こるようにする。子どもの実態を把握しておく。
③実際に道徳的問題場面を設定し，自己決定していくようなシミュレートする役割演技など，話し合う必然性をもたせる場の工夫をする。

（５）対話が活性化する教具の活用

視覚的に判断の根拠をみる心の移動表（板書），対話前後の変化を示す色違いのネームプレート，対話の手順を書いた対話カードなど



【図１　相応的な対話活動を位置づけた道徳の時間の基本的活動構成】

【表１　対話活動（小集団から大集団へ）の内容と方法】

形態	ねらい	課題意識	手だて
小集団	・自分の判断の根拠の表出 ・道徳的見方・考え方の拡充 ・道徳的価値の主観的とらえ	・相対する立場の根拠の詳細について ・経験の有無による課題 ・心の移動表の数値の違いについて	・子どもの価値への傾向性を生かすペアリング→グループピング （異数ペア・同数ペア） ・対話の必然性をもたせる場の設定（シミュレート） ・立場討議
↓	・ねらいとする道徳的価値への収束（価値の共有化） ・小集団での疑問の解決 ・道徳的価値の客観的とらえ	・小集団での未解決の問題の解決 ・多様な見方，考え方の追究 ・価値の共有化	・場の設定 ・グループの課題の明確化 ・人間の弱さの面を引き出す発問 ・共通点を引き出す発問
大集団			

3　指導の実際

第4学年　主題名

どちらを選べばいい？
～友達との約束か?家族との食事か？～

(1) 主題の目標

1　道徳的問題場面における自分なりに決定した行為やその根拠について対話活動を通して，自分の心について正直であることの大切さについて見直していこうとすることができる。
2　資料『やくそくの本』を通して，家族との食事に行きたいなどという気持ちを乗り越えて，約束したことを守ろうとする大切さをつかむことができる。

(2) 主題の考え方

人間の学びとして展開する本主題では，友だちに正直に接することができているかという課題意識をもって，主人公や友達との共通点や差異点から自分の正直についての見方・考え方を吟味し，より高い価値（正直）に向けて実践していこうとすることをねらっている。そのために，主人公の行為や考えの是非とその根拠について検討，分析するような対話活動を小集団から大集団として位置づけ，他者とともに道徳的価値を追求させたい。そうすることで多様な価値観を拡充させ，共に道徳的価値をとらえ，さらに，自分の中の価値観を再構築させるという共育としての方法論を展開する。具体的な活動としては，第１次で①正直についての気がかりをもたせるため，１枚の絵から自分の行為や考えの傾向性を見る活動，②道徳的場面で立場を決めてその根拠を表出し，自分なりに仲間分けする活動，第２次で③小集団から大集団へと交流する活動，④道徳的な価値を把握するための主人公の生き方のよさを追求する活動，⑤なりたい自己像を描くために，今までの正直さを吟味する活動を設定する。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１／２時
友だちに対する正直な行為について振り返り，友だちとの約束を守ることなど正直な行為や気持ちがもてているか自分なりに確かめ，課題について話し合う。

写真１　友達との約束を守れていたかな？

私の気持ちの強さは「２」です。なぜなら，自分の都合で，守れないときがあるからです。
そんなときは，何となくすっきりしません。
次の時間は，自分の経験をもとに友達と話し合って相手の思っていることを自分の考えと比べながら，約束したときに大切な心について考えたいです。

第２次：２／２時
自分と主人公や友達の気持ちや行為を比べて，共通性や差異性から自分の今までの正直さについて吟味し，友達に正直に接しているか話し合う。

(1) 資料『やくそくの本』前半部分から，友だちのところに本を届けるか，家族と食事に出かけるか迷う場面で，自分はどうするか話し合う。

本を届ける　「心の変化表」で自己評価２
（その理由）
私は，なぜ，友だちとの約束を守らないで，任せられている事もほったらかしてまで食事に行くのか分かりません。おばあちゃんとは，１年に１度しか会えないけれど，約束は一生残るからやっぱり行かないといけないと思います。

資料１　自分の傾向性（自分だったら？）Ａ児（対話前）

第１次は，２時間を通して追求する「友だちと約束をしたとき大切な心は何か」という課題をつかませることをねらいとしている。そのために，１枚絵をもとに４段階で心のものさしを操作させ，友達に正直な気持ちで接しているか自己評価させた（写真１）。そして，資料『やくそくの本』を分割提示した。この資料は，入院中の友だちに本を届ける約束をした主人公が，祖母と一緒に食事をするか迷ったが，本を届けるために雨の中飛び出して行くという話である。前半の迷う場面で「自分だったら」と考えて記述させ，次時につないだ。

考察１

Ａ児は，心のものさしを操作して，友だちとの約束について自己評価し，次時の課題を解決したいという道徳的価値の理解に向かう課題意識を高めることができた（写真１下線部）。これらは，１枚絵から心のものさしで自己評価させたこと，多様な考えに触れさせたことにより，正直誠実に対する自分の傾向性に気付き，課題意識が生まれたと考える。

第２次では，自分や友だちと主人公の気持ちや行動を比べて，共通性や差異性から正直さをもとに道徳的な見方や考え方を吟味し，なりたい自己像を描くことをねらいとしていた。
前時までにＡ児は，資料１のように，心の変化表では，「本を届ける」気持ちの強さは「２」と自己評価し，約束を守ることが大切だという規範性から根拠を記述していた。それを相手への視点（関係性）をもたせて相手や自分の心に正直である正直誠実の本義に気付くまでに高めたいと考えた。そこで，相手への視点をもつＢ児とペアリングした。Ｂ児は，心の変化表では，「家族と食事」の気持ちの強さは，「２」としていた。また，気持ちの強さが違う友だちと交流したいというＡ児の願いより，その他の子どもは，「本を届ける」「家族と食事」の「４」の異数ペアの子どもをグルーピングした。
「求める段階」では，①家族との食事，②本を届けるの２

A　　児	同グループの子ども
A１（本を届ける） 真理子さんは，学校に行きたいのに，入院して１ヶ月間も我慢していて元気になってほしいと思うから，私は，本を届けないといけないと思います。（規範性）	C１（家族と食事） でも，おばあちゃんとは，１年に１回しか会えないんですよ。だから，家族と食事の方がいいと思います。
A２　その意見についてですけど，１年に１回しか会えない寂しさもあると思うのですが，なぜ食事がいいと思うんですか？真理子さんは待っているんですよ。	C２（家族と食事） それは，ずっとおばあちゃんと会いたかったからです。私もおばあちゃんに会いたいと思うから。
	C３（家族と食事）（司会） ぼくは，お母さんの経験だけど。友達と遊ぶ約束をしていて，おばあちゃんが，たまたまこのように来ていて，食事をせずにおばあちゃんが帰って，１ヶ月もしないうちに，亡くなって，あのときおばあちゃんと食事に行っておけばよかったなあって話していたので，やっぱりおばあちゃんと食事の方がいいと思います。おばあちゃんをとても大切に考えているから，ぼくは，やっぱり行きたいと思う。
A３　でも，離れているから，お手紙や電話で話をすればいいと思います。	C４（司会） みなさんに質問ですけど，１年に１回しか会えないおばあちゃんと食事がしたくなりませんか？
A４　おばあちゃんも確かに大切だけど，真理子さんに少しでも明るくなってほしいから，やっぱり約束した真理子さんに届けてあげたいです。（関係性・対他）	C５（司会） でも，やっぱり手紙や電話では，おばあちゃんの気持ちもよく分からないので，少しでも，会って食事をした方がいいと思いませんか？

資料２　異数ペアによる対話活動（小集団）一部抜粋

対話活動Ⅱ（大集団）

（中略）

C６（本を届ける）A児
どちらも大切だとは思うけれど，私たちの班で話し合ったのですが，真理子さんは，学校に行きたいのに，入院して１ヶ月間も我慢している中で元気になってほしいと思う気持ちから，太郎くんは約束したと思うので，その約束を守って，おばあちゃんには，一言言って真理子の所に行ったら，真理子もうれしいし，少しは元気になるんじゃないかと思います。

T１　どうして約束が大事なの？

C７　A児
約束は自分たちで決めた大切なことで，自分の心もすっきりしないし，やっぱり病気の真理子を励ましてあげたい。だから，それを守るのが大切だと思います。

資料３　対話活動（大集団）　一部抜粋

⇩

本を届ける「心の変化表」自己評価３
（その理由）
真理子さんに少しでも明るくなってほしいという真理子さんを思う気持ちがとても強くなりました。しかも約束を守ることで友情が深まると思います。約束は，相手と心と心をつなぐかけ橋みたいなものだと思いました。

資料４　自分の傾向性（自分だったら？）A児（対話後）

(2) 資料の後半を読み，主人公の行為や考えについて話し合う。

(3) 心のレベルで今までの自分の行為や考えについて見直し，なりたい自己像について記述する。

私は，友達を思い，約束を果たすことが大切だと思うし，何よりも自分の気持ちに正直になることが，本当の友達への思いだと思う。（中略）今日の対話で，自分の友達への思いや，自分が友達に対して正直になれているかなど自分自身に例えて考えることができました。相手のことを思って正直になれる自分になりたいなあと思います。

資料５　課題を解決し，なりたい自己像を描いたA児

つの立場を決め，その根拠について話し合った（資料２，３）。家族を大事にする気持ちと，相手への正直さという２つの心情面での話し合いが進んだ。経験から意見を深めていた。

考察２

A児は，資料２C３の母親から聞いた経験を聞き，おばあちゃんの存在を大切にすることも認めながら，真理子さんを思う気持ちという関係性を視点に入れ，対他的な見方ができるようになっている。そして，友達との差異性から，おばあちゃん（家族）と真理子さん（友達）の視点をあげ，共通点としては，相手を思う心情に気付いた。これは，問題場面における状況下でさまざまな要因を表出，検討する姿だととらえる。これらは，小集団の対話活動として，判断の立場やその気持ちの強さ，経験の違う異数ペアのペアリングを仕組み，対話させたことにより，多様な考えに触れて，道徳的価値に対する見方，考え方を広げることができたと考える。

そして，他の班の友達の考えを聞いてさらに深めたいという子どもの願いをもとに，全体に話合いを広げていった（資料３）。（対話活動Ⅱ－大集団）。価値観を分かち合うという位置づけである。資料３のように小集団での価値のとらえを出し合い，自分の気持ちの落ち着くところを話し合わせた。

考察３

A児は，大集団では，小集団の意見をもとにした対話を通して，相手に正直であることの大切さについて自分なりのとらえができている（資料４）。さらに，資料５のように課題を解決し，なりたい自己像を描くことができた。これらは，道徳的価値を把握し，道徳的場面で選択する根拠が広がる姿だととらえる。これらは，大集団で，小集団で対話した内容を吟味し，相手という共通の視点を入れたことが有効だったと考える。しかし，対話の時間を確保するという課題が残った。

【全体考察】

教材化の工夫として，「友達との約束」か「家族との食事」など，葛藤場面があり，どちらの立場にも価値があり，その選択に多様な価値が含まれ，その選択について他者の意見を参考に考えたいと思える資料を選定，活用することが必要である。また，資料の分割提示することによって，「自分だったら」という思いが生じ，他者の考えを聞きたいという強い求めが生じる。活動構成の工夫として，対話活動Ⅰ（小集団）では，道徳的価値への傾向性を分析し，対自的から対他的な視点など広げたり深めたりしたい道徳的な見方・考え方を個に応じて設定し，判断の立場の違い，経験の違い，選んだ気持ちの強さなどという視点で異なる意見の子どもをペアリングすることが大切である。その際，視覚的に自己や他者の心情の立場やその心情の強さを表すことができる心の移動表（板書）が必要である。対話活動Ⅱ（大集団）では，小集団で対話した内容から共通性をもとに話し合わせることで道徳的価値を把握させることができた。課題としては，話合いの視点（論題の大切さ）について対話カードを活用させることと，時間配分という点があげられる。

理科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自ら科学的に追究する理科学習

1　理科での学ぶことと生きること

小学校の理科教育では，科学的な見方や考え方を育むことをねらいとしている。このことは，自然に対する関心・意欲・態度や問題解決能力，科学に裏付けられた確かな知識・理解をバランスよく身に付けることである。また，それらを繰り返し使うことにより，自然を知るおもしろさや科学的に追究するよさを実感することである。これらの力を身に付けることは，身の回りの出来事を正確に判断したりものごとを効率的に処理したりするなど，今後を生きていく上で発揮できる力や自信を身に付けていくことにつながっていく。

このような力や自信を身に付けるためには，結果としての知識や現象としての楽しさだけに興味をもつのではなく，事象の要因や関係をじっくりと考え，きまりを導き出すことが大切である。このような「考え，発見するよさ」を子ども自ら味わうためには，科学的に問題を解決する過程を重視した学習を展開する必要がある。

2　理科部主題についての説明

科学的に追究するとは，自己の考えを明確にもち，実証性と再現性から考えを見直すことと，考えを他者とともに練り上げることによって，多くの人から承認される客観性のある考えを子ども自らがつくることである。

自ら科学的に追究するとは，自然を対象とした問題解決の過程で，自分の考えを明確にもち，科学的な方法を使って問題を調べたり分析したりした結果をもとに，より多くの人から承認されるような自然事象に対する自分自身の見解をつくっていくことである。

そのためには，子どもが科学的な追究の方法を使って価値あるきまりを見つけ出したり，新たな問題を解決することで科学の方法のよさを実感したりすることが大切になってくる。

ここでいう，科学的な方法とは，①事実をもとに要因を抽出する，②条件を制御して要因を操作する，③事象に関する情報は，定量化し，数値化したデータで表現して分析することである。

この科学の方法を問題把握，実験による検証，結果の分析という追究過程の中で使うことにより，自然の事象に対する問題を解決し，自らの考えを実証性・再現性・客観性を有して説明できるのである。

自ら科学的に追究する理科学習とは，自然を対象とした問題解決の過程で科学的な追究の方法を使ってきまりを見出し，それを適用させることである。このことで，実証性・再現性から自分の考えを明確にし，客観性を有したより多くの人に承認される考えに自分の考えをつくり変えることができるのである。

特に，科学的な追究方法のよさを実感するためには，実証性や再現性を大切にした追究だけでなく，他者とともにきまりをつくり，多くの人から承認されるといった客観性を大切にしていく必要が出てくる。そのためには，実験を通してもった考えを他者と比較することで，客観性の視点から見直し他者に承認される考えにつくりかえるという科学の手順を経験していく必要がある。

- ○　科学的な追究のよさを感じる子ども（学ぶ意義）
- ○　問題解決の過程において，科学的な追究を行い，自然のきまりを獲得する子ども　（能力）
- ○　自然のきまりを導きだした自分に気付き，それらを使っていこうとする子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための理科の基礎基本】

意義	自然事象の中から問題を見出し，自ら課題を設定することで，これからの追究に対して，期待感をもち，きまりや規則性を追究していく中で，科学やその方法のよさをとらえ，科学の必要性や有用性を感じる。						
能力			観　点	3　年	4　年	5　年	6　年
	A能力 実体的学力		規則性の知識理解	自然事象の共通性や性質や特徴をとらえる。	自然事象の変化，規則性，関係をとらえる。	自然事象の変化の要因と規則性をとらえる。	自然事象の相互関係・規則性をとらえる。
			観察・実験の技能	器具や材料を選び安全に注意し使う。	器具や材料の特性を知り正しい操作をする。	適切な器具や材料を使い，要因の意図的な操作や仮説を視点としての観察ができる。	
	B能力 機能的学力	科学的な追究	関係づけ	自然事象から問題を見出し，問題に対する自分の考えを明確にもち，正確に比較する方法を考える。		自然事象から問題を見出し，問題に関わる要因を抽出し，要因ごとの条件を設定した実験・観察方法を考える。	
			結果分析	追究問題を明らかにするために、課題に何度も取り組み，結果を定性的に導き出す。複数の考えを比較したり関係付けたりし，新たな考えをつくり出す。		追究問題を明らかにするため，繰り返し実験や観察を行い，条件ごとの結果を導き出す。多様な考えを比較・分類したり，複数の要因や考えを検討したりして考えをつくり出す。	
自信	自然のきまりや規則性を見つけたり使いこなしたりしていく自分に気付いたり，それらを使って，自然事象に働きかけることで，自然事象に潜む，きまりや規則性のよさやそれらを見出すことのできる科学的な追究方法のよさに気付いたりする。						

Ⅱ　考えの客観性を高める相互検討活動による学習の展開

理科部　　清　水　隆　一　郎

1　副主題の意味

考えの客観性を高めるとは，自分の考えがより多くの人から承認が得られる考えになるように，問題に対する自分の考えを多様な視点から検討を加え，つくりかえようとすることである。

相互検討活動とは，同じ考えや違う考えごとに，ペアやグループを構成し，どの考えが妥当なのか，くわしく調べたり，話し合ったりする活動のことである。

考えの客観性を高める相互検討活動とは，自分の考えを多様な視点から見直すために，共通グループでの実験計画や個人実験を行い，課題別グループで検証実験や実験データの比較を行う一連の活動のことである。ここで言う多様な視点とは，事象に関わる複数の要因や方法のことである。これら複数の要因や方法を比較し，条件統制の仕方を考え，事象に関わる要因の決定について，ひとつの要因や方法のみの追究を行うのではなく，他の要因や方法についても比較・実験を行い，自分の考えを繰り返し検討していくのである。

相互検討活動における，共通グループと課題別グループでの実験・比較活動の目的を，①考えを明確にし正確性を高める共通グループでの活動②考えを比較し客観性を高める課題別グループでの活動を設定し，内容や段階によって効果的に位置付けるようにする。

考えの客観性を高める相互検討活動による学習の展開とは，子どもが事象に対する多様な考えをもつ教材化を行い，事象に対する考えを明確にし，実験の結果を分析し，きまりや方法を使うことで，科学的な追究のよさを実感していく学びである。具体的には，単元の「追究する」段階で，きまりをつくり出す相互検討活動，「いかす」段階で，きまりや方法を使い，確かめていく相互検討活動を行い，それぞれの段階の相互検討活動において，実験データカードによる支援を行っていく。

2　学習の具体的構想

●　教材化の条件

① 複数の要因に着目でき，要因が特定できないことで複数要因を追究する必然性が生まれるもの

② 結果を出すために，要因の変化に対する数値化を行う必要性があるもの

③ きまりを適用することで，複数の考え方を比較し，新たな考えを獲得できるもの

●「追究」「いかす」段階での相互検討活動

(1)「追究する」段階での相互検討活動

この段階では，科学的な追究方法を使って，自然のきまりを見出すために，①条件制御・数値化を目的とした共通グループでの実験計画，②個別の実験，③客観的な分析により，要因を明らかにすることを目的とした課題別グループでの結果の比較を設定していく。

(2)「いかす」段階での相互検討活動

この段階では，科学的な追究方法を使い，そのよさを実感するために，①きまりや方法を確認し，それらの使い方に対する見通しをもつことを目的とした共通グループでの実験計画，②結果をもとに考えを承認することを目的とした課題別グループでの比較を設定していく。また，ここでは，きまりを活用できる事象提示を行い，単にきまりを適用するだけではなく，子どもが解決方法を思考できる事象を提示していくようにする。

●　相互検討活動での支援

相互検討の場において，「操作するすべての要因」「変化させる要因」「変化させない要因」「データの分析」という項目で子どもが考えを整理できる実験データカードを用いる。

段階	出合う		追究する			いかす		
問題解決過程での相互検討	問題把握→予想・仮説 相互検討活動		実験計画と実験→結果分析・再実験→きまりの発見 相互検討活動			新たな問題→見通し→解決 相互検討活動		
ねらう力	共通の求めをもつ意欲	考えの明確化 問題認識	仮説設定，観察・実験における条件統制と数値化	客観的な分析による要因の決定	きまりに対する知識・理解	明確な見通しによる自信 考えの共有と適用		
ｸﾞﾙｰﾌﾟ	全体	全体	共通グループ←個人→課題別グループ		個人	全体	共通グループ	課題別
子どもの活動	事象に疑問や問題をもつ	事象から要因を抽出する	自分の考えをもとにグループで計画し，実験で結果を出す	他者の考えや仮説と比較し客観的考えを創る	自分の考えをまとめ，きまりを捉える	新たな事象から問題となる要因を抽出	追究してきたきまりや方法を使って解決方法を予想	解決方法を発表する
支援	事象提示	試しの活動	実験ノートの提示	実験ﾃﾞｰﾀｶｰﾄﾞ	全体交流	事象提示	データカード	全体交流

【図１　相互検討活動を位置付けた基本的な活動構成】

3　指導の実際

第5学年　単元

カチコロチャレンジコンテスト!
～動きの秘密をさぐろう～

(1) 単元の目標

1　自分の挑戦するコンテストの課題を跳ね返る強さやリズムに着目して選び，自分の作りたい動きをつくり出すために，要因に着目して調べ，おもりの動きの規則性を見出すことができる。
2　ふりこの動きや衝突の規則性を定量的に調べ，振り子の周期は糸の長さのみで変わることやおもりを衝突させるとき，おもりの重さを重くしたり，速さを速くしたりすれば，ものを動かす力が強くなることをとらえることができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，おもりの重さや動く速さなどを変えてものの動く様子を調べ，ものの動きの規則性についての考えをもつようにすることをねらっている。また，ふりこの周期と衝突を調べる活動を選択，追究し，ものの運動にかかわる条件を制御しながら，変数を変化させて，その規則性を追究するよさを実感することをねらっている。

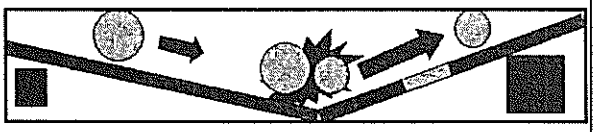
そこで，ふりこや衝突の性質を利用したカチコロチャレンジコンテストを教材化する。カチコロチャレンジコンテストとは，きまりを利用したカチカチボールやコロコロボールをチームの中で選択し，動きのきまりを使ってチームで高得点を目指していく遊びである。また，単元の追究する段階で，科学的な方法をもとに，きまりを見出す相互検討活動を位置付け，いかす段階において，新たな事象に出合い，きまりを使う見通しをもち，きまりを使って問題を解決する相互検討活動を位置付けた活動を構成する。具体的には，追究する段階では，共通グループで，条件統制と数値化を行った後，個人追究を行い，課題別グループで要因を決定する相互検討活動，いかす段階では，共通グループで見通しを作り，課題別グループで追究していく相互検討活動を設定し，実験カードによる支援を行っていく。

(3) 学習の流れと考察

第１次「出合う段階」：１～２／11時
カチコロボールを使った予告ゲームを行い，動きに関わる要因に気付き，コンテストで操作していく要因を話し合い，学習問題を設定する。

【カチカチ予告ゲーム】
※　長さと重さの違う３つのふりこを用意し，10 往復が，ちょうど 10 秒になるように３種類の重さと糸の組み合わせを選び，ふれはばを自由調整して，時間を計り，10 秒に近づけるゲーム

【コロコロ予告ゲーム】



※　縦に並んだ３つの的のどこに飛ばす球を止めるかを予告してから，おもりの重さとおもりをころがし始める位置を自由に選び，おもりを衝突させ，予告した的に止めるゲーム

【資料①　カチコロボールを使った予告ゲーム】

第２次「追究する段階」：３～８／11時
コンテストでの動きを決める要因を条件を統制して調べ，動きのきまりをとらえる。

出合う段階では，ものの動きに関わる複数の要因に気付くことをねらっている。そのために，カチカチボールとコロコロボールを使って，２種類の予告ゲームを行い，カチコロチャレンジコンテストでの動きに関係する要因を話し合った。

子どもたちは，ゲームに取り組み，「10 秒にするには，大きなおもりを選ぶといい。」といったふりこの要因に関わる考えや「高いところからしないと，遠くまで届かない。」といった衝突の要因に関わる考えをもった。Ａ児は，長さと振れ幅が関係あるという予想をもつことができていた。

Ａ児の考え
私は，ふれはばを調整すれば，時間は変わると思います。実際にやってみると，おもりの重さでは時間は変わっていないと思いました。今日は，うまくいかなかったけど，次は，ふれはばと長さを変えて確かめたいです。

【資料②　予告ｹﾞｰﾑをもとに子どもたちがもった考え】

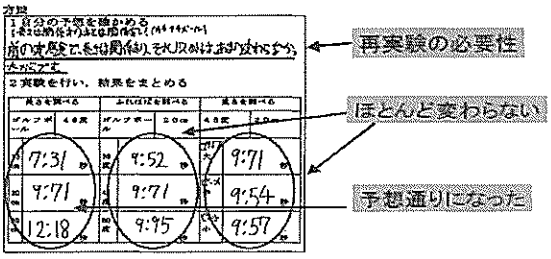
考察１

資料②のＡ児の，発言や考えは，おもりの動きに関する要因を抽出し，ふれはばやおもりの重さという複数の要因に着目している姿だと考える。

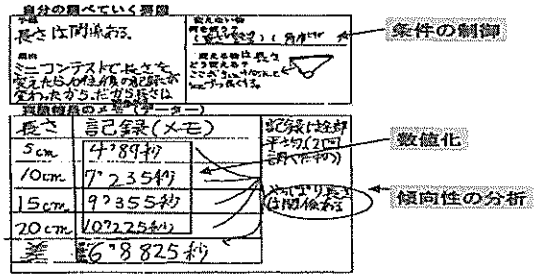
このような姿が見られたのは，自由試行の中で，複数の要因に着目し，操作できるカチカチボールとコロコロボールの２つの教具を提示したことにより，重さとふれはばを子どもが同時に操作することで，動きに関わる要因に対する不確かさを感じさせることができたからだと考える。

追究する段階では，動きの変化を数値化し，その傾向性をもとにおもりの動きのきまりを捉えることをねらっている。そのために，コンテストで行う２つのゲームを作戦グループで分担し，複数の要因ごとの予想グループでの実験をもとに，

【資料③　カチカチボールでの3つの要因ごとの実験】



【資料④　相互検討で使用したデータカード】

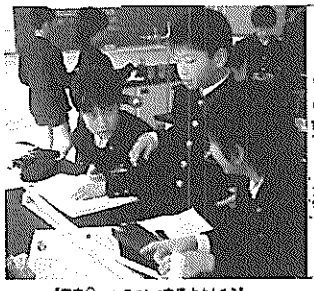


【資料⑤　相互検討で再追究した実験データ】

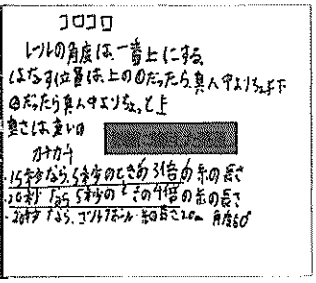
第３次「いかす段階」：９～11／11時
ものの動きのきまりをもとに，カチコロチャレンジコンテストを行い，今までの実験の方法やきまりを見通しをもとに使う。

	カチカチボールの課題	コロコロボールの課題
１回戦の課題	10 往復の時間を 15 秒台にする	赤とピンクの間（80 cm）に止める
２回戦の課題	10 往復の時間を 20 秒台にする	赤より遠く（90 cm）に止める

【資料⑦　新しく提示したコンテスト課題】



【写真① コンテストで高得点をとろう】



【資料⑧ コンテストでの子どものノート】

ふりこや衝突のきまりを比較する相互検討活動を設定した。子どもたちは，グループ内で自分の担当する課題を決め，共通グループで実験計画を話し合った後，個人で実験を行った。その結果，Ｃ児は「ふれはば」，Ａ児は「長さ」という結果の分析を行った。その後，コンテストで操作する要因を決定する実験データを用いた課題別グループでの比較の場を設定し，Ｃ児とＡ児で，それぞれの記録した実験データカード（資料④）を使って話し合いを行った。

Ｃ「ふれはばも，９秒９５まで変化しているよ。」
Ａ「変化だけで見ていくとよくないよ。」
Ｃ「じゃあ，ふれはばと糸の長さの両方かな。」
Ａ「変化の大きさを考えると糸の長さだけだよ。」
Ｃ「本当だ，全体で見ると糸の長さだね。」

【資料⑥　A児とC児の相互検討での比較活動の様子】

その後，考えを確認する再実験でＡ児は，動きは糸の長さに関係するというきまりを見出すことができた。（資料⑤⑥）

考察２

資料④では，数字の傾向性への着目から，結果の判断を行っている。資料⑤では，結果の数値化と自分の予想の再考が行われている。これらの姿は，科学の方法を使い，結果の数値化と客観的な分析をしている姿であると考える。これは，要因ごとの実験計画を共通グループで話し合い，要因を意識できるノートを使うことで，正確な条件統制ができ，課題別グループでの結果分析の比較により，自らの考えの見直しを行うことができたからだと考える。

いかす段階は，見出したきまりをもとに，ものの動きに関わる要因を見通し，実際に操作して，カチコロチャレンジコンテストを行い，きまりを実感することをねらっている。ここでは，新たなコンテストのルールを設定し，提示した。子どもたちは，高得点をとるために，グループ内で要因の量を話し合い，コンテストに挑戦した。（写真①）

カチカチボールに挑戦したＡ児のグループは，糸の長さが長くなると時間が長くなることから新しい長い糸を用意し，チャレンジコンテストを行い，コンテストで高得点を出すことができた。

考察３

資料⑧にあるようにＡ児は，自分の調べたデータをもとに新たな対象の変化を見通している。このことは，今まで学んだことを使って対象に働きかけている姿だと考える。

このような姿が出てきたのは，今までのきまりをそのままあてはめていくだけでは解決できない，新たなコンテストのルール（もっと長い時間に調整する・もっと長い距離を動かす）を設定したことにより，調べてきた実験データを使うと動きの結果を予想できることに気付き，高得点をとるために，相互に考えの検討を行う必要性をもったからだと考える。

【全体考察】

本単元で，カチコロチャレンジコンテストを教材化していったことは，子どもがものの動きの要因に着目し，それぞれの要因に不確かさを感じることができ，問題設定を行っていく上で有効であったと考える。また，追究する段階で実験ノートを用いた個人追究の場を設定し，相互検討活動を行ったことは，子どもが自分の考えをもとに条件統制を行った正確性の高い実験を行い（仮説設定），複数の考えを比較・検討することで，ものの動きのきまりをとらえていく（客観的分析・知識理解）上で有効であったと考える。さらに，いかす段階において，新たなルールを設定したチャレンジコンテストの場を設定し，見通しをもつための相互検討活動を行ったことは，きまりが使っていけることを実感させる上で有効であったと考える。

Ⅱ　考えが具体化する相互説明を位置づけた展開のあり方

理科部　　今　泉　伸　一　郎

1　副主題の意味

考えが具体化する相互説明を位置付けた展開のあり方とは

考えが具体化するとは，自然事象とその要因との関係付けをする際に図や観察の経過，実験結果をもとに，よりわかりやすく説明できる状態になることである。

考えが具体化する相互説明とは，多様な予想や仮説，実験の結果を出し合い，お互いに考えの補完や批正をし合うことで関係付けの変更や一部修正を行うことである。それは，①自然事象とその関係付けを出し合いズレや対立から解決すべき共通の問題として認識していく活動，②実験結果をもとに自然事象と要因との関係付けを確かめたり，考えの変更や一部修正したことを追試したりするグループでの活動，③結果から考察されることを一般化していく話合いのことである。

考えが具体化する相互説明を位置付けた展開とは，問題解決をして自然のきまりとして一般化するまでの追究段階１を行い,さらに,獲得した自然のきまりと学び方をつかって新たな課題を達成したり,気がかりを確かめたりしていく追究段階２を行うことである。その際,自分だけでは一般化できない自然のきまりやそれを適用して課題解決することを他者と協力して追究するのである。

2　学習プランの具体的構想

●　教材化の工夫

- 子どもの生活経験の差から多様な考えの表出が予想される自然事象
- 他者との対立が予想される自然事象
- 要因について経験をもとに抽出することができ，共通点や差異点を定性的・定量的に観察できる自然事象

●　活動構成の工夫

課題をもつ段階では，事象や要因を肉眼でとらえにくい場合，事象提示で視覚化の工夫を図る。要因抽出が難しい場合，子どもの思考に沿う形で要因を伝達し，思考の活性化を図ることで問題が認識できるようにする。

追究段階１では，事象と要因の関係をモデル図で表現させ，多様な考えを類型化して提示し，それをもとに交流させる。観察・実験での検証場面では，問題について考えや実験方法の異なる者どうしでグループを構成する。そして，グループ内で確証・反証を得た者どうしで関係付けの交流を行い，モデル図のかき加えや変更を行う。

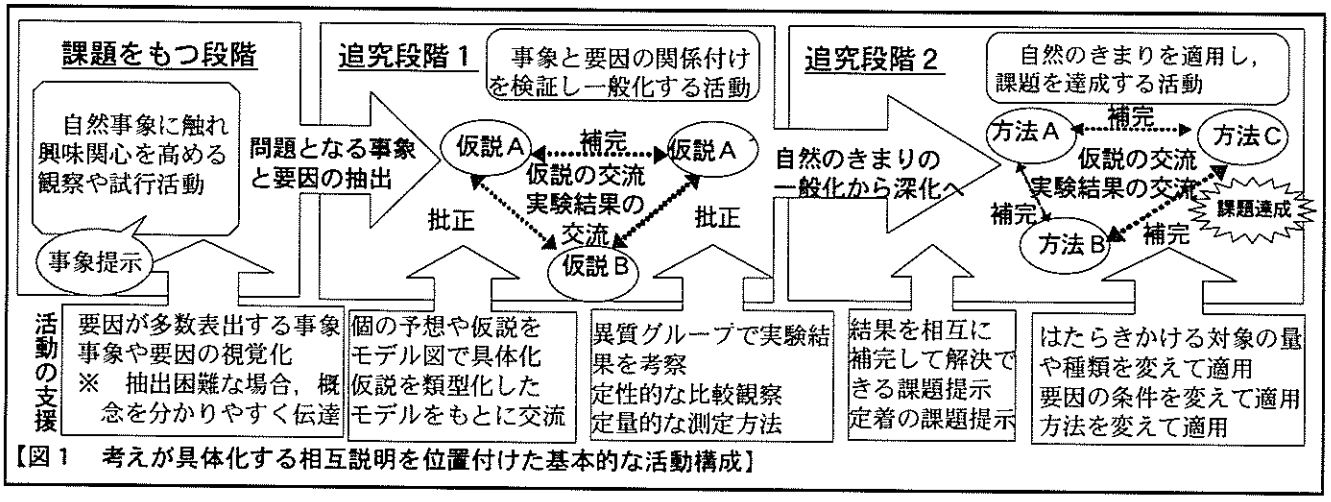
追究段階２では,まず,共通課題を設定する。それを解決する方法として①対象の量や形を変えて②対象の質や要因の条件を変えて③方法を変えて，自然のきまりや学び方をつかうようにする。そして,考えが具体的に表出する活動を以下の追究場面に位置付ける。

- 課題解決の方法を出し合い,選択・決定していく場面
- 考えや方法の同じグループで自然のきまりや学び方をつかって解決していく場面
- 各グループでの結果の考察を全体で交流する場面

その際，課題解決に向けての有効性を観点にして話合いを行うことで，グループでの追究が相互に生かせるようにする。結果から反証された場合は,追試を行ったり，それぞれの考えを補完した実験を行ったりすることで課題解決ができるようにする。

●　考えが具体化する相互説明における支援

考えのモデル図には,事象や要因を粒子論的にかき表すことが考えられる。その際,事象や要因を擬人化し,ふき出しに根拠を書き込ませたり,矢印を用いて力や要因がはたらいている方向,事象の動き等を表現させたりする。実験では,事象や要因の視覚化による定性的な比較観察を行わせる。また,内容によっては,要因を定量的に測定できる器具と使い方を教え,調べられるようにする。



【図１　考えが具体化する相互説明を位置付けた基本的な活動構成】

3　指導の実際

第4学年　単元

飛ばそう熱気球！
～空気の温まり方～

(1) 単元の目標

1　自ら空気の温まり方の規則性を実験によって追究し，熱気球をより長く浮かべるために空気の動きと温度との関係を適用し，課題を解決しようとする。
2　空気は，温めると熱せられた部分が上に移動し,逆に冷えると下降しながら対流を起こし，やがて全体が温まったり冷えたりすることがわかる。

(2) 単元の考え方

本小単元のねらいは，空気を熱すると，空気が上方へ移動しながらやがて全体が温まり，逆に冷すと，空気が下方へ移動しながらやがて全体が冷えていくことをとらえることである。そこで，ビニール袋の中の空気が温められると浮かぶ現象について，その要因である空気の温度変化と空気の動きとの関係を知的好奇心をもって調べていくことのできる熱気球づくりを教材化する。熱気球が浮かぶ現象を提示することで温度変化に伴う空気の動きについてつかむことができ，多様な考えや実験の結果を交流し，事象と要因との関係付けを行っていく。また，この単元は熱気球をより長く浮かべたいという求めがうまれる。そこで，獲得した空気の温まり方を空気の量や温め方を変えて適用していく。具体的には，熱気球の空気の容量を多くしたり，中の空気の温度をより高くしたりして追究するのである。そして，各コースでの考えを補完し合うことで課題解決できる活動を設定する。

(3) 学習の流れと考察

課題をもつ段階：1／5時
簡易熱気球を自分で作り，浮かぶ要因を抽出し，熱気球をさらに長く浮かべる課題をもつ。

写真1
熱気球が浮かんだ！

中には空気しか入っていないので,温度が上がったら空気が上に動くのかな。でも，もっと長く,高く浮かべてみたい。

追究段階1：2～3／5時
熱気球を長く浮かべるために，温度変化と空気の動きとの関係を追究し,空気の温まり方を調べる。

「課題をもつ段階」では,簡易熱気球が浮かぶ現象に関心をもち,浮かぶ要因を抽出して実際に試したいという知的好奇心をもつことがねらいである。そこで,簡易熱気球の空気を電熱器で温めると空中に浮かぶ現象を観察する活動を設定した。子ども達は,熱気球が浮かぶ時,温かい空気が関係することに気付き,もっと長く浮かべてみたいという求めをもった。

考察1

子どもが，熱気球を長く浮かべたいという知的好奇心をもてたのは，熱気球が浮かぶ現象から空気の動きをとらえることができ,温度との関係に気付いたからである。これは空気の動きを視覚化した事象提示が有効であったと考える。

追究段階1では，温度変化と空気の動きとを関係付け，観察・実験によって検証し,空気の温まり方のきまりを獲得することがねらいである。そこで,自然事象と要因の関係付けをモデル図をもとに交流する活動を設定した。

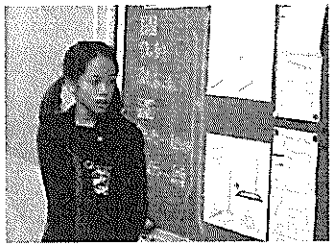
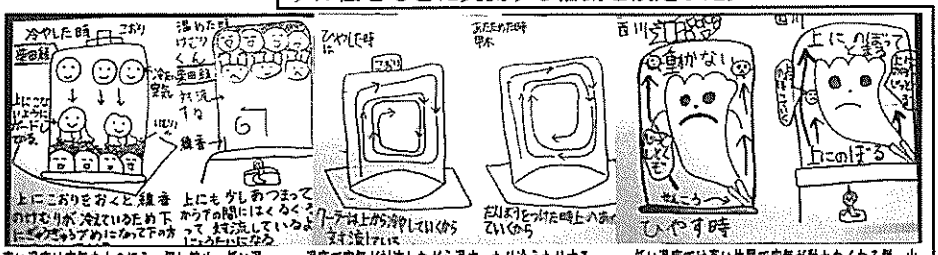


写真2
モデル図で説明しよう。



資料1
モデル図の3例

高い温度は空気を上のほうへ押し縮め，低い温度は空気を下のほうへ押し縮める説，温められた空気で熱気球が浮かぶことを根拠にしている。

温度で空気が対流しながら温まったり冷えたりする説。水が対流をして温まる現象を根拠にしている，空気も水と同じように動くので対流が起きると考えた。

低い温度では高い位置で空気が動かなくなる説。山頂では，平地よりも空気の温度が低いことを根拠にしている，高い温度では空気は上に昇ると考えた。

A児：空気を冷やしたときは，初めに対流して，氷を置いたら下のほうで対流を起こし，温めたときは，上のほうで対流を起こすと思います。
B児：なぜ，下に空気が動くのですか。《批正》
A児：煙は温められた空気で上に行くと思います。冷やされた空気は，それを下へ押し込めると思います。

写真2は,提示したモデル図とそれを使って発表しているA児である。A児は,温度で空気が押し縮められる説を発表した。それに対し,B児がA児の考えを批正する質問をした。B児は,山頂では温度が低いので空気は低い温度では動きが動かなくなる説をもっていたからだ。A児と同じ考えのC児は,A児の考えを補完する意見を述べ,B児の指摘に答えた。

C児：冷やされた空気が下に押し込めるということは，空気は冷やされると下に動くと思います。《補完》
B児：私は,温かい空気は上に動くと思うけど,それに比べて冷えた空気は動かないと思います。

資料２　モデル図をもとに交流している様子

考察２－①

写真２資料２から,空気の温まり方について相互に考えを検討し,実験の視点をはっきりさせている姿が見とれる。これは,モデル図による表現の具体化によって相互に考えの共通理解ができたからである。

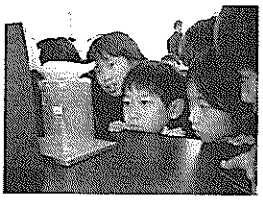
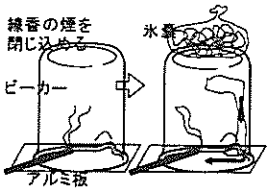


写真３
冷やされた空気が下へ動いている。



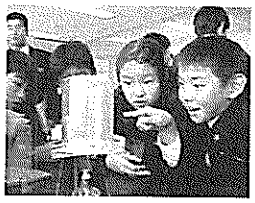
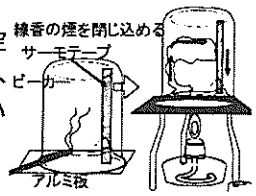


写真４
温めた空気が上へ動いているね。



今日の実験から温められた空気は上に動き，冷やされた空気は下へ動くことがわかりました。熱気球が浮かぶのは，空気が温められたからです。そして，と中でしずむのは，空気が冷えたからだと思います。だから，空気が冷めないようにすれば，熱気球は長く浮かぶはずです。

資料３　A児のノートから

次に，温度変化による空気の動きを線香の煙によって視覚化し，温度が低くなると空気の動きがどのように変化するのか（写真３），温度が高くなると空気の動きはどのように変化するのかを確かめる実験を行った（写真４）。

追究段階２：４～５／５時
熱気球をより長く，より高く浮かべる課題を空気の温まり方を適用し，さらに詳しく追究する。

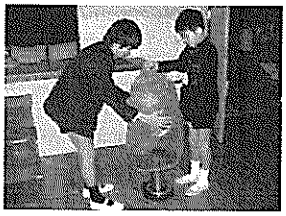


写真5　大きなバルーンではなかなか浮かばないよ。

写真6　火で温めると電熱器より長く浮かんだけれど。

写真7　かさの大きなバルーンを火で温めてみよう。

最初，私の考えでは，空気の量を多くすれば，冷めるのに時間がかかるのでより長く熱気球が浮かぶと思いました。でも，結果はなかなか浮かびませんでした。でも，Bコースの人のアドバイスで火で空気を温めてみると《支援》，Bコースよりもさらに，長く22秒も浮かびました。私の考えは，間違っていなかったです。《自信》

資料４　A児（Aコース）のノートから

考察２－②

写真３，４，資料３上段の記述から子どもは，知的好奇心をもって追究し，空気の温まり方を一般化できたことがわかる。これは，実験で空気の動きを線香の煙で視覚化することで自分の考えとの比較と，異質グループ内での検討が行われたことが有効にはたらいた。また，資料３下段の記述から，学びが価値あるものになったことがわかる。これは，熱気球を浮かべる課題と空気の温まり方とが一致したからである。

追究段階２では，空気の温まり方をつかって熱気球を長い時間浮かべる課題を達成することがねらいである。そこで，①空気の容量を多くして空気が冷めないようにする②空気の温度を上げて空気が冷めないようにする方法について仮説を検証する実験を行った。写真４は,空気の容量を大きくすれば,冷めるのに時間がかり,より長く熱気球が浮かぶだろうという仮説が反証された様子である。写真５は,熱源を電熱器から火力に変えて,約４秒ほど長く浮かんだ結果から,温度を高くすれば,冷めるのに時間がかかり,その分長く浮かぶ仮説に確証を得た姿である。写真７は,各グループの考えを補完し合い,熱気球がより長く浮かぶ結果を得ている様子である。

考察３

写真５,６,７での子ども達の様子,資料４の記述から子どもは,知的好奇心をもって科学的に追究し,自分の考えに自信をもっている姿が見とれる。これは,課題の解決のため相互の考えを補完し合う活動が行われたことが有効にはたらいたからだと考える。それは,各コースの追究において仮説が反証されたり,確証を得ることができたものの不満足な結果を得たりすることで個の考えの補完が必然的に生まれたからである。

【全体考察】

単元を通して,子ども達は，熱気球が浮かぶ現象について知的好奇心をもち，それをさらに長く浮かべたいという課題を達成することで知的好奇心を満たしている姿が見られる。これは，現象の面白さのみを追究しているのではない。考察２からわかるように空気の動きと温度変化との関係付け，空気の温まり方のきまりを調べたこと，考察３からわかるように，きまりを空気の量や温度を上げる条件を変えて適用するといった科学的な追究が行われたからである。それは，熱気球が浮かぶ現象から事象と要因を抽出し，追究の視点が明らかになり思考が活性化したこと，長く浮かべたいという課題が他者との考えの補完が行われることで達成できる活動構成の工夫が有効にはたらいたと考える。

総合的な学習の時間の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自己の生き方を創る総合的な学習

1　総合的な学習での学ぶことと生きること

総合的な学習は，子どもの生活現実から学びを立ち上げ，子どもが自ら抱く気がかりや願いを出発点に自分のこだわりを発揮し，自己を見つめながら自らの応えを見つける学びを展開する。そのために，子どもが価値あるもの，人，ことと出合ったときに生じる，「やってみたい」という実践的な求めや，「どうしてだろう，調べたい」という探究的な求めを出発点に学びを立ち上げる。この強い求めに支えられた学びにおいて，自らの生活や生き方をよりよく更新していく真の問題解決力を培い，知を総合化していくことで，自分なりの応えを見つけ，自己の生き方を創っていくのである。

2　自己の生き方を創る総合的な学習とは

自己の生き方を創るとは，子どもが自分の生活現実についての見識をもち，自分への自信に支えられた将来の夢や希望を実現するための方向性をもつことである。価値観や社会状況が多様化した今日では，単純明快な答えだけでは問題は解決しない。むしろ，その時の問題や場面の状況に対する，自分の考えである“応え”が求められるようになる。このことからも子ども一人一人が自分のもてる認識や技能を駆使しながら，自分の応えを見出していくことが大切である。このような，認識や技能を活用したり，自分自身を見つめ直し，自分の考えを導き出そうとしたりすることで，総合の学びが，子どもたちにとって“生きた学び”となり，自分自身への自信と認識から見識へと高まっていくのである。

3　3つの学びから考える<ふくおかプラン>

子どもたちは，生活科や特別活動などで，生活事象について，自らかかわり自分の生活を見つめ直し，生活更新することを体験してきている。ここに「生活を振り返りよりよくしていく学び」が実現できると考える。また，各教科の学習で，文化財が意図的，計画的に教材化された学習対象や活動によって，文学や芸術，科学，社会基盤，歴史事象，運動文化などにふれ，知識を獲得したり，興味・関心を高めたりしてきている。ここに，「文化を総合的に捉え，つくり出す学び」の素地が形成されていると考える。さらに，道徳の時間や各教科等の学習において，人の生き方や生命について考えたり，自分自身の個性や生き方について考えたりしてきている。ここに，「自己や他者など人を追究していく学び」の可能性があると考える。そこで，以上の３つの学びをそれぞれ重点化し，「生活総合」「文化総合」「人間総合」で総合的な学習を構想する。このように，追究対象や追究方法を明確にすることで，各教科領域等で身に付けた“知”を総合化し，“生きた力”として子どもたちに身に付けさせるために，次のように全体計画を設定する。

【<ふくおかプランにおける総合的な学習の全体計画】

各教育法規
- 日本国憲法
- 教育基本法
- 学校教育法
- 学習指導要領

学校の教育目標

「豊かに生きる子ども」

子どもの存在原理から，「生活・文化・人間の学び」を大切にし，生きるために必要な知識・技能と，それを生きることにつなげ活用する知的能力とを調和的に育み，心豊かにたくましく生きる子どもの育成をめざす。

児童の実態
- 公共の交通機関を利用して様々な地域から通っている。
- 自分の課題をもって追究したり考えを表現したりすることを好んでいる。

社会の要請
- 生きる力の育成
- 現代的な課題に主体的に対応できる資質や能力の育成
- 自信を高め夢や希望をもつことができる子どもの育成

総合的な学習の時間の目標

「自己の生き方を創る総合的な学習の時間」

生活現実や価値ある文化，人間との出合いから，自ら課題を見出し，各教科領域等で獲得した知識や技能を総合化したり，生活化したりしながら課題追究することを通して，追究対象への理解を深め自分への自信と生きていくことへの夢や希望をもって自己の生き方を創る．

保護者の願い
- 基礎的な学力を身に付け基本的な学習習慣の定着を図ること
- 幅の広い，多様な見方や考え方を身に付けること

総合的な学習の時間の学年の目標

中学年	高学年
身近な事物・事象から自ら課題を見つけ，見通しをもって追究するとともに，必要な情報を取捨選択しながら，自分の考えを広げ，追究の意義に気付くことができる。（学ぶ意義） 自分の経験や知を生かしながら，情報を比べ，活用し自分の考えを広げることを通して，生活を見つめたり，文化の価値を理解したりして，自らの応えとなる考えを導き出すことができる。（能力） 身近な地域や生活のなかの文化や人々の生活をよりよくするためのもの・人・ことと自分自身の関係を考え，自分の生き方を方向づけていくことができる。（自信）	価値ある人・事象・事物から自ら課題を見つけ，課題解決と応えを想定しながら追究するとともに，目的に応じた情報の取捨選択，再構成をしながら，自分の考えを高め，追究の意義を感じることができる。（学ぶ意義） これまで身に付けた知を総合化・生活化し，事実を分析し，関係づけながら，生活を見直したり，文化を獲得したり，自分を人間として高めたりすることで，自らの応えを見出すことができる。（能力） 自分の存在価値や，成長への実感，無限の可能性に気付き，自分への自信や将来への夢・希望をもつことができる。（自信）

	内　容	中　学　年	高　学　年
郷土文化	○日本の伝統文化に対する理解と愛情を育て，文化を受け継ぎ守っていく態度を育てる。	地域の文化に積極的に親しみ，地域やその文化への愛着をもつこと。 地域や文化を支える人の工夫や努力を理解すること。 地域の一員であることに気付き，郷土の文化を守るための考えをもつこと。	日本の文化や伝統の特徴に気づき，郷土や文化への愛着を深めること。 進んで文化行事や活動に参加し文化を支える人の工夫や問題点を理解すること。 文化を調べたり，つくったりして自分たちの文化として実践すること。
環境	○身近な自然や環境と積極的にかかわり，生活と環境の関係について理解し，よりよい環境をつくる。	身近な自然と自分の生活の関係に気付き，愛着をもって接すること。 環境問題を解決するための機関について知り，自然を守る人々の工夫や努力について理解し，自分にもできる方法を考えて試してみること。	地域の自然や環境の美しさ，大切さに気付き環境との共存について考えること。 環境問題の現状について，科学的な方法を用いて調べるとともに自分たちの生活との関係を理解し，環境創造をめざし日常生活に実践すること。
福祉	○自分を含め高齢者や障害者，年少者の存在のことを理解し，皆が幸せに暮らせる社会をつくろうとする。	身近な高齢者，年少者，障害者について理解を深め，身近なところの配慮や工夫に気づくこと。 身近な福祉問題解決のために，自分たちにできる方法を考えて実践すること。	毎日の生活が人々の支えや助け合いで成り立っていることに気づき，他者を思いやり大切にすること。 人々が幸せに暮らせる社会をつくるには，どうすればいいか考え実践すること。
生命健康	○生きることのすばらしさや，生命の尊さに気づき，自他の生命を大切にし，心身ともに健康に生きる。	動植物の生態や生育環境に関心をもち，生命の神秘さや大切さを感じること。 健康で安全な生活を送るために，必要なことに気付き，よりよい生活習慣や態度を身に付けること。	生命の誕生について理解し自分の命と周りの人や環境との関係を理解すること。 生命や健康を維持するために，自分の生活を見直し，よりよい生活環境や生き方をつくること。
勤労・進路	○これまでの自分やこれからの自分の将来の夢を考え，自分の個性を生かしていく。	家庭や学校，地域での身近な人々の働く姿や仕事に出合い，その営みが自分たちの生活を支えていることに気付き，職業に関心をもつこと。 身近な人々の職業や生き方に関心をもつとともに自分自信の姿を見つめること。	職業調べや職場体験を通してそれぞれの職業や働く人の生き方を理解し，働く意義を考えること。 自分の個性や将来の夢について考え，なりたい自分に向かって，自分の理想像をもった生き方を考えること。
経済金融	○健全な金銭感覚を養い，ものやお金を大切にし，資源を有効に活用する。	お金の役割を理解し，様々な目的や使い方や貯め方があり，お金や資源の大切さを感じること 少額のお金を使って金融に関する意志決定を学び，お小遣いや慈善への寄付を含む使い方を考えること	将来のニーズは貯蓄によって実現されることを学び，お金や資源を取り扱う権利と責任をもつこと 消費者の選択が他の人々の経済や環境に与える影響を含めお金の使い方についての社会観をもつこと
国際理解	○日本や世界の国々に関心をもち，文化や生活習慣を理解し，他の国々の人々とともに生きていこうとする。	様々な国の人々と交流して文化を知り，互いのよさや違いに気付き，認め合うこと。 外国語に関心をもち，様々な場面での歌や言葉に慣れ親しむこと。	様々な国の文化や歴史，生活習慣を理解するとともに互いの違いを認め尊重しようとすること。 外国語におけるごく簡単な日常会話を使って話したり，聞いたりすること。

豊かに生きる子どもをはぐくむための総合的な学習の基礎・基本

意　義	自　信
生活現実や文化，価値ある人間に出合うことで，自分の課題を見出し，獲得した知識や技能を総合化したり，生活化したりしながら，課題解決することを通して，自分の追究の意義を実感することができる。	自分が他に役立つ存在であると感じたり，成長し何かをやり遂げる力があると考えたりして，自分の見識を高め，自分への自信や将来の夢や希望をもつことができる。

能　力	観　点	中　学　年	高　学　年
A学力 実体的学力	生活更新・文化創造・生き方向上を支える認識	郷土文化，環境，福祉，生命健康，勤労・進路，国際理解を追究するなかで，見出すことができる具体的な知識を身に付ける。	郷土文化，環境，福祉，生命健康，勤労・進路，国際理解の知識を身に付け，もの・人・ことから生じる願いや取り組み，自分の具体的な行動の仕方などを知る。
B学力 機能的学力	課題設定力	気がかりや疑問から追究可能な課題を設定することができる。	追究の価値を考え，追究可能な課題を設定することができる。
	情報活用力	課題解決のために，取材や体験から情報を収集し，必要な情報か取捨選択することができる。	施設や情報機器を有効に活用しながら，収集した情報を検索，選択，再構成することができる。
	総合表現力	伝えたいことを順序や内容がわかるように工夫して，目的に応じた表現媒体を選択し表現することができる。	目的意識や相手意識，状況意識をもち表現方法を駆使して意図に応じた効果的な表現をすることができる。
	多面的な見方・考え方	自分の経験や，各教科等で獲得した知識や技能をもとに，情報を比べながら，自分の考えを広げることができる。	各教科等で獲得した知識や技能を生かし，得られた事実を分析，関係づけして構造化し，自分の見方を高めることができる。
	実践力	自分の目的に応じて，周りの状況や，条件を意識して活動内容を決定し，自分や相手の立場を考え，他者と協力しながら活動することができる。	自他の目的に応じて，周りに対する影響を考えながら活動内容を決定し，自分や相手の立場を明確にし，自分の活動を客観的な視点で捉え活動することができる。
	自己評価力	自分の追究を，他者から助言を受けながら客観的に見つめたり，自他のよさを捉えたりすることができる。	自分の追究を他者と比較しながら，客観的，分析的に見つめ追究の応えを肯定的に捉えることができる。

「生活・文化・人間の学び」から，たち上がる３つの総合

生活総合	*文化総合*	*人間総合*
自分が生活する環境や学校・家庭・地域での社会生活において，生活者としての知を生かしたり，総合化させたりして，人とかかわりながら生活更新する総合的な学習	文学や芸術，科学，歴史伝統，スポーツ，生活文化などの文化にふれて，文化のすばらしさ，文化を創り出した人や伝えてきた人の考えにふれ，文化を継承・創造する総合的な学習	人間の生命や生き方，人間の特質について見直したり，自分の個性について考えたりして，よりよく生きていこうと自分の生き方についての考えを深める総合的な学習

指導方法	指導体制	評価計画
総合化される知を想定した支援の明確化 ノート活用の工夫（個別指導の充実） 効果的な体験的活動の重視	総合部を中心とした各学年の連絡体制と支援体制の確立 ゲストティーチャーの招聘を行う指導の充実	子どもが見出す応えと学び方からの目標に準拠した評価規準の設定 ポートフォリオを活用した評価の充実

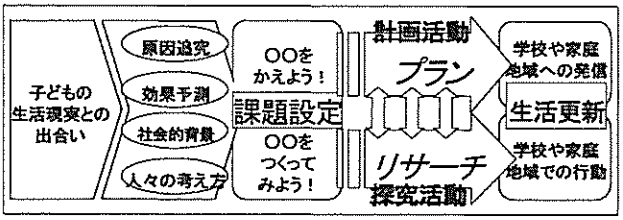
「生活総合」とは

生活総合とは，自分が生活する環境や学校・家庭・地域での社会生活における生活者としての知を生かしたり，総合化したりして，家族や友達，地域の方などの人とかかわりながら自らの生活をよりよく更新していく目的達成のプロジェクト型の総合的な学習の時間である。

○　生活総合の学習スタイル

生活総合では，学習のゴールは，子ども自身の生活をつくりかえることである。このことから，具体的な生活の仕方について考え，学校や地域への発信などの行為化が必要である。そこで，生活現実から更新への課題をもち，原因追究や，課題解決方法の模索から具体的な行為の実践を考えていく。

図１　「生活総合」の学習スタイル



○　生活総合の学習対象

「生活総合」は，追究する対象が子どもにとって身近な生活や，そのなかの人々の営みや考え方となる。子どもの生活は，学級・学校・地域と空間的に広がるが，子どもの発達特性や教科との関連，子ども自身がその生活をよりよくすることができる追究の可能性を考える。

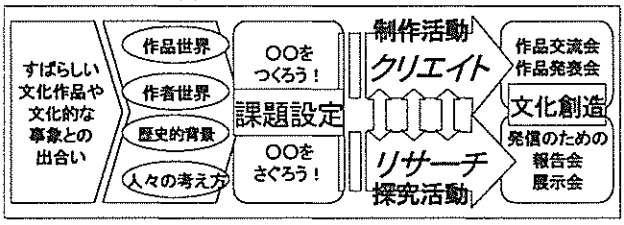
「文化総合」とは

文化総合とは，文学や芸術，科学，歴史伝統，スポーツ，生活文化などの文化にふれ，各教科等で身に付けた知を総合化させながら，文化の素晴らしさや有用性，それを創り出してきた人や伝えてきた人の考えにふれ，自分も文化を継承し，新たな文化を創造する，リサーチ・クリエイト型の総合的な学習の時間である。

○　文化総合の学習スタイル

文化総合では，文学や芸術などのすばらしさにふれることから，作者や発明者などの意図や背景，対象とする事象の歴史的な背景を探り，作者の思いや時代の様子について考え追究する学習である。このとき，文化財や文化的事象について探っていく，「リサーチ型」と，自分も文化を創造していく，「クリエイト型」が考えられる。これらは単独で行われる場合もあるが，両方の型を往復する形で追究が進む場合も考えられる。活動のゴールとしては，作品展示会や文化発表会などの表現の機会を設定し，他者へ発信できる場を保障する。

図２　「文化総合」の学習スタイル



○　文化総合の学習対象

「文化総合」は，追究する対象が子どもにとって価値ある文化財や文化性をもった人々の営み，考え方そのものとなる。それは日常生活のなかで使われている事物や事象の場合もある。その対象とするものの文化性を拡充していくという点を大切にして教材化を進めなければならない。

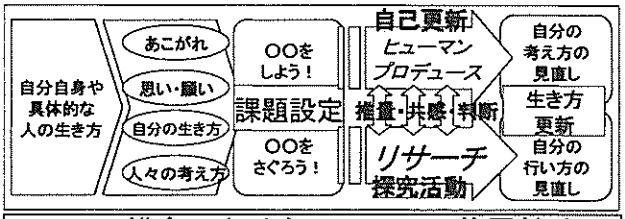
「人間総合」とは

各教科や道徳の時間に学んできた，人間の生命や生き方，人間の特質について見直したり，自分自身の個性について考えたりして，よりよく生きていこうとする自分をめざす「ヒューマンプロデュース型」の総合的な学習の時間である。

○　人間総合の学習スタイル

人間総合では，人間とは何か，人間が生きるということを生命という観点からと，生きがいや個性について考えた観点からとらえるようにする。まず，具体的な人間やモデルとなる生き方と出合うことを出発点とする。ゴールでは，自分の生き方と照らし合わせて，価値判断を行い，これからの自分の生き方を方向づけたり，実践してはたらきかけたりできるようにする。

図３　「人間総合」の学習スタイル



３つの総合のカリキュラムへの位置付け

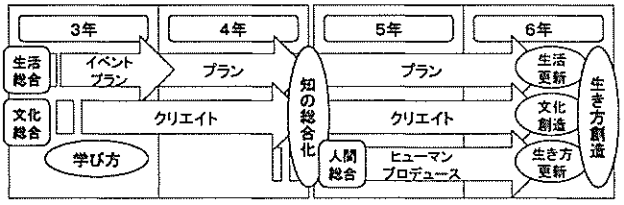
３つの総合のカリキュラムへの位置づけについては，各教科領域等の教育課程全体を見渡した側面と，学習能力や見方，考え方，表し方，興味関心といった子どもの学びの側面の２つの側面から，３つの総合を意図的，計画的に順序よく配列することが大切である。

「生活総合」は第３学年から始め，総合的な学習の時間の基本的な学び方を身に付けていけるようにする。第３学年においては，イベントプロジェクトを中心とした単元を配列し，基本的な学び方を獲得することに重点をおく。第４学年以降は徐々に，自分たちの生活現実をよりよく更新するようなプロジェクト単元を配列する。

「文化総合」は，それぞれの学年の教科で身に付けた知を生かすことができるように，各学年の各教科との関連を意識した単元を配列する。それによって，それぞれの学年における教科での「文化の学び」で培われる知が重点化されることで，総合的な学習の時間における指導内容や指導方法を明確にすることができると考える。

「人間総合」は，各教科，道徳の時間，特別活動等，全教育活動を見据え，特に，自分自身の生き方や考え方を創っていくことを目的とし，自己の未来への夢や希望を抱き，自分の理想を求めて主体的に生きる力の育成をすることからも高学年での配列が適当であると考える。

図４　３つの総合のカリキュラムへの位置付け



総合的な学習の時間の実践　生活総合　第３学年

単元　お金とのかかわり方？～あらつ何でも会社！！～　総合部　　平　島　健　二

1　単元づくりの考え方

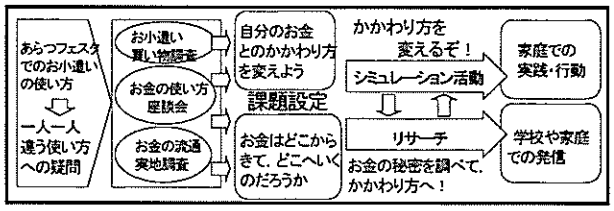
本単元は，自分のお金の使い方に気がかりをもち，自分とお金とのかかわり方を見直していく生活の学びを通して，身に付けた内容知や方法知を生かしながら課題解決を図っていく生活総合の学習である。主な学習内容として，「健全な金銭感覚を養い，ものやお金を大切にしていこうとする態度を養う」ことである。具体的には，①お金の使い方への疑問や気がかりから課題を設定し，お金の役割を理解しながらお金を使う価値判断をして金融に関する簡単な意志決定をすること，②お金とかかわる仕事に従事されている人々に出合ったり，お金と勤労とのかかわりを体験するシミュレーション活動を行ったりしながら，自分に金銭生活を変える力があると感じて自信や満足感をもつこと，③これまでに身に付けた学び方を駆使しながら，情報を収集したり，表し方の工夫をしたりすることなどである。この内容を確実に獲得させるために，次の点に留意して単元作りを行った。

①　追究対象の価値の見定め

追究対象となるお金の役割は，支払い手段であり交換手段である。また，ものやサービスの価値を決める物差しにもなる。さらに，すぐに使ったり，逆に貯めておいたりすることもできる。しかし，そのお金の多くは勤労を伴うことで手に入れることができるものであり，そこにお金に対する価値観が生まれてくる。普段何気なくかかわってきているお金について，流通面から立ち止まらせ追究させることで，お金を手に入れることの大変さ，お金を大事に使うことの大切さなどお金とのかかわり方を多面的にとらえ，変えていく学習を展開できる。

②　「追究したい！」という強い思いを大切に

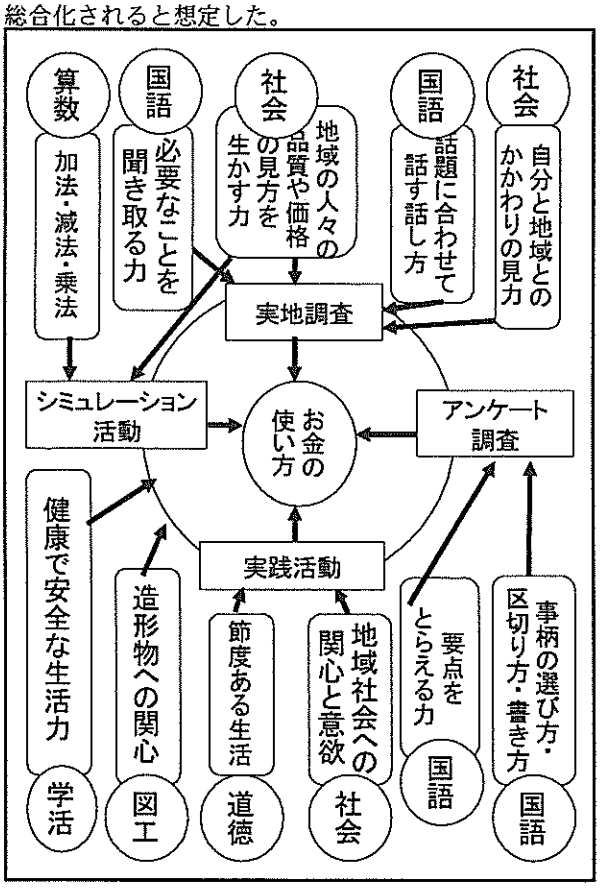
生活総合の学習対象は，子どもの生活現実そのものである。しかし，自分の生活に立ち止まることは容易なことではない。そこで，本単元は，現実生活から導入し，自分を変えていくためのシミュレーション活動を設定している。具体的には，あらつフェスタでのお小遣いの使い方から単元をおこし，自分でお金を手に入れ自分でお金を使うあらつ会社シミュレーション活動である。



【図１　本単元の構想図】

2　本単元において想定した知の総合化

本単元は，追究対象がお金であり，子どもの生活に普段から存在しているものである。その普段見落としている生活を見つめるためには，自分の生活を分析する力と追究対象を分析する力が必要になる。それらの力が発揮し知が総合化されるように，活動を構成していく。本単元においては，次のような活動において，生活や対象を分析するために，これまでに身に付けた知が必要となり，総合化されると想定した。



【図２　想定される知の総合化】

3　単元の目標

○　お金とのかかわり方の課題を見出し，お金の流通シミュレーション活動を通して，各教科等で獲得した認識や技能を総合化したり，生活化したりしながら，自分の活動のよさや生活を変える力を実感することができる。

○　「お金と自分のかかわり方を変えよう」という見通しのもとに，お金への見方・考え方を広げ深めながら自分のお金とのかかわり方を見つめ，実践してお金の使い方を変えていくことができる。

4　学習の流れ

第１次：１～８／23時
自分とお金とのかかわり方を振り返ったり，自分のかかわり方を探究したりして，課題を設定する。

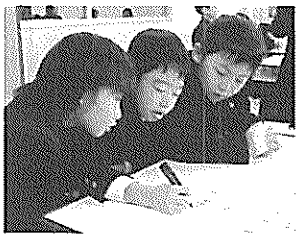


写真1　調査報告会

写真2　保護者との座談会

第２次：９～19／23時
自分の課題解決に向けて，計画を立て，追究し，自分のお金とのかかわり方を見付ける。

写真3　商店街で実地調査

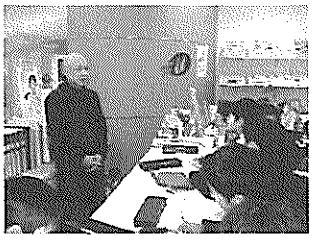


写真4　インタビューで

写真5　シミュレーション①

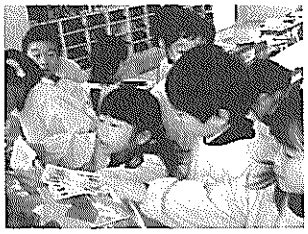


写真6　シミュレーション②

第３次：20～23／23時
家庭で実践し，実践報告会を開く。

お金をもらうには，たくさん働かなければいけない。それでももらえるお金は少しだけ。お金を手に入れることは難しくて，お金は簡単には手に入らない。「仕事はすぐできる」と思っていたけど，いざやってみると思うようにはできなかった。仕事は，難しくて大変なんだと思った。だから，働いてくれているお父さんやお母さんに感謝しなければいけないと思う。お金は，社会・生活・自分にとってとても大切なものでなくてはならないものだとわかった。今は，両親に感謝しながら本当に必要なものを考えてお金を使っている。

資料　R児の実践報告会のまとめから

第１次は，お金とのかかわり方に対する気がかりや疑問から自分のかかわり方を変えようとする課題を設定することをねらっている。そこで，あらつフェスタでのお小遣いの使い方に出合わせ，人によってお金の使い方に違いがあるということを際だたせる話し合い活動を仕組んだ。その活動で，「お金のむだ遣いって何だろう。」という疑問をもち，その疑問を明らかにするために，自分のお金の使い方調査を実施したり，保護者に来ていただき，お金の使い方について座談会を開く場を設定したりした。しかし，そこでも「何が無駄遣いで何が無駄遣いでないのか，これからお金をどう使っていけばよいのか，自分のお金とのかかわり方をどう変えたらよいのか。」ということが解決できず，さらに追究したい思いが高まり，課題を設定することとなった。

第２次は，他教科で得た方法知や内容知を総合的に用いながら，自分の力で課題を追究することをねらっている。子どもたちが設定した課題は，大きくまとめると，①お金を手に入れることについて，②お金の役割について，③お金の流通の仕組みについて追究して，自分のかかわり方を明らかにしたいという３つに類型化できた。これらの課題を追究していくために追究方法を話し合い，①文献や資料を収集する，②お金に携わる方に聞く，③実際に自分たちでお金を手に入れ，使ってみるシミュレーション活動の方法を明らかにし，これらを組み合わせて追究を行った。図書室やインターネットを活用して資料を収集したり，お金が動いている商店街へ実地調査に行ったり，お金に携わる方から取材したり，あらつ会社を立ち上げたりしながら自分の応えを見つけていく姿が見られた。このような活動のなかで，お金のもつ役割や文化，お金を手に入れている保護者の思いにまで気付き，そこから単にお金を無駄なく使うだけではなく，お金に込められた人々の思いやお金を手に入れてくれている保護者への感謝を強めながら，お金とのかかわり方という自分の応えを見付けていった。そして，自分の応えは間違いないのか，友達はどんな応えを見つけているのかという思いから中間報告会を仕組んだ。中間報告会において，自分の課題，追究方法，収集した情報，自分の応えを出し合う中で，友達の応えにアドバイスしたり，友達の応えを参考にしたりする姿が見られた。また，そのことを通して，自分の実践への自信や意欲を高めている姿を見ることができた。

第３次は，家庭で実践し自分の活動の満足感を味わわせるとともに，生活更新への自信を高めることをねらっている。子どもたちは，「お金を手に入れる大変さを考えて。」「本当に自分のためになるのか考えて。」「両親に感謝して。」などそれぞれの応えを家庭で実践し，自分の活動に効力感を感じたり，お金に対する価値を見出しながら，自分のお金とのかかわり方を変え，更新していこうとすることができた。

総合的な学習の時間の実践　文化総合　第３学年

単元　もっと知りたい！福岡のうまかもん

総合部　　髙　良　祐　治

1　単元づくりの考え方

本単元は，福岡の様々な郷土料理をその材料や味，調理法などの特徴や歴史を調べていくことで，自分の中に「自分がくらす郷土の料理」という新たな文化を創っていく文化総合の学習である。主な学習内容は，①福岡の郷土料理と出合うことにより，興味関心をもち，「もっと知りたい」という追究意欲と，「他地域の人たちにももっと知ってほしい」という願いのもとに，「福岡名物うまかもんガイドブックをつくる」という共通の課題を設定し，解決していくために，教科等においてこれまで培った知を組み合わせながら追究すること，②実際に郷土料理をつくったり食べたりする活動や，郷土料理に深くかかわっている職人との交流などを通して，福岡の郷土料理の特色を見出すこと（郷土文化への理解），③追究してきたことをもとに，福岡を訪れた観光客に伝えることを目的として，表現内容の精選や表現方法を工夫しながら，ガイドブックを作成すること，④福岡市の観光協会に協力を依頼し，実際に観光客に配布することで，これまでの追究結果を発信することである。これらの学習内容を子どもたちに確実に獲得させるために，次のような点に留意して単元づくりを行った。

① 教材（追究対象）の選定について

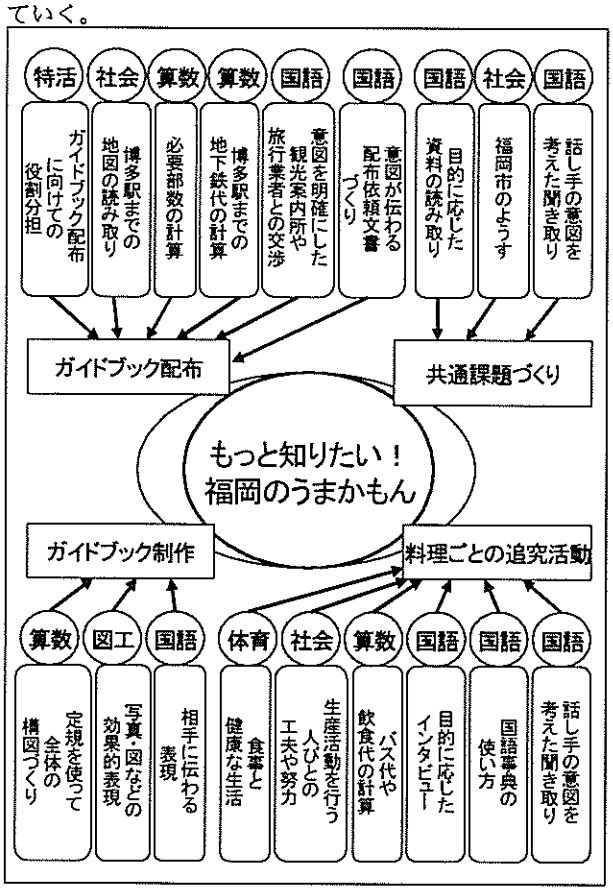
「食」に関わる教材が，子どもたちの興味関心を喚起しやすいことをいかし，深い郷土理解へつなげていくために，博多の地域性や歴史などの文化を見出しやすいと考えられる料理を選んだ。また，実際に店を訪れて食べたり，職人にインタビューをしたりできるものなど，本物に触れることができるような料理を選び，郷土料理を伝え，発展させていこうと取り組んでいる人々の姿にも触れさせていくよう心がけた。

② 単元の活動構成について

学習が教室の中だけの自己満足で終わってしまわないように，追究したことの外部による評価を単元の随所で取り入れた。このような実社会とのかかわりを取り入れることで，自分が追究してきたことが，本当に役に立った，学習してきてよかったという学びの実感となる。

2　本単元において想定した知の総合化

郷土文化を追究していくためには，そこに隠された人々の思いや願い，これまで継承してきた努力や工夫を見出していく社会や国語を中心とした知が必要となってくると考えられる。また，単元構成において積極的に校外へ出かけ情報収集したり，自分たちが追究してきたことを表現物として発信したりするために，算数や図工といった知はもちろん，グループや学級で協力しながら課題解決に向けて取り組んでいく力も必要となってくる。そこで，本単元を学習していくことを通して，下の図のような知の総合化が図られると考えられる。そして，これらの力が発揮し知が総合化されるように，活動を構成していく。



【図１　想定される知の総合化】

3　単元の目標

○ 自分たちがくらす福岡地区の名物料理について，食べたり料亭や地域の人へのインタビュー活動をしたり，各種資料からの調査活動をしたりして追究活動を行い，調べたことをガイドブックにあらわし，観光客へ発信していくことで，郷土料理の特色について考えることができる。

○ 福岡の名物料理のことをもっと知りたいという思いをもとに，追究していくことで，福岡の郷土料理に対しての親しみと誇りをもち，自分たちのもこの文化を大切に受け継いでいきたいという思いをもつことができる。

4　学習の流れ

第１次：１～３／23時
博多雑煮を食べる体験を通して，福岡ならではの料理があることに関心をもつ。

写真１　1つ1つの材料にも意味が

写真２　作り方にも秘密が

第２次：４～７／23時
福岡の名物料理を調べ，気がかりを話し合うことで，追究する料理を選び，課題を設定する。

第３次：８～19／23時
料理グループ別にリサーチし，郷土料理の魅力を見出す。

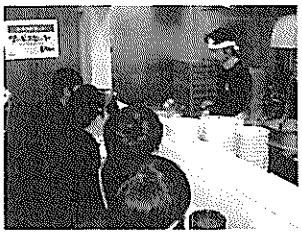


写真３　ラーメン店でリサーチ

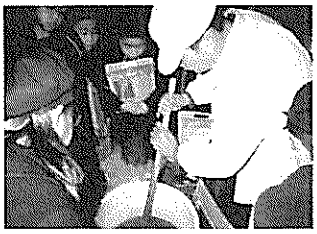


写真４　おきうと工場でリサーチ

写真５　水炊きについてインタビュー

写真６　もつ鍋づくりの実演

第４次：20～23／23時
ガイドブックをつくり，観光客に発信する。

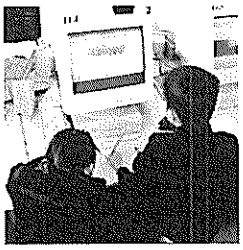
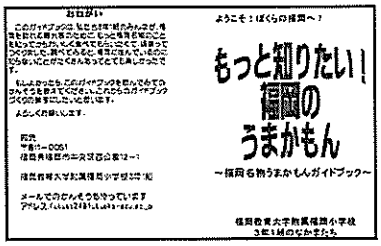


写真７　パソコンを使って作成



資料　ガイドブック（表紙）

第１次は，福岡ならではの料理に関心をもたせることをねらいとしている。そのために，博多の正月に欠かせない「博多雑煮」を料亭の方につくっていただき，食べる活動を位置付けた。この中で，食材一つ一つに縁起を担ぐなどの意味があることや，作り方にも正月をゆったりと過ごすための工夫があることを知り，郷土料理には，様々な由来や人々の願いが隠されていることに気付き，「他の福岡の料理に付いても調べてみたい。」という意欲を高めることができた。

第２次は，福岡の名物料理について気がかりや疑問を交流することで，追究課題を設定することをねらっている。子どもたちは，福岡市が観光客に配布しているガイドブックを見ながら，どのような名物料理があるのか調べた。その結果，「よく食べるけど詳しくは知らない」長浜ラーメンやもつ鍋，「ほとんど食べたことがないので知らない」おきうとや水炊きに絞り，追究していくこととした。この際，資料としたガイドブックには，簡単な説明しか載っておらず，自分たちが博多雑煮ににについて知ったときのような感動は得られないことに「福岡に来てくれた観光客にもっと福岡名物の料理について知ってもらいたい。」という欲求をもち，「そのためにもまず自分たちがくわしくなり，もっとくわしいガイドブックをつくる。」という課題を設定することができた。

第３次は，選択した料理についてリサーチ活動を行い，それぞれの料理の魅力を見出していくことをねらっている。子どもたちは，実際にお店や工場を訪れて，試食・見学をしたり，料理と深く関わっている方にインタビューをしたり，本やインターネットで調べたりしながら，味，材料，作り方，歴史といった視点でリサーチ活動を行った。そしてそれぞれの料理グループがリサーチした結果を交流することで，それぞれの料理が，福岡の自然特性や地理的条件をいかしながら，人々の生活の中からつくり出されてきたことや，料理にかかわっている人々の「よりおいしいものを味わってほしい。」という強い思いに支えられて継承されてきていることに気付き，郷土文化への理解を深めていった。

第４次は，これまで追究してきたことをもとに，「観光客に福岡名物料理の魅力を分かってもらう」という目的をもってガイドブックを作成し配布することを目的としている。子どもたちは，自分たちが感じた味の特徴や食べ方の工夫など，これまでのリサーチ活動をいかしたガイドブックづくりを行い，料理グループ相互に「観光客にわかりやすいか」「福岡名物料理の特徴は伝わるか」という観点で検討し合いながら，作成していった。完成したガイドブックは，福岡市天神の「観光プラザ天神」で観光客に配布され，子どもたちは，自分たちのこれまでの活動が，観光客のために役立ったという充実感を味わうことができた。

総合的な学習の時間の実践　文化総合　第６学年

単元　開業！あらつコーポレーション

総合部　北田尚雄

1　単元づくりの考え方

本単元は，唐人町商店街の商業行為と出合った子どもたちが，その工夫点や面白さに関心をもち，自分たちでも商店をつくって商業行為を行っていきたいという求めのもと，商社であるあらつコーポレーションをつくっていくために主体的・創造的に学びを立ち上げていく学習である。あらつコーポレーションを創り利潤をあげていくという共通の目的のもと，興味・関心に合わせて課題を設定していく能力や，追究方法や評価を行っていく学習構想力などを培っていくことをねらいとする。学習内容は，①利潤をあげていくという共通の課題を解決していくために商業活動についての個人の課題をつくり，これまで培った知識や考え方，学び方を組み合わせ活用しながら追究すること，②唐人町商店街の販売方法の工夫や販売状況を調査したり，実際に商店の方にインタビューしたり，経営コンサルタントの方などから情報収集を行ったりしながら多面的に追究し，経済の仕組みや勤労の意義などについての価値や自分の考え方としての応えを創り出すこと（経済や勤労の理解），③調べたこと考えたこと，実際にやってみたことを学級全員で役割分担しながら協力して，商業活動を行いこれまで学んだ商業活動や勤労の考えを生かしながら表現していくことである。

①　内容設定について

子どもたちの学習のゴールは，文化継承や創造である。その子どもたちの学年や実態に合わせて，意味ある文化の追究になり，価値ある文化の創造になるために，総合的な学習の内容表をもとにした内容設定が必要である。

②　教材（追究対象）の選定について

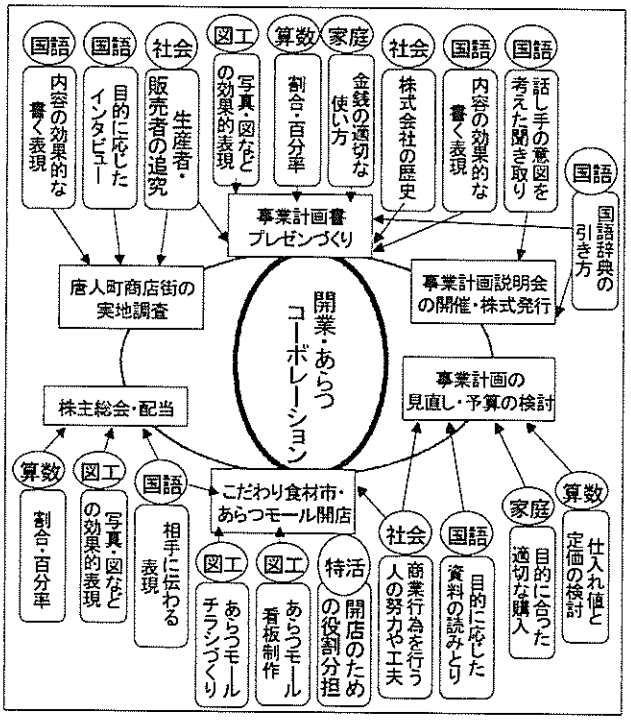
ただ机上の学習での追究にならないような教材（追究対象）でなくてはならない。そのためには，どんな体験をして，そんな対象との出合いをするかが大切である。その際，追究対象はホンモノの文化財や社会事象，社会人（現実社会で生き生きと日々生活し，仕事している人のいとなみとしての文化）であるべきである。

③　単元の活動構成について

多様なグループウェア学習を行うためには，その活動のひとくくりで，自己評価や相互評価，外部評価を行っていくようにする。その評価で，それまでの自分の学びについて自らふり返るとともに，それをもとに各グループ内，グループ間で検討していく活動が展開できる。

2　本単元において想定した知の総合化

本教材，本単元を学習していくことを通して，下の図のような知の総合化が図られると考える。ただ子どもはそのような知の総合化を考えながら学習するのではない。あくまで教師側が考えるものであって，この知をつかうと想定されるからこそ，ここで身に付けていく内容や活動，支援が考えられていくのである。あらつコーポレーションでは，特に金融という分野であるため，各教科（国語や社会，算数，図工，家庭科）における知識や技能などの内容知とのかかわりが想定できる。また，経済行為を行っていくためには，商店街の方やそれにかかわる人々，仲買人などからの聞き取り，生産者や販売者と，実際に購買する消費者の聞き取りや資金調達における株式発行のための資料や情報の収集と分析が必要となってくる。また，経済活動を行う際の学級での役割分担や，多くの人に呼びかけていくための宣伝力も必要となってくる。これら子どもたちが活用していくであろう知を想定して，教師は，活動構成と支援を考えていかなくてはならない。



【図　想定される知の総合化】

3　単元の目標

1　商業活動をしていくという共通の課題のもと，個々の追究課題を立て，実地調査や実際の店舗の方などと交流をしたり，必要な情報を収集し活用したりしながら自らの学び方で主体的・創造的に追究することができる。

2　商業活動の仕組みやそれにかかわる人々の思いについて，実際にあらつモールを開店して多面的に追究しながら理解を深めるとともに，お金の流れや経済の仕組みに対する自分の考えを創り出すことができる。

4　学習の流れ

第１次：１～４／２０時間＋課外
唐人町商店街の各店舗の商業活動との出合いを通して，新たな発見やこれまでの学習との関係でなるほどと思ったことや，実際の商行為を見つめて課題を設定する。

写真１　商品のリサーチをしよう

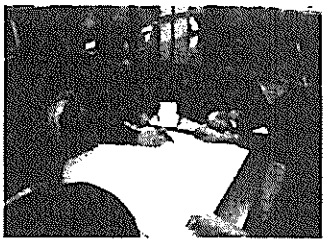


写真２　各事業部で追究計画を話し合おう

第２次：５～１５／２０時間
あらつスプリングモールをつくるために，必要な情報を収集したり，株主総会を開いて資金を集めたり，宣伝・広告を行ったりしていく。

写真３　販売価格や商品陳列をリサーチしよう

写真４　チラシについてアイデアを出し合おう

第３次：１５～２０／２０時間＋課外
これまでリサーチしたことをもとに，自分たちの手で実際にあらつスプリングモールを開店し販売活動したり，株主総会を開いて販売実績報告を行ったりする。

写真５　唐人町商店街での実際の販売活動（菓子事業部）

第１次は，唐人町商店街の各店舗の商業活動との出合いを通して，新たな発見やこれまでの学習との関係でなるほどと思ったことや，実際の商行為を見つめて課題を設定することをねらいとした。そこで，まず商業活動との出合いである。商店街の方や経営プランナーの方と事前に打ち合わせをし，特に，野菜，果物，鮮魚，菓子，生花で商いしている活動に焦点化し，そのなかで，販売している品物（今の売れ筋や旬の食材）や販売を旺盛に行っていくための販売者の工夫，仕入れ元や品質管理・価格決定，消費者とのやりとりについて，自分たちで商業行為行うに当たって大切になってくることに観点を焦点化させて実地調査させた。そこで，唐人町商店街の実地調査から生じた気がかりや疑問から問題を見つけ，その問題についての話し合わせ，追究のプランニングを再構成させていった。

第２次は，あらつ「スプリングモール」事業をつくる計画を立て，多様な方法でリサーチしたり資金調達や仕入方法，宣伝・販売方法を話し合ってスプリングモールをつくっていくことをねらいとしている。まず，それぞれの追究課題に合わせて追究の計画を立てた。その追究では大きく「販売活動を明らかにするリサーチ型の追究」と「販売宣伝をしていくクリエイト型の追究」の２つに分け，それぞれ計画を立てた。リサーチ型の追究では，主にインターネットや図書資料，経営プランナーの方からの聞き取りなどを中心に情報収集し，クリエイト型の追究では，唐人町商店街の方，広告代理店の方などに指導を受けながら，販売計画や宣伝物をつくったりした。ここでは，各店舗の方や経営プランナーといった現場で活躍されている人と交流したことで，生の生きた情報を収集できたとともに，その方々の商行為に対する思いや願いにふれることで，自分たち自身の商業活動といった経済に対する考えもつくることができた。

第３次は，これまでリサーチしたことをもとに，あらつスプリングモールの開催に向けて，宣伝・準備・実施していくことを通して，これまでリサーチしたことを販売活動の実の場において発揮し，経済・金銭に対する自分の考えの応えを明らかにしていくことをねらいとしている。子どもたちは，算数科で学習した割合や百分率の知識を使って，原価から定価設定をしたり，予想利益を計算したり，図画工作科で学習した平面構成の技能を生かして，ポスターやチラシを作成したりした。本番ではそれぞれの事業部が，ミニ店舗をつくり，様々な材料を使ってディスプレイしたり，商品仕入や領収書を作成し，来店したお客さんとやりとりしながら，販売活動を行うことができた。時には商品やおつりなどでクレームが出たり，予想以上に売れた商品と売れない商品の差がでるという問題も発生したが，子どもたちは臨機応変に対応し，早く売り切れた商品は，追加仕入を行ったり，売れ行きの少ないものは，街頭販売したりと販売方法を工夫して全ての商品を完売し，利益を上げることができた。

障害児教育部の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造

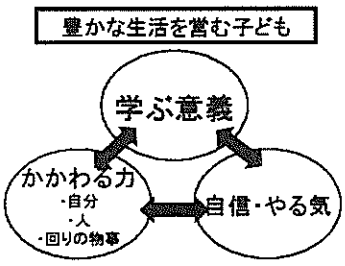
1　障害児教育と豊かな生活とのつながり

現在ノーマライゼーションの理念のもと，障害の有無にかかわらず誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会において，障害児・者が自立し社会参加することが目指されている。具体的には，身近な人々の支援を積極的に受けつつ，自分で決めるなど主体的に生活を営んでいけるようになることである。つまり豊かな生活とは，他者の支えを取り入れ，自分の力と個性を目いっぱい発揮して身のまわりの事象に働きかけ，その変容のよさや楽しさを味わう生活のことである。

そのためには，身のまわりの人・もの・ことに積極的にかかわり，自分なりの根拠をもとに決めながら，その成果を実感することを，小学校段階から多く経験することが大切である。つまり障害児教育では，このような子ども自らが豊かな生活を営むための力をはぐくむ教育課程を創造していくことが大切である。

2　障害児教育部主題についての説明

豊かな生活を営む子どもとは，生活の中で自然や社会や文化など身のまわりの様々な事象とのかかわりを通して，自立し社会参加するために必要な知識・技能などを身につけたり，事象のもつ意味や価値をとらえたりしながら，自分自身を肯定的にとらえ，自分の生活をよりよくつくっていく子どもである。具体的には，次のような資質や能力が必要であると考える。①学びそのものが「楽しい」，「役立っている」など，今を充実させたり，今の生活にいかされたりすることで，学ぶよさを感じる「学ぶ意義」，②身のまわりの事象に働きかけたり応じたりするために必要な「かかわる力」として，主に自分自身にかかわる力，主に他の人々とかかわる力，主に身のまわりの事象（社会・自然・文化など）にかかわる力である。また，これは，生活に必要な事柄の知識・技能及びその知識・技能を働かせる力で成り立っている。③自分ができたことや分かったことからもつ心的なエネルギーである「自信・やる気」である。



豊かな生活を営む子どもをはぐくむ教育課程の創造とは，自分なりの判断を通して，身のまわりの事象にかかわり，そのかかわりの成果を感じながら，生きがいのある生活が送れるように，上述した資質や能力が一人一人に身に付く教育の営みのことである。そのために，将来を見越し，子どもに関係する人々が連携し，一貫した支援を行っていく教育活動をもとに，身のまわりの事象へのかかわりを強めることが大切になってくる。

豊かな生活を営む子どもの姿を次のように考える。

- ○　学びを通して，生活を充実させたり身につけた力を生活にいかしたりしながら，学ぶよさを感じている子ども　（学ぶ意義）
- ○　身のまわりの事象とのかかわりを通して，生活にいきる知識・技能やその用い方をとらえていく子ども　（かかわる力）
- ○　自分の考えや行動と成果をつなげて振り返るとともに，新たな事象に対して働きかける意欲や見通しをもつ子ども　（自信・やる気）

【表1　豊かな生活を営む子どもをはぐくむための障害児教育の基礎基本】

意義	学びにおける活動の楽しさなどから，やり甲斐や，今の生活への充実感を感じている。 学ぶ過程や結果において，身につけた事柄が役に立つことや生活にいかせることが分かる。		
かかわる力	A 能力 実体的学力	自分自身	衣服の着脱や食事，排泄，あいさつ，移動，衣服の調整，身だしなみ，手洗いやうがいなど，主に自分自身にかかわる内容で，基本的な生活習慣を身につけていく上で必要なものである。
		人	自分の意志を伝えたり，行動を抑制したりしながら人間関係を築いていく力や決まりやルールを守る力など，主に身のまわりにいる人々とかかわる内容で，集団生活を営む上で必要なものである。
		身のまわりの物事	身のまわりの社会・自然・文化とかかわる内容で，充実した生活を営む上で必要なものである。
	B 能力 機能的学力	知識・技能を働かせる力	思考力・判断力，表現力，問題解決力，見方・考え方，感性など，身につけた知識や技能を働かせるものであり，生活をよりよくかえていくために必要なものである。
自信やる気	様々な事象にかかわることができた自分や将来への自信と，そのような自信から生まれる生活への期待感であり，様々な事象へのかかわりの原動力となる心的なエネルギーである。		

Ⅱ　かかわりを強める活動を位置づけた生活をつくる学びの展開

障害児教育部

1　教育的ニーズと個別の教育支援計画

一人一人の教育的ニーズを把握し，個別の教育支援計画を策定する。教育的ニーズとは，将来を見通した一貫性と，子どもにかかわる人々が同じ課題や支援の意識をもつ共通性から，子どもの実態を見直したものである。個別の教育支援計画とは，個別の支援計画について教師が主体となって策定したもので，教育的ニーズに応じるツールである。したがって，将来への一貫性と関係者の共通性が必要である。具体的には，A 票としてこれまでのプロフィールについての記載，B 票として将来像，保護者や関係諸機関の子どもに対する見方や支援の在り方についての記載が必要である。さらに A 票と B 票をもとに教育課程を編成し，C 票として個別の指導計画を作成する。教育課程は，一貫性と共通性に裏付けられた目標・内容を選定・配列したものである。個別の指導計画は，教育課程を一貫性と共通理解から重点化し，具体化・個別化を図っていく。具体的には，目標，単元（題材）名，時数，時期，内容といったものを記載していく。

2　かかわりを強める活動を位置づけた生活をつくる学びの展開

生活をつくる学びとは，子どもが目的と見通しを明確にもち，子どもの将来及び子どもにかかわる人々から共通理解された内容を自分なりに判断し，目的を達成していくことである。結果，生活の中でできることが増え生活の質を高めたり物事を見る目が変わったりする。かかわりを強める活動を位置づけるとは，目的達成の過程に，人と旺盛にやりとりする状況や，子ども自身が判断を有する場面を設定することである。そうすることで，必要感や根拠をより強くもつことができる。具体的には，次の２つの学びで学習を展開する。生活ができる学びでは，実際的・総合的な活動を通して，生活に必要な事柄などを生活場面に応じて身につけたり，各教科等の学習で身につけた内容を活用したりすることを大切にする。かかわりを強める活動を位置づけることで必要感が高まり，目的達成のために対象への働きかけが強まる。生活がわかる学びでは，変化と繰り返しを通して，生活に必要な知識・技能，見方・考え方，判断力，表現力，感覚などを確かにすることを大切にする。また，かかわりを強める活動を位置づけることで自分なりの根拠をもち，対象の意味を確かにすることができる。かかわりを強める活動を位置づけた生活をつくる学びの展開とは，２つの指導形態における学びを通して，学ぶ意義，かかわる力，自信ややる気を確実に身につけさせていくものである。そのためには，人とやりとりする状況や，判断を有する場面のうまれる活動による学習を構想する。このことで，内容を確かに身につけたり活用したりできると考える。

3　特別支援プランの具体的構想

●　個別の教育支援計画の策定・活用・評価

個別の教育支援計画の策定とその活用をめざし，次のような手順で行う。

1　情報の収集
- 教師からの情報（行動観察・諸検査）
- 保護者からの情報（面談・アンケート）
- 関係諸機関からの情報（医療，療育，相談機関）

2　個別の教育支援計画の策定
- 将来像の設定（本人，保護者の願い，将来設計）
- 共通理解（保護者，関係諸機関）
- 具体化・個別化（個別の指導計画の作成）

3　活用と評価
- 日々の実践（個別の指導計画をもとにした実践）
- 形成的評価（個別の指導計画・教育課程の見直し）

4　総括的評価
- 総括的評価（個別の教育支援計画の見直し）

●　個別のアプローチ

個別のアプローチプランとは，個別の教育支援計画の活用にあたって具現化することであり，生活をつくる学びに，かかわりを強める活動を位置づけることで，より個に応じるものである。

○　教材開発の観点
- 豊かな生活に必要なもの
- 学習内容の意味理解と生活への適応をめざせるもの
- 人とやりとりする状況や判断場面が設定できるもの

○　学習過程の工夫

【生活ができる学び】
- 動機段階：集団活動のテーマや目的の共有，目的達成のための課題の意識化
- 熱中段階：集団の成員との実際的・総合的活動による課題解決
  ※必要感を高めるやりとり場面の設定
- 発展段階：学習の成果をいかした総合的な活動の実践，表現物の作成や発表

【生活がわかる学び】
- 動機段階：活動への動機付け，学習対象への焦点化
- 熱中段階：反復的，往復的な活動による指導
  ※根拠に着目するやりとり場面の設定
- 発展段階：発展的な場における学習の成果の適用

○　個別の支援
- 人への関心についての考慮
- 操作性や巧緻性の考慮
- 認知処理の考慮

障害児教育国語科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　ことばを広げる国語科学習

1　国語科での学ぶことと生きること

障害者の「豊かな生活」を考えると，社会参加と生活の質の向上が欠かせない。そのためには，受け身ではなく回りと積極的にかかわることが必要となる。その際，大きな役割を果たすのがことばである。ことばを使って考えたり，意思の疎通を図ったり情報を得たりして回りとかかわっていくことが「豊かな生活」につながる。国語科でねらっていることは，ことばを学び，主体的に表現する能力と態度を育てることであり，回りのもの・人・ことに対して積極的にかかわりあえるようにしていくことである。国語科を学ぶということは，回りとのかかわりに必要なことばを身に付けるとともに，ことばのよさを知ることである。今までの国語科では，まず意味がわかること，次に使うことに取り組むことが多かった。その結果，特定場面ではわかるがやりとりの場面などでは使えない，般化が難しい等の問題が起こってきた。「豊かな生活」につながることばとは，生活の中で使えることばである。そのためには，やりとりの中でことばを使う経験を多くし，ことばを使うよさや楽しさを子ども達が知ることが大切である。このことが，国語科学習の役割と立場であると考える。

2　国語科部主題についての説明

ことばを広げるとは，物の名称などことばの意味がわかり，自分の要求を伝えることから，考えるためやより正確な情報を伝えたり，目の前にないこと（経験したことや自分の考えなど）も伝えられたりできるようになっていくことである。つまり，ことばを使い，積極的に回りに伝えたり，情報を得たりしてやりとりをすることができるようになることである。そのためには，ことばの意味がわかることと，同じことばでもその時の様子から何を言っているのか，自分はどのように言えばいいのかがわかることが必要になる。そのためには，ことばの意味がわかる力，状況がわかる力，話す力（文法力），相手の考えや気持ちを理解する力（聞く力），ことばで伝えよう，やりとりをしようとする意欲が必要となる。ことばを広げる国語科学習とは，ことばの意味がわかり，使うときの様子からそれにあうことばや表す意味がわかり，相手がわかるように詳しく伝えたり，相手の言うことを受け止めたりできるようにしていく学習のことである。やりとりが必要な場を設定し，やりとりをしながらことばの様々な意味をとらえるようにしていくことが必要である。また，ことばを使いたいという意欲を起こさせるために，目的が達成できるなど，ことばを使って楽しい，よかったという経験をさせることが必要である。

- ○　ことばを生活の中で使うことで，気持ちを伝えたり回りとかかわったりできるよさに気づく子ども（学ぶ意義）
- ○　自分から伝えたり，働きかけや情報を受け止めたりして，回りとやりとりできる子ども　（かかわる力）
- ○　ことばのよさがわかり，自分からことばを使っていこうとする子ども　（やる気・自信）

【表1　豊かな生活を営む子どもをはぐくむための障害児教育国語科の基礎基本】

意義	聞く・話す，読む，書くことの知識や技能を身に付けることで，自分の気持ちを伝えたり回りからの情報を受け止めたりすることができ，自分がしたいことがしやすくなったり，自分がどうすればいいのかがわかりやすくなったりする。 ことばで誰にでもわかるように伝えられることで，人とのかかわりや生活の幅を広げることにつながる。				
かかわる力		観　点	子ども像の高まり		
	A能力 実体的学力	意味がわかる力	物の名称や動き，様子を表すことばがわかる。	特定の場面でのことばの意味がわかる。	いろいろな状況でことばの意味がわかる。
		聞く力	相手の話を興味をもって聞くことができる。	相手の話の大体の内容がわかる。	質問したり答えたりしてやりとりができる。
		話す力	身振りで気持ちを伝えたり，身振りとことばをあわせて気持ちを伝えたりすることができる。（1語文）	簡単なことばで言ったり，書いたりして気持ちを伝えることができる。（2～3語文）	状況に応じたことばを言ったり，文字で書いたりして伝えることができる。（多語文）
	B能力 機能的学力	状況がわかる力	声かけや真似を手がかりにして自分がどうすればいいのかがわかる。	ことばを聞いたり，文字を読んだりして自分がどうすればいいかがわかる。	回りの様子や活動の流れなどから自分がどうすればいいかがわかる。
		伝えようとする力	発声や動作などで，自分の気持ちを伝えようとする。	簡単なことばや文字で自分の気持ちを伝えようとする。	相手がわかるようにことばや文字で具体的に伝えようとする。
やる気・自信	ことばを使って回りとかかわる中で，ことばを使ってやりとりをすることで自分の気持ちが伝わったり，何をすればいいのかがわかりやすくなったりすることに気づき，ことばを使う楽しさや，伝わることの喜び，人とやりとりすることの楽しさを知る。 表現することに対して自信をもち，様々な場面で自分の気持ちを伝えたり，相手が言うことを聞いてそれに答えようとしたりして，回りと積極的にかかわっていこうとするとともに，わかるまで伝えよう・聞こうとするようになってくる。				

Ⅱ　やりとりするごっこ遊びの展開

障害児教育国語科部　　諏　訪　原　佳　子

1　副主題の意味

やりとりするとは，一方的なものではなく，お互いが相手を意識して伝えたり聞いたりして，目的や気持ちを共有することである。やりとりするごっこ遊びとは，役割とかかわりをもたなければならない場面を設定し，相手を意識しかかわっていくことで遊びが進んでいくものである。かかわる対象としてまずは対大人を考える。知的障害のある子ども達は身に付けたことばを学習場面以外で使えるように般化していくことが難しいことがある。日常生活では，そのことばだけが取り上げられることはなく，回りの状況（場や相手，時間，それまでの流れ等）と共に提示される。つまり，ことばと状況から意味をとらえることが必要となる。そこで，学習段階からごっこ遊びで実際にことばと状況が共に提示される場面の中で使えるようにしていくことで，般化されやすいと考える。やりとりするごっこ遊びの展開とは，ごっこ遊びの中で①役割を分担し②簡単な流れと③やりとりをする場を設定し，使いながらことばを身に付けていくことである。また，③を少しずつ変化させて繰り返すことで活動に広がりができ，ことばをことばのもつ意味と状況からとらえることができる。かかわりの中で使うことで，伝わったかどうかわかりやすく，相手や正しく使おうということを意識しやすい。このことは，生活に生きる基礎的・基本的な力を確実に身に付けさせ，社会参加へとつながっていくものと考える。

2　学習プランの具体的構想

●　ごっこ遊びの教材化

取り上げることばは，大まかな意味はわかるが使えるまでには至っていないものとし，未知のものは，生活や他の学習で耳にしたり様子を見たりする経験をさせて取り上げるようにする。また，生活に身近な語彙からはじめ，次に形容詞など詳しくすることばを取り上げることで，意図をくみ取る手がかりとなることばを増やしていく。やりとりをして目標が達成できる遊び（目的地に行ける，欲しい物が得られる等）を考えていくようにする。

教材化の視点として以下のことが挙げられる。

○　見たり経験したりしたもので，共有できるもの
　・学校生活に関したもの・本などをもとにしたもの
　・社会生活の中で活動が決まっているもの
○　繰り返しの場面が設定できるもの
○　発達段階に応じたことばが含まれ，そのことばを使ってやりとりができるもの

●　活動構成の工夫

やりとりをしながらごっこ遊びができるようにするために，下の図のような活動構成を行う。さらに，活動の段階で，子ども達が活動の流れやことばをとらえやすいように，発達段階等を考慮して指導をしていく。であう段階でごっこ遊びに対しての興味と，活動への見通しをもたせ，つかう段階では，同じようなやりとりを繰り返しながら，ことばをそのものの意味だけでとらえることから，ことばと状況を合わせてとらえていけるようにしていく。ひろげる段階では，つかう段階で使ったことばを使う違う場面を設定したごっこ遊びを行い，様々な場面で使えるようにしていく。

●　やりとりできるための活動と支援

ことばの発達段階に応じたヒントカードの提示や，個に応じた声かけを行う。ヒントカードの提示にあたっては，人とのかかわりの中など複数の要素がある中でことばをとらえるのが得意な子どもに対してはやりとりの中で提示し，複数の要素がある中では難しい子どもに対してはやりとりが始まる前に提示する。提示の仕方を工夫することで，よりことばがとらえやすくなると考える。

	であう段階	つかう段階			ひろげる段階
ねらい	どのようなごっこ遊び・お話なのか見通しをもつことができる。	ことばの意味と使い方がわかり，状況に応じて使ったり，新たなことばを加えて，より詳しくして相手に伝えたりすることができる。			つかう段階とは違う場面でことばを使うことができる。
活動	○　絵本や紙芝居，ビデオなどを見た後に，役割を決めて簡単な試しのごっこ遊びを行う。	動機段階 ○　パネルシアターなどで活動の流れを確認する。	熱中段階 ○　役割を決め，やりとりをしながらごっこ遊びをする。	発展段階 ○　使えるようになったことばを確認する。	○　熱中段階とは違う場面のなかで，状況に応じてことばを使う。
内容	○　ごっこ遊びの中で，どのような活動やことばを使ったやりとりをするのかつかむこと	○　活動の流れと，やりとりをすることを意識すること	○　場の状況に応じてどのようなことばを使ってかかわるのか考えること	○　ことばが使えるようになった達成感や成就感を味わうこと	○　違う場面で，前時までに身に付けたどのことばを使うかわかること
支援	※　紙芝居や絵本の提示 ※　遊びで使う道具や場面の提示 ※　教師や友だちと一緒に活動して，真似ができるようにする。	※　活動の場の図の提示や流れの確認をし，全体の様子や流れが把握できるようにする。	※　動作やことばのモデル提示 ※　ことばの発達段階に応じたヒントカードの提示と個に応じた声かけ	※　場面の絵とことばカードの提示 ※　模擬の場での使ったことばの振り返り	※　前時までに使ったことばカードの提示 ※　前時までの活動の写真や使った道具，流れ図の提示

【図１　ごっこ遊びにおける個に応じた支援と活動】

3　指導の実際

第1・2学年　単元

のりものごっこをしよう!
～みんなででかけよう～

(1) 単元の目標

1　のりものごっこでのことばのやりとりに興味をもち，ことばを使ったやりとりに楽しんで取り組むことができる。
2　お客さんになってあいさつをしたり，名詞や動詞を使った１語文や，名詞・動詞・形容詞を使った２～３語文，多語文を使って場の状況に応じたことばを使ったり，やりとりをしたりすることができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，のりものごっこの中で場に応じたことばを使って，運転士さんや友だちとやりとりを行いながらことばを身に付け，様々な場面で使えるようになったり，伝えるために詳しく言ったりできるようになることをねらいとしている。具体的には，①場に応じたことばを使うこと②相手を意識して伝えること③相手の話を聞きそれに答えることである。そのために，キップ売り場や改札口，駅で降りたときのお店などやりとりが必要となる場を設定したり，線路の途中に大きな岩や信号を設置しことばで伝えなければならない状況をつくる。また，複数の駅でキップを買って汽車に乗り出かけていくという活動を繰り返すことで，子ども達にとっては活動ができたことの楽しさを味わわせ，さらに身に付けることばを高めていけるように活動を構成する。それぞれの活動において，理解の仕方や人とのかかわりが得意か，物とのかかわりが得意かなどを考えて個に応じた支援を行い，子ども達がことばを身に付けやすいようにしていく。

(3) 学習の流れと考察

【表２　児童の実態と個別の目標】

	c児（AG）	d児（BG）
実態	○　身の回りの物の名称を言われれば，それを選ぶなど物と名前が結び付いているが，取って欲しいときなど自分から言うことはない。「これ」と言うだけで指さしも少ないので，伝わらないことが多い。友だちの真似をして新しいことばを使おうとすることがある。	○　自分のしたことなどをことばで伝えようとする。「～した」「ころんだ」「○ちゃんが～した」など，様子を伝えることばの語彙が多い。決まったパターンのことばが多く，聞かれたことに答えてやりとりをすることや場面に応じて使うことは難しい。
目標	○　「きっぷ」「のる」「おりる」などのことばを駅や汽車への乗り降りの際など，場に応じて１語文や１語文と動作を合わせて使うことができる。	○　「すすむ」「とまる」「まがる」などのことばを，進んでいる途中で信号があるなどの場に応じて，２，３語文で使うことができる。

第１次：　1/5時
絵本やビデオを見て，乗りものと乗りものでのやりとりに興味をもち，簡単な汽車ごっこをする。

絵本ではｃ児は汽車を指さし「きしゃ」と言い，ｄ児は乗客の様子を見ながら「食べてる」と言ったり，駅の回りの様子を見て「お店屋さんがある」と言ったりしていた。ごっこでは，両児とも，台詞の真似をしていた。

第１次では，のりものごっこを自分たちもしたいという意欲をもつことと，運転士さんとやりとりをするということがわかることをねらいとしている。そのために，簡単な内容で繰り返しの場面がある汽車の絵本やさまざまな汽車が出てくるビデオを見せ，その後，試しのごっこ遊びを行った。

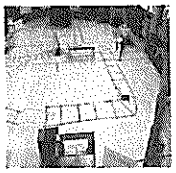
考察１

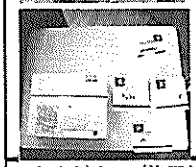
関係のあることをつぶやいたり，台詞の真似をしたりしており，絵本の内容に興味をもち自分たちもしたいと思ったのだと考える。これは絵本やビデオの提示が活動のイメージをとらえやすく，興味をもつことに有効であったと考える。

第２次：　2～4／5時
運転士さんや駅員さん，お店屋さんとやりとりをする中で，場に応じたことばを使う。

第２次では，切符を買う場面や汽車に乗っている場面，買物の場面で，その場に応じたことばを使ったやりとりができることをねらいとしている。そのため，真似ができる場や切符売り場，お店屋さんなどのやりとりが必要な場面の設定や線路に岩や信号を置くなどした。

c児	d児
（本時でのねらい） 「きっぷ」のことばの意味がわかり，切符を買う場面や運転士さんとのやりとりでつかったり，自分から運転士さんやお店屋さんに話しかけたりすることができる。	（本時でのねらい） 「まがる」「のる」のことばの意味がわかり，岩にぶつかりそうな場や汽車にのる場面で運転士さんに伝えたり，伝わるまで伝えようとすることができる。





・「きっぷ」を発語させるための切符売り場，改札口の設定，買う場面，降りる場面での切符のやりとりの設定
・「のる」「おりる」を発語させるための駅とお花屋さん，果物屋さんの設定
・やりとりの手がかりとなるような，音声カードをつけた絵カードを，それぞれの場面の近くに設定
・真似できる順番やペアの設定

〈子どもの様子〉
切符売り場では，T（教師）：何がいる。→C（本児）：汽車のカードを取る→T：（切符の提示）同じのどれ？→C：カードを選ぶ。音声カードを聞いて「きっぷ」
２番目のキップ売り場では，
C２（他児）：「切符ください。」→C：「きっぷ」→T：これ？（切符の提示）→C：笑顔→T：これ？（違うカードの提示）→C：表情を曇らせる→T：ふたつのカードの提示→C：①「きっぷ」指さす→T：切符を渡す。→C：笑顔

お家に戻った場面では，
T：切符の提示→C：「おはな」→T：「お花屋さんに行くとき使ったね」→C：②「きっぷ。のった。」→T：「切符を買って乗ったね。」

【写真１　聞いてみよう。】

・「のります」「降ろしてください」を発語をさせるための運転士さんとのやりとり，駅の設定
・「すすむ」「とまる」を発語させるための信号の設定
・「まがる」を発語させるための進路を塞ぐ岩と曲がった線路の設定
・やりとりの手がかりとなるヒントカードの提示

〈子どもの様子〉
C２（他児）：「のせてください」→C（本児）乗ろうとする→ひもが上に上がっていて乗れない→T：「どうしましたか」→C：③「のります。」
３つめの駅で
T：着きました。→C２「降ります。」→C：無言→ひもが上がっていて降りられない→C④「降ろしてください。」
岩の場面で
C：⑤「あぶない。」→T：「なに？」と聞き返し立ち止まる→C：無言→T：進もうとする→C：自分が立ち止まり⑥「曲がってください。」
２回目の岩の場面で，岩が近づくと，C：「曲がって。」

【写真２　曲がって！】

考察２

①からｃ児は切符がわかり，②では切符を使ってどうしたのかを言うことができている。つまり切符のことばの意味と，②で切符が提示されていること，教師が言ったことばなどから，「のる」ということばを加えている。ことばと場を合わせてとらえ，より場にあったことばを使っている。ｄ児は，③④から乗れない降りられないという状況で，ことばを使わなければならないことが意識できたのだといえる。そして，ことばを使うことで自分がしたいことができるというよさを味わうことができている。⑤⑥より「曲がって」だけでなく「あぶない」ということばも出ている。このことは，実際の場を経験することでことばを引き出すことができたのだと考える。以上のことから，少しずつ変化をさせながら活動を繰り返し行ったことや，実際に活動しながらことばを使うようにしたこと，言わなければならない場を設定したことは，場に応じたことばを引き出すために有効に働いたと考える。

第３次：５/５時
前時に使ったことばを使ってバスごっこをする。

ｃ児は，自分から「きっぷ」ということばを言ったり，「おりる」と言っていた。ｄ児は，ぶつかりそうになると「止まって」，自分が降りたいところを通り過ぎようとすると「おります。止まって」と言うことができた。

第３次は，汽車ごっこで身に付けたことばを他の場面でも使えることをねらいとしている。そのために，同じようなことばを使い，活動も同じようなバスごっこを設定する。

考察３

子ども達は自分から進んで活動に取り組み，自分からことばを使って伝えようとすることができた。このことは，活動の流れやことばをあまり変えなかったこと，子ども達にとって見通しがもちやすく，自分からことばを使うことにつながったのだと考える。

【全体考察】

考察１と考察２からわかるように，子ども達は，実際に活動しながらことばを使うこと，ことばを使わなければならない場を設定することで，場に応じたことばを使い，さらに関係することばを使う姿が見られた。また，考察３で乗り物と場を変えても言えたことから，場の状況を考え，それとことばを結び付けて使っているということがわかる。以上のことから，ことばを身に付けるために，子ども達が楽しんで活動しながら，ことばを使っていくことができるごっこ遊びを行ったことは有効であったと考えられる。人とのかかわりや実際の活動の中でことばを使いながら身に付けることで，ことばと意味の１対１対応ではなく，場の状況とともにことばの使い方，さらに関係することばや詳しくすることばをとらえることができたと考える。課題としては，ごっこ遊びの系統性，個に応じた活動の流れの工夫や，ことばの選定と系統性について考えていきたい。

障害児教育体育科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　状況に応じた動きを生み出す体育科学習

1　障害児教育体育科と豊かな生活を営むこと

ノーマライゼーションの理念に基づくこれからの共生社会を考えるとき，知的に障害のある子どもが，自立し，自ら積極的に社会にかかわっていくことが望まれる。そこで，障害児教育体育科でねらうものは，自らが身体活動を積極的に行い，健康の増進と体力の向上を図り，運動の技能を高めていくこと，また，運動を通してきまりを理解したり，友達とのかかわりを深めたりすることといった，社会性を培うことであると考える。このことから体育科の指導については，何回も繰り返し運動して技能を中心に習得させることだけでなく，自らが運動に積極的に働きかけることができるようになることが大切になる。そして，運動するなかで，子どもが自ら判断し，動きをつくることで，運動する楽しさを味わうことができると考える。このことが，運動に積極的に参加する態度につながり，将来，自分のライフスタイルにあった運動を行うことができるようになり，豊かな生活を営む上でその基盤となる健康を増進させ，体力を向上させるとともに余暇活動の充実などの生活の質を高めていくことができると考える。

2　障害児教育体育科主題についての説明

状況とは，活動の場や一緒に活動する人が変化していくそのときどきの様子から，自分でどのように動くのかを判断する場面のことである。状況に応じた動きとは，自分が動く判断をして目的に合った方向やタイミングで体を動かすことである。よって，状況に応じた動きを生み出すとは，運動する場や共に運動する人によってつくられる場面の変化によって，体を動かすタイミングや方向などを自分で判断し，目的に向かって積極的に動作で表すことである。状況に応じた動きを生み出すには，子どもが楽しみながら運動することができるという学ぶ意義を感じながら，自分から運動にかかわり，できた喜びを味わうとともに運動への自信をもつことが必要であると考える。特に，運動へのかかわりとして，①運動のきまりをとらえる力，②動作で表す力，③状況を判断する力，といった３つの力が必要であると考える。運動のきまりをとらえる力とは，運動する空間や時間，ルールなどの運動するためのきまりについて理解することである。動作で表す力とは，おかれている状況によって自分で判断した動きを行うことである。状況を判断する力とは，場や人などによってつくられる状況をとらえ，自ら動くタイミングや方向などを即座に決めることである。この３つの力をそれぞれ高めていくことで状況に応じた動きを自分で生み出すことができると考える。状況に応じた動きを生み出す体育科学習とは，運動する場や人とのかかわりにおいて，子どもが自ら状況を判断して動きに表しながら，運動する楽しさを感じ，達成感や成就感を味わうことのできる学習のことである。この学習を行うには，子ども一人一人の実態のとらえ方を，きまりの理解や運動技能だけでなく状況判断の在り方などにも目を向けていく必要がある。そして，子どもの障害特性や日頃の運動へのかかわりから，さらには，子どもの将来像をふまえた運動へのかかわり方を生かして学習を進めていくことが大切になる。

○　体育の時間や他の時間で自分から進んで運動を楽しみ，運動する心地よさを感じる子ども（学ぶ意義）
○　活動する場の位置や変化，友達の動きに応じて自ら動きを生み出し，発揮する子ども　（かかわる力）
○　何度も繰り返し運動しながら意欲的に活動することができる子ども　（やる気・自信）

【表1　豊かな生活を営む子どもをはぐくむための障害児教育体育科の基礎基本】

意義	運動対象と積極的にかかわるなかで，運動を楽しみながら継続することで基礎的な体力が育ち，集団のなかで自分から積極的に運動することができる。 運動を繰り返し，動きを自ら生み出し身に付けることで，運動技能を習得することができ，日頃から積極的に運動にかかわり運動に親しんでいくことへとつながる。				
運動へのかかわり		観　点	子ども像の高まり		
	A能力 実体的学力	きまりをとらえる力	活動をしながらきまりに気付くことができる。	⇒	きまりを守り，かかわりながら運動を楽しむことができる。
		動作で表す力	活動する場において，自分から進んで動きを発揮することができる。 状況によって体を動かすことができる。	⇒	場や人をよく見てとらえ，素早く動きを発揮し，活動を楽しむことができる。 状況をとらえながら自分からすぐに動くことができる。
	B能力 機能的学力	状況を判断する力	場や友達の動きに合わせて自分が動く判断をすることができる。 簡単な場によって，自分から動くことができる。	⇒	場や友達の動きを見ながらどう動くのか判断することができる。 活動の場と友達の動きから動きをつなげることができる。
自信	運動対象への興味をもち，活動の場や一緒に活動する友達とかかわりをもとうとしたり自分から進んで活動したりして繰り返し課題に挑戦し，「できた」喜びを味わうとともに次の活動へ自信をもって取り組むことができる。				

Ⅱ　場を段階的に変化させる攻守型ゲームの展開

障害児教育部　　下　川　勝　彦

1　副主題の意味

場を変化させるとは，ゲームを行う空間をねらう動きが易から難へ向かうようにすることや，自ら動きを生み出していくために，活動する人の数や位置などから生まれる状況を意図的につくることである。場の変化には２つの方向性がある。一つは，自分たちで動きをより高めていくような場を題材を通して変化させることである。もう一つは，１単位時間の中で，子どもが動きを生み出すことのできるように仕組む場の変化である。場を段階的に変化させるとは，題材を通して変化させる場を１単位時間ごとに状況が多様になるように場の条件を変えていくこと，また，子どもが自分で動きを生み出すために，１単位時間のなかで場の条件を変えていくことである。場を段階的に変化させることで，徐々に状況が多様になり，子どもが自ら動く方向やタイミングなどを判断して動きが生み出される。攻守型ゲームとは，２つのチームで対戦を行いながら，攻める側と守る側で得点を競うものであり，同じ活動の空間のなかで集団対集団で競い合いながら友達とかかわることのできるものである。

場を段階的に変化させる攻守型ゲームの展開とは，子ども一人一人が，繰り返し活動していくなかで，場やかかわりを変化させることにより生じる状況に応じた動きを自ら生み出していく学習構想のことである。この学習構想では，将来を見据えた，生活をつくる学びを展開していくものであり，ゲームづくりやゲームの場を工夫することが必要となる。

2　副主題の具体的構想

●　ゲームづくりの視点

ゲームの場を状況が単純なものから複雑なものへと変化させていく。ゲームの種類・形態については，表２に示すとおり，鬼遊びと攻守分離型と攻守混合型ゲームで設定する。攻守分離型のゲームについては，バレーボールやテニスを基本としたものであり，１対１の対戦から人数を増やしていき，得点となる，ねらうべきゴールや的なども増えていくように場が変化していく。攻守混合型のゲームについては，プレイする位置をグリッドなどで固定し，パスやシュートをしながら得点するものであり，パス，シュートができる条件をつくり，徐々にその条件を減らしていき，プレイする位置を自由な場にしていきながら攻守混合型のゲームへ向かうものとする。

表２　ゲームづくりの視点

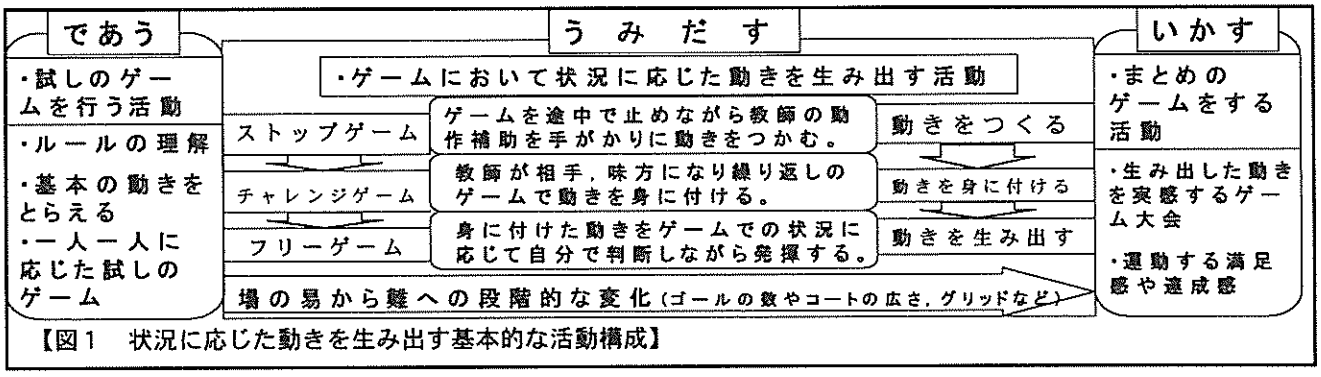
ゲームの形態	状況が単純 ⟹	状況が複雑
鬼遊び	走る方向が一定，または双方向 復繰的な場	走る方向が複数 動きが多様になる場
攻守分離型 ボールゲーム	ねらうものが，固定されている。 1対1での対戦	ねらうものが，多数設定されている。 複数対複数での対戦
攻守混合型 ボールゲーム	プレイする位置が固定されている。 2対2での対戦	プレイする位置が自由に設定されている。 複数対複数での対戦

●　活動構成の工夫

活動構成としては，まず，新たなゲームに出合い，試しのゲームで課題となる動きを体験しながらゲームのきまりをとらえられるようにする。次にゲームの場を題材を通して変化させ，状況の判断と動きを易から難になるように設定し，動きを自分から生み出していくことができるようにする。そうすることで，ゲームでのいろいろな状況に応じた動きが発揮され，最後のゲーム大会で活動した満足感を味わわせることができる。また，１単位時間に３つのゲームを仕組んでいく。まず，①ストップゲームで，ねらいとする動きをつかみ，②チャレンジゲームで繰り返し動きを身に付ける。さらに③フリーゲームで身に付けた動きをもとに，ゲームでの状況に応じた動きを生み出せるようになると考える。

●　一人一人の実態に応じた支援

子どもの運動の実態に応じたゲームでの支援を工夫していく。子どもの実態のとらえ方としては，ゲームのきまりの理解，運動技能はもちろんのこと，状況を判断して動きに表す上で，①ゲームを行いながら一緒にプレイする友達の動きや声かけに反応できる子ども，②目標とする方向や位置を強く意識することができる子どもという傾向があると考える。よって，それぞれの実態に応じて，より友達を意識させたり，より目標とする位置や方向を意識させたりするための場の工夫や動きのモデル演示，声かけを行っていく。



【図１　状況に応じた動きを生み出す基本的な活動構成】

3　指導の実際

第5・6学年　題材

ねらって　つなごう!
ターゲットスローゲーム

(1) 題材の目標

1　ターゲットスローゲームのルールを理解し，状況に応じた動きを生み出すことで，ゲームを楽しみながら体を動かす心地よさを感じることができる。
2　ボールを投げる，転がす動きや動く相手と同じ方向に素早くボールを投げたり方向を決めて投げたり転がしたりすることができる。

(2) 題材の考え方

本題材の「ターゲットスローゲーム」は，コートの中にそれぞれプレイするゾーンを決めて，パスをつなぎながらシュートして得点をとるという攻守混合型ゲームである。攻撃については，自分のゾーンにてボールを投げたり転がしたりして，味方へパスをする。パスを受けた子どもは，シュートゾーンにいるので，ゴールへ向かってシュートする。いわゆる同じチームの味方をターゲットとしてパスをすることとゴールをターゲットとしてシュートをするというゲームである。そのなかで，ボールを持って相手を見ながら横に走ってパスやシュートをするタイミングをつかんだり，走りながらパスをしたりするなどの状況に応じた動きを身に付けることができる。守備については，混合ゾーンでは，パスをさせないようにすることや相手のボールを奪うことなどが主な活動になる。そこで，ボールを止める，はじくなどの動きや動く相手を見て追いかける動きも生み出すことができる。

(3) 学習の流れと考察

【児童の実態】

	Aグループ　a児（5年男子）	Bグループ　b児（6年男子）
実態	○　ボールを投げたり捕ったりすることはできるが，ゲームのなかで友達を意識することはあまりなく，目標とする方向や位置を意識する傾向にある。	○　素早くボールを投げたり捕ったりすることは苦手であるが，友達にパスをする意識が強く，一緒にプレイする友達の動きや声かけに反応する傾向がある。

第1次：1／5時
新しいゲームに出合い，きまりを理解するとともにボールを投げたり転がしたりする動きをつかむ。

写真1　それっ，とってね。

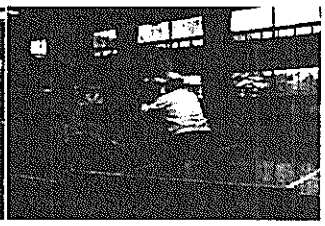


写真2　せんせいにとられないぞ。

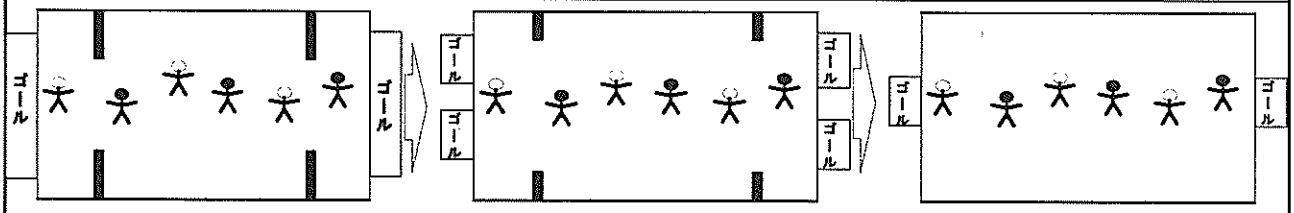
第1次は，ボールを投げる動きをつかませるために，友達に向かってボールを投げるパスゲームと教師にとられないように友達にパスをするパスゲームを設定した。子どもたちは，友達に向かってボールを投げたり教師からとられないように山なりのボールを投げたり転がしたりすることができた。

考察1

友達にボールを投げる動きをつかませる上でまず，友達同士でパスをするゲームと教師が間に入って友達にパスをするゲームを設定したことでゲームでの動きであるボールを投げる転がす動きをつかませることができた。このことは，友達や教師の位置を見ながら山なりのボールを投げたり転がしたりする姿から有効であったと考える。

第2次：2～4／5時　　2つのチームに分かれて，3対3での対戦で「ターゲットスローゲーム」をして楽しむ。

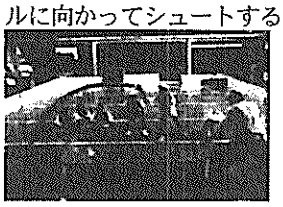
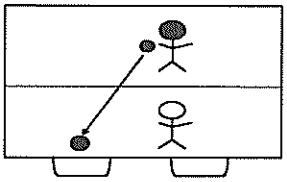
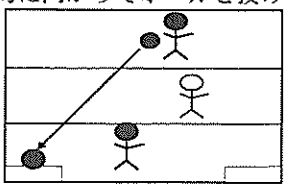
ターゲットスローゲームの段階的な場の変化と本題材での3つのゲームの内容



（第2時：広いゴールで的が大きい。）　（第3時：ゴールが2つで的が小さい。）　（第4時：ゴールが狭く的がない。）

第2時から第3時は，ゴールの選択とパスをするための的を小さくすることで相手の位置を判断して動きを発揮し，第4時では，より素早い判断と動きができるようにゴールを小さくしたり的をなくしたりしている場になっている。

①ストップゲーム	ゲームを途中で止めて，得点につながるような動きを教師のモデル演示や動作補助によってつかむ。
②チャレンジゲーム	相手の位置や的の位置を手がかりにしてパスやシュートをする動きを教師を相手に繰り返し身に付ける。
③フリーゲーム	相手のいる位置や的の位置をとらえ，教師の声かけにより自分たちでゲームを楽しむ。

Aグループ　a児の様子	Bグループ　b児の様子
（ストップゲームでの様子） a児は，２つのゴールの一方に相手がいてもそちらにシュートを続けた。しかし，途中で教師と一緒に空いている方のゴールを確認し，シュートすることに気付いた。	（ストップゲームでの様子） b児は，仲間の方向にパスをして，相手からボールを奪われていた。しかし，途中で教師のモデル演示により的に止まったボールが仲間につながることに気付いた。
（チャレンジゲームでの様子） 教師を相手にして，人がいない方のゴールにシュートするチャレンジゲームを繰り返し行い，空いているゴールに向かってシュートすることができた。（写真３）  写真3 あいたほうにシュートだ！  チャレンジゲームの場	（チャレンジゲームでの様子） 教師を相手に左右の的に当てるゲームを行い，相手に捕られない方向にボールを投げる動きを繰り返し行い，的に向かってボールを投げることができた。（写真５）  チャレンジゲームの場 写真5 とられないようにパスだ。
（フリーゲームでの様子） 相手がいない方のゴールを指さしてシュートしたり，相手の動きにより即座に向きを変えてシュートしたりして得点をとることができた。（写真４） 写真4　むきをかえてシュートだ！	（フリーゲームでの様子） 的に向かってボールを投げたり転がしたりして味方にパスをすることができた。特に相手が素早く邪魔をするときなどは，より的に向かってボールを投げたり転がしたりする動きが見られた。b児は，味方を意識するだけでなく，相手の位置を見ながらボールを投げる方向を判断して動きを生み出していった。 写真6　それっ，パスだ。

考察２

a児については，フリーゲームで，自分で空いているゴールを判断してシュートをすることができた。これは，ゴールが２つという場の変化のなかで，ストップゲームで，ゲームの途中で相手がいないことを意識させ，空いたゴールにシュートするといった動きをつかみ，チャレンジゲームで，教師が相手になり，空いているゴールに投げる動きを繰り返し行ったからである。b児も，的に当ててパスを通す動きを生み出した。これも，ストップゲームで的を意識したパスをした後，チャレンジゲームで教師が相手となり赤と白の的を意識させて投げる動きを引き出すことができたからである。

第３次：５／５時
これまでの学習を生かしたゲーム大会を開き，楽しくゲームができた達成感を感じることができる。

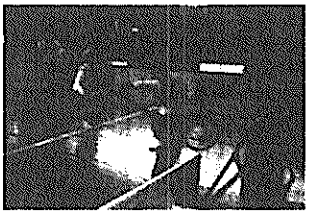


写真7　やった　とくてんだ。

写真8　それ　パスだ。

第３次は，これまでのターゲットスローゲームでの動きを生かして，ゲーム大会を行った。このゲーム大会では，フリーゲームを中心に２回の対戦を行った。a児は，自分で左右に走りながら味方にパスをしたりシュートしたりする動きが随時見られた。b児は，パスを受ける味方の友だちに声をかけ，相手をゆさぶりながらボールを投げたり転がしたりする動きを随時発揮することができた。

考察３

子どもたちは，これまでに生み出した動きをゲームのなかで発揮しながらゲームを楽しむことができた。これは，うみだす段階でのフリーゲームの場を用いてのゲーム大会を行ったことが有効に働いたからである。

【全体考察】

考察２のように，段階的にゴールの幅や数を変化させたことやパスの的を減らしたことといった題材を通しての場の変化とストップゲームでの途中で止めての動作補助や動きの繰り返し，チャレンジゲームでの教師が相手となりゴールを意識させながら繰り返しシュートする活動が，フリーゲームでの相手の位置に応じた動きを生み出すことへとつながっていったと考える。このようにグリッドを用いた攻守型ゲームにおいては，場を題材と１単位時間で変化させ，一人一人の実態に応じる動作補助やモデル演示，声かけなどによってゲームで動きが生み出されることが明らかになった。課題は，より状況が多様になるようにグリッドを少なくした攻守混合型によるゲーム学習の在り方を究明することである。

障害児教育生活単元学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自分たちで生活をひろげる生活単元学習

1　生活単元学習での学ぶことと生きること

障害のある人も，障害のない人も，できる限り同様の生活ができるように生活環境を整えていくというノーマライゼーションの理念のもと，我が国では，障害の有無にかかわることなく，誰もが人格と個性を尊重して，互いに支え合う共生社会をめざしている。そして学校教育では，障害のある子どもの自立と社会参加を見通した取り組みが求められている。

このような社会の動向を受け，生活単元学習が究極的なねらいとしているのは，将来的な自立に向け主体的に自己の力を発揮し，社会参加に向け他者とかかわる力を身に付けて，自立的な生活を送り，豊かな生活を営んでいくことである。そのためには，できることを増やしたり，できないことは他者へ要請したりしてできるようになるとともに，地域社会の一員として様々な人々と交流していけるようにすることが大切である。これらを課題達成の過程で身に付ける学習が生活単元学習である。そのために，子どもが主体的に活動に取り組んだり，他者へ意志を伝えたり，他者からの要請に応じたりできるようになることが大切である。

2　生活単元学習主題についての説明

自分たちでとは，やってみたいという目的について，その達成を強く願いながら，自分でできるようになることである。また，できないことは他者に手助けを求めてできるようになることである。その際，目的の達成を一人で行うのではなく，同じ目的をもった者同士でやりとりを行いながらできるようになることである。自分たちで生活をひろげるとは，生活上の目的を達成するために，自分から目的達成に向けて解決すべき課題に取り組み，その必要な知識や技能を身に付けたり，他者にしてくれるように意志を伝えたり，自分の考えや思いを伝えたりして課題が達成できるようになるとともに，課題が達成できた成就感を味わうことである。そのためには，①自分から課題に取り組む主体性，②結果の見通しをもつ力，③課題を解決するための意志を伝える力，④課題達成に向け他者からの要請に応じる力，⑤課題達成に伴う知識や技能などを身に付けることが必要である。自分たちで生活をひろげる生活単元学習とは，やってみたいという目的を達成するために必要ないくつもの課題を他者と協力したり役割を分担したりして解決し，目的の達成を図りできることを増やしていくことである。同時に目的達成の成就感を味わうことである。そのためには，目的達成に向けた意志と強い欲求をもって学習に取り組ませたり，お互いにやりとりを行いながら協力して目的を達成するために必要な複数の課題を達成できるようにさせたりすることが必要になる。

- ○　生活上の目標を達成するための一連の課題達成活動により，自立や社会参加に必要な事柄を身に付ける必要性やよさを感じている子ども　（学ぶ意義）
- ○　他者に意志を伝えたり，他者からの要請に応じたりするとともに，主体的に課題に取り組み，課題の達成に必要な事柄を身に付ける子ども　（かかわる力）
- ○　自分たちの力で目的が達成できた成就感と充実感をもち，身に付けたことを新たな場面にいかそうとする子ども　（やる気・自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための生活単元学習の基礎基本】

意義	自分たちの生活上の目標・課題を達成・解決するという結果への見通しをもつとともに，自分たちの力で解決し，自立や社会参加に必要な事柄を身に付けるよさを感じている。 自分たちの生活をより楽しく，快適にするための目的を見出し，他者と協力しながら目的を達成するよさを感じている。			
かかわる力		観　点		
	A能力 基礎能力	課題解決に必要な知識技能	経験してきたことに関する知識や技能を身に付けている。 ⇨	解決したい課題に即した知識や技能を解決に伴いながら身に付けている。
	B能力 機能的能力	主体性	活動自体が楽しくて，自分から進んで取り組む。 ⇨	活動に取り組む意味を理解して，自分から考えながら活動に取り組む。
		結果を見通す力	どんなことをするのか大まかに理解し，指示されたことに取り組む。 ⇨	結果への見通しとともに，どんな方法にすべきかを知っている。
		意志を伝える力	自分の言いたいことや思っていることを動作を用いて相手に伝えようとする。 ⇨	自分の言いたいことや思っていることを相手にわかりやすく伝わるように言う。
		要請に応じる力	相手から何か言われていることを意識したり取り組んだりことができる。 ⇨	相手から言われた意図を理解して取り組むことができる。
自信	生活上の目的を達成し，生活をより楽しく，快適にすることができたことへの成就感や充実感を味わうことができる。 友達と協力して課題を達成することができたよさを実感することができる。			

Ⅱ　意欲を大切にする協力活動を位置付けた学習の展開

障害児教育部生活単元学習　　原　田　敏　男

1　副主題の意味

意欲を大切にするとは，成し遂げたいという意志（方向）と欲求（エネルギー）を一人一人の子どもたちにもたせ，意志を成し遂げ，欲求が満たされるように支援をすることである。成し遂げたい欲求をもたせるためには，驚きや感動，ズレを感じさせる教材やＧＴと出合わせる。意志をもたせるためには，教材との出合いを通して，いくつかの課題を解決していけば成し遂げられそうだという内容と結果の見通しをもたせる。そして，活動を進めながら課題を達成したり，新たな課題に取り組んだりし，最初に出合った教材やＧＴとのかかわりを通しながら見通しを強固なものにさせたり，結果が近づいていることから欲求を高めさせたりするのである。意欲を大切にする協力活動とは，体験や見学を通して共通の意志と欲求を伴った目的を設定し，その目的を達成するために生じる困難な課題をペアを中心とした少人数の子どもたちがかかわりながら解決することである。かかわりとは，意志を伝え合ったり力を合わせたり，役割を分担したりすることである。ペアを組ませるよさは，課題解決の自覚と責任感をもたせることや成就感を強く感じさせることができ，活動の仕事率が高まることなどがある。意欲を大切にする協力活動を位置付けた学習の展開とは，全員で目的を共有し，必要な課題をペアで解決して目的を達成し，成就感や充実感を味わう学習である。

2　学習プランの具体的構想

●　解決すべき課題生じる教材化

次の３点が含まれるように教材化する。

1　目的を達成するための課題が多様に生じ，その課題は簡単に，一人では解決できないもの

2　複数で課題に取り組むことで目的をよりよく達成できるもの

3　活動する上で他者の手助けが必要で意志を伝えたり，他者からの要請に応じたりする必要があるもの

●　連続的に課題達成を位置付けた活動構成

単元を３段階に分け，動機段階では意志と欲求をもたせ，熱中段階ではそれをより強固なものにし，発展段階ではそれが満たされるように次の活動を仕組む。

1　見通す活動…実際的な活動を通して内容と結果の見通しがもてるようにして単元の目的を設定する。そのために，イメージを覆すような驚きや規模や美しさからの感動が生じるような見学や体験活動を行う。

2　つくる活動…目的達成に必要な複数の課題に全体やペア・個で取り組む。全員でする方が早くできる活動は全員で，単純活動は個で取り組ませ，活動がやや複雑だったり分担が必要だったりと一人での解決が困難な課題には手順カードを参考にさせペアで取り組ませる。その際，自分たちで解決できるよう必要に応じて補助具の準備も行う。このような課題達成の連続により，子どものかかわりや技能などが高まるようにする。

3　なしとげる活動…課題達成により目的達成の成就感や充実感を味わわせる。そのために，パーティーや完成式，お披露目会などで使ったり味わったりして喜びを感じさせたり，目的に関するＧＴにより賞賛されたりするなどの活動や場の設定を行う。

●　自力で課題達成を進めるための支援

ペアは，子どもを巧緻性で分け，次に，分けた子どもたちを表１の観点で分ける。そして，ⅠとⅡ，ⅠとⅢのタイプの子どもがペアになるように組み合わせる。そうすることで，互いに受け入れ合いながら活動できる。

Ⅰ	人の思いを受け入れることができる。
Ⅱ	自分の主張が強い。
Ⅲ	活動の見通しや内容がとらえにくい。

【表２　子どものとらえ方】

課題設定の仕方は，ペアごとに違う課題に取り組むときは，巧緻性に応じてペアに適した課題を設定する。そして巧緻性に応じて必要な補助具を工夫する。

手順カードについては，図や写真を入れて視覚的に方法がとらえられるようにしたり，他者への声かけの仕方なども具体的に示したりするようにする。

段階	動機段階（目的の設定）	熱中段階（ペアを中心とした解決活動）	発展段階（活動への振り返り）
活動と内容	1　体験や見学を行い，目的を設定する。（全体） ○　体験や見学により驚きや感動をもつこと ○　目的達成のための意志と欲求をもつこと	2　目的達成のために解決すべき様々な課題に協力して取り組む。（個やペア） ○　課題とペアを把握すること ○　合力，助力，分担などの協力 ○　活動に関係する意志の主張 ○　ペアの友達の要請に応じること	3　目的を達成し，充実感を味わう。（全体） ○　単元の目的に応じてパーティーや活用をすること ○　頑張ったことの発表 ○　ＧＴからの賞賛・承認
支援	※　感動や驚きを伴う見学や体験の場の設定 ※　試作品や完成品の提示 ※　ＧＴの招聘	※　ペアを中心とした活動の設定 ※　受容・主張・受動によるペアの組み方 ※　かかわりが発生する教具の提示 ※　巧緻性に応じた補助具の準備	※　成就感を味わわせる活動の設定 ※　各ペアの成果の提示 ※　ＧＴの招聘

【図１　協力活動を位置付けた基本的な活動構成】

3　指導の実際

第3・4学年　単元

おおきく　そだて!
みんなの　いちご

(1) 単元の目標

1　いちごを栽培し，加工して食べるいちごパーティーを開き成就感や充実感を味わうことができる。
2　いちごを育てるために友達に要請したり要請に応じたりして，畑作りや苗植え，保温，給水などの栽培に関する知識や技能を身に付けることができる。

(2) 単元の考え方

本単元は，おいしいいちごを育てたいという強い願いのもと，友達とかかわりながら，いちごの栽培に必要な知識や技能を獲得することをねらっている。そこで，「おおきくそだて　みんなのいちご」という，友達とかかわりながら栽培する力を身に付ける活動を構成する。

見通す活動では，ビニールハウスでの大量の苗と施設の見学，いちごの試食により目的に対する意志と欲求をもたせる。つくる活動では，ペアを組み，互いにかかわり合いながら畑の畝づくりやビニールトンネルや給水チューブの設置をする。この一連の活動において，友達と協力する必然性が発生する活動や個に応じた補助具を選定する。なしとげる活動においては，いちごを収穫し，友達と協力して加工し，みんなで味わう「いちごパーティー」を行い，目的達成の成就感や友達と協力して活動した充実感を味わわせる。

(3) 学習の流れと考察

子どもの実態　　AG（g児）	子どもの実態　　BG（d児）
自分がなんでもやりたいという思いが強く，自分一人で取り組もうとするが，巧緻性はあまり高くない。	巧緻性は高く，友達の思いを受け入れて行動するが，友達への要請や具体的な意志の伝達は得意ではない。

第１次：1～7/20時

いちご農家のビニールハウスでの栽培の様子を見学し，その規模やいちごの大きさ，試食したおいしさなどの感動から，いちごを食べたいという意欲のもと，いちごを育てるという目的を設定するとともに，単元の内容の大まかな見通しをもたせる。

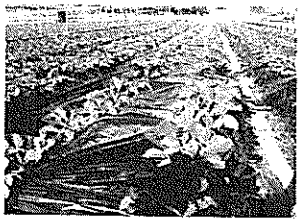


写真1 すごくたくさんあるなあ。

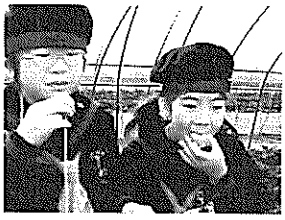


写真2　口に入らないよ。

第１次では，いちごを栽培する目的を設定し，栽培への意志と欲求をもたせることをねらいとしている。そのために，ビニールハウスの見学をさせ，いちごを試食させた。

いちごを食べた経験を話し合わせると「いちご大好き！」と語る姿が見られた。そこで見学に行かせると，多くの苗に驚き，大きく真っ赤ないちごが実っているのを見て，「たくさんのいちごがある」と感激していた。そして，いちごを試食させると，おいしいとうれしそうに言った。そこで，どうしたいか尋ねると，「育てて食べたい。」という思いを述べた。また，見学しながら畝や給水器があることを発見した。

考察１

大量の苗に驚き，いちごのおいしさを味わい，畝や給水器を発見している姿は，活動の欲求と意志をもっている姿である。これは，驚きを伴う見学活動を仕組んだ活動構成によるものである。

第２次：8～18／20時

いちご栽培をするために，見学による見通しをもとに畑づくりをし，マルチシートを敷き，苗を植え，ビニールトンネルを設置したり，給水のためのチューブを設置したりする。

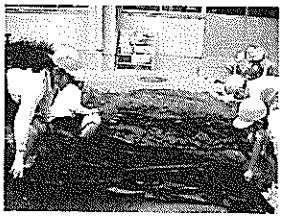


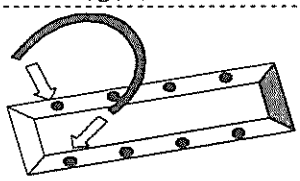
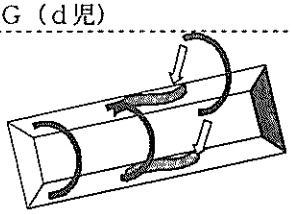
写真3　シートを引っ張って。

写真4　穴を広く掘って。

第２次では，いちごの苗を植え育てるために，友達とかかわりながら畝を作ったりするとともに，見学を参考にしてマルチシートを敷いたり，ビニールトンネルや給水チューブを設置したりできるようになること，そして，それらの活動をする際に，協力せざるを得ない状況に出合うことでペアの友達と協力して活動することをねらいとしている。

子どもたちは，畝をつくるときに，土を盛る役と固める役に分かれて活動したり，マルチシートを敷くときには，「もっと引っ張って」と要請したり，応じたりしていた。また，苗の数に合わせて，マルチシートに穴を開ける場所を話し合う姿が見られた。苗を植えるときには，一人が苗を持ちながら，ペアの子どもが苗の大きさに合わせて穴を掘り広げる姿が見られた。

【11／20時】

本時の目標　　AG（g児）	本時の目標　　BG（d児）
友達の要請に応じながら，協力して補助具を使っていちご栽培に必要なビニールトンネルの支柱を差し込んだり，ビニールカバーをかけたりできる。	何をどうして欲しいのかが友達に伝わるように要請しながら，協力していちご栽培に必要なビニールトンネルの支柱やビニールカバーの設置ができる。
子どもの実態に応じた支援　AG（g児） 受容型の友達とペアを組ませた。支柱を差し込む位置をとらえさせるためにマーキングをし，ビニールカバーは洗濯ばさみで留めるようにした。手順カードには，視覚的に理解できるように図を多用した。  差し込む位置に印を付ける。	子どもの実態に応じた支援　BG（d児） 受動型の友達とペアを組ませた。支柱を差し込む位置はひもを使って決めさせるようにし，ビニールカバーは専用の留め具を利用した。手順カードは，活動を理解しやすいように文字中心で表し，友達への具体的な声かけの文言も記入した。  ひもを使って等間隔を決める。

＜各ペアごとの活動の様子＞

AG（g児）	BG（d児）
ビニールトンネルの設置では，手順カードを見て，大まかな活動をとらえた。ペアの友達が支柱を差し込むときにうまく差し込めずに「手伝って，ささらない。」と言った言葉を受けて自分から支柱を差し込む手助けをすることができた。支柱の上にビニールカバーを掛けるときには，自分勝手に一人で大きなビニールカバーを広げていることに対して，友達から「協力するんだよ。」と言われ，「ごめんね。」と謝って，一緒にビニールカバーを掛けていた。 写真5　差すのを手伝って。	ビニールトンネルの設置では，手順カードを見て，どんな順番で活動するのかを理解した。支柱を差し込む際に，「ここを持ってて。」と具体的な言葉で要請する姿が見られた。支柱を差し込むときには，「そっちはできたから，次はこっち。」というように，具体的な声かけをしてビニールトンネルを作り上げることができた。最後に感想を尋ねると「○○ちゃんと，ぎゅっと（力を入れて支柱を差し込んだ）やった。」と，友達と力を合わせて活動した発言ができていた。 写真6　ひもに合わせてね。

考察２

ＡＧのｇ児は，目印に支柱を差し込む際には友達の要請を受けて，支柱を差し込む手助けをしている。ビニールカバーを掛ける際には，自分一人で活動していたが，友達から協力するように注意されて謝り，一緒にビニールカバーを掛けることができた。これは他者からの要請に応じている姿である。ＢＧのｄ児は，ビニールトンネルの支柱を差し込む際に，具体的な指示ができるようになってきた。これは自分の意志を伝えている姿である。これらは，一人で行うには難しい活動を仕組んだこと，かかわり具合を考慮したペアの構成を行ったことによるものである。

第３次：19～20／20時

いちごを収穫し，ペアの友達と一緒にいちごを加工して味わういちごパーティーをすることで目的達成の成就感と友達と協力して活動した充実感を味わう。

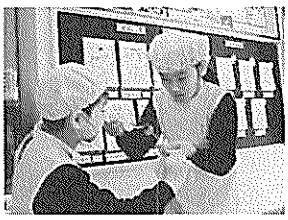


写真7　しっかり，持ってて。

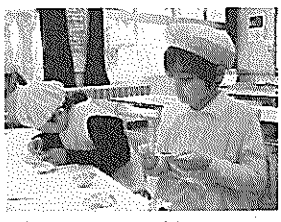


写真8　ジャムがおいしい。

第３次は，収穫したいちごをペアごとに加工して食べ合い，目的達成の成就感を味わわせることをねらいとしている。

子どもたちは花を見付け，成長を感じた。パーティーでは，ジャム・ヨーグルト・チョコ班に分かれて加工した。チョコレートを塗るのに，「塗るから持ってて。」と要請したり，塗りやすいように持ってあげたりする姿が見られた。食べ合うときには，みんな笑顔でうれしそうにいちごを食べていた。

考察３

友達にいちごを持ってもらうように頼んだり，いちごを持ってあげたりする姿は，意志を伝え，要請に応じる姿である。みんな笑顔でおいしそうに食べる姿は目的達成の成就感を味わっている姿である。これは，ペアでの活動といちごパーティーを仕組んだ活動構成によるものである。

【全体考察】

いちごを育てることを教材化したことで，畑づくり，ビニールトンネルや給水チューブの設置，いちごパーティーなど多様な課題を生じさせることができた。考察１のように意志や欲求をもたせる上で，驚きをもった見学を仕組むことは有効であった。これにより活動への意志と欲求をもって活動に取り組ませることができた。協力せざるを得ない活動を仕組むこと，また，かかわり具合いを配慮したペアを組ませたことで考察２，３に見られるように意志を伝えたり要請に応えたりという姿と力を合わせて活動する姿が見られた。即ち，驚きを伴う体験により見通しをもって主体的に活動に取り組ませることができ，協力活動を仕組むことで，意志を伝えたり応じたりでき，自分たちの生活をひろげることができたといえる。課題は，活動を充実させるためのＧＴとのかかわらせ方の工夫である。

帰国子女教育の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　自信と誇りをはぐくむ帰国子女教育

1　帰国子女教育での学ぶことと生きること

国際化の拡大により日本人が海外で生活することは珍しくなくなってきた。その一方で毎年多くの帰国児童が生まれている。帰国児童の多くは，これからの生活の基盤を日本に求めて入級してくる。そこで，このような子どもたちが日本社会に適応し，海外生活で得た経験や能力を発揮しながら，自分の生き方を探っていけるよう支援する必要がある。現在では，日本人学校や補習授業校の充実や情報通信網の発達により，海外に居ながらにして，今の日本の情報を得ることが可能となってきているため，帰国児童が，日本の学校で不適応を起こしやすいという状況は改善されてきている。しかし，２つの文化の中で成長してきた子どもたちの生活課題や心理的不安が全く解消されたわけでなく，以下のような状況がある。

① 海外に在留する期間の多様化や，海外在留国の広域化により，適応課題が個別化している。
② 海外生活経験の中で身につけてきた特性を保持・伸長することと，将来の進路を見据えた日本の学習への適応を希望している。

以上のことから，帰国子女教育が果たすべき役割は，①児童が安心して学べる環境を整え，基礎的学力を充実させることで日本の学校や生活への適応を図ること，②海外生活の中で得た経験や能力を活かしたり伸長させたりしながら，国際社会の中で活かされる帰国子女の特性を認識させ，自信と誇りをはぐくんでいくことである。

2　帰国子女教育部主題についての説明

帰国子女教育において子どもたちにつけさせたい自信とは，自分自身の課題をとらえ，それを解決することを積み重ねることで，自分自身の成長をとらえ，学習や生活に対して「できる」という可能性を自覚することである。また誇りとは，海外で生活したり学習したりする中で身に付けてきた見方・考え方や表現や調べ方といった技能を学習の中で積極的にいかしていくことで，海外生活経験を肯定的にとらえ，積極的に活用していこうと意欲をもつことである。よって，自信と誇りをはぐくむ帰国子女教育とは，個の実態を学習面と生活面の両面から把握し，それに応じた目標や方法を設定し，達成できるようなカリキュラムを編成し，実施していく学習活動である。以上のことから，次のような子どもの姿をめざす。

○ 自分の課題をとらえ，日本でもよりよい生活を送るためには，これらの課題を克服していく必要があることに気付き，意欲的に学習に取り組む子ども　（学ぶ意義）
○ 未習の内容や習熟が不十分な内容を獲得し，海外生活で身に付けた特性を積極的にいかすことができる子ども　（能力）
○ 自分の課題を克服したり，その過程で自分の特性を活かしたりすることを繰り返していくことで，主体的に生きていこうとする子ども　（自信）

【表1　豊かに生きる子どもをはぐくむための帰国子女教育の基礎基本】

意義	学習・生活上の課題をふまえ，学習適応や生活適応を図り，その過程において海外生活で身に付けてきた特性をいかすことで，日本での学校生活を主体的に送ることができる。				
能力		観点			
	A能力 実体的学力	知識・理解	日常生活を送っていくために必要最低限の学習内容をとらえている。	各教科の基礎基本を獲得している。	学習内容を正しくとらえ，自己の中で整理している。
		コミュニケーション力	身近な人との意思疎通をしている。	異文化をもつ人と積極的に意思疎通を図っている。	自他の立場を明らかにし意思疎通を行っている。
	B能力 機能的学力	意欲	与えられた課題に関心をもち意欲的に取り組んでいる。	よりよく学校生活を送りたいという願いをもち学習に取り組んでいる。	自分の課題をとらえ，その解決に向けて積極的に学習運取り組んでいる。
		多面的な見方・考え方	滞在国と日本との違いや自分と友だちの考えの違いに気づいている。	経験と得られた知識や技能，事象を関連づけ，考えを創っている。	事象を複眼的・多元的にとらえている。
		問題解決力	与えられた課題を処理している。	解決すべき課題に気付き体験や資料の活用などを通して解決している。	自ら課題を設定し，多面的に追究して価値ある応えを見出している。
		自己評価力	できなかった（わからなかった）ことが解決されたことに喜びを感じている。	これまでに何ができる（わかる）ようになったのかをとらえている。	現在の自分の学習の状況を捉え，今後どのような学習にどのように取り組んでいけばいいのか把握している。
自信	日本でよりよく生きていきたいという願いのもとに，これまでわからなかった（できなかった）ことを解決していくことで，「日本でもがんばっていけそうだ」「もっとできそうだ」という自分の可能性に気付き，新たなる課題にも意欲的に取り組もうとすることができる。				

Ⅱ　帰国子女教育における教育課程の編成

帰国子女教育部

1　帰国子女教育における教育課程の考え方

帰国子女教育では，学習適応，生活適応，特性伸長の面から実態に応じたカリキュラムを構想する必要がある。

●　文化の学びとしての学習プラン

教科等のカリキュラムの違いや滞在国での言語の違いから，特に国語科と算数科では，系統的に高めていくべき基礎学力を重点化した個別カリキュラムが必要になる。また，社会生活のとらえ方も滞在国によって違いがあるため，社会科でも個別カリキュラムが必要となる。

○　「読むこと」「書くこと」の内容を重点化した国語科の個別カリキュラムの作成
○　未習内容の補充と既得事項の整理を念頭に置いた算数科の個別カリキュラムの作成。
○　基礎的学習内容の知識獲得という視点から構成した，社会科の個別カリキュラムの作成。

また，帰国学級独自で行う国際交流タイムにおいても，日本をはじめ様々な国の文化を比較しながら，それぞれの国の文化のよさを見出すことにより，互いの文化を尊重する態度をはぐくむカリキュラムを作成する。

●　生活の学びとしての学習プラン

海外で獲得した知識や見方・考え方などの特性をいかしながら，日本や外国の文化のよさを追究し，広い視野を身に付けることができるように，文化理解・共生の視点を中心に，国際交流タイムのカリキュラムを作成する。また，海外と日本での生活習慣の違いをふまえ，日本での学校生活や社会生活への適応を図り，社会集団としての行動形成を図る学級活動のカリキュラムを作成する。

●　人間の学びとしての学習プラン

国際交流タイムのカリキュラムに，日本や外国の人々とのかかわりを取り入れ，その生き方に着目させたり，自分自身の生き方と比較させることで，自分自身のよさやこれからの生き方について考える視点を付加する。

2　教育課程編成の手順

帰国児童が日本の学校生活・社会生活を行っていく上で必要な力を確実に身に付けていくために，以下のような手順でカリキュラムの作成を行う。

●　教科の学習プラン

(1)　実態の把握

①　海外での関連学習の実態把握

各教科・領域ごとに作成した指導内容表をもとに聞き取り調査を実施し，各内容の未習・既習を判断。

②　見方・考え方の実態把握

日頃の学習の様子や発言の内容，生活の様子などを記録したカルテを活用して，見方・考え方の傾向性を把握。

③　これまでの学習内容習熟度のようすの把握

指導要領解説と教科書を参考に形成的評価テストを作成・実施し，これまでの学習内容理解の実態把握を行う。

(2)　カリキュラムの作成

①　内容の配列

教科内容，単元，系統性，関連性に配慮し，配列する。

②　未習内容の補充計画

内容の系統性から未習内容の補充が必要・可能なのものは，時間数を考慮しながら内容に組み入れていく。

③　個別の内容の精選

習熟度と学習指導要領の内容をふまえて到達目標を決め，学習内容を具体化していく。

④　具体的手だての計画

日本語能力や習熟度，見方考え方の特徴などを考慮し，内容をとらえさせるための手だての計画を立てる。

(3)　カリキュラムの実施

①　指導計画，指導内容の再確認

②　毎時間の評価

形成的テストを活用しながら評価，指導方法の改善

(4)　カリキュラムの更新

①　カリキュラムの評価

学習内容の習熟のようすから，指導内容や指導方法について再検討を行う。

②　更新カリキュラムの作成

カリキュラム作成時の実態は，日本での学習経験を積み重ねていく中で当然変わってくるものである。そこで，これまでの評価に基づき，単元の配列や内容も含めて，その都度検討を行い，更新していく。

●　国際交流タイムや学級活動の学習プラン

国際交流タイムの題材は，特性をいかしながら追究活動を行うことで，主体的な活動になるように選定を行う。

1　海外生活で身に付けてきた知識や技能，見方・考え方をいかすことができるような活動ができること
2　滞在国と日本というように２つ以上の国の文化について比較・追究していく活動があること
3　異文化理解を深め，日本の文化のよさと外国の文化のよさをともに受容することが可能であること

なお，３年生以上合同の学習であるため，在学中に同じ内容を重複して学習することがないように配慮する。

学級活動は，生活適応の視点からカリキュラム編成を行う。その際，個別に滞在国のライフスタイルを把握し，日本での集団生活の基礎となる題材を中心に年間指導計画を作成する。活動を展開する際は，海外と日本の生活習慣の違いや共通性に気付かせ，望ましい集団づくりを考えられるようにするが，個々が感じるカルチャーギャップに配慮し，活動を無理強いしないように配慮する。

帰国子女教育社会科学習の〈ふくおかプラン〉

Ⅰ　社会的事象についての知識を獲得していく社会科学習

1　社会科での学ぶことと生きること

帰国児童は，異文化の中で日本とは異なるカリキュラムで学習してきているため，公民的資質をはぐくむために必要となる社会生活についての知識が十分に備わっていない。このため，帰国児童にとって社会科を学ぶことは，日本をはじめこれからの国際社会で日本人として生きていくために欠かせないことと考える。長期間海外に滞在した子どもたちは，帰国後日本社会，とりわけ日本の学校を中心として生活をしていくこととなる。そのため，日本で豊かに生きていくための前提として，生活適応や学習適応など取り組まなくてはならない課題がたくさんある。そこで，帰国子女教育社会科は，①未習や習熟が不十分な内容を補充しながら当該学年の学習内容を確実に身に付けさせる②日本で社会生活を送っていくための知識を獲得させることで，日本で生きていくことに自信をもたせる，という立場で学習指導に取り組む必要がある。このことは，日本の学校生活への不安を取り除き，日本人として主体的に生きていくための支援へとつながっていく。

2　社会科部主題についての説明

社会的事象とは，社会科学習で子どもたちが追究していく対象であり，社会生活を構成している人やものやこと，さらにはそれらが関係し合っている事柄である。社会的事象についての知識とは，子どもたちが社会科学習の中で追究していく過程で得られる情報であり，理解していく中で身に付いていくものである。この知識は，表1のように3つに分類して考える。また，これらの知識は独自の追究方法の結果得られる知識であり，Ⅰ→Ⅲにおいてとらえるために基礎として必要な知識は増加していく。社会的事象についての知識を獲得していくとは，個々のこれまでに身に付けている知識の実態に合わせて，新たな知識を身に付けることで，自分の中の社会的事象についての知識量を増やしていくことである。なお，個々の有する知識量に合わせて，表1のように知識の重点化を図り，自己評価を取り入れることで自己の成長を実感させていく。社会的事象についての知識を獲得していく社会科学習とは，知識を中心に，日本語能力や滞在国での社会体験なども含めた一人一人の実態に合わせた新たな知識獲得のねらいを設定し，その達成を目指して活動を工夫し，展開する学習である。そのため，個別につくられた学習計画をもとに学習活動が展開されていく必要がある。

【表1　知識の分類】

	知識の分類	身に付けている知識の実態
Ⅰ	事象の存在そのものの知識	断片的で漠然
Ⅱ	事象の目的や手段や過程などを分析した知識	事象の存在は知っている
Ⅲ	事象間の因果関係をとらえた知識	事象の概要はとらえている

○　主体的に社会生活を送りたいという願いのもとに，学習に意欲的に取り組み，社会的事象について理解を深めることに喜びを見出す子ども　（学ぶ意義）
○　社会的事象について実態に応じた追究活動を行い必要な知識を身に付けていく子ども　（能力）
○　社会科学習を通して知識獲得を実感し，日本での学習や社会生活に自信を高めていく子ども　（自信）

【表2　豊かに生きる子どもをはぐくむための帰国子女教育社会科の基礎基本】

意義	日本でも豊かに生きていきたいという強い願いをもっているにもかかわらず，学習カリキュラムの違いや日本語能力の問題などから社会科学習に適応できない子どもたちに，その実態に応じた学習計画を立て，実態に応じた学習指導を行うことで，社会的事象についての知識が増え，学習適応を図ることができる。				
能力		観点	断片的で漠然 ←―― 社会科学習内容の既有の知識のようす ――→	事象の概要をつかんでいる	
	A能力 実体的学力	知識理解	社会的事象を構成している事実について基本的な意味を理解しており，自分とのかかわりでとらえている。	社会的事象そのものの意味を理解しており，自分や身のまわりとのかかわりでとらえている。	社会的事象の意味を広い視野で理解しており，事象相互の関係をとらえている。
		技能表現	資料を正しく読み取り，調べたことを具体的に表現している。	資料から必要な情報を収集し，調べたことを相手に伝わるように表現している。	目的に合った資料を収集し，調べたことをもとに意図に応じた表現をしている。
	B能力 機能的学力	意欲	教材に関心をもち，積極的に調べている。	事象のようすを明らかにしようと意欲的に追究している。	事象相互の関係を明らかにしようと意欲的に追究している。
		思考力	調べたことをもとに，事象そのもののイメージをつくっている。	事象の共通点や相違点をとらえ，社会的事象の目的や構造などについて考えている。	事象を比較・検討することで多面的にとらえ，社会的事象の意味について考えている。
自信	社会科学習全体を通して，自己の中に学習した社会的事象についての知識が獲得されていく様子を振り返り，実感する活動を位置付けることで，日本での社会科学習に取り組んでいくことや社会生活を送っていくことに対しての自信をはぐくむことができる。				

Ⅱ　個の実態から作成した個別カリキュラムをいかす学習の展開

帰国子女教育社会科部　　髙　良　祐　治

1　副主題の意味

個の実態とは，一人一人に今求められる学習を展開するために，把握しておくべき様々な角度から見た個々の現在の様子である。実態を把握するためには，単に未習か既習かを把握するだけでは不十分である。なぜなら，海外という異文化で生活し，日本とは異なる環境で学習をしてきている子どもたちの実態は，複合的な要素が関連し合ってつくられたものであるからである。このことから，海外での社会科学習の経験，これまでの社会科学習内容の知識・技能・考え方のようす，日本語能力などの視点から見る必要がある。個の実態から作成した個別カリキュラムをいかす社会科学習プランとは，個の実態の中でも，特に知識の実態からみた習熟度をもとに，新たな知識獲得ができるように個別に学習計画を構成し，その他の実態からの支援を取り入れながら展開する学習の過程である。このプランを実施するためには，単元，学年，卒業までを見通し，計画的に知識を身に付けることができる個別のカリキュラム作成が必要である。

2　個別カリキュラムの作成

個別カリキュラムを作成するためには，社会科学習内容の知識をどの程度身に付けているのかをふまえて編成することが必要である。そこで，次のような手順をとる。

1　個の実態の把握

学習指導要領をもとに内容を４段階に分けた指導内容表や，単元ごとに習得される知識を割り出し３種類の知識で分類した知識分類表を作成する。そしてこれらの表を使って，「どのような内容を」「どの程度」習得しているのか聞き取りを行う。また，日頃の学習の観察や記録を行い，学習技能や見方・考え方の実態も把握しておく。そしてこれらをもとに，個別に単元ごとの習熟度の判定を行う。

2　個別カリキュラムの作成

実態把握で明らかになった知識のようすをもとに，今後学習していく単元でどこまでの知識獲得をめざすのか検討しながら３つのコースを設定し，単元を配列する。さらに，それぞれの単元の系統性や関連性を考慮しながら，未習内容の補充計画を組み込んでいく。そして，技能や見方・考え方や日本語能力を考慮して，指導方法の計画を立てることで，個別にカリキュラムを作成する。

3　学習プランの具体的構想

●　問いを分類したコース別学習展開

各コースごとに設定した知識を獲得できるような問いを表３のようにコース別に設定する。

【表２　獲得する知識に合わせた問いの分類】

コース	知識	獲得する知識に合わせた問いの分類	
A	因果関係	結果を示してその原因をもとめる	なぜ
B	分析	事象の構造，過程，手段，方法，目的などの関係を明らかにする	どのような，どうやって
C	存在そのもの	時，場所，人，個別的事象などの情報をもとめる	いつ，どこで，誰が，何を

●　個の実態に応じた支援の工夫

1　個別の支援

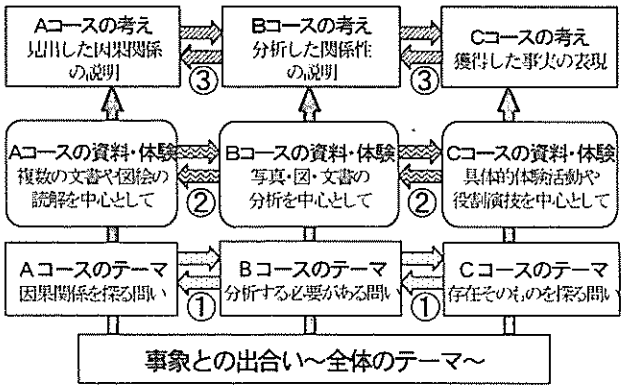
コース別学習の展開では，学習を進める際に必要な調べる技能や社会体験，日本語能力などに合わせて支援の仕方を変える必要がある。そこで，実態が不十分なほど事象の狭い範囲をより具体的に扱うことで実感できるようにし，教師も積極的にかかわっていく。また表現方法も日本語の負担の低いものにし，安心して学習に取り組むことができるようにする。

2　相互交流の支援

個に応じた学習を展開することによる学習の孤立化を防ぐために，コース間の積極的な交流を取り入れる。そのために，①コース別テーマの交流（友だちはこんなことを追究するんだな）②資料・体験の交流（自分の資料とあのグループの資料をあわせて考えると…）③追究結果の交流（友だちのこの考えは自分の考えにもいかせそうだ）という３つの相互交流を積極的に取り入れていく。

●　評価およびカリキュラムの更新

評価活動を教師側からの視点と子ども側からの視点から行う。教師側からは，毎時間の子どもの反応を知識獲得の視点から観察し，不十分な部分は補充指導を行っていく。また，単元終了時にも形成的テストを行い，学習内容が獲得されているかどうか検討を行い，今後の個別カリキュラムの更新を行っていく。子ども側からの視点からは，学習前後の教材として扱った社会的事象に対してどれくらい詳しくなれたかという自己評価を，作文形式や教師との対話形式など，個の実態に応じて行う。



【図1　コース別学習と3つの相互交流を位置付けた学習展開】

3　指導の実際

第6学年　小単元

さぐろう!将軍家光の政治

(1) 単元の目標

1　260年も続いた江戸時代の政治に関心をもち，家光の政治のねらいや意味を考えることができる。
2　江戸幕府を中心とした政治体制が確立したことについて（Aコース）家光の政治と長期政権の関係，（Bコース）家光の取り組みの目的，（Cコース）家光の政策のようす，を中心にとらえることができる。

(2) 小単元の考え方

本小単元は，将軍家光がどのような政治を行ったのか具体的に調べることを通して，江戸幕府による政治体制が確立し，約 260 年にわたる長期政権の礎が築かれたことをとらえることをねらっている。そのために，個別カリキュラムをもとに，獲得を目指す知識を分類し，学習コースを設定する学習展開の工夫と，個の実態に応じた活動構成の工夫から活動を構成する。学習展開の工夫としては，（Aコース）家光の政治と長期政権の因果関係を探る問い，（Bコース）家光の政治の目的を探る問い，（Cコース）家光の具体的な活動を段階的に探る問いを設定し，コース別に学習を展開する。個の実態に応じた学習活動の支援としては，①家光の政策の影響や成果を外様福岡藩の行動を例にして，見学やシミュレーションなどを取り入れ，具体的に調べる活動②互いの追究のようすを毎時間交流し，成果を確認し，資料や考え方の参考になる部分を取り入れる共育の学習活動を位置付ける。

(3) 学習の流れと考察

第１次：１～２/８時　江戸時代が約 260 年も続いたことから疑問をもち，コース別の学習問題をつくる。

Aコース	Bコース	Cコース
問いを設定するために，徳川家と織田家・豊臣家の世代比較を行った。 織田や豊臣は部下に裏切られ，すぐ滅んでしまったのに，徳川は 15 代も続く。信頼されていたのかな。 **資料1　a児の問題意識**	学習問題を設定するために，他の時代の長さとの比較を行った。 鎌倉や安土桃山に比べるととても長い。どんなことがあったのか不思議に思った。 **資料３　b児の問題意識**	学習問題を設定するために，安土桃山時代との比較を行った。 江戸時代は 260 年くらい続いて，安土桃山時代と比べて，とても長い時代ということがわかりました。 **資料５　時代の長さをとらえたc児**
a児の反応から，次のような学習問題を設定した。 なぜ，江戸時代は 260 年も続いたのだろうか。 **資料２　Aコースの学習問題**	b児の学習の実態や反応から，次のような学習問題を設定した。 徳川氏は，江戸時代をどのようにして 260 年も続かせたのだろう。 **資料４　Bコースの学習問題**	c児に習得させたい学習内容から，次のような学習のめあてを設定した。 長い江戸時代にどんなことがあったのか調べよう。 **資料６　Cコースの学習のめあて**

考察１

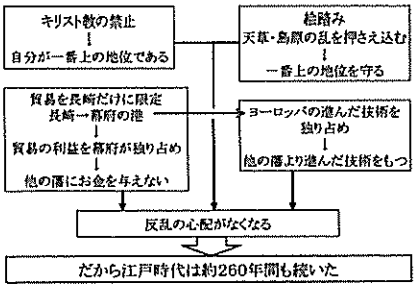
Aコースは，江戸時代が長期政権となった因果関係を追究する学習問題を設定することができた。これは，織田・豊臣が家臣から滅ぼされていることを確認し，比較させたことで，「裏切られていない理由」に関心をもたせたからである。Bコースは，江戸時代長期政権の構造を分析する学習問題を設定することができた。これは，年表を利用し，各時代の主なできごとを確認しながら長さ比較を行ったことが有効であったからである。Cコースは，長いという事実をとらえた上で，この時代に起こった出来事を具体的にとらえていく学習のめあてを設定することができた。これは，１年を１ cm としてテープにあらわし，視覚的に時代の長さを比較したことや江戸時代の空年表を提示し，関心を高めたからである。

第２次：３～６/８時　江戸時代のようすをコース別に調べる。

(1) 学習問題に対しての仮説を立て，追究計画をつくる。
(2) 家光の政治のようすについて調べる。

Aコース	Bコース	Cコース
第２次では，家光のとった政策と江戸幕府長期政権の因果関係をとらえる	第２次では，家光の政治が，どのように行われたのか調べることで，	家光が行った様々な政策を具体的にとらえるために，参勤交代では，

ことをねらいとしている。そのために，参勤交代，身分制度，鎖国やキリスト教の禁止という各政策で行われた具体的な事実を図解してあらわし，説明する活動を取り入れた。そのときの図が資料７であり，発言が，資料８である。

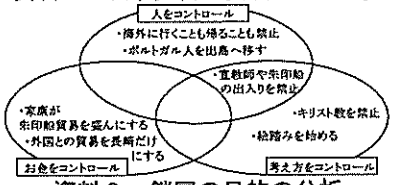


資料7　鎖国と長期政権の因果関係をあらわしたa児の図

家光は，キリスト教を禁止し，取り締まりを厳しくすることで一番上の地位を保ち，貿易の利益も独り占めし，他の藩が反抗する気持ちをなくしてしまうようにしたから，約260年間も幕府を続けられたのだと思います。

資料8　鎖国と長期政権の因果関係を見出したa児の発言

その目的をとらえることをねらいとしている。そのために，参勤交代の費用を現代の金額に改める活動や，キリスト教の禁止や鎖国にどのような目的があったのか，「人的」「経済」「思想」統制の観点で分類する活動を行った。そのときの分類のようすが資料9であり，発言が資料10である。



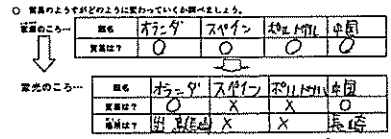
資料９　鎖国の目的の分析

鎖国の目的は，日本中の人たちに自分が一番だと思わせるためだったと思います。そのためにはキリスト教は都合が悪かったはずです。また，貿易のもうけを幕府に集めることも目的だとわかりました。

資料10　鎖国の目的を見出したb児の発言

わらじを履いたり鉄砲を持ってみたりする疑似体験や拡大した日本地図上で福岡と江戸の距離や参勤交代のコースを確認した。また，5人組のシミュレーションや鎖国の関係を表に表す活動を行った。

写真１　重たいなあ



資料11　鎖国とキリスト教の関係をとらえたノート

キリスト教がふえないように，スペインとポルトガルとは貿易を禁止して，オランダと中国はキリスト教を広めないので，貿易を続けたことがわかりました。

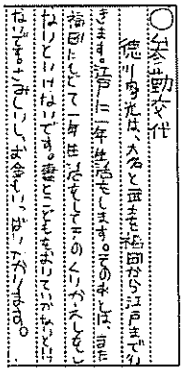
資料12　ｃ児の発言

考察２

Ａコースでは，ａ児が資料７の図解や資料８の発言から，鎖国やキリスト教の禁止，絵踏みなどの家光の政策が「反乱が起こる心配がなくなる」ことにつながり，そのために約２６０年も幕府が続いたという因果関係を見出したことがわかる。これは，織田や豊臣が謀反により滅びたことを確認しておいたことや，図解してあらわし他の友だちにわかるように説明する課題を設定したことが意欲を高めたからだと考える。Ｂコースでは，資料９の分析や資料 10 の発言から，家光の政策が，どのような目的を持っていたのかとらえたことがわかる。これは，ベン図を用いて，家光の政策を「人」「金」「考え方」の３観点から分類し，同じコースの友だちと検討させたことが有効であったからだと考える。Ｃコースは，資料 12 の発言のようすから家光の政策としてどんなことが行われていたのか，事実をとらえていることがわかる。これは，写真１のような体験的な活動や資料 11 のような表や図でまとめるノートを用意したことが有効であったからだと考える。

第３次：７～８／８時
家光の政治をまとめた新聞をつくる。

第３次では，これまでに学習してきた内容をまとめ，確かめることをねらいとしている。そのために，Ａコースは「家光の国づくり」，Ｂコースは「家光の政治のねらい」，Ｃコースは「家光はこんな政治をした」というテーマで新聞を書く活動を設定した。資料 13 は，Ｃコースのｃ児が書いた新聞の一部である。


○参勤交代
徳川家光は、大名と武士を福岡から江戸まで行きます。江戸に一年住みます。その次は、自分の福岡にもどって一年住みます。そのくりかえしをしなければいけないです。妻と子どもを江戸にのこしておかなければなりません。お金がいっぱいかかります。

資料13　c児が参勤交代についてまとめた新聞の一部→

考察３

資料 13 から，ｃ児が，参勤交代が１年おきに江戸と藩で生活をしなくてはいけないことやそのことで家族と離ればなれになること，経済的な負担も大きかったことなどの具体的な事実としての知識をとらえていることを見取ることができる。ｃ児は本小単元の最後に次のような感想を書いている。

江戸時代がとても長く続いたことや家光が参勤交代や鎖国などいろいろなことをしたことがわかりました。わらじをはいたり絵にかいたりして調べたことや，友だちに調べたことを発表して聞いてもらって，たくさんアドバイスをもらえたことがよかったです。

これから，ｃ児が，他のコースの友だちとかかわりながら新たな知識を獲得したことを自覚していることを見取れる。これは，共育の学習展開が有効に働いたことや新聞づくりを通してこれまでの学びを振り返らせたことが有効であったからだと考える。

【全体考察】

考察１と考察２からわかるように，個の実態に応じて，ねらう知識が獲得されているととらえることができる。これは，個別に今の学習の実態から「獲得できる知識」を設定し，「追究できる」方法で学習に取り組ませた支援が有効であったからだと考える。本実践では，習熟のようすが漠然としたものであればあるほど体験的な活動や具体的な資料の提示を行った。また，コース別学習が孤立した学習にならないように，互いの活動のようすや追究結果を積極的に交流した。このような工夫が，考察３からもわかるように，知識獲得の自覚や自己の学びへの自信につながっていると考える。しかし，コース間の交流では，コース内やＣ→Ｂ→Ａの交流は成立しやすいが，Ａ→Ｂ→Ｃの交流は難しい場合があり，今後は，個の実態をいかしながら交流が活発になる手だての工夫や支援を考えていく必要がある。

メ モ

おわりに

本校では，今日の教育課題に対応すべき新たな教育の在り方を求めて，「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造」の研究主題のもと，教育研究と実践を積み重ねて３年目となります。しかしながらこの３年間のなかで，教育界では学力低下の問題がクローズアップされ，授業時数をはじめとして，ゆとりの時間への問題指摘，完全学校週５日制の見直し論など様々な指摘が浮上して参りました。このような指摘に対して，学校は目の前の子どもたちの状況を見極め，どのような力を必要としているのかを明らかにし，そのための方策や実践事例を提示できるようにしておくと共に，学力を構造的に整理して自校が進める教育活動の意義を明らかにしておくことが望まれます。まさに自校の教育活動がいかに展開できているかが問われていると考えています。

さて，本校では研究主題で述べています「豊に生きる」ことについて私どもは，人間は，生活をよりよく更新する生活の主体者であること，また，文化を継承し創造していく主体者であること，そして，よりよく生きる人間そのものとして，３つの側面からとらえて参りました。さらに，それら３つの側面にかかわる学びのなかで，身に付けた内容を社会のなかで生かしていくことを本年度の重点として，－協働を中核とした学習の展開－を副主題として，カリキュラムづくりと指導方法の在り方を追究して参りました。

特に，本年度は「協働」をキーワードとして各教科等の役割・立場に言及し，次の３点を中心に研究を進めてきました。

① 各教科等は，その役割・立場から身に付ける学力を明確にし，３つの学びへの重点化をもとに，各教科等の基礎・基本を明らかにすること

② 子どもが友達と共に学ぶ「協働」に重点化した学習を実現する活動や支援を具体化し，それに応じた評価方法を明らかにすること

③ 各教科等の内容の編成や系統について見直し，「協働」の視点で開発した学習を展開し，＜ふくおかプラン＞（本校のカリキュラム）に位置づけること

このことで，子どもの課題追究や実践活動の姿のなかに，研究成果の一端を実感することができました。具体的には，他者と共に自分の学級や学校，さらには地域社会での生活を創りかえ充実させる姿や自分の作品など文化を創り上げようとする姿，自分自身を多面的に見つめたり，モデルとなる生き方から自分に取り入れようとしたりする姿をみとれるようになりました。私どもは，この研究を通して指摘されている学力低下の問題に応えたいと考えています。

本校はまた，帰国子女学級及び特殊学級を併設し，それぞれの教育研究と実践を行っています。本年度は特に，教育的ニーズにもとづく子ども一人一人の学習や生活への適応や特性伸長をめざした各教科等のカリキュラムづくりと個別の教育支援計画を生かした評価活動の具体化に取り組んでいます。

最後になりましたが，本校研究の深化・充実のために，ご指導を賜りました上智大学総合人間科学部教育学科教授の奈須正裕先生，福岡教育大学の先生方及び本校先輩をはじめ関係の先生方に深く感謝申し上げます。また，わたしたちの研究に各方面から，厳しいご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成１８年６月

副校長　三　原　英　喜

福岡教育大学附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人（平成18年度）

◎ 学　　長　大後　忠志

◎ 大　　学

（国語科）	前田　眞證	（生活科）	寺岡　聖豪	（道　　徳）	堺　　正之
（社会科）	石丸　哲史	（音楽科）	平井　建二	（特別活動）	高田　　清
	豊嶌　啓司		岩﨑　洋一		小泉　令三
（算数科）	山下　　昭		木村　次宏	（帰国子女教育）	小林万里子
	飯田　慎司	（家庭科）	長山　芳子	（障害児教育）	納富　恵子
	山口　武志		沖田　卓雄		藤金　倫徳
	清水　紀宏	（図画工作科）	草尾　和之	（養　　護）	照屋　博行
（理　　科）	宮脇　亮介	（体育科）	相部　保美		岩橋　知子
	田中　浩朗		兄井　　彰		
	森藤　義孝				

◎ 附属福岡小

（職名）	（担任）	（専　攻）	（氏　名）	（出身地区）
校　　長		心　　理	永江　誠司	大　　学
副校長		体　　育	三原　英喜	福　岡　市
教　　頭		社　　会	髙野　誠一	筑　　紫
研究主任		体　　育	岩城　一磨○	三井・小郡
教務主任		国　　語	平島　健二	筑　　紫
教　　諭	1の1	生　　活	塚本　正典	三潴・大川
教　　諭	1の2	国　　語	光延正次郎○	糟　　屋
教　　諭	2の1	音　　楽	有川　陽子	筑　　紫
教　　諭	2の2	体　　育	久保　勝美	筑　　紫
教　　諭	3の1	算　　数	田中　健悟○	糸　　島
教　　諭	3の2	社　　会	髙瀬　雄大	糸　　島
教　　諭	4の1	道　　徳	木下　美紀	宗　　像
教　　諭	4の2	理　　科	今泉伸一郎	福　岡　市
教　　諭	3・4の3	理　　科	清水隆一郎	筑　　紫
教　　諭	5の1	特別活動	黒澤　真二	筑　　紫
教　　諭	5の2	社　　会	髙良　祐治○	糟　　屋
教　　諭	5の3	算　　数	永尾　健	三潴・大川
教　　諭	6の1	図画工作	北田　尚雄○	福　岡　市
教　　諭	6の2	国　　語	平川　洋一	福　岡　市
教　　諭	6の3	家　　庭	脇本　孝枝	福　岡　市
教　　諭	ふじ	障害児教育生単	原田　敏男	久留米
教　　諭	さくら	障害児教育国語	諏訪原佳子	福　岡　市
教　　諭	梅	障害児教育体育	下川　勝彦	糟　　屋
教　　諭	専　科	障害児教育算数	園田　洋一○	筑　　紫
養護教諭	養　護		甲斐七七子	福　岡　市
研　　修	専　科	図画工作	河津　有一	筑　　紫
研　　修	専　科	道　　徳	柴田喜代子	糟　　屋
研　　修	専　科	障害児教育算数	川上雄一郎	宗　　像
研　　修	専　科	音　　楽	下川　大祐	八女・筑後
研　　修	専　科	社　　会	石井　雄児	浮　　羽
研　　修	専　科	算　　数	二串　英一	糸　　島
講　　師	専　科	国　　語	清水　知子	糟　　屋
講　　師	専　科	英語活動	ｾﾞｳﾝかおり	福　岡　市

※　○印は平成18年度研究部員

平成１７年度　附属福岡小学校転出教員

金子　孝信（宗　像）	矢野　俊次（甘木・朝倉）	藤野　俊明（宗　像）
畠山　佳子（福岡市）	秦　　克伸（宗　像）	松本　剛　（糟　屋）
田中　庸二（八女・筑後）	正路　澄代（宗　像）	山浦　健　（久留米）
柳　　正彦（三井・小郡）	大脇　猛　（嘉穂・山田・飯塚）	

平成18年6月　　印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研究紀要 No.37

発行者　**福岡教育大学附属福岡小学校**
〒810-0061　福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092(741)4731(代)

印刷所　㈱ネオプリンティング
TEL 092(511)8941(代)

Fukuoka